第百十五年（通巻一七三号）

山岳

二〇二〇年

山岳　二〇二〇年　目次

［特集「エベレスト登頂50周年」］

半世紀を経て考える　日本山岳会隊とスキー隊のエベレスト……江本嘉伸……8

エベレスト登山を振り返る　登山隊員座談会……神崎忠男、鹿野勝彦、嵯峨野宏……43

登山許可の取得と登頂への想い……平林克敏……73

日本人とエベレスト　50年のかかわり……池田常道……81

［記録］

厳冬期剱岳・北方稜線を完全縦走……佐藤勇介……98

本州分水嶺縦走　山のあなたの空遠く……大島康弘……121

西ネパールに魅了されて　ドルポやムスタンなど辺境の山旅から……稲葉香……146

［調査・研究］

上高地、岳沢の氷河地形……小疇尚……180

奥飛騨の山案内人たち……木下喜代男……201

ウェストンの九州登山の足跡を探る……田上敏行……217

パミールの登山事情と「パミール高原」の名称……田村俊介……245

［紀行］

コーカサス、半世紀ぶりの再訪記……吉川正幸……264
ダルコット峠、52年ぶりのヒンズー・クシュ……高橋善護……289

図書紹介

考える脚（荻田泰永）……舟津圭三…312／空撮ヒマラヤ越え　山座同定（中村保）……井上達男…315／那須雪崩事故の真相（阿部幹雄）……近藤雅幸…317／河口慧海――雲と水との旅をするなり（高山龍三）……根深誠…321／十大事故から読み解く　山岳遭難の傷痕（羽根田治）……飯田年穂…324／東ヒマラヤ（安藤和雄）……山本良三…328／類例のない伊藤孝一の登山（五十嶋一晃）……荒井正人…333／The Andes……南井英弘…336……312

追悼

高村泰雄さん（齋藤惇生）…347／宮森常雄さん（雁部貞夫）…352／宮原　巍さん（根深　誠）…358／白籏史朗さん（節田重節）…362／日下田實さん（吉永英明）…368／磯野剛太さん（重廣恒夫）…372……347

会務報告……377
支部の活動報告……401
委員会の活動報告……464
山岳図書目録……A20
英文サマリー……A12

表紙デザイン＝小泉 弘

表紙画＝小谷 明

油彩　アマ・ダブラムとローツェ、エベレスト

特集「エベレスト登頂50周年」

半世紀を経て考える——日本山岳会隊とスキー隊のエベレスト

江本嘉伸

日本人初のエベレスト登頂

半世紀前の１９７０（昭和45）年5月11日、日本人が初めてエベレスト（８８４８ｍ）の頂上に迫っていた。日本山岳会エベレスト登山隊の松浦輝夫（36）、植村直己（29）の2人である。

著書『エベレストを越えて』（文藝春秋、１９８２年刊）の中で植村直己は、最後の登攀の様子を次のように書いている。

〈いよいよ最後の、ナイフ・リッジの稜線へ取りついた。南峰と本峰の間にある切れ落ちたギャップは簡単に抜けた。ヒラリーの苦闘したチムニー（縦状の割れ目）も、松浦さんの確保で抜け出ることができた。ナイフ・リッジの雪稜は雪庇となってチベット側へ張り出しているから、雪庇の真上を歩くわけにはいかない。その南壁側をトラバースするように、ピッケルを確実に刺して、アイゼンをきかせながら二歩進み、足場を固め、また二歩進むというように、カニが横這いするように慎重に進んだ。頭の上は雪庇だから先が見えない。ヒラリーたちもここを通ったのだろう、頂上かと思うと、またすぐ先に高いこぶがある。ここで挫けては終わりだ。「慎重に、慎重に」と、自分では急ぎたい手と足を、必死で抑えて、ピッケルに力を入れた。

「百里の道は九十九里をもって半ばとす」

という諺が頭に浮かんで消えた。

とうとう最後のこぶが見えた。私たちは頂上の下一〇

1970 年 5 月 11 日、世界最高峰エベレストに、日本人として初登頂した松浦輝夫

快晴のなか登頂した植村直己。9 時 10 分、ほぼ同時に頂上に立った

メートルのところで息を入れ直した。深い興奮した呼吸であった。

九時十分。

松浦さん、続いて私と、世界最高峰の頂上に立った。最終キャンプを出てから三時間経っていた。〉

2人は頂上で涙を流しながら抱き合い、日の丸とネパール国旗を掲げた。そして第1キャンプ（6100m）で、心臓麻痺のため急死した成田潔思隊員（28）の遺品と写真を雪の中に埋めた。

こうして、2人は世界で25、26人目のエベレスト・サミッターとなった。

控えめな言い方をしたが、実は松浦は「エベレストに登るために早稲田に入った」と自負する〝エベレスト男〟である。このことは、今回私が「エベレスト半世紀」を書いている、と知った松浦の後輩、JACの成川隆顕から教えてもらった。

実際、強かった。1965年、早大隊ローツェ・シャール（8383m）登山隊に参加し、第4キャンプ（7050m）付近で、その成川が滑落。意識をなくした際、猛吹雪の極限の状況下で400m下の第3キャンプまでほかの隊員たちと9日かけて下ろした献身的な行動は、仲間内では有名な話だ。1981年、早稲田のK2西稜隊では隊長を務めた。

翌12日には平林克敏（35）、シェルパ頭のチョタレイ（37）も登頂、世界最高峰の頂に日本人が立つ、という最低限の目的は達した。

しかし、何よりもの目標だった「南壁初登攀」は成らなかった。「成功」と「失敗」の両方の要素を持つ、総括の難しい登山が終了した。

エベレストまで

1956年、マナスル（当時8156m）に登頂し、8000m峰初登頂の宿願をなしとげた日本山岳会は、次なる目標を策定するため「ヒマラヤ委員会」を再発足させることとした。委員の選定は槇有恒、日高信六郎、松方三郎、三田幸夫の4人の長老に一任され、三田幸夫、加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、今西寿雄、梶本徳次郎の6名が選考された。この新ヒマラヤ委員会の目的は、山の選定、登山時期の決定、隊長の選出の3つである。

1963年8月の「会報」228号に、当時の詳しい経緯が記録されている。この号の表紙は「エヴェレスト峰登

山計画について」との表題で「日本山岳会ヒマラヤ委員会委員長　三田幸夫」が次のようにぎっしり書いている。

〈今、我々が次期の登山目標として、取上げようとしているのは、世界最高峰、エヴェレスト峰（八、八四八米）であります。

この山の登攀史については、申上げるまでもなく、英国、スイス、インド、アメリカ、中共等各国の登山隊により、再三に亘り登頂、試登がなされており、そのルートも北東山稜、南東山稜、西山稜とも既に明らかとなっておりますので、今更という感を抱かれる方もあろうかと存じますが、登攀の対象として見た場合、世界の最高峰としての価値は毫も損われること無く、又、その高度を克服する為の困難さは、厳然として残るのであります。

そして、〈将来の飛躍に備えて大きな経験と力を蓄積するためには、どうしても一度は踏まねばならぬ宿命の峰、それがエヴェレストであるとも考えられるのであります〉と続く。この時点では「南壁」の発想はなかったようだ。

ともかく、委員会は目標をエベレストと決め、１９６５年プレ・モンスーンを希望して三田幸夫副会長（当時。のち会長）がカトマンズに赴いた。しかし、すでにインド隊が１９６５年のエベレスト登山の申請をしており、日本隊はインド隊の後、ということになった。

ここで、簡単にエベレスト登頂をめぐるクロニクルを紹介しておく。

１９５３年のヒラリー、テンジンの英国隊（２人ともイギリス人ではなかったが、英国隊の初登頂のニュースはエリザベス女王の戴冠式への最高の贈り物となった）による人類初の最高峰登頂以後、１９５６年にはスイス隊がローツェ（８５１１ｍ）の初登頂と同時進行させるかたちでエベレストの２登、３登を成功させた。インド隊は１９６０年春、東南稜からの２度にわたるアタックも悪天候に阻まれ、撤退した。同じ１９６０年、チベット側から王富州ら３人が北東稜から登頂した、と中国登山協会が発表した。英国隊が挑戦し続け、あのジョージ・マロリーが消息を絶ったチョモランマ北東稜は、こうして中国の登山家によって頂まで極められた、と認定された。

１９６２年、インド隊は再度エベレストに挑戦したが、不運にもまたも天候に恵まれず敗退。翌１９６３年にはノーマン・ディーレンファース率いるアメリカ隊が東南稜、西稜の２ルートからの登頂に成功、西稜隊は頂上から東南稜を下ってみせ、８０００ｍ峰の縦走を完成させた。

さらに、1965年のインド隊の3度目の挑戦となった。M・S・コーリ隊長以下のチームは健闘し、5月20日、22日、24日、29日と東南稜からアタック隊を出し、9人の登頂者を出す成果をあげ、イギリス、スイス、中国、アメリカに次ぐ5番目の登頂国となった。

ネパール・ヒマラヤ、突然の「閉鎖」

日本山岳会隊の出番がやってきたが、今度は別の難題が起きた。1966年から1968年にかけて中印紛争のあおりを受けて、ネパール政府は政治上の理由でヒマラヤを「入域禁止」としたのである。

1965年7月の「会報」241号の一面に、当時会長だった松方三郎が「エベレスト計画の延期」という記事を書いている。

〈来年に迫っていたエベレストの計画を延期するの止むなきに至ったことは、かえすがえすも残念なことだ。残念なことだが、何ともならない事情によって、そうなったと考えれば、今日のところ、情勢の好転をまつ以外に方法はない。（中略）

インド隊がエベレスト登頂に成功した今日、日本山岳会の計画に何等かの変更があるのではないか、ということをいう人もないではないが、（中略）エベレストの高さが八八四八メートルである限り、やはり一度は登らねばならぬ山だと思うし、それをすることによって、何かわれわれも、新しいものをさらに加えることができると考えているからである。〉

インド隊と同じことをやっても、という意見があったことは想像できる。しかし、「やはり一度は登らねばならぬ山」という表現が、当時の日本山岳会の重鎮たちの頭にあったことも理解できるのである。ここでもまだ「南壁」は出てこない。なお、この稿では「南西壁」を当初の「南壁」のままにしている。

解禁、南壁、そしてスキー隊の参入

『山岳』第六十六年（1971年）に大塚博美による「エベレスト（一九七〇年）」が記録されている。

1968年8月19日、ネパール政府は登山禁止を部分的に解除し、エベレストを含む38座を解禁した。

〈ネパール・ヒマラヤが閉ざされた四年の間、ヒンズー・クシュ、北米、南米、ヨーロッパ・アルプスなどで日本の気鋭の登山家達は活発に登山活動を展開し、より困難な登山を求めての挑戦が行なわれていた。そして世界の登山

界の趨勢もディレッティシマやヒマラヤのバリエーション・ルートからの登頂に、次第にその焦点が集まりつつあり、人間の可能性を押しひろげる意欲的な試みが限りなく続けられていた。〉

１９６９年４月、エベレスト委員会は「未踏の南壁ルート」を初めて取り上げた。

ただし、４年もの長い間、中断されていた計画である。大塚は「日本山岳会では、禁止解除の報を受け、早速組織の建て直しにかかったが、なかなか盛り上がりがみられなかった」と率直に書いている。「盛り上がり」は、規模の大きなエクスペディションでとりわけ大事な要素だ。当時、新聞社社会部の記者だった筆者の記憶でも、日本山岳会のエベレスト計画は、日本社会でさほど大きく注目されなかったのでは、と思う。日本人が８０００ｍの初登頂をなしとげた１９５６年のマナスル隊と違い、１９５３年のイギリス隊の初登頂からスイス、中国、アメリカ、インドと各国隊が頂を極めており、新味に欠けた。後述する「日本エベレスト・スキー隊」との確執がからんで、なんとも見えにくくなっていた面もあった。

日本山岳会は１９６９年1月11日、ネパール政府に対し、１９７０年プレ・モンスーンのエベレスト登山のためのアプリケーションを提出、折衝のため松方隊長が2月11日、カトマンズに飛んだ。外務省登山担当官は、１９６３年に日本山岳会が提出した登山許可申請は今も有効であり、当時払い込んだ登山料の半額は受け付けている、と回答し、見通しが明るいことを伝えた。

ただ、ここに来てとんでもない問題が生じた。別な日本隊がエベレストへの入山を申請していたのである。冒険スキーヤー、三浦雄一郎のエベレスト・スキー隊である。

当時、ネパールの規則では登山隊はプレ・モンスーン、ポスト・モンスーンの各シーズンに1隊と決められていた。日本山岳会の会員でもあり、ビッグホワイト・ピーク（７０８３ｍ）、マナスル西壁などの実積を持つ全日本山岳連盟の高橋照（あきら）が、「日本エベレスト・スキー探検隊（Japanese Everest Skiing Expedition, JESE）」を組織してネパール外務省と交渉、１９６９年2月19日付でエベレスト地域でのスキー滑降と映画撮影を行なうことの許可を取得したのである。

日本山岳会にとって衝撃的な事態であった。ＪＡＣより先にスキー隊が許可を取ってしまったのだ。エベレスト登頂計画は日本山岳会が４年も前から企画し、ネパール政府の了解も得て準備してきたことだ。それがようやく実現し

ようとする段になって、どうして……。

困った事態

日本山岳会が刊行した『一九七〇年エベレスト登山隊報告書』にはスキー隊への入山許可を伝えるネパール外務省の公式文書が掲載されている。

スキー隊の事前の偵察行も許可の中に含まれている。偵察隊は１９６９年９月10日から11月まで、本隊は１９７０年２月から６月まで、と具体的だ。

〈with reference to your letter dated 9th, February, 1969, I am glad to inform you that his Majesty's Government has granted permission to the Japan Science Foundation to carry Skiing expedition in the Everest region, for the first team of 10 from September to November 1969 and Second team of 20 from February to June 1970 on the following Conditions which you have agreed.〉

しかし、日本山岳会として最も重要な文面は、スキー隊は「滑降」を目的とするもので、「登頂」を目的とはしないことを明文化した以下のくだりであった。

〈Expedition party will in no case make an attempt to climb any peak in that area, since the expedition is considered to have its object as purely skiing and sport〉（この隊は許可された山域のいかなる頂上に登ることもあってはならない。隊はスキー、スポーツを目的とする）

とは言え、仮にもエベレストである。高橋たちは錚々たるクライマーをメンバーに組み込んでいた。すきがあったら登られてしまうかもしれない。そして、危険なアイスフォール。同じシーズンに別の隊の隊員、シェルパたちが入ることは避けたかった

３月25日、日本山岳会理事会・評議員会が開かれ、スキー隊との競合にどう対処するか真剣に討議された。このときの様子が前記公式記録には残されている。

〈二つともビッグ・チームになることが予想されるところから、同時に２隊がウエスタン・クームに入るのは避けるべきであるという意見が半分、延期することはネパール政府の好意を無にすることにもなるので、実施すべきであるという積極論が半数というところであったが、スキー隊の撮影する映画が１９７０年のＥＸＰＯ用であるところから、スキー隊の延期ということは考えられず、いずれにしても困った事態になったというのが偽らざる気持ちであった〉

エベレストについては、何年も前から先行していたはずなのにいつの間にかＪＡＣは追い込まれていた。

大阪万博とエベレスト

三浦雄一郎が書いた『エベレスト大滑降』によると、発端は山岳映画で知られる福原健司の家でネパール観光局長に会ったことからだった。ネパールの観光映画の監修に来たとのことで、その場には岳連系の実力者、高橋照もいて、話はヒマラヤをスキー滑降するならどの山がいいか、ということに及んだ。

「ダウラギリはどうか」と高橋が言ったが、三浦はもうひとつ乗れない。すると、観光局長は「どうせやるならエベレストはどうか」と言いだした。三浦の冒険スキーと映画撮影。それを1970年の大阪万博で、というシナリオが動きだした。

1970年という年は、日本にとってもネパールにとっても大事な年だった。ベトナム反戦運動などの政治的なアクションがゆっくり下火になりつつあるなか、経済は飛躍的に発展した。1968年には日本のGNPが米国に次ぐ第2位となって「経済大国」という言葉が冠せられた。そうしたなか「大阪万国博」が開かれようとしていた。

日本万国博覧会（Japan World Exposition, Osaka 1970）は、1970年3月15日から9月13日までの183日間、大阪府吹田市の千里丘陵で開催された。「人類の進歩と調和」をテーマに、77の国が参加、「パビリオン」と呼ばれた各国、あるいは企業の展示館には連日、長蛇の列が並び、閉幕までの観客数は、実に6421万8770人を数えた。

私も会場に足を運んだが、各パビリオンとも待ち時間が長く、なかでも目当てとしたソ連館にはあまりにも列が長く、ついに入れなかった。

各国が展示を競うなかで、ネパール館は「仏教」と「ヒマラヤ」を2本の柱とする展示で、ホールの奥正面には、この展示館の呼びものともいうべきヒマラヤのワイド・カラーコルトンがあった。中央にエベレスト、その左右に連なる雄峰の姿がワイド映画の画面のように展開したパノラマは圧巻であった。

7月からは、日本山岳会の登山隊が持ち帰ったエベレスト山頂の石が展示された。10cmの小石であったが、いかにも硬そうな青みがかった灰色で、〝地上最高の石〟と話題になった。ただしアメリカ館の超目玉品、「月の石」の人気には太刀打ちできなかった。

ヒマラヤは金がかかる。映画撮影となったら、さらにとんでもない額がかかる。三浦雄一郎のスキー隊は、日本山岳会隊以上に資金の調達に苦労した。

その結果、隊長は名の知れた「大物」でなければならなくなった。スキー隊総本部長となった作家、藤島泰輔は「私たちスキー隊は、日本独特のスポーツ・アマチュアリズムとも真っ向から対決する羽目となった」と前記『エベレスト大滑降』のなかで書いている。どの企業でもスキー隊はプロだから、と資金協力を渋るのだという。

ある日、三浦は赤井電機社長、赤井三郎と会い、計画を伝えた。この年、志賀高原でスキーをした際、赤井はアメリカの国務省のエライ人と一緒だった。資金捻出のためにはもはや日本だけでは無理がある。国務省の人を赤井にもう一度紹介してもらい、資金の調達を海外にまで広げよう、と考えたのだ。

「それでいくらかかるのか」と、話を聞いた赤井は尋ねた。

「大体、1億5000万円ぐらいです」と三浦が答えると赤井はこう言った。

「私ができたら全部出してあげましょう」

この瞬間、まぼろしのようなスキー隊の計画が現実のものとなった。

「これが実際、現実の私たちの探検のスタートの声だったのかもしれない」と、三浦は書いている。

ただし、スタートではあったが、その先も甘くはなかった。まず、1億5000万円といっても、9割は税金に持っていかれるというのだ。科学技術振興財団のその年の免税枠を取ってもらい、2000万円は使えることになった。読売新聞も三浦隊の後援を正式に決め、「同じシーズンにひとつの国から2隊」という異例のエベレスト登山隊が実現することとなった。

3月19日、ネパールは新たな登山規則を発表、38座を解禁した。日本山岳会ではスキー隊との競合をどうするか、討議が続いた。とくに両隊ともかなりの大パーティとなりそうなことから、危険なアイスフォールの通過が心配された。2隊同時は危険なのではないか――。

しかし、スキー隊が目的とする映画撮影がEXPO70のためのものであることははっきりしており、スキー隊が下りることはあり得なかった。このあたり、ビッグホワイト・ピークやマナスル西壁の隊長を務めた、全岳連系の実力者、高橋照のたくみな戦略が印象に残る。「高橋照にひっかき回された」と、元日本山岳会会長、宮下透樹は私に語ったことがある。ただし、高橋も最後まで三浦雄一郎と行動をともにすることはなく、後述するようにスキー隊からいつの間にか外されていた。

4月4日、1970年のプレ・モンスーン期のエベレス

ト登山を許可するというネパール政府の公文書がついに届いた。

明治大学山岳部ＯＢの藤田佳宏を隊長とする第１次偵察隊は４名、藤田のほかはやはり明治の菅沢豊蔵、植村直己、それに日本山岳会隊を後援する毎日新聞社から運動部の相沢裕文記者という顔ぶれだった。明大山岳部ＯＢの３人に新聞社から１人が加わったかたちで、日本山岳会隊と言いつつ明大出の大塚博美の強力なリーダーシップが感じられる編成である。

一行は69年４月23日から６月21日にかけてウェスタン・クームに入り、南壁の取付地点を観察、「登れそうだ」との報告をもたらした。

第２次偵察隊、小西政継の参加が意味するもの

社会的な関心は別として、世界最高峰を目指す登山である。山を愛する若者たちの関心は高かった。第１次偵察隊の帰国後、具体的な準備のため、日本山岳会は準備委員会を組織し、そのメンバーを会員から募集したところ、１１６名の希望者があった。エベレスト委員会の委嘱者を含めて準備委員会は合計１２７名に達した。ただし、実際に隊員になれたのは「ほんの数名」だった。

第２次偵察隊は、重要な役割を持った。

公式報告書によると――。

〈第１次偵察隊が下検分ならば、第２次偵察隊は、ほぼ本隊に近い内容の登攀を目的としており、従ってできることならば、本隊の登攀リーダーとなる者が、第２次偵察隊のリーダーになることがのぞましいということは、エベレスト委員会も了承していた。しかし、本隊の登攀リーダーについては、この時点では決定されておらず、止むを得ず委員会では、宮下秀樹（38）を偵察隊長に指名し、次の７名を隊員として選抜した。そして、この中の２～３名は、現地に残留して越冬することにした。（中略）

隊長：宮下秀樹（38）、副隊長：田辺寿（37）、隊員：中島寛（31）、小西政継（31）、植村直己（28）、佐藤之敏（26）、井上治郎（24）、ドクター：大森薫雄（35）〉

隊長の宮下、副隊長の田邊はともに慶應出身である。ノンフィクション作家、本田靖春がクライマー、小西政継の半生を追ったドキュメント『栄光の叛逆者　小西正継の軌跡』（山と溪谷社、１９８０年刊）にこんなくだりがある。

〈宮下は日本山岳会の中にあってエベレスト遠征に反対を唱え続けていた少数派の１人であった。反対というのは言い過ぎだろうが、慶応を代表する宮下がマナスル以来の大

登山隊のやり方に批判的だったというのは確かだった。〉

１９８４年２月、私も宮下秀樹から話を聞いている。確かに批判的だった。

〈松方会長は、一番高い山だから日本にも登らせてほしいという言い方だったけど、副会長の深田久弥さんは、「少数精鋭、無酸素狙っていいんじゃないか」と過激だったね〉

宮下自身はローツェからの縦走、頂上で1泊して南（西）壁を下る、なんてことを考えた、と言う。インド隊が9人も登頂した後、東南稜から登ったってまったく面白くない、と。

第2次偵察隊には、日本山岳会としては異色のクライマーがいた。社会人山岳会、山学同志会の小西政継である。１９５４年千代田区立麹町中学校を卒業し、活版印刷会社に入社した小西は１９５７年9月、山学同志会に入会、１９６７年2月7日、遠藤二郎、星野隆男とともに、マッターホルン北壁の冬季登攀（第3登）に成功、その名を登山界に広めた。その後の活躍は周知の通りである。

小西は、山岳雑誌の対談で知り合った山岳界の長老、佐藤久一朗と親しかった。１９６９年7月下旬、その佐藤から相談がある、と言われて有楽町のレストランに出向いた。そこにはなんとマナスルの総隊長、槇有恒が佐藤、安川茂雄、芳野満彦らと待っていた。

「エベレストに行ってくれないか」槇有恒はそう切り出した。南壁をやるにはいまの日本山岳会の力だけでは無理、小西のようなクライマーがいなければ、という日本山岳会の判断だった。長年、日本の登山界に君臨してきた大学山岳部中心の組織が、社会人クライマーに屈した瞬間とも言えた。

アイガー北壁の計画を控えて小西は迷ったが、結局引き受け、思ってもみなかった日本山岳会に入会した。

宮下以下12名の第2次偵察隊は、この年の8月20日から11月25日にかけて現地に入り、南壁８０００ｍまでルートを開拓した。本隊が入る以前に南壁をここまで開拓できた事実は、新ルートからの登頂を大いに期待させる成果だった。

植村直己と大塚博美

前述した通り、エベレスト隊では明大出身者の活躍が目立った。なかでも植村直己は、第1次偵察隊、第2次偵察隊に参加、さらには本隊の到着まで山麓の村で越冬、最後には登頂者となるなど歴史に残る活躍をした。登攀隊長の大塚は、のちに「植村は私の隠し玉だった」と言ったと伝

えられるが、〝隠し〟どころか堂々たる切り札だった。

１９６４年４月、日本人の海外渡航が自由化された。それまでは学術調査、ビジネスなどの名目がなければ、海外に出ることは不可能だった。１９６４年５月２日、植村は１１０$と３５００円の現金を手に移民船「あるぜんちな丸」で南米を目指した。アマゾン河の筏下りはじめ自由な旅を楽しんできたその植村をエベレスト隊に誘ったのは、大塚博美である。

２次偵察の大仕事が終わり、植村が越冬中、カトマンズへ下りた際、日本大使館の松沢書記官から「大塚さんのことだけれど、どうも本隊では来ないようですよ。別の人になるようです」と聞かされ、驚愕した。

〈思いがけない話だった。私は突然なので、最初は嘘だろうと思ったが、だんだん「これは困ったぞ」と心配になりだした。大塚さんは本隊の隊長として来るとばかり思っていた。〉

これは植村直己の『エベレストを越えて』のなかで植村自身が書いていることである。

〈「第一次偵察隊のとき「行ってみる気持はないか」と打診を受けて以来、なんでも大塚さんに相談してきた。そして、大塚さんを隊長とするエベレスト遠征の日を夢に見てきた。〉

ついでながら、植村は誰よりも正直に物事を書き残しており、本稿では随所で引用させてもらっている。

当時、植村は毎日日記を書いており、本のなかでその日の記録を再録している。

〈十二月二十九日。

松沢さんから「大塚さんは登攀隊長でなくなった」と聞いたとき、まさかと、エベレストへ賭けていた自分の思いにポッカリと口があいて、体から血がドクドクと流れ出るような気がした。大塚さんは私を育ててくれた大先輩である。その大塚さんが来れないとはまったく青天の霹靂だ。私は卒倒しそうになり、目の前がくらくらと昏くなった。〉

ほとんど断定的な表現で大塚参加せず、とこの時点で書いている。

実は、大塚博美が登攀隊長であることは、だいぶ前から決まっていた。「会報」２９３号（１９６９年11月）の「会務報告」に「九月理事評議員会議事録追加」という小さな記事がひっそり出ている。

〈九月の理事評議員会議事録に次の項目が脱落していましたので追加します。

・エベレスト登攀隊長の決定について

松方隊長が決めることになっていたが二次偵察隊の選考とあわせ松方隊長の意見を考慮のうえ、エベレスト委員会は候補として大塚博美常務理事を適任者として推薦決定した。本案了承〉

登攀隊長という、エベレスト隊にとって最も重要な「人事案件」が理事会の議事録から落ちていた？　信じられないことだ。なんとも不可解な展開である。しかも、年の瀬になって、その大塚が来ないかもしれない、との情報が流れたとは、一体どういうことか。

いろいろな資料を読み、関係者から話を聞き、大塚自身が書き残した手記から、私はこの件は大塚の仕事の問題が絡んでいるらしい、と思い至った。

マナスル隊で頂上直下まで迫った実績を持つ大塚は、1958年暮れ、当時共同通信にいた松方三郎を訪ね、就職先の紹介を頼んでいる。できればテレビ局に、という大塚に松方は日本教育テレビ（ＮＥＴ　現テレビ朝日）開局準備室の松岡謙一郎に電話をかけた。

「謙ちゃん、テレビにはフィールドワークができる人材が必要だよ」

こうして、大塚のＮＥＴ就職が決まった。

そんないきさつからも、大塚にとってエベレスト計画はやりたいが、実は非常にやりにくいものだった、ということがわかる。なぜか。ＮＨＫがＪＡＣ隊を支援しているからだ。大塚はテレビ朝日の人間だから、ＮＨＫの撮影チームが来るエベレスト隊で「仕事」はできない。

当時、エベレスト登山を完了するには帰国まで4ヶ月ほどかかるとされていた。それだけの期間、休みは取りにくい。45歳、中堅管理職として大事な時期である。しかし、エベレストは行きたい。大塚は腹を決めていた。

日本山岳会の理事会・評議員会の大塚登攀隊長の決定を即座に公表できなかったのは、大塚の会社での立場を考慮してのことだったのではないか。

大塚自身は、こう書き残している。

〈1970年登山は、ＮＨＫの放送なので登山隊参加のため辞表を総務に出す。総務はあっさり受理。しかし、松岡さんが「オールジャパンのメンバーなんだから」として、却下。クビがつながる〉（大塚の当時のメモ）

やはり一度は辞表を出したのだ。「大塚さんが仕事の関係で最後までリーダーを務められるか、という問題はあった」と、当時を知る宮下も語っていた。

隊長松方の意向もあり、大塚の登攀隊長は動かないものだったであろうが、そのことの公表は慎重にしなければな

らない事情があったのではないか。

大塚自身の仕事の問題に加えて、あるいは大塚を登攀隊長にするという方針への異論も一部の長老のなかにはあったのかもしれない。明大出の大塚の、スマートさに欠ける登山に、早稲田、慶應、京都、東京各大学山岳部出の古株たちのなかには批判的な声もあっただろう。

そして、この隊の背景には「日本人初登頂」を確実にものにするか、パイオニアワークとしてははるかに価値が高い「南壁初登攀」を第一に考えるか、当時の日本山岳会首脳部の〝揺れ〟があるように思えてならない。

スキー隊との交渉

第1次偵察隊がネパールで活動している1969年6月19日、東京のネパール大使館で日本山岳会隊とスキー隊の話し合いが、バンダリー大使、シャハ二等書記官が仲介するかたちで、持たれた。記録されている出席者はJAC側が「三田、日高、辰沼、大塚、松田、神原」、スキー隊が「高橋、中野、高島、三浦、松下、古村」。高橋照、中野満ら日本山岳会に批判的だった岳連系の登山家が、三浦雄一郎のスキーの冒険で当初は積極的な役割を果たしていたことがわかる。

両隊はそれぞれの目的を達成するため、今後も協力し合うこととした、英文の覚書に署名した。

内容は、「バンダリー大使同席の下、日本エベレスト・スキー隊と日本山岳会エベレスト登山隊は今後もそれぞれの隊の目的を危険を回避しつつ遂行するため必要な協議を続ける。両隊は1970年初頭にそれぞれのエクスペディションを実行できるよう希望する」

というものだった。

日本山岳会に言わせれば、エベレスト計画は、岳連の高橋照に「ひっかき回された」。もちろん、高橋は正当な手段で、と言い張る。背景に日本山岳会に対抗して伸びてきた全岳連の問題があった。

日本の登山界は、1905年に発足した日本山岳会が長く〝君臨〟してきた。登山という行為が大学山岳部以外ではほぼ行なわれていなかったことが背景にある。しかし、これに属さない社会人山岳会が次第に登山の実力をつけ始め、日本山岳会中心の登山界のありように露骨な批判が出始めた。とくに、当時は海外登山を実行するために必要な外貨の枠を日本山岳会がほぼ牛耳っていたことへの強い不満があった。

１９５５（昭和30）年5月、36都道府県の山岳連盟が「全日本山岳連盟（岳連）」を結成、１９６０（昭和35）年4月には、全日本山岳連盟と日本山岳会との両者によって日本山岳協会が組織され、日本体育協会に加盟した。さらに１９６７（昭和42）年5月、社団法人日本山岳協会となり（法人設立認可は昭和43年5月）、日本山岳会は、協会傘下の１団体となった。

しかし、現在も1山岳団体としては、最も有力な組織であることは変わっていない。日山協はその後、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会と名を変え、今に至っている。

高橋照の〝窒息〟

高橋照は当時57歳。１９６２年、全日本山岳連盟のビッグホワイト・ピーク隊隊長、１９７１年、マナスル西壁隊隊長として、いずれも登頂に成功（本人は登らず）。その後も再三ネパールなどヒマラヤに出かけ、「〝ヒマラヤ浪人〟テルさん」の名で広く登山界に知られた。『秘境ムスタン潜入記』（東京新聞出版局、１９７９年刊）などの著書がある。

〈「全日本山岳連盟隊の第3次登山隊長として」3度目に登頂して以来すっかりネパールの山の虜となり、気狂いじみている程、ネパールの山に関する調査や収集を始めた〉

著書『マナスル西壁――鉄の時代のヒマラヤ』（文藝春秋、１９７２年刊）の冒頭、高橋はこう語っている。

〈また、当時全日本山岳連盟の海外登山に関する委員をやっていた関係上、都下や近県から、ヒマラヤに関心を持つ若い人達が、絶えず私の家に遊びに来ていた。〉

そして、大阪万国博でネパール政府に協力した経緯についてこう書いている。

〈１９７０年には、ＧＮＰを誇る日本が、万国博覧会を開催する年であった。当然、私が訪ネしていた１９６８年には、ネパール政府にも参加要請状が日本より来ていたが、外貨の少ないネパール政府としては、容易に踏み切るわけにはいかなかった。しかし、政府は当時熱心に万国博への参加について検討し、私にもそのための計画書や青写真をしばしば提示して意見を求めたことがあった。〉

特に、王室のヘリコプターを使って撮影した私のカラー写真に、「大きな期待を持っていたようであった」。

まさに大阪万博があるから、ネパール政府が日本に2つの隊を認めた経緯がわかる文章だ。ただし、高橋は日本山岳会との間であれほどもめたスキー隊のこと、三浦雄一郎の冒険計画については、この本のなかでもほかの場でも1

行も触れていない。おそらく、ＪＡＣとの対立だけでなくスキー隊内部でいろいろ厄介な問題が生じ、最終的に高橋は手を引かされたのであろう。そう推測させる文章を残している。

新型コロナウイルスで「ステイ・ホーム」が言い渡された今回、この文章を書くにあたって乱雑だが、さまざまな資料で埋まっている自宅の本棚が予想以上に役に立った。75年、80年と現地に行っていたこともあり、エベレストとその周辺の山々については〝宝の山〟だったのである。たとえば、40年前、イエティ同人の雨宮節（たかし）からもいただいた『ダウラギリ主峰登攀記』（岳書房、１９８０年刊）がある。

この書の冒頭で、雨宮はマナスル西壁登攀隊の隊長を務めた高橋照について〈その計画は、ネパールの権威といわれ、当時エベレスト・スキー隊からはずされて悶々としていた高橋照さんを隊長とし……〉と書いている。

何らかのいきさつで、高橋はスキー計画から完全に撤退させられたのだ。

高橋自身は、前掲書のなかでこう書き残している。

〈その翌年、１９６９年2月、私はエベレストに入山する正式な許可を貰ってから、プロジェクトを作成し、ネパールの万博参加とその成功達成のために側面より努力したが、規模が余りにも大き過ぎたため、プロジェクト本来の精神と全く正反対な、商業主義と野望、思惑をそれぞれ持った者が入り込み、他方、私はこのプロジェクトを否定しようとする魑魅魍魎たちの陰湿な集団の間の不信と策謀にはさまれ、〝窒息〟してしまった〉

どういう顛末で窒息してしまったのか、「魑魅魍魎たちの陰湿な集団」とは誰と誰を指すのかは不明だ。スキー隊の記録には許可取得に大事な役割を果たしたであろう高橋の名はいっさい出てこないのである。はっきりしているのは、高橋照がスキー隊から弾き出されたことだ。かわりにビッグホワイト・ピーク登頂者の加藤幸彦（２０１１年没）が三浦隊を支えるかたちで残った。

高橋は、終始「隊長」として行動した。ネパール政府の信頼関係もあり、それで当然と考えたのだろうが、加藤は高所で行動できない「かたちだけの隊長」に批判的だった。そして、何よりも三浦雄一郎の〝本気〟にほれこんだ。「この男は命をかけるつもりだ」と、加藤は著書『絶対に死なない』（講談社、２００５年刊）で書いている。

スキー隊にとって三浦のほかに「隊の顔」が必要だった。国会議員（当時）、石原慎太郎の出番がこうして決まった。

全隊員決定

第2次偵察隊の報告を受けて1969年12月27日、臨時理事・評議員会が開かれ、本隊のメンバーが決まった。以下の通りである。公式報告書には出身大学名、所属山岳会名などは省かれているが、ここでは隊の性格を理解するために明記しておく。大塚以下明大出は5人を数えたが、第2次偵察隊で隊長、副隊長を務めて気を吐いた慶應からは成田潔思1人だった。

エベレスト登山隊隊員編成

［隊長］松方三郎（70歳、京大）

［登攀隊長］大塚博美（45歳、明大）

［隊員］

■登攀隊員

松田雄一（39歳、企画・総務、日大）、藤田佳宏（37歳、企画・総務、明大）、松浦輝夫（35歳、設営、早大）、平林克敏（35歳、酸素・輸送、同志社大）、田村宏明（32歳、装備、明大）、中島寛（31歳、渉外、一橋大）、平野真市（31歳、装備、明大）、土肥正毅（31歳、食糧、明大）、小西政継（31歳、装備、山学同志会）、渡部節子（31歳、会計、オカリナ山岳会）、加納巌（29歳、酸素・通信、大阪府立大）、神﨑忠男（29歳、設営、日大）、錦織英夫（29歳、輸送・設営、学習院大）、植村直己（28歳、設営、明大）、成田潔思（28歳、輸送・設営、慶大）、鹿野勝彦（26歳、食糧、東大）、神山義明（27歳、輸送・装備、京大）、吉川昭（27歳、装備、鳳翔山岳会）、安藤千年（26歳、食糧、防衛大）、嵯峨野宏（25歳、装備、日大）、伊藤礼造（23歳、装備、山学同志会）

［科学班］

■気象観測

長田正行（29歳、気象・通信、防衛大）、井上治郎（24歳、気象・通信、京大）

■地球物理・通信　河野長（30歳、通信・科学、東大）

■高所医学・医療　住吉仙也（43歳、企画・総務、大阪大）、中島道郎（29歳、医療、京大）、広谷光一郎（37歳、医療、大阪市立大）、大森薫雄（36歳、医療、慈恵医大）

■報道隊員　木村勝久（39歳、毎日新聞社カメラマン）、相沢裕文（37歳、同記者）、佐藤茂（32歳、同記者）、原田益夫（27歳、同カメラマン）、内藤敏男（37歳、NHKプロデューサー）、野口篤太郎（37歳、同カメラマン）、堅野正三（32歳、同カメラマン）、中川寛（28歳、同記者）

■サーダー　チョタレイ

アシスタント・サーダー　イラ・ツェリン、ペンバ・テンジン（4月28日解雇）

■高所シェルパ　ナワン・ピンジュー以下24名（ほかにローカル・ポーターとして21名）

■リエゾン・オフィサー　ゴビンドラ・クリシュナ・シュレスタ

登攀隊員はこの時点では誰が南壁隊であるか、東南稜隊であるかについては分けられていない。

このことについて登攀隊長の大塚は公式報告書のなかで次のように書いている。

〈私は出発前に、隊員を南壁と東南稜班の両班に分けることをしなかった。それは、30名の隊員の技量や性格、そして、山へ入ってからのコンディションなどは都会では全然つかめなかったからである。勿論、本来的にいえば、そんなむつかしい、そして危険な未知な南壁に挑むのに、初めからそれなりの覚悟をもって山に入らなければ駄目だという意見はもっともだった。しかし、現状ではとてもそれをはっきり2隊に分けるデーターが私にはなかった。1次、2次偵察隊員は6名いたが、隊員中で、8000mのラインに達した経験者は小西、中島（寛）、植村、松浦の4名のみである〉

「two victory」は認められない

1979年2月15日、大塚登攀隊長以下26名の本隊は羽田を出発、ダッカ経由でカトマンズに着いた。

2月18日はネパールの独立記念日で休日。この休みを利用してJAC東海支部のマカルー隊のメンバーを招いて交歓パーティをする。この年、ヒマラヤは日本隊で賑わっていた。関西登高会のダウラギリⅣ峰、早大のツクチェ主峰、慶應のバウダ峰、日本女子登攀クラブのアンナプルナⅢ峰などである。

大塚、松田がネパール外務省の担当官、マナンダールと会った際、思いもかけない難題が持ち出された。「南壁ルートは許可するが、東南稜からの登頂はノー」というのである。

このことは前年、交渉役としてネパール入りした語学堪能、交渉力に優れた佐藤隊員が説明を尽くしたはずだったが、ネパールとしては先に許可を出したスキー隊に肩入れしたいのだろう。南壁からと東南稜からの「two victory」は認められない、という理屈だった。

このため、あらためて以下のことが確認された。

(1)南壁ルートは主目標で、東南稜はサポート・ルートである。東南稜からの登頂はあくまでも南壁パーティを主眼とした従属的なのであり、第2義的登頂であるが、サポートの意味ならば東南稜上に最終キャンプを出してもいい。

(2)南壁ルートのコンディションが悪く中止した場合は、当然のことながら東南稜から登頂する。

(3)両隊が登頂する場合は、南壁を登った隊は南峰に出て、サポート隊と一緒になって登頂する。そうすれば「one victory」とみなすことができる。この3つの場合についてすべて合意に達した。

以上は、公式報告書に記録されていることだ。「one victory」にこだわる役所の面子、それを何とかかわそうとする日本山岳会。同一シーズンに2つの、それも同じ日本の隊を受け入れてしまったネパール側との駆け引きが見えて興味深い。

シェルパ、高所ポーター約50名。荷物総量30t、キャラバン・ポーター約1000人。偵察隊含めて費用は、総額1億円。

装備も工夫された。特に南壁登攀用の新考案の酸素器具、岩壁用のテント台、クレバス用のジュラルミン梯子、羽毛などの服、寝袋、高所靴などの装備、食料、医療、気象など、年末の船積みに向け不眠不休の大忙しであった。

ここに至るまで、資金の調達も大仕事だった。隊員の個人負担も1人30万円、会員募金、後援金、企業募金（経団連協力）、物品、食料の寄贈願い。1956年のマナスル隊の募金活動の体験を基に加藤泰安本部長、中島寛事務局長らが汗をかいた。これらの仕事のため、松方隊長は1ヶ月遅れて入山した。

スキー隊も総勢30人

スキー隊の総本部長を務めた作家の藤島泰輔によると、三浦からエベレスト直滑降の話を初めて聞いたのは1969年の5月だった。

〈「エベレストのサウス・コルから直滑降をしようと思うのです」

「……!!」

私は一瞬あっけにとられた。エベレストとスキーがすぐに結びつかなかったことも事実である。

「そんなことが可能なのですか?」

「確信はあるのです」

と、三浦はいった。「もちろん、死ぬ覚悟も必要ですが……」〉

（文藝春秋臨時増刊『三浦雄一郎　エベレスト大滑降』所載　藤島泰輔「現地報告　エベレスト大作戦」）

スキー隊は、映画撮影が主な目的となったから、はじめに考えたより大がかりな、金のかかる仕事となった。

赤井電機が1億5000万円も出してくれたのなら十分ではないかと思うが、税の関係でその金額全額は使えないとわかり、何よりも映画撮影、それもチームを8000m近い高所に上げての作業は膨大な出費となる。映画を記録するのだから、全員プロの仕事師である。酸素ボンベもフランス製の高いが質の良いものにした。

スキー隊も、総勢30人の大所帯となった。

総隊長・石原慎太郎、スキー隊長・三浦雄一郎、総本部長・藤島泰輔の布陣が決まり、安間荘以下サポート班11人、銭谷功以下映画班8人、スキー班1人、写真班2人、科学班2人、報道班3人（読売新聞社会部、運動部、写真部各1人）と、総勢30人の大所帯となった。

総隊長・石原、スキー隊長の三浦、総本部長の藤島の3人はそろって37歳だった。

「ドンちゃん」の愛称で多くの山男に親しまれた名古屋山岳会の加藤幸彦が三浦を支えるかたちで副隊長となり、登攀メンバーにはビックホワイト・ピーク、ギャチュン・カンにそれぞれ初登頂、写真家としても数々の山岳写真を残した、安久一成（1972年韓国マナスル隊に参加して雪崩遭難）、1973年の第2次RCC隊で東南稜からの登頂者となった石黒久ら、その気になればあっさりエベレストに登頂してしまいそうな強者（つわもの）が何人もいたことから、勢いで登ってしまったら、とのジョークがなかば本気でささやかれた。

スキー隊も2月24日、日本を発った。

スキー隊、アイスフォールの崩壊事故

3月25日、いよいよ日本山岳会隊の登山活動が始まった。

アイスフォールの突破が最初の大きな関門だった。すでに1次、2次偵察隊でここを何度か通過している植村直己の体験がシェルパたちの体験とともに役に立った。慎重にルート工作、荷上げを開始したが、緊急事態が起きた。

4月5日午前10時45分、アイスフォール中央部5650m付近で陥没事故が発生、スキー隊のシェルパたちが巻き込まれた。スキー隊のリーダーとしてその場にいた加藤幸彦は自著『絶対に死なない　最強の登山家の生き方』にこう書き残している。

〈隊が進むときには、二～三人で一本のロープで結びあっ

て登っていく。氷河のど真ん中を登っているとき、およそ一五〇〇メートル上のエベレスト西稜の国境稜線上に雪庇（せっぴ）状になって引っかかっていたビル一棟分ほどの巨大な氷の塊が、突然崩（くず）れ落ちてきた。〉

まさに心配していた通りのことが起きたのである。

スキー隊の6人のシェルパ、ミマ・ノルブ、ニマ・ドルジェ、ツェリン・ターキー、パサン、クンガ・ノルブ、カミ・ツェリンが命を落とした。

JAC隊もアイスフォール内を行動中で、とりわけ近くを登っていた藤田、渡部、平野のパーティはわずか30秒差で現場を通り抜けるという、まさに間一髪のところで難を逃れた。「足元の氷塊が揺れ動く中を逃げ回った」と、藤田は恐ろしい模様を述べていた。

6人の遺体は収容されたが、木のない現場で荼毘に付す作業は困難を極めた。スキー隊は急遽人を雇い、山麓から木を担ぎ上げたが、ほとんど生木で燃えにくく、遺体は2人ずつ3回に分けて荼毘に付された。マネージャー役でもあった加藤が最後まで立ち会った。三浦雄一郎が「一番助けてもらったのは、ドンちゃんかな」と後に私に語ったのは、こういう時の加藤の振る舞いを思い出すからであろう。

隊は別でもシェルパたちは互いに親戚、あるいは親しい友人同士である。JAC隊も深い弔意を示し、行動を一時中止した。

さらに、その4日後には日本山岳会隊のシェルパ、キャク・ツェリンがセラックから落下した氷塊で遭難死、アイスフォールの恐ろしさが両隊の隊員、シェルパたちに強く印象づけられた。

日本の新聞社、大手3紙がエベレストにそろった

4月17日、大塚登攀隊長から両ルートの登攀メンバーが発表された。南壁隊は、小西をリーダーに藤田、田村、中島（寛）、錦織、加納、吉川、嵯峨野、伊藤、大森の10人。

東南稜隊は、松浦をリーダーに平林、平野、土肥、渡部、神﨑、植村、神山、鹿野、安藤、（科学班）広谷、河野、長田、井上の14人。

4月20日昼過ぎ、朝日新聞の〝山記者〟、片山全平（故人）がベース入りした。朝日は主催でも後援でもないが、片山は日本山岳会員として毎月の会報に「海外の山」というコラムを連載していた（彼は定年退職後急死したため、私が引き継いだ）。片山としては報道の立場というだけでなくJAC会員としても自分で現地発信したい、という思いがあったのであろう。

ベースキャンプから C1 に向かう日本隊。崩壊しそうな巨大なセラックが潜むアイスフォールを越える

ＪＡＣ隊には毎日新聞の５人、スキー隊には読売新聞の３人がいた。日本の「三大紙」の記者が５３００ｍのベースキャンプにそろったのは、ある意味、壮観であった。

新聞だけではない。日本山岳会隊には４人から成るＮＨＫの撮影チームもいた。片山記者がスキー隊とＪＡＣ隊の中間あたりにテントを張った時のことを、ＮＨＫ班のリーダーだった内藤敏男は著書『エベレストへの道』（ＮＨＫ出版）のなかでこう書いている。

〈我々ＮＨＫマンはメディアの違いもあってそんなに気を張る事でもないが、「毎日」は少し斜に構えて片山氏に応待していた〉

マナスルの時は、朝日と毎日が後援を争った例がある。控えめな表現だが、エベレストのベースキャンプで報道チームの間に微妙な空気が流れたことが窺える。「片山さんは、どちらかというとスキー隊の読売新聞記者団のところにいましたね」と隊員の１人は振り返る。お付きのシェルパが行動を共にしていたとはいえ、たった１人の取材活動はやりにくいものであったろう。

登攀隊長の大塚は公式報告書の「登山を顧みて」の文章のなかで最後に「取材班の取り扱い問題」をあげている。取材班を「隊員」とすることでよかったのか――。

〈今回は登山許可の関係で、報道班９名も、隊員としてネパール政府に申請し（単なる特派員としての参加ではＢＣ以上では行動できなくなるではないかという点も考慮して……）、隊の一員として扱ったが、結果的には、シェルパの荷上げ能力等の関係で、報道隊員の高所での行動を制限せざるを得なかった。〉

ローツェ・フェース滑落事故

片山記者がベースキャンプ入りした４月20日朝、Ｃ３（６９８０ｍ）を２つのパーティがＣ４までのルート工作に出発した。平林・神崎組と平野・長田組である。しかし、動き出して間もなく平野の体調が悪いとわかり、長田と引き返し、平林、神崎パーティだけが工作を続けた。

事故が起きた。Ｃ３からＣ１に下りていた植村はＣ３の広谷からの一報をこう伝えた。

〈先ほどローツェフェースのルート工作に向かった平林、神崎にアクシデントが発生しました。ルート工作中、二人が氷壁で滑落、神崎が平林を確保した模様。しかし、平林はかなりの重傷の模様……〉

この隊では、30歳以上の隊員は７０００ｍ以上の高所では酸素を吸っての行動が許された。神崎はあと10日して30

歳になればその恩恵を受けられるはずだったが、この日はまだ酸素なし。７５００ｍ地点でインド隊のものと見られる、麻のフィックスザイルを見つけた。このルートで大丈夫だ、と判断した２人は神崎を先頭に下山を始めた。その瞬間、どうしたことか、平林が滑落した。止めきれず、神崎も３、40ｍ引きずられたが、ピッケルが氷に突き刺さって何とか止まった。

平林はまったく意識をなくしていた。一時的に脳震盪を起こしたのだろう。その後、回復した。神崎も無傷だった。報道関係者が多いので、この事故のことは声高に言わないようにしよう、と大塚は隊員たちに箝口令を敷いた。

そして成田隊員の死

翌４月21日、まったく思いもかけないことが起きた。若く、頑健な１人と見られていた成田潔思（28）が心臓麻痺で急死したのだ。ＢＣに入る以前、川で頭を洗ったことがきっかけで風邪を引いてしまい、成田は高度順応が遅れていた。そのことを気にして焦っていたようだった。

アイスフォールを無事通過し、14日にＣ１（６１５０ｍ）入り、荷揚げの拠点で仕分けの仕事を手伝い、住吉ドクターに「自分も上に登らせてくれ」と懇願した。この日は空身でシェルパとアンザイレンしてＡＢＣ（６５００ｍ）往復。ここで　大塚やほかの隊員に元気に挨拶してＣ１に下っていった。

〈６時の夕食時、成田始め６人は住吉ドクターのテント内で食事を始めたが、成田は余り食欲がなくおじや半分、皆で楽しく食べていたが俄に容態変化、成田と呼ぶも反応なしで呼吸停止、直ちに酸素吸入などあらゆる施行するも８時50分死亡確認。〉（登頂40周年時の大塚博美の記録より）

成田は元気いっぱいな青年だった。タンボチェ（標高３７００ｍ）に高度順応のため長期滞在した時、しばしばトレーニングとしてシェルパを交えて騎馬戦をやった。３人の〝馬〟にまたがった成田は次々に敵を突き落とし、その強さにシェルパたちは全員一目おいたという。

植村直己は、１歳下のその成田をひそかにライバル視していたと、率直に書き残している。

〈キャラバン中の彼は体格は秀でているし、食欲は旺盛、力はあるで、みんながひそかに舌をまき、一目置いていた。大食漢にはほかに大柄な中島、神山隊員、最年少の伊藤隊員、それに小柄だが私と、たがいに誰にもひけをとらぬつもりだったが、成田隊員の食べっぷりは桁違いだった。闘志もすぐれていた〉

そして付け加える。

〈人の死というものは、なんとあっけなくやって来るのだろう。私は内心では成田を登頂の大きなライバルと考えていた。キャラバン中から、彼に負けては登頂はおぼつかない、と思っていた。その彼が今や帰らぬ人なのだ。〉

C1テントから少し離れた小高いところに黄色いテントが張られ、成田の遺体が安置された。やがて大塚登攀隊長が到着し、テントに駆け寄った。

「成田、成田、なんで死んだのか」そう号泣した。

4月22日、C1以上にいた全隊員がC1に集結して成田に別れを告げた。スケジュールを大幅に変更し、半数の隊員が危険なアイスフォールでの遺体の引き下ろし作業にあたった。南壁隊の小西、伊藤が中心となって空中ケーブルのザイル工作で遺体を慎重に、手厚くベースキャンプまで下ろした。

隊長の松方三郎はリエゾン・オフィサーとともに山麓の村にいた。日本の家族の意向を聞いて遺体をここまで下ろし、荼毘に付すこととした。

遺骨は、井上、堅野の手でクムジュンの松方隊長へ。さらにヘリコプターでカトマンズへ運ばれ、ここで慶應大学山岳部の先輩であり、第2次偵察隊長であった宮下秀樹に

南壁の上部 7000 m に設営された南壁隊のキャンプ。当時の最先端の装備が集まっていた

付き添われた成田の父に手渡された。成田は独身だった。

アタック・メンバーの発表

5月3日夜、大塚登攀隊長がアタックメンバーを発表した。「第1次頂上アタック　松浦、植村」と名前を呼ばれて植村は「目がうるむのを必死でこらえた」。

〈こんな複雑な思いはめったにない。事故が次々と続いた中で、最初の登頂メンバーに選ばれたというのは何物にも代えがたい喜びだった。だが、元気で力のある人はまだまだいたし、とくに南壁隊の人々は中止論も聞かれる中で、どんな気持ちで……〉

南壁隊については多くの隊員が懸念を口にしていた。東南稜隊がすでにサウス・コルに達していたのに対し、南壁は7500mに予定されていた第4キャンプの設営も、この時点でできていなかった。リーダーの小西自身も「みんな懸命にやってくれているが、こんなに不調な状態では……」と、半ば諦めている雰囲気があった。

いま思えば、成田隊員の突然の死、いつセラックが倒壊するかわからないアイスフォール内の遺体の搬送、日本の家族への連絡とその後の対応など一連の経過は、結果的に南壁の登攀をほぼ不可能にしてしまった、と言えるだろう。

三浦雄一郎、2分20秒のスキー滑降

スキー隊の三浦雄一郎は、5月5日、エベレストのノーマル・ルートの経由地である、サウス・コル（標高7985m）に到着した。当初の計画では、サウス・コルからスキーで滑降することになっていたが、翌5月6日にサウス・コルから200mほどザイルで下り、午後1時、標高7780m地点から滑降を開始した。

JAC隊は、三浦の滑降の時間、無線の使用を避けて便宜をはかった。

スタート直後、オレンジ色のパラシュートが開き、三浦はゆるやかなカーブを描きながら、斜滑降に入った。ウェスタン・クーム上部のスキー隊コントロール・センターは「素晴らしい、三浦さん、ルートを、そのまま進んでください！　長いコースです」と叫んだ。

その直後、三浦はバランスを崩して転倒した。300m滑落し、不運にも露出している岩に当たってなお滑落。斜面に走っている雪の溝に落ちてかろうじて止まった。しばらくして半身を起こし、ゆっくりストックを上げた。

「生きている！　不死身だ！」

拍手が、スキー隊、JAC隊の隊員、シェルパたちから沸き起こった。

以下、今回あらためて提供された三浦の手記。

〈ヨシ、この風だ、と思ったときスタートしていた。

風が消えていた。イタリアでのツェルビニアのレースで時速172キロを出したとき、聞こえた暴力的な風の音、富士山の頂上からまっすぐスタートしたとき、そして滑降レースのときに聞く風の音、それがない、音のない世界へ入っていく。つまり薄い空気に多分いくらかの追い風をうけていたのだろう。

やがてパラシュートを開く。

しばらく滑り続けているうち、もうこの滑降は生きて帰れないかもしれないと感じはじめた。

案の定、氷のカベは、とび込んでみたら波をうってめちゃめちゃに荒れていた。その中に無数の落石がささり込んでいる。カミソリのように研いだはずのスキーのエッジもヤリのようにするどいストックの先も、氷の急斜面がぜんぜんうけつけない。

スキーのブレーキ絶望……。〉

いま、読み返してもこの冒険の無謀さがわかる。死を覚悟しなければできない挑戦だ。硬いガラスのような斜面を滑落しながら、滑っている本人が止められるとはまったく思っていない、死を覚悟しているだ。

〈ローツェの登行ルートへの脱出、第3キャンプ付近の氷のテラスへ滑り込めれば、あるいは脱出可能かもしれない。しかし、ジェネバ・スパーの岩がせばまる中間地点を通過したとき、とらえようもないガラスのような氷の凹凸のうえでほんろうされはじめた。

脱出コース絶望……。

あとは……と考えようとしたとたん、何かに引き込まれた。転倒……と気がついたのはしばらくしてからだった。時が流れはじめた。氷のカベを背中に感じて、落ちる、落ちる……。

スキーがはずれたらしい。もう止めるすべはない。ピッケルさえたやすくうけつけぬこの氷のカベに爪をたてたところでどうにもなるまい。あと数十秒で、あのベルグシュルントの青く暗い氷の割れ目にたたき込まれる。

いったい死ぬ瞬間はどうなんだろう。その瞬間への期待とはおかしな話だが、一種の死の瞬間への奇妙な好奇心すらおきはじめているではないか。もう俺は、人間というものからおさらばなんだなあ！　そのあとには何になるのだろう？

1970 年のスキー隊で、エベスレトを背景にスキー滑降のトレーニングをする三浦雄一郎（写真＝小谷明提供）

しかし、それにしてもどうなんだろう。このとらえようのない空しさ、寂しさは……。人生は夢だったのか…夢、夢という字が頭の中にふえていく。〉

とらえないような寂しさ。そんなことを感じるのか。三浦の短い感想は貴重である。

〈そのとき、生き物の本能であろうか、まだパラシュートが開いているなら……と上を見た。パラシュートは忠実な生き物のように、まるで他の世界からやってきた生き物みたいに赤く大きく開いてゆれていた。必死でヒモをもちあげる。

目の前に岩が現れ、ぐんぐん近づく。そのまま衝突、時が止まった……。

気がついたら、斜面にうつぶせになって頭を上にしてはりついていた。どんな偶然が、あるいはどんなものの意思が自分を止めてくれたのだろう〉

ＪＡＣ隊の大塚登攀隊長は、三浦雄一郎の滑降がともかくも終わったことに安堵し、簡潔にこう書いた。

〈スキー隊の三浦雄一郎氏が、サウスコルからのスキー滑降を実行し、途中で転倒しあわや遭難寸前で奇跡的に止まり、無事救出され、これで彼らの計画も終った。〉（公式報告書）

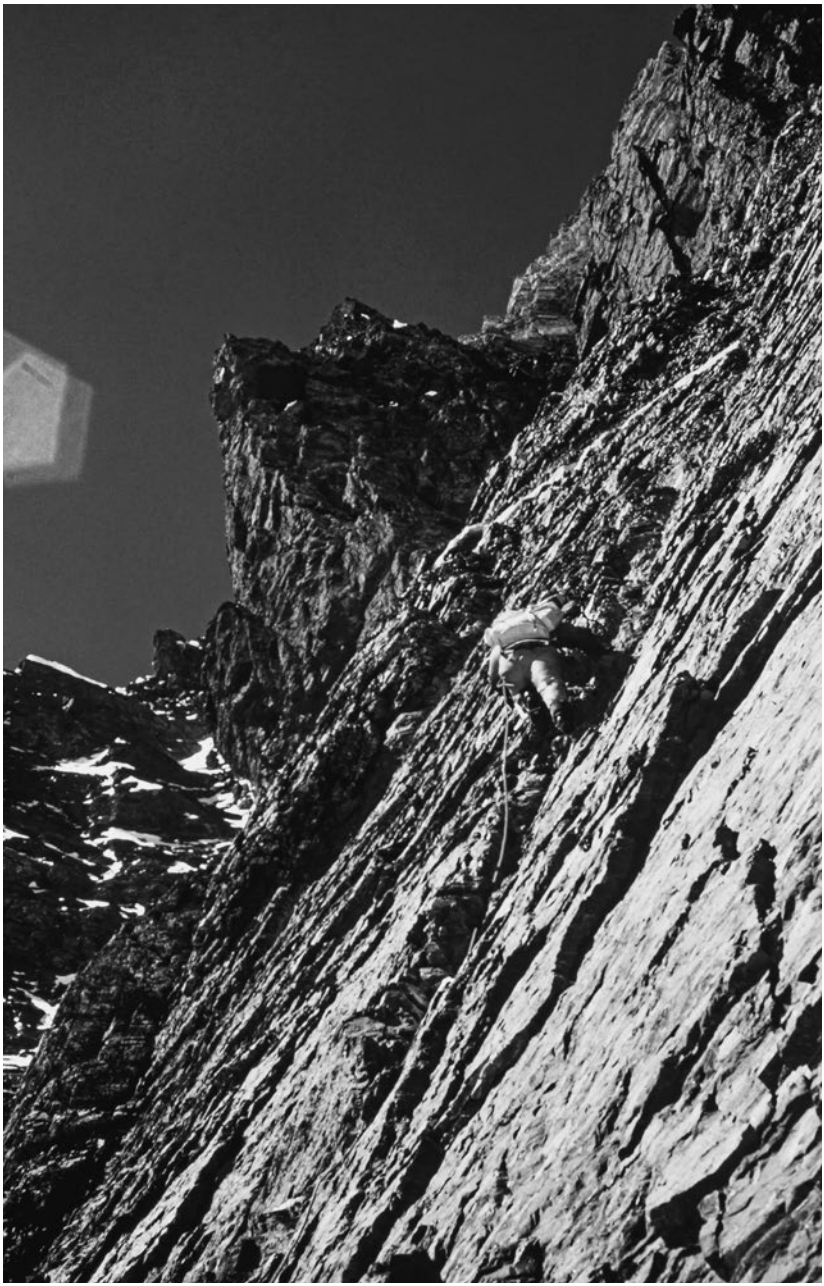
そして、南壁の終了

スキー隊は目的を果たしたと言えるのかどうか。ローツェ・フェースを滑り、パラシュートを開いてなんとか止まり、無事生還したのだから一応企画した滑降はなしとげた、と言えるだろう。何よりも死ななかったこと、そして、目的としていた撮影をやりとげたことは、この隊にとって幸運であった。

この時の撮影記録をもとに、カナダの映画製作者、バッジ・クローリーが石原プロから版権を買い、『The Man Who Skied Down Everest（エベレストを滑った男）』として１９７５年に公開、作品は第48回アカデミー賞で長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した。

日本山岳会エベレスト登山隊南壁チームの最終ステージを、前出の大塚の記録は以下のように簡潔にまとめている。

〈５月10日、Ｃ４（７５００メートル）から加納、嵯峨野は酸素を使いザイル９本（９００メートル）を持って登る。乱雑な45度



目的の 1 つである南壁から登頂を目指す嵯峨野宏隊員。5 月 10 日、最高地点となる 8050 m に到達した

の岩場、アイゼンを脱ぎ素手で登る。行く手に高さ10㍍、長さ100㍍位、魚の背びれに似た岩峰の左雪田に入る（2次偵察は右に入る）。トップ嵯峨野に代る、それほど難しくない階段状態の岩場を左にトラバース気味に登って3ピッチ伸ばすとザイルが無くなった。C4に下ると田村、中島がC3から登って待っていた。状況説明の時、落石が中島の右膝にぶつかり負傷。「しまった！」と無念の思い。加納も下山中にC3付近で腰に落石の打撃。有望な2つのパーティーを失う。

5月12日、東南稜の完全登頂をもって南西壁の断念を宣言する。〉

〈「残された期間で南壁を登るのは無理だ。落石の多い今年の南壁を危険を承知で登るのは無謀でもある」南壁を断念する理由をリーダーの小西はこう説明し、「エベレストをイギリス隊が22年かけて初登頂したことを思えば、今回の日本隊のトライで落ちなかったといっても失望することはない」と付け加えた〉

作戦変更で、その小西はシェルパのピンジューとともにサウス・コルから日帰りで頂上アタックすることになっていた。「女性世界初登頂」を目指す渡部節子隊員らもサウス・コルに集結した。しかし、17日午後から雪が降り始め、天候の回復は見通せなかった。

5月19日、東南稜からの第3、第4次アタックも天候の悪化で中止となった。

不完全燃焼

5月21日、全員がBCに集結した。満足感からほど遠かった。久々のアルコールの勢いもあって絶叫したり、泣いたり、慰め合ったり、JACのエベレストは複雑な思いを残して終了した。南壁を最後までやれなかった悔しさが大きかったが、簡単に登れるルートではないことは、皆わかっていた。アタッカーの選考を不満に思う隊員も少なくなかった。

南西壁は翌1971年、ディーレンファースを隊長とする国際隊が挑戦したが、8350mまでで断念。さらに1972年にはヘルリヒコッファー率いる国際隊が挑戦したが、同じ高度までしか到達できなかった。いずれの隊もチームワークがそろわなかった。

1973年には日本の岩登り集団、第2次RCC隊が70年のJAC隊の借りを返す意気込みで挑戦したが、石黒久と加藤保男がサウス・コルから登頂するにとどまった。彼らはJAC隊からはとくに情報を得ることはなく、自力で

ベースキャンプに終結したエベレスト登山隊とシェルパを含む全隊員

同じくベースキャンプに終結した日本エベレスト・スキー探検隊の隊員たち（写真＝小谷明提供）

の登攀だった。
　そして１９７５年秋、クリス・ボニントン率いる英国隊が登場した。３年前にも挑戦して敗退した経験を持つボニントンは、上部ロックバンドに食い込むガリーを利用して初めてロックバンドの上にＣ５を設営することに成功し、ここからドガール・ハストンとダグ・スコットが南峰に抜け、頂上に達した。ＢＣからわずか33日というスピード感ある初登攀だった。

　あれから14年経った１９８４年、小西にインタビューした際、１９７０年の南壁について聞いた。
「本隊に行って、秋の南西壁との違いがわかった。秋だと雪がついていてキックステップで登れるが、春はそんなわけにはいかない。南西壁は秋のほうがいい」
　実際、南西壁をものにした75年のクリス・ボニントン隊は、ポスト・モンスーンに挑戦し、登頂を果たしている。
　大学山岳部出のメンバーの登山に参加しての率直な感想は小西の本、『ぼくのザイル仲間たち』（山と溪谷社、１９８７年刊）にずばり書かれている。
〈ただ歩いて登れるだけの一般ルートにキャンプを次々に設置し、登頂してきたこれまでの大学山岳部の人たちにエベレストのしかも南西壁なんか登れるわけがないし、「彼らに登れたら、俺、坊主になってもいいよ」が正直な気持ちだった〉
　そういう気持ちでＪＡＣ隊に参加したのだと、タメ息が出る。しかし、率直にそう言えるのが小西政継なのだろう。
　小西にとって日本山岳会のエベレストは初めての８０００ｍ峰登山だった。大人数による極地法への違和感から少人数での尖鋭的な登攀への志向をより強めていく。
　エベレストの翌年の１９７１年、グランド・ジョラス北壁の冬季登攀に成功する（第３登だった）。この時、凍傷で両足指をすべて失った。
　１９７６年、山学同志会隊でジャヌー北壁の初登攀に成功、１９８０年にはカンチェンジュンガ主峰北壁の無酸素登攀を指揮（小西自身は登頂できず）するなど、クライミングの世界に大きな足跡を残した。
　１９９６年10月１日、マナスルに登頂後、消息を絶った。

スキー滑降こそ人生最大のチャレンジ

　新型コロナウイルスで世界中の動きが止まってしまった２０２０年７月、半世紀前、ローツェ・フェースのスキー滑降で世界を驚かせた三浦雄一郎は札幌にいた。

あらためて当時を振り返っての感想を聞いた。

――あのローツェ・フェースを滑降するという冒険を37歳という年齢でなしとげたこと、その後70歳以上になってあらためてエベレストに何度も向かったこと、冒険の意味合いは三浦さんにとってどう変わったのですか。

「37歳のときのエベレスト、これは自分の人生にとって最大のチャレンジ。これが出来たら命を失ってもいいと思えるほどのもの。70、75、80歳のエベレストはそれと違って、同じく命懸けでも自分の肉体の限界、人類の限界を超えるものとしてチャレンジした。むしろ好奇心からだね。」

「アイスフォールでの事故で6名のシェルパが亡くなったことは、言葉に尽くせぬほど辛かった。僕のために尊い命を失ってしまった彼らと、出来ることなら代わってあげたかった。」

――振り返って、誰が一番助けてくれましたか。

「1970年の遠征は、本当に多くの方々に支えてもらった。あえて一番というのならドンちゃん（加藤幸彦）、盟友です。」

私はあの冒険から5年後の1975年4月、エベレスト日本女子登山隊の取材でローツェ・フェースを7700mまで攀じて心底驚愕した。こんなところをスキーの板つけて滑ったのか！

死んで当然、生きたのは奇跡。間違いなくそういう冒険だった。三浦雄一郎というスキーヤーが企てたとてつもない挑戦は、彼が生還し、その滑降記録が世に残ったことでシェルパ6人の死を伴う、ほろ苦い勝者の記録となった。

日本の、あの時代を表現した1970年のエベレスト

半世紀前のエベレストを追って、新型コロナウイルスによる蟄居を強いられた機会に少し長めの旅をしてきた。

長く眠っていた自分の蔵書と先達の織内信彦・元JAC副会長から生前譲り受けた日本山岳会の会報「山」の綴込みが大いに力となった。創刊号からの記録が終始手元にあるのは心強かった。

そして、日本の経済力が急上昇していったあの時代、いろいろな意味で両隊あわせて〝時代を表現した登山〟だった、と思った。スキー隊がネパール政府の熱い思いを受けて参入したのは、JACにとってはまったく想定外のことだったが、そのことを含めて時代を象徴する出来事だった、と言えるのではないか。

1970年、日本に「歩行者天国」が登場した年、大阪

万博というお祭りがあった。その盛大なお祭りで、日本人の知恵と勇気がネパールという国を少しだけ盛り上げる役割を果たした。スキーのとんでもない冒険は、ネパールの山の民にとっては貴重なことだった。ただ、6人もの尊い命が失われたイベントを「成功」と言うことはできない。あの大掛かりな冒険とその撮影のために重大な犠牲があったことを、山を愛する者ならいつまでも記憶していてほしい。

南壁も成功とはならなかった。しかし、日本山岳会の隊に小西政継とその仲間が加わったことは、日本の登山史に少なからぬ意味を持った。1980年のチョモランマ、1988年の3国友好登山、1992年のナムチャバルワ、その後の日本山岳会が仕掛けたどの隊にも重廣恒夫、尾崎隆、高見和成ら社会人山岳会の精鋭たちが当然のように参加している。1970年のエベレストはその先駆けとなった。

そうして今回、あらためて成田隊員の死を深く考えさせられた。大学山岳部出身者がほとんどの隊で、慶應を背中に背負って参加した成田。頑健だが、高所順応トレーニングに失敗したと気づいた時、どんなに焦ったか、と思う。彼の死はヒマラヤ登山の基本を教えてくれる。青年たちは、今からも成田の死をムダにすべきではない。

新型コロナウイルス問題でなかなか人に会うことは難しい今回の取材。日本山岳会の会報をくまなく読み、昔のインタビューのメモ帳を引っ張り出して興味深かった。三浦には長女の恵美里を通じてメールで答えてもらった。

小西政継は文章家で、何冊もの本を残している。そのなかの『ボクのザイル仲間たち』には、エベレストで行動をともにした2人の山男が出てくる。

「植ちゃん」こと植村直己、「ナベさん」こと田邊壽、第2次偵察隊副隊長である。宮下と同じ慶應出だが、気さくな田邊と小西は馬が合ったらしい。同じ装備係として濃密な関わりを持った。

電話で50年前のエベレスト話をあれこれ披露してくれた後、田邊は最後にこう言った。

「JACにとってエベレストは登らなくていい山。でも、登らなくてはいけなかった山だったな」

同感である。

＊クレジットのない写真はすべて毎日新聞社提供、坂東郷土館ミューズ協力

特集「エベレスト登頂50周年」

エベレスト登山を振り返る――登山隊員座談会

神﨑忠男・鹿野勝彦・嵯峨野宏

時代的な背景

――1970年は、日本山岳会隊が日本人として初めてエベレストに登頂した年になります。1970年という時代的背景を含めて、皆さんそれぞれが何を思い浮かべ、どういう登山隊だったか忌憚なくお話いただければと思います。本日の3人の出席者は、奇しくも年齢が2歳ずつ離れていますので、その意味でもそれぞれの方が感じるエベレストがあると思います。

神﨑　時代的な背景として私が記憶しているのは、帰国後にエベレスト頂上の石を大阪万国博覧会に持っていったときのことです。その時、アメリカから月の石が来ていて、そちらの方に人気がとられてしまって、エベレストの石がまったく浮かばれなかったことを覚えています。1970年という年は、まさに大阪万博の年で、ものすごく人出が多くて会場に入るのは大変だったんだけれど、エベレストの石のおかげですんなり入れて、私自身はあちこちを見学することができました。そういった点から、自分が直接的に時代に関わったという感じがします。

鹿野　1970年のエベレスト登山を考えるとき、その前段としてマナスルがあります。マナスルは1952年に偵察が出て、1953年から1956年に正規の登山隊が3回。偵察を入れると4回。今思うと1952年といえば、まだ焼け跡の時代じゃないですか。日本というのは戦争に負けた国。これが敗戦後たった7年でマナスルへ行こ

神﨑忠男（かんざき・ただお）
1940年、東京生まれ。1963年、日本大学経済学部卒業。日大二高から大学まで山岳部に所属、桜門山岳会会員。北極圏グリーンランド（1963年、日大）、エベレスト（1970年、日本山岳会）、コミュニズム峰（1976年）、チョモランマ北壁（1980年、日本山岳会）、3国友好エベレスト交差縦走（1988年、日本山岳会）、エベレスト（1995年、日大隊隊長）など多数の高所登山隊に参加。日本山岳会元副会長、日本山岳協会前会長、アジア山岳連盟顧問、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）会長などを歴任。

うと考えたのは、何だったのだろうと思うわけですよ。

イギリスとかフランスとか、ヒマラヤ登山に実績のあるヨーロッパの国ならともかく、日本というのは、ヒマラヤの経験は戦前の1936年のナンダコットがあるだけ。しかも、7000m峰に行ったことのある人は1人もいない。この時に、マナスルという未踏の8000m峰に登山隊が出せたことが何だったのか、よく考えてもわからない。しかも、1952年から1953年というのは、まだ高度経済成長期前ですからね。1956年にマナスルに登って、その後、高度経済成長期があって、1970年になって、やっとエベレストです。しかもその直前の1966年から1968年くらいまでは、ネパールの登山禁止令がありましたので、ヒマラヤへは実質的な登山隊は入っていないですよね。

神﨑　あのころは、「より高き、より困難を目指して」とか、パイオニア・スピリット、チャレンジ精神といった、未知や未踏の山を求めての行動が意識の根底にありましたね。

鹿野　僕ら東京大学がキンヤンキッシュ、明治大学がゴジュンバ・カン、早稲田大学がローツェシャールに行ったのが1965年。その前にチョゴリザとかギャチュン・カンなどいくつかあって、60年代にようやくマナスル以外でもヒマラヤ登山の経験が蓄積されてきて、それを受けて1970年に入ってくるわけですね。準備委員会が召集されたのが69年の夏。そういうことをいま考えると、マナスルの延長線上に1970年のエベレストというのがあったと思うんだけど、それにして

も、あれは何だったのだろうという気がします。

神﨑　私の場合、大学の大先輩の宮原巍（たかし）さんがいて、ある時「話があるから来い」と。行ったら、「おまえエベレスト隊員に選ばれたそうだけど、普通なら100万円以上の参加費がかかるのに、タダ同然で行けるんだから俺のホテルに投資しろ」って言うんですよね。

正確な金額は忘れましたけど、当時結構な金額をヒマラヤ観光に投資しましたね。そんなわけで株主総会の案内とかは来るけど、配当なんていうのは1回ももらったことなかったなぁ（笑い）。ちょうど1970年のエベレスト隊がシャンボチェに入ったときに、今のエベレストビューホテルの工事が始まったときでしたね。帰りに立ち寄ったら、やっと土台が立ち上がるかなというところだったですよね。その宮原さんも、ついこの前、亡くなってしまったのは、日大の先輩でもありとても残念です。

そうそう、個人負担金は20万円だったはずです。まだまだ高度経済成長期の右肩上がりの時代でしたからね。

鹿野　個人負担金は僕は未払いのまま出発しました。たしか入金締め切りが2月末だったけれど、僕は先発隊員で1月末に出発したので「すみません。間に合いません」と言って、出てしまったのですが……。

ところで1950年代には、マナスルのほかにもう1つ、南極という大きなエクスペディションがあった。南極とマナスル、これは今では考えられないような話だけれど、国民的行事だったわけですよ。だから小学生や中学生が10円とか100円とかを寄付して、それをマナスルは毎日新聞から、南極は朝日新聞から、それぞれ資金をかき集めて送り出すという時代でした。

あの頃のヒマラヤをはじめとする海外遠征に対する日本の雰囲気というのは、今の人には絶対わからないだろうね。絶対にわからないと言ってはいけないけれど、これをどうやって次世代の人に伝えていくかというと、とても難しい。

1970年のエベレスト隊の中核はマナスルのメンバーですよ。大塚博美さん、松田雄一さん、住吉仙也さん、そのあたりの人たちが中心となって、マナスルからエベレストへという流れを作っていった。そこには、今の人には、まずわからないような熱気というか雰囲気があったということは確認しておいた方がよいと思います。

嵯峨野　鹿野さんあたりまでは、昔の流れを継いでいたと思うんだよね。マナスルとか大学山岳部の伝統のような。だけど、それから2～3歳年下の僕らになると、昔の雰囲気とは全然

違ってきていると思います。かつての現代っ子に近いかな、戦後の人間ですね。雰囲気がガラッと変わったのを覚えています。経済成長の真っ只中にいて、家にはみな、電気洗濯機や冷蔵庫、テレビがあり、だれでも大学に行け、山へ行けるという時代でした。

神﨑　私は、親父の跡を継いで左官業といって、建築の壁塗りをやっていました。エベレストから帰ってきて講演に呼ばれても、登山そのものに対する質問はなかなか出てきません。一番多い質問は、「どうしたら6ヶ月も仕事を休めるんですか」というものでした。たまたま親父の跡を継いだ仕事であり、自分自身が壁を塗れるわけではない。仕事をとってくるのが私の役目だったから、日本山岳会でエベレストの計画が出たときは、1年分の仕事をとってきて職人に割り当てて、そういうなかで6ヶ月の時間を作りました。

嵯峨野　そうそう、僕らより3年か4年くらい前は、日本大学の場合、神﨑さんのような個人経営者、金持ちが山に登っていた。それが、僕らのような一般的サラリーマンの家庭の子でも山へ登れるようになって、変わってきましたね。少しの金だけ持っていれば、夏山の終わりには涸沢に行って、ほかの登山者が下山時に残していってくれた食料をあてにしながら、長期間、穂高の岩登りができた、そんな時代でした。

登山許可の取得とスキー隊

神﨑　エベレストの話からちょっと離れるけれど、当時、日本体育協会が日本のスポーツ界を整理したわけだよね。その時に登山も日本体育協会に加盟してスポーツとしてやればいいのではないかという話が日本山岳会に来ました。でも、日本山岳会はクラブ組織だから、体育協会に入ってしまって山岳行政のようなことに関わるのはクラブのあり方として問題があるということで、日本山岳会が力を入れて日本山岳協会（日山協）を創り、体育協会に加盟した経緯があります。

　でもその頃は、社団法人はまだ日本山岳会だけだったから、例えば国体にしても国際山岳連盟への加盟にしても、全部日本山岳会が入ったわけです。日本山岳会は、山登りに重点を置いていたから、エベレスト登山やヒマラヤ登山は日本山岳会がやって、スポーツ行政のような山岳行政のことは日本山岳協会がやるというようなことになって、当時、日山協は半分以上の役員が日本山岳会の会員というような、非常に特異な体質があった。だから日山協の5代目会長までは、全部、日本山岳会の会員から選んだ、というような経緯があったわけです。

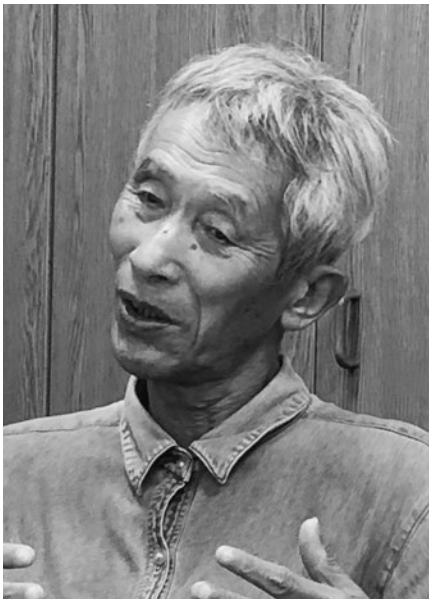
鹿野　日山協の大きな役割の1つは、国体だけでなく、登山許可を外国に申請するときの申請権を日本のなかでどう裁くかということだったと思います。日山協というのは、ネパールやパキスタンへの、インドはちょっと違ったけれど、申請を集約して、国内から1つの山に対して出てくる複数の申請を1つの隊に絞って出す。日山協というのは、そういう意味で海外登山に形式上は力を持っていたわけですよね。

神崎　だから私は最初、日山協の国際部に、日本山岳会の山崎安治さんに引っ張り込まれてしまいました。それで推薦状の交付を引き継いでやったわけです。外国と話をすると、最後の責任はやはり日本に持たせようと思っていて、推薦状をつけなければ登山許可は出さないと。だからヒマラヤ登山のように大きなお金がかかる時は、日本にと思っていたんでしょう。でも僕たち登山者にとっては、あれが登山の普及にものすごく妨げになっていたわけです。私なんかも、事務的にはそういうことをやっていたけれども、目は山登りのほうに向いているから、なるべく廃止してほしいといってパキスタンやネパールにお願いしました。当時、ネパールにもいろいろな国から登山隊が来るようになって、ほかの国を調べたらそのような推薦状なんかはないわけだから、日本もなしにしてくれと言って、推薦状の制度がなくなったわけです。

鹿野　当時、ネパール政府はまだエベレストを含めて、登山許可を外貨収入の資金源としてはそれほど大きく考えていませんでした。だから、むしろ大きな登山隊が入ってくると、地元の人たちへの影響が大きいとか、事故が起こったときやトラブルがあったらどうするんだということで、1つの山へは1シーズン1隊という取り決めがあったのでしょう。

神崎　当時、びっくりしたのは、よく世界で6番目に日本にエベレストの登山許可をくれたなということなんですね。でもね、日本はうんと早くから申請を出していたんです。ネパールの外務省も日本には早めに出すべきだと言ってくれていたんだけど、中国がエベレストに登ったのにインドはまだ登っていないというインドへの面子から、また、インドがネパールに圧力をかけて、日本のエベレスト隊の許可が遅れたとも聞いています。だから、エベレストの登山禁止がなければ、もっと早く日本山岳会はエベレストの登山許可をもらえたのではないかというのが、当時の話でした。

鹿野　皇太子時代のビレンドラが東京大学に留学していたでしょう。そのとき面倒を見ていた、いわゆる指導教官



鹿野勝彦（かのう・かつひこ）
1942年、東京生まれ。東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻を経て、財団法人人間博物館リトルワールド研究員、金沢大学文学部教授などを歴任。ヒマラヤでの登山はキンヤンキッシュ（1965年、東大）、エベレスト（1970年、日本山岳会）、チューレン・ヒマール（1971年、東大）、エベレスト（1973年、RCC Ⅱ）、ナンダ・デヴィ縦走（1976年、日本山岳会・インド登山財団合同）、カンチェンジュンガ縦走（1984年、日本山岳会・ネパール登山協会合同）など。日本山岳会には1969年入会（会員番号6768）。近著に『ヒマラヤ縦走――「鉄の時代」のヒマラヤ登山』（2020年、本の泉社）がある。

にあたる人が僕の先生だった中根千枝先生で、そういった国同士の縁も多少あったようには聞いています。

神﨑　私が新人のころに聞いた話では、まずひとつは、マナスルが終わった時点でエベレストの登山許可を申請しているという点。それともうひとつは、今西錦司さんが中心となり、万博にネパールがパビリオンを出したことへのお礼ではないかということ。そういったいろいろな情報が入ってきたけど、私たちとしてはイタリアやフランスという、エベレストに登りたい国がまだ登っていないなか、どうして日本に許可が下りたのかというのが、当時はまったくわかりませんでした。

嵯峨野　俺はもっと下っ端ですから、詳しい内容はまったく知りませんでした。

鹿野　そうした状況のなかで、ネパール政府が、スキー滑降を目的とした三浦雄一郎隊とJAC隊のどちらに登山許可証を出すのかが問題になっていました。裏で何があったかは知りませんけれど、両者でゴチャゴチャやっていたのは確かです。

神﨑　私たちも、スキー隊と日本山岳会の登山隊の両方に、同時に許可が出てしまったということの詳しい経緯はわかりませんが、ただ、あの前までエベレスト登山が禁止になっていて、オープンになったら急に2隊が行けるようになったということは、ネパールには日山協と日本山岳会の区別がつかなかったんじゃないかと思います。「日本」という感覚しかなかったから、2つの隊に出てしまったのではないかというふうに思いますね。

鹿野　スキー隊との関係は、僕自身も

まったくわかりません。現場でも、シェルパ同士はともかく隊員、それも若手の隊員の間の交流はほとんどなかった。まあリーダー層の間では、それなりにアイスフォールの通過の手順とか、交信時間の調整とかやっていたんでしょうが、そんなに詳しく、実効性があるレベルでやっていたかどうかは疑問です。

神﨑　一緒にトレーニングをしたりとか、協力しようとかいう発想は全然なかったですね。

嵯峨野　ただね、三浦さんがサウス・コルからスキー滑降したときのことはよく覚えています。落下傘が開いて転倒しても岩稜から立ち上がったときは、思わず声を上げたものでした。雪面の白と落下傘のオレンジ色のコントラストが目に焼きついている。命を懸けた極限の冒険家魂を見た思いでした。

嵯峨野宏（さがの・ひろし）
1945 年、川崎市生まれ。1963 年、日本大学法学部入学とともに体育会山岳部入部。北極圏のグリーンランドで活動、1968 年グリーンランド横断、1969 年グリーンランド・ワトキンス山脈偵察のため犬ゾリ旅行。1970 年エベレスト登山隊では装備を担当。南壁隊員として、8050 m まで加納巌隊員と登る。サウス・コルへ直登ルートで登り、第 3 次登頂隊員として 8500 m の C6 へ。5 月 19 日、出発するが天候悪く撤退。

鹿野　三浦さんの滑降時には、僕はたしかC2で眺めていたんです。で、彼が転倒してパラシュートが岩に引っ掛かって止まるまで、あっという間だったけれど、僕は正直、やれやれ、と思いましたね。

神﨑　いずれにしても、日本山岳会隊とスキー隊の動向はヤブのなかでした。

偵察隊と大学山岳部の登山隊

嵯峨野　第1次と第2次の偵察隊の話は、こういうところで聞いたことありますか。

鹿野　ちゃんと聞いたことはないですね。個人的には、植村さんとか宮下秀樹さんとかから、聞いたことはあるけど。全体の登山計画にしても、例えば、

隊員何人・何日間、キャンプの位置はこことここって言うくらいですよ。それ以上の細かい指示もないし、チーム全体で検討した覚えもないね。チームとして大きすぎたということはあると思うけれど、本当の意味で行く前の準備のための計画の検討をチーム全体でしたことはないでしょうね。だけど、こういう状況は、実は、当時は当たり前だったんです。ヒマラヤへ行くについては、どうやって金を集めるかという会議は何度もするわけですよ。だけど、登山のタクティクスに関しては指示も下りてこないし、適当にやってよ、みたいな感じだったよね。

嵯峨野　山岳部の延長なんですよ。だから、下級生に細かい計画を話したって仕方ないわと。今度行くんだからお前ついてこいと、そんな感じですよ。だから、大塚博美、松田雄一、時たま来る平林克敏さんとかで、ことが決まっていったんじゃないですか。

鹿野　ただ今にして思うと、大塚さんや松田さんがリーダーとして、どれだけフリーハンドを持っていたかということがよくわからない。責任がどこにあるのかもわかりません。彼らにしても、最後まで誰が隊長で行くのか、登攀隊長で行くのか、わからなかったんじゃないですか。

神﨑　隊長問題は、日本山岳会のなかではもめていたらしいと耳にしました。宮下さんが偵察隊長になるのだって大変だったようです。というのは、俺はあの時レストランをやっていて、大塚さんと宮下さんが俺のレストランへ来て、エベレストの話をするんです。大塚さんも宮下さんも、両方とも本隊の隊長をやりたかったと思うけど、最終的には「（宮下さんの）1年後輩の田邊（壽）を副隊長にしてくれるのなら、偵察隊の隊長を考えてもいい」というようなことでまとまったように思っています。年の功もあったけど。いずれにしろ、水面下では隊長問題は日本山岳会のなかでかなりもめていたと思う。俺らもまだペーペーだったから、そこら辺はよくわからないけどね。

鹿野　僕らからすれば、なぜ、偵察に行ったリーダーが本隊にいないのかということが不思議だったわけですよ。

嵯峨野　結局ね、小西政継さんが偵察へ行って、本隊ではあまり登れなかった。小西さん自身、高度にはあまり強くないんじゃないか。疲れちゃうんだよ、年取ってると。

鹿野　年ってほどじゃないだろう。当時の30歳と今の30歳じゃ、また違うかもしれないけど。ただやはり、偵察に行った人が当然本隊に行くと、僕らは思っていた。偵察って、本隊のための偵察のはずでしょう。そしたらそのリーダーが本隊のメンバーから外れて

いるから、なにこれっ、という感じが僕なんかにはありましたね。

神﨑　小西君なんかは街の山岳会出身としてね、日本山岳会の登山隊では大学山岳部のやり方みたいなものに押されてしまったということはあるんじゃないかな。

鹿野　要するに当時の日本山岳会というのは、まだ大学山岳部ＯＢの会だったんですよ。

　それがいつごろからだろう、日本の登山者の能力というのは、いわゆる一般の社会人山岳会から、ヨーロッパでアイガーなどをはじめとした困難なルートを登る連中がどんどん出てきて、どう考えても個人のクライマーとしての能力は彼らの方が上だということを、僕ら大学山岳部出身者もそろそろわかってきた。

　だけど、ヒマラヤへ行くということは、まずお金を集めて隊を送り出すまでが大変なわけで、日本を出たら半分終わったようなものだという言い方までしていましたけど、そういう能力はやはり大学山岳部というかＯＢたちの方が勝っていた。当時の日本山岳会の長老というのは、東京帝大も含めて、慶應、早稲田、日大、京大も、みんな戦前に大学を出たエリートたちばかり。彼らが組織を作って、お金を集めて送り出す。僕らはそれに乗っかるしかない。そういう時代でしたよね。

　そのなかで、１９７０年の隊はオールジャパンとは言うけれど、僕から見ると、小西政継さんとか吉川昭さんとかは、コアなメンバーには思えませんでした。

嵯峨野　準備委員会で後々にオールジャパンなんていう話が出てきましたね。あの時、群馬県山岳連盟の、亡くなった小暮勝義さんとか地方からも社会人山岳会の人が来ていましたよね、誰が誘ったんだろうか。

鹿野　準備委員会は一応公募だったから、誰が応募してもよかった。でも最終的には、僕らもそうだけど、例えば日大で何人、明治で何人、関西は何人とか、そういった枠みたいなものがなんとなくあるわけですよ。あの当時、準備委員会には最初１００人くらいいましたっけ？　それでグループ分けがあって、「おまえは食料担当」とか言われて、その食料グループのキャップは宮下秀樹さんだったんですけど、宮下さんは偵察隊に行って準備作業はできなくなったじゃないですか。「鹿野君、後を頼むよ」と言われて、おいおいどうするんだよと思って。食料のグループは、人数だけは20人ぐらいいるんだけれども、名目上のキャップの土肥正毅さんはヒマラヤへ行ったことがないんだよね。本当に頼りになったのは、中村進、長谷川良典、安藤千年とかの

若手です。

そのなかで誰が本当に隊員になるのかって最後にふたを開けてみたら、（中村）進も外れている、（長谷川）良典も外れている。要するに学年の若いやつから、外されていった。

嵯峨野　僕は当時、グリーンランドで現地の住民とブラブラ遊んでいたんです。そうしたらある日突然、手紙が来て、「エベレストの準備会がある」って。それで帰ってきたら、「ここ（日本山岳会の事務局）に座っていろ」って言われて、朝9時から夜の10時まで。

大学の山岳部というのは、誰も行っていない所へ行きたい、ヒマラヤでも日本人初とかさ。そういう力が日本山岳会にはあったから、ヒマラヤに向かったんじゃないですか。社会人はそういうのをまとめる力がまだなかったからね。

鹿野　要するに、ヒマラヤに行くためのチームを作る力というのは、一般の山岳会にはまだなかったんですよ、たぶん。だけど、僕が個人的に知っている範囲でいえば、アイガーのディレッティシマを6人とか7人で登ってしまうような加藤滝男みたいな連中がいっぱいいたわけじゃないですか。そのなかで後々までヒマラヤにチームとして来ていたのは、小西政継さんのところの山学同志会。１９７０年代後半くらいになると、同志会の人たちがジャヌー北壁とかヒマラヤのバリエーション・ルートに行けるようになってきた。そこで計算してみたら、70年のエベレスト隊は総経費が、偵察隊まで含めてだけど、約1億円ですよ。隊員が、報道は別にしても1次、2次の偵察隊に本隊まで足すと50人くらい。1億円とすれば1人２００万円ですよ。当時、大卒の初任給いくらだった？

嵯峨野　俺、1万６０００円くらい（笑い）。

鹿野　そうすると、3年とか4年の年俸、ボーナスも入れて一銭も使わなくてもまだ足りないんだよ。これが、僕らの76年のナンダ・デヴィ隊は個人負担金80万円です。僕はちょっと歳を食っていたけれど、その金額は2年分のボーナスで賄えた。これはやっぱり違いますよね。だから社会人の人たちも、行く気になればヒマラヤへ行けるようになるまでの10年くらいの差は、日本のヒマラヤ登山の歴史を考えるうえで、すごく大きいと思います。

嵯峨野　その何年かで、社会人山岳会が力をつけてきたわけですね。

鹿野　例えば、76年にナンダ・デヴィに行ったときの加藤保男とか、高見和成とか、重廣恒夫とか、みんなそうだけれど、隊長が鹿野だからといって、僕が現場で何か指示を出すなんて、彼ら頭から考えていないもの。それぞれ

が自分の判断で、どんどん行っちゃうわけ。「明日あそこまで行くからね」「わかった」「じゃあ俺はこうする」みたいな。

ただ、彼らは自分がこう動いたら、後ろの荷揚げをどうするとか、気象条件をどうとらえるとか、そういうところでは僕が後ろにいるというので安心していたというのもあったと思いますね。一般の山岳会のトップクラスの人たちは、そもそも始めから自分で判断して山登りをしているじゃない。先輩に言われて、どうするとかいう奴らじゃないでしょう。そこら辺の発想が、彼らは違うわけですよ。だから彼らとどうやって一緒に組むかということをずっと考えていました。

神﨑　僕も大学山岳部で育って、ほかの大学の連中とも付き合っていたから、大学山岳部の連中の実力というのは結構把握してたつもりです。だけど、初めて社会人の小西君と一緒に行ったときには、やっぱり同志会という名前にものすごく気押された。マッターホルン北壁も登った、岩登りが達者だと聞いているから、それなりに凄いんだなというイメージがありましたよ。

だけど僕、アイスフォールを越えた上でかなり小西君と一緒に行動したんだけど、歩き方を見ていても、僕らとそれほど変わらないことがわかり、自分なりに変な自信を持てました。それまでは社会人山岳会の方がレベルが上だと思っていたから、俺らはどこまでついていけるんだろうかと思っていたけど、雪上ならそれほどの差はない、と感じ、自分なりにこれでいけるかな、という自信にもつながったように思います。

嵯峨野　神﨑さん、学生時代に年に二百何十日も山に入っているんだよ。そうしたら、山登りのセンスは全然違うよ。確かに社会人は長い間やっているって言うけど、1日行って帰ってきちゃうんだもん。こっちは20日も山に入っているんだから。

神﨑　それにしても50年経って時代が変わってしまったけど、当時はまだ大学山岳部の雰囲気が強かったわけだ。だから先輩後輩の付き合いとか、自分が我慢しなければいけないということが、チームワークを良い方に向けてきたと思う。

鹿野　揉めないということではそうなんだけれど、逆に言うと、言わなきゃいけないことも言わなかったな、という気はするね。

嵯峨野　言わなかったどころじゃないよ。俺なんか全然言えなかった（笑い）。

鹿野　言うものではないと思っていた。言うべきことを言わない、あるい

は言おうともしないという悪い面と、揉めないという良い面、それは1つのことの両面だったと思いますね。

嵯峨野　登山期間が60日くらい、キャラバンを含めて90日。だから、宇宙飛行士はすごく優秀なんだね。俺がグリーンランドを横断した時、やっぱり山の中に入ってから出るまでが60日でした。そういう意味では、登山隊はよく我慢した。

鹿野　ただね、氷壁って、僕ら日本ではあまり経験ないわけじゃない。ヒマラヤで初めて本格的な氷のルートを登ることになる。だけど、ヨーロッパへ行った連中は氷を知っている。小西さんもそうだし、加藤なんかを見ていて僕が一番まいったなと思ったのは、僕らだったら氷が出てきたらステップ・カットしていくわけですよ。5mの間に5つも6つもステップを切って、どこかにスクリューなり打って、ルートを延ばしていく。でも、加藤なんかは違うわけよ。パンパンパンパンとアイゼンの前爪を蹴り込んで、10mくらいそのまま登っちゃう。スピードがまるで違うんです。

南壁隊とタクティクス

神﨑　結局、このエベレストで素晴らしかったことは、やっぱり南壁を登攀ルートの目標にしたというところなんだと思うよ。今は南西壁と呼んでいる壁だけど。

当然、宮下さんは、南壁を目標にするなら、やはり社会人が行かなければ登れないと思っていた。だから小西君は、偵察から参加したわけだ。南壁を見て、登れる可能性があるのかというのが、第2次偵察隊の目的の1つだったわけだから。

第1次は藤田佳宏さんが隊長をやって、アイスフォールをどう乗り切ったら頂上まで繋がるかというのが目的。第2次は南壁がどうなのかということ。結局、本隊に小西、吉川昭、伊藤礼造という社会人グループが入ってきたよね。彼らはやっぱり、岩登りの職人みたいなもので、岩登りには優れていたんだと思うけど、小西君なんかは、自分が今回は登れないなと思ったら、突然、登攀意欲がなくなっちゃったのだろう。だけど、大学山岳部なんていうのは単純だから、先輩に「行け」って言われれば、行くような組織なわけだ。ということで、結局、南壁の最高到達点は嵯峨野が行ったわけだよな。嵯峨野だって、頂上まで出られるなんて、当然思っていないだろうけど……。

嵯峨野　俺なんか若かったからね。東南稜みたいなルートは登りたくないとか、どうせエベレストに行くんだったら南壁以外にないとか。だから他人を蹴落としてでも、エベレスト南壁に登

りたいと思っていました。そういうのが、あの隊全体にあったよね。

鹿野　だけど、僕が今思うのは、リーダーである大塚さんや松田さんは、本当に登れると思っていたのかな？　登る気だったのかな？

嵯峨野　俺が今思うのはね、大塚さんも小西さんもルートをどこにするか、どこを登らなくちゃいけないか、決まっていなかったような気がする。写真があったのにね。いや、決まっていたのかもしれないけど、俺には決まってないって思えて……。

鹿野　報告書を見てもらうとわかるけど、ベースキャンプに入ってから、メンバーを南壁隊と東南稜隊に分けたじゃないですか。人数は南壁隊より東南稜隊の方が多いんです。シェルパもそう。物資もそう。酸素の配分もそう。僕自身はあの頃、ＡＢＣで食料を中心に物資の管理みたいなことをずっとやっていて、リーダーの指示を聞いて、本当に南壁隊にそれだけの力を注ぐ気があるのかな、どうかなというのがあった。

　成田潔思さんが亡くなった後、住吉さんが「南壁はやめる」と言ったじゃないですか。落石が怖いからということで。それは確かで、ものすごい落石があった。特に、プレ・モンスーンのシーズン、南壁は落石が多いんですよ。僕は１９７３年のポストにも行ったからよくわかる。その判断はともかく、住吉さんが「やめる」と言ったじゃない。大塚さんはトゥクラに下りていたわけですよ。成田さんを荼毘に付すために。

嵯峨野　やっぱりね、大塚さんにはロマンがあったんですよ。援助してくれた人のためには、エベレストは登らなくちゃいけないという。だから、サウス・コルから信頼性の高い植村さんを

50年前の出来事を思い出してもらいながら座談会は進んだ。日本山岳会の集会室で

登らせた。みんながもっと元気だったら、ほかの隊員を登らせればよかったんだよ。だけど確実に登って、あいつだったら帰ってくるという信頼関係があったんだろうな、植村さんには。あるいは1人で登れちゃうという。

大塚さんの思いを実現させてやりたかったよ。ただね、南壁を登れるか登れないかといえば、やっぱり登れない方になっちゃうと思いますよ。

神﨑　いや、最初から登れないとは思っていなかったと思うよ。ただ、登るんだという強い意志じゃなくて、登れちゃったらいいなというくらいの、ひょっとしたら登れるんじゃないかというようなね。もし、南壁ルート一本に絞ってぶつかっていったら、けっこう面白かったし、いいところまで行ったんではないかな。でも、1970年のエベレスト隊は、まず頂上に立つということが至上目的。インド隊から5年間もエベレスト登山が行なわれておらず、シェルパの経験、技術の低下による戦力から判断しても、どうしても東南稜ルートからの登頂のほうに力がいってしまったんではないだろか。

鹿野　東南稜を登るということは、確かにいろいろな意味で、日本山岳会だけじゃなく日本の登山界ということを考える上でも、まず登っておかなければいけない。それは確か。そして、そうなったらJACが登るべきだというのもよくわかる。

だけど、なぜ南壁を登れなかったのかということを、行く前にも現場でも、そして帰ってきてからでも本気で考えたかというと、すごく疑問が残る。一番イライラしていたのが、多分、中島寛さん。帰国後も、たまたま自分も中島さんも報告書の編集委員をやらされていたんだけど、原稿をズタズタに切られちゃったわけですよ。僕らが書いた南壁のタクティクスについての疑問の部分を。削ったのが大塚さんだったのか松田さんだったのかは知らないけど。

嵯峨野　俺は普通のルートなんか全然登る気がないから、行くんだったら南壁。誰も登っていないパイオニアワークとか、まっすぐ登るとか、あのころ流行っていたんですよ。誰も登っていないところは、もうほとんど日本の国にはなかったわけですから。

でも、俺に言わせればね、藤田さんにしろ、中島寛さんや小西さんにしろ、偵察した時にこっちのルートが有力だと思うという話をなぜしないのか。中島寛さんなんか頭いいんだから、「嵯峨野、あそこを登れ」と言えばいいのに、小西さんに遠慮するわけね。

小西さんが音頭をとったって、あんな大岩壁でね、ハーケンの数をあそこが何本、ここが何本、10m登って何本

とか、こんなことをやっていたら２００ｍの岩壁なんか登れるわけないんだから。駆け上がらなきゃ登れませんよ。その時に、それはおかしいぞ、ルートはこっちに行けと全体を見て言ってくれなきゃ。そういう全体を俯瞰したミーティングがなかったね。

鹿野　あの隊だけでなく、当時、日本のヒマラヤ登山隊の多くがそうなんだけれど、隊長がベースキャンプにいて、明日は誰がシェルパの誰と誰を連れてあそこに行け、ということを全部指示してくるわけでしょう。こういうのでいいのかなと思った。つまり、ベースキャンプと第２キャンプではまったく環境が違うし、第２キャンプと第４キャンプでも違う。メンバーのコンディションも、下のキャンプにいたんではまったくわからない。

　これは別の話になってしまうかもしれないけど、１９７３年の第Ⅱ次ＲＣＣ隊では、そういう指示はないと思っていたんですよ。そうしたら、湯浅道男さんが同じことをやるわけ。ただ違うのはね、ＪＡＣ隊は、とくに大学のＯＢたちは真面目だから、言われたら言われたとおりにするじゃないですか。ところがＲＣＣⅡ隊では、「はーい、わかりましたー」とか言って、実はまったく無視したりするの（笑い）。それがおかしかった。

嵯峨野　社会人をなぜ連れてきたのかということも未だにわからないし、登攀前にルートが決まっていなかった点、あれは残念だったですね。終わった後に、反省会もなかったし。小西さんは「逆層で、５ｍかワンピッチ延ばすのに６時間もかかって、フィンガーホールドだ」と言っていたけど、そんなことないわけよ、あんなでかい岩壁なんか。そこがダメだったら、あっちへ行ったりこっちへ行ったりすれば、駆け上がれるんだから。だからそこら辺のルートの選び方とかね、もうちょっとやってくれたらいいのにと思いました。それから、大阪府大の加納巌さん。剱岳や赤沢山の初登攀とか、結構岩登りをやっているんだよね。だから岩登りは得意じゃない？　そういうのを評価してくれればよかったんですけど。

連続した事故と危機管理

鹿野　エクスペディションという言い方がもともと軍隊用語なんだけれど、軍隊と登山隊の作戦で一番違うのは、軍隊というのはどんなに成功しても消耗率というものを一定数見込むんだよね。それは作戦の大前提であり、当たり前の話じゃないですか。でも、登山隊というのは消耗率を見込んでは絶対にいけないと僕は思っている。ただ、消耗率といっても、調子が悪くてリタ

イアする人が2割ぐらいいるということは、ヒマラヤでは仕方がないと思う。どうやっても6000m、7000mまで行けば、10人いれば2人ぐらいは調子の良くない隊員が出てくる、これはもう仕方がない。だけど、それを殺してはいけない、大ケガさせてもいけないということは絶対に思っていた。やっぱりね、大前提として死んではいけないんですよ。

神﨑　俺なんかも1970年の時は成田が死んで、80年の時は宇部明が死んだけど、自分が死んでも仕方がないかなという思いが、当時はありましたね。成田が死んだときも、登山にはこういうこともあるって。不謹慎だけど、そういう考えだったかな。

鹿野　1970年にはスキー隊のシェルパが6人死んで、JAC隊でも1人亡くなっている。ちょっと整理しただけで、スキー隊のアイスフォールの事故が4月5日、僕らの隊のシェルパの事故が4月9日、平林さんのスリップ事故が4月20日、成田さんの死亡が4月21日です。とにかく半月余りの間に、これだけトラブルがあったわけです。

嵯峨野　このJAC隊のシェルパの事故の時は、俺はベースキャンプにいたんです。それで上がっていったけれど、過酸化水素水、オキシドールのあの匂いがきつくて。背負っていたそれが氷の塊で割れて、それを全身に浴びているんだよ。田村宏明さんが上がってきたときに、「まだ温かいけど、もう死んでますよ」と言ったのを覚えているね。あの温かさと臭いが、いまだに俺は忘れられない。それに、スキー隊のシェルパの6人の遺体を見たときには、ああ死んじゃったんだな……という思いがあり、やっぱりショックでしたね。

神﨑　日大隊でエベレストに行った時は、隊長という責任もあったけど、やはり1人でも死なせちゃいけないという考え方が、頂上へ登ることよりもかなり強かったよね。隊長と隊員で行ったのでは、当然、異なる点もあったかもしれないけど、徐々に死に対する考え方が変わっていった。でも、1970年の時は、自分も含めて死んでも仕方ないかなという意気込みで登っていましたから。

鹿野　あの時期には、死亡事故のほかにも体調不良者が続出しましたね。相当危険な意識障害とか、そういうレベルのコンディション不良者が、4人も5人も出てきたわけですよ。その時に半分くらいの隊員が下に下りたんですよね。僕は上に残っていたんだけど、どうするんだというような感じになった。まだ荷物も上がりきっていないし、混乱とは違うけど、かなり雰囲気

が停滞しましたね。しかも僕らからしたら、高所順応にあれだけ時間をとってやっていたのに、なんで今、こんなにコンディション不良者が出てくるんだろうと。

嵯峨野　鹿野さんは、カンチェンジュンガなんかにも行っているんだから、あの差はなんなんだと思いますか。エベレストの時は、みんなトレーニング不足とか、順応できていないとか……。

鹿野　隊員が無理をしたんだと思う。どこかでお互いの、もっと言えば大学同士のメンツがかかっていたから。

神﨑　やっぱり自分の大学を背負っているから、少しくらい具合が悪くても、悪いって言えないんですよ。明治大学が一番多かったわけで、登攀隊長が大塚さんで副隊長が日本大学の松田さんなものだから、例えば、酸素を調べておけとか食料を点検しておけというのは、どうしたって後輩の、松田さんは日大の俺らに言うし、大塚さんは明治に言うし。だから、食料点検に器具テントに行くと、ばったり日大と明治が鉢合わせし、俺「松田さんに頼まれた」、向こうは「大塚さんに頼まれた」っていうので、いやでも仲良くなっちゃう。そういう、大学間の交流は当然あったよね。でも、いよいよ本番になってくると、それが逆に作用して張り合っちゃうとか。

嵯峨野　そういうとき、本当は誰か止めてくれる仲間がいるんだよな。あいつどうも具合が悪そうだぜ、とか。

鹿野　あの時思ったけど、「おまえ、調子はどうだ」って聞くわけですよ、リーダーたちも。けれど、「いや、ちょっと調子が悪くて……」なんて、誰も言わないもんね。聞くだけムダじゃないかって思った。僕なんかは、そういう意味で誰にも期待されていないわけで、プレッシャーもなかったですから。「ちょっと疲れてます」とか、平気で言ってたけど。

嵯峨野　一番最初にひっくり返ったのは、俺なんだよ。タンボチェかどこかで山に行ったじゃない。そしたら、そこでもう高山病でひっくり返った。そしたら、報道隊員に「若いやつがだらしがない。もうひっくり返った」って、書かれたわけですよ。でもね、成田さんが死んで荼毘に付したり、行ったり来たりしているうちにね、高度に慣れてきました。高所順応がうまくいった連中は、アイスフォールのルート工作をやらなかった人の方が多かったね。錦織英夫さんとか平野真市さんとかは、最初からあそこに取り付いていたでしょ。順応していないうちに。

神﨑　高所順応がうまくいかなかった原因は、調子が悪くても、今言ったように大学を背負ってしまって我慢してしまう。そういうものが、最後に出

ちゃうんだよね。高所順応がうまくいかなかったり、ちょっと不満のあった連中は、その時は言えなかったけれど、登山が終わって酒が入ったりした時に、それが爆発したっていうのも事実だったと思うよ。不満がいっぺんに出たものだから、最後、ベースキャンプの天幕では雰囲気が悪くなってね。そこにスキー隊のシェルパが来ていて、登山隊は殴り合いをしていたとスキー隊にご注進した。そしたら早速、週刊読売に「登山隊、殴り合いの乱闘」なんていう記事が出てしまった。事実は違うけどね（笑い）。

成田潔思隊員の死と高山病

神崎　南壁の撤退には、成田君の死がやはり大きく響いていると思います。隊長も下に下りていて、その時に隙間がちょっとできてしまった。日数的にも、これはもう南壁は無理だなと。俺らの滑落事故とかそういうことも含めたら、まごまごしていたら東南稜からも登れないのではないかという不安感が上層部にも出てきたと思うんだよね。少なくとも、東南稜からは登らなければメンツが立たない、と言ったらおかしいけど。成田君の死とか、俺らの滑落は影響があったと思う。上層部は慌てたと思うんだよ。

隊長が下に行っている間も、俺らは上に上がりっぱなしで結構荷揚げはしていたので、上の隊と下の隊に分かれちゃった。で、上の隊員はもう高所順応ができているから、上の隊員のなかから登頂者を決めた方がいいというのが、住吉さんの意見だった。だけど、大塚さんの頭では初めからね、口には出さないけど、頂上は植村でと思っていたわけですよ。当然、松浦さんも。

嵯峨野　松浦さんは実績があるしな。

神崎　そういう意味で、松浦、植村はもう大塚さんの眼中にあったから、住吉ドクターと意見がぶつかったんだよね。通信機で話していても埒があかないということで、大塚さんと松田さんが下から上がってきた。私はその時、住吉ドクターと一緒にＡＢＣにいた。大塚さんが「住吉ドクター、ご苦労」と手を出したら、「話が決まるまで、俺は握手なんかしねぇ」って、ドクターが言うわけ。それくらい隊全体に不安感のようなものが、成田君の死によって出てきていたのも事実ですね。

鹿野　僕は成田さんが亡くなった時Ｃ２にいたから、彼がＣ１にいるということ自体、あのくらい大きな隊になるともうわからなかった。彼がキャラバンの時に調子が悪かったのは僕も知っているんですが、でも彼だけではない。錦織さん、平野さんをはじめかなり調子が悪い人が何人もいたから、大丈夫かなとは思っていました。大森薫雄さ

東南稜から登頂を目指す松浦隊員。背後に最終キャンプとマカルーが見える（写真＝毎日新聞社提供）

んなど医師が何人もいて、なぜ把握できなかったのかといえば、その通りなんだけれど。

神崎　当時は、まだそれほど高山病が話題になっていなかったよね。

鹿野　だけどそれは、マナスルの経験があったんだからわかっていなければいけなかったと思う。それ以上に、この隊は高所順応になんでこんなに時間を取るのかと思ったくらい時間をとっているわけですよ。2週間以上とっている。結果論だけれど隊員同士のライバル意識、あるいは自分自身で頑張らなければという意識が必要以上に強かったのでは、という気がします。

神崎　高山病の問題は、1970年の時には登山界のなかでも、まだそれほど問題意識がなかったから、なった隊員自身もそれほど気にしていなかった。たとえば、その後の1995年に日大隊の隊長としてエベレストに行き

ましたけど、そのころはもう何かあるとすぐに高山病。だから若い隊員は、ちょっと頭が痛くなると「高山病だから下へ下ろしてください」というような登山隊の雰囲気でしたよ。あまり神経質になっても自分から病気になってしまうというか。そこら辺は、自分自身がしっかりと登山者意識を持たないと、高山病には打ち勝てないと思うんだよね。

鹿野　確かにそういう時代ではあった。後から考えると、高度障害で致命的な事故を起こすというのは、実は6000mくらいまでが一番多いんだよね。あとは8000m以上。チョモランマの下りで酸素が切れてとか。7000m台で高度障害で重い障害が出た例はあまりないんですよ。

もう1つは、あのころは酸素の使い方があまり分かっていなかったかもしれない。行動に使うのか、睡眠に使うのかというのが話題になっていました。7500mくらいから、睡眠にも使ってましたね。

神崎　1970年隊の酸素使用規定でも、7000mから使っていいのは30歳以上で、30歳にならないと7000mから上でも酸素は吸えない。7500mからは30歳以下も使っていいんですが。俺と平林さんが落ちたのが4月20日。俺は5月1日の誕生日で30歳だから、あと10日経たないと酸素を吸えない。平林さんは30歳を過ぎていたから、第3キャンプから酸素を吸っていったわけですよ。俺は酸素なしで行った。2人で落っこちた時は、平林さんは酸素を背負っているから、滑落の時に背負子が食い込んでかなりの制動になった。けれど俺はジッヘルだけだったから、リュックが上で持っていた通信機は無事だった。だからすぐ下に連絡が取れたわけ。平林さんの場合は、背負子や酸素ボンベが制動の役をして、そのために助かったといえば助かった。

鹿野　睡眠用の酸素というのは、新しいボンベはまず使わないんですよ。使い残りが20気圧あるとか30気圧あるというのをとっておいて、毎分0・5ℓとかで使うでしょう。20気圧残っていれば2時間くらいしか持たないんだけれど、それが切れると手足が冷えてくるんだよね。で、付け替えるわけですよ。夜中に2回くらい。とにかく20気圧、30気圧残っているというものを2本も3本も使っていた。そして、これはもう用なしとなると、マジックでペケをつけるみたいなことをやっていた。だから睡眠用として新しいボンベを使うということはまずなくて、逆に行動するときに計算をするわけね。今晩のやつを残しておかなければということで、行動時にも毎分3ℓじゃなく

て2・5ℓにしとけ、とかね。そんな細々した計算をした覚えがあります。

神﨑　松浦さんと植村のアタック時のサポートが、平野、河野（長）、神﨑だったんだよね。俺が一番若いわけ。平林さんが酸素の係だったんだけど、第4キャンプに上がって松浦さんが調べたら、平林さんが上がっているといっただけの酸素が上がってなかったんだ。だから、寝るときに吸えないんじゃないかとか言いながら、定時交信の時に平林さんに伝えたら、「じゃあ、一番若いのには吸わせずに寝かせろ」って言うわけ（笑い）。

嵯峨野　テントのなかで寝るときに、ほかの隊員が吸っていれば、酸素が充満しているってことはないんですか（笑い）。8500mの最終キャンプで、酸素がもれてバーナーの炎が大きくなったことを記憶しているんですが……。

神﨑　俺も最後の8000mのサウス・コルに行くときには吸いながら歩いたけど、反対に、寝るときに吸って、歩いているときにはマスクを着けない方が楽なんじゃないかと思ったよ。実際には外して歩かなかったから、どちらが良いかという結果はつかめないけれど。

それで、平林さんが滑落した日に、第3キャンプにいた平野さんが高山病で調子が悪いと言って下に下りたんです。平野さんが、隊長のいる前進キャンプ（ABC）に着いて大変だという時に、俺の方から「滑落しました」と連絡したから、ABCは大変な騒ぎになったわけです。大森ドクターがすぐに助けに行くからといって、救助隊が6500mから7500mまで、一気に1000mの高度を来たわけです。だけど、この高度で一挙に1000m登ってくるということは至難の技で、大森さんと平林さんはそこにテントを張って、シェルパと3人で泊まり、俺は松浦さんたちに連れられてC3まで下りてきました。

次の日に成田が下から上がってきたんですよ。顔を見ても調子が悪そうだった。でも、仲間だから「調子良さそうじゃないか。俺は上で落っこちちゃったからもう交代だな」なんて半分冗談を言って、それでABCに帰ったその日に成田が死んだんですよ。

夜突然、大塚さんが「みんなテントの外に出ろ」って。俺は第3キャンプにいて、平林さんがちょうど帰ってきた時だったか、えらく月が綺麗な夜だったですよ。俺らが落っこちたことを怒られるのかと思ったら、突然、大塚さんから「今、成田が亡くなった」という知らせが入ったんです。

それから計画がちょっと停滞しちゃったわけで、上層部もこれで頂上

に登れるのかという不安感がかなり出たんじゃないかと思いました。

学術隊の仕事

嵯峨野　エベレストの隊で、気象担当の自衛隊の長田正行さんの仕事は良かったよな。

鹿野　彼は防衛大学校のOBなんだけど気象の専門家で、航空自衛隊の三沢基地にいたらしい。彼がベースキャンプにいて気象予報をするときにびっくりしたのは、普通は午前どうとか午後どうとかなのに、長田さんの予報は30分単位で言うんだよね。僕はびっくりして「どうしてそんなことがやれるの？」と聞いたら、「いや、航空自衛隊はこうなんです」と。つまり、飛行機のスクランブルなどで出るときのために30分単位で予報を出す。だから「いつもの習慣通り私はやっているだけで、別に自信があってやっているわけではなく、これがわれわれのやり方なんです」と。でも、かなり当たったよね。

嵯峨野　何をデータにしていたんだろうね。

鹿野　オール・インディアのニューデリーから来るラジオの天気予報。それと当時は、まだ中途半端なもので、僕もはっきり覚えていないけれど、ファクシミリで５００mbとか３５０mb、高度でいうと５０００mとか８０００mあたりにに相当するところの単純な気圧配置図がファクシミリで来るんですよ。

嵯峨野　高層天気図？

鹿野　そう。彼はそれを見てやっていた。ただね、それでなんで9時半とか言えるのと。名人芸かと思ったけれど、彼はいつもの航空自衛隊のやり方通りにやっていると。もちろん空も見ている。彼はあまり高いところへは来ないで、主にベースキャンプあたりで見ているんだけれど、南の谷からずーっと雲が上がってくるのを見ているんですね。同じ気象担当に井上治郎がいたんだけれど、彼の予報はおおざっぱで「明日はそろそろ悪くなるぜ」って言うくらいなんだから(笑い)。

神﨑　医者もチームにいたけれど、医者らしくなかったじゃない（笑い）。

鹿野　データ採取なんですよ。現場で血液を採ったり、サンプルを採っているだけなわけです。帰国したら、それを専門家に渡す。あと、自覚症状を記入する手帳を書かされたり。当時は学術調査そのものが登山隊の行動に影響するレベルではなかった。全体として、その程度だったということですよね。行動計画と直結していたのは気象だけじゃないですか。

神﨑　学術にしてもドクターにしても、ハイソサエティというか。たとえ

ば、俺は設営係だったから、大塚さんに「ベースキャンプの名前もきちんと考えてつけろ」と言われて、「道楽村」ってつけたんです。そうしたら中島寛さんから「そんな遊び人みたいな名前をつけられたんじゃ、隊員の沽券に関わる」って言われて、「じゃあ中島さん、何てするんですか」と言ったら、「ホモルーデンスってつけろ」と言われて。いまだにそのホモルーデンスっていうのは、俺にはよくわからない。でも年の功だから、「そうですか」と言って、ホモルーデンスというベースキャンプ村の名前にしたけどね（笑い）。

大学山岳部と社会人チーム

神﨑　１９７０年のエベレスト隊の10年後に、俺が80年のチョモランマ北壁に行ったときには、隊員が12人いて10人が社会人の山岳会、俺と伊丹紹泰だけが大学山岳部出だったんだ。それで、俺自身はもう年齢からも当然戦力にはならないから、チームリーダーというようなまとめ役で行ったわけです。そこで、宇部が雪崩で死んで、大学山岳部の隊だったら、あそこで登山をやめて帰りますよ。だけどそこで踏ん張ってもう一度アタックを出した。

アタックの時にも、シゲちゃん（重廣）と尾崎（隆）が行ったわけだけど、夜の5時を過ぎて連絡しても返事が来ない。俺らが下から「シゲちゃん、連絡くれ、連絡くれ」と言ってもね。連絡が来れば、俺らリーダーとしては「危ないから下りろ」と言う以外ないんだよね。多分それを、シゲちゃんたちもわかっていて、連絡をしてこなかったんだと思う。頂上は雲の中だから、もうわからないわけだよ。

そのうちに俺らも、返事がないということは、自分たちでこれは登れる可能性があるとわかっているから返事をしないのだと思ってね。宮下さんが一生懸命「返事しろ、返事しろ」と言っているんだけれど、俺はもう心の中では、返事しなくていいって思っていたね。

でまぁ、中国の時間では夜の9時ですよ。ネパールでは6時ごろで。突然、尾崎から「あと5ｍで、重廣さんが頂上に登ります」という連絡が来たわけだ。帰りはビバークになったけれど、結果的には無事に終わった。あれが大学の山岳部主体の登山隊だったら、もう交信の段階で計画は終わってたね。

嵯峨野　神﨑さん、あのエベレストが終わってから、みんながいろいろなところでビバークするようになったんですよ。８０００ｍを超えても生きられるというのがわかった。誰かがある一線を超えたわけですよ。日本山岳会がエベレストに行った時に、その８００

0mから上を超えたので、次に行く人たちは、彼らが行けるんだったら俺らも行けるよ、と。

鹿野　確かにいっぺん登ったというのは大きいですよ。だから1973年のRCCⅡ隊は、もうそれはないと思っていた。でもそれが同じことを、つまり南西壁をあきらめて、ノーマル・ルートから登るという方針転換をやってしまったという意味で、RCCⅡ隊にも後悔が残りました。あの時も湯浅さんは、その時になって「ポスト・モンスーン初登頂」という言い方をしたわけですよ。実は出かける1年くらい前に、湯浅さんが松田さんとか大塚さんに「いろいろ教えてください。話を聞きに行きます」と言ったのだけど、「報告書に書いてあるから、それを読んでよ」と言われたって。松田さんだったかな。たまたま電話がかかってきた時、僕もルームにいて、それはないよなと思いました。

嵯峨野　俺もエベレストから帰ってきて、2人から言われたんです。日大OBの池田錦重さんからは「エベレストというのは何人いれば登れるんだ」と。その時俺ね、「大人数じゃないと登れない」って言ったのね。「5〜6人で登れるだろ？」「いや、無理だと思いますよ」って。その次に名古屋の原真さんからもね、「少人数で登れるだろう？」と言われたけど、「登れません」と。ああいう感覚が、まだあったね。帰ってきてからも。

　だからそれから何年も経った時に、みんなが少人数で登っているのを見て、あーやっぱり、大学の山岳部というのは先見の明がないなと思いました。

鹿野　大学の山岳部というか、マナスル世代がそうなんだよね。それを引きずっていたんだと思う。たとえば、インドと合同隊でナンダ・デヴィに行ったときには、それはもうなかったもの。日本人は実質、西のルートに5人、東のルートに3人とかですよ。それにインド人が2人くらいずつ。もう1人で動くのが当たり前という感覚。76年のことですよ。

　1人で動くのが当たり前というのは、加藤保男とか高見和成とかはそうなんですよ。今考えるとよくやったよなと思う。大学山岳部のOBだって、強い奴は強い。長谷川良典、寺本正史とか。長谷川は高見と、寺本は加藤と、最後まで一緒にやっているじゃないですか。こいつら強いよな、と思いましたよ。

嵯峨野　鹿野さんのリーダーシップが良かったんじゃないの（笑い）。

神﨑　俺もエベレストには4回行ったけど、頂上へは行っていないわけ。必ず聞かれるのは、頂上へも行けないで

悔いはなかったか、ということを聞かれるんだ。だけど、１９７０年の時にはサウス・コルまで行って、上を見て、行けと言われれば、これは行けるなという変な自信もあったから、全然悔いはないんだよな。もし、山頂にお前が行けと言われたら、俺でも行く自信はあったなと思うから、悔いはないわけですよ。80年は、最初から隊をまとめようと思って行ったから、何も頂上へ行かなくたってね、悔いはなかったわけだけれど。

こうやってエベレストから50年が過ぎて今考えると、登った人というのは黙っていてもずうっと栄光が残るわけです。だけど、成田が死んだことを乗り越えて頂上へ行ったこととか、チーム力でエベレストに登ったというようなことを、もう少し、この50年経った今はアピールしておきたいと、だんだん考えが変わってきました。ただ登った登ったというだけじゃなくてね。隊員一人一人の努力や協力の積み重ねで、その登山隊が成功した事実を伝えたいと思うようになりましたね。

鹿野　でも、帰ってきてから、また集まろうよとか、どこかへ一緒に行こうという雰囲気にはなかなかならないんだよね。それはなぜかなというのはありますけどね。ナンダ・デヴィ隊からは80年のチョモランマ、84年のカンチに大勢行っているし、その連中は今でも集まっていますよ。年に2回くらい。だけど最近は集まるのは通夜か葬式、こればかりは仕方ないけれど。何もない時に集まろうぜというけれど、そういう機会がなかなか作れない。

嵯峨野　エベレストはね、年寄りから若いのまで幅が広すぎたんだよね。

鹿野　人数も多すぎたしね。この隊をベースにして次へ、という形にはなかなかならなかったんだよね。

嵯峨野　でも、鹿野さんなんか、次の隊を組織していろんなところに行ってるじゃない。

鹿野　それはね、このエベレスト隊は自分にとっては反面教師なんですよ。こういうことをやってはいけないよねということがよくわかって。じゃあ、どうすればいいかということはよくわからないけれど。１９８０年のチョモランマ隊も半分くらいはナンダ・デヴィのメンバーじゃないですか。それも重廣、高見、加藤というのが助っ人ではなくて、中核のメンバーとして入っていたでしょう。そういう意味では、一般の山岳会出身だからどうだとか大学のＯＢだからとかいうのは、70年代後半くらいでもうなくなったと思いますね。

嵯峨野　社会人山岳会が参入したということは、彼らがどんどんヒマラヤへ行けるようになったということです

よ。

鹿野　１９７０年というのは、日本山岳会という組織のなかで、大学のＯＢとそうじゃない人、そういうことが意味を持っていた最後の時期でしょうね。

神﨑　ただ、この日本山岳会隊の隊員には、個人的にも懐かしさはあるよね。最近俺が考えるのは、このエベレスト50周年もそうだけれど、日本山岳会自身が、もう少し自分の会のエベレスト登山として扱ってもいいと思うんだ。というのは、ある会員から「日本山岳会はエベレストに行ったことがあるんですか?」と聞くような会員がいるわけです（笑い）。だから俺は、良きにつけ悪しきにつけ、その時代には一生懸命やったのだから、それを登山の普及に結びつけるような、エベレスト登山をひとつのきっかけにして、日本山岳会は社会にいい意味でアピールするべきだと思うんだ。あれはもう登山方法が古いから正面に出さなくていいとか、行った隊員同士で懐かしんでいればいいんだというのではなくてね。もっと登山の普及、振興につながるようなことを、日本山岳会が組織としてアピールすべきだと思うんだよね。

鹿野　ナンダ・デヴィの計画をスタートさせた時、僕まだ32歳でした。当時の会長は今西錦司さん。ナンダ・デヴィ計画を理事会に持ち込んだら、今西さんがひと言、「モラル・サポートは惜しまん」って言うのね。どういう意味かと思ったら、要するに勝手にやれということ。意訳すれば、金は出してやらん、お前ら勝手に金を集めて行け、その代わり口は出さん、というわけですよ。それで、梶正彦と僕とで「よし上等だ。俺らでやろうじゃないか」と。自分の計画をやるには日本山岳会というのは、実はすごく使い勝手のいい組織だったんですよ。要するに会員になればいいわけだから。だから、１９７０年のエベレスト隊のおかげで、次の展望が開けたという人は確かにたくさんいるはずなんですよ、山登りの世界に。たぶん神﨑さんもそうだろうし、僕もそうだし、植村さんも小西さんもそう。ちょうど僕らがナンダ・デヴィに行った時に、小西さんたちはジャヌーの北壁に行っていた。彼らの方がシーズンの上では早いから、ジャヌーの登頂に成功したというニュースが僕らの方へ入ってきました。

　そういうことで、日本山岳会隊としてエベレストに一度は登っておかなければ、ということもあったけれど、この遠征から後へ、ずっとつながってきた部分というのはありますよね。僕もおかげ様で偉そうなことを言っているけれど、これがなかったら次の登山へは展開できなかった。

座談会を終えて、右から神﨑忠男、鹿野勝彦、嵯峨野宏の元エベレスト登山隊隊員たち

神﨑　鹿野さんの話は信憑性があるから受け取ってくれるんだよ。俺がね、滑落して助かったとか、80年に心筋梗塞になっても生きて帰ったなんて言うと、事実をそのまま話してはいるんだけど、聞く方は神﨑さん自慢話ですか、で終わっちゃうんだよな。それはもう人徳の差（笑い）。

鹿野　そんなことはないでしょう。神﨑さんは日本山岳会も日山協の面倒も見てきた。僕自身は東京にいなかったということもあるけれど、そういうことを一切やらずに来た人間だから。でも、その日本山岳会という組織がなかったらいろいろなことはできなかった。僕らがやったことの後への影響ということを考えたときに、今も一番そう思うのは、重廣みたいなやつは、僕が引っ張って来なかったら、すぐには日本山岳会に入ってこなかった。いつかは入ってきたかもしれないけど。加

藤や高見は残念ながら早く死んじゃったけど、そういう次の芽が日本山岳会のなかに少しずつ育ってきたんじゃないかと。小林政志とか磯野剛太なんかもそう。

やはりね、人には向き不向きがあるじゃないですか。僕はプロジェクト・チームのリーダーはできるけれど、オーガニゼーションのリーダーシップはとれませんと言っている。やはり日本山岳会は会員が何千人といて、いろいろな人がいるわけじゃないですか。それをまとめていくなんていう根性はないです（笑い）。

エベレスト登山隊と今後に向けて

神崎　1970年当時に、登山がこんな風に変わるなんていうことはわかっていなかったけど、あれから50年経ってみて、登山界や登山が大幅に変わったわけだ。オリンピックにスポーツ・クライミングが入るなんて、当時は想像もしていなかったし。

今エベレストの話を持ち出しても、古いとか過去の話で終わっちゃうけど、その時代のその時というのは、それが最高で一生懸命やっていたわけだから、しっかりと見てもらって、若い世代につないでいってもらいたいですね。日本山岳会のエベレスト登山隊として、日本山岳会がもう少し意識を持ってもらえれば、と思っています。

鹿野　1970年の日本山岳会隊について言えば、うまくいったかどうかは別として、評価するということなら、まず目標が何だったか考えるべきです。目標は、少なくとも計画のスタート時は南壁が第一目標だった。東南稜は登れたとしても当時としては第6登。今は4000人以上登頂している一般ルートでしょ。第2登のスイス隊は東南稜からの登頂とローツェと両方を登っているじゃないですか。それから、中国隊はチベット側から登っている。アメリカはウェストリッジを登っている。インド隊は9人頂上まで登っている。一方の日本隊は4人登ったというだけ、それはなんですかという話じゃないですか。感覚的には。登山終了後に、南（南西）壁をなぜ登れなかったのか、本当に登ろうとしたら何をすべきだったのかということを、もうちょっと真面目に話し合った方が良かったと、そう思いませんか。そういう総括の会議って一度もなかったよね、帰ってきてから。まあ、40人もいれば仕方ないかもしれないけどね。本当は隊としての総括というか、評価をきちんとやらないといけなかったと思います。

神崎　今鹿野さんが言ったように、インド隊は9人も登った、そして、ほかの隊はいろいろなルートから登った。

じゃあ、われわれの40人の隊の特徴は何かということを考えたときに、渡部節子を頂上に立たせた方が、日本山岳会の登山隊の特徴になったんじゃないかと思うんです。ただ時代がまだそういう時代じゃなかったんだね。その5年後に田部井淳子さんが登ったけど、俺はあそこで節子が頂上に立っていれば、登山界が、とくに日本の場合はね、かなり変わったんじゃないかなと思いますね。

鹿野　1975年に田部井さんが登頂したときは、本人の力はもちろん、やはり機も熟していたんでしょうね。ただ結論としては、自分はこの隊に参加して良かったと思っています。ヒマラヤの登り方という意味では、本当に多くのことを学んだし、それが自分自身の以後のヒマラヤでの山登りにつながったというのも確かですね。

嵯峨野　山岳会はクラブとしての良さがあるわけだから、こういう自由な雰囲気、みんなが集まれるような雰囲気を大切にしてほしいですね。エベレストの登山隊があって、その後もずっとつながっていると思うんですよ。だから、その裾野をもっと広げて大事にしないといかんなと思います。エベレスト隊は、いいスタートになったと思うんだよね。マナスル、それからエベレスト、その後のナンダ・デヴィやカンチェンジュンガのヒマラヤ縦走。いろいろな岩壁の登攀とかも拡大していったし。山への思いが経験を積むことで、それが若い次世代にステップアップしながら継承していってほしい。

神﨑　2019年、ワールドカップでラクビーが盛り上がって、「ワンチーム」という言葉が流行りました。当然、ラクビーに限らず登山隊にも「チームワーク」という考え方があって、それがすごく重要だと思います。50年の節目の年に、1970年のエベレスト登山隊はこの「チームワーク」で挑み、登頂したとも言えないでしょうか。

鹿野　JAC隊がエベレストに登頂して50年経ち、日本山岳会がもうすぐ120周年を迎えます。そこで考えるのが、日本山岳会という「場」です。日本山岳会は、われわれが使ったように、使いたい会員がいろいろな使い方をできる「場」であるから、そういう自由さ、使いたい人がうまく使えるような自由な雰囲気を残していってほしいというのがあります。

もう1つが、日本山岳会の存在価値のとても大きなものが、アーカイブスとしての機能だと思うんですよ。つまり、今創立から百十何年経っている。その歴史のアーカイブ。例えばこの座談会が『山岳』に残るように、いろいろな記録を、記録としてきちっと残していくという機能が日本山岳会にはあ

ると思います。さらに僕がやりたいのは、文字だけではなくそれにプラスして映像のアーカイブスを充実させること。日本山岳会には、ヒマラヤ登山だけ考えても貴重な映像がいっぱいあるんです。ナンダコットから始まって、マナスルがあって、この70年のエベレスト隊もそう。ただ困るのが著作権の問題なんですが、少なくとも会内部での限定でも、自由に見られるようにならないかと思います。

神﨑　私も国際山岳連盟を10年間やってきて、外国と日本山岳会を比較するわけではないけれど、イギリスのアルパイン・クラブは、国内の山岳界をしっかりと支えているわけです。そういう雰囲気が、今の日本山岳会には乏しいように感じますね。それと、日本はあれだけ世界のいろいろな山に行っているのに、なんで国際貢献をしないのかということも、国際山岳連盟でたまに聞く。だから、やはり日本山岳会の名でヒマラヤ登山をした人たちには、もう少し国際理解みたいなものを持ってもらいたいなと思いますね。

〈編集部註〉

今回の座談会は、登山から50年を経過したことで、当時の隊員のなかから3人の方に出席していただき、忌憚のない意見を述べてもらいました。その際、登山隊のリーダーだった方々への批判的な意見も多少含まれていますが、そうしたリーダーの方たちは、ほとんどが亡くなられており、反論の機会もありません。その点、公平さに欠けているかもしれませんが、記録として残しておくという点を考慮して、掲載しております。

（『山岳』編集委員会）

＊2020年6月19日　日本山岳会集会室にて収録

特集「エベレスト登頂50周年」

登山許可の取得と登頂への想い

平林克敏

エベレスト委員会発足

「会報」228号（1963年8月）に「エヴェレスト峰登山計画について」という、当時の日本山岳会ヒマラヤ委員会委員長・三田幸夫副会長の所感が述べられている。

〈大きな登山目標に対して、万全の態勢を整えた登山隊を送り出すためには、どうしても全日本的な基盤の上に立ち、優秀な人材をよりすぐって計画されたものでなければならぬと考えられます。（中略）

マナスル登頂以後、日本の登山界としては、七、〇〇〇米の経験者はかなり増えたとはいえ、八、〇〇〇米以上の高処に宿営した経験者は皆無という現状であります。

随いまして、この計画を完遂するためには、登山装備全般は勿論酸素補給器、通信機、高処医学、高層気象等あらゆる分野の総力を結集して万全の準備を整えると共に、全日本の優秀な人材を網羅して、考え得る第一級の登山隊を編成しなければならないことは当然のことであります。〉

と記述されている。

1965年はインド隊がすでに許可を取得していたので、1966年に実施することを決定したと述べ、これに要する経費は外貨6万4400$を含め総予算7000万円を計上済みとされていた。その後、1963年の10月3日の理事会で旧ヒマラヤ委員会を解散し、新たにエベレスト登山委員会に再編成することが決定された。委員長は槇

1934年、大町市生まれ。県立大町高校から同志社大学を経て、日本ダンロップなど実業界でも活躍した

有恒名誉会員にお願いすることになった。

私がサイパル初登頂を終え、西ネパールから東へ650kmの横断を済ませ、帰国して間もなく三田副会長名の書簡が届いた。「相談したいことがあるから……」との文面であった。さっそく上京し、お目にかかると、「松田君から同志社大学隊の活動状況は聞いているが、サイパル遠征は、山もさることながら渉外・交渉を含め大変でしたね」と、労いの言葉があった。この経験を生かし、松田雄一君と2人でエベレスト登山実行委員会の「企画・総務」全般を見てほしいとのことであった。

この日から間もなくして、槇有恒名誉会員を委員長に18名から成る、錚々たるメンバーで構成されたエベレスト委員会が発足した。1963年11月7日のことであった。この委員会は実行委員として70名程度の会員を選抜していたが、とりあえず企画委員として村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、住吉仙也、宮下秀樹、岩坪五郎、平林克敏の7名に委嘱を決定していた。

その後、初めての組織委員会が開催され（1964年11月2日）、エベレスト実行委員会の業務分担が次の通り決定された。

企画　村木以下7名
企画・総務　松田、平林
装備　大塚
食料　宮下、岩坪
医療・酸素　住吉、（平林）

なおこの日までに、登山隊の隊長は緊急理事会（1964年6月23日）において松方三郎に決定されていた。

私は松田雄一とともに松方隊長、大塚登攀隊長を支え、昼夜兼行でエベレスト計画に取り組み、特に高層の気象条件を加味した登山戦略の構築、物資の輸送と配備、高所と

酸素問題など、登山運用の科学を中心理念におき、新しい８０００ｍ峰登山のあり方を内外に示したいとの考えを常に心に秘めて推進した。

心ある隊員たちは、私のエベレストに対する想いをよく見ていた。さまざまな事態に対して適切に判断していく姿は、あらゆるリスクに直面しても「安心」との安堵感が仲間たちにあったのだと思う。日本における準備の段階や酸素機器の開発、富士山でのテストなど、重要な装備品の調達や改良・改善をともに進め、その過程で培った信頼のようなものが多くの隊員の中に定着していったのだと思う。浜野、平野、加納、神崎ら準備の段階から支援してくれた仲間たち、輸送では中心的な働きをしてくれた錦織、成田、植村ら、数えきれないほどの仲間たちの協力が常にあった。クレバスを渡るハシゴが不足すると、丸太を自分で担いで氷河を登り、一番危険な場所は先頭に立って若い隊員とともにルート工作を進め、氷河の崩壊に身をさらし、すべての隊員やシェルパたちの安全を最優先に登攀活動を進めた。私の身体は意識しなくても、過去の経験から自然に反応することができるようになっていた。

隊の上層部はこのことをよく見ていたのだと思う。だから、後にスリップ事故を起こして自らが登頂隊員になることを辞退しても、誰一人私を登頂隊員に選んだ隊長の決定に反対する者は出なかった。幸いなことに、滑落のダメージはまったくなくピンピンしていたにもかかわらず、私自身は申し訳ない気持ちでなんとなく負い目があり、２日ほど落ち込んでいた。しかし、登攀隊長から「第１次登頂隊の２人を支え、成功に導くことができるのはお前しかいない」「やってくれ、頼むぞ……」のひと言ですべてが決まった。ほかの隊員たちの高所順応がはかどっておらず、遅れていることが残念であったが、５月10日～13日、上層の気象条件が最適との予報が出された以上、登頂はそこに合わせる以外になかった。

こうした気象条件をふまえ安定する登頂予定日まで、10日ほどしかなかった。しかし、成田隊員の死、意識障害、記憶喪失、失明、スキー隊シェルパ６人の死亡など、折り重なる不測の事態により、登頂計画は半分にも達していないありさまであった。高所順応ができて、動ける隊員は７名程度であり、そのうち２名は学術隊員の河野と安藤であった。そのうえ、８０００ｍのサウス・コルには、10kgの荷揚げもできていなかった。

７５００ｍ地点でルート工作をしていた私は、隊長に呼び戻され、この事態の収拾に２日間、徹夜で対策案をまと

アイスフォールのルート工作では、アルミ合金製のハシゴがとても役に立った

めた。明らかに登攀隊長と松田、私、松浦、藤田らリーダーのミスが露見していた。ベースキャンプ（BC）は、休息所と作戦本部であっても、酒を飲むところではないはずだ。酒嫌いの私の怒りが爆発した。

私は大荷揚げ作戦を7日間で決行する案をまとめ、翌日から行動を開始させた。荷揚げ計画、隊員の配備、登頂の最適化計画と酸素機器の配分など、検討した重い資料の入ったザックを背負い、前進基地へ上がった。

困難を極めたネパールとの折衝

大塚登攀隊長ははじめから、私と植村君を第1次登頂隊員に考えていたようだが、私のスリップ事故の収拾に大変苦慮していた。それでも、次の点から私を擁護してくれた。それは登山の本場、イタリア隊のアピ峰での大遭難による敗退と、国の威信をかけてサイパルを目指したオーストリア隊の敗退である。この西ネパールの2つの雄峰を、日本人として見事に初登頂した私の登山歴を高く評価していた

ことと、さらに欧州の列強を凌ぐ「成功例を持っている人は強い」という隊長の見識によるものであった。

同志社大学隊のアピ初登頂（1960年5月10日）は、ネパール・ヒマラヤで日本隊のマナスルに次ぐ2番目の快挙として、日本人の誇りを示すものであった。さらに同年5月24日には慶應隊のヒマルチュリ初登頂と続き、日本のヒマラヤ登山は1958年、京大のチョゴリザ初登頂を含め、この3つの登頂実績が、世界の登山界から注目を集めていたのである。

酸素呼吸器の進歩もめざましかった。最新の酸素呼吸器を装備したエベレスト隊の隊員たち

そうした矢先に、エベレスト登山隊を派遣する日本に対する各国からの反応は複雑で、外務省との折衝は困難を極めた。その中でもエベレスト登山に関する日本山岳会の方針やスキー隊との調整など多くの課題を残していた。この解決のためネパール政府との折衝に、私は特命事項を携えて先発隊員として1970年2月7日に日本を発った。

三田副会長が半額のロイヤリティを支払って日本山岳会に認められていた1966年のプレ・モンスーン期の条件は、「南壁を登るルート」以外、ほかの選択肢はなかったのである。したがって、スキー隊との調整はもとより、南壁だけからの登頂を目標としていた日本山岳会のリスクは余りにも大きかった。そこで2度におよぶネパール政府高官との折衝を行ない、「南壁を登り、安全を確保するためには東南稜からのサポートはぜひとも必要であること」を何度も主張し、登山の安全性を説き、お願いしたが、ネパール側の了解は得られなかった。日本山岳会はあくまで南壁ルートからの登頂が許可の前提であるとし、許可の変更は、今さら困難と言って譲らなかったのである。

3日目の会談の折、登山担当課長のNarendras Biknam Shah氏から、思いもしなかった次のような提案があった。「ネパールには世界最高峰がある。しかし、ネパール人でその山頂に立った者はいない。優秀なシェルパを一緒に山頂に連れていっていただけないか」と懇願されたのである。さらに「今後、ネパールは国家の方針として多くの登山隊や観光客を受け入れなければならないが、そのためにネパール人のサガルマータ（エベレスト）登頂者はぜひ必要だ」と、それこそ真剣に要請されてしまった。私は同情はしたが、少し時間がほしいと答え、内部の検討に託した。登頂隊員ははじめから決めておくものではなく、登山計画の進行の中で最適な人を登攀隊長とリーダー会で決定するものだから、この原則は変えられないと話したが、先方は了解しなかった。

こうした要請に対して、駆け引きをしてJACの条件を認めさせるという考え方は、私の信条として持ち合わせていなかった。登山の原則的な考えを説明し、登頂者を選ぶ困難さについて説明した。しかし、この要請は登攀隊長やリーダーたちに話すのではなく、松方隊長には話しておきたいと考えていた。なぜなら、このことはネパール国王の重臣たちの関心事になると考えたからである。

本隊がカトマンズを出発する時、大塚、松田と私の3人で挨拶に行くと、再びこの要請が出されてしまった。3人で腹のうちに納めて対応することにしたが、大塚登攀隊長は「シェルパのことなど考えなくていいよ」と軽くあしらっていた。私は少し腹立たしかった。私の過去の登山や調査の長い遠征で考えていたシェルパに対する対応に、大きな隔たりがあったからである。

隊員の力の結集

いずれにしても、私の折衝はすべて思い通り完結させることができた。「南壁隊をサポートする」東南稜からの正式登頂許可も認めさせ、南壁隊のロイヤリティで2つのルートからの登攀を了解してもらったのである。私の渉外活動は思うように進んだと自負している。

ここまでくると、隊員のそれぞれの力量が明らかになってきたが、誰がどこの学校出身で、どんな登山歴を持っているかなど、何ひとつ問題にならなかったし、知る由もなかった。そこで行動し、機転をきかせ巧みに働いている姿が、その隊員のすべてであり力量であった。地が出てこそ共に山に行けるからである。

登攀隊長の出身校の隊員が多すぎるなどという声も日本での準備期間中には耳にしたが、私は問題にしていなかった。中心になって進める隊長をおもんぱかって、一生懸命やってくれれば、それは当然のことで、とやかく言うことではないとはじめから思っていた。そこには、登攀隊長の資質を知る人間学が潜んでいることくらい、大塚が知っていると思っていたからである。私は実にきついアドバイザーであり、大塚も松田も藤田もそれを認めていた。年齢的にこの3人が私より2～3年上で、ほかの年長者は、医師の住吉、中島の2人だけであったから、登山活動はもとより、全体の運営について、私の見解に口をさしはさむことはなかった。

あとは、前述の計画通り実行することだけであった。私は7000mの第3キャンプで総指揮をとり、大荷揚げ作戦を徹夜で実行させた。この時の隊員たちの底力は表現に余りあるものであった。7000mのC3、7500mの

2次登頂隊員として5月12日に登頂した平林克敏隊員
（写真＝毎日新聞社提供）

C4を直接越えて、サウス・コルへの1・2tにおよぶ荷揚げを夜を徹して敢行、登頂態勢を整えたのである。

学術班の河野は第1次登頂隊のサポートに、気象担当の安藤は第2次登頂隊、私のサポートを担当してくれた。大塚登攀隊長からは、登頂相手は8000mのサウス・コルに行ってから「調子の良い人を選び登頂してくれ。すべて任す」という全隊員の前での発言があった。私に任せると、ネパール高官との約束を守ってくれるという期待感もあったのだと思う。それをいち早く察した私は、シェルパ頭のチョタレイを選び、登頂することにした。

しかし、この決定はいまだに心に残る傷痕となっている。吹き荒れる8000mのテントの中で下した決定であったが、河野隊員の言葉が妙に気になるし、良い会話であったとさえ思っている。

河野はこう言ったのだ。「私などは真逆。登頂隊のサポートをして8500mの最高キャンプまで登れるとは夢にも思っていなかったんです。でも、サポートが終わってサウス・コルまで戻ってくると、やはり登頂してみたいと思うようになりますね。今は叶わぬこととわかっているつもりですが、不思議ですね、山登りって……」

「そりゃ、そうだよ」と、横から安藤隊員。

3人の日本人と1人のシェルパを、登山隊員や関係者は言うまでもなく、数えきれないほどの協力者の手によって、世界の最高峰へと押し上げてくれたのである。

エベレスト登山の成功は、こうしたさまざまな人々や隊員たちの努力の結晶により得たものであり、当時の日本人の誇りとするところでもあった。

同じ年に、大阪万博EXPO'70が開催されていた。頂上の石と、私が頂上に立つ全紙大の写真は、マイクロフィルムとなって5000年のタイムカプセルに納められ、大阪城本丸の地下に埋蔵されている。

私が連れて登ったシェルパ頭のチョタレイは、ネパール人としてサガルマータ（エベレスト）の初登頂者となり、頂上で私が撮った「国王ご夫妻に献ずる」と題した彼の雄姿は、ネパール国民を沸かせた。彼はその後、王宮を守る近衛師団の一員として活躍した。

エベレスト登山隊関係者全員の50年の月日は過ぎても、私たちの「情熱と行動」の思想は若者たちに受け継がれ、さらなる未来を拓いていってくれるものと確信している。

なお、エベレスト登頂50周年の記録として、『エヴェレストが教えてくれたこと』と題する自著を山と溪谷社から昨年上梓した。ご一読いただければ幸いである。

特集「エベレスト登頂50周年」

日本人とエベレスト　50年のかかわり

池田常道

最高峰への許可来る　1966年

日本山岳会は、1966年春にエベレストに挑む登山許可を与えられた。世界最高峰ともなれば、たとえ初登頂でなくても世の耳目を集める。日本山岳会が56年、マナスル初登頂に成功してから10年目のことであった。マナスル以降、日本人が行なった7500mを超えるヒマラヤ登山はチョゴリザ（58年）、ヒマルチュリ（60年）、サルトロ・カンリ（62年）、ギャチュン・カン（64年）と順調に成果を挙げており、日本山岳会プロパーの遠征は失敗に終わったヒマルチュリ（59年）ぐらいしかなかった。ほかはマナスルの影響を受けた単一団体（AACK、慶應大学、全日本山岳連盟）による成果である。

当時エベレストの状況は、以下のようなものだった。1953年、英国隊による初登頂が、第2次大戦前から7次にわたって挑戦した末に果たされた。その3年後にスイス隊が、52年の春と秋にわたった挑戦の失敗を乗り越えて第2登、併せてローツェの初登頂も成功させた。60年には中国隊が、英国隊の果たせなかった北方ルート（ノース・コル～北東稜）を初めて登り、63年にはアメリカ隊が西稜から北壁を登ってサウス・コルへ下るという偉業を成功させた。中国隊と同じ60年に初めて挑戦したインド隊は、2度の失敗を経て65年に登頂を果たしていた。

徳岡孝夫著『ヒマラヤ　日本人の記録』（毎日新聞社、1964年1月刊）の最終章「これまで、これから」には、

日本人初の世界最高峰登山に対する岳界の声が収録されている。

「初登頂だけがヒマラヤの魅力ではない。エベレストは、依然として登山家のあこがれである」（槇有恒）という正論の一方に「登頂できても、スマートさが欠けていれば日本登山界の不名誉になろう。いたずらに膨大な資金を投じてのお祭り騒ぎはやめ、登山者の〝初心〟を忘れずにやってほしい」（中尾佐助）など辛口の意見もまじっている。

しかし、日本山岳会の挑戦は、ネパールの登山禁止措置によって中断を余儀なくされてしまう。解禁を予告してからもネパール政府は具体的な登山規則を発表せず、したがって、正式な登山許可も発給されなかった。このため、69年春に遠征を実施することはかなわず、ネパール入りして、66年の許可が有効かどうかを確かめる必要が出てきた。

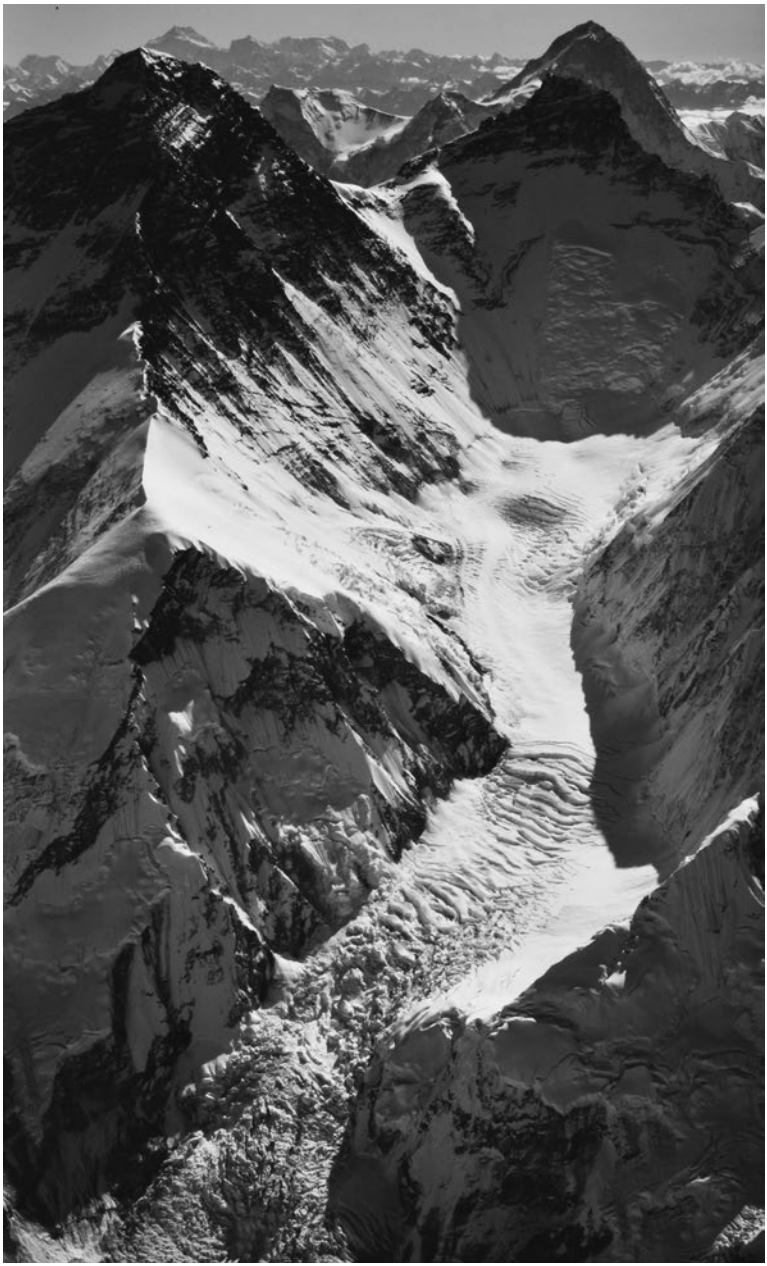
このころ、のちにマナスル西壁隊を率いることになる高橋照がプロスキーヤーの三浦雄一郎を擁して、70年春にサウス・コルからスキー滑降する許可を取得していた。登山許可ではないにしても、同時期に2つの日本隊がエベレストに向かう異例の事態になった。当時ネパールは1山1隊の原則を守っていたから、日本山岳会は南壁（南西壁）を登るという条件で許可を得たのだが、そのことは国内では明らかにされなかった。69年4月発行の『岩と雪』14号に寄せられたアンケートでは、目標をサウス・コルよりの登頂と回答し、余裕があればバリエーション・ルートからの登頂（ルートは決定していない）と書き添えてある。隊長およびメンバーは未定としている。南西壁への挑戦が公表されたのは、もっと後になってからだった。

南西壁に歯が立たず　1970年

南西壁をやると言っても、当時の日本山岳会にヒマラヤはおろかアルプスの壁を経験した者さえ多くなかった。そこで、外部の人材を登用する案が生まれ、壁の登攀に通じた小西政継を筆頭とする社会人クライマーに声をかけ、助っ人として南西壁に投入した。

春の第1次偵察隊（藤田佳宏隊長）がアイスフォールを抜けて南西壁を偵察したのを受けて、秋の第2次偵察隊（宮下秀樹隊長）はモンスーンがもたらした積雪にも助けられて一気に8000mラインを突破した。しかし、翌年春の本番では寡雪と落石に悩まされて思うようにルートを延ばすことができず、前年秋と大差ない高さから敗退するしかなかった。

この隊がたどったルートは、南西壁上部を扼（やく）するロック



エベレスト頂上から東南稜と南西壁、ウェスタン・クウムからアイスフォールまでを俯瞰した空撮写真（写真＝大森弘一郎提供）

バンドを左側から越えて西稜に出ようとしたものだったが、その後の各隊は、ロックバンド基部を右斜上している雪田をたどってロックバンドに取り付こうとした。ところが、このラインで行くと高度は稼げるが、ロックバンドは右に行くほど高さを増しているので、標高の高い地点から攻撃を始めなければならないハンデがあった。

なお、東南稜隊では5月11日に松浦輝夫、植村直己が登頂、翌日も平林克敏とシェルパのチョタレイが頂上に立って、かろうじて面目を保った。日本人初のエベレスト登頂は大々的に報道されたが、14年前のマナスル初登頂のような熱狂はなかった。

南西壁はその後も挑戦を跳ね返す。71年のN・G・ディーレンファース国際隊は、西稜と併せて初登攀を狙ったものの、リーダーシップの混乱と隊員同士のエゴの衝突などで8250mまでしか行けなかった。経験者として日本山岳会隊から派遣された植村直己と伊藤礼造は、前線を譲らない英国のドン・ウィランズとドゥーガル・ハストン（両者とも70年のアンナプルナ南壁初登攀で実力を示していた）を献身的にサポートした。

翌年には、K・M・ヘルリヒコッファーの欧州国際隊が、8350mまで達したというが、結局敗退に終わった。70年にナンガ・パルバット南壁を登ったオーストリアのフェリクス・クーエン、アドルフ・フーバーらヒマラヤの壁を経験した猛者たちも補給が続かずに、結局敗退するしかなかった。

73年秋のRCCⅡ隊（湯浅道男登攀隊長）もほぼ同じ地点で引き返した。この隊では加藤保男と石黒久が初めてサウス・コルから秋の登頂を果たすが、これも日本山岳会隊同様、本来の目標を投げ出した末の成功で、クライマーの間に「頂上よりもルートを……」という批判が巻き起こった。RCCⅡ隊の場合、日本山岳会隊があっけなく南西壁から引き下がったふがいなさに反発して結成された経緯があっただけに、頂上に登って格好をつける形になったものと受け取られ、その後味は芳しいものではなかった。

70年の初挑戦から5年後、72年秋に一度失敗していたクリス・ボニントンは、2年前のアンナプルナ南壁メンバーを核として新たな隊で挑戦、ロジスティクスを根本から練り直して初登攀に成功した。71年から73年にかけて各隊が失敗した右手のラインは採らず、ロックバンドを貫くガリーを登ってイエローバンドに最終キャンプを上げ、南峰のコルに抜けて頂上を陥れたのである。このガリーは、山田圭一撮影の空撮写真にはっきり写っており、ボニントン

は可能性を見て取っていた、と後日語っている。

ところで、エベレスト南西壁を最初に構想したのは誰だったのか。日本山岳会隊の某氏は「われわれですよ」と言ってはばからなかったが、実は67年ごろ、ノルウェー、スコットランド、アメリカなどから集まったプライベートな国際チームがその発端となっていた。ヒマラヤ初見参の彼らは英国のベテランJ・O・M・ロバーツに相談して、まずダウラギリを登ってからエベレストに挑むつもりでいた。しかし、チームがまとまらないうちに、ロバーツがディーレンファースに引き抜かれて国際隊の副隊長になったというのが真相らしい。実際、71年の隊には最初のチームからオド・エリアッセンら6名が参加している。当時、発表された国際隊のメンバーを見て、日本にはなじみの薄い北欧クライマーが多いのを奇異に感じた記憶があるが、実際はそんなわけだったのだ。

なお、この年の春には、女子登攀クラブの田部井淳子がサウス・コルから女性初登頂を果たし、中国女性の藩多もノース・コルから頂上に達した。前年春には同人ユングフラウ隊の中世古直子、内田昌子、森美枝子がマナスルで、女性として初めて8000m峰登頂に成功していた。

無酸素登頂とアルパイン・スタイル　1977年―80年

70年代前半の話題を独占した南西壁が登られてから、エベレスト登山は内容の洗練化へと向かい始めた。1977年春、キース・ウッドフォード率いるニュージーランド隊8人は、ベースキャンプから上でシェルパを使わず、酸素ボンベもなしにサウス・コルの通常ルートに向かった。4月25日にローツェ・フェースの7570mに第5キャンプを設け、マイク・マホニーとマイク・ブラウンがコルに達したが、この時点で高所での活動がすでに65日間を数えていたため疲労が激しく、それ以上の行動は難しかった。しかし、これは第2次大戦前にノートンやスマイス、ウィン・ハリス、ウェイジャーらの先駆者が示した頑張りに匹敵する挑戦であり、エベレスト登山に新たな意味を付け加えようとする試みだった。

エベレスト初の無酸素登頂はその翌年5月、ラインホルト・メスナーとペーター・ハーベラーによって成し遂げられた。ニュージーランド隊のような全員無酸素ではなく、酸素を使うチームに参加したうえでの登頂で、シェルパの助力も得たうえでの成功だったが、長年論議されてきた無酸素登頂の壁を突破してみせた意義は大きい。メスナーは2年後の6月、北面ルートを単独、アルパイン・スタイル

で登って「エベレストにおける究極のソロ」にも成功する。
ここで、８０００ｍ峰の無酸素登頂と言っても、エベレストからマカルーまでの５座とチョー・オユー以下の９座とは意味が違うことをお断りしておく。しばしば言われることだが、初登頂に際して酸素補給器を必要としたものが前者、もともと酸素を使わずに登られたものが後者である。だから、後者のうちマナスル、ガッシャブルムⅠ峰、シシャパンマの３座は、酸素を吸って登られたけれども、使わなくても登頂可能な高さなのだ。もっとも、ルートの長さや難しさによっては酸素が使われる場合もあった。７７００ｍのジャヌーが酸素を使って登られたのは、ひとえにルートの難しさゆえのことだ。
無酸素で８０００ｍ峰に登るプランは、82年に中国・新疆側からＫ２北稜を登った小西政継登攀隊長が提唱した。Ｋ２は77年に日本山岳協会隊が初登頂ルートから第２登していたが、彼はバリエーション・ルートと無酸素を柱として掲げた。全国から選抜したメンバーを以てすれば、それくらいのことができなければ意味がない。
結果、２人のメンバーを事故で失ったが、この遠征にかかわった人々の一部は翌年秋にエベレストに無酸素登攀を企てることになった。吉野寛隊長のイエティ同人隊はサウス・コルから、川村晴一隊長の山学同志会隊は南西壁の許可を得ていた。ところが、通関の遅れから南西壁にルート工作を施す日数がなくなった同志会隊は南稜下部から南東稜に変更し、両隊は同じルートをたどることになった。
割り込まれたイエティ同人はすべてよしとしたわけではないが、吉野隊長と遠藤晴行、沢上登、禿博信は同志会の川村隊長と鈴木昇己、パサン・テンバの３人をまじえ、一列になって南東稜を登った。先頭の遠藤は８５００ｍ付近で、カンシュン側の東壁を登ってきた米国隊と出会った。酸素を使っていた彼らが先行し、頂上には遅れて川村と鈴木、そして遠藤が続いた。同志会の２人は、荷物をデポした地点まで戻ってビバークしたが、遠藤は遅れて登頂した吉野と禿を待つため南峰でビバークする。しかし、２人ともそこまで下りて来なかった。遠藤は翌朝、かがんでアイゼンの紐を締め直している吉野の姿をビバーク地から見たが、禿の姿はなかった。２人ともヒラリー・ステップと南峰を結ぶナイフエッジの雪稜で転落したのではないかと推測されている。
日本山岳会もＲＣＣⅡも、Ｋ２の山岳協会も大時代的な戦法を採用して通常ルートの再登に終わってきた風潮に変革をもたらそうとした小西の試みは、頂上に立つことには

成功したものの、犠牲なしには終わらなかった。なお、K2北稜が登られた82年には、湯田一男隊長の山学同志会隊が5人の少人数でマカルーに無酸素登頂していることも忘れるわけにはいかない。

南西壁以後のバリエーション　1979年―88年

南西壁が登られてから4年後、トーネ・シュカリャ隊長のユーゴスラヴィア（当時）隊は、ロー・ラから西稜を稜線伝いに登って頂上に立った。63年の米国隊はウェスタン・クウムから西稜の肩に出て北壁を登っているので、西稜の全長が登られたのはこれが初めてだった。西稜ダイレクトと呼ばれたこのルートには、81年春、中島信一隊長の明治大学隊が挑んで、8100mの第5キャンプから4回にわたって頂上を攻撃したが、標高差にして100mを残して断念した。

エベレストの北方ルートは、北東稜に出るまでにノース・コルから続く支稜をたどるが、実際の北東稜は東寄りに向きを変え、ラピウ・ラまで達している。ボニントンはこれを東北東稜と呼び、ピーター・ボードマン、ジョー・タスカー、ディック・レーンショーと4人で82年春に挑戦した。レーンショーが脱落し、元気の良かったボードマンとタスカーが攻撃、ボニントンはサポートに回った。2人は、通常ルートに合流する手前の核心であるピナクル群に向けて8200m付近を登っていくところを目撃されたまま消息を絶ってしまった。1924年のマロリーとアーヴィンを連想させるような事件だった。

それから10年後、このルートを登山中の日本＝カザフ合同隊メンバーが東ロンブク氷河側8250mで雪に埋もれた遺体を発見、持ち帰った写真を見たボニントンはボードマンだと確認した。おそらくタスカーもその付近に埋まっているのだろう。東北東稜からの登頂は88年、91年、92年と繰り返し試みられたがいずれも頂上には届かず、95年の日本大学隊によって完登された。頂上に立ったのは古野淳と井本重喜だった。

南西壁は82年、旧ソ連隊によって新ルートから登られた。エフゲニー・タム隊長ら17人はクウムから75年英国ルートの左手に落ちる岩稜をたどり、8500mの最終キャンプから5次にわたって波状攻撃、合計11人を頂上に送った。ソ連の登山隊がネパールで活動したのは、これが初めてのことだった。

中国は80年、長らく閉ざしてきたチベット側の登山を解禁した。日本山岳会は、70年に引き続いて許可を手に入れ、

渡辺兵力隊長以下26人の隊員を送り込んだ。今回の目玉は北壁だが、70年同様、通常ルートとの二正面作戦を採った。こちらにはＴＶ取材班が同行し、頂上の絵を撮る目的があった。ただ、前回と違うのは、北壁隊の士気が高かったことだろう。頂上に立っただけでは、前回と同じ批判を受けるのは分かっていた。

北壁隊を率いたのは、69年秋の南西壁偵察・試登隊を率いた宮下秀樹副隊長。北壁下部を63年米国隊のホーンバイン・クーロワールに向けて直登し、5月1日に第5キャンプを設営。翌日の攻撃は８５００ｍで時間切れとなったが、10日の再攻撃で重廣恒夫と尾崎隆が頂上に立った。一方、通常ルートでは加藤保男と中村進カメラマンが3日に攻撃、最後は加藤隊員だけが頂上に立った。なお、北壁隊は７９００ｍ地点で雪崩を受け、宇部明隊員を失った。その後8月にラインホルト・メスナーが単独、アルパイン・スタイルで頂上に立ったことは前述した。

83年にはカンシュン氷河側の東壁が登られた。81年に６９００ｍで敗退した米国隊が再度の挑戦で初登攀したのである。10月8日、ルイス・ライカートらはサウス・コルから無酸素で登ってきた日本隊と東南稜上部で遭遇、ひと足先に頂上に立ち、翌日も第2次隊が登頂した。日本隊も8日に登頂したが帰途ビバークとなり、吉野寛と禿博信が犠牲になったことも前項に記したとおりである。

北壁にもう1本ルートが刻まれたのはその翌年だった。オーストラリア隊のティム・マッカートニー＝スネイプとグレッグ・モーティマーはホーンバイン・クーロワールの左手に食い込むグレート・クーロワールを無酸素で登って頂上に立った。86年には北壁日本ルートが39時間のアルパイン・スタイルで登られた。スイスのエアハルト・ロレタンとジャン・トロワイエは、モンスーンのもたらした豊富な積雪を利用して、昼夜兼行で３０００ｍを登り切った。

87年春、イワン・ガルフィ隊長のチェコスロヴァキア（当時）隊は、南西壁右ルートに向かったものの、８２５０ｍで敗退。英国ルートに向かった別の4人は７９００ｍで終わった。チェコスロヴァキアは翌年秋に、イワン・フィアラ隊長の下に英国ルートをアルパイン・スタイルで登ろうと試みた。ヨゼフ・ユストら4人はクウムから1日で８１００ｍに達し、翌日、ロックバンドを抜けて８４００ｍでビバークした。3回目のビバークは南峰直下で行ない、ユストだけが頂上に立ったが、東南稜を下降する途中で4人とも消息を絶ってしまった。

その年春には日本山岳会が中国・ネパールと3国合同登

チョー・オユーからエベレストの西面を望む。正面に北壁、手前が西稜、右手に南西壁（写真＝倉岡裕之提供）

山を挙行し、ノース・コルとサウス・コルからそれぞれ出発して反対側へ下りる交差縦走を行なった。縦走隊は3国から各1人の予定だったが日本の南側隊は追い付けず、チベット隊員が代役を務め、中国2人とネパール1人に変わった。ほかのメンバーによる第2次、第3次登頂も予定されていたが、頂上からのTV中継と縦走という目的を果たした隊の指導部は、事故を懸念して撤収を決めた。この決定に不満を抱いたネパール隊員たちは5人が頂上を攻撃、スンダレとパダム・バハドゥル・タマンが頂上を往復した。

この大がかりな3国合同隊が去るのを待っていたように、英＝米＝カナダの4人隊はカンシュン氷河からサウス・コル東壁を無酸素で登り、スティーブン・ヴェナブルズが登頂、ほかに2人が南峰に立った。また、オーストラリア隊はウェスタン・クウムから南東稜を登って頂上に立ったが、南面通常ルートでシェルパを使うことなく頂上に立った初めての登山隊となった。

冬季登攀時代の到来　1980年―93年

1980年、ネパールは冬季登山シーズン（12月1日～1月31日）を設定、春（プレ・モンスーン、3月1日～5

月31日）、秋（ポスト・モンスーン、9月1日～10月31日）に加えて3シーズン制とした。冬のヒマラヤ登山は従来から一部で行なわれてきたが、それは所定のシーズンより早めにスタートする（早春）とか、シーズンを超えて遅くまで粘る（晩秋）というかたちを採っていた。

ポーランドのアンジェイ・ザヴァダは1973年2月、ヒンズー・クシュのノシャックに登ったが、これは、それまで冬に登られた高峰がアラスカのマッキンリー（現デナリ）やアンデスのアコンカグアといった6000m峰しかなかったので、7000m峰を狙ったものだった。ザヴァダ率いるポーランド隊は、翌年10月から12月、ローツェに挑み、12月25日に8270mに達した。しかし、登山許可が秋のものだったので、31日以降の活動は認められなかった。それでも、積雪が吹き飛ばされて氷がむき出しになったアイスフォールやローツェ・フェース、強力なジェットストリームなど、エベレスト山域の冬の状態を確かめることができた。

ザヴァダ隊23人は、79年の大晦日にBCを設けて本格的なエベレスト挑戦を企図した。これが、ネパールでの冬季登山解禁第1号となった。2月11日、サウス・コルに第4キャンプを設けたが、翌日の攻撃隊は疲労のため出発できず、第2次隊も8150mで敗退した。2日間の許可延長が認められた17日、1次隊のレシェック・チヒとクシストフ・ヴィエリツキが改めて攻撃し、冬季初登頂に成功した。さらに、冬が終わっても春の許可を得た5人が残り、ポーランドから補充され新たなメンバー6人を加えた一行は、南西壁とジェネヴァ・スパーの間に下りてきている岩稜（南稜）に向かった。サウス・コルにトラバースすることなくそのまま進み、5月19日、イェジ・ククチカとアンジェイ・チョクが頂上に立った。

翌年から冬のエベレストには、ほかのシーズンの許可が取りにくいという事情もからんで、毎年挑む登山隊が増えてくる。80／81年には、アラン・ラウス隊長の英国隊がローラから西稜に、植村直己隊長の日本冬季隊がサウス・コルから挑むが、いずれも失敗。後者の竹中昇隊員がローツェ・フェースで遭難死した。加藤保男隊長のイエティ同人隊は、82年12月27日には加藤隊長がサウス・コルから頂上に立って3度目の登頂を果たしたが、帰途一緒にビバークした小林利明隊員とともに消息を絶った。

83年10月から翌年1月、高橋通子隊長のカモシカ同人隊が北壁を狙い、80日間粘った末に8100mが最高到達点となった。

85年12月、ヌム・サンテ隊長の韓国隊は東南稜の８３５０ｍで断念した。

85年12月の韓国隊（キム・キヒョク隊長）は西稜の肩で断念。

85年12月～86年1月、パク・ヤンベ隊長の韓国隊は南西壁の７７００ｍで断念。

86年11月～12月、オ・インワン隊長の韓国隊はサウス・コルで断念。

86年12月～87年1月、パク・ヤンベ隊長の韓国隊は南西壁８３００ｍで断念。

87年12月、ハム・タクヤン隊長の韓国隊はサウス・コルから隊員・シェルパ各1人が22日に登頂。シェルパのアン・リタは冬季では初めての無酸素登頂だった。

87年10月～88年2月、長谷川恒男隊長のウータンクラブ隊が東北東稜ピナクルへの直登を試みるが、７６５０ｍで断念。

88年10月～12月、ウータンクラブ隊が前年と同ルートを登るが、12月11日、７８００ｍまでで力尽きた。

88年12月～89年1月、パク・ヤンベ隊長の韓国隊、無酸素で南西壁に挑んで７８００ｍから敗退。

89年11月～90年1月、キム・ハキュン隊長の韓国隊、サウス・コルで断念。

91年11月～12月、キム・テクヒ隊長の韓国隊、サウス・コルから８６００ｍまで。

91年11月～12月、キム・カンチン隊長の韓国隊が南稜から８７００ｍまで。

91年11月～92年2月、八木原圀明隊長の群馬県山岳連盟隊の16人は、南西壁ロックバンドの８３５０ｍの第5キャンプ予定地に達するが、キャンプ設営ならず。1月29日にキャンプを設営したが、強風に追い返されてしまった。同岳連隊は87年に、アンナプルナ南壁英国ルートの冬季初登攀に成功していた。

92年11月～12月、フィリップ・ニーム隊長の英国陸軍隊、サウス・コル直下７９００ｍで断念。

93年1月～2月、スペインのフェルナンド・ガリドが単独でサウス・コル下７７５０ｍに達する。

93年11月～12月、八木原圀明隊長の群馬隊が南西壁に再挑戦して、3パーティ6人を登頂させた。頂上に立ったのは、12月18日に名塚秀二と後藤文明、20日に江塚進介と田辺治、22日に尾形好雄と星野龍史だった。

大衆化時代のエベレスト　1988年から今日まで

顧客を案内して山を登らせることは、古くから行なわれてきた。ヒマラヤでさえも、さほど高くなく技術的に難しくない山では、ガイドが引率する登山が行なわれてきた。それを8000mのダウラギリでやろうと考えたのが、1960年の初登頂を率いたスイスのマックス・アイゼリンである。アイゼリンシュポルトを経営する彼は、ダウラギリ初登頂20周年にあたる1980年春に、雑誌などで広く募集した隊員を通常ルートの北東稜を経て登らせようとした。ヨーロッパ人ガイドにシェルパの補助を付け、固定ロープを設置して登らせれば難しいことではない。ハンス・フォン・ケーネルを隊長とする一行は、59歳になるロッツェの初登頂者フリッツ・ルフジンガー（スイス）を含むメンバー14人とシェルパ3人を頂上に送った。

この成功を見て、マナスルやアンナプルナなどでも、こうした公募隊を編成するエージェントが増えてきた。エベレストという比類ない高さの山で同じ手法が通じるわけはないと受け取られていたが、80年代後半から徐々に公募隊がエベレストに進出するようになった。とくに、いつかは世界最高峰に登りたいと思う人々に、その前段階として容易な8000m峰を経験させるシステムが一般的になると、エベレストに至る以前に1つ2つ企画に参加してもらえる機会も出てくる。最高峰に向かう前に比較的容易な8000m峰、たとえばマナスルやチョー・オユー、シシャパンマはいかがですか……という具合に。

当然のように公募隊エージェント同士の競争も高まり、顧客の奪い合い、囲い込みも激しくなる。8000m峰14座ではいささか敷居が高いが、7大陸最高峰なら手の届く範囲にある。だが、そのためには、8848mの頂に立たなければ事は成就しない。エベレスト人気が衰えないのには、そんな理由もからんでいるのだ。

初めのうちは、アイゼリンのようなヨーロッパの公募隊が有力だったが、90年代になるとニュージーランドのロブ・ホールがプロクライマーから転じてアドベンチャー・コンサルタンツ社を設立、立て続けにエベレスト登頂を成功させた。魅力ある公募隊とは、いかに多くの客を頂上に立たせるかといった成功率が競われる風潮が生まれた。マスコミに知られた有名人や、ハンディキャップを抱えた登山者を連れていくのも大きな宣伝材料になる。

1996年春に起きた遭難事件は、そんな風潮に冷や水を浴びせた。ロブ・ホールの隊と米国人スコット・フィッシャーの隊（マウンテン・マッドネス）が競い合い、ほか

最近のエベレストは公募隊が主流だ。写真は 2002 年 5 月 16 日、ヒラリー・ステップ付近で、列をつくって頂上を目指すクライマーたち（写真＝村口徳行提供）

の登山者も巻き込んで、ルートの隘路（あいろ）であるヒラリー・ステップ付近で渋滞が起きたのである。先に頂上に立っていた人々は下山の際、遅れて登ってきた隊列が通り過ぎるまで長時間待たされ、酸素切れを起こす者も出た。

おまけに、ロブ・ホールは歩みの遅い顧客にかかりきりになり、フィッシャーは体調が悪かったらしく、2人とも途切れない登山者の列の後方であえいでいた。午後遅くなって頂上に立つことはできたが、リーダーとして指揮権を発動する機会もないまま倒れた。ほかのガイドやシェルパが残る客を先導して下山を急いだものの、サウス・コルのキャンプまで帰る前に両隊のガイドと顧客、シェルパ2人の11人が嵐に巻き込まれてしまう。立ち往生していた一団は、キャンプに戻っていたアナトリー・ブクレーエフに迎えられた。フィッシャー隊のガイド、ブクレーエフは、この日はほぼ空身の状態で自らの無酸素登頂を優先、ひと足早くサウス・コルに戻って待機していたのだった。

その後はもっぱらチベット側に公募隊を派遣していたラッセル・ブライスのヒマラヤン・エクスペリエンスがネパール側に進出して主導権を握ってきたが、近年はネパール人自らが起こしたエージェントが主力になってきた。従来は低予算の公募隊として軽く見られていたが、欧米のガイド会社からノウハウを学ぶとともに、力のあるシェルパを多く雇うようになった。なによりも、外国からガイドを連れてくるのに比べれば人件費が安い。

しかし、エベレストのような山で完璧なガイド登山は難しい。どんなに優秀なガイドでも、動けなくなった顧客の面倒を一〇〇％見られるわけではない。ガイド自身も高所の危険にさらされている点では同じだからだ。

エベレスト登山史　日本山岳会隊の登頂まで

■第2次大戦前（1921―1938）

1857年　英国山岳会創立

1907年　創立50周年にエベレスト挑戦を企図するが、チベットの安寧を重視する総督の拒否にあい、ガルワールに変更してT・G・ロングスタッフらがトリスル（7120 m）に初登頂。

1921年　英国第1次隊。ジョージ・マロリーとガイ・ブロックがノース・コルに到達。

1922年　英国第2次隊。マロリーとT・H・サマヴェル、E・F・ノートンが8225 mに到達。ジョージ・フィンチとジェフリー・ブルースは酸素補給器を用いて8326 mに到達。

1924年　英国第3次隊。ノートンが無酸素で北壁大岩溝の8572 mに達した。マロリーはアンドルー・アーヴィンとアタックするが、第1ステップを登るところを遠望されたまま消息を絶つ。マロリーの遺体は1999年、切れたロープを腰に巻いた姿で発見された

1933年　英国第4次隊。パーシー・ウィン・ハリスとローレンス・ウェイジャー、のちF・S・スマイスがノートンと同高度に到達。アーヴィンのピッケルを発見、持ち帰った。

1935年　エリック・シプトン以下7人の英国第5次隊がノース・コル以外のルートを求め、周辺の26峰に登る。

1936年　英国第6次隊。早いモンスーンの到来で、ノース・コルに達しただけに終わる。

1938年　H・W・ティルマンの超緊縮財政隊。予算も物資も従来の5分の1に圧縮。8290 mの第6キャンプで終わる。

■第2次大戦後

1947年　インドとパキスタンが独立。

1949年　ネパール王国が開国。

1950年　オスカー・ハウストンの米国隊がクーンブ氷河から南面を偵察。ティルマンとチャールズ・ハウストンがカラパタールから南東稜を望見したが、南稜と重なって見えたため、意外に難しそうだという印象を持ち帰った。

1951年　共産中国がチベットを併合、外国隊が北面ルートに立ち入る可能性が消えた。

1951年　シプトンの英国偵察隊がクーンブ・アイスフォールを試登、ウェスタン・クウムに出る。スイス隊が英国に先んじてエベレスト登山の許可を取得。

1952年　スイス隊の春秋にわたる攻撃は8595 mで断念。シプトンはチョー・オユーで翌年の訓練を行なうが、帰途バルン氷河探索に日数を費やしたため帰国が遅れた。その間、ロンドンでは、シプトンの代わりに陸軍大佐ジョン・ハントを隊長とする計画が進んだ。一方ソ連からは、52年秋に25人が北方ルートに挑み、最終キャンプで6人が消息を絶ったという悲劇の英雄譚が流布されたが、のちにプロパガンダだったと判明。

1953年　ハント隊長の英国隊が南東稜から初登頂。頂上に立ったのはニュージーランドのエドモンド・ヒラリーとシェルパのテンジン・ノルゲイだった。英国人がエベレストの頂上に立つのは、1975年秋に南西壁を登ったドゥーガル・ハストンとダグ・スコットまで待たなければならなかった。

1956年　スイス隊がローツェ初登頂と併せてエベレスト第2登を果たす。

1960年　中国隊が北方ルートを登って頂上に第3登。インド第1次隊は南東稜8625 mで断念。

1962年　インド第2次隊。南峰まで30 mで敗退。

1963年　米国隊が南東稜第2登と併せ、西稜肩から北壁ホーンバイン・クーロワールを登って南東稜を下降。

1965年　インド第3次隊。南東稜から登頂、宿願を果たす。

1966年　日本山岳会が登山許可を得るが、登山禁止令により中断。

1968年　ネパールは登山禁止令が解けると予告したが、実際は69年に解禁。日本山岳会の計画は70年春に延期となる。

1969年　日本山岳会第1次偵察隊（藤田佳宏隊長以下4人）が春のウェスタン・クウムに入って南西壁を偵察した。秋の第2次偵察隊（宮下秀樹隊長以下12人）は、初めて南西壁を試登。大クーロワールから8050 mに達する。

1970年　日本山岳会隊（松方三郎隊長以下39人）。南西壁と東南稜に隊を2分するが、南西壁隊は寡雪によりむき出しになったスラブとロックバンドからの落石に悩まされ、前年秋とほぼ同高度で断念。東南稜隊は5月11日に松浦輝夫と植村直己、12日にも平林克敏とサーダーのチョタレイが登頂した。なお、成田潔思隊員が高山病で亡くなった。

1970年　日本スキー隊（三浦雄一郎隊長以下32人）、サウス・コルに達し、三浦隊長がスキー滑降。途中で転倒・滑落したものの重大な事故に至らずに済んだ。

記録

厳冬期剱岳・北方稜線を完全縦走

佐藤勇介（G登攀クラブ）

富山湾から北アルプスを望む景観は写真家にも親しまれ、雪をまとった稜線はたなびく一条の雲のように連なっている。

その中で最も異彩を放つのは独特の風格を持った剱岳（2999m）である。剱岳から北へ続く山々は剱岳・北方稜線と呼ばれ、その難度とともに岳人に知られる存在だ。無雪期や残雪期であれば登山者も少なくはないが（最も池ノ平山～剱岳の間であるが）、厳冬期となると人影はほとんどないと言ってよい。

厳冬期の北アルプス、とりわけ立山連峰の厳しさは世界的に見ても際立っている。日本海を渡る偏西風をまともに受け止め、重く湿った雪を大量に降らせる。その降雪量は春の室堂・雪の大谷を見ればよくわかる。10mを超える積雪がひと冬の間にもたらされるのだ。

日本の山岳の冬季縦走に活動の重きをおいてきた私にとって、この課題は最も理想的で美しく、人生を懸けて取り組むに値するものに思われた。

足掛け4年、3度目の挑戦でようやく剱岳の頂を踏むことができた。

1回目の挑戦　強烈なラッセルと重荷で敗退

1度目は2015年年末から2016年の年始にかけて行なった。山岳会（G登攀クラブ）の仲間の戸知寛と2人でのトライであった。

初めてということで、鋲ヶ岳の登山口である嘉例沢森林公園までタクシーが入れるのかどうかすら情報がつかめなかった。

幸い山麓の雪は少なく、登山口の数百m手前まで進入することができた。しかし、折しも強いミゾレ交じりの雨が降っており、出端を挫かれた。数時間、公園のトイレの軒下で雨がやむのを待ち、雨が雪に変わったころ歩き出した。

積雪は多くなく、ひざ下まで潜る程度であったので快調に距離を稼いで、烏帽子山と僧ヶ岳のコル付近まで初日で進むことができた。

翌日は昼過ぎから荒れる予報で5時に出発したが、9時前から風雪が厳しくなった。のっぺりとした前僧ヶ岳周辺は風を遮るものがなく、強風帯として知られ、「デスゾーン」と呼ばれている。この日もその名の通り、立ち止まることを許さない強風が吹き荒れていた。地形図を睨みながら、かすかに見え隠れするシラビソを頼りに歩みを進めた。僧ヶ岳直下で早々と行動を終え雪洞を掘ったが、積雪が少なくテントを建て、中に入ろうとした瞬間、天井が崩壊した。

以降の行程では数日、吹雪の中の行動となった。視界のない中での稜線歩きは極めて危険で、触れれば落ちるような、できたばかりの雪庇に脅えながらの歩行であった。

次第に積雪も深くなり、ワカンであっても腰まで埋まるような箇所も多かった。

それでも休むことなく進んだが、滝倉山から先は、ナイフリッジの稜線の上にコメツガの巨木が立ちはだかるように並んでおり、やむなく側壁をダブルアックスでトラバースしなければならない場面もあり、地図上での距離はわずかであっても多くの労力が必要で、時間もいたずらに費やすこととなった。

特にウドの頭付近の通過は地形が複雑で一筋縄ではいかず、ルート・ファインディングが難しかった。トラバースや懸垂下降を交え、安定した積雪状況にも助けられて進むことができた。ウドの頭への登り返しは急雪壁となっており、いかにも雪崩そうで恐ろしかった。頭を超す雪を崩しながらの登攀となり、幕営可能な場所へたどり着いたころは20時近くなってしまっていた。

ここまで連日5日間動き続けていた。翌日は休養日と決めたが目覚めると快晴で、「この機を逃す手はない」と平杭乗越から毛勝山中腹まで足を延ばした。平杭乗越では初めて剱岳の雄姿が目の前にその姿を現わした（それまで剱は常に雲に覆われていた）。この日は快晴。光あふれる中、

最高の展望をほしいままにすることができた。
毛勝山への登りは、「天国への階段」と呼ばれ標高差７００ｍの急登を駆け上がる。途中、ロープで確保しながらも山頂へ達する。次第に天気は下り坂となった。毛勝山南峰からの下りでは視界がなく、地形図とコンパスを睨みながら進む方向を定めた。
釜谷山への登りに差し掛かったところ、稜線は東側に大きな雪庇を張り出しているので、なるべく西側を歩くように心がけていた。東へ寄り過ぎたと思い、進行方向を変えようとした矢先、足元に亀裂が走った。とっさに西側へ飛び込んだと同時に、それまで立っていた場所は谷底へと轟音を立てて消え失せたのである。
釜谷山山頂では完全に悪天となったので、山頂直下の平坦地に幕営した。夜中じゅう強い風がテントを揺らし、銃撃のように雪をたたきつけていた。気温も相当に下がり、寒気の厳しい夜だった。
翌朝、９時くらいになると天気が回復し出したので出発すると、稜線はワカンを履いても胸まで没する、信じられないほど深い雪に覆われていた。あれほど強風が吹いていたのに、雪が飛んでいないのが不思議であった。
空身になっても歩みは遅々として進まなかった。すぐそこにある猫又山山頂はいつになっても近づかない。次第に気力と体力が奪われていく。
猫又山からは標高差約６００ｍの下降。そして、赤谷山へ５００ｍの登り返しが待っている。この深い雪の中、それは途方もないことのように思われた。この先の天気予報はしばらく風雪の荒れ模様だった。どこまでも気高く美しい剱岳を目の前にしながら、敗退を決めた。
これまで１日の停滞日もなく進んでいた。もっとも歩ける日は歩かないと、いつ悪天につかまって閉じ込められるか分からないという不安もあったからだ。装備は切り詰め、食糧も最小限のものとした。重荷ではラッセルがきつくなるし、持てる量には限りがあるからだ。
しかし、それも１週間を過ぎたころ、少ない食料での連日の行動が少しずつ私たちの体力を奪っていったように思う。短い行程ならライト＆ファストで対処できるが、剱のように長い行程ではごまかしがきかない。速攻で片づけられるほど甘くはない世界であった。
最高の天気の中、東芦見尾根を下り馬場島へエスケープすることとした。高度を落とすほど雪は重く腐り、足を抜くのに苦労する。途中、ブナグラ谷で１泊した後、馬場島へと下り立ち伊折までの林道をとぼとぼと歩いた。

（2015年12月24日～2016年1月2日　メンバー＝佐藤勇介、戸知寛）

2回目の挑戦　大量の降雪に阻まれる

2度目のトライは雪に閉じ込められた。

その年は初日から大荒れの天気となった。登山口の数km手前でタクシーを降ろされ、吹雪の中を歩き始めた。鋲ヶ岳へ登るのさえ空身となってダブル歩荷（トップが空身となり、トレースを付けてセカンドが跡を追う。トップは荷物を取りに戻り、後を追っていくスタイル）が必要であった。

烏帽子山手前の平坦地ではホワイトアウトで進路を定めるのに苦労した。初日から雪洞を掘って、中にテントを張る。雪洞は掘ってしまえば快適だが、掘るのに2時間ほどかかり装備も濡れてしまう。特に低標高帯では濡れに気を遣わなければならない。

黒部の厳しさのひとつに「濡れ」がある。日本海に近く、重く湿った雪が降る。そんな雪はラッセルしていると衣服に着いたとたんに水滴となって装備を濡らす。夜間、冷え込んで凍り付き、その上に再び雪がまとわりつく。これを繰り返すと、装備は氷の鎧のようになってしまう。

これが2000mを越えれば、寒気とともに雪も乾いたものとなり意外と快適になる。払えば落ちるし濡れることはない。雪は温度が高い状態が一番質が悪く、払ってもまとわりつくし、液体は伝導率が高いので熱をどんどん奪っていく。

標高の低い前半戦、気温が0度前後でラッセルを強いられたり、雪洞を掘らざるを得ない状況ではかなり悪条件であると言える。

僧ヶ岳から先は、天候も回復傾向だった。ヤセ尾根はたっぷりと雪を載せ、幅が広くなり歩ける場所が多くなって前回より進みやすい場所も多かった（もちろん雪庇に細心の注意を払いながらだが）。

ウドの頭付近は前回の経験を活かしてルート・ファインディングに迷いなく進めたが、ここでトラブルが起きた。

懸垂下降の準備をするためにザックを置いたところ、固めたはずの雪が崩れ、ザックが稜線から滑り落ちてしまったのである。慌てて行く先を目で追うと、幸い100mほど下方でザックは停止していた。懸垂して回収し、登り返すことができて事なきを得た。ザックを置いた場所を確認すると極めて粒子の大きな霜ザラメ雪で、固めたつもりが全くと言っていいど固まっておらず、結合の悪い脆弱なも

のであった。

今回は運が良くザックを回収することができたが、雪山での装備は命を守るため絶対に必要なもので、失えば即、窮地に立たされる。今までも十分気をつけてザックを置くようにしてきたが、ザックを落としたのは初めてであった。おそらく先を急ぐ気持ちがあり、精神的な余裕を失っていたものと思われる。

平杭乗越では高いブロックでテントを囲った。その夜から2日間は大荒れの予報が出ていたためである。

停滞日を挟み毛勝山への登りにさしかかる。あわよくばその日のうちに毛勝山まで達したいところであったが、天候も荒れ始めたので、２０６０m付近の緩傾斜地にテントを張ることにした。その場所は幅の広い尾根上で水平に近い傾斜部分があり、絶好のテン場であるように思われた。

これまでの経験上、風を避けて尾根の風下側にテントを張ったりすると、雪が吹きだまってテントを埋められるため、あえてやや風の抜ける稜線上を選ぶこととしていた。降雪のないときは別だが、夜中に行なう除雪の労を考えると、多少寒くても、雪が飛んで積もりづらい場所の方が都合が良いからだ。

この日の場所は、尾根上であるため好条件が揃っているように思われた。静かな夜を迎え、目覚ましのアラームで目覚めるとそれほど雪は積もっていないようだった（大量の降雪があるとテントの側壁が雪の重みで圧迫され、テント内は非常に狭くなる）。バーナーに火をつける際の換気のために入り口を少し開けようとすると違和感があった。軽くではあるが、テントの吹き流しが圧迫されている。

雪をどかそうと吹き流しを閉じたまま押し込んでも、すぐに元通りになる。思い切って入り口を開けると、一気に雪が雪崩込みテント内の3分の2は雪で埋め尽くされた。慌てて雪を押しのけ雪面に顔を出すと、鮫の背びれが海面からのぞいているように、テントの最上部だけがちょこんと雪の上からのぞいていた。ここで初めてテント全体が埋没していることを知ったのである。

そこからの除雪はまさに苦行だった。雪面はテントよりも高い位置にあるので、捨てる雪は頭の上に放り上げなければならない。2人で時計回りで除雪していく。少しずつ掘り下げ3周するころ、埒が明かないことに気づいた。上に積んだ雪は少し風が吹くだけで崩れ落ちてしまい、塹壕のように掘られたテントとの隙間に落ち込んでくる。1周して戻るころには、また同じくらい雪がたまっている。

やむなくテントを撤収し、場所を移すことにした。今度

は広い尾根の端で急斜面となっているところを切り崩し整地した。今度の場所では雪がある程度積もっても斜面に落ちていくし、除雪もどんどん下に放り投げればよいので効率的だった。

昼ころに、ようやく落ち着いて考えた。初めにテントを張った場所は風が吹き抜けると思われた尾根上であったが、両側の谷が壁にぶつかる地点でもあり、谷を吹き上げた風がそこで収束する場所であった。勢いを失った風がふわりと降り積もる地形であったのだ。雪が非常に軽いためテントが埋められても圧迫されず、静かで快適な夜をもたらしたのであろう。

テント内で停滞する間、ずっとゴウゴウと鳴り響く風の音が耳に入る。追い詰められた状況では常に悪いイメージばかりが頭をめぐる。視界のない中、「脱出できるのか?」「雪崩の危険性の高い中、進むべきか」「このまま雪に閉じ込められるのか」。際限なく不安が繰り返される。

翌日も猛吹雪だった。幸い除雪の労が減ったためゆっくりとお茶を飲んで過ごす。昼近くにわずかに視界が得られるようになったので、テントを畳み出発することとした。気温は随分と低く、何をするにも手がしびれ、顔面が凍りつく。

視界が得られると言っても数mから十数mになったに過ぎない。出だしのリッジをロープを出して通過し、斜面に取り付いた瞬間、表層が雪崩れた。積雪上部20cmほどであったので流されることはなかったが、この先数百mにわたる広大な斜面が上部にある。

迷わず引き返し、再び先ほどの場所にテントを張った。

テントの中に入り人心地つくと、先ほどまでとは全く違った思考をすることができた。冷静に考えると、先ほどの出発の判断は正気の沙汰ではない。ないに等しい視界の中、風雪吹き荒れる中を登り続けるなんて。たとえ毛勝山までたどり着いたところで、さらに厳しい環境であることは間違いない。「アルパイン・クライミングでは、時に危険な橋も渡らなければならない」などとパートナーの反対も押し切っての出発は、明らかな狂気の沙汰であった。

ようやく冷静になって判断ミスを理解することができた。大袈裟かもしれないが、私自身の運命の分かれ道がそこにあったように思う。あの時、小さな雪崩が起きなかったら、そのまま帰ることはなかったかもしれない。

それからは腹をくくった心境となり、焦りはなくなった。食糧も燃料もまだまだ十分ある。完全に視界が得られるまで出発しないこととした。もはや剱への縦走を考えられる

状況ではなかった。ここからいかに脱出するかの一点に目的が絞られた。ただただ天気の回復を祈り、正月ののんびりとしたラジオ放送に耳を傾けていた。

夕方のラジオが「翌日は天気が落ち着く」と告げた。ここを出るには明日しかないと思いながら、また絶対に無理はしないと心に決めてシュラフへと入った。

朝、3時に起き5時過ぎに外を窺うと風は弱まっていたが、まだガスに覆われているようだった。いつでも出発できるように身支度を整え、あとはテントを畳むだけという状態にして天候を窺った。9時くらいになると空の明るさが増したように思えた。しだいにガスが切れ、周囲の地形が浮かび上がる。そして、目の前に毛勝山の大きな斜面を上部まで見渡せるようになった。

遮二無二ラッセルをして頂上を目指す。青空が広がって背後に後立山連峰が輝いていた。

ふいに爆音がして見上げると、富山県警のヘリが偵察にやってきた。連絡の取れない私たちの様子を窺いに来たのだ。大きく手を振って無事を伝えたが、内心、ヘリの爆風で雪崩を誘発しないか心配だった（随分高い位置にいたので大丈夫なのだろうが）。

毛勝山の山頂直下で、久しぶりに剱と対峙する。その美しさにしばし見とれる。そして、遥かなる剱までの距離に、この縦走の厳しさを実感せざるを得なかった。

毛勝山南西尾根を下り、途中で一泊、片貝山荘から林道を東蔵へ向かって歩く。雪は重いし、おまけに雨も落ちてきた。心が折れながらゲートにたどり着くと、21時を過ぎていた。

（２０１７年12月25日～２０１８年1月6日

メンバー＝佐藤勇介、井出光俊）

3回目の挑戦　達成できた剱岳への縦走

2度目の挑戦の後、私の気持ちは北方稜線から離れかけていた。

悪天での行動のリスクを嫌というほど思い知らされ、好天は1週間に1度訪れれば御の字。これでは到底、完全縦走はままならない。いまだブナグラ峠以南に達することができず、剱岳の核心部には至っていない。私の力では遠く及ばない課題のように思われた。

それでも縦走への思いは、私の心の奥底に焚火の後の熾（おき）きのようにくすぶっていた。

そんな折、1度目に共に歩いた戸知が秋の穂高で命を失った。彼の死を受けて、共に目指した頂をもう一度歩い

厳冬期北方稜線完全縦走の軌跡

ヒマラヤの巨峰のごとく気高い毛勝山が姿を現わした

西俣ノ頭への登り。雪面が美しい模様を描く

滝倉山からの急な下り。腰まで埋まる雪を泳ぐように進む

毛勝山を越える井出。長い停滞からの脱出

前僧ヶ岳付近を行く。強風地帯もこの日は穏やかだった

この先、毛勝山への急登「天国への階段」が始まる

急登を経て池ノ平山北峰へ。背後に富山平野が広がる

池ノ平山北峰から南峰の間はナイフリッジのアップダウンが続く

池ノ平山から小窓のコルへと向かう。剱岳山頂が近づく

快晴の池ノ平山北峰にて

てみようと思った。同じ山岳会の鈴木啓紀もまた、彼の意思を継いでくれた。友人の和田淳二も加え、3度目の挑戦となった。

登山口の嘉例沢森林公園は、雪がなく晩秋の装いだった。今年は12月に入っても全くと言っていいほど寒気が降りてこず、山の雪も極めて少ないようだ。烏帽子山に近づくにつれ、積雪も増え膝程度のラッセルとなったが、前回ここで胸を超すラッセルをしたことを思えば、雪はないに等しかった。

出だしから腹を壊していた鈴木を除いて快調に歩くことができた。予定の2日分も進んで前僧ヶ岳手前の宇奈月尾根が合わさるあたり、１６４０ｍ付近まで進むことができた。夜も暖かく、いつもの厳しさがないので拍子抜けの感がある。

2日目。風の厳しい前僧ヶ岳の通過も至って穏やかで景色を楽しむ余裕があった。僧ヶ岳を越え駒ヶ岳との鞍部へと下る。雪の少ない稜線はシラビソが行く手を阻む。大きく迂回したり、這いつくばるようにして枝を潜らなければならない時もある。時々、雪の下の空洞に胸まで落ち込み、這い上がるのに体力を消耗させられる。

駒ヶ岳に近づくと天候が崩れ始めた。ひとたび荒れ出すと、山は一気に狂暴な姿を現わす。視界は閉ざされ、吹き付ける風が顔半分を凍らせる。

越中駒ヶ岳の山頂ではしばし、風を避けて行動食を摂る。出発時にアルファ米を作り、行動中は懐に入れておく。休憩のたびに掻き込んで腹を満たす。以前は軽量化のため、ミックスナッツや柿ピーを主体としていたが、腹が減って力は出ない。いろいろ試した上で導き出した答えのひとつだった。休憩していると思いのほか天気が回復し出した。こうなればこっちのもの、複雑な地形も視界があれば迷うことはない。あとは邪魔なヤブの迷路をいかにかいくぐるかである。

サンナビキ山の主峰の滝倉山へと続く稜線は、無数のピークを隠している。ひとつのピークに登り詰めると次が現われ、それに登るとまた次が現われるといった具合だ。時にダブルアックスを必要とする急登もあり侮れない。そして、激しいヤブのおまけつきだ。大型ザックが仇となり、何かと引っ掛かる。何度、聞き苦しい悪態をついたか分からない。良いテント場を求めて薄暗くなるころまで歩き、１８０１ｍ付近まで進んだ。ここまではすこぶる快調なペースで進めている。翌日の予報も悪くなく期待が持て

る。夜間の降雪は30㎝ほどだった。

3日目は、前半戦の難所であるウドの頭周辺を通過する。この辺りは地形図では窺い知ることのできない難しさがある。急峻で細かいアップダウン、進路を妨害する巨木、密生するヤブ、枝にはもれなく雪の塊がまとわりついている。雪を払いながら、這いつくばりながら、ヤセ尾根を渡る。ヤブの中を懸垂してウドの頭手前のコルへと下り立つ。

ここからの急雪壁には細心の注意が必要だ。いかにも雪崩れそうな斜面であるし、不安定な雪に足場も定まらない。「バンザイ・ラッセル」を繰り返して、アックスを深く突き刺しながら三点支持の要領で高度を稼ぐ。しばらくはトップを交代するスペースもなく、傾斜が落ち着くまで1人で突き進む。

鬱陶しい藪漕ぎラッセルの果てに、ウドの頭の山頂へたどり着いた。ここは絶好の展望台で、正面に剱岳、背後に越中駒ヶ岳が控える。行く手には障壁のように立ちはだかる毛勝山が左右に大きな尾根を広げ、どっしりと構えている。夕方になるとガスはすっきりと晴れて、夕日に朱く染まる山々にしばし見とれた。

4日目。ウドの頭からの平杭乗越への下降は忠実に尾根をたどることができない。地形図に表わされていない小岩峰があるし、尾根上はこれまで以上のヤブに覆われているからだ。雪質を慎重に見極めて一度沢に下り立ち、トラバースしながら平杭乗越を目指す。雪崩の不安がある時は通過できないので、ここでは運も必要だ。

平杭乗越は縦走路中の楽園だ。広々と開けた平坦地で雪面のうねりが美しい。カモシカやウサギのトレースが縦横に駆け巡る。次に控える長い急登に備え大休止をとる。

願わくばこの日のうちに「天国の階段」にケリをつけたい。焦らず着実にステップを刻んでいく。長く果てしない登りに幾度となく足を挙げる。ここでは山形の和田が爆発的なラッセル力を見せつけてくれた。これまで私はラッセルで後続を置き去りにすることはあっても、二番手以降で後れを取ることはなかった。しかし、和田のスピードは突出していて1時間以上トップで進み、ついに毛勝山の肩まで引っ張ってくれた。和田曰く「調子が出てきちゃったなぁ」とのこと。雪国の林業で口に糊するだけのことはある。

毛勝山を越えるとまともに西風を受けるようになる。快調に進んで釜谷山手前のコルに達した。翌日は大荒れの予報が出ているので停滞の可能性が高い。できれば雪洞を掘りたいところだ。まだ13時30分なので先に進むか迷った

毛勝山・釜谷山のコルでは雪が足りず半雪洞となる

大窓のコル付近。吹きだまりを利用して半雪洞を作る

が、この先、今年の積雪状況では雪洞を掘れそうな場所がないため、コルの風背側の吹きだまりを利用して穴を掘ることとした。

２ｍほど掘り進めると笹の斜面に突き当たってしまう。場所を変えても同じだった。やむなく半雪洞としてテントを張る。風下側に設けた半雪洞は風の影響を全く受けず至極快適だった。テントの頂点よりも半雪洞の庇が張り出していれば、降雪があっても埋められることもないし、そのうち完全な雪洞になるだろうから問題ない。半雪洞は意外に快適で、非常に有効であると知ることができた。

５日目。前日の予報では大荒れだったが、目覚めると風は強いが意外に視界もあり動ける範囲だった。「動けるときは休まず動く」ことが、少ないチャンスをものにする鉄則なので出発することとする。願わくば視界のあるうちに広い斜面を下らなければならない。猫又山からブナグラ峠までの下りを実行してしまいたいという思いもあった。

釜谷山を越え猫又山を目指す。猫又山手前の稜線には少々面倒な大岩が立ちふさがっている。西側を巻いてこれをやり過ごし、猫又山山頂に立つ。そのころ風は一層強まり、視界は完全に閉ざされていた。

この先、広大な斜面を進み、か細い小尾根に入らなければならない。視界があれば何の問題もない場所だが、視界不良では極めてルート・ファインディングが難しい。

立木のない真っ白な雪面にガスがかかり、足元数ｍしか確認できない状態だ。下りから不意に登りへと変わり、気づかず転びそうになる。風はより一層強まり、地図を広げることも難しい。

一歩一歩慎重に歩を進める。３人が10ｍほどの間隔を置いて一列となり、コンパスを睨みながら進行方向がずれないように細かく修正しながら進んでいく。

多少進路を外したが、リカバリーすることができ、何とかブナグラ峠へと続く尾根へ乗ることができた。ここからの尾根も複雑に枝分かれし、視界の乏しい中では困難で、特に峠の直前は傾斜がある上に複雑な地形で、結局、懸垂を交えて峠へ下り立った。

これまでの疲労もあり、昼過ぎだったので峠で雪洞を掘りたいと思ったが、驚くほど積雪が少ない。南岸低気圧が通過しているためか気温が高く、限りなく雨に近い湿った雪が降っていた。低気圧の通過後は冬型気圧配置となり、再び大荒れの予報が出ていた。

できれば新雪がたっぷりと積もる前に赤谷山の急登を終わらせておきたい。重い足に鞭を打って進むこととした。

ジャケットにまとわりつき固体から液体へと変わる雪は厄介で、身体がどんどん冷やされる。雪質は最悪で、いくらステップを刻もうとしても脆く崩れていく。もはや気力だけで、とにかく歩き続けた。

ようやく斜度が緩んだので、雪洞を掘れる場所を探す。吹きだまりを見つけて穴を掘るが、十分な深さを得られないうちに笹が出てしまった。私は雪洞は無理とあきらめていたが、経験豊富な和田の勘で奇跡的に雪洞を掘れるだけの深さのある場所を掘り当てることができた。まさにここ以外はないという場所だった。天候はすでに悪化して、吹雪の中テントを押し込めるだけの穴を掘ることができた。あたりはすっかり暗くなっていた。

6日目は停滞。終日、猛烈に吹雪いていた。雪洞内は極めて快適で、外の嵐はどこ吹く風だ。大量降雪が予想される際のポイントとして、寝る前に入り口をブロックで塞いでしまうやり方が有効だと思う。入り口を開けていると寒いし、どのみち雪で埋まる。吹き込んだ雪は雪洞内にも積もって後々の除雪が面倒だ。あらかじめ塞いでおけば除雪は最小限。新雪は空気をふんだんに含んでいるので、一晩くらいなら全く問題ない。ただし、くれぐれも残雪期は行なわないように。水分を多く含んだ雪は窒息の恐れがある。

停滞日はいつも心が沈みがちになり辛いものだが、今回の山行では全くと言っていいほどそれがなかった。行程ができ過ぎなくらい順調に進んでいるし、食糧、燃料、日程にも余裕がある。

そして、3人とも雪山テント生活は熟練していて、全くストレスを感じなかったからだ。お互い何を言わずとも必要なことをする。例えば、火器を押さえておくべきときは自然と手が出るし、雪をテント内に持ち込まない配慮や、結露を小まめにふき取るなどさまざまな細かいことを徹底できている。和田とは初めての本格的な山であったが、10年以上一緒に山行を共にしているような感じだった。

山行を通して、食糧はふんだんに持っていった。特に夕食は1人当たりアルファ米150g。おかずも肉やバターを持参して満足のいくものとした。これが精神的な余裕にもつながったと思う。

7日目。この日は「冬型の気圧配置は次第に弱くなり、上層の寒気も抜けていく」との予報だったが、雪洞を出ると厳しい西風が吹いていた。気温も前日より随分と下がり、あっという間に手足がしびれてしまう。赤谷山への最後を登りきり、北方稜線の核心部へと入る。

横殴りの雪で視界は充分ではなかった。赤ハゲに至るころにはすっかりガスに覆われてしまった。並び立つ岩峰だけがガスの中に黒々と浮かび上がっている。ここからは切れ落ちた稜線を進み、岩峰を縫うように越えていかなければならない。

経験豊富な鈴木がリードしてどんどんロープを延ばしていく。時折、落とし穴のように雪を踏み抜いて岩と岩の隙間に落ち込んでしまう。全く予測不能で恐る恐る進む。

白ハゲから大窓への下降は視界のない状態で、見極めが難しかった。わずかながらも視界が得られるようになって、大窓のコルが見え隠れしていた。大窓へは尾根通しではなく、西側のルンゼを下降してから回り込んでコルへと下り立った。大窓のコルにてテントを立てるべく整地しているとガスが見る間に晴れて、正面に池ノ平山が壁のように立ちはだかっていた。夕景にダイヤモンド・ダストが舞い、光のいたずらかサンピラーが輝いていた。心奪われる絶景に幾度となくシャッターを切った。

8日目。池ノ平山への長い登りが始まった。下部は雪壁で雪が深くかき分けながら進む。まばらな樹林が途切れるとクラストした広大な雪面を登るようになる。技術的難度は低いが、ひとたび足を滑らせれば谷底までまっしぐらだ。

朝から快晴で高度を稼ぐたびに視界が開けてくる。振り返ればこれまで歩いてきた長い長い山稜がうねっている。池ノ平山北峰に着くと剱岳本峰が随分と近く見えている。ここから池ノ平山南峰へは距離にしてはわずかだが、一筋縄ではいかない難しさがある。小さなアップダウンだが時に岩峰が行く手を阻んでいる。東面を巻く際は、胸まで没するパウダー・スノーで歩みは遅々として進まない。天気はとにかく良いので後続の2人は日向ぼっこしながら待っていたが、先頭を行く鈴木は相当苦労したに違いない。

昼前に南峰へと達し、懸垂下降を交えて小窓のコルへと下る。コルから小窓ノ頭へ再び長い登りとなる。広い斜面は不安定な積雪では恐ろしくて取り付けないが、積雪も安定していて安心して登ることができた。リズム良くステップを刻み高度を稼ぐ。一切のムダを省き、最小限の労力で身体を持ち上げていく。疲労もピークに達し、そろそろ行動を終えたいところだが、貴重な晴天の1日を1分たりとも無駄にすることはできない。

小窓ノ王の基部を回り込んで、三ノ窓へ下る。懸垂とクライムダウンを交えての急峻な下降である。三ノ窓にテントを張って、長い1日を終える。眼下に富山の街の灯りが星屑のように瞬いていた。

9日目。午後から大荒れの予報が出ている。目前の池ノ谷ガリーは過去に何度も雪崩事故が起きている場所だ。ここは大量降雪の前に、何としてでも越えておきたい。出発時は落ち着いていた降雪も徐々に勢いを増している。見る見るうちに積雪は増え、追われるようにガリーを詰めていく。池ノ谷乗越に着いた時には完全に天候が崩れていた。

天気は悪いが、まだ早い時間だったので、とにかく進めるだけ進むこととする。激しいスノー・シャワーを浴びながら、長次郎ノ頭へのルンゼを登る。途中、稜線の側壁をトラバースしていると10mほど上部から雪崩を誘発した。幸い上層の20cmほどで、身体が持っていかれることはなかった。

長次郎のコルへは13時過ぎに着いた。すでに吹雪となっていたし、翌日、天候はさらに悪化する見込みだった。その先もしばらく荒れた天気が続くようなので、長い停滞に耐えるられる大きな雪洞を時間をかけて掘った。

10日目。暴風雪のため、停滞。この日は大晦日。快適な雪洞の中でのんびり過ごす。ラジオを聞いたり、トランプをしたり。昼は持参した年越しそばを食べた（もちろんインスタントだが）。

11日目。雪で埋められた雪洞を出ると、まさに初日の出が昇ろうとしていた。予報では低気圧通過前の疑似好天が訪れるらしい。わずかなチャンスをつかんで、本峰を越えてしまいたい。

烈風吹き荒れる中、本峰を目指す。粉雪が舞い上がり呼吸が苦しい。風は私たちの身体を翻弄し、少しでも油断すれば吹き飛ばされそうになる。それでも歩みを止めず歩き続けた。

剱岳の山頂に立つが、感傷に浸る余裕はない。風下側に避難して早月尾根下降のチャンスを窺がう。風が落ち着くのを待つが、一向にその気配はない。雲が湧き始めたので覚悟を決めて下ることにする。吹き上げる風がすべての余裕を奪う。立ち止まれば、ただちに身体が凍ってしまいそうになる。普段ならロープを使って下りる場所も、お互いの技量を信じてクライムダウンしていく。しばらくすると予定よりも前倒しで天気は崩れ、視界が完全に閉ざされた。

早月尾根の下降は難しい。枝分かれする尾根を慎重に見極めながら下っていく。ここでは積雪期の早月尾根を良く知る和田の経験がとても頼りになった。途中、進路に迷う場所があったが、息の合った3人のチームワークで焦らず間違えを修正しながら進むことができた。早月小屋が近づくとトレースが現われ、ようやく安堵することができた。

完全縦走を達成した、右から佐藤、鈴木、和田の３人

早月小屋には富山県の山岳警備隊が詰めていた。中に入ると温かい飲み物で迎えてくれた。早月尾根往復の登山者は、悪天のためすべて下山を済ませた後だった。

重い体を引きずりながら長い早月尾根を下り馬場島へ。警備隊派出所にて正式に下山の報告をする。心配ばかりかけている警備隊の皆さんには頭が上がらない。恐縮する心とは裏腹に、差し出してくれるミカンやお菓子に伸ばす手がとまらない。時に身体は意思とは無関係に動くものだ。

長い縦走、これまでの挑戦を回想しながら、長い林道を歩き続けた。振り返ればあっけなく縦走は完結したように思えた。今回はすべてがうまい方向に運んだと思う。天候、積雪、メンバー。そして過去2回の教訓が私を導いてくれた。山と正面から向き合った日々は、かけがえのないものであった。

（日程：２０１９年12月22日～２０２０年１月１日
メンバー＝佐藤勇介（40歳）リーダー、鈴木啓紀（39歳）、和田淳二（44歳））

記録

本州分水嶺縦走　山のあなたの空遠く……

津軽半島・竜飛崎から上越国境・三国峠まで

大島康弘

幸運のスタート

中学生の頃、分水嶺という言葉を知った。地図帳を広げて、流域を分ける峰の連なりや太平洋と日本海を分ける本州の山脈を赤鉛筆でなぞったことを覚えている。長じてからは、そこを歩いてみたいといつからともなく考えていた。

韓国清洲市に仕事で3年間住んだ折、地元の「東進山岳会」に入れてもらい、足繁く山に通った。赴任中に登った山は73座を数える。会長の金さんは雪岳山（ソラクサン）（1708m）と韓国本土の最高峰、智異山（チリサン）（1715m）を繋ぐ全長850kmにおよぶ脊梁山脈を歩き繋いでいて、踏破は間近であった。

韓国では北朝鮮のシンボルの山、白頭山（ペクトゥサン）から雪岳山を経て智理異山に至る大分水嶺を「白頭大幹（ペクトゥテガン）」と呼び、5万図付きの全行程ガイドブックも書店に並んでいる。アパラチアン・トレイルのように、韓国でも大分水嶺縦走を目指す人がたくさんいるのだ。

僕も本州の大分水嶺を踏破してみたい。夢はにわかに現実味を帯び、さっそく、「本州大幹縦走 島田市 大島」と印刷した赤布（ピンクのリボン）を2000枚注文した。「本州大幹」は「白頭大幹」からの借り物である。本州を縦に貫く脊梁山脈に、点々とピンクのリボンが揺れているなんて、想像しただけでもワクワクする。

帰国から4年後、退職した僕は津軽半島最北端、竜飛崎「階段国道339号」の起点に第一歩を記した。57歳、20

竜飛崎階段国道の石段に第一歩を印す。竜飛崎にて

02年8月1日のことである。ここから大分水嶺が関門海峡に沈む地点を目指す。本当にそんなことができるのだろうか。

その日は、昼前から強風が吹き始め、視界もなくなってすさまじい嵐となった。日本海を見晴らす「眺瞰台」のトイレの陰に、風を避けて必死でテントを張った。天は僕の度胸を試したとしか思えない。

翌朝はバイクに乗った農夫に「この間、熊が出た」といきなり脅された。前日、増川森林事務所を訪ねた時、所員の話では数日前、地元の夫婦から熊を見たという届けがあったという。津軽半島では過去70年、クマ出没記録がなく、夫婦が見た獣は茶色というから、何かの見間違いだろう、とのことだった。

農夫のひと言で恐怖が蘇った。アイヌ民族最後の狩人、姉崎等さんの『熊に会ったらどうするか』を読んだばかりで、ヒグマは空のペットボトルをペコペコ鳴らす音が嫌いという。ツキノワグマも嫌いだろうと、胸ポケットに空のペットボトルを入れてきた。それをペコペコ鳴らしながら、戦々恐々、稜線の歩道に分け入った。

驚いたことに、地図に記されている稜線歩道は笹薮に没して跡形もない。その日、6時間笹薮と格闘し、赤色のレ

インパーカーは笹の煤で黒く染まったが、稼いだ距離はわずか1・8㎞。大分水嶺縦走など、望外の夢であったと納得した。

森林事務所に断念したことを電話で伝え、稜線から撤退した。壮大な山旅計画は2日目にしてあえなく挫折。見事にはじき返されてしまったが、なぜかさわやかな気分であった。

僕の敗退の知らせを聞いた増川森林事務所のベテラン職員、奥寺さんは静岡くんだりからやって来たドンキホーテに同情したのであろう、吉田松陰が北方の守りを検証するために越えたという津軽最北の峠、算用師峠を越えて帰ったらどうかと慰めてくれ、翌朝、僕を軽トラで「みちのく

本州分水嶺縦走ルート図

松陰道登山口」まで運んでくれた。

峠に立って地図を見ると、僕が断念した地点まで明日にも届きそうな距離である。ありがたいことに、大きな握り飯2つ（コンブで巻いたコッペパン型、津軽独特のもの）と水とお茶をいただいたので、食料は十分だ。意を決して笹薮に潜り込んだ。そして翌日の昼下がり、断念した地点に到達した。あの日の深い充足の喜びは今も忘れない。

津軽山地縦走は奥寺さんをはじめ、半島に散在する森林事務所の方々の心温まる支援の賜（たまもの）である。当時の増川森林事務所長・庄司和哉さんが「本州を縦に切る」と題して僕との会見を記した一文を東北森林管理局青森分局発行の機関紙、『青森林友』（最終号）に寄せている。

大分水嶺踏査の試みを奥羽の山に精通している森林官がどのように感じたか、全文をここに書き写そう。

「えっ！　本気でそんなことを考えているんですか？」

彼と初めて話をした時の素直な反応だった。

2年ほど前のある日、三厩村の商工会から森林事務所に電話が入った。何でも静岡に住む男性から問い合わせがあり、三厩の山について教えていただきたいことがあるという内容だったらしく、山のことに詳しい森林事務所で対応してくれないか、というものだった。もちろん快諾した。

ヒバについての問い合わせなのか、はたまた増川岳の登山についてかと資料を用意しているところに、件の男性から電話が入った。大島と名乗ったその男性は永年夢見た計画を実行するため、三厩・小泊界の地形や林況を聞きたいのだという。聞くと彼の計画はとてつもないもので、達成するにはかなりの体力と根気そして運がなければ困難だろうと思った（少なくとも私はそう感じた）。

その計画とは、本州の分水嶺（青森県竜飛崎から山口県長府付近まで）を単独踏破すること。名付けて『本州大幹縦走』である。本州縦断や日本一周といった言葉はよく耳にするが、ほとんどはすでに作られている道路がその舞台だろう。しかし彼の場合は山の中を歩くため道がなく、ついでに言えば尾根であるが故に水もないのだからつらい。

彼が最初に森林事務所を訪れたのは一昨年の夏。壮大な計画がいよいよ始まる。「頑張ってください」とエールを送り、山火事と遭難にはくれぐれも気をつけ

てと付け加えて彼を見送った。しかしこの年の夏は雨が多く、夢の第一歩目は決して順風満帆とはいかなかったようだ。その雨にもましてやっかいなのはチシマザサ（根曲竹）で、背丈以上に成長し、密生している「ヤツら」を漕いで進む大変さは、経験したことのある人なら思い浮かべただけで眉間にシワがよるのでは？　しかも彼の場合は20数キロの荷物を背負ってだからなおさらだ。

二年目の昨年は、近くのO森林事務所のKIさんや東北地方の三角点にとても詳しいT室のKUさんらのサポートもあり、思いのほかスムーズに進むことが出来たと喜んでいた。

この2年間で計4度の来青、約20日間かけて青森まで到達。津軽半島の行程はクリアした。

彼の夢はまだ始まったばかり。これからは熊のテリトリーに踏み入ることもあるだろう。もしかしたら無意識のうちに蜂の巣を揺らしてしまうかもしれない。まだまだいろんな壁が待っているだろうが、この計画初の挑戦者として頑張ってもらいたい。

こうした出会いがあることも、森林事務所で働く者にとってはひとつの楽しみになっている。

竜飛の岬に立って彼の進んだ足跡を目で追っていると、なぜか行ったこともない山口県長府の景色が浮かんでくるから不思議だ。

これから向かう奥羽山脈付近の皆さん、もし彼を見かけたら温かい声をかけてあげてください。

日本山岳会の中央分水嶺踏査始まる

第一回目成功の立役者、奥寺さんは僕の津軽山地縦走の進み行きを地図を見ながら、今頃僕がどの辺りを彷徨（さまよ）っているのだろうと想像するのが楽しみだと仰（おっしゃ）った。そして、自衛隊に訓練などで竜飛崎から算用師峠までの山域を縦走しているか確かめてみたが、その実績はなく、僕が最初の縦走者だろうと話された。

三厩村で育ち森林官を長く勤められた人の話だから、僕もそれはありかもと思い始めていた。津軽山地の笹の海を泳ぎ、時には空中遊泳さながら、笹竹を踏みつけて強引に前進したのは、パイオニアワークという自負にあずかるところが大きかったと思う。

その思いが2年目にして見事に挫（くじ）かれた。日本山岳会創立１００周年記念事業として「中央分水嶺踏査登山」を行なうと、本部から全国25支部に檄が飛んだのだ。２００４

年から2年間で北海道から九州まで、各支部会員を動員して踏査するというものであった。

意気揚々と歩き始めた最中（さなか）になんと間の悪いことか。これから先はＪＡＣの会員が歩いた後をたどるという、言わば二番煎じの稜線歩きになってしまう。よりによってなんで今の時期に……。僕のモチベーションが大きく低下したことは言うまでもない。

しかし、僕がこの企みを思い立ったのは、パイオニアとしての射幸心からではなかった。大分水嶺を歩いてみたいと思った人はすでにかなりいたはずで、僕もその一人になりたいと考えたからではなかったか。それに僕の場合は、竜飛崎から順次歩き繋ぐことで連続性のある物語を紡ぐという目標があるではないか、と思い直した。

とは言え、困難に遭遇すると「こんなことになんの意味があるのか」と自問したことも、正直、幾度かある。

奥羽山脈に入ると、行く先々でＪＡＣ東北支部会員の支援をいただき、それが踏査の励みになった。大分水嶺の旅が奥羽山脈にさしかかる頃、たまたまＪＡＣの中央分水嶺踏査事業と重なったことで、いろいろな方を知ることになったことを思えば幸運であった。

２００４年に着手した中央分水嶺踏査事業に関しては、会報「山」に踏査報告が引きも切らず掲載され、踏査の進捗率がパーセンテージで示されるなど、分水嶺にまつわる各支部のエピソードで紙面は賑わった。

２００６年7月16日、三峰山から鷲ヶ峰踏査完了をもって信濃支部分水嶺担当責任者、中野前支部長が「北海道から鹿児島県まで５０００kmに及ぶ日本中央分水嶺踏査が完了したことを宣言いたします」と締め括った。

同じ年の1月、僕はアコンカグア登頂後、凍傷で左指4本の第一関節を切断し、2本の指の先端を切除するという、取り返しのつかないミスをした。

まだ傷の癒えない7月、傷心の想いを忘れるべく、左手に大きなゴム手袋をはめて秋田駒ヶ岳山麓、国見温泉から仙岩峠まで2日間の山旅に出た。ＪＡＣが中央分水嶺踏査終了を高らかに宣言したことも知らず、その2週間後のことであった。

皮肉なことに、ＪＡＣ中央分水嶺踏査完了の年は、僕の登山人生最悪の年だったのである。

薮と雪稜を行く

40回目の山行でようやく昨年の9月、上越国境・三国峠にたどり着いた。竜飛崎からの踏査距離はキルビメーター

の計測では１００８㎞。登降の合計は７万40ｍに及ぶ。塵も積もれば山となる。分水稜線上での行動日の合計は１６１日。平均移動距離は６・３㎞／日である。

東日本の大分水嶺稜線を全域にわたって精密にたどったわけではない。山形県最上町と宮城県鳴子町の境界にあるみみずく山付近から翁峠（おきな）に至る分水稜線の約９㎞の区間は、２５０ｍ（最大標高差）下を並走する林道を歩いている。今思えば少し残念な気もするけれど、あの時は体調不良（腎結石）の上、３日間の薮漕ぎで消耗し、はなから稜線の薮漕ぎは念頭になかった。

八幡平―秋田駒ヶ岳、和賀岳―女神山、尾瀬周辺（田代山―至仏山）、谷川連峰など登山道が整備された地域もあるが、大半は道なき道を行く、薮漕ぎの連続であった。

笹薮に慣れない頃、朝一番、勇んで薮に頭を突っ込んだものの、その密生度に恐れをなして思わず後戻りしたことがある。「バカ！　引き返してどうする」自分で自分を叱って、また突っ込み直したものだ。

栗駒山から鬼首峠（おにこうべ）に繋がる山域を２００８年10月に通過した。薮が濃くて、無雪期の縦走記録はないという難所である。太い笹に蔓が絡み、積雪のせいで上方に伸びることができず、枝をタコ足のように八方に広げたブナも加わ

茎を根元から振り分けてから一歩を踏み出す。山猫森で

り、正直途方に暮れた。山猫森から竹ノ子森の通過では、5㎞進むのに2日もかかっている。

こうなると水の確保が切実な問題になる。ブナの根元でビバークする時、試みにコウモリ傘を逆さまに置いたら、明け方雨が降り、朝食に使っても1ℓの水が残った。ブナの葉から滴り落ちるのは水だけではない、枯葉、ゴミ、虫の糞も混じるから、ほのかに黄色味を帯びている。この際、それは問題ではない。さらに途中で涸れ沢の濁った溜まり水も汲んだ。

栗駒山を越えて6日目、ようやく須金岳に達した。膝の高さほどのブッシュに覆われたなだらかな山頂は、標識もなければ踏み跡もない。登山対象の山と聞いていたので、ここまで来ればなんとかなると頑張って来たのに、また番狂わせだ。

地図には300m先の稜線上に歩道の破線がある。よしんば廃道でも道の名残(なごり)くらいはあるだろう。そちらに向かって藪を漕いだ。思いがけず道に飛び出した時は、危機を脱した嬉しさのあまり、「出た！」叫んでいた。

鬼首カルデラの外輪を巡る遊歩道は、幅2mほどに綺麗に刈り取られ、秋の陽射(ひざ)しにきらきら輝いている美しい道であった。藪から突然、山道に出た時は、いつも山道が美しいと感じる。

実際、長い時間をかけて踏み固められた山道は自然に調和して美しい。ついでに言えば、ストックで掘り返され荒れ果てた登山道ほど醜いものはない。腹が立ち、帰りたくなるほどだ。だから僕は無雪期の登山で、ストックは持たないことにしている。

遊歩道は、鬼首の谷を見下ろす素晴らしいビューポイントの連なりである。江合川は山腹のあちこちから、温泉の湯煙の立ち昇る荒雄岳を一周するように円を描いて流れ、その直径は10㎞に及ぶ。典型的カルデラ火山地形である。僕はこの不思議な地形の大パノラマを目の当たりにして、ひたすら藪を漕いだ苦労が報われたと思った。

雄大な景色はほぼ2㎞にわたって展開し、外輪山を逸れてこれから里に下ろうとする地点には、なんと「須金岳山頂」と記した標柱が立っているではないか。山頂から180mも離れた地点が山頂だとは！　謎が氷解した（巻機山でも同じ経験をしたが、こちらは250mのずれである）。

全行程藪漕ぎの連続、6日間奮闘して獲得距離はわずか23㎞。努力の成果（進んだ距離）のあまりの貧しさに、この時ばかりは心地良い達成の喜びはいつもの半分ほどで

あった。

ところで、藪漕ぎのコツは以下に集約できるだろう。

1・稜線の最大傾斜線をたどって登り、下りは最小勾配線を忠実にたどること。笹は尾根の両側にしな垂れるから、その真ん中を行くと比較的歩きやすい。

2・笹は脚を引っ掛けないよう根元で丁寧に左右に掻き分け、足を置くスペースを作ってから一歩踏み出す。ひたすらこの作業の繰り返し。三昧の境地を味わう。決して急がない。

3・笹藪のトラバースはしない（というより不可能な場合が多い）。ルートを誤った時は、稜線に直登してやり直す。

濃い笹藪に当初はうんざりしたものだが、よくしたもので、今では右記の心得に従って平常心で臨めるようになった。

チシマザサは東北では１０００ｍ前後でよく繁茂する。笹藪は津軽山地、奥羽山脈が手強い。帝釈山地以西ではチシマザサと異なる種も出現して、全般に笹は丈が低くなり、見通しがきくので比較的容易である。ただし、灌木の藪は別だ。薄いところを探して身体を押し込み、突き進むほかはない。根雪に圧されて直立できず、タコ足のように八方

津軽のチシマザサは背丈を超える。四ツ滝山にて

春の嵐に3日間閉じ込められた。08年大鏑山にて

に枝を這わせる木は特に厄介だ。

分水嶺の山歩きを始める前は気楽に考えていた。杣道（そまみち）、登山道、営林署の監視道、県市町村の境界の切り開きなど、地図には記載されていなくても、分水嶺には何らかの踏跡があるはずだと楽観的に考えていた。

しかし、実際に歩いてみると稜線の大半は見通しのきかないチシマザサの密生地。かつてはあったはずの歩道はチシマザサに覆いつくされて跡形もない。営林署は森林事務所と名称を変えて活動を著しく縮小し、山を巡る管理歩道は放置されて久しい。自治体は行政区画境界の刈払いや山道の維持管理に熱意を失ったようだ。

山は生活の場からは遠い存在となり、かつて山中を縦横に巡っていた杣道もほとんど消滅してしまっている。

もし、僕が若い頃に分水嶺を辿ることを始めていたら、もっと容易だったに違いない。

薮漕ぎが少なく距離も延びる残雪期も歩いた。寒いのは苦手だから、春になって笹薮が立ち上がる直前を狙う。雪庇の残骸が帯状に残っている頃が最適なのだが、この時期、山は往々にして冬に逆戻りするので、冬山の装備を疎（おろそ）かにできない。

東北は僕にとって遠隔地ゆえ、なるべく1回でたくさん歩きたいから10日分の食料を持って、5～8泊の旅をした。ザックの重さは25kgを超える。

南八甲田、八幡平、和賀岳、三界山、禿岳（鬼首）、船形山、蔵王、栗子山（米沢）、吾妻山の山域を積雪期に、時にはスキーを履いて縦走した。凍傷で痛めた指は寒さに弱い。皮膚が破れ、爪がぐらぐらになることもあった。そして、春の東北は風が強い。会津の御霊櫃峠では匍匐してもの転がされた。

今振り返ると、あの頃は無鉄砲とも思える全力投球で、ひたすら南下西進した。記録を読み返すと、当時の心境がありありと蘇り、今でも緊張する。

4年前、腎臓の働きの指標であるクレアチニンの数値が突然上昇し、定期検診を受ける身となった。医者からは過激な運動を避けるように忠告を受け、引っ込み思案になったことは否めない。中部山岳地帯に至り、入山が容易になったことも手伝って、山行は3泊程度に抑えている。

大分水嶺縦走の装備と水の確保

藪を効率的に攻略するには、それなりの装備が必要である。当初、僕は縦走登山スタイルであったが、徐々に進化して、現在はザックを背負った山林労働者のいでたちである。

枯れた笹竹の軸が顔を打つことがある。目に当たったら大変なことになるので顔の保護は重要だ。保護メガネやヘルメットに装着する顔面ガードなど、いろいろ試してきたが、今は顔の上部を覆うことができるサンバイザー付きヘルメットを愛用している。

ザックが藪に引っ掛からないように、余計なものはザックに装着しない。忘れ物、落とし物をしないために荷物は常に1つ、ウエストポーチも持たない。恥を晒せば、大分水嶺の稜線上に僕はさまざまな大切な物を落としてきた。スェーデン鋼ナイフ、スパッツ、グラウンドシート、手袋、折り畳み傘、熊除けベル、ヘルメットに装着する顔面ガード、トーメン製高度計などなど。最近ではガーミンのGPSを藪に引っ掛けて失った。身から出た錆びとは言え、勿体ないことをしたものである。

見通しのきかない山頂で、目指す稜線に乗るのは難しい。往々にして支稜は山頂から数十m下方から派生するので、目に入る情報を総動員して判断したつもりでも、目指す稜線に乗れないことがある。自分に腹を立てても仕方ないことで、じっと堪えてやり直す。トライアンドエラー方式で

ある。

不安になった時は、現在地を的確に知ることが重要だ。僕は2万5000図の大分水嶺の稜線上に、あらかじめ10秒ごとに経緯度線を引いておく。この補助線なしに、行動中にGPSの数値を地図に正確にプロットするのは不可能である。

1秒のずれは東西23m、南北30mに相当する。迷った時、正確に現在地を知るためには1秒以下の値が重要になってくる。ルートが判らない時は、10m移動してはGPSの数値を地図に落とし、また10m移動して計測する。これを数回繰り返して、目指す稜線を探すことは何度もあった。

そして、薮漕ぎ山行の必需品となったのが、秋田の岳友から仕入れたスパイク付き冬用長靴である。

長靴は登山靴に比べると少々歩きにくいこと、少々重いこと、足指の爪を傷めることなど、いくつかの欠点はあるけれど、雪中歩行は勿論のこと、捻挫予防、保温、スリップ防止、ヒル、ダニ対応、スパッツ不要、ぬかるみもなんのその、しかも脱ぎ履きの容易さなど多くの長所がある。

足首にサポートベルトを巻けば、爪を傷めることはない。ローラースケート用膝当てを装着していたが、長靴を履くようになって、それも必要と思わなくなった。

長靴が少々ダサイことは認めるけれど、総合性能は登山靴に決して劣らないと思う。奇異な目で見られるけれど、最近は普段の登山でも長靴を愛用するようになった。分水嶺縦走と東北の岳友から学んだ成果である。

また、分水嶺山行でその有効性を確認した大切な道具がある。剪定用ドイツ鋏である。薮漕ぎと言えば、真っ先に鉈や鋸を思い浮かべる人が多いと思うが、これ1つあれば鋸は勿論のことナイフもいらない。ドイツ鋏で直径2cmの枝は容易に切れるから、ペグはすぐ作れるし、ビバークのための笹刈りはお手のものだ。

僕は登山道の開削も、これがあれば意外に簡単ではないかと思う。両手にドイツ鋏を持って、2人で往復すれば帰りには快適な切り開きに仕上がるだろう。あいにく僕は件の事故のため、左手で鋏が握れないので、まだ実証はしていない。

最後にもう1つ、衛星携帯である。大分水嶺のかなりの部分は携帯電話が使えない。心配する家族を安心させる方法はないだろうか、万が一の時、どうやって生還するか、いつも気にかかっていた。いろいろ調べていくうちに、イリジウムの業務を引き継いだモトローラ社の衛星携帯電話にたどり着いた。

当時、衛星携帯電話は緊急時以外使用禁止であったが、「持ち歩くこと自体は禁止ではない。非常時以外は使用しないという条件で貸すことはできる」とのことで、２００４年頃、2度レンタルしたことがある。重量４００ｇ、リース代１８００円／日、使用料３４０円／分。

しかし、ＧＰＳを装備した上に衛星携帯まで持参するのは登山本来の趣旨にそぐわないし、荷物を少しでも軽くしたいという観点から、結局、その後持ち歩くことをやめた。

山は危険を承知で登るもの。どこまで安全を担保するかを決めるのは難しい。

大分水嶺縦走の関心事の1つは、言うまでもなく水の確保である。残雪期を利用すれば問題ないが、無雪期の入山では、事前に綿密な給水計画を立てなければならない。

1週間分の食料はなんとか持てても、水は6ℓがせいぜいだから、2日目には給水地点にたどり着く必要がある。下山地点は、次回の山行で給水地点に2日以内にたどり着けることを確認した上で決定する。

しかし、計画通りいくとは限らないので、時には汚れた水も利用する覚悟が必要だ。晩秋の十和利山の山麓、迷ヶ平付近の小国牧場でビバークした時は、発泡スチロールの箱に溜まった黄色の水を薄氷を割って掬(すく)った。コウモリ傘を逆さまにして雨水を集めることもした。この方法は大変効率良く多量の水を集めることができる。悪天で終日停滞する時、水の心配をしないで休養できるので、雨はむしろ歓迎だ。

動物たちとの出会い

津軽山地でビバークした時のことである。寝る前に用足しに外に出た時のことだった。足元の笹薮でガサガサと獣が動いた。パンパンと激しく手を打つと漆黒の闇に響き渡り、獣はたまげて斜面を転がるよう駆け下りていった。途中、岩がガラガラと転がる音が混じり、しばらくするとずっと下方から「アン、アーン」と鳴く声が響いた。「痛い、痛いよー」と泣いているように聞こえた。夜目のきく獣とはいえ、あの速さで一目散に駆け下ったら、足元の確認どころではないはずだ。ケガをしたかも知れないと思うと気の毒になった。

僕の1人用の黄色のテントは、ロウソクの明かりでボーッと闇に浮き出て見える。物見高い動物が覗きに来ていたのかも知れない。それにしても、あの獣はなんだったのだろう。

その翌日、昼食を済ませ歩き始めると、内股にチクッと針で刺されたような痛みが走った。直径5㎜ほどの茶色い艶のあるダニが食いついていた。ダニの腹に親指の爪を差し込み、腹部を摘んで頭部が皮膚に残らぬようゆっくり引っ張って剥がした。

ダニの口吻部のメカニズムがすごい。頭部の、両側から湾曲した鎌を皮膚に刺し込んで頭部を固定し、次に中央の槍を突き刺し、体液を吸う。

その日の夕刻、明るい疎林にテントを張り終え、中で寛いでいると、テントの上を数えきれない数の黒い小さな影がもぞもぞ動いている。昼に噛まれたダニである。密閉式のテントで事なきを得たが、ツエルトのような簡易テントだったら、悲惨なことになっていた。

僕が噛まれたダニは、ヒバの林で春から秋にかけて活動するとのことである。その年の秋の山行でも2度噛まれたが、津軽山地を抜けてからダニの被害は「真木真昼秋田県立自然公園」を歩いている時、小さな黒いダニに手首を噛まれた1件だけである。

これは余談だが、学生の頃ヨーロッパをヒッチハイク旅行した時のこと、マドリードに向かう途中で行き暮れて葡萄畑にテントを張って野宿した。朝起きたらテントは一面カタツムリに覆われ、腰を抜かしたことがある。

もう1つ、虫の被害で忘れられないのは秋に栃木・福島の県境を男鹿(おが)岳から山王峠に下る時のこと。進路を誤り、GPSで現在地を確認しようと枯草の斜面に腰を下ろすや否や、アブのようなものが何匹も目の前を旋回し始め、手で払うといきなり手や顔をチクンとやられた。たまらずその場から逃げ出したが、しつこく追いかけられ、長靴の中まで入り込み、合計10ヶ所刺された。黒スズメバチの巣を踏んだらしい。幸い腫れることもなく、ショックも起こらず事なきを得た。

獣は穴熊、猿、熊、兎、カモシカ、鹿、猪などひと通り遭遇した。

背丈を没するチシマザサの笹薮は1m先が見えない。熊と鉢合わせするのは嫌だから、時々「ホー、ホッ！」と声高に叫ぶ。TVで教わった熊除け発声法である。

爪の形状も顕(あらわ)な雪上の足跡、鋭い歯や爪で噛み裂かれた木製の標識やプラスチックの境界杭、巨大な糞、熊棚や折り取られた太い枝など、見るたびに緊張したが、和賀岳で雪稜をこちらに向かってくる黒い姿を見つけた時はうろたえた。思わず大声で「来るな！」と叫んでいた。

熊対策グッズはナイフ、ベル、鈴、ホイッスル、大音響

発生ボンベ、サイカプシン入り熊撃退スプレーなど、いろいろ持ち歩いた。しかし、僕の山旅は、熊の生活行動と大して違わないことに気づいてから、熊に恐怖することがなくなった。

近頃は撃退スプレーを腰に装着することもなくなって、携行するのはベルだけとなった。けれども「ホー、ホッ！」だけは欠かさない。

熊は餌の豊富な谷から谷へ稜線を越えることはあっても、長い距離、稜線をたどることはないので鉢合わせすることは少ないと思っている。一方、カモシカは時には何kmにわたって延々と稜線をたどることがある。

積雪期はカモシカの足跡をたどり、無雪期は彼らの作った獣道を外さないように歩く。獣道がなかったら、僕の山旅はもっと難渋していただろう。僕が山の動物たちに親しみを抱くようになったのは、自然の流れだ。

２０１６年の秋、会津の勢至堂峠を過ぎたあたりで、糞と鳴き声で鹿の生息を確認した。その翌日には猪に遭遇した。10mほど前方で雪を撥ね退けて笹が急に立ち上がると同時に、１mほどの猪が笹原を跳躍しながら横に走って森に消えた。こちらに向かって来なくてよかった！

ゲートまで送ってくれた実戦装備した隊員。布引山演習場にて

鹿やイノシシが、雪深い会津の山にも生息域を広げている。津軽の熾烈な薮漕ぎでは、鹿がいればこんな苦労をしなくてもいいのに、と思ったことを思い出した。このまま温暖化が進むめば、鹿や猪が津軽の山を跋扈する日が遠からず来るだろう。

次の日はさらに稀有な体験をした。今度は人間である。

羽鳥湖を過ぎると大分水嶺は自衛隊布引山演習場にさしかかる。トーチカが現われ、一瞬、戊辰戦争の遺構かと思った。山道は演習でよく歩かれているのだろう。落ち葉が散り敷かれて驚くほどきれいであった。間もなく広い砂利道に出た。遠くで砲声が響く。当たりませんように、見つかりませんようにと祈る思いで歩いていると、通りかかった幌付きの兵員輸送車に捕まった。

ゲートと思しきあたりで、助手席の隊員が僕の地図を持ってどこかに消えた。こんなところで放りだされたら、鎌房山の麓に辿り着くのに丸1日かかってしまう。参ったな。

待つこと10分、今度は顔に迷彩を施し、鉄兜をプラスチックの木の葉で偽装した、実戦さながらの屈強な隊員2名が乗り込んできた。深い森の中で、人知れずゲリラ戦に備えて訓練を積んでいる人たちがいるのだ。

「ゲートまでお送りします」

なんと僕の目指す鎌房山側の通用ゲートまで送ってくれるという。精悍な顔をした彼らが、なんと頼もしい庇護者に見えたことか！　チェーンを巻いた兵員輸送車は雪の急坂もなんのその、ぐいぐい飛ばして5㎞先の標高1000mにあるゲートまで運んでくれた。

彼らも僕も事情は違うがヘルメットを被り、自然のフィールドで頑張っているのは同じだ。視界から消え去る軍用車に向かって敬礼した。

根曲竹とブナ

2003年5月の中旬、津軽山地を玉清水山に向かって笹薮を分けていると、中年の夫婦に出くわした。突然、大きなザックを背負った白髭のバックパッカーがヌッと現われたのには、相当驚いたようだ。筍をザックに一杯採ったから、一服して引き返すところだという。来週になると筍採りがどっと繰り出すので、少し早いけれど採りに来たとの由。里に下る道すがら出会った山菜取りの老婦人は「筍は皮を剥かずに焼いて味噌をつけて食べるのが一番」と教えてくれた。

その翌年の春、津軽山地を歩き通した僕は、青森市の西

に連なる魔ノ岳から建設途上の青森空港を跨ぎ、残雪の南八甲田を経て十和田湖の南端、発荷峠にたどり着いた。84・6kmの長丁場である。

発荷峠に出迎えてくれた村上さんは、次に通過する迷ヶ平を案内してくれた。まさに「東南アジアのバザールの雰囲気」で、昔ながらの素朴な作りの店が軒を並べ、山の幸などを店の内外に、ところ狭しと陳列して独特の雰囲気をかもしている。周りに民家もないのに随分の人だかりだ。僕は初めて見るシドケ（モミジガサ）とボンナを一束買って土産とした。

ここは山菜の集積地で、これから筍の季節になると集荷のトラックが来て大変なにぎわいを見せるそうである。夫婦で1シーズン頑張ると、車が買えるほどの収入になるという。

津軽の山で会った筍採りの夫婦を思い出した。

会津の要衝、母成峠から中山峠を2012年秋に歩いた。南斜面は日当たりがいい。したがって笹藪も濃い。笹竹の茎が親指の太さ程もあり、今まで経験した藪の中でも最強の部類だ。

天狗角力取山の取付点に「入山禁止　無断入山者には罰金3万円を科す」と記した看板があり、一帯を有刺鉄線で

木漏れ陽が輝くブナの純林。割倉山にて

囲っている。この山の所有者はかなり意地悪な性格らしい。腑に落ちないので帰り道、タクシーの運転手に理由を尋ねてみた。

筍採りは万単位の金を払って入山の権利を買うので、他人の立ち入りを嫌って看板を立てたりするのだという。彼らにとっては死活問題なのだと、運転手は筍採りを擁護した。僕にとっては煩わしいだけのチシマザサ(根曲がり竹)が、土地の人にとっては自然の恵みとなっているのだ。残念なことに前年の福島第1原発事故以来、山菜の採取は禁止となり、山に入る人がいなくなったという。こんな山の中まで放射能の影響が及んでいるとは知らなかった。

真昼岳から南下する奥羽山脈は徐々に標高を下げ、最低部では300mに満たない分水界となっている。この分水界には横手市と北上市を結ぶ北上線、平和街道、秋田自動車道が集中している。その分水界から5km北に位置する割倉山に向かっていた時のことである。

ブナ林の木漏れ陽の中を気持ちよく歩いていると、茂みの中に2m×3mほどの黄色のペンキもまだ鮮やかな鉄筋コンクリート製の建物が、ほとんど横転しているのが目に入った。道もない山奥に忽然と現われたコンクリートの建物が、平地にもかかわらずひっくり返っている。狐につままれる思いであった。

あたりを見回すと、至るところにクレーターのような陥没がある。切り株が腐って地面が陥没したのだ。その陥没の直径はおよそ5m、深さは1m近い。このあたり一帯は、かつて巨木の森であったことが偲ばれる。

巨木の根元近くに建っていたコンクリート製の建物は、巨木が伐採された後、切り株が腐り表土の陥没と共に横転したと思われる。一帯では当時、コンクリート製の休憩小屋を必要とするほど大規模な伐採事業が行なわれたのであろう。稜線上に樹齢数百年と思われるブナの巨木が1本だけ大空に向かって聳えていた。

八甲田から蔵王に至る400kmに及ぶ「緑の回廊」奥羽山脈。さまざまな景色に遭遇して来たが、僕の脳裏に焼き付いた懐かしい風景は黒い森ではなく、チシマザサの艶やかな緑と、木漏れ陽に萌黄色の葉が映えるブナに覆われた、たおやかな稜線である。

心優しき人々

思えば、大分水嶺の旅は東北の人々との出会いの旅でもあった。そして、その愉しみが大分水嶺縦走を持続する支

えにもなっていた。

森林官の支援を受けることになったのは津軽半島北端、三厩村商工課の川村さんに電話をかけたのが発端である。増川森林事務所に案内され、それがきっかけで半島に散在する森林事務所の森林官の方々と知り合い、支援をいただくことになった。

「このままお進みください」

と記したメモが立ち木に結えてあり、僕のために数百mにわたって笹薮を刈払ってあったり、さらには飲み水のデポ、峠の送迎、宿泊の提供など、身に余る支援をいただいた。三厩の奥寺さんからは、5度も奥様手作りの弁当を頂戴している。

現場に精通している森林官の目に映った僕は、津軽の山の実態をまったく解っていない、無知な初老のピエロだったのであろう。その男が算用師峠まで11kmを4日かけて自力で繋いだ（実はたまたまの縁に恵まれたに過ぎないが）。そのひたむきさにほだされたのだと思う。

『あおもり110山』（東奥日報社刊）に大分水嶺上の峰が11座載っている。それが縁となり、著者の村上さんには山の情報のみならず、仕事の合間を縫って同行、送迎、山スキーの搬送まで引き受けていただいた。

津軽の懐かしい人たちを思い出すたびに、胸にこみ上げてくるものがある。

JACの中央分水嶺の踏査の最中に、東北の支部会員の踏査の後を追うように、僕は奥羽山脈に分け入った。踏査報告者に電話で現地の様子を聞いた。

踏査の大変さを実際に経験した者にしてみれば、単独で大分水嶺に挑もうとする遠方の会員からの問い合わせに、協力しない訳にはいかなかったであろう。青森支部、秋田支部、岩手支部、宮城支部、山形支部の皆様には資料の提供はもとより、宿の提供、同行、山行のモニター、送迎、差し入れなど身に余る手厚い支援をいただいた。

「東北の人はどうしてこんなに親切なんですか」

とぶしつけな質問をしたことがある。

それは、冬が長く雪の深い東北では、お互いに助け合わなければ生きていけなかった。今でもその思いが東北の人たちの心に生きているのではないか、との説明に、僕は心の深いところでしみじみと納得した。

僕の山行を見守り援助してくれる人たちがいる。それを意識することがどんなに力になったことか。パソコンに書き綴った329ページにわたる記録を今、改めて読み返す

と、孤軍奮闘した当時の緊張感が鮮やかに蘇る。と同時に、いかに多くの方々にお世話になったか、改めて思い出される。僕の後半の人生を豊かにしてくれた東北の友人を決して忘れまい。

6人の同行者

分水嶺縦走のすべてを単独で歩いたわけではない。これまで、6人の方が一緒に歩いてくれた。

村上さんは早春の野草が咲き競う魔ノ岳から梵珠山を、友人と2人で案内してくれた。

八幡平から秋田駒を越えて国見温泉まで、米国人のデイブとともに長大な夏の高層湿原地帯を歩いた。霧雨の中、ニッコウキスゲが華やかに咲き乱れる湿原にさしかかり、そこだけ陽が射していると錯覚した。

菊池さんと歩いた春の和賀岳では、雪稜に現われた熊の姿に仰天した。

北上線黒沢駅から栗駒山までの長丁場では、荻野さんと断崖の林道で足下の切れ落ちた雪壁をへつり、冷や汗を流した。

栗駒山の下りでは、背丈を超す深い笹薮に翻弄され、翌日、滝沢さんは花山峠で敢えなくリタイヤ。

そして、6人目は茨城県土浦市在住の川村さん。かねてより僕が近くまで来たら一緒に歩きたいと聞いていた。常磐線で北上した彼とは仙台で落ち合った。10年目の再会である。宮城・山形県境、関山峠から面白山、神室岳を経て笹谷峠に下った。以後、合計12回同行してくれた。

彼は東日本の沢を知り尽くしたベテランだが、僕の大分水嶺縦走のお供をするというスタンスを崩さず、差し出がましい口をきかない。そして、いつも僕の後ろに付く。支稜線に迷い込むことはよくあることだったが、引き返す羽目になっても、淡々として表情を変えない。食事はいつも彼が作ってくれる。

僕は山の共同生活技術には疎いし、段取りが下手なのでテントの中は物で埋まり、3時に起床しても出発は5時半になる。窮屈な2人用のテントに川村さんの私物が散らかることはない。眠る時も眼鏡を外さない。踏んづけられる心配がないからだ。

一度だけ、「熟達の度合いは足の強さではなく、準備をどれだけ早く済ませるかで決まります」と言った。

川村さんは、僕の敬愛する友人の1人である。

大分水嶺踏破者

ところで、僕が本州大分水嶺踏査を目指した２００２年以降に、本州の大分水嶺を踏破した強者（つわもの）が僕の知る限り３人いる。細川舜司氏は２００９年達成。39年の歳月をかけた。執行一利氏は２０１４年、28年目に下北半島・大間崎に到達した。町田有恒氏は、35年かけて２０１６年、壇之浦で完結した。３人とも分水嶺山行を重ねるうちに全ルートの完全踏査を思い立っている。

津軽半島北端、竜飛崎から歩き繋ぐことをテーマにした僕の場合は、17年かかって１０００㎞を踏破したに過ぎない。長年にわたって志を持続し、本州の脊梁を完全踏査されたことは、その苦労を知る僕にとっては脱帽のほかはない。

僕の場合は当初からＧＰＳを使用したけれど、３人は磁石と高度計のみで踏破されたのだろう。そのことを思うだけで、尊敬の念を抱かずにはいられない。

執行さんの踏査完了報告会（２０１４年6月28日）に出席した。新聞や雑誌で偉業が伝えられたにもかかわらず、報道関係者の姿はなく、一般からの出席者は僕だけという寂しさであった。

大分水嶺が注目されたのは、『日本の分水嶺』（堀公俊著、山と溪谷社刊）が出版された２０００年ころから、ＪＡＣの中央分水嶺踏査完了までの数年に過ぎなかった。

３人の偉業と、通常の登山では得られない分水嶺縦走独特の楽しみ方は、もう少し注目されてほしかった。

分水嶺縦走の愉しみ

津軽山地、奥羽山脈、帝釈山地、三国山脈からなる東日本の大分水嶺上には南八甲田、八幡平、乳頭山、秋田駒ヶ岳、和賀岳、真昼岳、三界山、栗駒山、禿岳、船形山、面白山、蔵王、吾妻山、安達太良山、三本槍岳、荒海山、帝釈山、至仏山、平ヶ岳、巻機山、谷川岳連峰が連なっているが、それらを繋ぐ稜線にはほとんど道がない。大部分がチシマザサの薮である。登山の概念で語れないのが大分水嶺縦走であり、2万５０００図が唯一の手掛かりである登山は総合力が求められる。

大分水嶺を歩き始めて以来、登山道を忠実にたどる登山にあまり喜びを感じなくなったことを白状しなければならない。

登山道を行く縦走は、道を失わないように歩くことが鉄則である。一方、大分水嶺縦走はルートが決まっているだけで、道がない。ルートに関する情報は地形図から読み取

赤石さんがリボンを見つけてくれた。男鹿岳で

るほかはない。行く先の景色も地形も植生も分からない。分水嶺縦走は、未知の山域をたどる発見の旅なのだ。登山とは一線を画した新しいジャンルの山歩きだと思う。

さまざまな状況に対応して予定のルートを踏破した時の深い充足の喜びは、登山では得られないもので、悟りの境地もかくやと思われるほどである。大分水嶺を歩く愉しみの大部分は、ここに集約できるのではないかと思う。

この山旅を通して、もう1つ学んだことがある。それはほかの生き物への共感と敬意だ。縦走中、熊に近い暮らしをしたせいで、身をもって理解できた気がしている。自然の中で暮らすすべての生き物は、環境に適応して与えられた命を生きようとする。例えそれが本能的であれ、僕はその能力に驚嘆せずにはいられない。人間だけが尊いのではない。この世界に暮らす生きとし生けるもの、そのすべてが尊いと心底思うようになった。

ピンクのリボンに「本州大幹縦走 島田市 大島」と青色の文字を印刷した赤布を、稜線の木々の枝先に結えてきた。人の目につく登山道の木の枝先に結えるのは、自分の行為を吹聴するようで気が進まない。でも人の痕跡のない稜線でこのリボンを見つけた人は、ふっと緊張が和み、安堵

するに違いない。そんな想いから、僕は好んで登山道のないところに赤布を結えてきた。その作業は、僕にとっても心の和むひと時であった。脊梁稜線で赤布は誰の目にも触れることなく、風に揺れ色あせていく。それでいいのだ。

一度だけ、このリボンを見つけたことを報告した山行記事を読んだことがある。また、同じ静岡支部に所属する赤石さんからは栃木・福島県境の男鹿岳で僕のリボンを見つけたと、リボンの写真を何枚も添えてメールが届いた。深い山奥で僕の赤布を見つけた赤石さんは、きっと心が躍ったに違いない。同じ藪を漕いだ者同士の心地良い連帯感を味わうことができたのは、リボンのささやかな効用である。

北の果てから連綿と歩き繋いだ大分水嶺の旅は、文字通り山あり谷あり、越し方行く末を眺め、充足と不安の繰り返しであった。行く先の風景が判らないところなど、人生そっくりである。一度きりの人生という長旅の途中で、『本州大幹縦走物語』を編むことができたことを喜んでいる。

これからも脊梁稜線の旅は続けるつもりである。当初、僕が想像した大分水嶺の山旅のイメージは、景色を愛でながらのんびり歩き、疲れたらそこで泊まる……、そんなのどかな旅であった。

ぐんま県境稜線トレイルが開かれ、避難小屋も新設された現在、僕の「本州大幹縦走」は今までのような緊張を伴うことはもうないだろう。これからはかねて夢想した、のどかな山旅が叶うかも知れない。

感謝の言葉

出かける度に「大丈夫かね」と不安を顔一杯に表わす母に、「自分ではどうにもならないことを心配するだけムダだよ」と、むごい言葉を返したことがある。無事下山したことを報告すると、電話の向こうで「大変だっけね」と心底安心する母の声はもう聞けない。

いつも気持ち良く送り出してくれる妻に、「帰って来なくても探さなくていい」と心ない言葉を吐いた。父には「山に登る奴は利己主義者だ」と言われた。その通りだと思う。その父も13年前に、母は7年前に他界した。

「本州大幹縦走」を人生後半のライフワークとして取り組み、都合１０００km余を歩き繋いだことで、支えてくれた人達の期待に多少は応えられたのではないだろうか。

東北森林管理局の森林官の皆さんには、身に余る支援をいただいた。特に奥寺英明さん、木下尚法さん、松尾亨さんには資料提供はもとより、送迎、宿の提供、差し入れな

ど一方ならぬお世話をいただいた。森林に精通するエキスパートに見守られているのは、何にもまして心強かった。『あおもり110山』の著者、村上義千代さんには、青森県全域にわたって応援していただき、愉しい語らいにも付き合っていただいた。津軽でお会いした人たちの真心のこもった支援が、どんなに励みになったことか。

そして奥羽山脈縦走は、JACの皆さんに見守られながら歩いていたようなものである。菊池修身さん（岩手支部）には和賀岳縦走にお付き合いいただき、佐々木民秀さん（秋田支部）、高橋二義さん（宮城支部）には縦走中、連絡事務所の役割までお願いしている。

また、渡辺誠さん（山形支部）には東日本大震災災禍の最中の2011年4月、二井宿峠で回収していただいた。今思えば、被災した人たちの苦しみに寄り添うことなく、自身の我欲のために縦走を敢行したことが後ろめたい。番城山の雪上ビバークでは、山が揺れるような大きな余震（マグニチュード7・4）に襲われ、天罰が下ったと思った。

そして、山形県境を歩き繋ぐ湯澤吉一さんには、駒ヶ岳から吾妻山にかけて何度も親身なお世話をいただいた。東北の大分水嶺を無事縦走できたのは、さまざまな人に励まされ、支えられたお陰だという想いを新たにしている。

ここに名前を挙げなかった方々も含めて、お世話になったすべての方に改めて篤くお礼申し上げます。ご縁を得たことは、僕の何ものにも代えがたい宝となりました。

縦走記録

	山行回数	コース	踏査開始	踏査日数	水平踏査距離	(累計距離)
		青森県				
2002年	第 1 回	竜飛崎～算用師峠	7/31	4日	11.0 km	(11.0 km)
	第 2 回	算用師峠～四つ滝山	10/ 9	4日	12.8 km	(23.8 km)
2003年	第 3 回	四ッ滝山～玉清水山	5/ 8	5日	20.8 km	(44.6 km)
	第 4 回	腰岳～大倉山～あすなろライン	10/ 4	5日	29.0 km	(73.6 km)
2004年	第 5 回	魔ノ岳～櫛ヶ峰～発荷峠	4/25	5日	84.6 km	(158.2 km)
		秋田県、岩手				
	第 6 回	十和田湖発荷峠～白萩平	10/27	6日	31.3 km	(189.5 km)
2005年	第 7 回	白萩平から八幡平	4/23	6日	65.7 km	(255.2 km)
	第 8 回	八幡平～乳頭山～国見温泉	7/14	3日	46.3 km	(303.7 km)
2006年	第 9 回	国見温泉～仙岩峠	7/29	2日	7.2 km	(310.9 km)
2007年	第10回	仙岩峠～和賀岳～薬師岳	4/18	3日	24.9 km	(335.8 km)
	第11回	真木渓谷～大甲～真昼岳	9/ 3	2日	17.4 km	(353.2 km)
	第12回	兎平～女神山～湯田高原	10/ 9	5日	29.3 km	(382.5 km)
2008年	第13回	湯田高原～三界山～須川峠	4/22	8日	61.3 km	(443.8 km)
		秋田県、宮城県				
	第14回	須川峠～栗駒山～須金岳～鬼首	10/ 8	6日	23.4 km	(467.2 km)
		宮城県、山形県				
2009年	第15回	須金岳～禿岳～中山峠	4/22	7日	36.9 km	(504.1 km)
	第16回	中山峠～翁峠～鍋越峠	10/15	7日	42.3 km	(546.4 km)
2010年	第17回	鍋越峠～船形山～関山峠	4/ 3	7日	35.8 km	(582.2 km)
	第18回	関山峠～面白山～笹谷峠	10/21	4日	27.7 km	(609.8 km)
	第19回	笹谷峠～蔵王	11/ 5	1日	15.5 km	(625.4 km)
2011年	第20回	蔵王～二井宿峠	4/ 4	5日	25.5 km	(650.9 km)
	第21回	二井宿峠～駒ヶ岳	5/14	3日	15.2 km	(666.1 km)
		山形県、福島県				
2012年	第22回	駒ケ岳～板谷峠（スキー行）	3/26	4日	15.1 km	(681.2 km)
	第23回	萱峠～吾妻山～母成峠	4/25	5日	37.4 km	(718.6 km)
		福島県				
	第24回	母成峠～中山峠	10/15	5日	24.0 km	(742.6 km)
2013年	第25回	中山峠～御霊櫃峠	3/15	3日	8.7 km	(751.3 km)
	第26回	御霊櫃峠～勢至堂峠	4/ 8	4日	26.1 km	(777.4 km)
	第27回	勢至堂峠～甲子温泉	11/19	4日	28.4 km	(805.8 km)
		福島県、栃木県				
2014年	第28回	甲子山～三本槍～大川峠	5/ 8	5日	23.7 km	(829.5 km)
	第29回	大川峠～男鹿山～山王峠	10/ 1	2日	12.9 km	(842.4 km)
	第30回	山王峠～荒海岳	10/21	4日	13.5 km	(855.9 km)
	第31回	荒海岳～安ヶ森峠	11/ 4	1日	5.6 km	(861.5 km)
2015年	第32回	安ヶ森峠～田代峠	4/16	4日	12.3 km	(873.8 km)
		福島県、栃木県、群馬県				
	第33回	田代峠～帝釈山～鳩待峠	10/ 2	6日	44.0 km	(917.8 km)
		群馬県、福島県、新潟県				
2016年	第34回	戸倉～至仏山～平ヶ岳～十字峡	4/15	5日	29.9 km	(947.7 km)
		新潟県、群馬県				
	第35回	十字峡～丹後山～本谷山～十字峡	5/22	1日	5.3 km	(953.0 km)
2017年	第36回	十字峡～丹後山～十字峡	5/14	1日	0 km	
	第37回	十字峡～本谷山～巻機山～清水	5/28	3日	12.8 km	(965.8 km)
2018年	第38回	清水～巻機山～山朝日岳～土合	5/20	3日	11.3 km	(977.1 km)
	第39回	土樽～茂倉岳～朝日岳～土合	10/13	2日	10.4 km	(987.5 km)
1019年	第40回	土樽～茂倉岳～谷川岳～三国峠	9/24	2日	20.2 km	(1007.7 km)
				(161日)		

記録

西ネパールに魅了されて

―ドルポやムスタンなど辺境の山旅から

稲葉　香

私は美容師のかたわら、１９９７年から年に一度は長い旅に出るライフ・スタイルを続けている。18歳でリウマチが発病して山に登るなど想像もできなかった私が、旅の延長で山と出会い、ヒマラヤ・トレッキングで大地の力に目覚め、５０００m以上の山を登るまでに復活することができた。病の再発と復活の繰り返しのなか、１２０年前に仏典を求めて日本人で初めてネパールからチベットへ密入国した大阪・堺市出身の僧侶、河口慧海師という人物に惚れ込み、その足跡を追って歩み続けている。２００７年には、西北ネパール登山隊（隊長＝故大西保氏）の遠征に参加させてもらったことをきっかけに、西ネパール通いが続いている。

私は慧海師の足跡を「慧海ルート」と名付け、当初は、２００３年から個人で行ける範囲内で楽しんでいたが、やはり一度は諦めていた核心部のドルポへ行きたいという思いがつのり、その方法を調べ尽くした。そのなかで07年、河口慧海プロジェクトの登山隊長・故大西保氏の存在にたどり着いた。山岳会の「さ」の字も知らなかったが、ご縁があり連絡先を教えていただいた。

ありったけの想いをメールでぶつけたところ、お返事をいただき、すぐにお会いすることができた。初対面のその日、私が「どうしたらドルポに行けるのか？」と聞くと、すでにその年に決まっていた慧海ルートの再調査の遠征に声を掛けていただき、参加できることになった。私にとっ

て夢のような流れで、なんの迷いもなく飛び込んだ。この遠征こそが私の初めてのドルポ行きであり、ヒマラヤ遠征となった。慧海ルートの再調査をしながら、慧海が越境したクン・ラ（峠）に立たせていただき、未踏峰カンテガ（6060m）にも、私は第2次隊で登頂させてもらった。それまでに、ネパールには個人でトレッキングと登山とで何度か行っていたが、大西氏とのドルポ遠征は別格だった。

続いて09年にも声を掛けていただいた。ドルポよりさらに西のムグ地方のジュムラからスタートし、国境のナムジャ・ラ東方にそびえるカプタン（5965m）に北西稜から初登頂し、さらにドルポへ横断する計画だった。私は1ヶ月遅れて現地で途中から合流し、参加した。その遠征では、未踏の山々が数多く存在することや、昔の探検隊が歩いた道を現場でリアルに体験させてもらった。

なかでも印象的だったことがある。西北ネパール学術探検隊（故川喜田二郎隊長）の分隊の故西岡氏たちが到達した「カルマロンを見た」という峠がある。ここから彼らは踵（きびす）を返し、再びヤラ・ラを越えて、ドルポ最西奥の村、ポへと戻った。一方、私たちはこのルートとは逆に、その峠を通過してムグからドルポへと横断した。

これは私にとって、今までにない世界観との出会いだった。体より大きな落石があったり、馬が通れず、馬だけ高巻きの道を行ったり、キャンプ地の整備を草刈りから始めなければならなかったり、沢の遡行で行き止まりになったりした。予定が未定のようなキャラバンの歩みは、アクシデント続きなのにとても楽しく、絶妙な旅の流れに恵まれ、年に一度のお祭りや部分日食とも重なった。今でも忘れられない旅となったこれらの山旅が、私のそれからのドルポの旅のベースとなる。自分でもやりたいと強く感じ、12年からは自らドルポへ、西ネパールへと通い始めた。

大西氏は生前、「地図見てどこまで想像できるかだ」と言われていた。私は「想像」は「創造」であり、自ら創り上げるものだと思った。現場で創り出すスタイル。私は職業が美容師なのだが、それになんとなく似ていて、そのライブ感がたまらなく面白いと思った。では、これから12年～20年に私が行なった、遠征のハイライトをご紹介したい。

2012年ドルポ：12年に一度のチベット仏教の巡礼祭、シェー・フェスティバル

12年に一度、チベット暦で7月の満月の日、1週間行なわれるチベット仏教の巡礼祭。12年は8月31日が満月だった。私たちはドゥネイから10日間でシェー山の麓にやって

来て、6日間滞在した。祭りの起源は800年前に遡る。大祭が終わった後は東へと横断し、無名峰を登頂してジョムソンへと出て、約60日間のトレッキングとなった（Himalco keti登山隊）。その中からシェーの大祭（Shey Festival）と、シェー山巡礼記を紹介する。

満月の日に催されるシェーの大祭

8月29日、オープニング・セレモニー。

午前中は、2000年に公開された映画『キャラバン』に登場する、絵師兼僧侶であるテンジン・ヌルブ氏と再会する。伝統衣装で着飾ったドルパニ（ドルポ地方の女性）と同じように、私たちも日本の着物を着て参加する。高僧たちが勢ぞろいしていたのは、迫力があった。チベット仏教・ゲルク派の帽子をかぶった僧侶たちによる音楽隊が登場、大人も子どもドルポ・スタイルで、帯はドルポ製、ティプ（tip）と呼ばれるブリキの髪飾りや、シェールピー編みカルポ・スタイルという伝統的なヘアー・スタイルの女性たちがいる中、ムグ地方から来ている人たちは衣装が違っていた。この日、高僧のリンポチェさんは悪天候のためヘリが飛べず、皆広場で朝から準備して待っていたが、昼過ぎには解散した。私は、09年にシェーに来たときに出会った家族に再会する。当時もこの大祭に来ると言っていたので、なぜか絶対会えると思って写真を持って来ていたので、渡せてよかった。テント場に戻ると、ヤクの大群に襲われた!?

8月30日、シェチェア・ラブジャム・リンポ（Shechea Rabjam Rinporche）さん到着。

昨日と同じく朝から準備してドルパニ勢ぞろい。伝統衣装を身にまとう人々は昨日より多くて、かなりの迫力で気持ちが高ぶった。シェー・ゴンパへの参道かのように人の流れが道を作り、高僧のリンポチェさんがヘリで到着する。個人的には、僧侶は歩きか馬で現われると思っていたので、正直びっくりしたが、厳しいドルポの環境では難しいのだろう。到着と同時に音楽と歓声で賑わう。私たちもそれに従って、シェー・ゴンパを周回する。リンポチェさんはメインテントへと落ち着き、挨拶から始まった。外国人も同じテント内にスペースがある。そのスペースは、ラマ（上人または師にあたる僧侶）さんと僧侶と外国人のみだった。子どもたちの踊りがとても良く、袖の長い衣装が印象的。

シェー山周回巡礼に参加

8月31日、今回で2回目となるシェー山周回巡礼に出発。

一度目は07年、大阪山の会西ネパール登山隊（大西保隊長）、二度目は今回の２０１２年 Himalco keti 登山隊。07年は9月14日で、登りは馬を使い、気持ち良い快晴の空の下をゆったりと約8時間（休憩含む）。12年は前記したように8月31日、今回のシェーの大祭に合わせて、小雨と小雪の中を徒歩で、約10時間（休憩含む）で巡礼した。以下、両方を重ねて巡礼記を書く。

スムド・ゴンパの麓から巡礼道の分岐のケルンまで徒歩で1時間ほど。ハルブン・コーラ沿いに南へ、ポクスムド湖方面へと歩く。そのケルンの前後は岩山が褶曲山脈となり、独特な雰囲気を感じる。水晶が中に潜んでいる白い石もゴロゴロ落ちていた。「シェー」とは「水晶」という意味なのだ。

07年の巡礼時は、現地の人もトレッカーも全くいなかったが、12年は大祭だったので、たくさんの巡礼者がいた。現地の人の足で6～8時間。私たちは明け方4時半に出発したが、すでに歩き始めている人がたくさん。最初はついて行こうと思ったけれど早さについて行けず、マイペースに切り替え、巡礼道の入り口に到着した。

そこからの登りは、河口慧海日記にも出てくる奇峰奇岩が見られる。慧海師は案内人のサドゥーからランチュン（自然生）のミラレパ尊者であると説明を受けているが、のちに後世の作り話としか思えなかった、と書いている。右岸中央に白道の王と黒道の二大王が絡み合っているように見えるとされているが、私にはよく分からなかった。それより、大空に向かって垂直にそびえ立つかのような岩峰に目を奪われた。そこには、大きく「オンマニペメフム」と彫られていて、ここから聖なる山に入るんだなと感じさせられ、空気感がたまらなく気持ち良かった。慧海日記では岩から水が湧き出ている所があって、そこはガンガーの源泉とある、と書いている。12年の巡礼中、それらしき場所で巡礼者は石を積み、祈りを捧げていた。

小雨が雪に変わり、辺りを見渡すと雪が積もり始めてきた。まさに巡礼という名の空気感に覆われ、2回目だと思えないほどで、別の山に来たようだった。傘を持つ人もいたけれど、ほとんどの人が何も持たずに歩いていた。懐の中に何か忍ばせているのかなと思いつつ、私たちはザックに基本装備がきっちり入っていて、服は軽量、雨具や靴は防水、なんだか申し訳ない気分になった。彼らは民族衣装で歩きにくいだろう、重いだろう、乾きはどうなんだ？など考えながら、巡礼者の足取りを追って1つ目の峠に差しかかってきた。

07年の快晴時は、この辺りから慧海が「菖蒲」と記した花が至る所に咲いていた。そこからの急登で、1頭のヤクも巡礼者に紛れて登っていたのが印象深い。07年のときは、峠から西にツォ・カルポカン（6556m）が見えたが、12年のときは厚い雲に覆われていた。その代り12年に1度の大祭だけに、もの凄い数のタルチョ（祈禱旗）がはためいていた。それはチベット・カイラスのドルマ・ラのようだった、さすが聖地の兄弟とされているだけある。私はそこに持って来た水晶を納めてきたが、それはすっと吸い込まれるように岩の間に消えていった。五体投地をする年配の方や、携帯で写真を撮る若者など、時代が交差しているなか、ビジョール村のラマさんと再会した。

巡礼者は様々で、子どもが子どもを連れていたり、無理矢理引っ張られている子どももいれば、逆に親を引っ張っている子どももいた。そして、まだ1、2歳の赤ん坊を背負っている母親もいて、泣いているのに気にしない。子どもは次第に泣きやんだが、この地で生きている強さを感じた。07年は、谷へ下る途中でパチュムハム（6589m）が見えて、そこで真ん中に穴が開いている平らな石を見付けた。シェー山に穴が開いているのを探してきなさい、と大西隊長から言われていたので、私は面白いと思ってその石をザックに入れた。

お昼休憩のポイントでは、遠くにタクヘコ・ピークが見えた。どこから見ても同じ形に見えるから、昔の人はそれを目印にしていたと言う。それで方角が分かるのだろう。周りを見渡すと、奇峰奇岩がまたちらほら見られ、下りは飛ばして、持って来たアルファ米を食べて体力を充電する。そして、しばらくすると五文の滝に出た。07年のときは、その滝は凍っていたが、12年は、その真下に湖のようなグリーンの池ができていた。それはまるで高地のオアシスのように見えた。その池の近くにテントがあり、ちょうど茶店を開いているようだった。そのオアシスを見ながら進むと前方にケルンがたくさんある峠が見え、次はそこを目指して登り始める。すると、巡礼者の女性が何やら探している。よく見るとそれは水晶だった。思わず私も一緒になって探し始めて数個持ち帰ってきた。まるでピクニックに来ているかのように楽しそうだった。

峠にはたくさんのケルンがあるが、皆何を想ってケルンを積んでいるのだろうか。チベット人は輪廻転生、私は自分の近い将来のことを考えていた。外国人はほとんどいないなか、峠ではロシアのTV局が取材に来てカメラを回していた。その後、最後の峠に向けてトラバースが続き、07

年のときは、遠くにパチュムハム（6556m）が見えて、国境方面を確認した。最後の分岐に到着。先を行けばツァカン・ゴンパとゴモチェ・ゴンパ、そこから下るとスムド・ゴンパの麓、ベースキャンプに到着する。私は前日にその2つのゴンパを見学していたので、スムド・ゴンパに下山した。晴れていたら途中、ツァカン・ゴンパを見ながらの下山となる。10時間の巡礼は終わり、ベースキャンプに着いたら虹が出ていて、大地からのメッセージを感じた。

シェー山を開山したシェーギリウォドゥクタが、空中を飛んで穴を開けたという穴は、ツァカン・ゴンパとゴモチェ・ゴンパに行く手前から見られるが、最初は分からなかった。カメラの望遠レンズで見ると、がっぽり穴が開いている。肉眼でぎりぎり確認できるかなとは思うけれど、聞いていないと分からないかもしれない。スムド・ゴンパの下の広場には、07年のときはマニ車が水の勢いとともに水車のように動いていたが、12年のときには止まっていて、水中に藻が生えていた。水質が変わったのだろうか、心配になる。ツァカン・ゴンパの見学ではバター茶をいただいた。ラマさんがいたが、冬もここで越冬していると言っていた。ゴモチェ・ゴンパでは、台湾から来た支援の方がいたり、ラマさんにカタ（相手に敬意を表して贈られるスカーフ）をいただき、とても良い時間を与えてもらった。巡礼後、テント場に帰らずそのまま大祭に参加する。地面に置かれたカタを馬上から拾い上げる競技や、的を矢で射る競技などが行なわれていた。夜は、シェー・ゴンパにてプジャ（祈祷）を見学する。

様々なイベントが目白押し

9月1日、伝統的な衣装の展示、チベット医学による脈診、馬のレース、ドルポ女性のダンス、ラマ・ダンスが行なわれる。朝、シェー・ゴンパでのプジャを見学する。テント内では、伝統的なチベット医学の医師による脈診が行なわれていて、漢方による治療や、海外からの支援で建てられた病院もあった。目が痛いと訴える人が多く、テントの中で火を熾（おこ）すためだと考えられる。伝統的なドルポ・カラーの織物や、衣装・装飾品・楽器・靴などが展示・販売されていた。広場では、ヒマラヤで最も速い騎手と馬を決めるレースをやっていた。ヒマラヤ山中に点在する村々から約50人が参加。標高4300m、狭い峡谷を駆け抜ける全長1・6kmのコースは、岩がゴロゴロしているため、脱落する人もいた。ゴール地点では、ぶつかり重なり倒れる馬たちもいた。今年のレースを制したのは、旧ムスタンか

ら参加した農民のテンジン・グルンさん（23）と、愛馬ティカだった（引用＝AFPBB・Newsより）。

ラマ・ダンス（チャム）は、僧侶が日ごろから訓練している。諸尊の出現を補助するのは、畏怖の念を起こさせる仮面の着用である。「誓いに縛られた」護法尊（選ばれた土着の神々を尊崇する儀礼）と忿怒形をした眷属（一族、従者、腹心）たちの仮面で、踊りの所作の一つ一つには厳密に定められた象徴的な意味があり、常に真剣な儀礼である（引用＝大西保ブログ）。ドルポ女性によるダンスや、男性による歌、演奏、子どもたちによる楽器演奏をしながらのダンス、女性によるコントもあった。そのコントがとても面白く、私たちも言葉は分からないが笑いの渦に包まれた。最終のショーが終わっても、ドルポ衣装で着飾った人たちが広場で自然に円を描くように丸くなり、次第に大きくなり、それがまるで須弥山かのように感じられた。

9月2日、私たちは大祭の余韻を後に東へ横断、最後はジョムソンを目指して出発する。スケジュールでは、馬・ヤク・ヤギのレース、伝統的なチベット医学による治療などが行なわれる予定。

9月3日、すべての高僧ラマによる人生の祝福の祈りが行なわれていた。

その後、ドルポとムスタンとの県境の無名峰に登頂し、ジョムソンへの50日間の旅を終えた。

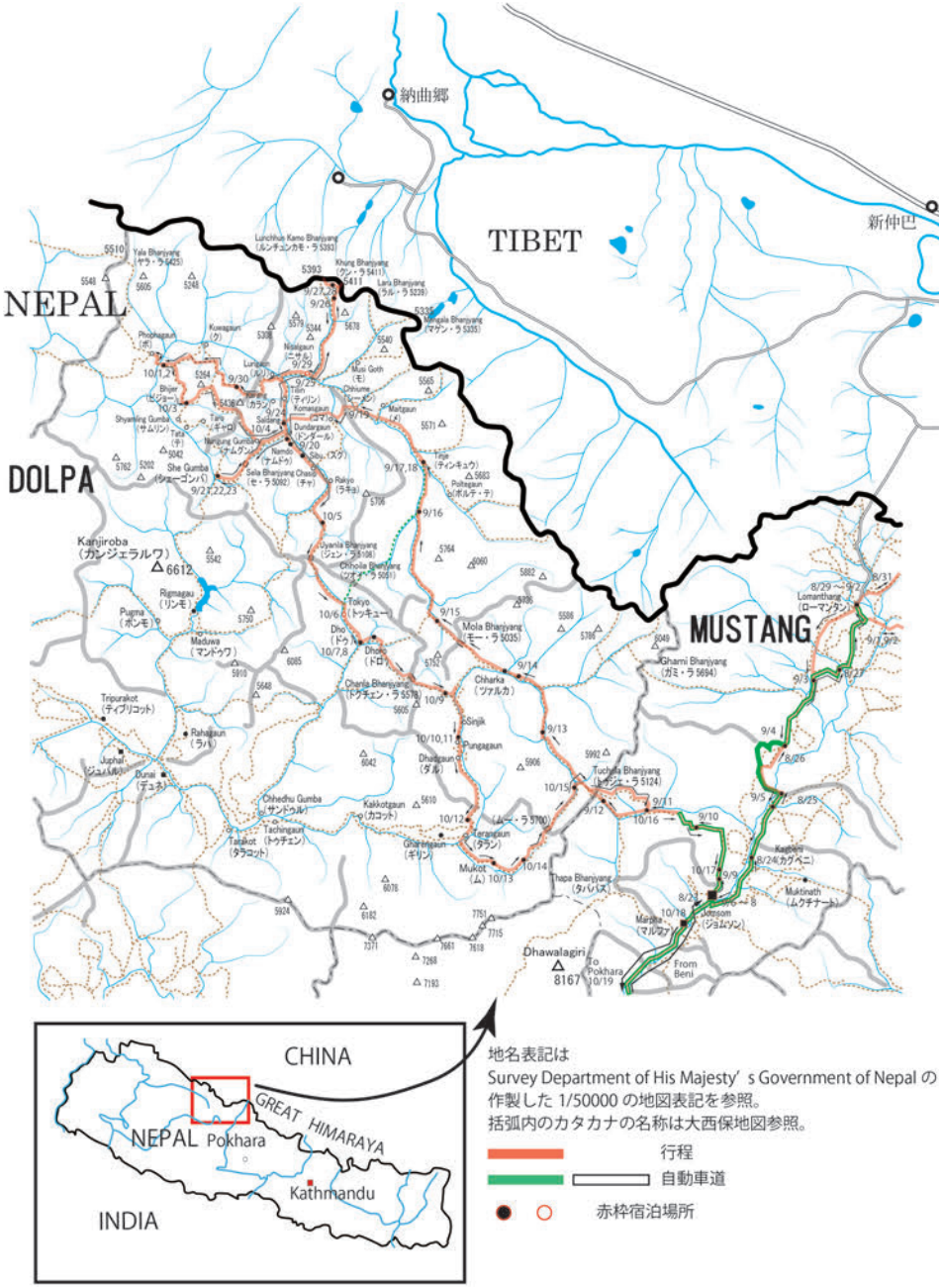
2014年、16年、17年アッパー・ムスタン：ツァーラン訪問記

ゴンパに残る慧海の像!?

初めて私がツァーランを訪れたのは2014年5月で、Tiji Festivalに参加して、ルリ・ゴンパ経由でこの村に到着した。ツァーランとは、河口慧海がチベットに潜入する前に1年近く滞在した、ネパール中北部、カリ・ガンダキ河上流の、かつて「ムスタン王国」と言われていた地域にある、チベット人の村である。慧海はここで、かつてラサのセラ寺で修学したモンゴル人学僧から、チベット仏教やチベット語文法、修辞学を学び、慧海も中国仏教を教えたと言う。慧海はチベット人の習俗に触れ、石を背負って登山の練習をするなど、心身ともに高度順化に努めたのである。

この村に着いたときは夕方で、ゴンパの前でサッカーをしていた少年の修行僧と目が合った私は「河口慧海、知ってる?」と何気なく聞いた、すると、まるで今も生きてる

2016 年ムスタン＆ドルポ横断ルート図



河口慧海師が越えたであろうクン・ラに立つ故大西保氏(右)と筆者

ヒマラヤの青々とした水を湛えるポクスムド湖

僧侶たちが仮面を着けて踊るラマ・ダンス（シェーの大祭にて）

小雨が雪に変わった中、行なわれたシェー山の周回巡礼

クン・ラから見下ろしたチベット側。慧海池と仁広池が見える

イェメルンカン山頂から見たネパール側の山並み

見事な褶曲地層を背後に建つティンマール・ゴンパ

1958 年西北ネパール学術探検隊がフィールド・ワークしたツァルカ村

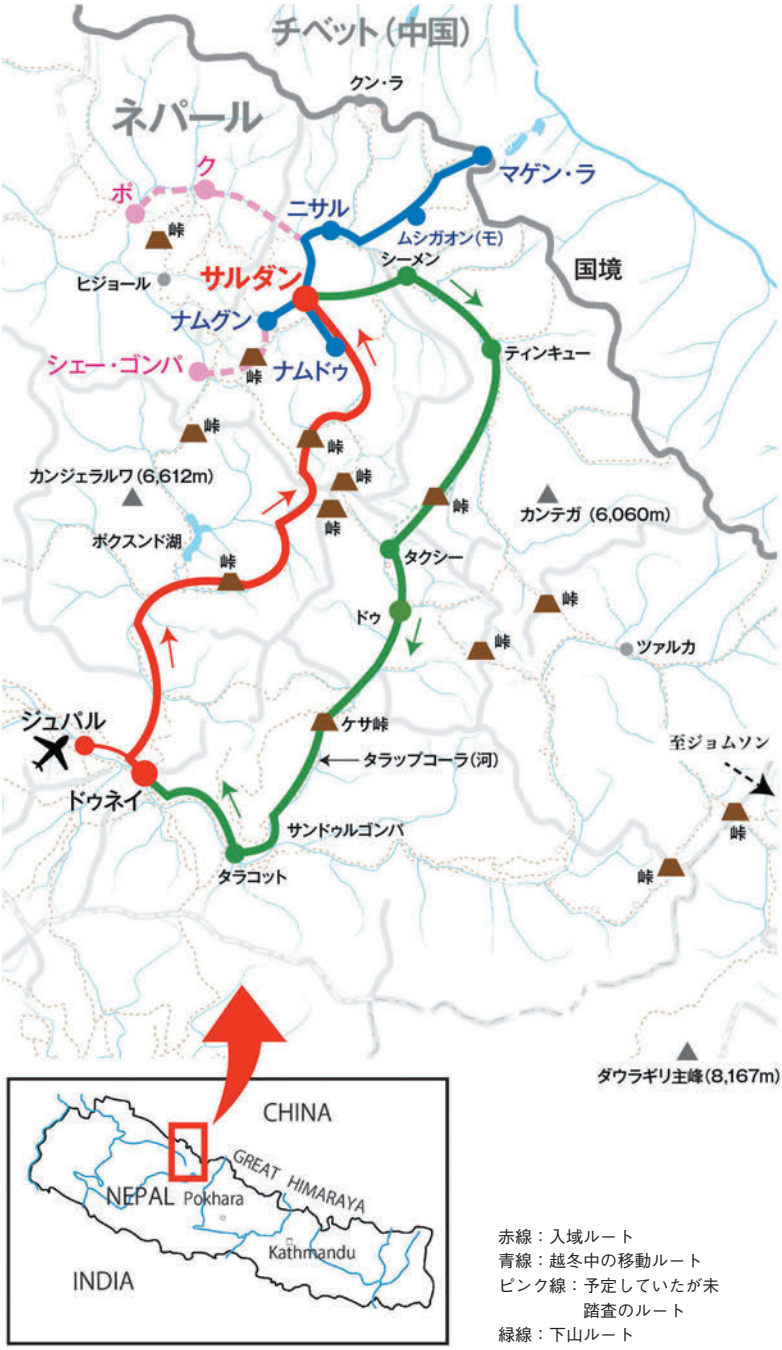
2019〜20 年の越冬の拠点となったサルダン村

極寒の中、外で五体投地の行を行なう村人たち

毎月、満月の日に行なわれるプジャ(法要)。写真は冬のプジャ

下山は黒部川・下廊下を思わせるような緊張のトラバースが続いた

2019～20 年ドルポ越冬ルート図



赤線：入域ルート
青線：越冬中の移動ルート
ピンク線：予定していたが未踏査のルート
緑線：下山ルート

河口慧海師が10ヶ月滞在していたツァーラン村

ようなニュアンスで、彼は古寺を指さして「あそこにいるよ」と答えた。私はびっくりして、青年の僧侶を探して再度聞き直した。そして次の日、早朝に寺の内部を見せていただいた。帰国後、調べていると『山と溪谷』誌の１９９３年２月号に、根深誠氏の記事を見付けた。私が見た仏像と同じ写真があった。当時のお寺の住職でラマ・ニャンダクという僧侶だ、と書かれている。

それが気になり16年８月、再度確認に行った。このときは慧海の越境ルートについて、ネパール側をジョムソンから忠実に歩き始めて、慧海が越境したと思われる国境クン・ラまで行き、帰りはドルポの最西北の村、ポを経由して、ジョムソンまで横断するという約60日間の遠征だった。

14年に教えてくれたラマは不在で、クンガ・ラマが教えてくれた。彼は38歳、24年間インドのデラドゥンで勉強し、３年前に帰ってきた。慧海が滞在した１９００年当時は、３人態勢でゴンパを守っていたと言う。ラマ・ドルジェ、ラマ・ジャムヤン、ラマ・ニャンダク。このラマ・ニャンダクが河口慧海だと言われる。

『チベット旅行記』では、慧海の名は「シェラブ・ギャムツォ」、そして、慧海の馬を欲しがった住職がラマ・ニャンダクと書かれている。やはり住職なのか……と思ったが、

何度も聞いてみた。クンガ・ラマもその像は慧海だと言う。それ以上のことは分からなかったが、慧海像を守りたいと思っている、と言っていた。でも、それがなかなかできないとも言っていた。ムスタンでは、たまに泥棒が入る。昔、人が少なくなる冬に泥棒が入り、お経を盗まれた。きっと天井から入ったと思われるが、外は雪で、足跡だけが残っていたと言う。その半年後、アメリカの美術館で展示されていたという、驚くような話を聞かされた。だから、この慧海像のことは日本人にしか言わない。支援がなくて困っている、誰か支援してくれる人はいないか、と言われて、私の頭の中はまた謎に包まれた……。

今、毎年8月にある45日間のプジャの期間中で、これはヤルネ・プジャという。ここにいるラマは65人で、インドで勉強している人を合わせると200人ぐらいいる。そこでは最低9年、勉強すると言っていた。慧海の時代のツァーランは、人口250人のうち、ラマが約115人（ラマが六十余名、尼が50人）。いずれも酒を飲み、肉も食うことは平気で、尼は男を持つことは許されないけれど、この50人の尼の中で男を持たない者は1人だけ。また、女に触れていないお坊さんは2人だけで、ルールがあるようでないように感じる。今の時代はどうなっているのか聞いてみると、20歳のときに決めると言う。(1)結婚はOKだけど、高僧になれない。(2)結婚はOKで、タンカ師になること。(3)結婚しないで、高僧になれる。これを決めた人は、着物の下のデザインが違う。2段になっている着物は、結婚しないと決めた人だと言う（地域によって違うようだ）。

今も残る慧海への信仰

17年5月、3度目の訪問をした。根深氏が撮影した写真では3体あったけれど、今は2体しかない。聞くと別の所にあると言っていた。動かしたら不吉なことが起きるから、動かさない。16年に訪問したときに、女性は見てはいけないと言っていたから、それかもしれない。仏像のことを何度も何度も聞いても、河口慧海だと言う。聞き過ぎて不愉快にさせている雰囲気を感じ、途中でその話はやめた。困ったときや病気のとき、慧海だと思って祈りを捧げて心の安らぎを得ているかのようだった。私は、村人が信じる慧海への想いを大事にしたいと思い、それ以上聞くことをやめた。

次に、ツァーランで慧海が住んでいた仏堂の跡地を探して話を聞かせてもらった。今は商店となっていた。話を聞かせてくれたのは、息子のペパ（28歳）で、8歳と3歳の

ツァーランの村人たちから慧海像と言われている仏像（右）

子どもがいた。当時の物は、大酒飲みの父親が全部ジャルコットへ売りに出して、残ったのは1つのブッダだけだと言って、不機嫌そうに話す。母親がそのブッダを奥から大事そうに出してきてくれた。昔は大金持ちだったのに……、今は冬、インドに行って服を売る商売をして、生計を立てていると言っていた。雰囲気的に、むやみに写真を撮らせてくれと言いにくかったが、逆に最後は彼の方からガイドに、丁寧に通訳してくれてありがとう、と言って笑顔になった。お別れするときに撮影をお願いしたら、笑顔でOKしてくれた。そして、最後にブッダの撮影もしたいと言うと、また奥から出してきてくれた。そして、父親が亡くなった後のある事件について話してくれた。

父の魂が人に入って話をするなど不吉なことがあったので、この土地を全部ゴンパに寄付をしたのだ。元々はお店の所から全て僕たちの土地だった、と言っていた。私は、何か力になれることがあれば連絡するからと言って、連絡先を交換した。そして、慧海のことはあなたの子どもにも話をして下さい、必ず受け継いで下さい、と伝えた。このツァーランへの3度の訪問で、慧海への信仰は少なからず残っているんだなと思ったが、もう少しきちんとした形で受け継がれていけばいいな、と思った。

2016年ムスタン&ドルポ横断500km：河口慧海師の足跡をたどって

河口慧海師の足跡をたどってムスタン&ドルポ横断の遠征を立ち上げた。それは14年に大西保氏、吉永定雄氏が続いて他界され、さらに15年には私の父も他界して、かなりへこんでいた時期だった。それらの現実は受け止めていたのだが、そこから復活するにはドルポへ身を置くしかないと思い、父の四十九日を終えたとき、来年（16年）は慧海ルートでドルポを横断すると決めた。前回（07年）は大西氏について行ったので、今度は自分で感覚をつかみたいと思った。今まで教わったことを、この遠征という形で実現させることで追悼の想いを示したかった。

慧海ルートとしては、慧海が越境した峠までできるだけ忠実に歩き、国境からの帰りのルートは、今までに行ったことのないドルポの村々を訪問し、ロー・ドルポを横断する。大西氏の遺した資料を調べ上げていた中で自分が行きたいと思った所を地図上でつなげていき、約60日間の山旅となった。帰国後に知ったのだが、私がドルポ遠征を2回ともにしたことのある水谷弘治氏も、実は私の出発前に山の事故で他界されていた。まさかの出来事で、ショックが大き過ぎた。関西のドルポの大御所様が続いて亡くなられて、もうその人たちとドルポの話ができないと思うと、寂し過ぎる。

ムスタン&ドルポの踏査ポイント

ここからは、ムスタン&ドルポそれぞれのポイントを、報告書の中からダイジェストして紹介させていただく。

◆ムスタン①コンチョリン（Koncholing）の洞窟

慧海はツァーランから北へは行っていないが、今回は友だちも一緒だったので、ローマンタンまで足を延ばした。私は2回目だったので、せっかくだから前回行けなかった場所に行きたいと思っていた。そこで考えていたのがコンチョリンとチェゾン・ゴンパだった。アッパー・ムスタンにはかなりの洞窟群があるがガイドブックには載っておらず、現地で情報を収集する。

参考にしてたのは、奥山直司先生（高野山大学文学部密教学科教授）の『ムスタン・曼荼羅の旅』。それによると、下流のゾンチュでは洞窟群に対する考古学的調査が行なわれていて、土器などの生活遺物が発掘されている。炭素14による年代測定から、その洞窟群は今からおよそ2000年前に使われ始め、西暦1200年から1500年ごろま

では村だったという、大きな結果が出ている。その後、一部の洞窟に仏教の行者が住み着いた。チベット仏教では、ニンマ派とカギュ派を中心に洞窟での瞑想修行が盛んなので、使われなくなった穴居がこの目的で二次使用されていても不思議ではない。チュクサンの洞窟など、クライミングしないと近付けないような場所にあるのだが、どうやって登っていたのだろうか？　ここもまた２０１２年に考古学者と登山家が調査していて、『ナショナル・ジオグラフィック』で発表されているので興味深い。

コンチョリンの洞窟へは馬で2時間半進み、馬をデポしてそこから35分ほど登り展望が良い所に立つ。３６０度周囲が独特のムスタン・カラーの山々で埋め尽くされていて圧巻だ。案内人の誘導で壁画のある洞窟に向かった。小さな扉がまるで結界のように作られていて、ある時代にワープするかのように別世界に突入していく。そこには伝説が残されていた。いつの時代か、確かに人が住んでいた形跡がある。そして、崩れそうな斜面を降りていくと、壁画のある洞窟にたどり着いた。それはラマさんが描くような仏画ではなく、古代の壁画のように感じられた。

◆ムスタン②チョゾン・ゴンパ

チョゾン・ゴンパへは、以前はなかった入域料1万50

壁画が残るコンチョリンの洞窟

００Rs（人数でシェアできる）、馬1頭３０００Rsを払う。ムスタンでは、泥棒が入るので外国人の入域料ができたという。14年にはなかったことだ。必ず村人を連れて行かなければならないとのこと。案の定、前回と同様に簡単には行けないと言われて一度は諦めかけたが、諦め切れず、粘りに粘って行く手段を手配することができた。

ラッキーなことに馬方がベテランで、川の水かさの状態も良かった。そのお陰でローマンタンから日帰りで行くことができた。馬で片道4時間。渓谷を馬で徒渉しながら行くのは時空をワープし、いつの時代かに戻るようで、とても贅沢なホース・トレッキングだった。両サイドに岩壁がそそりたち、空からのエネルギーが刺すように眩しい。そして、白い何かが壁画に染み出している所もあった。塩だ。そうだ、ムスタンは塩の道だ。

ゴンパについての詳細は、『ムスタン・曼荼羅の旅』を一読されたい。お堂の中には、密会をしていて、今にも踊り出しそうな御法尊が祀られている、暗闇の中にいる様は、ど迫力であった。足元に人間を踏んでいるのが恐ろしくも見えた。また、この谷では、スノー・レオパードかタイガーなのか分からないが、最近付いたような動物の足跡があった。以前、ロー・ドルポで私たちのキャラバンのカッチャル（荷物を運ぶロバ）が、タイガーに襲われ死亡したことがあったので、静かな谷、あまり人が通らない無人地帯には、どこかに潜んでいるかもしれないと思った。ここは彼ら野生動物のテリトリーに入っているのだと感じた。どこか遠くから私たちを見ているかもしれない。このチョゾン・ゴンパの場所は、ネパールの5万分の1の地図に示された位置とは明らかに違っていた。

◆ドルポ①慧海ルート　百丈余の橋とタシータン

慧海が例えた「百丈余の橋」（標高４１７３ｍ）は、故大西氏が調べたところによると、実際には高さ10丈（約23ｍ）だった。高過ぎる例えは、怖かったからかなぁと思わせる。数年前に手すりが作られたが、慧海のころはなかった。実際この手すりがなければ危なっかしいところだ。

知られざる谷・タシータンのゴルジュは、地図上にはルートがあるが、実際には今使われていない。この谷には神々が宿ると言われている。とても険しいが、「この道で怪我をしたことはない。ここは守られている」と、タシータン入り口で出会った村人は言っていた。しかし「途中で道がなくなったので、今回は引き返してきた」と。全くそのとおりだった。

私たちも何度か徒渉をし、道がなくなり、ポーターがピッ

ケルで道を造りつつ、滑りながらのトラバースとなった。見上げると落石祭りである、風が強かったので、動物が通ることによる落石は、容易に想像ができる状態だった。一歩間違えたら沢に滑り落ちてしまうような所もあり、今はあまり使われていないように感じた。でも、大西氏は「快適な沢登り」と言っていた。沢登りと思えば快適かもしれないが、徒渉は痛いぐらい冷たくて、思わず声が出た。大西氏のブログでは、「石を積んだカルカにブルーシートを被せていた」と書いてあったのを私は記憶していたので、

慧海師の日記にも出てくる「百丈余の橋」とタシータンの流れ

石が積まれたカルカ（放牧小屋）があると思い込んでいた。それがなかったので残念に思っていたが、後で大西氏のGPSポイントを確認したら、私たちもほぼ同じ所でキャンプしていた。慧海はサンダから一気にここまで来ている。順応もままならないときの1000mアップはきつい。

◆ドルポ②シェー山

シェー山とは、ドルポで最大の聖なる山であり、河口慧海師も巡礼している。開山したセンゲイェシェーが、空中を飛んで穴を開けたという伝説がある。そのシェー山の山頂に何やら旗のような物が見えており、目を疑った。カメラの望遠レンズで確認すると、やっぱりある。聖なる山は登ってはいけないと思っていたから、びっくりした。シェー山付近には結界があり、祈りを捧げる場所もあり、村はなく、お寺を守っている人だけが住んでいる。それだけ聖地として成り立っているわけで、本当に驚いた。

◆ドルポ③慧海が越境したであろう峠クン・ラ

私にとって2度目のクン・ラ（5411m）は、前回は馬だったから全然高度感がなかったけど、今回は歩きだから5500mに近付くと、スピードが出ない。慧海はヤクと一緒に峠を越えていたことが、04年に見付かった日記によって推定された。この峠の上でもまた祈りを捧げた。吉

永氏、大西氏へ、カタにメッセージを書いてくくり付けてきた。タルチョと一緒に靡(なび)いて天国へ届け！　吉永、大西、水谷各氏から学んだこと、情熱をいただいたことは計り知れない。本当にありがとうございましたと、心の底から伝えたかった。

以前、大西氏と吉永氏からいただいた本の中に、手書きのメッセージが添えられていて、同じことが書かれてあった。「Dolpoを愛してくれてありがとう」。今でもこの文字を見ると、涙が出てくる。私では経験と知識が全然追い付かないけれど、「情熱だけは受け継ぎますよ。応援してくださいね」と伝えたら、大きなイヌワシが飛んで来た。

慧海ルートのネパール側は、ここクン・ラで終了！　慧海の行動力に脱帽だ。なぜそこまで私がこだわるのか、それは慧海と同じリウマチという持病を持っているからだ。そのお陰で人生が百倍以上にも楽しくなり、今はリウマチに感謝している。慧海と出会えて、大西氏たちのヒマラヤへの情熱を垣(かい)間見ることができた。時代が重なったことに感謝する。

◆ドルポ④イェメルンカン

イェメルンカン（6024m）は、クン・ラに向かって行くと必ず見えてくる、国境ラインの山。07年、初めてのドルポ遠征でクン・ラに来とき、大西さんが「スニーカーで登った」とつぶやいていた。あのころは何も分からなかったので、「ふ～ん、そうなんだ」と、その程度にしか思わなかったけれど、出発時から本当に登れそうだったら登ってみようと決めて、地図を見てルートも考えていた。きっとネパールとチベットが同時に見える、慧海ルートの全貌を感じられると思った。でも、ギアも持って行かなかったし、雪があまり着いてなかったのも覚えていたのと、トレッキング重視だから装備が増えても困るので、無理ない程度にと考えていた。

朝、天気が悪めでメンバーと相談した。予備日もあるから明日でもいいかも、と話したが、明日もどうなるか分からないから、コルまで行って考えることになった。コルにたどり着いたときは雲が抜けてきて、いけそうだと思った。どうする⁉　行きたい。じゃ、行こうよ！　すぐに決まった。

クーンブ地域などでは朝が勝負で、昼を過ぎたら雲が多くなって、風もきつくなる感じだけど、ドルポは違う。昼からでも天気が良くなる場合があると感じる。予想が的中し、雲が抜けてきた。一歩登れば二歩下がる。トラバースは崩れまくって、前後の間を開けて登らないと落石の嵐だ。

しかし、大西氏の言うとおりスニーカーでも登れ、ギアはいらなかった。

無事山頂にたどり着くと、360度全開で見える。パチュンハム、ギャンゾンカン、カンテガ、カンジロバなどなど。ピークを踏んだ感想は、「ここは大西さんの庭だなぁ」と思った。動画を撮っていたら、大きなイヌワシが2羽飛んで来た。あれっ、まただ。クン・ラでも飛んで来た。それは、まるで大西氏、吉永氏、水谷氏が見守ってくれているように思えて、感謝せずにはいられなかった。

◆ドルポ⑤西北ネパール学術探検隊の足跡

1958年、西北ネパール学術探検隊（故川喜田二郎隊長）の隊員には、河口慧海師の研究者で、人類学者であった故高山龍三氏がいた。大西氏は、生前よくこの話をされていた。前回の09年、西北ネパール登山隊では、ムグからドルポへと横断してポ村へ入ったが、それはジュムラからスタートし、無人地帯を数日間、5000mの峠を2つ越えての横断だったので、今回はドルポから入ってみたかった。ビジョールから来ると、ヤンブル・バンジャンを越えてから一度深い谷へ降りて、登り返して村にたどり着く。なぜそこに人が住みついたのか⁉　不思議でならない。

◆ドルポ⑥パンディット・ハリラムの足跡

1958年の川喜田隊の足跡が残るポーの村人たち

１８７３年９月５日、パンディット（インド測量局の密偵）のハリラムがツァルカに着く前、村人が岩の裂け目に長さ54歩のトンネルを造っていた。それが現存するということで、実際に見てみたかった。それはツァルカからロー・ドルポに行く近道にあり、横断ルート上に無理矢理組み込ませた。そして、見付けたときはやはり驚いた。メンバーそれぞれが何歩になるか調べてみたら、ガイド70歩、伴ちゃん81歩、私92歩。やはりチビの私が一番多くて、ハリラムの約倍となる。彼は、かなり足が長かったのかと思われる。そして、この辺り一帯の岩山を見ていると、かすかに高巻きしているルートもあった。今は使われていないようだが、その昔、トンネルを掘る前には使われていたのだろうかと思ったが、ロープがないと厳しい高巻きと見えた。

◆ドルポ⑦ティンマール・ゴンパ

映画『キャラバン』の監督、エリック・バリの写真集の中に出てくる1枚の写真に、朽ちているお寺がある。それが格好良くて、私は気になっていた。生前、大西氏が『登山時報』でＧＰＳの情報を発表していて、私はそれをメモしていたから確実に行けると確信していたが、良く見ると数字がおかしい……。これは大西氏の落とし穴か⁉　と思った。情報をいっぱい与えてくれているようで、最後の肝心なところがない。自分で探せということか？　現場で笑えた。

そして、絶対見付けてやろうと思った。私はその写真を目に焼き付くぐらい覚えていたので、遠目でも見付けることができた。私が一番後ろを歩いていたけれど、先を歩いていたメンバー、スタッフは全く気付いておらず、独りで興奮して叫んだことを今でも覚えている。近付くと凄い迫力！　村人はティンメル・ゴンパと言う。ラマが18人亡くなっているから、９００年前だろうと言った。新しいティンマール・ゴンパは、１００ｍ上に建立されている。

◆横断を終えて

約２ヶ月掛かったこの遠征は、予定していた９割が歩けて満足しているが、数ヶ所回り切れなかった村やゴンパがある。ドルポはガイドブックがないので大西氏の資料を読み尽くして、面白いと思う場所を地図上でつなげてルートを考えた。ほぼレスト（休養日）なしの状況で毎日、夕方まで歩き続けていた。やり切った感と、終わった安心感、でも、終わってしまった切なさが交差しながら、58日目のゴールは全てに感謝しかなかった。

ドルポは、東西南北どこから入ろうとも５０００ｍの峠

を越えないと入れない。そして、平均４０００ｍ前後に村が点在する。今回５０００ｍ以上の峠を越えたのは11ヶ所、４０００ｍ以上の峠は数え切れないほど越えた。距離は、平面の地図上で５００kmは超えている。いったい何km歩いたのだろうか。帰国した今、まだまだ慧海ルートを掘り下げることができると思った。行けば行くほど深く見えてくるのではないだろうか。ドルポの道は、動物が歩けば道ができるし、地図にないルートがたくさんあった。丁寧に山を見ていると、何かしらのポイントがあったりする。そこに知恵が詰まっているかのようだった。

今回で４度目のドルポだが、07年にはほとんど見掛けなかったトレッカーが増えた。確実ではないが、食料調達ができるようになっていた。村の生活は、ここ数年で変貌していると感じたが、ネパールの中でも奥地になるドルポの人々や、その生活から学ぶことは多い。環境が厳しいドルポの生活。自然と共存して生き、大地のエネルギーとともに生きることで、人間の真の姿を見せてくれる。そして、私自身も人間が本来持っている体の力が蘇り、強くなる。今回もダイレクトに、自分の体で人体実験したかのようだった。そんなドルポに魅了されて、また行きたくなる。

次はドルポで越冬してみたい、冬の生活を見てみたい。また大きな夢ができた。現代の慧海ルートは、今もなお生きている。１２０年の年月を超えた今、そのルートを歩いたことに意味があるように感じた。しかし、意味なんてなくてもいい、私はただ歩きたかったのだ。慧海と同じ持病を持ち、どのように感じ、どんな体の変化があったのか、自分の体で感じてみたかった。ここまでできたのも大西氏のお陰である。感謝の想いを、この遠征に代えて伝えたかった。ツァカン・ゴンパでは光となって、シェー山やクン・ラ、イェメルンカン山頂、最後にゲバ・ラでイヌワシになって出てきてくれた。ずっと見守ってくれているかのようだった。大西氏の足元にも及ばないけれど、情熱だけは受け継ぎたいと思っている。

2019年11月～20年3月ドルポ越冬：厳冬の暮らしのフィールド・ワーク

102日間に及んだドルポ越冬

２０１８年は、バラサーブ（現地語で大旦那あるいは隊長という意味）こと故大西保氏の夢のお告げにより、ネパールの最北西部「フムラ」を訪ね、無人地帯を含む２５０kmを踏破している。目的だった聖山カイラスやナムナニの展望、夢に出てきた「バラサーブ・レイク」の発見、そして、

国境の峠チマ・ラ（５１０６ｍ）に到達しているが、長くなるのでここでは割愛する。

18年のフムラ遠征を終えて、帰国時の飛行機の中で決意した。数年前から思い描いていたが、なかなか決断ができなかった。その理由は、経営しているお店（美容室）のこと、持病のリウマチ、そして、遠征資金のことだった。「いつかやりたい」と思っているだけでは、いつかは来ない。時代は急速に流れている。辺境地の変貌はとにかく早い。行くなら1年でも早い方が良い。フムラ遠征を無事にやり遂げたことによって、覚悟が決まった。

覚悟を決めたら、クラウド・ファンディングや、それ以外にも多方面からご支援をいただくことになり、自分でも驚くほど多くの方に応援していただいた。それは私にとって奇跡的なことで、それがとても嬉しく、感謝しかなかった。素直に受け止めて、全力で活動しようと心に誓った。

越冬計画は、3ヶ月以上に及ぶドルポでの厳冬期の暮らしだ。そのための準備においては、その期間に消費する食料・燃料を調達し、事前に現地デポを手配することが重要だった。16年のドルポ横断中に訪問した村々で、越冬状況について聞いたときに、「食料を持って来たら泊めてあげるよ」と言ってくれた僧侶がいた。私はそのひと言に全てが詰まっていると感じた。私が長期間滞在することによって現地に負担を掛けたくないので、現地で食料などを購入しないようにしようと思った。

それで、今までに知り合ったドルポの村人の中で、ＳＮＳでつながっていたサルダン村のウゲンさん、ポ村の僧侶・タシさんに連絡を取った。数年前から、冬に行きたいということをアピールしていたので、話は早かった。ウゲンさんには出発時のポーターの手配を依頼、タシさんには食料と燃料を各村へデポしてもらうよう依頼した。しかし、彼らがドルポ内部にいる期間は、連絡が頻繁にはできない。カトマンズの登山エージェントにウゲンさんとタシさんを紹介し、中継連絡をしてもらうようにお願いする。タシさんとは夏に連絡が途絶えてしまい、私の出国間際まで音信がなかった。ウゲンさんとは出発間際に突然連絡が途絶えて、ポーターの手配ができなくなった。一度全てが白紙に戻り、どうしようかと思っていたところ、私の出国間際の19年9月に、知人がドルポ・トレッキングに行くことが決まった。その隊（Ｈキャラバン）が、私の越冬拠点地を通過するということで、お米などの食料・燃料を含む２００kgの越冬物資の荷揚げを、キャラバン（馬５頭）で引き受けてくれるという、ありがたい流れとなった。

実際には、Hキャラバンがトレッキングをスタートする地点ドゥネイで、いきなりタシさんと連絡が取れた。Hキャラバンに依頼した荷物と、タシさんに調達してもらった荷物を比べ、重複するものを引いて準備はできたのだが、到着後に調達してもらった食料が多過ぎることが分かった。しかし、チベット国境での購入費・運送代・手間のことも考えると申し訳ない思いがあったので、タシさんには言い値を支払った。デポとは別に持参した私の個人装備は、ドラムバッグ4つとザック（合計約90kg）。中身は食料や衣類、テント、キャンプ用品だ。厳冬期の長期滞在ということで、日本の山関係の知人が自家製の乾燥野菜を作って送ってくれたお陰で、越冬中の野菜不足の心配が解消された。

助け合って生きる心優しき人々

私の想いはただ一つ、5000mの峠に囲まれた、厳冬期のドルポの人々の生活はどうなっているのか、山々はどんな景色を見せてくれるのだろうか、どこまで寒いのかなど、自分の体で体感したかった。さらに越冬拠点をサルダン村と決めて、東西南北動ける範囲内で散策し、ロサル（お正月）やお祭りに行けたらいいな、と思っていた。その中で村人に尋ねてみたいフィールド・ワークの質問リストは、42項目となった。中でも一番印象に残ったことは「祈りの世界」だった。時代は大きく変わったが、祈る姿には変わりはなく、信じる心が人々を美しく、強く存在させるのだと感じた。切ないほどの読経の声と、悲しいかと思わせるほどの眼差しがとても印象的だった。祈り続けている彼らを見ていると、この祈りがドルポからネパール全土へ、そして世界へと、羽ばたいていくのが見えるほどだった。ど

クリンチェンモの大祭でラマ・ダンスを踊る僧侶

プジャでマニ車を回しながら一心不乱に祈る村人

こか切なく、でも力強く響き渡る読経は、忘れられないほど心に響いた。今の時代に、こんなにも深い深い祈りの世界があることが、素晴らしいとも思った。

私にとって祈りとは、自分と向き合って、自分を知っていくようなものだ。毎月、満月の日に行なわれるプジャがあった。月をこれほど近くに感じたことはなかった。吹雪いた日も外で村人が集まり、来た人にはバター茶を振舞っていた。私が越冬生活に慣れたころ、悶々とする日々があった。そんなとき、満月のプジャの日が来て、久々にたくさんの村人と会った。顔を見て目が合ったら笑顔で、中には声を掛けてくれる人もいて、とても癒された。

生活の中で必要なことは、実はとてもシンプルだ。人との穏やかな時間。特に冬、雪で外に出られない、太陽が出ない日々が続くと、いろいろなことを考えてしまっていた。そんなときに人と会うことで心が和んだ。言葉は、そこまで通じていないけれど、彼らの仕草で伝わってくるものがたくさんあった。言葉はもちろん必要だけれど、実は言葉ではなんとでも言える。でも、行動には嘘はない。伝えたい想いが、ちょっとした仕草に現われ、お互いの表情で伝わってくる。さらに、「こんな寒い冬に、何をしているの？」「何が楽しいの。いつまでいるの」。私を怪しいと思っていた彼らも、長期で普通に生活をしている私を見て、2回目のプジャの日、「こっちにおいでよ」と、声を掛けてくれたときは、本当に嬉しかった。環境が厳しい厳冬のドルポの生活、手足はキンキンに冷えているが、心は芯から暖かくなるほど、人々はとても優しかった。

今回、初めての厳冬期のドルポ、一体何度まで気温が下がるのか、とても興味があった。温度計を室内と野外と両方に設置して毎日計っていたが、想像以上に気温は低くならなかった。覚悟して行ったが、実際には夜、テントの中で氷点下18度が一番低い気温だった。野外なら氷点下20度

ぐらいだと思った。昔は氷点下30度と聞いていたので、想像以上に気温が高かった。しかし、私が借りていた部屋には暖を取れる場所がなく、室内で氷点下3度が平均気温だったのだが、かなり底冷えがした。部屋にいるなら、寝袋に入っていないと厳しいほど冷えていた。

チベットの家では常に天井が開いていて、そこにつながる私の部屋も仕切りの壁の上が全開で、部屋が暖まることはない。座っているのが一番冷えるので、寝袋に入っているのが一番暖かい。私は日本でも古民家に住んでいるので、隙間風が凄い。その生活がベースにあるから、今回耐えられたのかと思った。

しかし、日本の暮らしにはストーブがある、お湯がすぐ出る。でも、ドルポの暮らしにはない。燃料も水も貴重だから、暖をとるためだけにお湯を作るのは、寝る前だけだった。特に寒いのは、太陽が沈んだ夕方4時から夕食の時間までで、「地獄の時間」と呼んでいた。暖が取れる、取れないの差はかなり大きい。外がもし氷点下30度でも、室内で暖が取れるなら耐えられるかもと思うほど、暖が取れない氷点下3度はきつかった。

冬山では問題ない気温なのに、家の中でじっとしている氷点下ほど寒いものはない。さらに、昼間の天気が良く、太陽がある時間、これがかなり重要で、夜がどれだけ寒くても、1日の中で1時間でも暖かい時間があるだけで体の感覚が全く違った。あるとき、吹雪いて太陽が全く出ない数日が続いた。部屋はもう冷え切ってしまっていて、隣の家の人が声を掛けてくれて、暖のある部屋に入れてくれたときは、本当に天国のようだった。ちなみに、私が暖を取る手段は、ナルゲンの水筒を湯たんぽにして、就寝時もそれだけで過ごしていた。

ドルポに住む人々は、チャングラー（標高の高い所に住むヤギ）のようだった。寒さに強く、急な山道を驚くような速さでバランス良く駆け下り、太陽と月のリズムで生活をする。その中に祈りがある。自然の恩恵を受けて、祈りを生活の一部とし、ドルポの山々と一体化して生きる姿が今も目に焼き付いている。少ない食料と燃料を皆で分け合い、助け合いながら生きている。そして、誰もがラマさんのように、本当に優しかった。最後のお別れのときには、何度も涙を流してくれた人もいた。

チベット文化圏ではチベット暦で

厳冬のドルポからの下山は、拠点のサルダン村の僧侶たちがポーターになってくれた。ポーターの仕事は初めての

ようだったが、私が今まで接した中では最強だった。当初の私の下山予定は3月だったが、2月の天気が安定している合間に降りることにした。多くの村人には「2月の下山はできない」と言われていたが、1人だけできると言う若者に出会った。その彼は「ロサルの時期はまた雪が降るから、今、下山しなかったらしばらく無理だ」と言った。皆言うことが違う。

私は日本で普段、旧暦を見て生活を楽しんでいる部分があるのだが、それが特に冬には凄く当てはまると感じている。それを考えると、チベット暦が気になった。今年のロサルは昨年より遅めの2月末だった。となると、「下りるなら今しかない」と私も思った。私は現地でネパール暦、チベット暦についてガイドに聞いていた。「寒くなる、雪降る、暑くなる、今日はプジャの日」など、いろいろ教えてもらっていて、「ここはチベット文化圏、チベット暦を信じてみよう」と思った。

また、ドルポでの越冬期間はすでに100日間を超えていて、そろそろシャワーを浴びたかった。全身垢まみれとなっていて、自分が獣の匂いがした。そんなときふと、もしかして人間から動物に進化している途中かも？　と思った。頭がこんがらかるが、人類は猿から人間に進化してきたはずだけど、逆というか戻るというのはあるのだろうか。どう表現したらいいか分からないが、今必要なのは、根本的な生きる力だ。

ここドルポで生きていくには、一番必要なことだ。ここでは、動物、人間、山などのライン引きがなくて、命あるもの皆同じ。これこそが自然と共存している世界観なのか、と思った。彼らは、実際はそんなことを考えてないと思うが、私はそう感じた。なぜなら、私は彼らと一緒に3ヶ月を暮らしてみて、彼らが最後にはチャングラーに見えてきたのだ。ドルポに自分の体が完全順応していくのも嬉しかったが、燃料が底を突きかけていた。デポしていた灯油が後少しで底を突く。購入するつもりはなかったけれど、聞いてみたら、ヤクの糞は売れないと言われた。

極寒の中で暮らすには、ヤクの糞が一番の燃料だった。家の貯蔵庫にはいっぱいあるけれど、今後何が起こるか分からないから売れないんだろうな、と思った。実際、18年には十数年ぶりの大雪が降り、サルダンのヤクが約3500頭死んだ。そうなると全てが変わってしまう。ヤクの糞は取り放題ではなくて、村によってルールがあった。サルダンでは昔はなかったが、今は年に一度糞を取る日があって、3日間のうちに100kgまで、200kgまでと決めら

れている。だから、本当に貴重な燃料である。私の体が本当にドルポに順応していると実感してきたなか、燃料が終わるのと同時に越冬を終えよう、そして、ロサルは雪が降ると言われているのを信じで、その前に下山することを決めた。

下山は、想定していたルートとは違っていて、予定外の村を経由した。さらに冬道は夏道とは異なり、大部分が遠回りとなった。なるべく雪が少ない山肌を選んで５０００ｍの峠を１つ越えて順調に下山していたところ、ドゥー村で大雪が降り、１日停滞した。大きな峠を越えた後で良かった。１日でもずれていたら、峠越えはラッセルで非常に厳しい状況となっていただろう。その後の下山は、黒部の下廊下のような渓谷で、そこに雪が着き、大迫力となって緊張のトラバースが続いたが、ガイドとポーターのお陰で、大雪で停滞をした１日を含めて11日間掛かって無事に下山することができた。越冬期間は１０２日間となり、スタート地点のドゥネイに２月25日に帰着した。

ドルポ越冬を終えて、下山直後に思ったことがある。それは、ドルポは全土が聖地で、山々に神々が住んでいるということだ。実際、ここに人が住み始めたのは８００年前ごろで、瞑想地ができて僧侶が住み、村が形作られたと聞いている。私は逆だと思っていたから、聞いたときは驚いた。しかし今、ほぼ全土を歩き尽くして、越冬してみて納得した。ドルポにはシェー山を中心に、曼荼羅を描いているように無数にゴンパがある。この地に住む全ての人々がラマのように感じ、極楽浄土が本当にあるのならば、ここは天国のような世界だと思った。

今、日本にいても、あの満月の日のプジャを思い出すだけで、心が穏やかに、豊かになる。何もかもある便利な日本、便利な時代に生まれ育った私にとって、ドルポは想像力が掻き立てられる場所であり、人々であった。何もないように見えるが、全ての原点が「今まさにここにある」かのように感じる。これからの生きるヒント、力になるのは間違いない。必要最低限で生きている彼らを見て思った。その土地に在るものを活かして、循環して生活している彼らに学んで、今、この時代を生き延びようと思う。

最後に書き残しておきたいことがある。帰国してすぐ、「銀河鉄道９９９」の世界が本当にあるのではないかと思わせる出来事があった。越冬中、星空を撮影していたとき、赤オレンジ色の流れ星が流れた。長い時間流れていて、見とれてしまった。「すごいなぁ、昔アニメで見ていた銀河

鉄道みたいだ。さすがドルポだ」と思っていたら、帰国して数日後、私の住む金剛山の麓で、同じ赤オレンジ色の長い長い流れ星を見た。かなり驚いた。一瞬にして、ドルポで見たときの星空に飛んだ。あのときと全く同じだ。なんでだろう？　と考えると同時に、これはお世話になったドルポの大御所様が、皆あの銀河鉄道に乗っていて、私が金剛山に戻るのを見届けてくれたんだ、と本気で思った。

さらに末尾ながらドルポの大御所様たちに、心からの感謝の念を捧げたい（順不同）。故高山龍三氏（文化人類学者、チベット文化並びに河口慧海師の研究者。私の出発後に他界された。出発直前まで一緒にイベントをしたり、間際までメールを送って下さっていたので信じられなった。悲しみと同時に感謝の想いが溢れ出た。）、故吉永定雄氏（日本山岳会会員、『ヒマラヤ巡礼』など翻訳書多数）、故水谷弘治氏（日本山岳会会員、１９７１年カンジロバ・ヒマールのツォカルポカン初登頂者）、故大西保氏（日本山岳会会員、西ネパールの第一人者、私にとってのバラサーブ）

（日本ヒマラヤ協会会員）

調査・研究

上高地、岳沢の氷河地形

小疇　尚

はじめに

上高地から正面に仰ぎ見る穂高連峰の岩稜とその下方に広く開いた岳沢谷の眺めは、日本随一の山岳景観と言ってよいであろう。その絶景は日本の近代登山の黎明期から登山家に知られ、やがて我が国の代表的景勝地として認められることとなって、１９２７（昭和２）年には「日本八景」の一つ（渓谷の部）に、１９５２（昭和27）年には「特別名勝、特別天然記念物」に指定され、今では毎年１００万人を超える人々が訪れる一大観光地になっている。

この景勝地の地形を初めて調査・報告した大関久五郎（１９１６）は、「自然の情趣を（略）好山家に思う儘に味わせている。（略）しかし全体の地形の詳細は今以て地学者の手で紹介されて居らぬ様である」（58ページ）と述べて、その成り立ちを詳述した。特に岳沢を一大圏谷（１５７ページ）と認めて、その形成過程の説明に多くのページを割いている。その後、この論文は一部を断片的に、あるいは氷河地形説否定のために引用されることはあっても、岳沢の氷河作用の証左とされた現象や地形を実地で検証したものはほとんどない。専門書や山の自然に関する一般書でも、涸沢や槍沢の氷河地形はよく記述されるが、我が国で最も多くの人の目に触れている岳沢の氷河地形について説明したものは、ないように思われる。

筆者は上高地を研究のフィールドとしてこなかったので、現地調査をほとんど行なっていないが地形図、衛星画

像判読、文献とほかの山地での観察などを基に、岳沢の氷河地形について考察を試みた。

1　岳沢の地形構成

岳沢は奥穂高岳を頂点として、東側が前穂高岳を経て明神岳1峰から同5峰にかけて南東～南に延びる山稜と、西側がジャンダルム、西穂高岳を経て西穂独標へ南西～南に延びる、海抜２５００ｍを超える尾根に囲まれて南に開口した、奥が広い谷である。そのため上高地から、奥穂高岳を頂点とする左右対称の安定感のある山岳景観を見通すことができる。

この景観の基盤をなす地形は、谷の源頭部から出口、すなわち高い方から低い方へ、A岩稜・岩壁、B崖錐斜面、C谷底の礫堆、D河床、E谷出口の岩塊集積地に大きく分けることができる（写真1、小疇ほか２０１９）。Eは針葉樹林に覆われているため、上高地からは幅の広い谷底の森林としか見えないが、両側の山地斜面とは明瞭に区別できる。上記のうち、岩稜・岩壁は風化と侵蝕によって形成された岩の地形、ほかはすべて上部の岩壁からもたらされた岩屑からなる堆積地形である。以下、このように区分したそれぞれの地形について記述する。

A　岩稜・岩壁

奥穂高岳から前穂高岳に延びる吊尾根に代表される岳沢源頭部を囲む鋸歯状の岩稜は、海抜２５００ｍ以上が急峻な氷蝕岩壁の切り合う氷蝕岩稜（アレート）である。尾根は２５００ｍ以下ではハイマツに、２４００ｍ以下では丸みを帯びて森林に覆われ、氷河作用の影響が認められない。

岩稜下の岩壁は氷期には氷に覆われ、所々に岩が露出して凍結融解作用を受けていた氷蝕岩壁で、枝谷やガリーに刻まれて多くの支尾根が分岐しているが、下部の岩屑が堆積する崖錐斜面との境は明瞭で、その境界を2万５０００分の1地形図で読み取り、比較のため北隣の涸沢を含めて図1に示した。図には２５００ｍと２０００ｍの等高線を点線で記入した。２５００ｍは岳沢のハイマツ帯上限に当たる。なお、現在の岩屑堆積域は氷期には雪氷が占めていたと考えられるので、図1は氷期の氷河分布図でもある。

この図から岳沢は涸沢に比べて岩壁の下限が低く、枝谷に刻まれて支尾根が多いことが分かる。枝谷と支稜は北西～南東方向のものが多く、西側の蒲田川、右俣谷にも同様の地形配列が認められることから、後述するように、岩石の節理の走向に支配されていると考えられる。

B　崖錐斜面

これは岩壁から崩落した岩屑が堆積した堆積地形で、ガリーの出口に形成される崖錐は半円錐形で等高線が同心円を描くが、ここでは平底の谷中とその下方の斜面に堆積しているので、地形図の等高線が谷の上部では山側に凸で、下部では下方にやや張り出している。崖錐は背後の岩壁が広い天狗沢、コブ沢、扇沢の出口付近では岩壁直下の部分が流水で侵蝕されているが、全体的には草と灌木に覆われて安定していることから、過去のある時期に形成されて、現在はほとんど変化のない地形と判断される。

図2は岳沢下端と奥穂高岳頂上の間を等間隔の15の帯に分けて、それぞれの帯についての断面を並べた投射断面図（注1）で、この図の2000m以上に見られる、滑らかな浅い窪みが崖錐に覆われた谷である。この浅い窪みは谷川岳・一ノ倉沢や幽ノ沢の岩壁下のスラブと同様の地形で（小疇、2015）、氷河の侵蝕によって形成されたものである。したがって、その凹みを埋める崖錐は、氷河の後退後に堆積したことが確実である。

C　谷底の礫堆

岳沢の谷底の海抜約2200mから1700m弱にかけて舌状に延びる、ダケカンバやミヤマハンノキなどの灌木に覆われた長さ約1・5km、幅最大300mの蒲鉾型の堆積地形で、図3の岳沢の谷底よりも10～20m高い。投射断面図（図2）では1800～2000mの谷底の凸部がそれに当たる。礫堆は中心部を貫く乾いた河床によって、幅の広い右岸側と狭い左岸側に分かれている。右岸側は2000m以上が崖錐に覆われて両者の境が判然としないが、それ以下では崖錐斜面よりも高い。残雪期には写真2のようにこの礫堆が雪上に出ているので、雪に覆われた崖錐斜面との関係がよく分かる。登山道が通っている左岸側は幅の狭い段丘状で、下端部では山地斜面との間に狭い窪みがあるが、上流に向かうにつれて、山地斜面を刻む沢の沖積錐や崖錐に覆われている部分が多くなる。

大関（1916）はこれを「砕屑の舌状地」と呼んで、氷河縮小時に形成された後退堆石と解釈した。五百沢（1967、1979、2007）はこの部分を氷河の範囲として図示しているが、モレーンの記号を記入していない。上高地の自然案内を書いた長岡（2013）は五百沢の図より下方の1680mでモレーンを観察して、それが岳沢氷河末端のモレーンであるとして図に描いている。原山（1990）は地質図に、前述の崖錐とこの舌状部分を合わせてモレーンとアウトウォッシュとしている。いずれもある時期の氷河末端の地形と考える点では一致している。

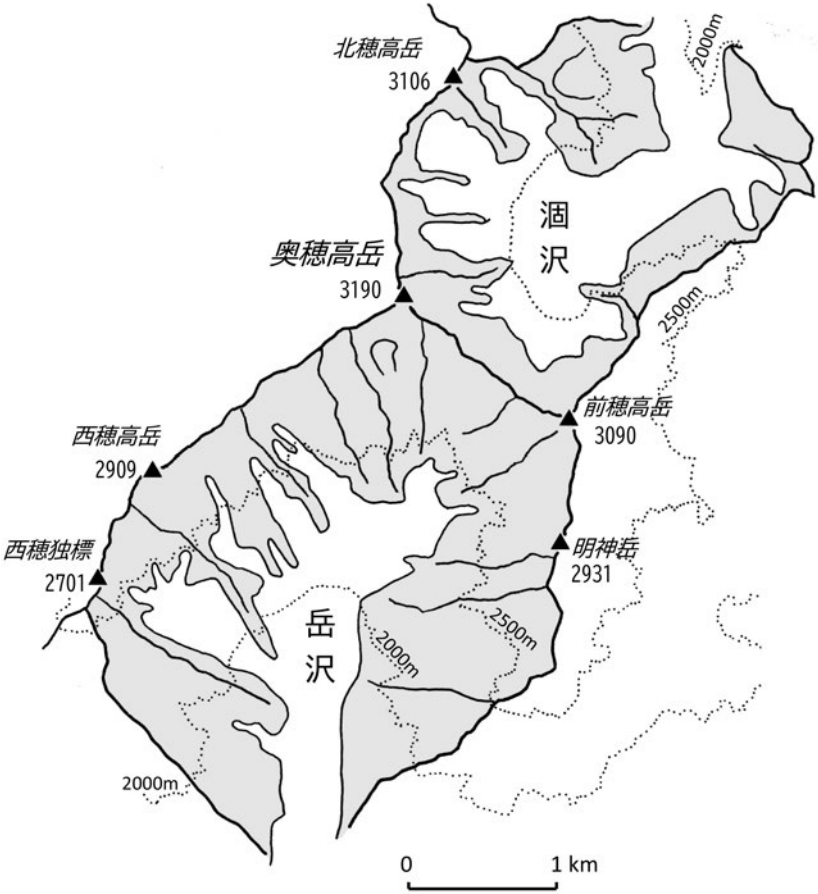


図１　氷河最拡大期の岳沢、涸沢
白抜き部分：氷期の氷河分布域（岳沢出口右岸側の枝谷を除く）、
現在の堆積物分布域　アミの部分：氷期、現在の侵蝕域

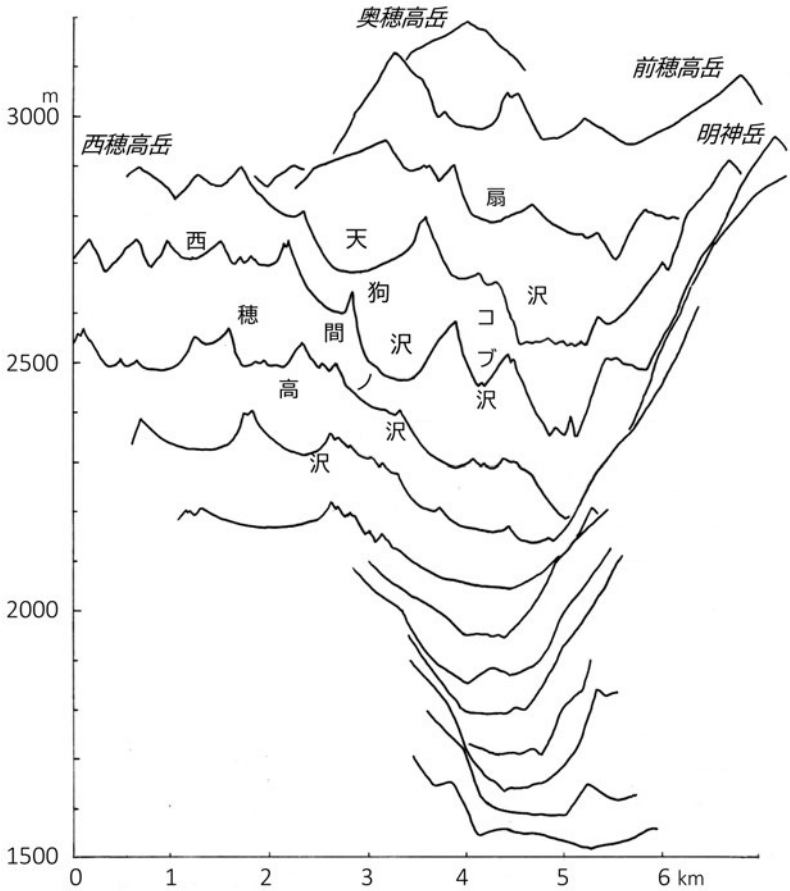

奥穂高岳
前穂高岳
明神岳
西穂高岳
m
3000
2500
2000
1500
0
1
2
3
4
5
6 km
扇
天
狗
沢
コ
ブ
沢
西
穂
間
沢
高
沢
沢

図２　岳沢の投射断面

この地形の左岸側、海抜１８５０ｍ地点の高さ約５ｍの崖に、茶褐色の粘土質の土に充填された数十cm大以下の角礫層が露出しており、層相から氷河成堆積物（ティル）と判断されることから、この地形は側堆石と認められる。右岸側では灌木林中に数ｍ大の溶結凝灰山岩の岩塊が散在しており、反対側の側堆石と考えられる。両岸の側堆石は標高１８００ｍ付近から下方で傾斜を増し、次に述べる河床の礫に覆われて不明瞭になる。この部分が端堆石で、その末端は約１６５０ｍである。この側堆石と端堆石を合わせて「岳沢高位堆石」と呼ぶことにする。

D　河床

前記の谷底の礫堆、すなわち左右の側堆石の間を占める浅い平底の河床で、数十cm～数ｍ大の亜角礫に埋め尽くされて流水がなく、上高地からは白い帯のように見える。衛星画像の判読では、河床は源頭の滝沢大滝直下の海抜２３００ｍ地点では幅60ｍ、深さ35ｍの深いＶ字谷だが、岩壁を離れると平底の溝になり、岳沢小屋付近の海抜２０００～２２００ｍの間では幅約30ｍ、深さ10ｍ弱で、ほとんど変化がない。河床の幅はそれより下流では見晴台まで20～55ｍで変化し、見晴台（１７６０ｍ）の直下流で端堆石を覆って幅１００ｍに広がり、海抜約１７００ｍで終わる

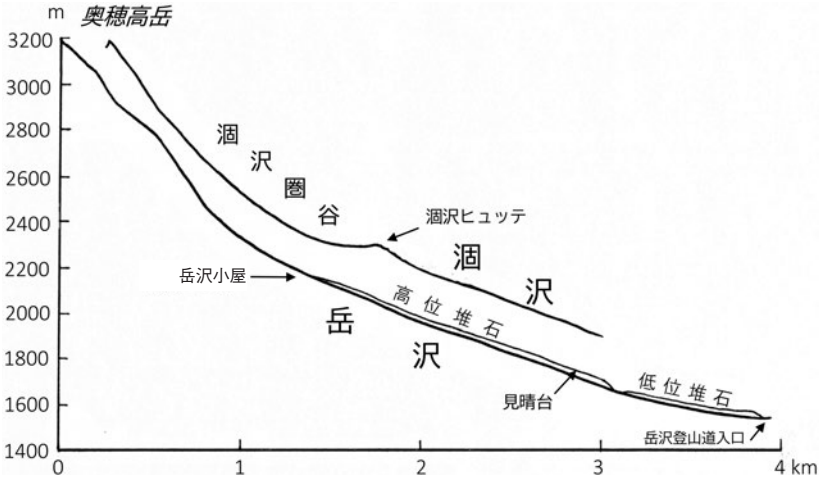


図３　岳沢、涸沢の縦断面

（注2）（写真2）。

河床には、全体に径数十cm大の亜角礫からなる、下流側に張り出した幅15～25m、前面の高さが1m前後の三日月形ないし舌状の土石流堆が広がっており、豪雨時の土石流で礫が押し出されていることを示している。河床の岩塊は上流部で大きく、下流で小さくなる傾向が認められ、最大のものは海抜2000m以上では長径12mで、5～8m大のものが十数個見られ、2000m以下では最大7mで、3m以上のものは少ない。12m大の岩塊は、衛星画像で見る限り2015年以降、2019年秋まで位置が変わっていない。

このことから河床の礫は、岩塊を含めて急激な増水時に渓岸と渓底の侵蝕で掘り出された氷河堆積物に由来するものが大部分で、現在の気候下で岩壁から崩落して流されたものは少ないと考えられる。この河床堆積物は端堆石を覆っているが、その下端までは達していないので、氷河の後退以降、岳沢から梓川へは岩屑が排出されていないことが分かる。

E　岳沢谷出口の岩塊地

岳沢の下流部は海抜1520～1800mの部分が、幅約400m、長さ1km弱の廊下状になっており（写真1、

写真2　岳沢高位堆石と崖錐斜面

図1、2)、その谷底に大量の岩塊が堆積している。この部分は針葉樹林に覆われているため見通しが利かず、地形が分かりにくいが、末端に沿う治山運搬路からの観察で、数m大の岩塊を含む岩屑が押し出されて形成された堆積地形と判断できる。大関（1916）は谷の出口両側の尾根の末端が氷河に削り取られた切断山脚、谷底の堆積地形を大きな砕屑岩塊からなる舌状地形と記載し、谷を横切る複数の丘陵脈があることから、これを端堆石と考えた。長岡（2013）の「氷河時代の上高地と槍・穂高連峰（復元図）」には、この岩塊地が岳沢氷河の端堆石として描かれている。前記の1680mモレーンの説明と矛盾しているが、説明がないので詳細は不明である（注3）。

近年、航空レーザー測量で森林中の地面の高さが測られるようになり、それによる標高メッシュデータを用いて作られた細密地形図や陰影図で、空中写真には写らない樹林下の複雑な地形が明らかになった。苅谷・松四（2014）は、このデータで作成した細密地形図によって、深層崩壊によると見られる巨大な舌状地形が岳沢登山道入り口に分布して岳沢の流路をふさいでいることを指摘し、木田ほか（2016）は、その岩塊がすべて花崗岩と花崗閃緑岩であることから、右岸側最下流の枝谷上部に発生した深層崩壊の堆積地形で、チャンネル状凹地があることから、崩壊が二度あったと考えている。筆者ら（小疇ほか2019）は、同様データによって作成した図4の判読と現地調査によって、岩塊が崩壊堆積物であることを確認する一方、地形の形成過程については、次のような別の解釈をしている。

2　岳沢低位堆石堤

岳沢ロウブの地形

岳沢出口の岩塊堆積地形は、図4に見るように半月状の先端部と、それより上流側の縦縞状の起伏が目立つ部分に分けられる。筆者ら（小疇ほか2019）は、先端部を岳沢ロウブ、縦縞のある部分を主部として、それぞれ別の作用で形成された地形であるが双方が接続して堆石を構成していると考え、前記の高位堆石と区別して低位堆石とした。なお、苅谷・松四（2014）と木田ほか（2016）は、岳沢ロウブの部分に関する考察で、上流側の主部については触れられていない。

岳沢ロウブは弦の長さ300mの、前縁部がやや盛り上がり高さ数mの急斜面で縁取られた、火山の溶岩ロウブに似た半月形の舞台状の高まりで、左岸側が高く、4°の傾斜で右岸側に傾いている。地表には数m大の花崗岩塊が集積

A：岩稜・岩壁　B：崖錐斜面　C：礫堆　D：河床　E：岩塊集積地

写真１　岳沢の地形区分

して複雑な起伏があり、最大の岩塊は長さ17m、幅12・5m、高さ12m、推定重量約6000tであった（小疇ほか2019）。このような形状から、これは崩落堆積場所から粘性流動によって現在の場所に移動・堆積したものと考えられる。岳沢ロウブは高位堆石よりも見掛けの体積が小さく、涵養域に広く分布する凝灰岩を含まないことから、岳沢の上流から押し出されてきたものではなく、木田ほか（2016）の指摘のように、右岸の花崗岩山腹斜面からの崩壊堆積物である。

これに似た、高さが低いロウブ状の端堆石はニュージーランドのサザン・アルプス、アオラキ／マウント・クック山塊にいくつかあり、氷河の消耗域に崩落した岩屑なだれ（rock avalanche）堆積物によってできたと考えられている。写真3は上空のヘリコプターから偶然目にした、同山塊フッカー氷河上に崩落した岩屑なだれのデブリで、のちにこの写真を撮影したときに、氷河上では調査が行なわれていた（Reznichenko et al., 2011）ことを知った。

その研究によれば、写真3－Aの氷河上の岩屑は、フッカー氷河右岸のマウント・ベアトリスの岩屑なだれの岩屑が、消耗域の氷河を3～5mの厚さで覆ったもので、その断熱効果で岩屑層下の氷が融けず、5年後には周囲より20～30m高いプラットフォームになった。論文ではその調査結果と、1991年のアオラキ／マウント・クック崩壊など多くの事例を総合して、岩屑に覆われた高まりは裸氷の部分よりも速く流下し、気候変化と無関係にロウブ状の低い端堆石を造るという結論を導いている。

岳沢ロウブの形成プロセス

写真3－Aの岩屑被覆部分はその後さらに流下して、フッカー氷河末端の氷河湖に達するモレーンと合体して形が崩れたが、2004年とほぼ同じ場所に06年に発生したと見られる岩屑なだれ堆積物が氷上にもたらされた（写真3の白丸部分）。この堆積物は06年の衛星画像では氷河上に長さ450m、幅150mで半島状に突き出ていたが、09年には曲がり始め（写真3－A）、4年後の画像（写真3－B）では、半月形に変化したことが分かる。写真3－Cはさらに5年後の衛星画像で、岩屑被覆部分と前後の氷河表面との間にはっきり段差が認められる。そして、画像上に位置が固定された100mのスケールによって、5年間で520m移動したことが分かる（注4）。Reznichenko et al.,（2011）のモデルでは、岩屑被覆氷は氷河本体よりも速く流下して、場合によっては本来の氷河末端より先に進み、後退中の氷河では裸氷部分より後退速度が遅くなる。

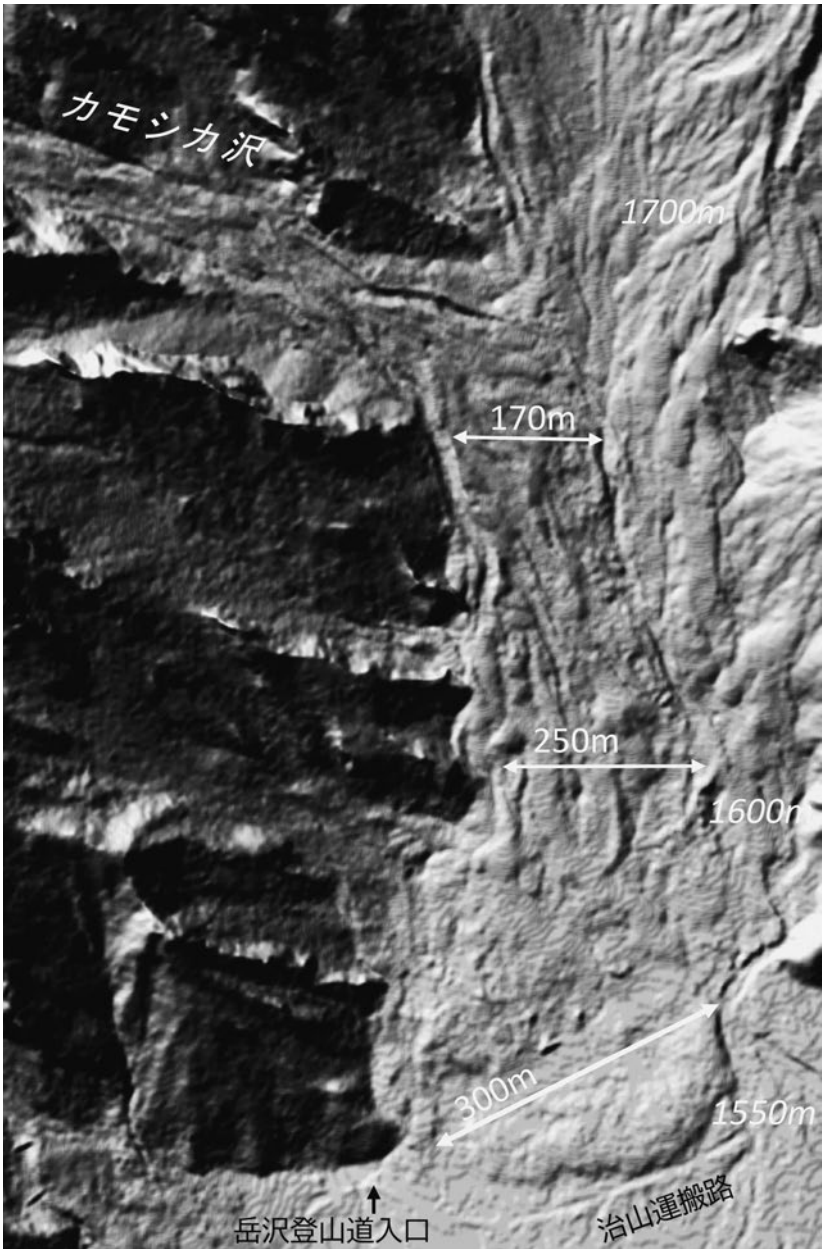


図 4　岳沢低位堆石（陰影図）
（1 m DEM を用いて佐々木明彦氏作成）

いずれの場合でも、やがて融氷水によって下底から融けて薄くなり、動きが止まって端堆石になる。岳沢ロウブは、このようにして形成されたのではないかと考えられる。

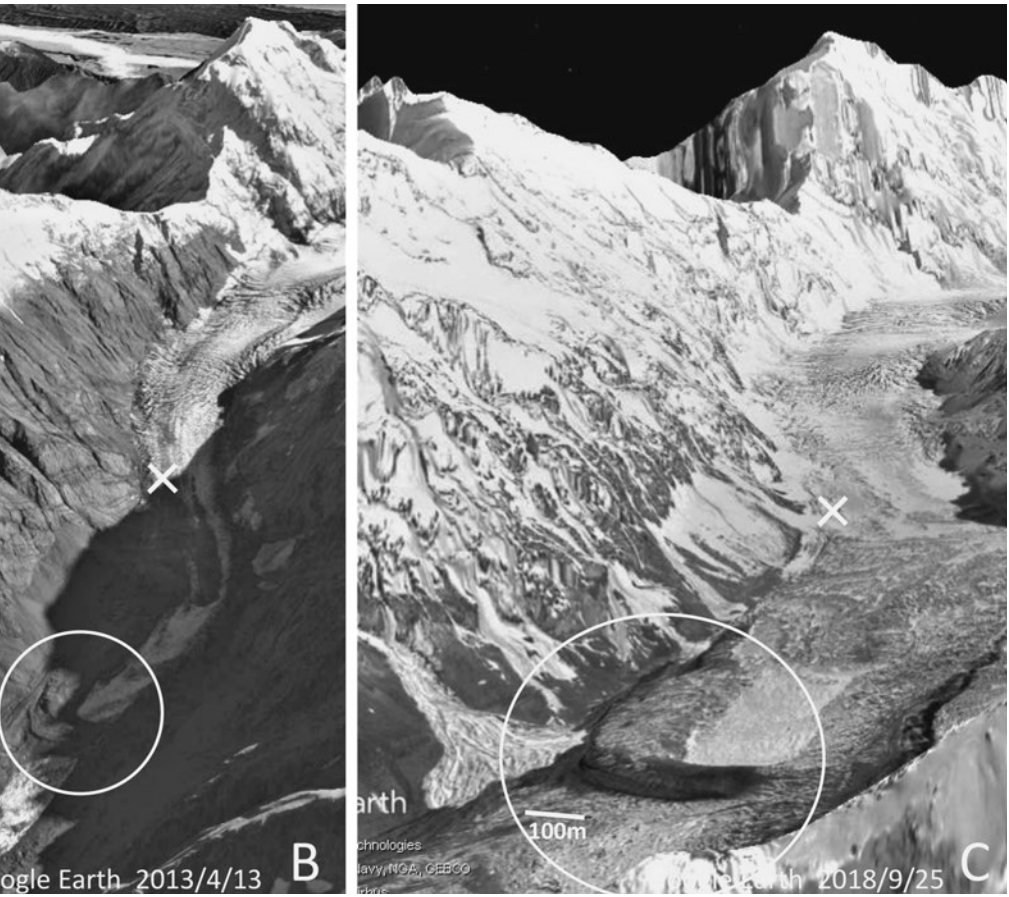
岩壁から氷河上に崩落した岩屑に覆われた三日月型の高まりは、カムチャツカ半島のビルチェノク氷河でも観察されていて、間歇的に発生する氷河のサージに関連づけて論じられているが（Yamaguchi et al, 2007）、その後の衛星画像では氷河自体が消滅しており、変化過程を検証することができない。また、後退が続く東アルプス最大のパステルツェ氷河では、過去20年間に裸氷の部分では氷厚が減少して大きく後退したが、岩屑に覆われた右岸（グロスグロックナー山）側は、それに比べて変化が小さいことが明らかにされている（Kellerer-Pirklbauer, et al, 2008）。衛星画像で見ると氷河はその論文後も縮小を続けて、裸氷部分の先端は岩屑被覆部分のそれよりも２０１５年には約６００m、19年には８００m余後退している。

岳沢ロウブ上流側の堆石主部

岳沢ロウブの上流側に分布する長さ約７００m、幅２００～２５０mの岩屑堆積地（図４）で、表面には縦方向に延びる比高数mの土手状の高まりと溝が発達している。土手状の高まりは側堆石に似て両岸で高く、その間が全体にやや低い。先端が岳沢ロウブに達して終わっており、それとは形成過程と時期が異なると考えられる。

上記の起伏パターンと崩壊地形の存在から、これは西穂高岳・独標南東面のカモシカ沢右岸１７５０～１９００mの山体崩壊による砕屑物が流下して谷を埋めた堆積物であることが分かる。カモシカ沢には氷河地形が認められないので、氷河以外の作用で運ばれた岩屑が本谷の氷河を覆って、岩屑被覆氷河起源の岩石氷河（松岡１９９８）となったのではないかと想像される。永久凍土環境の山地では、さほど強くない集中的な降雨でも土石流などで大量の岩屑が移動するので（Jahn, 1974 ; Larsson, 1982 ; Martin and Dieter, 1995）、富士山で春先の豪雨時にしばしば発生しているようなスラッシュ雪崩でもたらされた可能性も考えられる。また、先端部は右岸側支谷からの崩壊岩屑に覆われているように見えるが、確認はしていない。

成因については不明の点が多く、時代に関する証拠も得られていないが、岳沢ロウブに接続していることから、両者を一体とみなして岩塊地全体を「岳沢低位堆石」とした。なお、この低位堆石を覆う針葉樹林は、シラビソ－ウラジロモミ群落とされており（亀山１９８４）、大関（１９１６）はこの針葉樹林が「取りわけ大なる砕屑岩塊の横たわると


ogle Earth 2013/4/13
B
arth
chnologies
avy, NGA, GEBCO
100m
2018/9/25
C

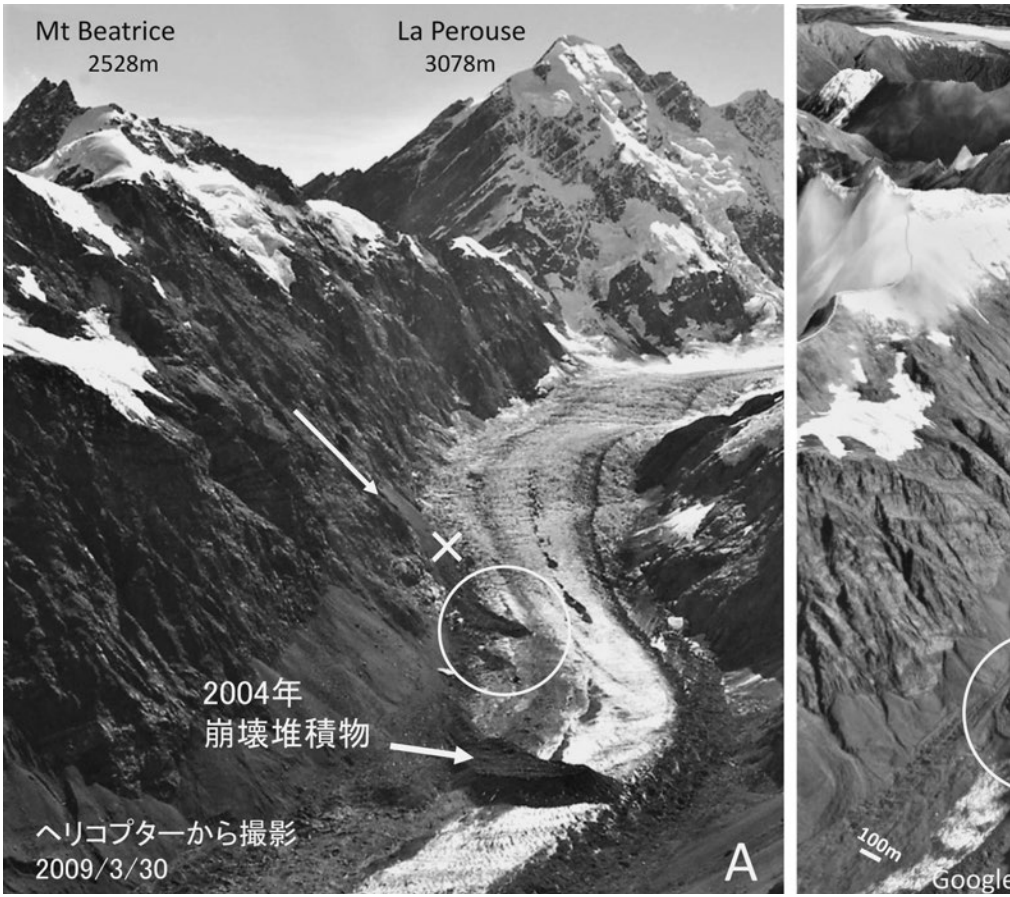


写真 3　ニュージーランド・フッカー氷河、氷河上の岩屑なだれ堆積物の移動と変形

（B、C は Google Earth 画像、日付は画像取得日）

→崩落方向×堆積地点　白丸は 2006 年（？）の岩屑なだれ堆積物　B、C 左下方の白短線は長さ 100 m（位置不動）

ころ」に立地していると述べて、地形と森林植生の関係に注目している。五百沢（1979）もこの森林が槍沢の一ノ俣・二ノ俣モレーン、横尾谷モレーンのそれに酷似していることを指摘している。

3　岳沢の氷河地形と氷河のタイプ

岳沢谷中の崖錐、高位堆石、岳沢河床の堆積物はすべて氷蝕地形の内部に堆積しているので、かつてはそこを氷河が占めていたと考えられる。図1はその考えに基づく最拡大期の岳沢氷河で、氷河は南北に細長く延びて、多くの枝が分かれた複雑な形になっていた。大関（1916）は岳沢の地形を「圏谷」と記述し、氷河については懸垂氷河が合流して小規模な渓谷氷河になっていたと考えた。それ以降、岳沢の氷河地形を圏谷（カール）と記述した研究者は、長岡（2013）以外に見当たらない。辻村は教科書（1923）にカールの例として紹介し、その後の著書ではカールから氷蝕谷への移行形でトローク（氷蝕溝）であると記述している（1957、384～385ページ）が、いずれも大関論文の引用である。五百沢（1979、2007）は、涸沢から北の圏谷をすべてカールと記しているが、岳沢については氷河の範囲を図示しているのみで、カールとは呼ばず、地形の説明もしていない。

岳沢は、Linton（1963）の氷蝕谷（trough）の分類で、山地の河系を氷河が踏襲して拡張した山岳型（alpine type）（注5）の発達初期段階と認められるので、谷全体を指す場合は氷蝕谷とするのが適当であろう。稜線直下から延びる支谷の細長い氷河はクーロワールを埋めるもので、剱岳の三ノ窓谷、小窓谷などの小氷河（福井・飯田2012／福井ほか2018）と同じ縦長の雪崩涵養型氷河であるが、内外のテキスト類にこの型の氷河についての説明がないので、ここではクーロワール氷河と記述する（注6）。

4　岳沢の氷河地形の発達―涸沢との比較

氷河以前の河系と氷河地形

岳沢は槍・穂高連峰の中で梓川の最下流の支流であるため流域の高度が低く、流域最高点との高度差が横尾谷、槍沢より大で、しかも河川長が短いので、河床の平均勾配がほかよりも大きい。そのため氷河作用を受ける前には河系が十分に発達して、本流は急勾配の枝谷よりもかなり緩やで、谷幅も広がっていたと考えられる。これに対して涸沢圏谷は横尾谷の支谷最上流部で谷底が高く、氷蝕前には樹枝状河系の先端部の、いわば梢に当たる短く急な沢が山腹

を刻んでいたと見られる。このような河系発達の違いと、河床の高度差が氷河作用に影響して、現在の景観の違いが生まれたと考えられる。両谷の氷河地形の形成過程は、次のように説明できるであろう。

氷期に入ると岳沢では、奥穂高岳山頂直下の扇沢源頭部に雪が吹き溜ってニチ（壁龕）氷河が形成され、比高１００ｍの南向きの岩壁には氷が張り付いて雪崩が頻発し、クーロワール氷河も発達した。奥穂高岳から西穂高岳に延びる尾根の東斜面では雪庇から崩落する雪がガリーを埋め、それが岩壁から凍結破砕で生まれた岩屑の落下通路となって、ガリーは次第に幅を広げてクーロワール氷河が形成された。クーロワール氷河の雪崩と氷は出口の下方に堆積し、やがて複数のクーロワール氷河の氷雪が集まって本谷を埋める氷河に発達した。東側の前穂高岳～明神岳の尾根では、冬期の卓越風の風上側に当たる西斜面には氷河があまり発達しなかった。そのため本谷への雪氷供給量は西側斜面からのものが多く、氷河全体が東に押しつけられる形になり、西側に枝分かれが多い、複雑な形の山岳氷蝕谷が形成された。なお、前穂高岳～明神岳の尾根の東側斜面には、岳沢西斜面と同様に多くのクーロワール氷河が発達した。これらのクーロワール氷河群とその間のやせ尾根には北西～南東の方向性が顕著で、岩石の節理方向に支配されて発達したことを示している。この方向性は槍・穂高連峰一帯の河系パターンにも現われており、岩体の弱線に沿って発達した適縦河川が造ったと見られる。

一方、涸沢の源頭部では北穂高岳、涸沢岳、前穂高岳の各斜面を刻む急勾配の短い沢がほぼ同じ場所で合流していたため、岩壁を刻むクーロワールからの雪氷が狭い範囲に集中して嵩が増し、谷頭を埋めて圏谷を造った。

氷河の涵養域

北アルプスの氷期の雪線高度を山崎（１９１４）と大関（１９１６）は、ともに約２５００ｍと推定した。穂高連峰とその西に位置する笠ヶ岳では、最終氷期の雪線高度が２３００～２５００ｍで推移したことが明らかになっているので（伊藤・正木１９８９／長谷川１９９６）、ここでは簡単のため雪線高度を２５００ｍ、それ以上が雪氷の涵養域としてその面積を計測した。谷の流域面積と２５００ｍ（図１）以上の涵養域の面積は、岳沢が７・８㎢と２・７㎢、涸沢は横尾谷合流点までの流域面積４・５㎢のうち２５００ｍ以上が２・１㎢である。すなわち、岳沢では涵養域の面積は流域面積の約３分の１、涸沢では涵養域の面積が２分の１、そのうち圏谷の部分に限れば３分の２になる。

このように岳沢は消耗域が広いが、北西～南東方向のクーロワール氷河がほぼ等間隔で本流氷河に合流したため、氷河が消耗域の上部で途絶えることなく、谷の出口まで流下したと考えられる。これに対して涸沢では谷頭に大量の雪氷が滞留して圏谷を造り、出口の敷居を越えて流下した氷河が大キレット圏谷と南岳圏谷からの氷河と合流して、横尾谷の１６５０ｍ付近まで達して、そこにモレーンを残した。

5　岳沢の氷河の消長

岳沢では氷河の消長を決定できる年代資料は得られていないが、槍・穂高連峰を含む北アルプス南部でこれまでに明らかにされている氷河地形発達史（五百沢１９７９／伊藤１９８２／伊藤・正木１９８９／長谷川１９９６、２００６／岩田２００３）と同様の経過をたどったと考えられる。それらによれば岳沢氷河が最も大きく前進したのは、最終氷期前半（７・５万年前ごろから４万年前ごろ）の横尾亜氷期で、図１の氷河の範囲はその時期に当たる。当時の梓川は田代池付近で海抜１２００ｍくらいであった（原山２０１５）ので、岳沢氷河は現在の渓口より少し延びて、今よりも低かった梓川の河岸に達していたと考えられる。岳沢には、現在と同じように一つ前の氷期以降に堆積した岩屑が滞留していたはずで、前進する氷河がそれを押し出して堆石（モレーン）を造り、その前面から大量の泥を含む融氷水を梓川に注いでいたと思われる。岳沢の容積から推して堆石はかなり大きかったと予想されるが、１・２万年前に出現した古上高地湖（原山２０１５）の堆積物中に埋没したと考えられる。

氷河は４万年前ごろまで段階的に後退した後、急速に縮小した。氷河の急速な後退は想像しにくいが世界中の山岳氷河で現に進行中で、ヨーロッパ・アルプスではグランド・ジョラス山塊北東面のフェレ谷の支谷で、岳沢と面積と形のよく似たトリオレ氷河の例が参考になる。この氷河は数世紀前の小氷期に本谷まで達していたが、１８１８年から後退を始めて、２０１５年までにその末端高度が約１０００ｍ上昇した（注7）。岳沢に当てはめると、氷河が２００年間で図１の２５００ｍ等高線まで縮小したことになる。雪線はそれより２００～３００ｍ高くなるので、西側ではクーロワール氷河が縮小して本流氷河に合流できず、孤立したであろう。これに対して奥穂高岳南面から吊尾根～明神岳側では、涵養域の面積が西側より相対的に大きくなって、氷河の中心が東へ移ったと考えられる。

後退した氷河は3万年前ごろからの涸沢亜氷期に再び前進し、1650m付近まで流下して高位堆石を残した。この時期には、吊尾根側からの本流氷河に西側の天狗沢とコブ沢の支流氷河が合流して中央堆石を形成した。しかし、ほかの支流氷河は先端が本流氷河に達していたが、本流氷河の側堆石が高くて合流できなかった。西側の支流氷河はその後、1万年前ごろにかけて段階的に縮小して（長谷川2006）クーロワールに退き、氷河が融けて露出した浅く幅の広い谷が崖錐に覆われていった。

涸沢では涸沢亜氷期の最低位堆石が横尾谷合流点のやや下流に、その上流側に二度の停滞期の堆石が分布している（長谷川2006）。涸沢ヒュッテの堆石は、圏谷全体の地形の新鮮さから推して、完新世のネオグラシエーション期のものと考えられる。岳沢では奥穂高岳頂上直下の遅くまで雪の残る小圏谷に、ネオグラシエーション期と小氷期にニチ（壁龕）氷河が存在したと見られるが、氷河が岳沢の谷底に達した形跡はない。

まとめ

河童橋から眺める岳沢の地形は、高い方から低い方へ氷蝕山稜・岩壁、崖錐斜面、谷底の礫堆、河床、谷出口の岩塊集積地に区分できる。このうち氷蝕山稜・岩壁は氷河の侵蝕地形で、ほかはすべてそこからもたらされた岩屑が造る堆積地形である。すなわち、崖錐斜面は氷河が退いてのち岩壁から崩落した岩屑が堆積した斜面、谷底の礫堆は最拡大した氷河が退いた後に再進出した涸沢亜氷期の側堆石と端堆石＝高位堆石、河床はその側堆石の間の平底の河原、谷口の岩塊集積地は氷河が最も拡大した横尾亜氷期の堆石＝低位堆石である。

岳沢は氷期前の樹枝状河系を氷河が踏襲して発達した山岳氷蝕谷の発達初期段階の谷で、谷頭部に明瞭な圏谷がない。氷河はおもに氷蝕山稜の直下から延びるクーロワール氷河が拡幅伸長して合流し、一本にまとまって谷出口両側の切断山脚の間を経て梓川の谷に達していた。氷河が最も拡大したのは最終氷期前半の横尾亜氷期で、その後一時大きく後退した後、涸沢亜氷期に再び拡大して1650m付近まで流下した。完新世には奥穂高岳頂上直下に小さな氷河が存在したと見られるが、岳沢の谷底には達していなかった。

【注記】

注1：投射断面図の帯は、低い方から4本目までは谷の伸長方向（北°15東）に直交する東西方向、1750mから上は、手前の尾根との重なりを避けるため見晴台を中心とする同じ幅の同心円とした。

注2：Google Earth（画像取得2015年10月25日）画像上での計測。

注3：この図はかつて上高地ビジターセンターに展示されていたとのことであるが、筆者は見る機会を逸した。

注4：2019年の衛星画像では、その先端が100mスケールに掛かっているが、山域全体が新雪に覆われて、地形が分かりにくい。

注5：氷蝕谷（trough）を氷河が発達する前の地形によって4タイプに分類したうちの一つ。山地の河系を氷河が踏襲して拡幅し、発達すれば谷頭に圏谷のある支谷の氷河が本谷氷河に合流するタイプで、形態や大きさ、発達段階は様々。

注6：用語の提案理由＝(1)カナディアン・ロッキーの国際学会エクスカーション時に現地でWenkchemna（Ten）Peaksのガリーを埋める縦長氷河の呼称を質問したところ、リーダーからクーロワール氷河が良いのではないか、との返答であった。(2)山の用語解説でクーロワールは「一般に大きな山で雪や氷の（詰まった―筆者補足）ガリー」とある（Cleare, J.（1979）Collins guide to mountains and mountaineering. William Collins and Sons, 208p.）。欧米の地形学教科書や専門書類にこの型の氷河の記述がないのは、氷河のある山地ではクーロワールに氷が詰まっているのが普通で、特に説明する必要がないからであろう。

注7：この氷河を正面に望むエレナ小屋に展示されている18説明パネルと、地形図、Google Earth画像（画像取得2015年7月2日）による。フェレ谷のほかの7氷河も、すべて同期間に高さ700m以上後退している。

【文献】

福井幸太郎・飯田肇（2012）飛騨山脈、立山・劔山域の3つの多年性雪渓の氷厚と流動―日本に現存する氷河の可能性について。雪氷、74、213～222

福井幸太郎・飯田肇・小坂共栄（2018）飛騨山脈で新たに見出された現存氷河とその特性。地理学評論、91、43～61

長谷川裕彦（1996）北アルプス南西部、笠ヶ岳周辺の氷河・

周氷河地形発達史。地理学評論、69A、75～101
長谷川裕彦（2006）槍・穂高連峰の氷河地形。町田洋、松田時彦、海津正倫、小泉武栄編『日本の地形5中部』187～193、東京大学出版会、385p.
原山智（1990）上高地地域の地質（地域地質報告、5万分の1地質図幅）。175p.
原山智（2015）上高地盆地の地形形成史と第四紀槍・穂高カルデラ―滝谷花崗閃緑岩コンプレックス。地質学雑誌、121、373～389
五百沢智也（1967）『登山者のための地形図読本』、山と溪谷社、404p.
五百沢智也（1979）『鳥瞰図譜＝日本アルプス』、講談社、190p.
五百沢智也（2007）『山と氷河の図譜』、ナカニシヤ出版、142p.
伊藤真人（1982）北アルプス南部、蒲田川、右俣谷の氷河地形。地学雑誌、91、88～103
伊藤真人・正木智幸（1989）槍・穂高連峰における最低位ターミナルモレーンの形成年代。地理学評論、62A、438～447
岩田修二（2003）日本アルプスにおける最終氷期の重力地形・氷河最拡大期・山岳永久凍土。第四紀研究、42、181～193
Jahn, A.（1976）Contemporaneous geomorphological processes in Longyeardalen, Vestspitsbergen（Svalbard）. Biuletyn Peryglacialny, 26, 253～268.
亀山章（1984）上高地の植生。環境庁中部山岳国立公園管理事務所監修、『上高地の自然』、19～47
刈谷愛彦・松四雄騎（2014）細密地形データからみた上高地の崩壊地形。地図中心、2014年7月、10～13
Kellerer-Pirklbauer, A., Rieb, G. K., Avian, M. and Gspurning, J.（2008）The response of partially debris-covered valley glaciers to climate change: the example of Pasterze Glacier（Austria）in the period 1964 to 2006. Geografiska Annaler, 90A, 269～285.
木田千鶴・刈谷愛彦・高岡貞夫・島津弘（2016）岳沢下部に発達する崩壊性大型ロープ状地形の地形・地質的特徴と成因。日本地球惑星科学連合2016年大会、MGI20、p13
小疇尚（2015）谷川岳の氷河地形―一ノ倉沢を中心に。山岳文化学会論集、12、57～63
小疇尚・佐々木明彦・長谷川裕彦（2019）穂高岳、岳沢のモ

レーン。日本地理学会発表要旨集、96、65
Larsson, S.（1982）Geomorphological effects on the slopes of Longyear valley, Spitsbergen, after a heavy rainstorm in July 1972. Geografiska Annaler, 64A, 105–125.
Linton, D.L.（1963）The forms of glacial erosion. Transactions of the Institute of British Geographers, 33, 1～27.
Martin, G. and Dieter, S.（1995）Snowmelt and slush torrents-preliminary report from a field campaign in Karkevagge, Swedish Lappland. Geografiska Annaler, 77A, 199～206.
松岡憲知（１９９８）岩石氷河―氷河説と周氷河説―。地学雑誌、１０７、１～24、口絵４p.
長岡信治（２０１３）『長岡信治遺稿集』、長崎大学教育学部、９７９p.、３８６～３９９。初出は『上高地自然観察マニュアル』、上高地ビジターセンター（１９８８）、A20～A31
大関久五郎（１９１６）梓川上流上高地附近の地形に就て。地質学雑誌、23、55～67、１０１～１１０、１４５～１５７、１８９～２０６、２２３～２３６
Renznichenko, N., Davies, T. R. H. and Alexander, D. J.（2011）Effects of rock avalanches on glacier behavior and moraine formation. Geomorphology, 132, 327～338.
辻村太郎（１９２３）『地形学』、古今書院、６１０p.
辻村太郎（１９５７）『地形の話』、古今書院、４５０p.
Yamaguchi, S., Sawagaki, T., Matsumoto, T., Muravyev, Y. D. and Naruse, R.（2007）Influence of debris cover on ogive-like surface morphology of Bilchenko glacier in Kamchatka. Arctic, Antarctic and Alpine Research, 39, 332～339.
山崎直方（１９１４）飛騨山脈に於ける氷河作用に就て。地質学雑誌、21、１～12、51～61

調査・研究

奥飛騨の登山案内人たち

槍ヶ岳・穂高岳における厳冬期初登頂時代の裏方

木下喜代男

近代登山の黎明期を支えた山人

周知のとおり、近代になってからの中部山岳地帯へは、最初は英国人ジョン・ミルン、ロバート・ウィリアム・アトキンスン、ウィリアム・ガウランドなど、いわゆる「お雇い外国人」や外交官などが、学術調査や趣味で登っている。その後はナウマンが関わって設立された農商務省地質調査所の日本人学者などが、地質調査や地形図作成のため歩いた。

同時期に参謀本部陸地測量部員が三角測量のため飛騨山脈、木曽山脈、赤石山脈のめぼしい山の頂に足跡を記し、農商務省山林局の営林技手も、国有林境界確定のため各地の山へ入っている。

そして、明治27（１８９４）年、志賀重昂の『日本風景論』が出版され、明治38（１９０５）年、ウォルター・ウェストンの勧めで日本山岳会が創立されたころから日本人が趣味で登り出し、「探検登山黄金時代」から大正期の「岩と雪の時代」へと続いてゆく。

これらの登山のほとんどを、案内や荷運びなどで支えたのが、飛騨山脈では越中の芦峅・大山、信州の有明・大町・島々、そして飛騨の中尾・蒲田などの地元の山に精通していた猟師、釣り師、杣人などの山人であった。

山岳の情報がほとんど得られなかったこの時代、彼らの協力なしでは学術調査や測量の成果は得られず、近代登山史に残る数々の記録樹立などは到底無理であったろう。現

在のような登山道も山小屋もなかった時代である。

登山を支えた山人のうち、どの地方でも猟師が多かったのはなぜであろうか。それは近世から近代の初めまで、日本中の標高が高くてコメが穫れない山村では、どこでも焼畑農耕のほか狩猟や採集に拠っており、彼らが地元の山に精通していたからである。

この山人たちは、その後、案内などの需要が増えてくると「山案内人」と呼ばれるようになり、この職業を表わす名称は大正期に定着した。大正中期からヨーロッパ・アルプスの影響を受け、「ガイド」とも呼ばれるようになった。

それまでは、立山には「中御（ちゅうご）（語）」、富士山には「強力」といった案内兼荷担ぎがいたし、白山の美濃禅定道には案内役の「御師（おし）」がいた。また、御嶽山や乗鞍岳への登拝は「先達（せんだち）」がその役目を担っていた。

山は神仏のおられる所として登拝の対象になっていたほか、森林、鉱物資源をもたらす所として江戸期には諸藩に厳重に管理され、絶えず巡視が行なわれていた。有名なのは加賀藩の「黒部奥山廻り」、松本藩の「山方奉行」などである。これらの役人の業務を助けていたのは、地元の猟師や杣人など山人たちであった。

天領飛騨でも山林経営が重要であったため、高山陣屋の地役人が「山廻役」として山林管理に当たっていた。彼らは、村人から選出された山に詳しい猟師や杣人を「山見役」として雇い、案内などに使っていた。

近代になって槍・穂高連峰周辺で最初に山案内人の名が登山史に登場するのは、よく知られている島々の猟師、**上条嘉門次**である。

明治26（1893）年8月、参謀本部陸地測量部の館潔彦測量掛が三角測量の選点のため前穂高岳に登ったとき同行し、この2週間後にはウォルター・ウェストンを明神岳東稜から前穂高岳へ案内している。

嘉門次は14歳で上高地へ入り、杣小屋のカシキ（炊事係）から始めて杣仕事に従事。その後、明神池畔に小屋を造ってイワナ漁や狩猟をするようになった。カモシカや熊を追って穂高周辺を広く歩き回るうち、登山者を安全に導くことができる卓越した知識、技術を身に付けていった。

前述のように、飛騨高地の山村にも猟師が多く、近代になって山案内人をいちばん多く輩出している焼岳山麓の中尾集落もそうであった。

明治41（1908）年8月に、飛騨山岳会員で日本山岳会員でもあった古瀬鶴之助が、笠ヶ岳と硫黄岳（現在は焼岳）に登り、『山岳』第5年第3号に手記を載せている。そ

のとき通過した中尾集落の様子を、「中尾は硫黄岳の一面なる、山麓に位し、一溪出づ、戸数十四五、畑地能く肥え、桑麻菜豆粟稗等に適す」と書いている。

その中尾集落だけでなく、蒲田川（高原川）沿いのコメが穫れない集落にも猟師が多く、熊やカモシカを追っての行動範囲は驚くほど広かった。

蒲田川右俣谷・左俣谷、笠谷、下佐谷、双六谷とその支谷を中心に、笠ヶ岳から双六岳、西鎌尾根、三俣蓮華岳、黒部五郎岳、北ノ俣岳の稜線にまで及んだ。

猟は数人で組んで雪の中で何日も泊まりながら行なうが、集落ごとに縄張りが決められていたという。猟師は雨や風の中で、しかも森林限界上のハイマツでたき火をし、

奥村市次郎

飯が炊けなければ一人前でないとされていた。この猟で培われた土地勘や生活技術などは代々受け継がれ、のちに登山者を案内するときに大いに役立つことになる。

飛騨で登山史に最初に名前が出てくる案内人はやはり猟師で、明治27（1894）年、ウェストン一行が3度目の挑戦で笠ヶ岳に登りに来たときであった。

またも蒲田集落の区長に案内人不在を告げられて途方に暮れていたとき、案内を買って出てくれたのが栃尾集落の猟師、**奥村市次郎**であった。奥村は中尾集落の猟師頭、**中島市右エ門**宅にウェストンを泊め、翌日、同じく中尾集落の猟師、**山本竹次郎**と笠ヶ岳へ案内をしてくれたのである。

ウェストンは著書『日本アルプス―登山と探検』で、このときの奥村市次郎の的確な案内ぶりをいたく褒め、中尾の猟師頭、中島の猟に出るときの服装・装備を詳しく書いている。そして、同行のハミルトンはそのいでたちを写真に撮り、後日、中尾集落へ送っている。

明治39（1906）年8月には、中尾集落の猟師、**松葉七之助**が、四高教授の林並木を案内して穴毛谷から笠ヶ岳へ登っている。

次に名が出てくるのは、大正3（1914）年8月、日本アルプスにおける探検登山黄金時代の棹尾を飾ったと言

猟仕度をした中尾集落の猟師頭

われている、小島烏水の双六谷遡行である。

このときの同行者は、飛騨山岳会員でもあった双六小学校長の中野善太郎はじめ地元の教員6名と、案内は下佐谷集落の猟師、**高田勘太郎**、**大倉弁次**。あと4名の人夫は、上宝村宮原、高山八日町などの杣人であった。

一行は8月6日に源流の双六池に達し、双六岳、笠ヶ岳に登って穴毛谷を下るが、この探検の成功は、この山域に精通している猟師の力に負うところが大きかった。

小島は後に書いた『飛騨雙六谷日記』に、「高田（五〇歳）と大倉（二〇歳）の二人は路案内に精（くは）し、大倉は少年にして精悍なり、高田は一徹なれどさすがに落ち着きありて、人夫中の頭領なる貫目あり、豪膽にして恐れず」と、高田の頑固さに少々閉口しながらも、結果褒めている。

大正10（1921）年7月、高山の山刀倶楽部員7名が双六谷を遡行したときも**高田勘太郎**、**大倉弁次**が案内をしている。

登山案内人組合の設立

大正期に入ると日本の登山界は新しい時代に入る。

大学山岳部とそのOBが主体となって「岩と雪」に挑戦するスポーツ的登山が行なわれる一方、陸地測量部から5万分の1の地図が発行されたこともあり「登山の大衆化」が進んで、急激に一般の登山者も増えてきた。

このため各地で案内や荷物運搬の需要が急増。これに伴って不良案内人が増え、賃金のトラブルなどが頻発するようになってきた。

小島烏水は、日本山岳会設立当初からヨーロッパのガイ

ドの例を引いて、日本でも優れた山案内人養成の必要性を訴えている。そして大正４（１９１５）年、日本山岳会が創立10周年を迎えたときには、「良質なガイドには登山案内者手帳を交付すべき」などと具体的な提言を行なったが、地元の事情もあって実現には至らなかった。

大正６（１９１７）年、信州大町の旅館・對山館の百瀬慎太郎が「大町登山案内者組合」を設立した。これは案内人の賃金を明示し、質の向上を目的とするもので、その後、各地の登山口に案内者組合が創られてゆく。

大正11（１９２２）年、上高地を拠点とする「島々口登山案内者組合」ができ、組合長は西糸屋の奥原英男、案内人は**大井庄吉**、**内野常次郎**ほかであった。

飛騨では大正10（１９２１）年、「上宝村登山案内組合」が設立され、蒲田口支部は**今田金次郎**、平湯口支部は**中澤直一**が代表を務めていた。

昭和３（１９２８）年７月、飛騨山岳会が「北アルプスは飛騨口から」という宣伝リーフレットを発刊して全国に配布したが、それには登山コースの紹介のほか、３つの案内組合が記載してある。

前述の上宝村案内組合と、御嶽秋神口案内組合、白山飛騨口平瀬案内組合である。このうち上宝村案内組合の案内賃金は左記のとおりであった。

「普通日額＝金二圓・自炊及危険場所＝金二圓五〇銭・冬期案内日額＝金三圓・日帰ノ場合外二食費代トシテ金八十銭を申シ受クルコト・案内強力者ノ食費雑費ハ登山者の負担トス・出発地点迄ノ帰リ日當及宿料、馬車賃ハ申シ受クルコト・案内強力者ノ一人負荷ハ凡ソ五貫以内トス」

賃金は、同じ飛騨の中でも御嶽山や白山とで若干の違いが見られる。また、強力の負荷が飛騨では五貫目以内になっているが、信州大町では八貫目になっている。

その後、飛騨の案内組合は乗鞍口に２ヶ所、御嶽山でさらに１ヶ所が新たに設置されている。

当時、上宝村登山案内組合の蒲田口支部に所属している案内人は30名くらいいたが、ほとんどが猟師であった。先輩猟師から地理的情報などを、慶応や早稲田の山岳部員からはザイルの結び方やピッケルの使い方、スキー術などを学んだと、今田重太郎は書いている。そして、組合は登山道の新設や改修、道標の設置なども行なっている。

登山史に残る案内人たちの活躍

大正10（１９２１）年９月に、アルプスでアイガー東山稜初登攀を果たした槇有恒が帰国し、「岩と雪」の山を登攀

昭和初期、穂高小屋前に集う今田金次郎、中畠政太郎、今田由勝、杉本為四郎、小瀬紋次郎（後列左から）。前の１人は内野常次郎

奥飛騨の山案内人たち

する技術と思想を伝えてから日本の山の登り方は大きく変わり、より困難な登高を目指す時代になってゆく。

この時代は「学生山岳部時代」とも言われ、学生とOBが槍・穂高連峰で積雪期登山と岩登りの先陣争いを実践してゆく。この時期につくられた一連の輝かしい記録は、我が国の近代登山史に金字塔としてそびえている。

これを支えたのは、この山域に精通していた奥飛騨の案内人たちであった。

〈中尾集落〉中島作之助・杉本為四郎・滝沢喜一郎
中畠政太郎・内野政之助・（内野常次郎）
〈蒲田集落〉今田金次郎・今田由勝・今田重太郎
今田友茂・下毛熊次郎
〈栃尾集落〉松井憲三・松葉菊造
〈下佐谷集落〉大倉弁次・高田勘太郎
〈柏当集落〉向丸清丸
〈上地ヶ根集落〉小瀬紋次郎

◆明治末期から大正初期にかけて、参謀本部陸地測量部の三角測量が飛騨山脈で行なわれ、中尾集落の**中島作之助**が人夫に雇われて槍・穂高連峰の稜線をさらに詳しく知ることになった。この中島が、中尾などの後輩猟師たちを案内人に育成していった。

◆大正元（1912）年8月13日、**中島作之助**は槍ヶ岳～穂高岳の初縦走者・鵜殿正雄と上高地から天狗のコル経由で奥穂高岳に登頂して上高地へ戻り、翌14日、上高地から再び天狗のコルを経て西穂高岳に登頂。その後、西穂高沢から下降した。

◆大正2（1913）年7月、**中島作之助**が一高の山岳会員を案内して前穂高岳に登頂。

◆大正4（1915）年8月には、**今田金次郎**が飛騨山岳会員の中野善太郎と白出沢を登って、奥穂高岳から西穂高岳へ初縦走し、小鍋谷を下っている（大正5年5月号、日本山岳会『山岳』に記録が掲載）。

◆大正7（1918）年8月には、**内野常次郎**がW・H・エルウィンと槍ヶ岳・北鎌尾根上部を登攀。

◆大正11（1922）年3月30日、槍ヶ岳が槇有恒をリーダーとする慶大隊によって積雪期初登頂される。

◆大正12（1923）1月、槇有恒、三田幸夫、板倉勝宣が立山・松尾峠で暴風雪により遭難。板倉が帰らぬ人となった。

◆同年4月には、**中島作之助ほか3名**が慶大の大島亮吉ほか2名を槍平から槍ヶ岳へ案内し、飛騨側からの槍ヶ岳スキー初登頂となった。

◆同年8月、飛騨山岳会が槇有恒を招き高山で講演会を開催。講演内容はアイガー東山稜の登攀と、この年の1月に起きた松尾峠の遭難について、であった。飛騨ではこのとき初めて新しいアルプス的登山というものを知った。

大正13年という年は、のちに「スポーツ的登山の第2の黄金時代」、または「銀の時代」と言われ、積雪期の中部山岳の主な山が次々と登頂された年であった。

◆大正13（1924）年1月、早大隊の舟田三郎ほか2名が厳冬期の槍ヶ岳に初登頂。案内人なしの壮挙であった。早大はこの先もサン・ギイド（ガイドレス登山）を実践してゆく。

◆同年3月には、**松井憲三**、**杉本為四郎**、**下毛熊次郎**が慶大の大島亮吉ら8名を案内して涸沢に入り、3月31日に奥穂高岳の積雪期初登頂に成功した。そして4月6日には、大島亮吉と**松井憲三**が悪天の中、北穂高岳に積雪期初登頂をした。このとき松井は、頂上直下の氷の急斜面に鉈でステップを刻んで大島を導いた。その後、一行はベースキャンプを岳沢に移し、4月11日には前穂高岳の登頂に成功している。

◆同年4月1日、**今田由勝**は学習院の岡部長量ほか2名を案内して、慶大隊より1日遅れで天狗のコルから奥穂高岳に登っている。

◆同年3月29日には、早大隊が中尾峠から焼岳に登頂し、4月5日には善六沢から稜線伝いに西穂高岳へ積雪期初登頂を行なった。

◆同年8月、**大倉弁次**、**中島忠太郎**の案内で冠松次郎が双六谷を遡行し、その足で黒部川・上ノ廊下を下降している。

この年の春で、積雪期の穂高岳の主な頂はすべて登られたのである。

◆大正14（1925）年4月1日には、**松井憲三**、**杉本為四郎**が慶大隊を案内して涸沢岳から北穂高岳に登頂。4月11日には槍沢から槍ヶ岳に登り、飛騨沢から槍平へ下って12日に蒲田へ。**中島作之助**は同じ日に、慶大のもう1隊と南岳から槍ヶ岳へ積雪期初縦走している。4月7日には、この隊と玄文沢から西穂高岳へ積雪期初登頂。

◆同年、**今田重太郎**が前年に石室を造った白出のコルに穂

高小屋を新設した。

◆同年8月13日には、日本の登山史上今でも語り継がれている、偶然にも同じ日に2つの隊による初登攀が北穂高岳・滝谷で行なわれた。**松井憲三**は関西RCCの藤木九三と組み（**下毛熊次郎**と富田砕花はテントキーパーで残る）、**今田由勝**と**向本清丸**は早大の四谷竜胤と小島六郎を案内して、それぞれ滝谷を初登攀したのである。時間的には藤木隊がA沢を詰めて先に登っているが、核心部を通過したのはD沢を登った早大隊と言われている。

◆同年8月15日には、第3登をねらい、関西RCCの西岡一雄と辻谷幾蔵が**中島作之助**を伴って挑戦したが、雨で増水した雌滝が登れず敗退。落石で怪我を負った西岡は、中島の助けによって下山でき、後日「中島のお陰で九死に一生を得た」と語っている。

この滝谷の登攀でも分かるように、このころ飛騨の案内人の一部は、厳冬期の稜線歩きだけでなく、ロッククライミングもこなせる、優秀なクライマーに成長していた。

◆大正15（1926）年4月の初め、**松井憲三**ら4名は慶大隊と奥穂高岳、涸沢岳へ登った。同じころ、**今田由勝**など今田3兄弟が北大の伊藤秀五郎など7名を案内して、槍ヶ岳、北穂高岳、前穂高岳などに登っている。

◆同年3月29日、**中島作之助ら3名**が、成蹊大の成瀬岩雄ほか1名を案内して蒲田川左俣谷から抜戸岳を経由し、笠ヶ岳に積雪期初登頂を行なった。そして、4月1日には槍平から南岳へも登頂している。

◆この年には、穂高岳における最初のアクシデントが発生した。7月31日、今西錦司ら三高のメンバー5名が奥又白谷から前穂高岳・北尾根4・5峰のコルへ達し、コルから涸沢への雪渓を下降中、今西など3名がクレバスに転落し重傷を負った。近くにいた慶大、明大のメンバーのほか飛騨のガイド、**中畠政太郎**、**内野常次郎**らが救出に当たったが、翌日1名が死亡した。

◆昭和2（1927）年4月11日、**中畠政太郎**が農大の石塚照雄らと中明神沢から明神岳へ積雪期初登頂をしている。

このころから、厳冬期の穂高岳登攀がテーマとなってきた。

◆同年8月、秩父宮が槇有恒のリーダーで奥穂高岳から

槍ヶ岳、双六岳から笠ヶ岳まで縦走され、**内野常次郎**、**中畠政太郎**、**今田重太郎**、**大井庄吉**（上高地）が案内についた。中畠政太郎は宮様の小槍登攀を先導。

◆昭和3（1928）1月、**中島作之助**が慶大の6名と横尾の岩小屋に入った。1月8日には慶大の4名が北尾根から前穂高岳へ厳冬期の初登頂に成功した。この記録は前穂高岳・北尾根からということで注目に値する。

◆1月9日には、**中畠政太郎**が農大の石塚照雄、林三郎と西穂高沢から西穂高岳の厳冬期初登頂を行なっている。

◆この年の3月には、日本の山岳界で将来を嘱望されていた慶大の大島亮吉が前穂高岳・北尾根で墜落死するというアクシデントが起きた。

隊は大島はじめ6名で、同行していたのは**杉本為四郎**。3月19日、横尾の岩小屋に入り、ここをベースにパーティを分け、奥又白谷や南岳、蝶ヶ岳から前穂高岳東面の偵察などを行なった。

3月25日、6人で北尾根から前穂高岳を目指す。うち新人の2名はスキーを運ぶため途中から下山。天候が良くないため3・4峰のコルからの下山を決め、4峰頂上から涸沢側を巻いて下りかけたとき、2番目を歩いていた大島が転落して行方不明になった。

遭難当日は暖かい日で雪崩の危険があり、のちに杉本は「自分にもう少し経験があれば止めていた」と言っていた。この日、杉本は東京への通報のため徳本峠を越えて島々へ向かっている。

直後と5月の捜索で発見できなかったが、6月1日に**内野常次郎**、**中畠政太郎**、**今田重太郎**によって4・5峰のコルのルンゼで発見され、収容された。内野が連れていた愛犬が見付けたと言われている。

◆3月27日には、法大が笠ヶ岳周辺で意欲的な山行をしている。**大倉弁次**が2名に同行して小倉谷から笠ヶ岳を往復し、翌日、笠ヶ岳を越え穴毛谷に下降。24日には、別の隊と**中畠政太郎**が穴毛谷から笠ヶ岳。29日には**滝沢喜一郎**が小鍋谷から西穂高岳へ登った。

穂高岳で残った最後の課題は、奥穂高岳厳冬期初登頂となり、早・慶両隊が競うことになった。

◆昭和4（1929）年4月3日、**中畠政太郎**は慶大の2名と槍ヶ岳から北鎌尾根第1峰を往復。5日には肩の小屋から南岳を経て大キレットを往復している。

◆同年12月31日に、慶大隊5名が**中島作之助**と**内野政之助**

を伴って横尾の岩小屋に入り、部員3名が穂高小屋から翌年1月3日、奥穂高岳に厳冬期初登頂をし、吊尾根から前穂高岳を往復した。

◆昭和5（1930）年2月23日、神戸の加藤文太郎が単独で厳冬期の北穂高岳に初登頂した。

◆昭和6（1931）年3月には、**中島作之助**と**松葉菊造**が慶大の3名と槍ヶ岳から奥穂高岳へ積雪期初縦走をした。

◆同年12月20日から翌年の1月1日には、**今田由勝**が立大の2名に同行して槍ヶ岳から奥穂高岳への厳冬期初縦走を行なっている。

◆同年十12月26日から翌年1月6日にかけて、**中畠政太郎**は学習院の加藤泰安と、槍ヶ岳から西穂高岳という長駆の厳冬期初縦走を行なった。

◆昭和9（1934）年12月　今田兄弟の六男、**今田友茂**は、京大の朝鮮・白頭山遠征に参加した。このとき信州のガイド、大和由松、越中のガイド、佐伯宗作も参加している。

このころで飛騨山脈北部の積雪期初登頂時代は幕を下ろし、前穂高岳・東壁や滝谷、屏風岩などを登るバリエーション・ルートの開拓時代へと入ってゆく。

そして、今まで早大が行なっていたサン・ギイド（ガイドレス登山）が各大学に広まったこともあって、顧客は一般登山者が主体となっていった。

したがって、飛騨の案内人が登山史に残る活躍をしたのは、大正から昭和の初めにかけての10年間ほどと言えようか。

前述したように、顧客を導いて現在でも難しい厳冬期の槍・穂高を歩いたり、ザイルを結んで滝谷を攀じたりする高度な技術を習得していた彼らは、ヒマラヤ登山のシェルパと同じであった。

特筆しておかなければならないことは、学生たちとの関係は単なる報酬による雇用関係だけではなかったことである。自身も山に情熱を燃やして登山技術を習得し、命懸けで厳しい登山を支えた彼らは、もう学生たちの山仲間、同志であった。

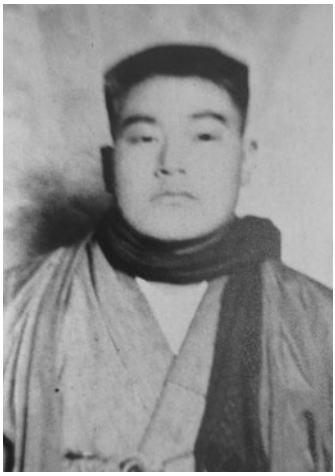
素朴で誠実な人柄は学生たちに愛され、のちのちまで交流があった。そして、学生の人生観にも大きな影響を与えたようである。

明治生まれの飛騨人というより、このころの山人特有の、過剰ともいえる謙虚さから、彼らは皆自分の山歴をなんら

語ることなく鬼籍に入ってしまった。
登山史の陰に隠れていた彼らの輝かしい功績をここに改めて記し、称えたい。

主な山案内人の素顔

◆中島作之助（1885～1936）　中尾集落



中島作之助

蒲田川筋いちばんの山の精通者。明治末期から大正初期にかけて飛騨山脈で行なわれた参謀本部陸地測量部の三角測量に雇われて高山を歩き、槍・穂高の頂をいくつか踏んで、地理に詳しくなった。松井憲三、杉本為次郎もこの中島から山を学んだ。
朴訥で真面目な性格は皆から信頼され、慶大山岳部創立20周年には内野常次郎とともに東京へ招待されて20日間も滞在。そのときデパートなど飛騨にはない施設に驚いたことなど、微笑ましいエピソードが残されている。
〈主な記録再掲〉
大正15年3月29日、左俣谷から抜戸岳を経て笠ヶ岳に積雪期初登／同年4月1日、槍平から南岳を初登頂（成蹊大）／昭和3年1月8日、北尾根から前穂高岳へ厳冬期初登頂（慶大）

◆杉本為四郎（1895～1971）　中尾集落

杉本為四郎

大人しい控えめな性格で、話に加わらず、いつも焚火のそばにいたという。無類の酒好きで、島々まで飲みに下っ

た。70歳になっても客を案内していたという。

〈主な記録再掲〉

大正13年3月31日、涸沢から奥穂高岳（慶大）／大正14年4月1日、南岳から槍ヶ岳へ積雪期初縦走（慶大）／昭和3年3月、慶大の大島亮吉隊に同行していたが、大島が前穂高岳・北尾根で墜落死した。

◆内野常次郎（1884～1949）　中尾集落

内野常次郎

上高地の「常さん」については、牛丸工の『内野常次郎小伝』はじめいろいろな書籍、新聞などに書かれ、知る人は多い。

明治34年、17歳のときに上高地の猟師、上条嘉門次に弟子入りする。同時期に、岐阜県細江村数河出身の大井庄吉も弟子入りし、ふたりとも嘉門次の助手になって猟を学び、嘉門次亡き後もイワナ漁などをして、それぞれ上高地に住んでいた。

酒好きで「天衣無縫」「無欲恬淡」の常次郎は、慶大や学習院などの学生に「常さん」といって慕われた。学生時代に常さんの小屋に入り浸りだった加藤泰安は、「常さんは小屋代や岩魚代を一切受け取らなかった」「途方もない超好人物」、松方三郎は「いつも変わらぬ温かい心の持ち主」と書いている。

昭和9年、秩父宮ご夫妻が常さんを伴って明神池でイワナ釣りをしたとき、妃殿下を「おかみさん」と呼んだエピソードが残っている。

昭和24年9月に倒れ、中尾へ運ばれて20日後に息を引き取った。享年66。上高地をこよなく愛した常次郎は、亡くなる前に「上高地の土になりたい」と言っていたという。昭和42年秋、上高地の彼の小屋跡（現・中日新聞上高地支局そば）に石碑が建立された。その下には遺髪が埋めてある。

〈主な記録再掲〉

大正7年8月、槍ヶ岳・北鎌尾根（英国人W・H・エルウィン）

◆中畠政太郎（1891～1960）　中尾集落

中畠政太郎

主に慶大や学習院の学生と行動をともにしたが、特に学習院の加藤泰安との厳冬期槍ヶ岳から西穂高岳への縦走記録は光る。彼は「慌ての政」と言われるほどの慌て者だったという。

徳沢園から前穂高岳東面登攀のベースキャンプ地となる奥又白池へ至る道を拓き、「中畠新道」と呼ばれている。

〈主な記録再掲〉

昭和2年4月11日、明神岳の積雪期初登頂（農大・石塚輝雄）／昭和6年12月26日から翌年1月6日、槍ヶ岳から西穂高岳へ厳冬期初縦走（学習院・加藤泰安）

◆松井憲三（1895～1971）　栃尾集落

松井憲三

最初は中島作之助から山を教わり、その後、営林署の高山植物保護監視人としてよく山を歩き、詳しくなった。

数ある記録の中でも、藤木九三と組んでの早大パーティとの滝谷初登攀争いは有名である。また、大島亮吉との北穂高岳積雪期初登頂では、ナタでステップを刻んで大島を導いた。

記録に残していないが、単独でセマ谷から奥穂高岳へ登り、西穂高岳まで初めて縦走したという。短躯ながら人以上に重荷を担いだ。

昭和34（1959）年7月、北飛山岳救助隊発足により、初代隊長を務めた。

〈主な記録再掲〉
大正13年3月31日に奥穂高岳、4月6日、北穂高岳積雪期初登頂（慶大）／大正14年8月13日、北穂高岳・滝谷初登攀（関西ＲＣＣの藤木九三）

◆**今田由勝**（１８９６～１９５２）　蒲田集落

今田11人兄弟の二男。営林署の委託で、右俣の登山道を今のように改修した。

〈主な記録再掲〉
大正14年8月13日・北穂高岳・滝谷初登攀（早大・四谷竜胤ほか1名）／昭和6年12月20日から翌年の1月1日、槍ヶ岳から奥穂高岳への厳冬期初縦走（立大）

◆**今田重太郎**（１８９８～１９９３）　蒲田集落

今田11人の兄弟の三男。長兄の金次郎以下、皆山に関係しているが、山案内を本業としたのは、二男の由勝と重太郎、そして戦死した六男、友茂だけだった。

17歳のとき、内野常次郎の仕事を手伝ったことをきっかけに山案内人になった。

客を連れて穂高の稜線を歩いていたとき暴風雨に遭遇し、涸沢の岩小屋に逃げ込んだ経験から、稜線に避難小屋の必要性を痛感し、実現に動き出す。

今田重太郎

大正12年に営林署へ借地願いを出し、翌13年には兄の今田由勝と白出のコルに石室を造った。そして、14年には白出沢から材を担ぎ上げ、大工によって穂高小屋を完成させた（昭和33年、穂高岳山荘に改称）。

妻まきと岳沢からの新道（重太郎新道）を10年かけて造り、昭和26（１９５１）年に完成させた。

◆**大倉弁次**（１８９５～１９５０）　下佐谷集落

猟のテリトリーであった双六谷と黒部川に詳しく、小島烏水、冠松次郎などを双六谷へ案内した。その後、笠ヶ岳や槍・穂高へも顧客を案内した。

大きい体ながら小心で、大人しい性格だったという。猟に使う「カンジキ」作りの名人で、その頑丈さは定評があった。

◆**小瀬紋次郎**（１８９９～１９８３）　上地ヶ根集落

槍ヶ岳肩の小屋を根拠地として、小槍への案内を得意としていた。元北飛山岳救助隊長・小瀬光久は甥になる。

この項は主に『奥飛騨の山と人』に拠ったが、あと中尾集落在住の内野政光氏（76歳・元北飛山岳救助隊長）に補足いただいた。内野氏にとって内野常次郎は「ひい叔父さん」に当たる。内野氏は小学1年生のとき、死の床にあった常次郎に水を飲ませたことを覚えておられた。

【主な参考文献】

『奥飛騨の山と人』岐阜県山岳連盟
『この岳に生きる』岐阜県北ア山岳遭難対策協議会
『上宝村史』
『斐太後風土記』富田礼彦
『山の民の民俗と文化』芳賀登編　雄山閣
『山と日本人』宮本常一　八坂書房
『内野常次郎小伝』牛丸工　日本山書の会
『日本登山史』山崎安治　白水社
『近代日本登山史』安川茂雄　白水社
『日本山岳会百年史』（続編・資料編）日本山岳会
『山の序曲』山崎安治　朋文堂新社
『北アルプスこの百年』菊池俊朗　文藝春秋
『われわれはなぜ山が好きか』安川茂雄　小学館文庫
『穂高小屋物語』今田重太郎　読売新聞社
『喜作新道』山本茂美　朝日新聞社
『日本アルプス―登山と探検』ウォルター・ウェストン
『小島烏水全集』小島烏水　大修館書店

調査・研究

ウェストンの九州登山の足跡を探る

2回にわたり6座に登頂した山旅の記録

田上敏行

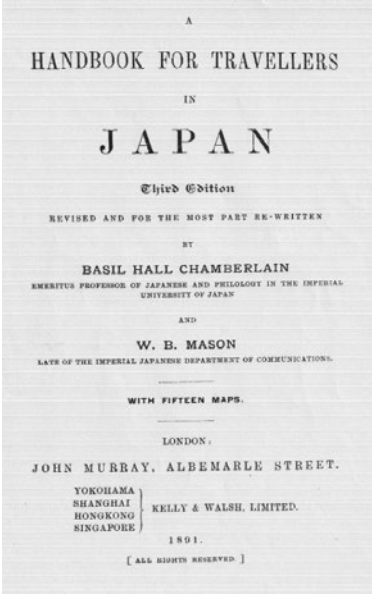
はじめに

明治維新のあと近代化を急ぐ政府は、その政策遂行のため多くの外国人を招聘した。

いわゆるお雇い外国人と呼ばれる人達で、当時の先進国から様々の分野の外国人が招かれた。当然のことながら彼らのなかには旅行や登山を趣味とする人もいたと思われる。そして忙しい仕事の合間をみつけては国内各地を旅行し山を登ったに違いない。観光やスポーツとしての登山を我が国に持ち込んだのは彼らであった。やがて彼らは旅行や登山で得た情報を交換し互いに利用したと思われる。これらの情報の集大成が当時の外国人旅行者のためのガイドブックとなった“A Handbook for Travellers in Japan”（日本旅行案内）〈以後は『日本旅行案内』という〉である。その正確な記述には定評があり、それまでのガイドブックにはなかった山岳地帯の記述もあって、ウェストンもこの本のなかの山岳地帯の記事によって日本アルプスを始めとする各地の山に登ることになるが、第3版以降からは自らも山岳地帯の情報提供者として『日本旅行案内』に関わっていった。

ウェストンは来日初期の１８９０（明治23）年と１８９１（明治24）年の2回にわたって九州を訪れて九州の山6座に登り、その登山記を『日本旅行案内』第3版に執筆している。

来日初期の貴重な登山記録といえるが、どういう訳かこ


A

HANDBOOK FOR TRAVELLERS

IN

JAPAN

Third Edition

REVISED AND FOR THE MOST PART RE-WRITTEN

BY

BASIL HALL CHAMBERLAIN

EMERITUS PROFESSOR OF JAPANESE AND PHILOLOGY IN THE IMPERIAL UNIVERSITY OF JAPAN

AND

W. B. MASON

LATE OF THE IMPERIAL JAPANESE DEPARTMENT OF COMMUNICATIONS.

WITH FIFTEEN MAPS.

LONDON:

JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET.

YOKOHAMA
SHANGHAI
HONGKONG
SINGAPORE
KELLY & WALSH, LIMITED.

1891.

[ALL RIGHTS RESERVED]

『日本旅行案内』第３版のタイトルページ

れまで、まとまって紹介されたことがないようで、『山岳』にも記録の記事が見当たらない。本稿では九州６座の登山記を紹介するとともに関係する資料をまじえて解説する。

『日本旅行案内』との関係

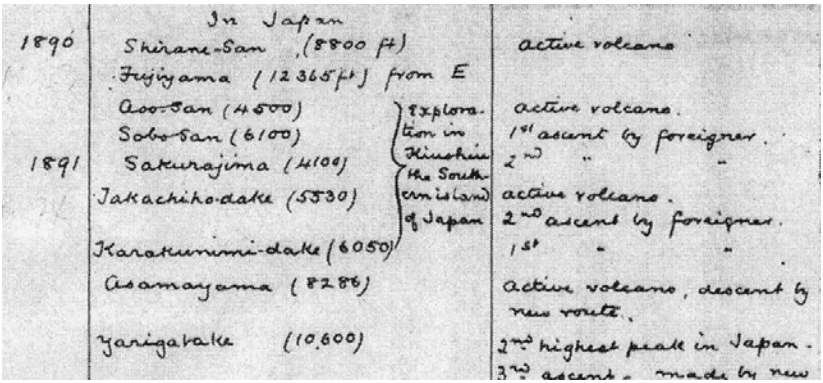
ウェストンは１８９３年に英国山岳会入会するが、その時の自筆入会申込書が残っており、申込書の登山経歴をみると１８９０年と１８９１年のところに九州の山の記載が認められる。

１８９０年に aso-san（4500）, sobo-san（6100）、１８９１年に sakurajima（4100）, takachiho-dake（5530）, karakunimi-dake（6050）とあり、それらを exploration in kiushiu the southern island of japan と括弧でまとめてある。（ ）内の数字はフィート（以下ft）に換算した標高のようだ。

ウェストンと日本旅行案内の関係を示す文書がある。１９１７年11月１日発行の『ジャパン・ウィークリー・クロニクル』にウェストンの署名のある MOUNTAINEERING IN JAPAN という記事が掲載されている。記事には「このシリーズの最初の版（『日本旅行案内』第３版のこと―筆者注）に九州の主な山である金峰山、阿蘇山、祖母山、霧島の二峰、桜島の登山記を書いた」とあり、入会申込書の５山に新たに金峰山が加わっている。

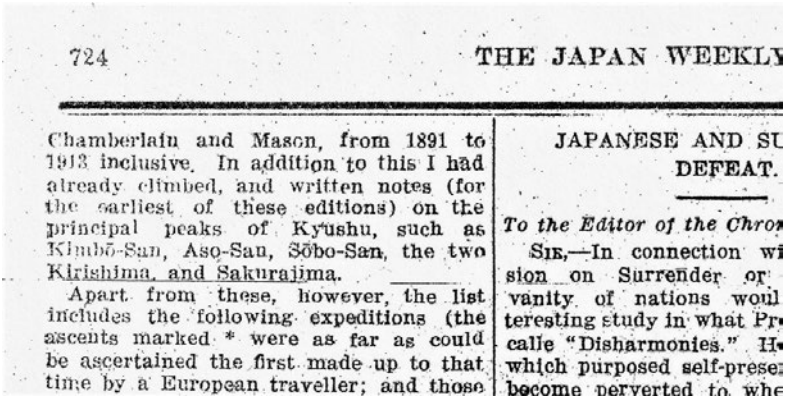
この記事が掲載された経緯については若干の説明が必要かと思われる。

１９１７（大正６）年５月、英国の王立地学協会は、ウェストンの日本における山岳探検の実績を評価して、バック賞（地理学研究発展の功績者を表彰）を授与した。ところが、これに対し神戸の外国紙「ジャパン・ウィークリー・クロニクル」は論評を加えた。その要旨は、ウェウトンの登山実績は神戸在住の登山愛好家ドーント氏のそれに及ばないとするものだった。これを読んだウェストンは反発し



	In Japan		
1890	Shirane-San (8800 ft)		active volcano
	Fujiyama (12365 ft) from E		
	Aso-San (4500)	Exploration in Kiushiu the Southern island of Japan	active volcano.
	Sobo-San (6100)		1st ascent by foreigner.
1891	Sakurajima (4100)		2nd " "
	Takachiho-dake (5530)		active volcano.
			2nd ascent by foreigner.
	Karakunimi-dake (6050)		1st " "
	Asamayama (8286)		active volcano, descent by new route.
	Yarigatake (10,600)		2nd highest peak in Japan.
			3rd ascent, made by new

田畑真一『知られざるW・ウェストン』より転載



724 THE JAPAN WEEKLY

Chamberlain and Mason, from 1891 to 1913 inclusive. In addition to this I had already climbed, and written notes (for the earliest of these editions) on the principal peaks of Kyūshu, such as Kimbō-San, Aso-San, Sōbo-San, the two Kirishima, and Sakurajima.

Apart from these, however, the list includes the following expeditions (the ascents marked * were as far as could be ascertained the first made up to that time by a European traveller; and those

JAPANESE AND SU
DEFEAT.

To the Editor of the Chro

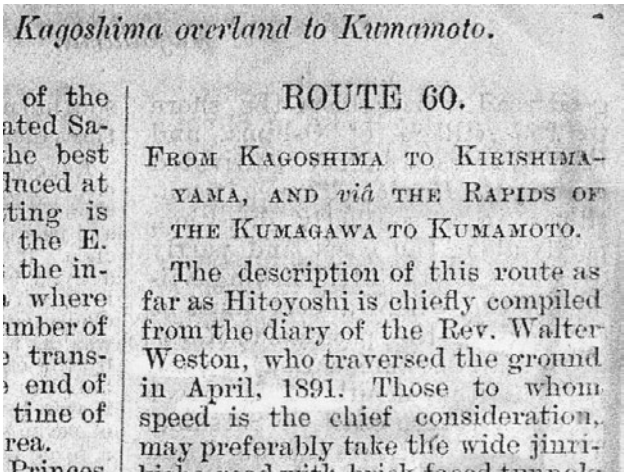
SIR,—In connection wi
sion on Surrender or
vanity of nations woul
teresting study in what Pr
calle "Disharmonies." H
which purposed self-prese
become perverted to whe

2か月後に反論文をクロニクル社に送り付け、同紙はこれを同年11月1日号に掲載した。内容は自らの登山時期がドーント氏より10年ほど早いとして探検登山の実績を強調したもので、そのなかに前掲の記事があった（以上は前田司氏および庄田元男氏の研究による）。

ウェストンが九州の山に登ったのは1890年と1891年の一連の九州登山旅行の1度だけである。このときの登山記録は91年に刊行された『日本旅行案内』第3版に掲載され、そのあと第3版を補訂した増補改訂版が第4版として94年に刊行されている。

『日本旅行案内』は第1版から9版まで刊行されているが、そのうち第3版と第4版の序文に協力を得た情報提供者としてウェストンへの謝辞が述べられている。

さらに今回の調査の過程で、『日本旅行案内』第3版のなかにウェストンの日記に



Kagoshima overland to Kumamoto.

of the
ated Sa-
he best
luced at
ting is
the E.
the in-
where
umber of
trans-
end of
time of
rea.

ROUTE 60.

FROM KAGOSHIMA TO KIRISHIMA-YAMA, AND *viâ* THE RAPIDS OF THE KUMAGAWA TO KUMAMOTO.

The description of this route as far as Hitoyoshi is chiefly compiled from the diary of the Rev. Walter Weston, who traversed the ground in April, 1891. Those to whom speed is the chief consideration, may preferably take the wide jinri-

よって編集されたことを示す記事があるのを見つけた。記事には以下のように書かれている。

「ルート60　鹿児島から霧島山へ、そして急流球磨川を経て熊本へ。

人吉に関するこのルートの記述は、主としてウォルター・ウェストン牧師の日記から編集されている。彼は1891年4月にこの地を横断した。」

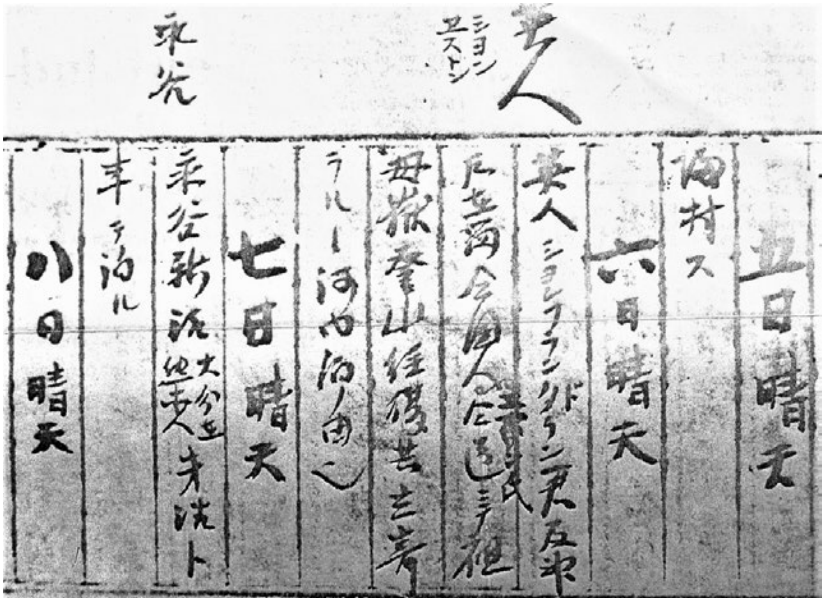
この記事から様々なことが分かるが、詳細は当該部分の説明のときに改めて述べる。

以上の資料によって日本旅行案内のなかの九州6座の記事はウェストンによって書かれたことに間違いないことがわかる。本稿では主として第3版を使用し、必要に応じて第4版によって登山記を紹介する。

ウェストンが九州の山を選んだ理由ははっきりしないが、明治21年10月から2ヶ月半ほど宣教師として熊本に赴任していたので（詳細は『山岳』第113年「熊本滞在中のウェストンの足跡」を参照）、その時に見聞した金峰山、阿蘇山、祖母山についての情報を得ていたことが一因だろう。『日本旅行案内』の編集者チャンバレンから第3版への情報提供の依頼を受けたとき、多少とも情報のあった九州の山から始めてみたのではなかろうか。

いつ頃登ったのか

ところでウェストンはこれらの山にいつ頃、登ったのだ



「矢津田日記」

ろうか。同書は案内書としての性格上、各地点間の距離は示されているが日付が書かれていない。

1890年の第1回の九州の登山記も日付が見当たらないが、祖母山については登山の途中に立ち寄った高千穂町五ヶ所の旧家、矢津田鷹太郎が日記（「矢津田日記」という）に記していたため、11月6日に登ったことが明らかになった。

日記の明治23年11月の部に「六日晴天　英人ションフランドラン君及ビ神戸在留同国人エストン氏同道ニテ祖母嶽登山　往復トモ立寄ラル　河内泊ノ由也」とある。

もうひとつ関係する日付がある。九州登山旅行を終えたウェストンが神戸に帰るときに地元英字紙に掲載された記事で、それによると同月17日に長崎港を出航している。（『山岳』82年「W・ウェストン年譜」より引用）

1890年の登山で確認できる日付はこの2つだけであるが、この2つの日付と『日本旅行案内』に書かれた記事をもとにウェストンの第1回の登山の様子を明らかにしてみたい。

1891年の第2回の登山の日付については、前掲のように4月というところまでしか分からないが、後述するようにもう少し絞り込むことができるようだ。

第1回の九州登山旅行

先ず旅の起点はどこだろうか。入会申込書の最初に阿蘇山があるので『日本旅行案内』の阿蘇山の部分を調べてみた。そうすると登山記は熊本を出発するところから書かれていた。

熊本が起点だとすると次にいつ頃、熊本を出発したのだろうか。『日本旅行案内』には、旅行中の様子のほか各地点間の距離や宿の情報が書かれているので、それらを参考にして祖母山に登った11月6日から逆算してみた。6日に祖母山に登っているので、その前夜の5日は河内に泊ったと思われる。さらに逆算すると4日は高森泊。阿蘇山では途中の経過時間から推理して登山の前後に栃木（とちのき）新湯に泊ったと考えられるので、3日と2日は栃木泊となる。したがって熊本を発ったのは、おそらく11月2日の午前中と思われる。金峰山については、熊本市の東にある阿蘇山と正反対の方向（熊本市の西）にあるので、阿蘇山へ行く前（11月1日以前）に登ったのではなかろうか。なお熊本までの経路は、当時はまだ熊本まで鉄道が開通していなかった（開通は明治24年7月）ので、2年前の赴任のときと同様に長崎経由で船便を利用したと思われる。以下、登山記の順にしたがって紹介する。

金峰山（きんぽうざん）

この山はキンプサンとも呼ばれる海抜２１００ftの山である。熊本から登り約2時間45分、下り約2時間の行程である。熊本城の北側に沿って進み（注1）、畑の中をまっすぐに行くと、工事中の熊本・高瀬間の鉄道の線路を横切る。そこから道は険しい小さな丘を越えて進む。道の側面は石切り場として使われている。（注2）小さな谷に沿って大きな敷石の敷き詰められた道（注3）を上がると、やがて道は左に曲がって近くに大きな木製の鳥居がある井戸のところ（注4）に出る。ここが金峰山の登山口になっている。（ここまで1時間35分）この鳥居は１８８９年の地震で倒壊した石の鳥居を建て替えたものである。ここから先の山頂への道は非常に急で荒れているが、途中からの眺めは登山の苦労を充分に報いてくれる。（注5）山頂には小さな社が建っており、ここの石の鳥居も地震で倒壊した。地震学者たちは、金峰山を地震の震源地とみなし、一時はふたたび噴火するのではないかと不安がられた。この山頂からの眺望は実にすばらしい。西には島原湾をはさんで島原半島にそびえる普賢岳と天草の島々。南には薩摩の山々。ほぼ東には阿蘇山が横たわり、山頂近くの西側にある噴火口から大きな噴煙が立ち昇っている。北には別の山系の丘陵が連な

り、山鹿と熊本をつなぐ道路が見える。山の景観はとても際立っているが、それ以上に熊本平野の眺めもすばらしい。絵のような城と練兵場、そして曲がりくねった白川が望まれる。比較的、標高の低い金峰山の山頂から、これほど雄大で美しい眺望が得られることは、ほとんど知られていない。

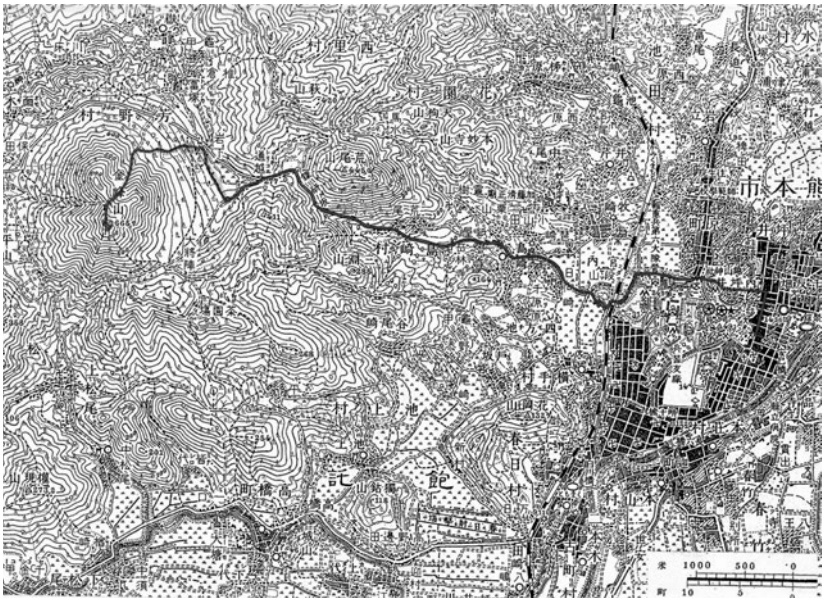
注1　熊本城の北側に沿って（西へ）進んでいることから、スタートは熊本城の東側にあったブランドラム邸の可能性が高い。ブランドラムについては『山岳』第113年を参照。

注2　熊本から金峰山へ向かうルートの起点は島崎の岳林寺である。ここから金峰山へのルートは、ウェストンが歩いた7年後の明治30年にこの道を辿った当時の第五高等学校教授だった夏目漱石にちなみ「草枕の道」と名付けられ、道標が整備されている。

注3　鎌研坂（かまとぎざか）を指す。現在も往時の雰囲気が残っている。

注4　鳥越（通越）にあった峠の茶屋のこと。ここで金峰山に登る道と有明海側の河内に下る道とに分岐する。平成元年に元の場所に茶屋と井戸が復元されている。

注5　北廻り登山道を登っている。入口に仁王の石像があるの



この地図は国土地理院発行の旧版地図（陸地測量部、明治34年測量図「熊本」）を使用した

ウェストンが勤務していた熊本聖公会教会跡近くから見る金峰山

で仁王さんコースともいう。かつて熊本市の西に連なる一の岳（金峰山）、二の岳、三の岳を結ぶ修験道ルートの一部である。昭和の初めまでは山頂の金峰山神社への参拝はすべて北側から登っていた。

金峰山は熊本市の西にあって市内のどこからも見え、市民に親しまれている山である。ウェストンは１８８８年10月から2か月半ほど宣教師として熊本に赴任していたので、金峰山のことはよく知っていたと思われる。赴任中には登った記録が見当たらないので、『日本旅行案内』のための取材旅行を熊本からスタートするにあたり、阿蘇山への出発前に金峰山に登ったのではなかろうか。

阿蘇山

人力車は大津街道より低い、白川に沿った道を坊中（注1）まで行き戻りできる。

新しい道（注2）は３００年前の松並木のある道ほど面白くはない。熊本を離れると、まもなく道は右の白川の土手に向かって下りていく。道の正面には山の中腹にある湯の谷から立ち昇る蒸気の柱が見える。坊中までの全行程は11里である。熊本から7里半のところに、右の北向山と左の

立野山の間に立野村がある。ここで人力車を降りて坊中へ送ったあと、道の右にある栃木新湯へ寄り、そのあと湯の谷を経由して阿蘇山の火口まで登り、坊中へ下ることができる。（このあと滝見学の補足記事が続く―筆者注）

道は立野村から右へ4分の1マイル（以下mil）ほど下ったあと、俵山の対岸の川岸までジグザグに進んでいく。ここにある高さ500ftの密生した森林に覆われた絶壁の麓で二つの川が合流する。突き出た岩の上には、hatashima氏の経営する栃木新湯の宿（よい宿です）がある。（注3）

温泉は近くにあり外国人専用の風呂がある。また高官のための専用の茶室や、すばらしい岩風呂がある。ここから渓谷に沿って2milの山道が古い温泉（注4）に通じている。そこでは老若男女が丘の斜面に巧妙に建てられた露天風呂に身を寄せている。また左へ数歩降りて水辺に立つと、対岸にすばらしい鮎帰りの滝が見える。（これより11月3日の記述―筆者注）

時間を節約するため、栃木でガイドを頼んだほうがよいだろう。

湯の谷へは草原を越えて1里半の登りが続く。背後の谷から眺める熊本方面の景色はとても素晴らしい。湯の谷には、高さ12ftから18ft、直径が30ftの赤泥と沸騰水からなる大きな間欠泉がある。いくつかの粗末な浴場と訪問者のための素朴な山小屋が点在する奇妙な光景が広がる。

ここからちょうど2時間登ると山頂（注5）である。火口から4分の1milは臨時の村となっており、3月から10月までは硫黄労働者によって占有されている。1人または2人が訪問客と火口に同行し、噴石とスコリアの上を通る最適のルートを案内する。空洞の半分を埋める灰の層まで約15ft降下して、その端から約150ft下の開口部を見下ろすと、熱湯と硫黄の塊が絶え間なく大きな音とともに放出されているのが見える。ガイドが降りて非常に粗い硫黄の塊を持ち帰ってくるが、訪問客は危険なため降りることはできない。夏の期間、40人が村に住んでおり、たいていシーズン中に致命的な事故が発生する。

阿蘇山の寺院（注6）に保存されている神聖な剣は人々から非常に崇敬されており、古式の服装をまとった役人によって昼夜を問わず見守られている。

坊中への2時間の下りで、現在のピークが形成される前の古いクレーターの素晴らしいパノラマが明らかになる。外輪山の壁は高さが800ftあって底はかなり水平であり、周囲30milの外輪山の中には100以上の村がある。したがって阿蘇山は、おそらく世界最大のクレーターといえ

る。

坊中は東の外輪山から1里半のところにあり、熊本からもっとも遠い所にある。

道は立野村まで、ほぼ真西へ3里半の戻りとなる。道の左側には阿蘇山とdobin-dake、（注7）そして湯の谷の蒸気の柱が見え、右側には二重の峠へ登る古い道が見える。古いクレーターの出口で黒川にかかる細い橋を渡り、さらに1里で滝と立野村に到着する。

左（注8）へ大津への道が分岐するが、熊本へ向かう谷間の直進路から外れる旅行者はいない。晴れた日の早朝6時に出発し、ガイドが坊中への下りが遅くなった場合に備えてランタンとキャンドルを用意すれば、熊本から2日間で行って帰ることができる。

注1　かつての阿蘇登山の玄関口で現在のJR阿蘇駅付近の旧地名。阿蘇山が西日本有数の山岳仏教の拠点だった名残で、山上の中岳西側にも古坊中の名が残っている。

注2　現在の県道207号瀬田竜田線。

注3　第4版では宿の名はOyamaとなっており現在も小山旅館がある。

注4　垂玉（たるたま）温泉と思われる。

注5　中岳火口を指す。

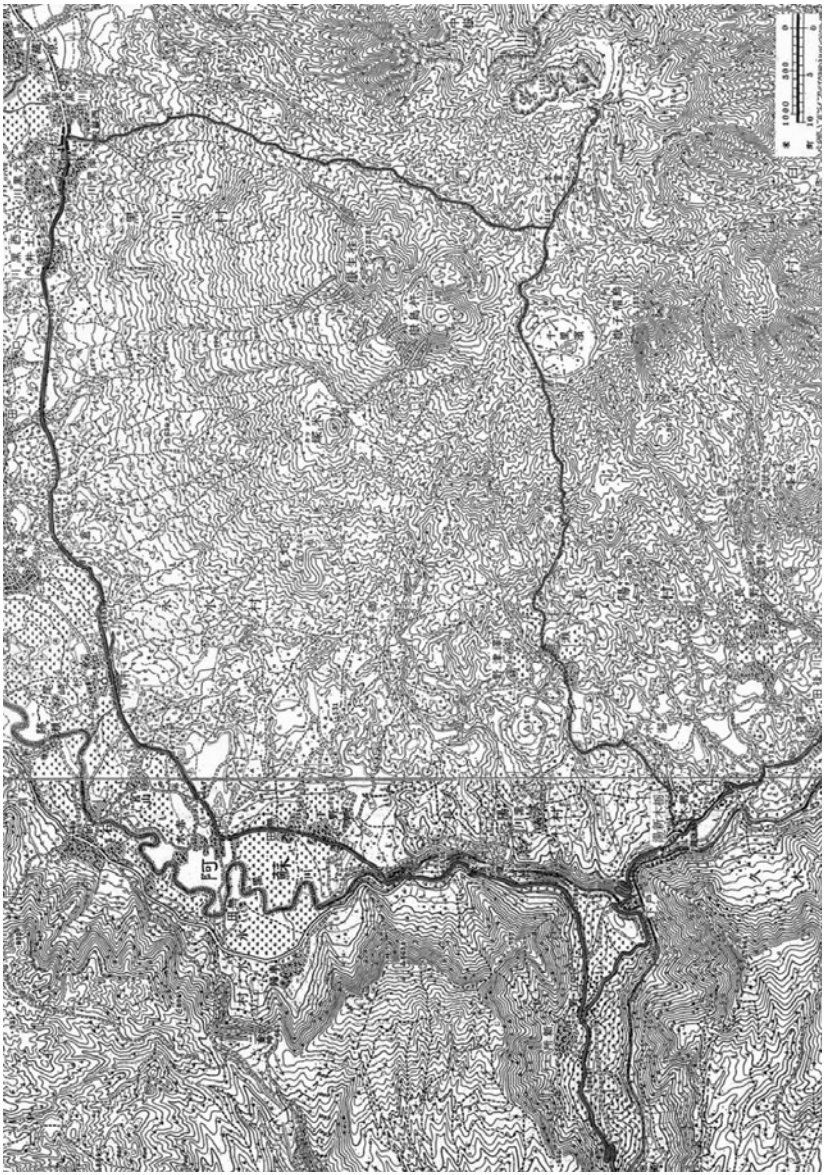
注6　阿蘇神社奥宮の山上神社のことで、現在も中岳西側の山上広場に存在する。

注7　山の位置と名称から、「どんべん岳」という別名のある往生岳のようだ。

注8　正しくは右。

近世まで山岳仏教の信仰と修行の場であった阿蘇山は明治に入ると近代登山の対象となる。明治期には外国人による観光登山が持ち込まれ、J・ミルン、W・ウェストン、H・ポンティング、Mビッカーステスなどが訪れている。彼らはいずれも西側の栃木から中岳へ登り、火口を見学したあと北側の坊中へ下山するコースを利用している。おそらく『日本旅行案内』で紹介されている上記のコースが外国人の間で広く知られていたからだろう。H・ポンティングは著書のなかで、「『日本旅行案内』の手引きが大いに役だった」と述べており、『日本旅行案内』が当時の外国人旅行者に広く利用されていたことがわかる。

ウェストンの登山記の記述と所要時間から推理すると、1日目（2日）は熊本から人力車で立野に進んだあと、近くの滝や温泉を見学して栃木新湯に宿泊。翌3日は湯の谷



この地図は国土地理院発行の旧版地図（陸地測量部、明治 35 年測量図「宮地」）を使用した

西側から見た阿蘇山（門司鉄道管理局、1925年ごろ刊）＊鉄道は明治期にはなかった

温泉経由で中岳に登って火口を見学したあと坊中に下り、人力車で再び栃木新湯に戻って泊ったと思われる。なお祖母山に同行したブランドラムは、阿蘇登山の経路から考えて途中から同行したとは考えにくく、熊本出発時から一緒だったのではなかろうか。

祖母山

祖母山へ登るには先ず北寄りの道（注1）、すなわち新湯に向かう3時間のルートを選ばなければならない。行程は最後の30分を除いて人力車を利用できる。新湯から河内までは9里半の行程で途中、新町（注2）と、新湯から5里のところにある高森を通過する。

河内から登る祖母山は九州で最も高いとされている山への登山であるが、一般的には南にある霧島山のほうに人気がある。高森から30分登ると海抜２９５０ft の峠を越え、少し進むと祖母山が見える。道は起伏を繰り返しながら続くが周囲の景観はとても美しい。とくに高森から2里半離れた「川走（かわばしり）」と呼ばれる渓谷を通過するあたりがそうである。高さ２００ft 近くある杉の巨木が谷の向こう側にそびえ立ち、谷の下から見上げたとき最も印象深い姿を見せる。

海抜１５００ft の河内から（注3）祖母山へは、海抜２８

００ftのMieno-tôge（注4）を越え、1時間半で五ヶ所集落を通り抜ける。そこから急流の川床を45分伝ってゆく本格的な登りが始まる（注5）。特に最後の１０００ftは非常に荒れた急な登り坂で、登山に慣れた者でも2時間を要し、河内からだと休憩を含めて5時間かかる。向かい側の山の斜面を彩る豊富なカエデの光景が素晴らしい。標高６１００ftの祖母山の頂からは、山と山とが限りなく重なって壮大なパノラマが広がる。北東には大分の海が見え、天気のいいときは四国まで見渡せる。頂上には鳥居と小さな石の祠がある。河内への下山は4時間半の行程である。

注1　旧国道57号（大津街道という）を指す。一見すると阿蘇登山のあといったん熊本まで戻り、あらためて祖母山へ登るため北寄りのルートを通って（栃木）新湯へ向かったようにもとれる。しかし解説で示したように、阿蘇登山のあと栃木新湯で泊り、翌日は新湯から祖母山へ向かったとするのが無理なく自然である。旅行案内書としての性格上、熊本から新湯へは新旧二つのルートがあることを示したのではなかろうか。

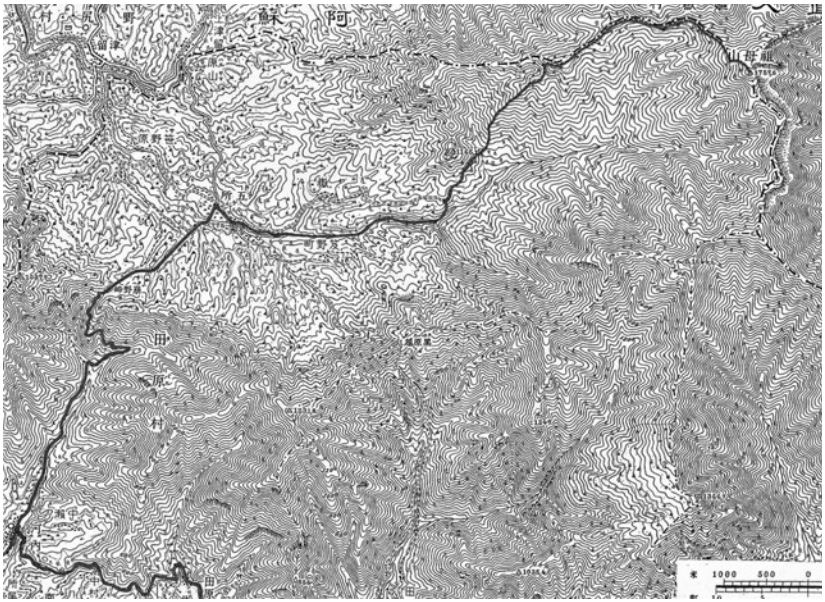
注2　旧阿蘇郡白水村（現南阿蘇村）吉田にある吉田新町のこと。

注3　河内から祖母山往復は10時間ほどを要するので、5日と6日は河内にあった「鍛冶屋」に泊ったと思われる。鍛冶屋は幕末から同地区の庄屋だった家で、明治20年代初めから英国聖公会関係の外国人たちに利用されていた。

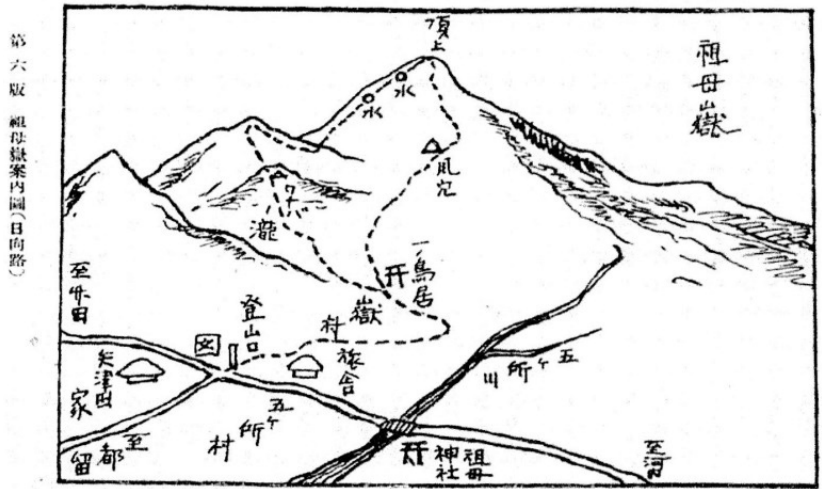
注4　崩野（くえの）峠のこと。現在はトンネルが通じている。

注5　当時は五ヶ所から大谷川に沿って進み、一の鳥居から尾根に取り付き千間平へ出ていた。百渓禄郎太編『祖母嶽』に「五個所川の激流に沿ふて登る事約5・3粁45分にて五ヶ所村嶽の一の鳥居に至る。（中略）是より真の登山口にして……」とある。

4日に栃木新湯を発ったウェストンは阿蘇南郷谷を東へ進み高森へ向かった。高森から先は山間部の道となるため同日は高森に泊ったと思われる。翌5日は外輪山（高森峠）を越えて外輪山の裾野を通り抜け、宮崎県の河内へと進んで祖母山を目ざしたようだ。当時、祖母山は九州本土最高峰とされており、ウェストンもそのために登ったものと思われる。登山口の五ヶ所、河内、大郎（田原村）は英国聖公会に関係する外国人たちの避暑地として利用されていた。ウェストンに同行した熊本聖公会のブランドラム牧師は九州東岸の延岡まで布教活動しており、途中にある五ヶ



この地図は国土地理院発行の旧版地図（陸地測量部、明治 35 年測量図「三田井」）を使用した



祖母嶽案内図　百渓禄郎太編『祖母嶽』（1925 年）より転載

所や河内のことはよく知っていたと思われる。なお登山には案内人として矢津田忠蔵という人が同行したという言い伝えが残っている。

河内から鹿児島へ

祖母山下山後の行程については『日本旅行案内』第4版に記されている。（第3版には延岡までの簡略な記事しかない）それによると河内から時計回りに、三田井（高千穂）、宮水（日之影）、延岡、宮崎、都城と進んで、鹿児島湾岸の福山へ出ている。要約すると以下の通り。

「河内から三田井までの3里半は美しく、まるでスイスのようだ。三田井を過ぎると峡谷に入る。両側の岩壁は数百メートルの高さまでそそり立っている。宮水は丘に囲まれた、きれいな所にある。道は五ヶ瀬川に沿って続く。この川にはマス（鮎の間違い―筆者注）を捕えるためのワナが設置されている。それは竹で出来た一種の防護柵のようなもので、魚が一度ワナに巻き込まれると脱出不可能となる。延岡は五ヶ瀬川の両岸にある重要な町だ。」延岡から先の記事には旅の記録がほとんど見られない。

「延岡から宮崎へ向かう退屈極まりない南の海岸は、2人の車夫による人力車（注）によって、1日で横断することができる。そこから都城を経由して鹿児島湾岸の福山へ到達するには、さらに日にちを要する。福山から小さな蒸気船が21マイル離れた鹿児島まで湾を横断している。」

注　人力車の車夫は通常1人だが、特に急ぐ場合は2人で引いたり、交代要員の車夫が並走した。

旅行案内の記事は福山から蒸気船で鹿児島へ向かう記事で終わっている。鹿児島から長崎への経路は、当時は鹿児島までの鉄道が開通していないので船便を利用したと思われる。

『日本旅行案内』第4版のルート64　WAY TO KAGOSHIMA に、「鹿児島へは長崎または神戸からの汽船便が最適である。所要時間は長崎港から14時間、神戸港から40時間である」という記事があるので、おそらく長崎まで船便を利用し、そこで17日出航の神戸港行きの船便に乗り換えたのではなかろうか。

第1回の九州登山旅行における行程と宿泊場所（推定）

10月31日　熊本到着　熊本ブランドラム邸？

11月1日　熊本―金峰山―熊本　熊本ブランドラム邸？

11月2日　熊本―栃木　栃木新湯　oyama
11月3日　栃木―中岳―坊中―栃木　栃木新湯　oyama
11月4日　栃木―高森　高森　sakai-ya
11月5日　高森―河内　河内　kaji-ya
11月6日　河内―祖母山―河内　河内　kaji-ya
11月7日　河内―三田井―宮水　宮水　宿名不明
11月8日　宮水―延岡　延岡　kome-ya
11月9日　延岡―宮崎　宮崎　seiwa-kwan
11月10日　宮崎―都城　都城　mochinaga
11月11日　都城―福山　福山　jōki-no-tonya
11月12日　福山―鹿児島　鹿児島　okabeya, kakumei-kwan
11月13日　鹿児島港発　船中または長崎？
11月14日　長崎港着

登山記の記事を順に並べると上記の通りになる。このなかで確実なのは「矢津田日記」にある11月6日だけである。行程日には天候その他の理由で停滞したことによる「ずれ」があったかも知れないが、今のところ手掛かりとなる資料が見当たらないのでこれ以上は分からない。

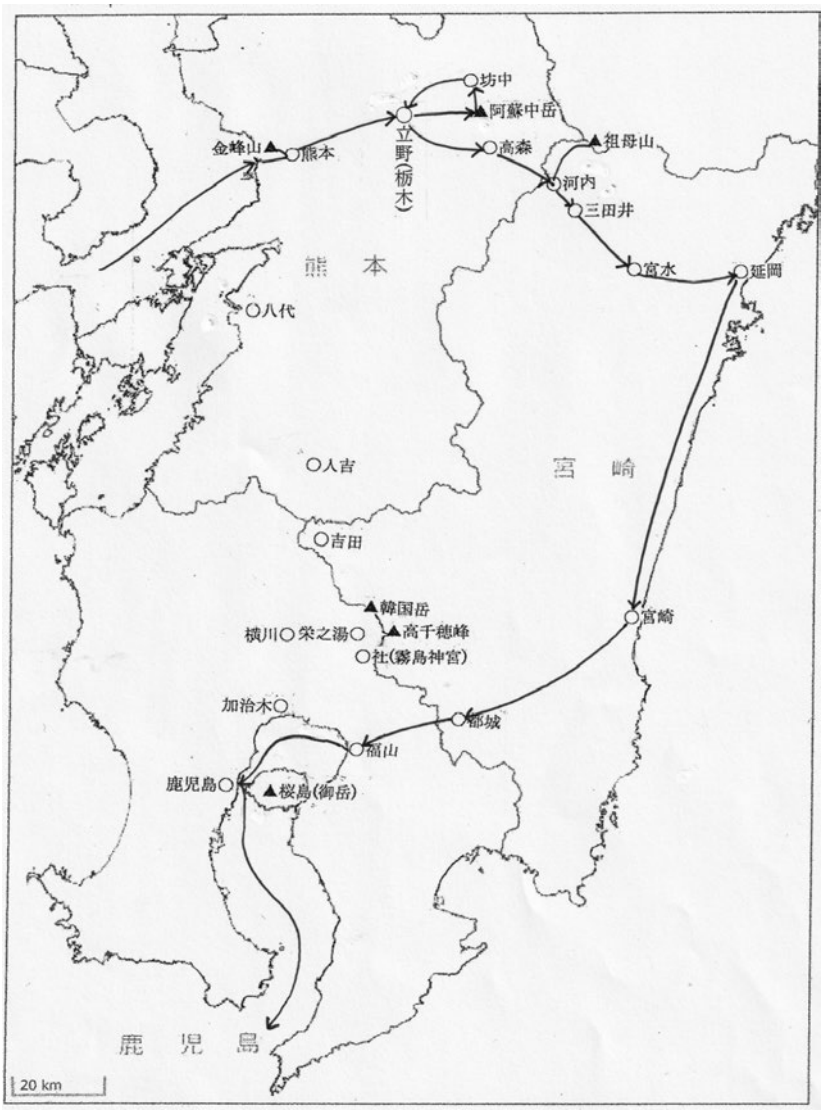
第2回の九州登山旅行

第1回の九州旅行から半年後の1891（明治24）年4月に、ウェストンは2回目の取材旅行で九州を再訪する。前回に引き続いて九州の山を選んだ理由はよく分からないが、おそらく前年の旅行後半部で間近に眺めた霧島山と桜島の印象が大きかったのではなかろうか。

当初、第2回の旅行は1891年に行われたことまでしか分からず、月日は不明だった。ところが『日本旅行案内』第3版にある韓国岳からの下山ルートを調べているとき冒頭で紹介した「鹿児島から霧島山へ、そして急流球磨川を経て熊本へ」というタイトルの付けられた下記の記事（以後、行程記事という）を見つけた。

記事の冒頭部分に、ウェストンがこの地を1891年4月に横断したこと、このルートの記事がウェストンの日記から編集されていることが書かれ、さらに霧島山を経て熊本までの行程が示されていた。これによってウェストンの霧島山登山のルートと所要時間、霧島から下山した後の横川から熊本までのルートと移動方法および所要時間が明らかになった。

さらに第2回の九州登山旅行が4月に行われていること



第 1 回の九州登山旅行の行程

FROM KAGOSHIMA TO KIRISHIMA-YAMA, AND *viâ* THE RAPIDS OF THE KUMAGAWA TO KUMAMOTO.

The description of this route as far as Hitoyoshi is chiefly compiled from the diary of the Rev. Walter Weston, who traversed the ground in April, 1891. Those to whom speed is the chief consideration, may preferably take the wide jinrikisha road with brick-faced tunnels which runs from Kagoshima to Minamata and Sajiki, whence there is a good road, 3 *ri*, to Tsuge on the Kumagawa, and thence by boat down the rapids to Yatsushiro.

From Kagoshima to Kajiki is a distance of 5 *ri* 6 *chō*, or a little over 12 m., practicable for jinrikishas. Thence onwards, the average time occupied is given.

Kajiki to :—	*Hours.*
Yashiro (horseback)	5—6
Ascent of Takachiho (on foot)	2½
Takachiho to Enoyu (on foot)	2½
Ascent of Karakunimi-dake (on foot)	2½
Karakunimi-dake to Yokogawa (on foot)	5½
Yokogawa to Yoshida (horseback)	4½
Yoshida to Hitoyoshi (on foot)	5
Hitoyoshi to Yatsushiro (boat)	5—8
Yatsushiro to Kumamoto (jinrikisha)	5

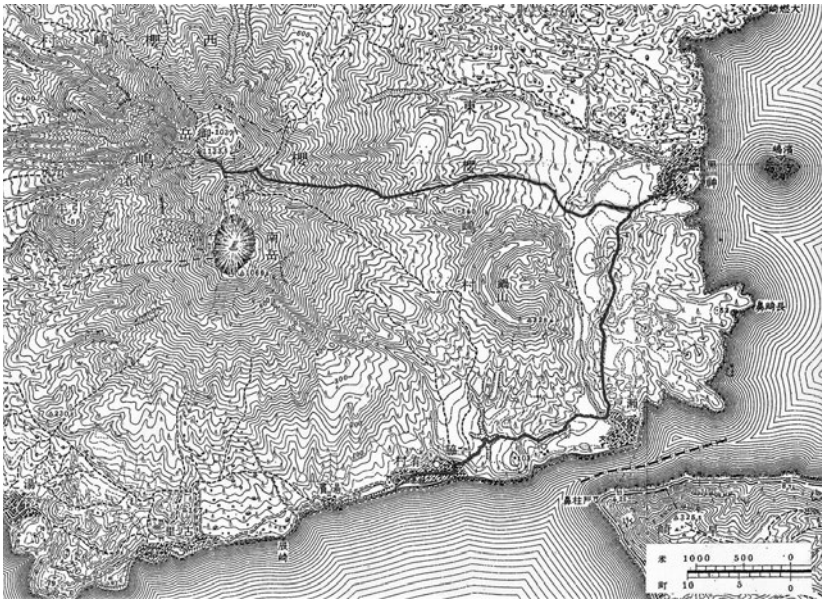
から、同年7月の『日本旅行案内』第3版の刊行が取材からわずか3ヶ月という短期間で成し遂げられたことも分かった。

旅の起点である鹿児島までの経路は、前述した第4版のWAY TO KAGOSHIMAから、おそらく神戸からの直行便を利用したと思われる。ウェストンが住んでいた神戸から鹿児島へは直行便がもっとも便利がよく、所要40時間で月6回就航していた。記事のなかに錦江湾を北上する船上からの開聞岳や桜島、霧島山の風景がきわめて正確に描かれていることから、この記事の執筆者が山に関心を持った人物だったことがうかがわれる。

桜島

桜島は鹿児島から日帰り旅行できる。船は絵のように美しい航路を3時間ほど島の南岸を廻って、東岸の黒神村へ進む。黒神では温泉が流れており、他にも温泉がいくつかある。

火山の噴火口へは深い笹と灌木の中を通って進み、頂上は標高4200ftである。噴火口の壁は荒れて非常に険しく、300ftから400ftの深さがあり、すばらしく壮大な眺めだ。西には眼前に鹿児島の町が広がり、南西には開



この地図は国土地理院発行の旧版地図（陸地測量部、明治35年測量図「鹿児島」）を使用した

聞岳がそびえ、反対側には霧島山群の二つの巨大なピーク、すなわち右に高千穂岳、左に韓国見岳が見わたせる。遠くには日向の山々が広がり、その下には小島が点在する鹿児島湾が広がっている。

ウェストンの登山から20年後の明治44年2月に岩佐定一会員が桜島に登り「南九州の三山」で桜島の登山記を発表している。（『山岳』6年2号所収）要約すると以下の通り。

「11時に宿に着いて昼食を済ませ有村温泉を出た。道は麓を廻って黒神温泉を指して、ある丘と嶽の間に出た。ここから少し行ったところで左の小道に入って山に登り始める。

7合目辺りから道が谷間に入った。木立が無くなって火山礫の急な坂を登ると頂上である。噴火口の横の壁から少しばかり煙が出ていた。噴煙をやつて居る上の南岳に登った。

北の方に今少し高い峯があったが、樹木があるし（マ）するの（マ）で行って見なかった。

上りに2時間、下りに1時間35分を費やして、午後3時45分、有村温泉の旅館に帰った。翌日は、朝9時に鹿児島を立った小蒸気船の帰りを待って、3時に有村を立った。」

読み比べるとウェストンの記事の内容が明らかになる。ウェストンは黒神村まで船便を利用しているが（『ウェストンの明治見聞録』に「我々が登山のために上陸した黒神の村では……」とある）、所要時間は3時間とあるので往復で6時間となる。これに登山に要する時間（岩佐会員の場合は3時間35分）を加えると合計9時間35分となり、当時の船便の運航時間（鹿児島港から桜島南岸の各港に寄港しながら東岸にある黒神村まで進み、そこで2時間停泊のあと往路を引き返していた）を考慮すると鹿児島からの日帰り登山は無理で、ウェストンも（帰途に？）有村で泊ったのではなかろうか。第4版に有村の宿としてyanagi-motoが紹介され、「黒神には宿泊施設はない」とあることからも裏付けられる。また岩佐会員の登山記では南岳へ登って噴煙を見たことが書かれているが、ウェストンは噴煙について書いていないので、活動していなかった最高点の北岳に登ったと思われる。

鹿児島から霧島山へ

前掲の「行程記事」には加治木を起点とした霧島登山の経路と所要時間が示されている。

旅の起点となる鹿児島から加治木までのルートに関して、第4版の加治木についての解説の脚注に興味深い記事がある。「旅の始めにわずかな変更を加えることで、旅行者は有名な火山を自分のルートに含めることができる。加治木で下船する代わりに次の港である浜の市（現在の霧島市隼人港―筆者注）に行くべきだ……」というもので、読者に登山を勧める内容からおそらくウェストンによって書かれたものだろう。記事によると浜の市まで船便を利用（所要2時間）し、そこから馬に乗って大窪経由で6里半進んで社（やしろ）に着いたようだ。標高1500ftの社は高千穂岳の登山口で、地名は同地にある霧島神宮に由来する。鹿児島から7時間ほどかかったと思われる。

Kajiki to :—	Hours.
Yashiro (horseback)	5—6
Ascent of Takachiho (on foot)	2½
Takachiho to Enoyu (on foot)	2½
Ascent of Karakunimi-dake (on foot)	2½
Karakunimi-dake to Yokogawa (on foot)	5½

高千穂岳（東霧島）（注1）

神社を出ると道は左へ曲がる。森の中を真っす

ぐに進むと40分で標高約２２５０ftの森林の上端に達する。ここから高千穂岳を間近に望むことができる。登りが緩やかになるにつれて楽に進むことができる。道はピークの西側を横切って野尻川の谷へと続く。

峠（注2）の上から道は右に曲がり、スコリアと火山灰の積もった火口縁の北西の側面をジグザグに登ってゆく。火口の直径は１５００ft、深さは約３００ftで、底には小さな湖水があり、そこから硫黄の煙の混ざった濃い蒸気の雲が大きなうなり音をあげている。

クレーターの縁の輪郭は強いギザギザになっている。実際の山頂（５５３０ft）はさらに上にあって積み重なった大きな石が目印となっており、その下に休憩の小屋がある。

しかし、もっと興味深いのは伝説の天の剣だ。材質は青銅で古風な形をしており、長さは４・５ftあって上向きに地面に固定されている。山頂からの眺めは非常に雄大で、あとで説明する韓国岳からの眺めと似ているが、東側に向いてより開かれている。

山の東側のはるか下にある大きな湖は御池と呼ばれている。登山口から頂上までの距離は、地元では2里半と云われている。高千穂岳登山の間に、手荷物は天然水を取水に来る人々のための旅館や浴場が長く連なった村であるEnoyu（注3）へ送っておくべきである。

注1　明治37年発行の陸地測量図は現在と同じく「高千穂峰」と標記。

注2　現在の高千穂河原付近。

注3　栄之尾温泉のこと　当時から地元では一般に「エノユ」と呼ばれ、陸地測量図にも「栄尾湯（エノユ）」と標記されている。霧島温泉の標高８００ｍの高所にある渓流沿いに湧く温泉で登山客によく利用されていた。現在も温泉は湧出しているが施設は閉鎖されている。余談になるが１８６６年には坂本龍馬夫妻が訪れている。

高千穂峰山頂に立つ天の逆鉾

韓国見岳（注1）

霧島の最高峰であり、西霧島のピークである韓国岳はここ（栄尾湯―筆者注）から登る事ができる。距離は地元で2里半とされているが、おそらくもっと長いだろう。

別の計画は社を早めに出発して天気にめぐまれた場合にのみ実行可能なもので、1日で両方の山を登るものだ。すなわち初めに高千穂岳に登ったあと韓国岳に登って横川に下るもので、（注2）もちろん手荷物は先に送っておく必要がある。韓国岳へ登る途中から桜島などの山々の雄大な景色が楽しめる。最適な時間に栄尾湯から登ると、高千穂岳のような蒸気の噴出や硫黄の無い、穏やかで澄んだエメラルド・グリーンの美しい湖をもつ円形のクレーターの端に到達する。急な内壁の側面はクレーターの縁までモミの木に覆われている。大浪池と呼ばれているこの湖は周囲1里で、クレーターの縁の最下部の高さは4680ftある。山頂への道は柔らかい草地の上に出る前に笹と灌木の密集したヤブのなかを通り抜ける。雄大な眺めが広がる。

南東には shimoi-take の大きな火口と oitake の山頂（注3）、そしてそのはるか先にそびえる噴煙の上がる火口と高千穂岳の鋭いピーク、南には白鹿岳（注4）と鹿児島湾に浮かぶ桜島、そしてはるか遠くの太平洋岸には開聞岳が見渡せる。大浪池は見物者の足元にあり、北西には、はるかに標高の低い白鳥山があって3つの湖のうちの2つがはっきり見える。これらの湖の名前は、murasaki, byakushi, dokkwannon だ。（注5）

6050ftの韓国岳の頂上は活動を停止したクレーターの最高点にあり、火口の底はまるで湖が乾いたかのようにぬるぬるした苔と雑草が広がっている。頂上は鉄製の三又鋒がのった大きなケルンが目印である。白鳥山の向こうには阿蘇山と祖母山を含む九州中部の山々の素晴らしく雄大な景観が広がる。下山はこの火山地域に多く見られる鉱物泉のひとつである yamanojō（注6）を通って下る。幹線道路が栄尾湯と横川の間を結んでいる。

注1　原文には karakunimi-dake と記されている。山名の由来（山頂から韓国が見えたという伝説）から付けられた名称と思われるが、当時の資料に韓国見岳と記されたものは見当たらず、明治37年発行の陸地測量図にも「韓国嶽」と標記されている。聞き違いではなかろうか。

注2　高千穂峰から韓国岳までの稜線伝いの縦走で、当時から一部の登山者に試みられていた。前掲の岩佐定一会員による「南九州の三山」の東霧島の項に「私の最初の計画

では、高千穂峯を下り終わって、進んで大浪池を経て韓国岳に登り、栄之尾に泊する予定であったが……」とある。

注3　shimoi-take は位置と名称から新燃岳であろう。oitake は、はっきりしないが獅子戸岳のようだ。

注4　鹿児島県曾於（そお）市の北西にあり、標高６０３ｍ。

注5　正しくは白紫池、不動池、六観音御池。

注6　栄之尾温泉の北西に川湯で有名な山之城温泉があるが、第４版に「下りは牧園地区を通ってこの火山地域に多くある鉱物浴場のひとつである山之城へと続く」とあるので川湯とは別の温泉のように思われるが場所は不明である。

霧島を代表する２つの山、すなわち天の逆鋒の立つ高千穂峰と最高峰の韓国岳が山系の東西に離れているため、両方の山を続けて登るには工夫がいる。前掲の「行程記事」によるとウェストンは以下のようなルートと時間で歩いている。

霧島神宮―2時間30分―高千穂峰―2時間30分―栄尾湯（泊）―2時間30分―韓国岳―5時間30分―横川

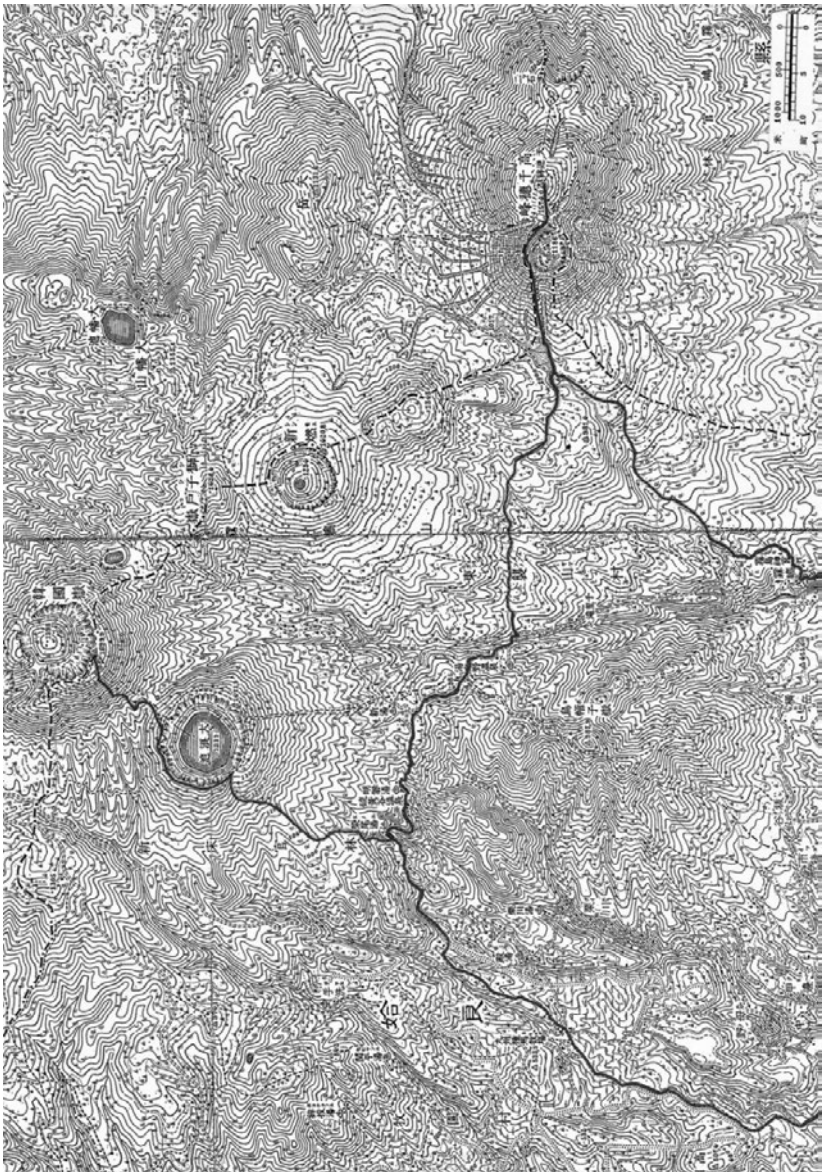
霧島神宮をスタートしたあと高千穂河原に至り、そこから高千穂峰を往復して引き返し、現在の県道１０４号（霧島公園小林線）が通っている付近にあった登山道を、湯之野、新湯を経て栄尾湯へ至り宿泊。翌日は大浪池の西側（現在の大浪池登山道）を経て韓国岳に登った後、帰りは霧島温泉を通って牧園経由で横川へ下山している。登山に不要な荷物は予め霧島神宮から下山口の栄尾湯（第４版では横川になっている）に送っていたようだ。荷物は現在の国道２２３号付近にあった馬車道を通って運ばれていた。

横川から熊本へ

韓国岳から5時間半かけて横川へ下山して投宿した後、最終目的地の熊本へ向かっている。

横川から熊本までの行程と所要時間が前掲の「行程記事」に書かれている。

記事を要約すると以下の通りである。「横川から馬に乗って川内川に沿った田舎道を1時間進むと広大な水田地帯の中央に位置する栗野に着く。さらに3時間進むと吉田に達する。川内川沿いにある吉田（注1）には良い宿泊施設がある。渡し船で川を渡って町を離れると、道は川内川の流れる平野を見下ろす尾根の上への急な登りが1時間ほど続く。ここからの眺めは素晴らしく、川の向こう側に吉田



この地図は国土地理院発行の旧版地図（陸地測量部、明治 35 年測量図「小林」）を使用した

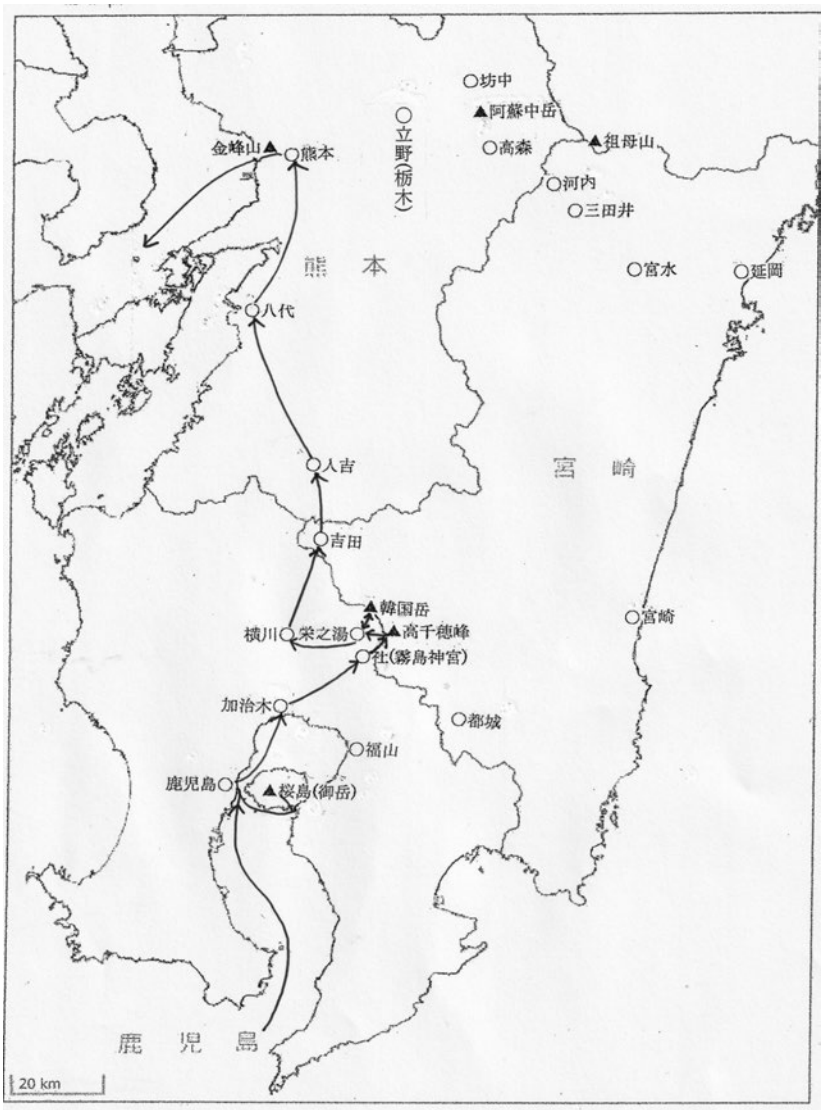
の町が広がり背後には霧島の山々と桜島が見渡せる。ここから高地の森の中を2里半進むと大畑（おこば）への道が分岐し、人吉への良い人力車道がある。人吉は大名の治めていた賑やかな町で城跡が残っている。川の反対側に mukaimachi（現在の九日町付近か―筆者注）があり、そこで急流で有名な球磨川を下る40milの船旅の乗船手続きができる。（注2）乗船時間は通常6時間ほどである。（注3）八代からは肥後平野を横切る道が熊本まで通っている。」

Yokogawa to Yoshida (horseback)	4½
Yoshida to Hitoyoshi (on foot)	5
Hitoyoshi to Yatsushiro (boat)	5—8
Yatsushiro to Kumamoto (jinrikisha)	5

注1　横川からの所要時間を考えると「吉田」は現在のえびの市付近になるが、えびの市には吉田という地名はなく代わりに吉田温泉がある。当初は吉田温泉付近を「吉田」と考えたが、その位置だとウェストンの記事と整合しない。調査の結果、江戸期の郷名に吉田郷とあり、加久藤（かくとう）盆地の西部付近にあった6ヶ村から成る郷名であることが分かった。郷名は明治に入ってもそのまま使用されて「吉田」と呼ばれていた。記事にある「川内川沿いにある」、「川を渡って（加久藤への）急な登りが1時間続く」、「川の向こう側に吉田の町が広がる」という記述と無理なく整合するのは、当時から交通の要所であった吉田郷のなかの「向江」地区（現在の京町温泉付近）ではないかと思われる。

注2　現在は観光としての球磨川下りが有名だが、当時は物流の重要な手段として船便が盛んに利用されていた。

注3　第4版に球磨川河口の土手（萩原堤と思われる）の桜のことが記されている。一般に桜は開花している時だけ、その存在に気づくのではなかろうか。この推理が正しければ第2回目の九州旅行の日程をもう少し絞り込めるようだ。2009年の八代地方の桜の開花は3月22日で満開は29日となっている。調査の結果、温暖化により桜の開花はウェストンが通過した129年前に比べて12日ほど早くなっていることが分かった。したがって当時の八代の桜の開花は4月3日で、満開は10日ということになる。仮に八代で桜を見たのが満開の頃だとすると、旅行日程では8日目に八代を通っているので鹿児島を発ったのは3日頃となり、旅行は4月前半に行われたことにな



第 2 回の九州登山旅行の行程

る。

九州登山旅行の記事は八代から熊本へ向かう記事で終わっている。前述した旅行日程から考えると、一連の九州登山旅行の終点である熊本へ着いたのは4月中旬頃ではなかろうか。

神戸への帰路は、熊本までの鉄道が未開通だったので長崎経由の船便を利用したようだ。

第2回の九州登山旅行における行程と宿泊場所（推定）

1日目　鹿児島到着　鹿児島　okabe-ya
2日目　鹿児島―桜島　桜島　yanagi-moto
3日目　桜島―鹿児島　鹿児島　okabe-ya
4日目　鹿児島―浜の市―社　社　takenouchi
5日目　社―高千穂峰―栄尾湯　栄尾湯　yasuda-ya
6日目　栄尾湯―韓国岳―横川　横川　宿名不明
7日目　横川―栗野―吉田　吉田　宿名不明
8日目　吉田―加久藤峠―人吉　人吉　tokura-ya
9日目　人吉―八代　八代　obiya
10日目　八代―熊本　熊本　ブランドラム邸?

あとがき

1888年に来日したウェストンの通算12年にわたる日本滞在中、九州に関係する事蹟が2度、認められる。1888年の最初の赴任地である熊本滞在と、1890年から91年にかけて行われた九州の山6座の登山である。いずれも来日初期の事蹟であり、その大部分がこれまで不明となっていた。このうち前者については『山岳』第113年に「熊本滞在中のウェストンの足跡」を紹介した。さらに今回までの調査で後者についても発表できるレベルまでまとめることができた。資料の収集に多くの時間を要した前者にくらべると、後者は『日本旅行案内』にウェストンの登山記録があるので、調査の多くは記録の翻訳であり比較的順調に進んだ。ただ記録の分量が多く複雑だったのでまとめるのは面倒だった。

先に発表した「熊本滞在中のウェストンの足跡」と本稿を合わせると、これまで漠然としていたウェストンと九州の関係をかなり明らかにできたようで、九州在住会員の長年の課題がようやく終わった。

参考文献（主なものだけを掲げる）

『異人たちの日本アルプス』庄田元男　日本山書の会　199

0年
『明治日本旅行案内』E・サトウ　庄田元男訳　平凡社　1996年
『ウェストンの明治見聞録』W・ウェストン　長岡祥三訳　新人物往来社　1987年
『英国特派員の明治紀行』H・ポンティング　長岡祥三訳　新人物往来社　1988年
『日本山岳紀行』W・シュタイニッツアー　安藤勉訳　信濃毎日新聞社　1992年
"Japan as We saw it" Mary.J. Bickersteth　London Sampson Low & Co　1893年
『阿蘇郡誌』熊本県教育会阿蘇支会編　臨川書店　1926年
『祖母嶽』百渓禄郎太編　秀英社　1925年
「霧島山」大平晟（『山岳』20年3号）　日本山岳会　1927年
『楠郷山誌』南九州山岳会編　白鳳社　1926年

調査・研究

パミールの登山事情と「パミール高原」の名称

田村俊介

日本の教科書の地図帳では、ユーラシア大陸のページの真ん中に「パミール高原」と記載されている地名がある。しかし、パミールは高原ではなくて、絹の道を行き交つた旅人や、その東西を疾駆したモンゴルの汗たちが目にした高原の奥深く、巨大な山々が潜んでいる山岳地帯であった。そこで、地図の表記は「パミール」と訂正した方が良いと提言する。

パミールの解放

パミールはソ連時代、西側諸国には門戸が開かれていなかった。1974年にやっと国際パミール・キャンプがキルギスタンの南端で開かれた。レーニン峰の北方山麓にある、このエーデルワイスが咲き乱れるアチク・タシの草原に、約120名の登山家が宿泊できるテント村が設営された。ここから格安の料金で、6～7000m峰の登山ができるようになった。

私たち新潟大・大阪外語大山岳会がかなり長年にわたって、パミール入山をソ連アルピニズム連盟と交渉していたのも効力があったのだろう。わが合同隊はすぐさま国際パミール・キャンプに参加することができた。この年はレーニン峰（7134m、現シノ峰）とその周辺の6000m峰だけのオープンだったが、その後すぐにコムニズム峰（7495m、現ソモニ峰）もコルジェネフスカヤ峰（7105m）もオープンになった。7000m峰3座が同時に一

気に登れるということも、ますます多くの登山家が入山することに拍車をかけた。ヒマラヤの８０００ｍ峰を登るための高所順応をするのにも役立った。日本からは高所登山研究所の原真隊や日本勤労者山岳連盟の近藤和美（かずよし）隊、田部井淳子隊など、当時は驚くほど多くの登山家がパミールに殺到した。こうした現象は、１９７４年から１９９１年のソ連邦が解体するまでの17年間続いた。

ソ連邦解体により、パミールはその大部分がタジキスタン領になり、レーニン峰だけがタジキスタンとキルギスタンの国境である、パミール北端のザアライ山脈の稜線上に残された。入山はきわめて不便になり、これまでの人気はなくなってしまった。

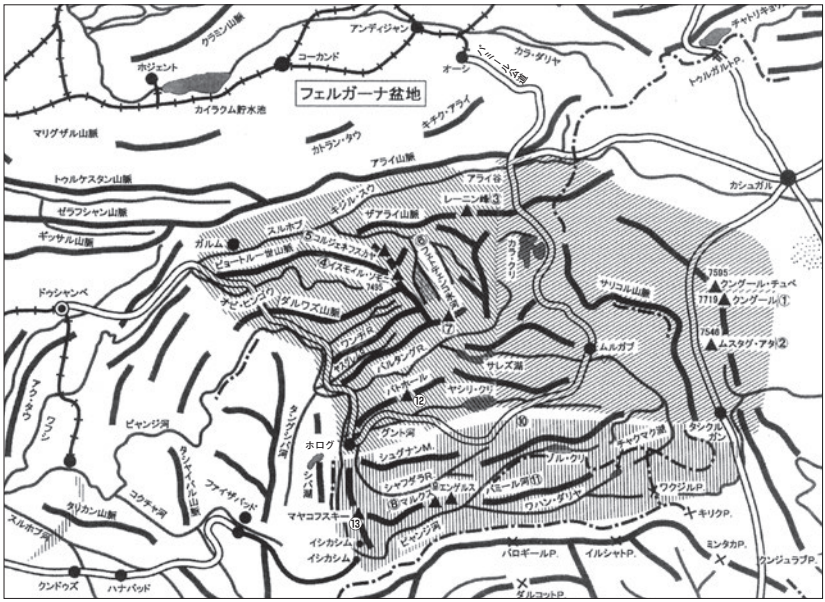
ところで、パミールに登山に行った人は、「パミール高原」に行ったとは言わない。さらに彼らによく聞かれることがある。「どうしてパミールが、中学、高校の教科書の地図帳にはパミールではなく『パミール高原』と書かれているのですか」と。日本では那須高原や朝霧高原、霧ヶ峰高原と、なだらかな高地にある草原に「高原」という名がつけられている。しかしパミールは、６～７０００ｍの雪と氷と岩に覆われた峻険な山岳地帯である。「ここに来る前には、高山ハイキングでもするのかと錯覚していました」と、冗談半分に言われた。これについては筆者も永年の命題であり、すでに調べていたので、ここで詳しく述べてみたい。

パミール高原の名前の始まり

「パミールは高原ではない」といって意見書を作成し、地図教科書を出版している代表的な3社を回っていたときのことである。二宮書店で、日本で最も早くパミールが地図教科書に書かれたのはいつごろだったか尋ねてみると、地図編集部の平山さんが、東陽町の教科書研究センターにある付属教科書図書館に行けばわかる、と教えてくれた。

さっそく、図書館に行くと、すぐに該当する本棚まで連れていかれた。そこには図書館では最も古い明治41（１９０８）年9月26日発行の高等小學校用「少學地理付図（文部省）第三図アジア州全域」があり、地図には「パミル高原」と明記されていた。また、昭和10（１９３５）年3月10日発行の「高等小學地理書付図（文部省）アジア州部分図（二）」にも「パミル高原」と記されていて、ここまでは横書き地名が右から左に綴られていた。その後の地図書は左から右に綴られていた。

「パミル高原」という表現は、インド海軍のジョン・ウッ



パミール概念図。東部、西部、南部

ド中尉に関係してくるが、これには次のような歴史が関連していた。

パミール川とゾル・クリ湖

イギリス東インド会社のジョン・ウッド海軍中尉（1811～1871年）は、1838年2月、ゾル・クリ湖に到達した。その寒風吹きすさぶ湖は、パミールの南部、パミール川の源流にあった。

もっとも、経典を求めてインドに行った唐の玄奘も643年、唐への帰路にこのパミール川を遡行したことや、そこに湖があったことが『大唐西域記』に次のように記されている。「危険な道を通り、七百余里進みパミール川に至る……パミール川の中ほどに大龍池がある」。大龍池というのはゾル・クリ湖のことである。

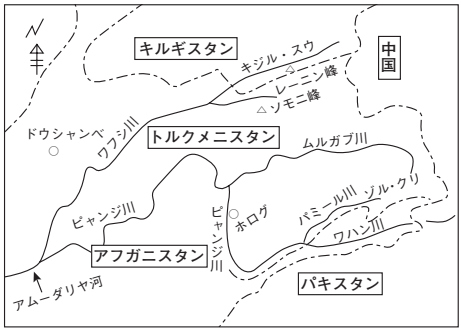
マルコ・ポーロもヴェネツィアからカンバリク（現・北京）に行くとき、パミール川と大龍湖を通っている。つまり、このルートは比較的一般的な交通路なのである。しかし、この周辺の地図を作ったのはウッドが初めてらしい。

ここでイギリスの海軍中尉ウッドが、山岳地帯パミールになぜ出かけて行ったのかという疑問が湧いてくる。それにはアレキサンダー・バーンズ（1805～1841年）

という、スコットランド出身のイギリス東インド会社の軍人、探検家、諜報員、語学の天才という彩な顔を持つ男のことも書かねばならない。

１８３０年代は、イギリス東インド会社がまだインド西北部のパンジャブ地方を抑えきれていなかった。彼はこの地に興味を覚え、インダス川の調査を行なっていた。また、１８３２年６月27日から７月21日の24日間、困難で危険な中央アジアの秘密国ブハラ汗国に潜入し、ブハラの実情を細大漏らさず収集し記録した。その『ブハラ紀行』はベストセラーになり、そこで世間は彼のことを「ブハラ・バーンズ」と呼んでいた。

１８３６年にはアフガニスタンに触手を伸ばしていたイギリス東インド会社は、カーブルに中央アジアに詳しいバーンズを通商代表として派遣することにした。バーンズはこの時、インダス河流域を船で調査していたウッド中尉を隊員として参加させるのである。ジョン・ウッドが自分と同じスコットランド出身であること、インダス河およびその支流群パンジャブ（五大河地方）の調査を行なっていることも、同行に誘った大きな要因だと思われる。また、アム・ダリヤを渡って、ブハラに潜入したバーンズの頭の中には、この河の源流を調査させようとする意図があったのだろう。



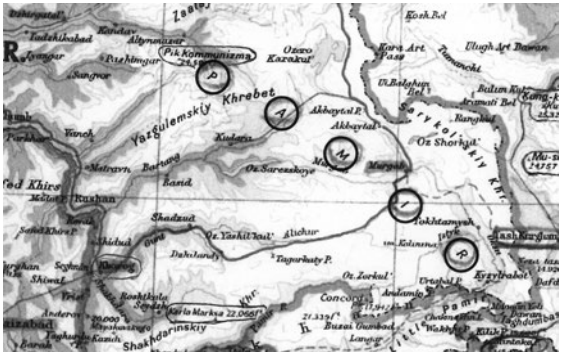
その結果、ウッドはアム・ダリヤの支流のパミール川の源頭を突き止めた。そして、後の１８９５年の英露パミール協定で、パミール川が現在のタジキスタンとアフガニスタンの国境となったのである。ところが、アム・ダリヤの上流のピャンジ川のさらに上流で、川は左にパミール川、右にワハン川に分かれている。今はワハンがアム・ダリヤの最源頭とされているのである。

カーゾンの見解

さて、ここで問題が起きた。昇進したウッド大尉の『オクサス源頭への旅』（初版１８４０年）の第２版（１８７２年）に付けられた、著名な東洋学者でもあるヘンリー・ユール大佐の序文「オクサス上流域の地理と歴史」が問題を起こしたのである。

問題が提起されたのは、ジョージ・ナサニエル・カーゾン（１８５９～１９２５年）の１８９６（明治29）年に出版された紀行『パミールとオクサスの源頭』においてである。これはカーゾン35歳の時の山行の記録である。カーゾンは若干40歳で、イギリス領インドの副王になる俊英である。帝王はいわずと知れたヴィクトリア女王である。この

イギリス Barholomew 社のもの 1955 年。この時はまだ Plateau とある



イギリス Barholomew 社のもの 1977 年。PAMIR となっている

本の中の「パミールの地理学的特質」の〝パミール・プラトー〟という標題のページには、「パミールあるいはパミールスというものの実体については、実を言うと英国では非常に誤った観念が一般に流布されており、また将来も流布されようとする恐れが充分にある。英国の著名な地理学者がバスト・テーブルラント（広大な高原または台地）と記述しており……ステップ（草原）という言葉もしばしば用いられている」と書いており、また、前述したユールの書では「この山塊の中心部は大きく持ち上がったプラトー（台地）を形成している。このパミールのプラトーの大部分は、かなり平坦なステップの広がりになっている。その広がりも、所によっては低い円形の丘陵によってとぎれたり、遮（さえぎ）られたりしている」と記述され、いい加減な専門家の代表的な誤りである、と書いている（『シルクロードの山と谷』、原題「パミールとオクサスの源頭」吉沢一郎訳、一部改訳あり）。

だが、痛烈かつ正しいカーゾンの指摘にもかかわらず、英国ではパミールの名称としてパミール・プラトーが長く使われていた。１９５５年のBartholomewの地図にはまだ「PamirPlateau」が使われているのである。日本の地図帳が今も「パミール高原」と記しているのは、イギリスの地図に依っているからであろう。なお現在は、イギリスの地図は「PAMIR」と記載している。

また、皮肉なことに「パミール・プラトー」という名称は、今なお存在しているのである。

それはコムニズム峰の頂上の北西直下と、コムニズム峰から西方に派生するピョートル一世山脈の北面直下に挟まれた広大な雪原が、５７００～６０００mの高度に10kmにわたって横たわっている。これが「パミール・プラトー」と呼ばれているのは滑稽な締めくくりではないだろうか。今はこの「パミール・プラトー」を通るルートが、コムニズム峰に登る一般ルートになっている。

また、初めてパミールの山岳地帯に入ったのは、１９２８年、ソ連・ドイツ合同隊で、その後ロシア隊が１９２９年、１９３１年、１９３２年、１９３３年と入山し、ほぼパミール全域を踏査した。イギリス隊はやっと１９６２年になってからパミールに入ることができ、ジョン・ハントを隊長として南西面からコムニズム峰に登頂した。

ここからパミール全域を各項目に分けて説明していくことにする（本文の山名に付された番号は、それぞれの山岳写真に対照する）。

パミールの輪郭

パミールは中央アジアの中心部にあり、北東部より天山、南東部より崑崙（クンルン）、南南東部より大ヒマラヤ（カラコルムを含む）、南西部よりヒンズー・クシュがつながる、結び目のようなところであると言えよう。

パミールの北端は、アライ山脈とザアライ山脈の間を流れる北緯39・30度（早池峰山を西に延ばした線上）のキジル・スウ川（アライ谷）で区切られ、南端はワハン山脈とヒンズー・クシュ山脈の間を北緯37度線（糸魚川～那須線上）に沿って流れるピャンジ川とワハン川で区切られている。東端は東経75・3度で北から南に走るクングル・ムスタグ山脈東麓で区切られ、西端は東経70度で終わるピョートル一世山脈の末端で区切られている。

この輪郭は南北約300㎞、東西約400㎞のほぼ長方形をかたち作っている。

パミール東部、西部、南部

パミールの地形を概観するのに、便宜上東部、西部、南部の3山域に分けて考察したい（前掲のパミール概念図参照）。

パミール中央部をキルギスタンのオーシからタジキスタンのホログまでパミール公道が縦断している。すなわち、キルギスタンのオーシから南下してタジキスタンに入り、カラ・クリ湖東岸を通りムルガブに達し、少し南下し、逆L字型に西行しホログまで続くこの公道を、便宜的に東部、西部、南部に分ける分割線にしてみる。

東部には中国領のクングル（①・7719m）、クングル・チュベ（7595m）、ムスタグ・アタ（②・7546m）の7000m峰が3座ある。

西部にはタジキスタンとキルギスタンの分水嶺にシノ峰（③・7134m、レーニン峰）、タジキスタン領にソモニ峰（④・7495m、前コムニズム峰）、コルジェネフスカヤ峰（⑤・7105m）の3座がある。さらに驚くべきことに、ここには全長77㎞の世界最長の山岳氷河フェドチェンコ氷河⑥がある。

南部には急峻な岩壁と氷壁で名だたるマルクス峰（⑧・6720m）とエンゲルス峰（⑨・6510m）がある（高度はいずれも『コンサイス外国山名事典』三省堂による）。

パミール全域に7000m峰が6座

なお、地球上に7000m峰以上を有する山脈は、大ヒマラヤ（カラコルム山脈を含む、8000m峰14座）、ヒン

ズー・クシュ（７０００ｍ峰約12座）、パミール（７０００ｍ峰６座）、天山（７０００ｍ峰２座）、クンルン（７０００ｍ峰２座）があり、パミールは第３位を占める大山脈地帯である。

この大山脈地帯に、例えば先に述べたように、志賀高原や霧ヶ峰高原などというような、ロマンチックな「高原」という付属語をつけるのは似つかわしくない。ましてや、玄奘やマルコ・ポーロの時代のことはいざ知らず、パミール山塊の地形がすべて明らかにされ、多数の海外の登山家が訪れるようになった昨今、わが国でも速やかに「パミール高原」という表現はやめ、パミールとすべきであると考える。ただし、パミールの一部であるパミール公道やアク・スウ川などの周辺地帯は盆地地帯であり、パミール高地という呼び方もできるだろう。

総合的に見れば、パミールは山脈が支配的であるが、高地、氷河、盆地、峡谷、渓谷の集合体であるといえよう。なお、アンデス山脈、ロッキー山脈、アルプス、カフカスには７０００ｍ峰はない。

また付言すれば、『広辞苑』では第４版以降は見出しが「パミール」として立っており、『シルクロード事典』では「パミールは世界の屋根と呼ばれるように７０００峰が林立しており、パミール高原なる名称から想像しがちな平盤な台地状高原では決してない」（堀）と記載されている。酒井敏明著『旅人たちのパミール』では、「パミールは誤ってパミール高原と呼ばれることがある。しかし実際には、パミールは数本の巨大な山脈がそこから四方へ分岐する広大な山岳地帯」と記載されている。

最近のパミール登山事情

では、最近のパミール登山事情はどうなっているのであろうか。

１９９１年にソ連邦が解体して、レーニン峰北面のアチク・タシの国際キャンプはキルギスタンの管理下に置かれ、ソモニ峰（前コムニズム峰）北面のモスクビンの国際キャンプはタジキスタンの管轄下に置かれている。

山名についても変化があり、レーニン峰南側のタジキスタンでは、レーニン峰はシノ峰と呼ばれ、北側のキルギスタンではレーニン峰の名が残されている。

シノ峰は、かつてブハラを首都としたサーマン朝（８６４?～９９９年）時代、哲学や医学など学問全般に通じたタジク系の大天才学者アブアリ・イブニ・シノ（９８０～１０７３年）の名によるものである。だから、チュルク系

のキルギス人にはあまり関係のない名称である。シノはヨーロッパでは「アヴィケンナ」と呼ばれている。

ソモニ峰は、ソ連時代ではスターリン峰からコムニズム峰と名を変えた。そして、タジキスタンが独立して、タジク系のサーマン朝初期の名君主イスマイル・ソモニ（８４９～９０８年）の名をとり、ソモニ峰と名を変えた。なお、サーマン朝の首都ブハラは、今はウズベク人の国であるウズベキスタンにあるが、タジク系の人が大勢住んでいる。ブハラにはソモニ王の立派な廟も残されている。

ソ連国際キャンプの時代はソ連ビザでどこでも行けたが、今は山の所在地により、タジキスタン、キルギスタン、カザフスタンと、それぞれの国のビザが必要である。またソ連時代は、キャンプのアドバイザーとしてロシアやウクライナのスポーツ・マスターがコースの説明や、場合によってはガイドも引き受けてくれた。しかし、今は少数のスポーツ・マスターがツアー会社のガイドとしてプロ化し、営業を続けているに過ぎない。

旧ソ連領のパミールは大部分がタジキスタン領内になったが、独立後６年にわたり熾烈な政治的混乱があり、未だ山岳界の組織がない。民間のツアー会社は極めて弱小であるが、連絡先は次の通りである。

Asiana travel: info@pamir adventure. com（Dmitry Melnikov）

Pamir: info@pamirmount-tour. com（Odina Nurumamadov）

Pamir Peaks, Dushanbe: info@pamirpeaks.ti

ゴルノ・バダフシャン自治共和国の首都ホログには、PECTA（Pamir Eco-cultural Tourism Association）があり、ガイドの斡旋、装備のリースなどを行なっている。ガイド料は50$／d、車のチャーター料０・85$／km、ロバは25$／dなどである。事前の確認が必要である。

一方、キルギスタンでは山岳会組織があり、情報を入手することができる。

Alpclub-kg@mail.ru

また、キルギスタンには親切なツアー会社アクサイトラベルがあり、パミールや天山のガイドを行なっている。ただし、パミールはレーニン峰とその周辺の山だけに限られ、範囲は狭い。

info@ak-sai.com（Elena kalashnikova）

ロシア、中央アジアの広範囲な登山については、Ｋ２Adventures（ロシア、オムスク）が親切である。

Adventuretravel.ru/eng/index.html

以下、最近の登山事情を概説してみよう。

タジキスタンの首都ドシャンベからソモニ峰（④・7495m）とコルジェネフスカヤ峰（⑤・7105m）

ドシャンベからジルギタールへ空路や陸路で行く。ジルギタールからヘリコプターでソモニ峰の北側のモスクビンに降りる。BCは設営されていて、食事つきである。

ドシャンベから直接モスクビンに飛ぶ場合もある。

BCからソモニ峰に何本かの登高ルートがあるが、一般ルートはバロートキン・ルートやブレヴェツニク・ルートである。パミール・プラトーを経てC3（6953m）から頂上に向かう。旧ソ連の7000m峰5座に登頂し、「スノー・レパード」の称号を持つ近藤和美さんは、「多くの日本隊が、パミールはやさしいなどといった誤った言説を安易に信じてこの山に出かけ、失敗という結果に終わっている例を多数見知っている」と言っている。

南面の超困難な南壁を登る人には、交渉次第でガルモ氷河にも降ろしてくれる。

なお、ソモニ峰は1933年9月3日、東稜からレジェンド・アルピニストと言われているエフゲーニ・アバラーコフが、最後は1人で東稜から初登頂した。以来、現在まで二十数本のルートが登られている。

ソモニ峰の北側にあるコルジェネフスカヤ峰もBCは同じ場所である。間違ってコルジェネフスキー峰と言う人もいるが、数度にわたってパミールの探検調査を行ない、1920年8月にこの山を発見した探検家コルジェネフスキーが最愛の妻の姓コルジェネフスカヤ（女性名詞）を山名としたのである。初登頂は1953年8月22日、ウガーロフ隊8名が北稜よりなし、日本隊は1976年8月、原真隊4名がモスクビン氷河の右岸のピリニー（埃っぽいの意）4100mより取り付き、南面より登頂した。現在十数本のバリエーション・ルートがある。

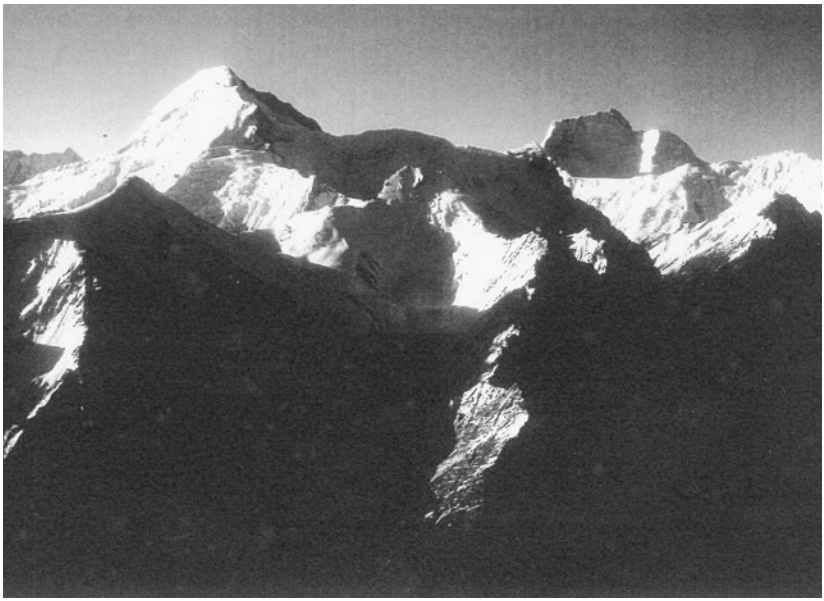
ソモニ峰もコルジェネフスカヤ峰もバルト3国（エストニア、ラトビア、リトアニア）やヨーロッパ諸国からアプローチが便利なので、登山客は少なくないようである。

タジキスタンの首都ドシャンベからホログを経てアプローチできる山

①イスティクロル峰（⑦・6974m、前レボリュチヤ峰）

ホログはタジキスタンの東部、南部を占めるゴルノ・バダフシャン自治共和国の首都である。当地区の入域料は20$である。個々の山の登山料はない。ホログでヘリを

本邦初のソモニ峰東面



コルジェネフスカヤ峰(左)とソモニ峰

世界最長のフェドチェンコ氷河（『新世界の中央アジア』パミール中央アジア研究会編より）

チャーターして、77㎞の世界最長の山岳氷河であるフェドチェンコ氷河（⑥）の源頭のBC（5100m）に飛ぶ。イスティクロル峰を中心に周囲のフィッカー峰（6725m）、グリナ峰（6502m）、バクー・コミサール26人峰（6842m）などに登る。現在、パミール中央アジア研究会（以下、パ中研）の角張嘉孝氏を中心に登山、偵察飛行を計画中である。イスティクロル峰は1954年8月17日に、ウガロフ以下10名が北稜から初登頂している。レボリュチヤ峰の名称での1978年8月のポーランド隊の南壁の登攀記録の翻訳（『岩と雪』1979年10月号）は、筆者のものである。北面の登攀記録の翻訳も記憶にあるのだが、見つからなかった。

②パトホール峰（⑫・6080m）

パミール南西部、パミール公道の北方にある。ルシャン山脈の最高峰で、ホログから車でアプローチする。1946年8月14日、南面のマルコフスキー氷河から西稜を経て、スターリン峰（現・ソモニ峰）の初登頂者エフゲーニ・アバラーコフを隊長とする登山隊が初登頂した。アバラーコフは次のように書いている。「頂上からは雄大なパノラマが広がっている。北にはフェトチェンコを、南から取り囲んでいる山々が雲の彼方にある。南にシュグナン山脈やマ

ルクス峰、エンゲルス峰などの鋭く突起した山塊を持つ、シャフダラ山脈の褶曲が盛り上がっている。その遥か向こうにはカラコルムの山々が見える。現在はヨーロッパの登山家たちもここまでは足を延ばしていないようだ。

③マヤコフスキー峰（⑬・６０９５ｍ）

パミール南西部の最先端にあり、西麓にはピャンジ河（アム・ダリア河の上流部の呼称）が流れる。１９４７年、ブダノフ隊が初登頂した。１９４０年末から１９５０年代にかけて、第２次世界大戦が終結していたので、この間パミールや天山、カフカスの多くの山が初登頂された。特にソ連から多くの登山隊が７０００ｍ峰に集中したので、パミール南西部の山々は一部を除いて静かであったようだ。

２０１３年の夏に、角張氏がドイツの青年登山家クラウス君と６日かけてマヤコフスキー峰の東南稜から東稜に出て、頂上に立った。ほかの登山隊はいなかったようだ。頂上からは、南にはヒンズー・クシュのサラグラール（７３５０ｍ）が紺碧の空の中に群を抜いてそびえていた。

ソ連時代から、登山は道の途絶えたところから始まる、と言ってアプローチの説明があまりないが、なんとマヤコフスキー峰のアプローチは、ホログから乗り合い軽自動車で走行距離52㎞走り、高度２７５２ｍのキャンプ１になる

レボリュチヤ峰北東面、中央が主峰

高度まで行き、交通費は４５０円であったという。山名のマヤコフスキーは、ロシアで一世を風靡した詩人の名によるものである。

マルクス峰（⑧・６７２６ｍ）とエンゲルス峰（⑨・６５１０ｍ）

マルクス、エンゲルスは不可分のドイツの思想家、経済学者であることは周知の事実である。この２人の名が並んで付けられているのは、十分刺激的である。そうしたわけで、この２つの山は併せて紹介したい。両峰ともパミールの最南部に並んで屹立している。ホログからは１５０～２００㎞のところにある。南側にはピャンジ川が流れている。

マルクス峰はシャフダラ山脈の最高峰で、エンゲルス峰の西側にある。１９４６年に前述のパトホール峰にアバラーコフが初登頂した後、余勢を駆ってマルクス峰にも西稜から初登頂した。

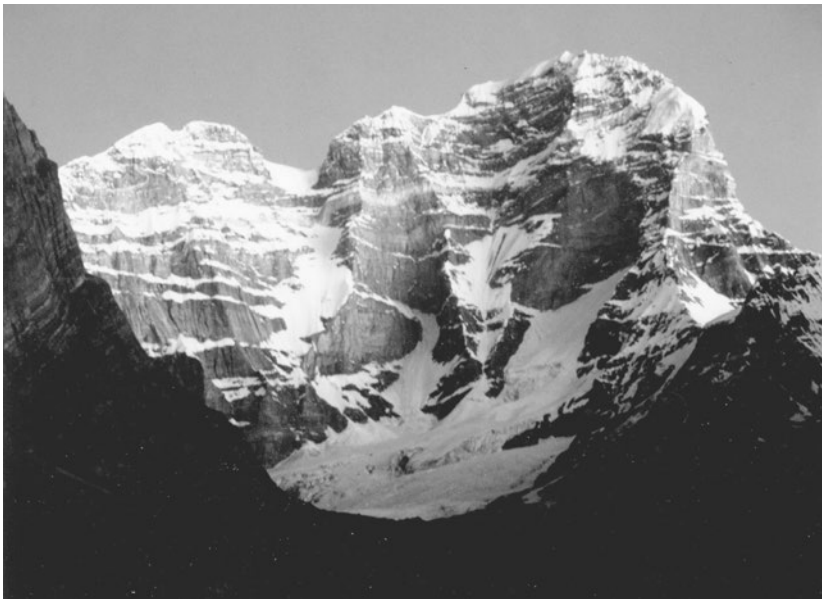
アバラーコフが再三出てくるが、ロシアの登山家の間では老いも若きも知らない人はいないので、彼のことを紹介しておこう。

エフゲーニ・アバラーコフは１９０７年、中央シベリアのエニセイ河畔の町エニセイスクからさほど遠くない、小さなコサックの農村で生まれた。兄のヴィタリーは１つ年上で彼は弟であった。２人はシベリアの自然を心より愛した。兄弟は、クライマーの間では有名なクラスノヤルスク岩峰群で岩登りの技術を習得し、体力を養ったのである。

最初カフカスに現われた時は、ディフタウを登り、ベゼンギ壁を初縦走したりして山仲間を驚かせた。その翌年には、スターリン峰（時の名称）遠征隊の隊員に抜擢された。その時、彼はモスクワ美術学校の生徒であった。すでに書いたように１９３３年のスターリン峰の山行では、最終的には単独でスターリン峰に初登頂する。ソ連の登山界では複数で頂上を極めるのが一般的であるが、彼の場合は例外であった。これはソ連の元首の名が付けられたソ連の最高峰に登ったので、罰よりも栄誉と名声がもたらされたのであった。その後彼は、パミール、天山、カフカスなどで30峰に近いほとんどの山で初縦走、初登頂をしており、名実ともにソ連山岳界のヒーローになったのであった。また、山だけではなく彫刻家であり画家でもあった。しかし、運命のいたずらか、残念なことだが41歳の若さで不慮の事故で亡くなった。

エンゲルス峰はマルクス峰の東隣にあり、岩峰には幾本もの大理石の層が帯状に走っている。１９５４年９月４日

マルクス峰北壁



エンゲルス峰北面

に、グルジア（現・ジョージア）隊が初登頂している。山名はマルクスの盟友で、スポンサーでもあったエンゲルスの名による。

マルクス峰、エンゲルス峰ともに北面は素晴らしい険阻な岩壁となっていて、ソ連時代のロッククライミング・コンペティションの舞台でもあった。また、第2次RCCの設立者の1人でもあった、パ中研の前会長、二宮洋太郎氏が、マルクス峰、エンゲルス峰に行くことが大きな夢だった、とよく語っていたのを思い出す。

レーニン峰（7134m、シノ峰とも言う）

最後にレーニン峰であるが、同峰はキルギスタンとタジキスタンの国境線上にあり、キルギスタンから入るのが一般的である。キルギスタンからは、首都のビシケクかオシから陸路で入る。ソ連時代の国際キャンプがアチク・タシにあり、今はキルギスタンの管理下にある。北面からはレーニン峰の頂上へは数本のルートがある。

ソモニ峰のモスクビンBCからのアプローチもあり、ヘリでレーニン峰南面のボリショイ・サウクダラへ飛び、BC→クリレンコ峠→東稜→頂上のルートがある。

いずれにしろ、パミールは大きな変貌をとげてきた。そ

のなかで変わっていないのが、山の実情にそぐわない「パミール高原」という呼称である。何度も言うようだが、パミールは７０００ｍ峰を擁する峻厳な高峰群なのである。

念のため、ドイツやフランス、イタリア、ポーランド、ロシア、イギリスなどの世界地図帳にあたってみたが、すべて「パミール」と記載されていたことを最後に付記しておきたい。

（永年会員、パミール中央アジア研究会会長）

写真は、角張嘉孝（Ｐ２５５上とＰ２５７）、近藤和美（Ｐ２５５下）、近藤寿行（Ｐ２５６）、田村俊介（Ｐ２５９とＰ２６０）提供

紀行

コーカサス、半世紀ぶりの再訪記

吉川正幸

私は１９７１年の夏に、旧ソビエト連邦領だったコーカサス（ロシア語でカフカズ）へ２人の先輩と旅をした。当時のソ連は、外国人が入ること自体が困難だった。ましてコーカサスでの旅は苦労が多かったが、地元の人の手助けによる幸運に強引を重ねて山にも登れた。その時はジョージア（ロシア語でグルジア）の首都ティビリシ（Tbilisi）から軍用道路を北に向かってカズベク峰（５０４７ｍ）に登り、北の丘陵地帯に抜けて、エルブルス（５６４２ｍ）にも登った。

そして、半世紀を経た２０１９年７月に、日本山岳会の仲間６人と再びコーカサスを訪問した。

カズベク峰に再び対面して

遠い昔と同じ場所から、カズベク峰を、高い丘の教会の奥に見たとき、思わず、ウーッという声が胸の内からわき上がってきた。48年前の朝と同じように、その頂上は、烈風に飛ばされる雲の中に見え隠れしていて、氷雪をまとった重厚な存在感は昔のままであった。カズベク峰（Mt. Kazbek ５０４７ｍ）は、ギリシャ神話にプロメテウスが鎖でつながれた話が伝わるほど、古くから知られた万年雪をいただく独立峰である。半世紀を経ても不動の山を望むと、老いた頭の中で幻想のようになっていた、昔、コーカサスの山の頂に立った感激が、昨日のことのように蘇ってくるのであった。

半世紀ぶりに対面したカズベク峰

コラム①　コーカサス山脈と初期の登山史

コーカサス山脈は、黒海からカスピ海までの狭い地峡を東西に分けて、ヨーロッパとアジアの地理的な境となっている。山脈の連なりとは少しだけ外れた北に、エルブルス峰（５６３３ｍ）がある。ロシア領にあるエルブルスは、ヨーロッパ大陸の最高峰とされ、頂上氷河があるもののお椀を伏せたような登りやすい山なので、近年は多くの登山者が登るようになった。ジョージア側の国境には、モン・ブランよりも高いシハラ（５０６８ｍ）、ジャンガ（５０５９ｍ）、カズベク（５０４７ｍ）の３峰がある。１８６８年には、ビクトリア王朝時代の英国人フレッシュフィールドが先駆けとなってエルブス東峰とカズベク峰の登頂に成功し、１８９０年代にＡ・Ｆ・ママリーが『アルプス・コーカサス登攀記』を出版し世に知られるようになった。しかし、ロシアとトルコという当時の大国の狭間にあるジョージアは、最近まで戦争や政争が絶えることなく、登山者には近づき難かった。また、コーカサス登山の文献や案内が乏しいのも、登山者が少ない理由でもあろう。コーカサスの初期の登山史に詳しい本は、英国山岳会のＷ・ノイスとＩ・モーリンが編集した、１９８９年初版の“World Atlas of Mountaineering”がある。

コーカサスとジョージアの地政

コーカサス山脈の南側にあるジョージアは、以前はグルジアと言われ、ソビエト連邦の構成国であったが、１９９１年にロシアから独立した。コーカサス中央部の北のロシア側に北オセチア自治区、南のジョージア側に南オセチア自治区があったが、２００８年８月に、ロシア軍が南オセチアに侵入して領土を切り取られてしまった。

今は、コーカサス中央部の稜線から南山麓のゴリの町の北側までは、ロシアの占領下にあるため、今でもロシア側からもジョージア側からも、中央部の山に登ることはできない。

首都ティビリシは、札幌と同じ北緯43度の位置にある。また、ジョージアの面積は、北海道に等しく狭い。同じ緯度の、北海道とジョージアの間のユーラシア大陸の気候は、乾燥した草原か砂漠であるが、ジョージアは、黒海とカスピ海の地峡にあり、氷河を抱えた高山もあるので、周辺の国に比べて湿潤で、緑豊かである。

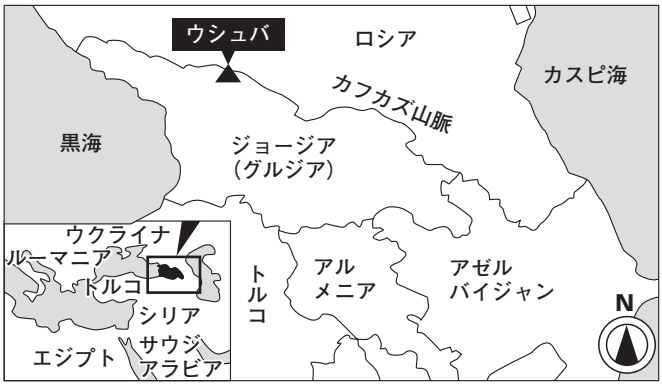
半世紀前にこの地を訪れてから、私は過去に何回かジョージアへの旅行を考えたこともあった。しかし、独立紛争や南オセチア戦争、それに伴う国内難民問題など、常に治安が安定した状態ではなかったことが、旅行を躊躇させる原因でもあった。ジョージアがニュースになるたびに注意していたが、数少ない報道には、いつも戦車の映像があった。仕事も、高度成長時代にあって忙しかったことも旅に出られなかった言い訳でもある。

ジョージアの「おもてなし」とロシア支配

昔、旅行しているときに、こんなことがあった。モスクワからジョージアの首都ティビリシに降り立つと、空港からそのまま警察署に連行されて、旅行許可書を提示させられ英語で審問された。旅行許可書には、ここからカズベギ村に行って登山する、とは書いていない。自分達でカズベギ村へ行くことは禁止する、と言われてしまった。その警察署員は白人のロシア人ばかりだった。ジョージアの地元の人々は小柄でトルコ人に近い風貌であるので、ロシア人との違いは分かる。その後、博物館のようなところに案内された。そこで、第２次世界大戦の直後に、ソ連の赤軍がコーカサスの南側に侵攻して、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンの人民を解放したという展示物を見せられた。

その翌日、ティビリシからタクシーに乗って、カズベギ村に入り、その晩、宿の食堂で食事をしていると地元の人

が話しかけてきた。現地の言葉は全く分からないが、ドイツ語を解する村人がいて、同行の勝本ドクターがドイツ語を話せたので、意味は通じた。日本から来たと言うと、日本は、戦争でロシアを破ったのですばらしいと言う。別の人は、体操の「ナカヤマ」は、いつもソ連の選手よりも強いと言う。セイコーの時計はすばらしいと言う人もいた。そして、葡萄酒の乾杯が始まった。食堂を出るときには、料金は村の人々が払ってくれていたので、受け取ってもらえなかった。一地方の村民が、日本のことをよく知っていることに驚くとともに、ジョージアとロシアの冷たい関係を理解したものだった。



さらに、宿で会った村人は、翌日の登山口までの案内人を手配してくれた。また、ほかの機会にも、お茶や酒を無償で振舞ってくれた経験をして、ジョージアの素朴な「おもてなし」の文化を知り、すっかり、この国のファンになってしまった。今回の旅の中でも、何回も、ジョージアには古くから旅行者に対する「おもてなし」の文化があった、と説明を受けた。

首都ティビリシ

半世紀前のジョージアの旅では、英語も通じず、苦労した。今回、日本山岳会の仲間との旅行の手配は、旧ソ連圏の旅行に詳しいユーラスツアーズ社に依頼した。会社の主催者であり、ロシア語も話せる坂田衛会員も仲間として同

行してもらえることになったので心強かった。さらに、旅行社を通じて日本語の話せる優秀な現地ガイドの手配を依頼していた。

ティビリシには、中東のドーハ経由空路で入った。到着前の機上からは、アララト山の輝く雪の山容を見ることができ、ノアの箱舟が見える、との冗談も出た。ティビリシ空港で私たちを迎えてくれたのは、ガイドのシュレナ嬢であった。九州大学に留学して日本語を話し、簡単な読み書きもできる才媛であった。旅の最後まで同行してもらった彼女の案内と説明のお陰で、ジョージアの文化や料理を知り、私たち7人の旅はとても実り多いものとなった。聞けば、今日のティビリシでは、主要産業となりつつある観光業に就職するために語学学習に人気があり、日本語を学ぶ学生だけで毎年50人以上いると言う。ティビリシ市内には、欧州からの旅行者があふれていた。

昔、ティビリシを訪れた際の街の記憶は乏しい。ティビリシを囲む丘の上の巨大なジョージアの母の像がそびえ、町の建物の外観は古びて暗かったが、街路樹の緑が美しかったことを記憶している。この地出身のスターリンの像が、失脚していたのにもかかわらず、そこかしこに立っていたことも覚えている。記憶に乏しいのは、その時には、現地警察と、旧ソ連時代の外国人のための旅行社インツーリストから、私たちが持つロシア側から入る旅行許可証では、カズベギ村には行かせられないと言われ、その交渉で頭が一杯であったからである。その問題は、グルジア山岳会を訪問した際に、同行の勝本ドクターが思いついた、「グルジア山岳会で、インツーリストに頼んでカズベギ村に案内してもらえればよいと言われた」という半ば嘘のような言葉で、あっけなく解決してしまった。そのため、カズベギ村までは、警察かインツーリストが手配したタクシーで行った覚えがある。

半世紀ぶりに見たティビリシの街は、丘の上の巨大なジョージアの母の像こそ昔と同じであったが、すっかり生まれ変わっていた。イタリア人の建築家による突飛なオペラ劇場などの建造物もあり、独立後に急速に発展した街の姿に、昔とは全く違う街に来たような印象を持った。街の中央を流れるクラ川の両岸に、古い街区と新しい建造物が交差して魅力的な街になっていた。ティビリシという名は、温泉を意味する古語に由来すると聞いた。古い温泉施設や世界遺産になっている遺跡もあり、また、世界で一番

コラム②　袋一平とコーカサス登山

ロシアの詩人レールモントフがティビリシを歌った有名な詩があることを知っていた。

霧が巻くはるかな空に／かがやく雪ダイヤと見えて／カフカズの峰はそびゆる

冬のティビリシからは、コーカサスの白銀の峰々を望める。詩を翻訳したのはロシア文学者の袋一平である。

袋一平は1955年にジョージアの詩人の叙事詩を日本に紹介し、その縁で、1963年にジョージアに招かれた。日本山岳会会員でもあった氏は、それから粘り強く交渉を重ね、1966年の夏に、日本グルジア友好交流登山隊を率いて、初めてコーカサスの山に入った。戦後、日本人がソ連領の山に登ったこと自体が大事件であった。その経緯は、1968年に出版された氏の著書『カフカズの山旅』に詳しい。

そして、この本とママリーの『アルプス・コーカサス登攀記』の訳本が、1971年にコーカサスに入った私たちの唯一の手がかりとなる本であった。今回のコーカサス行きにあたり、日本語の出版物を探したが、コーカサス登山に関する日本語の本はこの2冊しかなかった。半世紀の間に、私はジョージアに関する雑誌記事や旅行記をいくつか手に入れていたが、ジョージア旅行に関する日本語のガイドブックは、未だに少ない。

メテヒ教会からティビリシの旧市街を見る。下にはクラ川が流れる

コラム③　グルジア軍用道路

ティビリシから北に向い、コーカサス山脈を横断してロシアに至る道は、古くからの往還で、ロシアの詩人プーキンもレールモントフも駅馬車で通ったという。18世紀末に帝政ロシアの軍隊を通すために整備されたもので、軍用道路と呼ばれるようになった。

最高点の十字架峠（クレストヴィ）は、２３７９ｍの高さで、北に下るとカズベギ村を経て、狭い峡谷を抜けて、ロシア側の丘陵地帯に至る。

最近になってこの道の歴史を知った。第1次世界大戦の折に、当時のオスマントルコ軍が帝政ロシアに侵入するために、軍用道路を北上したという。しかし、迎え打ったロシア軍の抵抗は大きく、真冬にまで戦線は膠着して、トルコ軍は十字架峠近辺で何万人という兵士を失ったという。それがオスマントルコの崩壊につながった、と歴史の本にあった。

古いワインの文化もある。これから、ますます観光都市として発展することが想像される。

ジョージアは、アジアとヨーロッパを結びつける接点となる位置にある。古くからシルクロードの北ルートに位置して、昔の隊商のキャラバンの跡は今でも古い町に残っている。最近、日本では相撲の栃ノ心によって一躍有名になったが、自然が豊かで、世界遺産も多くあり、世界で2番目に古いキリスト教国でもあった。

今回、街の観光でもっとも印象が残ったのは、ティビリシの街の中心、クラ川の崖の上に立つ13世紀のメテヒ教会であった。侵入した異民族に何回も破壊され、帝政ロシア時代には刑務所とされ、ソ連時代には劇場になっていたという。今は修復されて教会となり観光名所となっていた。教会内部の壁画には、ティビリシに侵入したイスラム軍が、キリスト教徒の首を切っている残酷な絵があった。紀元前4世紀ごろから存在したというティビリシは、何度となくペルシャ、トルコ、モンゴル、そしてロシアの支配下に置かれた歴史があった、と聞いた。

カズベギ村への軍用道路

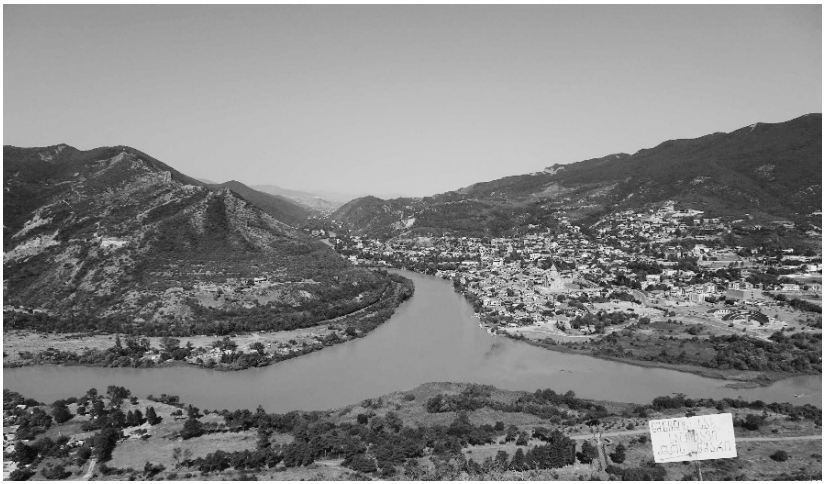
ティビリシを出て軍用道路に入る。クラ川に沿って一度西に進み、アラグビ川（Aragvi）との合流点にあるムツヘタ（Mtskheta）の町から右に折れて、アラグビ川に沿って北に向かう。川の合流点の丘の上には、十字架教会（ジュベリ修道院）と呼ばれる4世紀からある建物があった。そこから見おろすムツヘタの町の大聖堂は、世界遺産になっ

ている。日差しが強く、暑いほど晴れわたる丘の上の教会からは、2つの川の流れが望まれ、すばらしい景観に既視感を覚えた。考えてみると、ハンガリーを流れるドナウ川の景観に似ている。そして、ドナウ川は、黒海に注いでいることを思い出した。ハンガリーとジョージアは、ともにオスマントルコの領土であった。中東の国のようにも思えるジョージアは、ヨーロッパに近いことを再認識したのであった。

ムツヘタの大聖堂など、途上でいくつかの古い教会に立ち寄ったが、すべてに立派な城壁があった。何回も異民族の侵入を受けたこの地では、教会が最後の砦となったことが想像できた。

半世紀前の軍用道路は、舗装はされていたものの、かなりのデコボコ道で、殺風景な羊の放牧地となっている九十九折の道を登り、十字架峠までは、かなりの時間がかかったのを覚えている。

十字架峠に至る、兵士が死屍累々となったという坂の斜面は、今ではスキー場開発が始まっていて、そこかしこに、ロープウェイやホテルが建設中であった。まるで、40年前の湯沢近辺の風景と同じである。昼食に立ち寄ったのは、



ジュベリ修道院からムツヘタの町を望む

オーストリア資本の「マルコポーロ」という、スイスにあるような立派なリゾートホテルであった。ジョージア独特の、大きな地中のツボで熟成させた伝説のワインがメニューにあったので飲むことにした。しかし、注文をする段になって、それまでティビリシで飲んでいたワインよりだいぶ高いことに気がついた。しかし、現地通貨であるリラを日本円に換算すると１０００円足らずであることが分かり、大笑いして注文して飲んだものであった。ジョージアでは、安い値段ですばらしいワインが飲める。

カズベギ（ステパンツミンダ）の町

十字架峠から2時間足らずで、カズベギに着いた。そこは、かつての素朴な村ではなく、ホテルやレストランが立ち並び、外国人の行き交う町に変わっていた。カズベギの名も、現在はステパンツミンダ（Stepantsminda）に変わっていた。ロシアとの紛争の経緯もあって、ジョージア風の名に変えたらしいが、今でもカズベギの方が通じる、とガイドは言う。

町の広場には、石造りの重厚な教会があったと記憶していたが、そこには立派なホテルが立ち並んでいた。ここはロシアとの国境まで10㎞もない。度重なるロシアとの紛争で、この町にも戦車が行き交ったことが想像される。村の教会は、現実にあったのか、私の記憶違いか、半世紀の彼方ゆえ分からない。

ホテルに着くと、まだ日は高かった。荷を解くまでもなく、カメラを持って宿を飛び出した。昔のカズベギ村にあった、たった一軒の宿の場所は、中央の坂の上の行き止まりにあったと覚えていて、すぐに分かった。今は、昨日行った場所も思い出せないのに、若い頃の記憶は残っていて、自分で感心した。

１９７１年7月29日の朝、ザックを担いで宿から出て、眼前に見上げたカズベク峰は、意外に近く、巨大に見えた。正確な地図も案内書も持たないまま高峰に登ることの不安を抱きながら、これから立ち向かう山の大きさに感激したのを覚えている。

坂の上から半世紀ぶりのカズベク峰を見上げると、長い間の夢が叶い、やっとこの地に戻れたという安堵感と、一瞬、青春時代に戻れたような感傷が入り交じり、複雑な気分であった。しかし、期待していた若い時のような激しい感情があふれなかったのは、年を重ねたせいなのか。カズベク峰を見上げていた21歳の自分と、現在の自分との48年間は、意味のある歳月だったのだろうか……などと複雑な

1971 年 7 月 29 日朝、カズベギ村よりカズベク峰に向かう

2019 年 7 月 16 日夕、同じ場所からカズベク峰を望む

思いが沸き上がってきた。

21歳の私は、山岳部の先輩からお金を借りてヒマラヤに飛び出し、コーカサスにまで来てしまった。卒業間近に就職活動もせずに日本を出たので、帰国した後の人生の先行きは真っ暗であった。しかし、見上げた大きなカズベク峰が一瞬だけでも、私の将来の不安を吹き飛ばしてくれていた。そして、現在は家族もあり、仕事も終えて定年を迎えている。卒業後は、生活のため山登りはあきらめざるを得なかったが、今、再び同じ地を踏めたということは、それだけで私の半世紀は少しだけ幸運であった、と自分を納得させるのであった。

宿泊したホテルのレストランの席からは、カズベク峰を望むことができた。食事中も、カメラを抱えて山頂が雲の切れ間に現われるのを待っていたので、落ち着くことができなかった。他人が見たらなんと思うか、考える余裕はない。

ゲルゲティの丘と村の思い出

2日目は、対岸のゲルゲティ村の丘の上にある三位一体教会へのトレッキングである。教会までは、車で行く3人と、歩いて行く4人の二手に分かれ、徒歩組は早く出発した。

1971年に丘の上の教会を見上げたときには、ゲルゲティの斜面には木はなく、舗装のされていない道がはっきりと見えたものであった。作りかけのケーブルカーの駅もあった。しかし、今は広葉樹の林になっていた。緑が日に輝く林の中の道はよく整備されていて、快適に登ることができた。草地には、夏の花があふれんばかりに咲いている。途中の、ベンチがある花に囲まれた休憩所には、英語で「ジョージアの20％をロシアが占領している」と書かれた看板があって、びっくりした。ジョージアは、南オセチアだけでなく、独立した際に、国土の東西の端もロシアに取られてしまっている。山の中まで恨みを残しているようであった。

丘の上の三位一体教会は、昔、ここを通過したときには廃墟だった。しかし、今はカズベク峰を望める景勝地として、駐車場まである観光スポットになっていた。教会で合流した私たちの車組は、カズペギから私たちが徒歩で2時間かけた道を、わずか15分足らずで登ってきたと言う。

教会からは、下の村を望むことができたが、カズベク峰の頂は雲の中であった。私は昔、ここから登り始めて、氷河の上にテントを張って、裏側の雪の斜面を登ったものだ

1971 年 7 月 29 日、カズベク峰には巨大な氷河があった

2020 年 7 月 17 日、三位一体教会から見た山と旅の一行。氷河は見えなくなっていた

と感傷に浸っていた。往路は、地図もなかったこともあり、また、高度に慣れるために3日もかけた。登頂した後は、三位一体教会のかなり上の草地の上で1泊して下山したものだった。今は同じ7月とはいえ、山の雪も少なく、氷河も後退してここからは見えない。雲に見え隠れするカズベクを眺めながら、今は体力もないくせに、直登すれば2泊で登れるなぁと、かなわぬ夢を見ていた。

丘の教会からは、歩いて下る途中のゲルゲティの斜面にある村に立ち寄った。半世紀前に下山した際に、村の中の泉の水を見つけ、休んだものだった。すると、珍しい外国人の登山者を見て、村人たちが集まってきた。その時の写真をスマホに持っていたので、昔を知る人がいるか確かめたかった。

ガイドのシュレナ嬢に通訳をお願いして、村人に昔の写真を見せて聞いてみた。すると、中年の男性が、その近くに昔、真ん中の石があったことを覚えていると話した。右の老婆は私のいとこの親戚だろう、とも話してくれた。48年の歳月は長い。写真に写っていた少年たちも、私と同じように老いたことであろう。

コーカサス南麓の町々からスワネティへ

カズベギを後にした私たちは、コーカサス西部にあるスワネティ（Svaneti）地方に向かった。昔、私はカズベギから軍用道路を北に抜けてロシアに入ったので、スワネティに行くのは初めてである。エルブルス峰の頂上付近からスワネティの山を見て、いつか絶対に行きたいと思っていた。その時見た、ウシュバ峰のとがった双耳峰は、目に焼きついていた。それゆえに今回の旅では、スワネティの滞在に多くの日を割くよう旅程をとっていた。

いったん、南のムツヘタに戻り、そこから中国企業が建設中という新しい高速道路に乗り、西に向かった。道は、なだらかな丘陵地帯をゆったりと上下しながら進む。ゴリの町に至るまで、道の山側に赤い屋根の平屋建ての小さな家の連なりを幾度となく見た。聞けば、難民の避難住宅であった。南オセチアには、ロシア人が住んでいるというのがロシアが占領した理由であるが、ロシア人の何倍ものジョージア人が住んでいたので、家を失った人は国内難民になってしまった、とガイド嬢は言う。

高速道路は、黒海沿岸のバツミに向かう道との分岐で途絶え、そこからは2車線の坂道となった。その時になって気がついのだか、東西にある黒海とカスピ海との分水嶺に

1971 年 8 月 4 日、ゲルゲティ村で、中央は 21 歳の私。カウボーイハットは勝本ドクター

向かって登っていたのだ。坂を上がるにつれ、広葉樹の緑が増えてゆく。赤松の林があったので、ここではマツタケがとれるだろうかと車内で話していた。

分水嶺のリコティ峠（Rikoti Pass 999m）を越えるころには、湿度も上がり、東側と植生も変わったように思えた。コーカサスの南麓には、日本でも少ない「ブナ」が残っているという話を聞いていたので、林を探したものであった。また、道の両側には、そこかしこにミツバチの巣箱を見かけた。

クタイシ（Kutaisi）という古い町に1泊した。そのホテルには、30人もの日本の団体旅行客がいて驚いた。聞けば山好きの人々であった。先方も、私たちのような山を巡っている老人の一行に驚いたことであろう。もはやガイドブックもない国に、観光客が来るようになっていたのである。

翌日、スワネティ地方の中心であるメスティア（Mestia）に向かった。その時まで、クタイシの北に位置するメスティアまで直に北上する道があるので、その道をたどると考えていた。しかし、私たちはさらに西に、黒海近くまで進んでから、エングリ川（Engri）に沿って、北東に向かいコーカサスに分け入ることになるという。あまりに遠回り

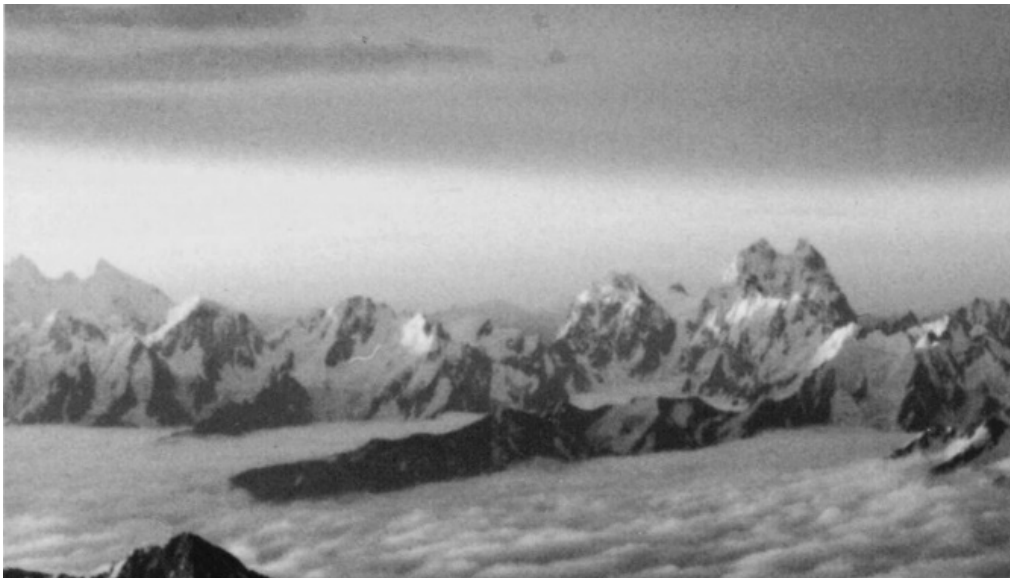
の道のりをガイド嬢に聞けば、北上する道は峠の多い未舗装の山道で、マイクロバスが通るには危険すぎるということだった。

エングリ川の最源流は、これから向かうシハラ峰の氷河である。水量の豊富なとても長い川であった。下流にはエングリ・ダムという、ジョージア唯一の人口湖があり、途上にあるので立ち寄った。霧の中に巨大な堰堤が見え隠れしていたが、聞けば日本の援助によって建設されたと言う。ダム建設で、日本とジョージアとのつながりがあったとは初耳であった。

ダムを過ぎたあたりからエングリ川は深い渓谷をなしていて、道は川に沿うこともできず、何度も山の斜面を登る。古い教会のある村を何度もやり過ごし、車に乗り続けるのも疲れたころ、やっと古い村であるメスティアに到着した。

塔の立ち並ぶメスティア

古い塔が立ち並ぶメスティアの景観には驚かされた。塔は家ごとにある。かつては侵入者を見つける物見の塔でもあり、籠城の目的もあったのではないかと説明された。しかし、家族単位で塔があるというのは理解しがたい。たぶん近隣と競って、家族の何代にもわたり塔を高くしていっ



1971 年 8 月 11 日、エルブルス峰から見たコーカサス山脈の山々。左端はシハラ峰、中央はウシュバ峰、左はドングズオルン峰。ウシュバとシハラの反対側にスワネティがある

たのではないか。

この地は世界遺産にもなって、コーカサスの秘境と宣伝されて有名になった。ジョージア平野部からかなり分け入った高山の麓にあり、遠くから見る村の景観は、まさに秘境である。しかし、メスティアの中心部は、観光業の人口も急増して市街地になりつつあり、至るところでホテルやレストランが建設中であった。宿で旨いワインに酔った同行の元銀行マンの鈴木祐二さんは、「有名な秘境」という言葉は、それ自体おかしいと言う。しかし、一度は見に来る価値のある村だろう。

メスティアを見渡す丘の上には、新しい立派な博物館があった。そこには、紀元前１０００年以上も遡る、古代の遺品が展示されていた。古代文化の中心でもあった中東からも近く、日本の縄文土器の時代から、この地では銅や鉄器が使われていたという。

博物館では、英文併記してあるスワネティの本を入手した。ウシュバ峰などの山の美しい写真と、ジョージア語と英語の地図が掲載されていたからである。帰国した後で、その本の中に、「カフカズのタイガー」と呼ばれる男が岩壁を登る写真を見つけた。その名はケヘルジアニ（Mikheil Khergiani）と書いてある。昔、どの本で読んだかも忘れた

が、コーカサスの岩壁を登り尽くした「タイガー」と呼ばれる伝説のクライマーがいたと覚えていた。その男の家が博物館になって、メスティアにある、と求めた本に書いてあった。ああ、もう一度、メスティアに行かねばならない。

ウシュグリ村とシハラ峰

メスティアからは、日本製の4輪駆動車に乗り換えて、エングリ川の源流にあるウシュグリ集落に向かった。シハラ峰（5068m）を見るためである。

メスティアとウシュグリとの間は、地図の水平距離では遠くはないが、車でも半日を要した。深い谷のエングリ川を避け、峠を越えて上下する未舗装の悪路を進む。エングリ川に戻って、川の淵に沿って進む時には、崩れた斜面にえぐるように造られた道を進むので、危険きわまりない。助手席に座った私は、何度も声を上げた。

同行の坂田衛さん、早川滉さんとは、この道はブータンの悪路と一緒ですね、と車中で話していた。お2人とは2012年にブータンを旅したが、トンネルのない道路は、隣の村まで行くのも、車で悪路の峠を超えて半日がかりであった苦しい体験を共有していた。

標高2400mにあるウシュグリ村は、ヨーロッパでも

2019年7月20日、朝日のなかに、メスティアの高い塔の連なりが浮かび上がる

コラム④　コーカサスの地図

今回の旅行の準備でも、半世紀前と同じく地図には苦労した。等高線のある地図は今でも望むべくもなく、山と村の正確な位置関係が分かる地図がない。ジョージア語やロシア語で表記された地図は全く読めない。〝World Atlas of Mountaineering〟には、中央部の山名と峠、氷河の名に関する地図がある。アルファベット表記の地図は、英文旅行書LonelyPlanetシリーズの『ジョージア・アルメニア・アゼルバイジャン』に詳しい地図があった。ジョージアの観光局のリーフレットにある道路地図も詳しい。しかし、アルファベット表記の地名は、英国人のパイオニアが、現地で聞いたロシア語またはジョージアの方言の響きから記録したものが多い。現地で聞くジョージア語の地名とは微妙に違うので、山を同定することができずに困った

インターネットのGoogleEarthの衛星写真には、道路と村の英文表記があり、位置は正確であるが、山と谷の表記はほとんどない。それに、この地のGoogleMapやストリートビューはない。結局、旅の間で一番役に立ったのは、現地で入手した、現地旅行社が出している地図であった。

最も高い常住型の村であるといわれ、メスティアよりも秘境の感がある。ここにも中世の塔が立ち並び、ユネスコ世界遺産の村でもある。しかし、村のいたるところでホテルの建設が始まっている。坂田さんは、この村で7年ぶりに再会した長老が、今の村の若者はお金を稼ぐことに夢中になってしまっている、と嘆いていたと言う。

移動した午後になって、ウシュグリ村から、エングリ川源流のシハラ氷河に向かって歩き始めた。エングリ川源流の河床は、夏の高山植物の花にあふれていた。大きな氷河が後退した後と思える広い谷の中を、雲の中に見え隠れするシハラの稜線を見ながら3時間、氷河末端のデブリが見えるところまで歩いた。シハラ氷河の麓にある、この花の谷の景観は忘れがたいものがある。花や植物が趣味の設計士の杉山顕一さんは、写真や記録をとるのに大忙しであった。しかし、疲れた帰路はとても長く感じた。遠くにウシュグリ村の塔が見えてきた時には喜んだが、着いたのはそれから1時間も先だった。

ウシュグリの宿で8時から遅い夕食をとることになったが、そのさなか戸外に出た同行の1人が、シハラの頂上が見えると叫んだ。全員が外に出て、日没の最後の光に照らされて輝く稜線を見つめて、感激したものであった。

ユネスコの世界遺産の村、ウシュグリ村とシハラ峰

エングリ川の最源流、シハラ氷河への花の道を行く

ウシュバの双耳峰

1971年8月11日の夜明け、エルブルス峰の頂上近くから、はるか南に見たウシュバの空に屹立する双耳峰に、若い私は感激した。4710mの高さではあるが、人を寄せつけないような威厳がある頂上が、空を引き裂くように立っていた。

現在の私には、岩壁を登り、ウシュバの頂上に立つことはかなわない夢であるが、ひと目近くで見てみたいと、長い間思っていた高峰である。

ウシュバを見るために、いったん、峠を越えてメスティアに戻り、さらに西に進んで、ウシュバの西側のドーラ川(Dolra)の谷にあるマゼリ村(Mazeri)の宿に入った。

メスティアを出て少し進んだとき、雲の間からウシュバ峰の頭がのぞいていた。南東面であるが、双耳峰のいずれの峰か分からない。見上げたウシュバの頂は、鋭角であるとの予想に反して丸く見える。頂上近くからの氷河は、まっしぐらに地上に向かって落ちていた。

放牧地の中のマゼリ村の宿は、立派とは言えないがテラスもあり、明るく快適であった。旅の出発前の打ち合わせのことである。7年前にこの地を訪れていた坂田さんからは、この地の宿泊は民家のようなもので、トイレも外にあ

2019年7月20日、ウシュグリ村から残照に輝くシハラ峰を望む

るので、ランプとサンダルの用意が必要だと言っていた。しかし、全くそんなこともなく、観光開発はすごい速さで進んでいるようだ。ガイドのシュレナ嬢も、来るたびに道が良くなっていくので驚く、と話していた。

宿の横を朝夕、放牧の牛の群れが、自分たちだけで往復する。この旅の前の打ち合わせで、私は昔のことを思い出して、ジョージアでは毎日、羊の肉を食べることになりそうだ、と話していた。往時の野山には多くの羊の群れが見られ、羊以外の肉などなかったからである。しかし、今は羊より牛を飼うようである。旅の途中でも、一度も羊の肉は出てこなかった。若いシュレナ嬢に聞いても、今や羊はめったに食べない、と言っていた。

ウシュバ氷河の谷のトレッキング

マゼリ村の宿からは、ウシュバ氷河の下の大滝までのトレッキングに出た。歩き始めてすぐのドーラ川の横断点では増水で橋が流されて、登山者の渋滞が起きていた。危険な徒渉である。私たちについた現地の登山ガイドが、やめろと言っているにもかかわらず、先行していたドイツ人グループの同行ガイドが、川に石を投げ込んで飛び石のルートを作っていた。それを見ながら、ここで氷河の川に落ち

1971年8月11日、エルブルス峰から見たウシュバ峰

たら黒海まで流されるなぁと、笑えない冗談を話していたものだ。結局、ドイツ人のグループが無事通過するのを見て、私たちもその後を追った。今考えれば、老人部隊としてはロープなしの危険な綱渡りであった。帰路には、私たちの山岳ガイドは、そこを避けての遠回りルートを使った。

ドーラ川を遡り、徐々に高度を上げていくと、トウヒの森の中にジョージア国境警備隊のチェックポストがあった。稜線を越えればロシアの領土である。ここで、登攀用具を持ったウシュバに挑戦するらしき若者を見た。ウシュバに登る者や国境稜線を越える登山者は、ここで登録する必要があるという。背後の森の奥の巨大な岩盤に落ちる滝が見え、その先にウシュバの頭が雲の中に霞んでいた。

森の斜面を登り続け、ウシュバ氷河直下の大滝に着いた。そこは高山の花にあふれる急斜面で、滝は100mはあろうかと思えるくらいあり、見たこともないほどに大きかった。滝からの水滴で、長くは留まることはできなかった。この日は曇りがちで、山麓からもウシュバの全容を見ることはできなかった。

谷を行く長い帰路になると、少しずつ日が差すようになり、暑くなった。振り返れば、ウシュバ氷河の下の岩壁をいくつもの滝が流れ出ていた。すばらしい光景を背に、私

たちは、よろよろとビールとワインの待つ宿へと足を進めるのであった。

ジョージア・ワインの村

旅程の最終日、夕刻の航空機までの時間を利用して、ティビリシ東部のワインの産地であるカヘティ地方のシグナギへ向かった。ジョージア西部とは変わって、乾燥した風景となった。強い日差しの下、南仏のブトウ畑と同じような景色が広がる。ジョージアでは世界で最も古くワインを醸造していたという。ジョージアの伝統的なワインは、地中に埋めた大きなツボの中に、ブドウをそのまま入れて発酵させる。紀元前２０００年ごろと推定されるワインを飲む人の像も発掘されていて、ワインを表わす「ビノ」という言葉も、ジョージア語「グヴィノ」に由来するとされている。私たちは旅行中のレストランで、昼も夜もジョージア産のいろいろなワインを飲んでいた。

シグナギにある、丘の山腹のトンネルを利用した古いワインセラーを訪問したときのことであった。そこに坂田さんの旧知の、元日本グルジア友好協会会長クベラーゼ氏が待っていた。白髪の背の高い老人であった。坂田さんに紹介されて、私は１９７１年にカズベク峰を登ったと話したところ、クベラーゼ氏は、50年前に若い日本人たちがコーカサスの山に登りに来たのを支援してウシュバに向かわせたが、その1人かと尋ねられた。私たちはグルジア山岳会には顔を出したが、3人組だったので違うと答えたものだ。彼は、今も昔の日本の登山者との交流を本に書いている、と言っていた。その本の出版が待ち遠しい。

メスティア道路からウシュバ峰を望む

ジョージア・コーカサスに行こう

私たちが学生の時代には、海外に渡航することは容易で

はなかった。持ち出し外貨の制限もあった。入国ビザも、登山許可も必要だった。資金集めに苦労して「海外登山遠征隊」が国を出られたら半分成功した、とまで言われたものである。私も半世紀前に、東京のソ連大使館に数ヶ月も通ったが、入国ビザを発行してもらえなかった。インド・ヒマラヤの登山を終えてから、ニューデリーのソ連大使館へ、ダメモトでモスクワ行きのビザを申請したところ、わずか数日で発行された。その時は、英語もロクに話せなかったはずである。その後、モスクワ行きのチケットを入手して、登山装備を抱えてモスクワに向かったのだが、若かったころの自分の行動力には驚くばかりである。

今や、ジョージアには簡単に行ける時代になった。日本語を話すガイドもいて、立派なホテルもあり安全に旅行することもできる。北のコーカサス山脈には、ヨーロッパ・アルプスよりも高い氷河を従えた秀峰がある。世界遺産の村の景観もすばらしい。ワインも食事もうまい。そして、食事の費用や滞在費はアルプス山麓の町の半分である。

若者には、挑むべき氷雪の岩稜が待っている。年老いた登山者には、すばらしい景観のトレッキング・トレイルがある。春の山麓は、高山植物の花であふれ、秋には、澄んだ空気の上に秀峰が輝くという。昔を知る人には、良い時

コラム⑤　ウシュバ峰への日本人挑戦者

帰国してからの9月のことである。北海道の知人が、「51年前のザックが氷河で発見された」、ウシュバの下で登山者が北大山岳部OBの古いザックを見つけたという北海道新聞の記事を送ってくれた。そのことについては、日本山岳会の「山」2019年12月号に、1968年にウシュバに挑戦した京極紘一氏の文章が掲載されている。とても興味のある記事なので、ぜひ読まれることをお勧めする。私は北海道新聞を読んで、私の身に起こった偶然とすれ違いに驚いた。私は今までジョージアでクベラーゼ氏に聞くまでは、実際にウシュバに挑んだ日本人がいたことを知らなかったのである。

私は、7月のジョージアの旅のわずか1週間前に、札幌で開催された北大山の会の総会に出席していた。そこで、多くの北海道の登山家にお目にかかり、肩を組んでの「山の四季」の合唱にも加わっていた。私が北大山岳館での会合に参加することになった長い経緯については、「山」2019年8月号に書いたばかりであった。

ソ連領に入国し、ましてウシュバ峰へ登ることは、昔の私たち以上に困難を極めた挑戦であったに違いない。情報の乏しい半世紀前にウシュバの岩壁に挑んだ北海道の若い2人と、RCCⅡの2人のクライマーには敬意を表したい。

代になったものだと思える。こう書いていると、また、ジョージアに行きたくなってきた。

筆者紹介

（よしかわ・まさゆき　会員番号７２３４。１９４９年、東京都生まれ。慶應義塾大学山岳部ＯＢ。元日本山岳会副会長、高尾の森づくりの会代表）

紀行

ダルコット峠、52年ぶりのヒンズー・クシュ

高橋善護（善数）

ダルコット峠とワハン谷

ダルコット峠はパキスタン北部のヒンズー・ラジ山脈にある標高４５７５ｍの峠である。今から１２００年余り昔の８世紀中頃、中国・唐の高仙芝将軍が１万の兵をもってパミールを越え、現アフガニスタンのワハン谷を平定した後、７０００の兵を連れてヒンズー・クシュ山脈のバローギル峠を越えてヤルフン川に入り、さらに南のダルコット峠を越え、カラコルムのヤシン、ギルギットの地を敵から奪い返したという歴史的な峠である。

高仙芝将軍によるダルコット峠越えは、紀元前２１８年のハンニバルによるアルプス山脈モン・ブランの南にあるプチ・サン・ベルナール峠（２１８８ｍ）越えや、１８００年５月のナポレオン将軍によるアルプス山脈のグラン・サン・ベルナール峠（２４６９ｍ）越え以上の、世界戦史上空前の７０００の兵による氷河に覆われた高い峠越え大作戦であった。高仙芝将軍は世界史年表にも載る「タラス川の戦い」に挑んだ大将軍だが、「ダルコット峠越え」こそ、世界史年表に載せてほしい輝かしい歴史なのである。

その前哨戦であったワハン谷は、アム・ダリヤ（ギリシャ語でオクサス川、中流域はパンジ川と呼ぶ）の源流域（アブ・イ・ワハン、ワハンの水の意）を中心とする、北はタジキスタンのパミールの山脈群、南はパキスタンのヒンズー・クシュ山脈、東は中国・崑崙の西山脈と３つの国の国境に挟まれた谷間で、昔から中国と中央アジア、ヨーロッ

パ、インドを結ぶ重要な交通路、いわゆる「シルクロード」の一路になっていて、６４３年に玄奘三蔵法師がインド仏教修行の帰りに、１２７３年にはマルコ・ポーロが元へ行く道筋にと、多くの旅人たちが行き交った長い歴史と高い山々が集まる大変興味深い地域である。

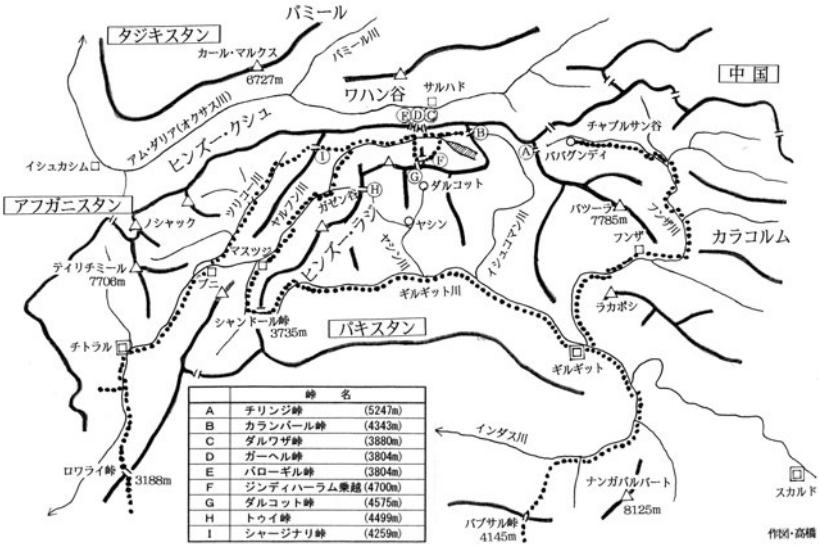
その谷間が、18～19世紀にかけてインド植民地を持つ大英帝国と、南下策をとるロシア帝国の二大勢力が激突を避けるため、両国間にある東西約３００㎞、南北15～65㎞余りの細長い谷間を緩衝地帯として帯状に設定されたのが、アフガニスタンのワハン谷、ワハン回廊（コリドー）である。

15年ぶりのトレッキング許可

昨年新春のパミール中央アジア研究会の帰りに、若い頃日本山岳会の高所登山委員会で共に活動した伊丹紹泰さんから「ワハンに行きませんか」と誘いを受けた。そんな歴史ある面白い所に行くのに否はなく、すぐ「行こう」と返事するしかない。しかし、本家本元のアフガニスタンのワハン谷は入域禁止地域なので、種々検討した結果、ワハン谷の南にあるパキスタン領カラコルム山脈からヒンズー・クシュ山脈の各峠を結び、できればワハン谷を覗こうと計画した。

日程はパートナーの仕事の都合で９～10月になるので、５０００ｍあるチリンジ峠の降雪を避けるため早い時期に越えようと、先にカラコルム・フンザから、アフガニスタン国境沿いに西へ並行し、チリンジ峠～カランバール峠～ヒンズー・クシュのバローギル峠（往復）～シャージナリ峠と４つの峠を越えながら、東部ヒンズー・クシュのツリコー川に下ってチトラルに出る道筋を選び、「パミール中央アジア研究会踏査隊」として８月29日に踏査申請書を出し、９月12日に許可を得た。

このルートはパキスタン政府をして15年ぶりのトレッキング許可証の発行とかで、私たちも期待に夢を膨らませ、９月16日にチリンジ峠（５２４７ｍ）に向かうべくチャプルサン渓谷に入ったが、ババグンディ・ジアラットにあるギルギット・バルチスタン軍管区の国境警備隊に通行を阻止されてしまった。パキスタン中央政府とフンザ地方政府の２つの行政府発行のトレッキング許可書をもってしても、軍の通行許可の壁は厚かった。この年のパキスタン大使館のレセプションでは、「パキスタンは安全になりました。ぜひ観光においでください」と大見得を切っていて、国境上に聳えるヒンズー・クシュ山脈のノシャック（７４



カラコルム～ヒンズー・クシュ踏査ルート図

92m）や、インドと国境紛争中のカラコルム山脈・シアチェン氷河を囲む山、ヒンズー・ラジ山脈のコーヨー・ゾムなど国境周辺の山に登山許可を出していたのに、政府許可と軍の国境警備の違いに問題が残った。

峠を越えるため、軍司令部と交渉していると時間を取られるので、チリンジ峠越えを諦め、次のカランバール峠に向かうことにする。山旅を依頼したジャスミン・ツアーがスカルドから呼んだ山岳ガイドと、コック、キッチンボーイ（ならぬオジサン）、ポーター2人の5人に運転手を含めた全8人のほか、個人装備と20日分のトレッキング装備・食糧など500kg以上ある重い荷物を屋根に載せた、トヨタ・ランドクルーザー・プラドの4WDでフンザ・アリアバードを発った。

ギルギット川支流のイシュコマン川（上流はカランバール川と名を変える）から、源頭のカランバール峠に直接行くルートもあるが、谷の途中に同じ軍管区の国境警備隊チェックポストがあるので、大回りになるがシャンドール峠（3735m）を越えて、ヤルフン川源頭に向かうことにした。チャーターした4WD積載過重車は、途中、オーバーヒートやパンクなどで何度も時間を取られ、真っ暗闇のシャンドール峠を越え、ヤルフン川中流の町マスツジに

着いたのは23時20分だった。

52年ぶりのヒンズー・クシュ

翌日、マスツジからヤルフン川の源頭を目指して車を走らせると、途中、正面の谷に見覚えのある大岩峰が聳えていた。１９６７年に私が日本人として初めて訪れたガゼン谷で、東京朝霧山岳会の海老原道夫さんと2人で「第2次ＲＣＣチトラル登山隊」を組み、トゥイ峠（４４９９ｍ）下にＢＣを設け、目標としたトゥイ・ゾム（６１５８ｍ）をうかがった。しかし、山の傾斜は若干緩いものの高度差２０００ｍもあり、アルプスのグランド・ジョラス北壁を彷彿させる大岩峰は、取り付く隙も見出せなかった。隣のブラッツヨース（６１９１ｍ）や西のジャン・テレック（６０２８ｍ）もまた巨大な岩壁群で、私たちは岩の城塞に囲まれていた。

当時、ヒンズー・ラジ山脈の詳細は判らず、南にあるシャーハン・ドク（６３２０ｍ、１９５７年京大隊が試登）のような白銀のピークを想像していたが、あにはからんやガゼン山群は手の付けられない大岩峰群であった。私たちが持参した50万分の1地図では、キャラバン1日で20㎞歩いても地図上ではわずか4㎝しか進まない。そんな地図を頼って、私たちは未知のガゼン谷・トゥイ峠の６０００ｍ峰に挑もうとしていた。

目をトゥイ峠の北に転じると、三角形の峻峰（６５２３ｍ、現トゥイⅡ峰）は谷を隔てていて論外としても、その南にあるカマロー・ゾム（６２５１ｍ）の急峻な南壁に可能性を探るため、トゥイ氷河から５４７５ｍ峰（プチ・ゾム）に登り、やっと登路を見つけアタックに向かったが、途中、突然パートナーが倒れてしまった。ホットスプリングと呼ぶ温かい泥沼に足を浸したため、虫に食われた傷口から黴菌が入り、足首が膿んで歩けなくなったのだ。抗生物質など高価な薬品を持ってこなかった小遠征隊の悲しさで、撤退するしかなかった。歩けないパートナーを担架に寝かせ、帰路のキャラバンでは、特に崖道に苦労し、急いでチトラルから飛行機に乗せペシャワールの病院に担ぎ込んだ。パートナーの傷口から膿の根を取ると足首の骨まで見えていた（『山岳』第63年、『岩と雪』11号参照）。

当時、チトラルからガゼン谷まで歩いて8日かかった道だが、今は大型４ＷＤの定期乗合車で1日で来られる。昨夜泊まったマスツジから途中のブレッブ村まで、昔は歩いて1日行程の道が、今では車で1時間だ。ガゼン谷手前のパウル村には水力発電所ができ、近在の村々に配電してい

ガーヘルから望むヒンズー・ラジのコーヨー・ゾム山群

る。発電所前にはホテル兼レストランもあって、半世紀のあまりの様変わりに驚きを禁じ得なかった。

私たちがアタックをかけたカマロー・ゾムは、翌年、学習院大隊により支峰のゴラッシュ・ゾム（６１４９ｍ）が登られてしまったが、主峰のカマロー・ゾムは未踏のまま残されていたので、次にヤルフン川をたどるときは馬を駆ってと52年間、何度再訪の夢を見たことか……。52年ぶりに再会した未登のガゼン谷大岩峰群に、若い頃の苦い記憶が想い起こされ、心が乱されてしまった。

この初めての海外登山の体験から、私は次に日本岳友会の青木敏さんと組んで、１９７１年、ネパール・ヒマラヤのマナスル西壁（北西稜）へ個人的な登山隊を作り挑むことにした。普段から極地法登山などしたこともない社会人山岳会登山者グループの、初めての８０００ｍ峰登山計画であり、それも飛ぶ鳥も止まらぬと言われたマナスル西面からのバリエーションへの挑戦であって、無謀な計画と嘲笑された。しかし、東京雲稜会の雨宮節さん（後に沖縄県山岳連盟会長）や、鵬翔山岳会の田中壮佶さん（後に日本山岳会群馬支部長）など優秀なクライマー諸氏が参加してくれ、30年ぶりの大雪とかで各遠征隊が中止撤退した後も、

なんとか頑張り抜き、一丸となって西壁の初登攀、マナスル第2登を成し遂げることができた。

マナスル西壁のベースキャンプ（BC＝3500m）は、ほかの8000m峰のBCよりも低く、頂上との高度差は4600mにも及んだ。その上氷河が悪くC1＝4500m、C2＝5500m、C3＝6500mと各キャンプ間の高度差が1000m（一般的には500mくらい）ごとの前進キャンプの展開を強いられ、71日間に及んだ長い登山期間中に60％を超える高い行動率だったので、隊員たちの登高距離は他登山隊の倍近くを登り下りした、体力、技術的にも限界の登山であった（日本山岳会編『高所登山研究』の「ヒマラヤ登山のタクティクス再考」参照）。

このマナスル西壁隊の系譜は、ダウラギリ・サウスピラーの初登攀になり、そして、イエティ同人の活躍に繋がっていくのである。私はこのマナスル西壁登攀隊の成功がなければ、社会人山岳会登山者グループの8000m峰登山は、5年は遅れただろうと自負している。

エーデルワイス咲くカランバール峠

ヤルフン川沿いに造られた車道は、今はバローギル峠下よりも奥のラシュカルガスまで通じているが、途中、車が泥濘にはまるやら、車の屋根に載せた荷物が橋にひっかかり、荷の積み直しをしたりと時間を取られてしまい、ヒンズー・クシュ核心部を通ったのは夜中になって、イシュカルワルズの国境警備隊チェックポストを通過したのは21時だった。ここチトラル軍管区の国境警備隊は、政府のトレッキング許可書を見せたら通行OKである。真っ暗闇の中で車は再びパンクし、困り果てた私たちを見て哀れに思った住民が、我が家に泊まれと誘ってくれ、民家に落ち着いたのは22時40分だった。

9月20日、朝起きて驚いた。眼前にヒンズー・ラジの大山脈が開け、最高峰のコーヨー・ゾム（6872m）やトゥイI峰（6660m、カロール・ゾム）などが並んでいる。家の後ろはアフガニスタン国境上にあるバローギル峠隣のガーヘル峠（3804m）だ。峠はここから距離1500m、高度差200mの1時間もかからない所にある。家のあるガーヘル集落（18戸、3620m）は、南斜面の大草原の中にあって、ヒンズー・クシュの核心部ボロゴル大草原と呼ぶに相応しい場所だった。泊めてもらったウルドゥー語が通じないワヒ人の家には、ソーラーパネルがあって蛍光灯やBSテレビが使える。外には水道があり、4WD車もあって、ヤク10頭、牛5頭、ヤギ、ヒツジ各15

ヤルフン川から見る、アフガニスタン国境にあるダルワザ峠方面

頭を飼う裕福な家だった。

世話になった家を発った車は、集落下の草原の道で再びスタック（泥濘にはまって止まる）。村人に応援を頼み、なんとか車は泥濘から抜け出して、ラシュカルガス先にある車道終点の、源流最奥のイシュワール集落（３６３０ｍ）に至った。ここは宮森常雄氏の『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』（通称・宮森地図）にあるシャワール手前にあり、10戸ほどの集落で、住民はイシュワール（イシャールとの間くらいか）と発音していた。連日、深夜残業が多かった1週間の車旅から解放され、テントを張ってやっと落ち着いた。乗ってきた車は、この先もチャーターすることにしてイシュワールに待機させる。

翌9月21日、待望の山旅が始まった。私たち一行7人のほか、イシュワールで雇った馬2頭（馬方つき）で、カラコルム山脈とヒンズー・クシュ山脈との分境であるカランバール峠（４３４３ｍ、現地ではコロンバル峠と呼ぶ）に行く。カラコルム冬期登山やガッシャブルムⅡ峰シルバータートル隊に参加した山岳ガイドのアクバルにとっては、初めてのヒンズー・クシュ・ガイドであり、私も最近、中米縦断や南米大陸縦断など独り旅が多かったので、久しぶりの大人数山行が嬉しかった。

カランバール峠へは、ヤルフン川源頭チャンタール氷河の北にあるリバット・バールの広大な草原を進む。所々バイクの轍が見え、草原の峠はバイクで行ける世界になりつつある。

夏ならば高山植物が咲き乱れている草原で、枯れたお花畑の中に残されたエーデルワイスの群落を見つけた。峠では、大昔の線画が刻まれた大岩も見た。周りを氷河にまとわれ、５０００ｍの未踏峰に囲まれたカランバール川源頭のカランバール湖（ゾー・エ・サール）畔に、気持ち良いキャンプを張った。張り切って2日行程の所を9時間で歩いてきたので、久々に心地よい疲れを感じた。

翌日、私たちは馬に乗って湖を一周し、3日目、小川に薄氷が張る寒い朝、白銀に光るコーヨー・ゾム連山を望みながらイシュワールに戻った。途中、馬に乗ったニュージーランド人とすれ違う。1人バイクでラシュカルガスまで来て、馬を借りてカランバール峠を往復すると言っていた。ヒンズー・クシュの最奥部も気軽に来られる所になってきた。

ダルコット峠の一周

次いでチリンジ峠越えの雪辱として、ダルコット峠（4575ｍ）へ行くことにする。歴史的に著名な峠で、ここまで来て見逃す手はない。私たちは時間が余ったら500ｍ峰でも登ろうと、氷河登山用装備を持ってきたので氷河のある峠でもＯＫだ。峠から北東に流れるジンディハーラム谷を登ってダルコット峠に立ち、北西に流れるダルコット谷を下ってヤルフン川に下りる、1泊2日の一周コースとする。私はこのダルコット峠から流れる2つの谷の地形的不思議さに、１９７０年の日本ヒンズー・クシュ会議設立当時から関心を持っていた。今回、カランバール峠への往復の道々、ジンディハーラム谷の入り口を詳しく見ていたが、上部にあるダルコット峠付近がどうなっているのか判らなかった。

私たちに同行するのは、ガイド、ポーター4人のほか地元の馬2頭である。馬方の1人は10年前にジンディハーラム谷を登ったことがあるが、もう1人の馬方は初めての入谷で、ヤルフン川沿いに自動車道路が発達すると、峠なぞ越える必要もなくなり、峠道が廃れていくのがよく判る。

9月25日、私たちはイシュワール集落前のヤルフン川の川幅１００～２００ｍはある広大な河原に出て、徒渉可能地点を探しながら膝上くらいの深さの川を渡る。川水は氷河が溶けた水で大変冷たく、私たちサーブは馬に乗って

ヤルフン川最奥部リバット・バールを下る。左の逆三角の氷河はジンディハーラム乗越

ジンディハーラム谷二股を登る。右股、左股とも先は見えない

渡った。

ジンディハーラム谷の出合には、20～30ｍほど深く刻まれたゴルジュが喰い込んでいて左岸を進む。谷は右回りになって奥が見通せないが、登るにつれゴルジュ帯も消えて開けてきた。宮森地図では谷の上部で左右に分かれるＹ字氷河に描かれているが、氷河の後退が激しい現在、二股上でそれぞれ別の氷河に分かれている。馬の飼葉が取れる二股下の草むら（３８７０ｍ）で早々にキャンプを張った。

翌朝早く、ジンディハーラム谷右股に入り、氷河末端右端から氷河に上がる。傾斜の緩い氷河はアイスフォールやクレバスもなく、テーブルストーンがいくつも見える。途中、昼食を済ませ、氷河を登りつめていくと馬蹄形の大雪原になる。私たちは地図を見、先人の記録通り大雪原右側の雪稜にあるジンディハーラム・パスを目指した。手持ち地図にはパス名称はないが、後で買い求めたトレッキング・ガイドブックには「ジンディハーラム・パス（４６２０ｍ）」と書いてあった。

ジンディハーラム・パス（峠というより乗越）に立つと、ダルコット氷河上部の大雪原が目前に広がり、左の２つの岩峰の間に雪原が開いていて、そこがダルコット峠と判った。乗越から見ると、ジンディハーラム大雪原とダルコット大雪原は一つの続いた大雪原に見えそうだが、ジンディハーラム乗越の標高は高度計で４７００ｍ。ダルコット峠は高度計で４５７０ｍ（地図４５７５ｍ）だったから、乗越から１２０～１３０ｍ下にある。ダルコット大雪原の上にはチカール・ゾム（６１１０ｍ）が聳え、南のダルコット峠越しにガンバール・ゾム（６５１８ｍ）が見えるも、西のトゥイ・ゾム方向は雲に覆われて見ることはできなかった。

全員で記念撮影後、ポーターと馬方たちはヤルフン川目がけ、ダルコット谷へ一直線に向かったが、私たちはダルコット峠へ寄り道しようと雪面を左へ下っていった。平らな峠の雪原から南のヤシン谷に少し下ってみたが、急峻な坂と言われる下の谷間を覗けず、水が南に流れているのを確認して戻った。

ポーターに遅れること1時間、私たちも眼下のヤルフン川目指してダルコット氷河を真っ直ぐに下っていった。こちらの氷河もアイスフォールやクレバスがほとんどなく、雪原台地下が少し急になるがノーアイゼンで下れ、チカール・ゾム下で再び氷河の傾斜が緩くなってどんどん下る。大分下ると右岸にサイドモレーンが出てきて、先行した馬が登っている。氷河から50ｍほどの高さのサイドモレーン

上へ踏み跡をたどると、モレーン稜頂に山道があった。氷河の後退が激しいとはいえ、大昔の氷河は今より50mも厚みがあったと想像できる。

稜頂の山道から眺めると、谷の下流は緩く右カーブし、氷河は割れてクレバスが出てきた。ヤルフン川出合近くでダルコット谷は西のチャティボイ氷河と合流するが、山道はサイドモレーンから右岸のヤルフン川とダルコット谷とに挟まれた大きな三角形台地（ラキン支脈の台地）への道になり、薄暗くなった頃、チカール集落（３６９０ｍ）に着いた。

国境のバローギル峠は不可

翌日、馬に揺られラキン台地北にあるイシュカルワルズ（３６７０ｍ）の陸軍駐屯地へ向かう。軍砦には「１４４軍団　チトラル・スカウト　ボロゴル・ポスト」と書いてあり、60人ほどの兵士が駐屯している。私たちは３つ目の峠訪問としてアフガニスタン国境にあるバローギル峠（３８０４ｍ、現地ではボロゴル峠と呼ぶ）を訪れたく、国境警備隊へ峠訪問を打診した。峠は国境稜線上にあるため、最初から踏査申請書に書き入れず、現地交渉の予定だった。ガイドは80％くらいＯＫが出るだろうと言っていたが、チトラル軍管区の国境警備隊はすぐに判断を下せず、マスツジの上級部隊に問い合わせした結果、峠往復は許されなかった。

目前にあるバローギル峠などの国境稜線上にある峠には監視カメラがあり、兵隊も常駐していると村人が言うのも本当だろう。砦の塔の窓には、峠に向けた機関銃口が見える。パキスタンは安全宣言を出したものの、国境には監視の目を光らせ、不法侵入者に備えている証であった。ワハン谷が覗けず残念だが、国境峠の訪問は不可となったので、待たせた車に乗り込み次の峠に向かった。

シャージナリ峠を越えて

ヤルフン川のラシト村下流のヤシュキスト村（３２１０ｍ）から、シル谷右股をたどってシャージナリ峠（４２５９ｍ）へ登る。登るにつれヤルフン川対岸のカマロー・ゾムがよく見え、何枚も写真を撮った。半世紀前に登り損ねたとはいえ、未踏のピークにまだ未練が断ち切れずにいる自分に苦笑してしまった。

シャージナリ峠は長さ2kmもあるという広大な草原の峠で、どこが峠の最高点かよく判らない。東部ヒンズー・クシュの高峰群が見えるのでは、と期待して登ってきたのだ

が、雲が出て隠れて見えない。10月を前に、晴天続きだった季節が変わってきたようだ。

広い峠台地で1泊した後、シャージナリ谷を下るが、道が行き止りになってしまい、対岸に渡る不安定な木橋まで戻って石小屋で泊まった。地名が判らないので、ヤシュキスト村で雇った地元の若いポーターたちに尋ねても、彼らも峠を越えるのは初めてなので、道も地名も知らなかった。木橋の位置は私たちが持参した宮森地図と違うようだ。

イスラマバードに戻って買い求めた『パキスタン北部のカラコルムとヒンズー・クシュ　トレッキング・ガイド』と、横須賀山岳会の石川誠さんが贈ってくれた『カラコルムとヒンズー・クシュ　トレッキング』の2冊のガイドブックと宮森地図とでは、シャージナリ谷の概念図の地名、位置、標高が三者三様に違っていて、利用に際しては注意したい。

シャージナリ谷のリッチ・ツリコー川出合近くで、山から転げた落ちた大岩が重なってできた自然の大岩橋を渡った。この橋は1935年に峠を越えた探検家レジナルド・ショーンバーグが、『異教徒と氷河――チトラール紀行』（雁部貞夫訳）に書いている橋で、よくもまあ融雪期の大水に84年以上も流されずに残っていた。

84年前、探検家ショーバーグが見た大岩橋

ルア村上流の橋に、ヤルフン川で別れた車が迎えに来ていた。もう歩かないで済む。9月21日のカランバール峠行きから今日、10月1日までの11日間に28万6000歩も歩いていた。1日平均2万6000歩である。車でブニに行く。ブニはバザールもあってマスツジより大きな町になっていた。チームは解散し、翌2日、私たちはチトラルに出て山旅を終えた。

今回のヒンズー・クシュ再訪は、ワハン谷は覗けなかっ

たものの、よきパートナーに恵まれたおかげで、４０００ｍの多彩な峠越えが楽しめ、スタインやショーンバークなど偉大な探検家の足跡も実体験でき、いつの間にか１２７０年も前のシルクロードの歴史に浸ることができた、収穫多き山旅であった。

52年前のヒンズー・クシュは探検的登山が多かったが、今はトレッキング・システムが整っていないものの、バローギル、カランバール、ダルコットの3峠を集めたボロゴル地域に直接車で入れるので、周りの5～６０００ｍの峻峰や岩峰は、アルプス並みの面白くて困難な登山が期待できる。ヒンズー・クシュの半世紀は確実に変化していて、車道が通じ、電気が引かれ、水道ができ、公共交通機関（乗合自動車）が毎日運行され、ホテルやゲストハウスが少しずつできていた。通信設備が完備すれば、ヒンズー・クシュの山々と歴史ある峠は、近くて魅力的な山岳観光地として再び脚光を浴び、人気を集めるに違いない。

ダルコット峠（担駒嶺）の解明

高仙芝将軍の電撃戦

話をダルコット峠に戻そう。

日本では奈良の大仏を作り始めた７４７年、息子の妃だった絶世の美女・楊玉環を、皇后に次ぐ貴妃に直し愛した唐の玄宗皇帝は、吐蕃（チベット）勢力に支配されたカシミールの小勃律国（ヤシンとギルギット）とワハン谷の奪還の任を、安西副都護の高仙芝将軍に命じた。

高仙芝将軍のことは、深田久弥の『中央アジア探検史』「高仙芝」の章に詳しく書かれているので簡略に述べておく。皇帝の命を受けた高仙芝将軍は、歩騎あわせて1万の兵を連れてクチャから天山南路を通ってパミールを越え、7月13日、ワハン谷の連雲（現サルハド）に集結した。敵１０００人が守る連雲堡はサルハドの対岸にあり、バローギル峠入り口の谷にも９０００人ほどが籠る柵があって、高仙芝将軍は優秀な騎兵でオクサス川を渡河させ攻めた。昼に至るまで敵５０００人を殺し、１０００人余を捕虜、ほかの者を遁走させる大勝利であった。

ワハン谷を敵の手から奪還した後、高仙芝将軍は連雲堡に３０００の兵を残し、７０００の兵を連れて、ワハン谷から〈仙芝遂ニ進ムコト三日、担駒嶺ニ至ル〉となる。バローギル峠越えに1日、ダルコット峠へ2日だろうか。素早い電撃戦である。

担駒嶺、現ダルコット峠は常に雪に覆われ、峠南側は〈直

下哨峻、四十余里〉あって、将兵がその急坂に怖気を催しているので、高仙芝将軍はこっそり20騎を先にやり、「お前たちは敵の軍使に変装して登ってこい。そして、阿弩越（今のヤシン）の者は喜んであなた方をお待ちしています。娑夷河（現ギルギット川）に架かる藤蔓の橋は全部断ち切って、味方の応援軍が来られないようにしてありますと言え」と偽軍使を装うよう命じた。この偽軍使の言を聞いた将兵たちはダルコット峠から南へ馳せ下り、3日進むと不意を突かれたヤシンの町の者が途中まで出てきて降参を申し出た。将軍は１０００の騎兵を先発させ、小勃律国の首領たちを取り押さえ、吐蕃に協力していた首領たちの首を切り、〈天宝六載（７４７年）8月、仙芝ハ勃律王及ビ公主（注：妃）ヲ虜トシテ〉帰途についた。

どちらの谷を登ったのか

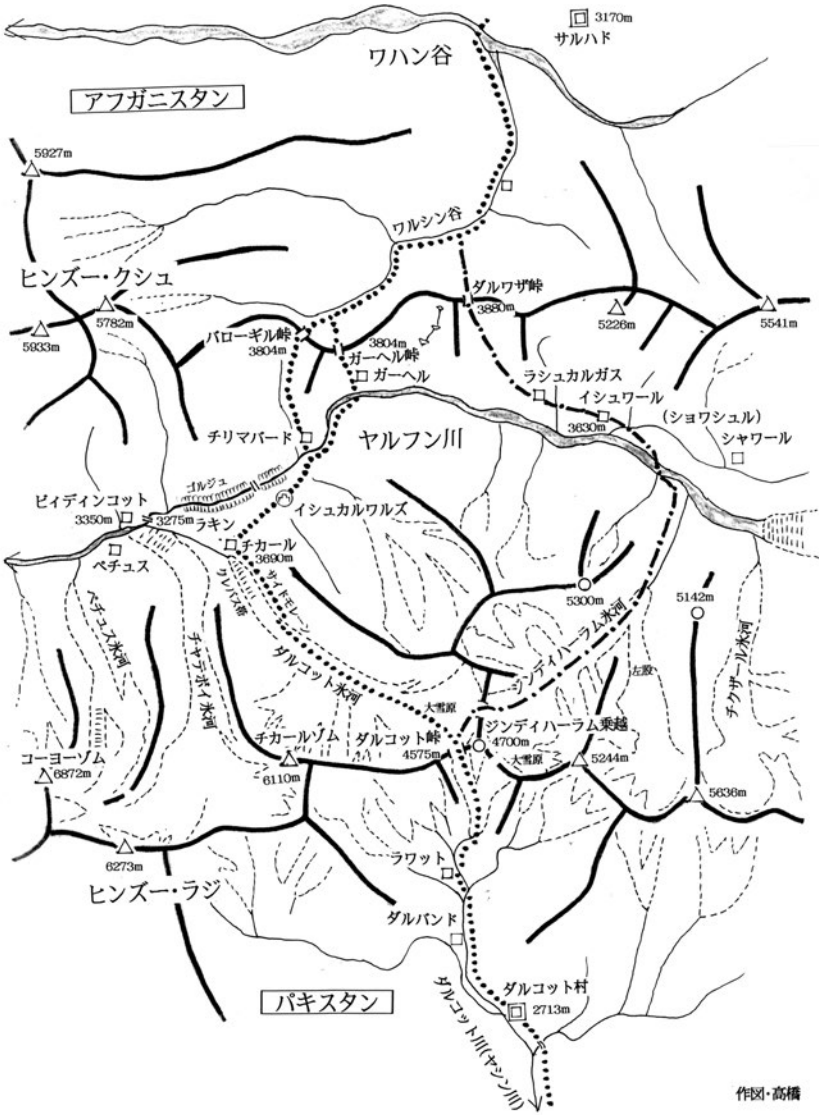
高仙芝軍はワハン谷からバローギル峠（３８０４ｍ）を越えたとあるが、７０００もの軍勢である。白髪三千丈の国の話だから、話半分としても最低3～４０００の兵馬はいたであろう。バローギル峠だけでなく、同じ谷にあるガーヘル峠（３８０４ｍ）やダルワザ峠（３８８０ｍ）も越えたことは言をまたない。峠からヤルフン川に２００ｍも下るとボロゴルの大草原なので、軍馬の飼葉も十分にあって、当然ここで1泊である。

次は南のヤシンに直接行く唯一の道がダルコット峠（４５７５ｍ）越えだが、峠に登ったのは峠から北東に流れるジンディハーラム谷からなのか、あるいは古くからの道である北西に流れるダルコット谷からなのか、どちらの谷を登ったのか議論がある。

深田久弥は『ヒマラヤの高峰』の「コヨ・ゾム」の章に、この遠征軍のルートを20世紀の初期に2回調査した中央アジア探検家のオーレル・スタインが、「いろいろ考証の末、高仙芝の軍隊はその前者（注：ジンディハーラム谷）によって峠へ登ったとしている」と書いている。そして、ダルコット峠に向かった日本人は皆、〝スタイン説〟を信じ、報告書に書いた。

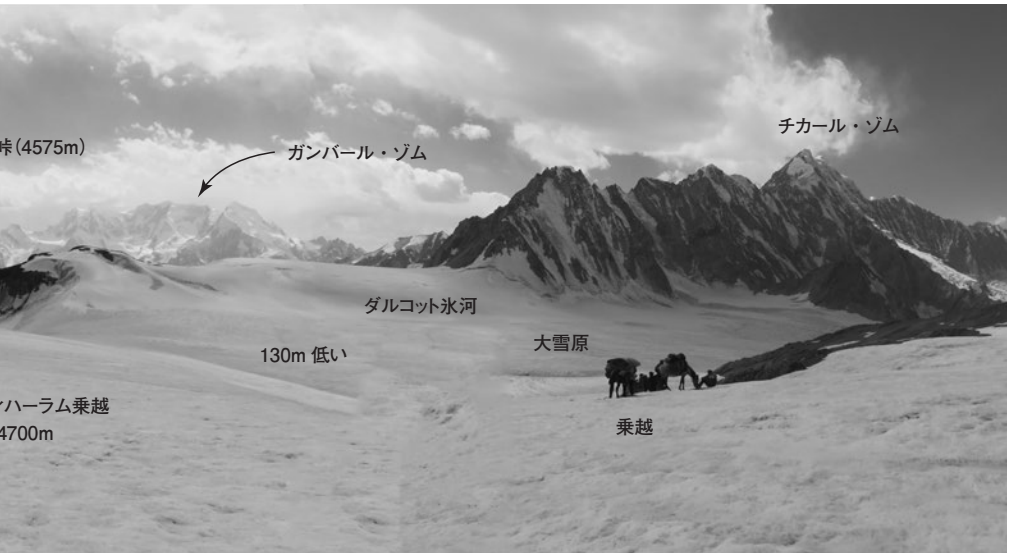
ダルコット峠の2つの谷

ダルコット峠は、峠向こうのヤシン谷にあるダルコット村（２７１３ｍ）へ行くために、ダルコット峠、ダルコット谷と名づけられたのである。高仙芝将軍が越えた１２７０年前よりもっと古くから、ダルコット峠と谷はシルクロードの一路として皆に知られ、人馬が行き交った道だっ



ワハン谷～ダルコット峠。高仙芝軍の進軍ルート

サイドモレーン上から望むダルコット氷河。大雪原の先にダルコット峠がある



た。

ダルコット谷をヤルフン川出合（３２７５ｍ）から登る場合、チャティボイ氷河脇にある谷の出合から直に谷に入らず、右岸のラキン支脈台地のチカール（３６９０ｍ）へ登り、谷氷河下流は割れているので、右岸のサイドモレーンの上を歩き、モレーンが消えると氷河に下りていく。上部氷河の傾斜は緩く、大きなクレバスもなく、馬やヤクでも登りやすい。氷河は一直線に流れているので迷いようもなく、大雪原下の少し傾斜のある雪面を登ると、前方の門柱のような２つの岩峰の間に雪原が開いていて、南へ下るダルコット峠と判る。このダルコット氷河はラキン台地からは見えないものの、サイドモレーン上からは氷河全体を見通せ、指揮官にとって部隊を把握しやすい登路である。

それに比べ、ジンディハーラム谷は二股に分かれ、左股は上部が判らない。登路の右股は右に回っていて氷河上に登ってやっと先が見える。この谷にはサイドモレーンが見えないので、太古の昔は谷一面に氷河が広がっていたのだろう。緩い傾斜の右股氷河を登って最上部の馬蹄形の大雪原に入るが、どこを越えればダルコット峠に行けるのか判らない。私たち現代人は、先人の資料によって大雪原右の50～１００ｍほど高い雪稜のジンディハーラム乗越に登っ

ジンディハーラム乗越から見た西氷河の大雪原とダルコット峠

て、130m下にあるダルコット峠を見て下るという複雑なルートなので、地元民に案内させたとしても、まずは斥候を出し谷全体の偵察をしてからでないと、大軍勢を引き連れてこの谷には入れないだろう。

この2つの谷は、スタイン（深田久弥）の説明では、ダルコット峠から北東と北西の2つの方向に分かれて流れている氷河と思われるが、両谷氷河は高さ50～130mあるジンディハーラム乗越で隔てられた、別々の大雪原を源頭とするヤルフン川に流れる氷河の谷なのである。

私は今回、ジンディハーラム谷からダルコット峠に下り立ち、ダルコット氷河を下っていくにつれ、長年の疑問であった、「なんでまた高仙芝は古くから使われているダルコット谷を登らずに、ジンディハーラム谷を登ったのか」との違和感が沸いて仕方なかった。どうにも腑に落ちないのだ。

初めて聞くスタイン考証秘話

私は帰国後、スタインがどのような理由で「高仙芝はジンディハーラム谷を登った」と決めたのか詳しく知りたくて、彼の『中央アジア踏査記』（澤崎順之助訳、新装版）を読むと、第2章に「この記念すべきシナ人の大事業の顛末についてはつぎの3章と22章で述べるとことにするが……」と書いているものの、本は第21章で終わり、第22章がない。

パミール中央アジア研究会の本多海太郎事務局長から、『中央アジア踏査記』の解説（深田久弥）には全訳と書いてあり、旧版（1966年）にも第22章はない。1941年刊の大陸叢書版（朝日新聞刊）も21章までで、尻切れトンボのように終わっている、と教わった。

スタイン研究家の井手マヤさん（パミール中央アジア研究会会員）に、スタインがどのように考証したのか調べていただいた。

スタインはその2回の探検行を『セリンディア』と『インナーモースト　アジア』（共に英文）の2冊に著している。1回目の調査は1906年5月17日のことで、スタインは深雪の中、ヤルフン川からダルコット谷を登り、

〈早春で天気が不安定であったこと、積雪が例年よりもはるかに多かったことにより、峠までの登りは予想に反してひどく難渋した〉

下れなかったジンディハーラム谷については、

〈果たしてもう一方の北東方面の氷河の方がより容易に下れるのか。現状果たしてそうなのかどうかについては述べ

る立場にはない〉と言いつつ、

〈1895年に英露の国境を画定するためにパミールに派遣された国境査定委員会の一団は重い荷物を背負った600頭ものポニーを引き連れてギルギット（からパミール）を往復した際、後者の峠を超えている（注：ジンディハーラム谷からシャウイタック峠、現ダルワザ峠）。（略）荷物を背負った動物を連れた軍隊が、オクサス川からダルコット峠へ進軍するには後者のルートの方が現実的である。その理由はダルコット峠にもっとも近い宿営地はショワシュル（注：ヤルフン川のシャワール近辺か）へのルート上にあり、ラキン支脈（台地）のルート（注：ダルコット谷）を取った場合と比較して、峠までの距離（注：登高する高さ）は1万3000フィート（400m）ほど少ないからだ。このことを考えると、おそらく高仙芝はショワシュル・ルートを経由した可能性がある（訳：井手マヤ、以下〈　〉内は同じ）

と、『セリンディア』に書いている。

2回目の調査は1913年8月末で、スタインは南面ヤシン側からダルコット峠に登り、峠でチトラル警備軍のスターリング大尉と会い、下る予定のジンディハーラム氷河は、3年前からその舌端が岩石に塞がれていて（ベルクシュルント）通行不能と知り、ダルコット谷を下った。その報告を『インナーモースト　アジア』に、

〈私は、渋々残念ながらも1906年の訪問ですでに知っていた北西部の氷河（ダルコット氷河）を下山することになり、季節が遅かったこともあり、雪崩の心配はなかったが、クレバスや巨大なモレーンなどが旅人の前に立ちはだかる現状を鑑み、荷物を積んだ動物を引き連れた軍隊が、この氷河を遡ることは全くあり得ないと結論づけることができる。私は難所を越え、なんとかビィディンコットのキャンプ場を通り過ぎて、ようやく日暮れにはバローギル峠の下にあるチラマバートの放牧地に到着した〉

と書いて、クレバス帯に入ったためダルコット谷は不可と結論づけている。これは初めて聞く話だ。100年前に英文で書かれた報告を今知るなんて、皮肉な話である。これで長年の疑問が解け、両谷を歩いた時の違和感が解けた。

高仙芝軍はダルコット谷を進んだ

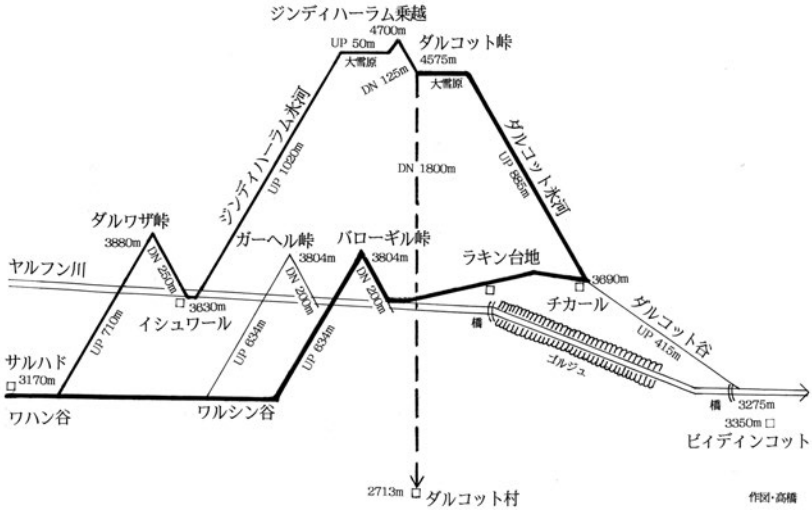
スタインは2回目の調査の時、ダルコット氷河を下り（多分、南のヤシン側で雇ったポーターたちがダルコット谷のサイドモレーンの道を知らず）、谷を真っ直ぐに下ったため、下流のクレバス帯にはまり込み、苦労してダルコット

谷出合のビィディンコットまで４００ｍも下り，再びチラマバードまで４００ｍ登り返している。下山ルートを間違えたため、「この氷河を遡ることは全くあり得ない」と全否定し、足を踏み入れたことのない谷を「国境査定委員会が往復に使った通路」だから高仙芝軍も通ったと断定している。また、ダルコット谷ルートの方がジンディハーラム谷ルートより４００ｍ高く登るとスタインが言うのは、うがった見方だが、ヤルフン川の出合からラキン台地までの高さ４００ｍをプラスしたのではないだろうか（登降略図参照）。

偉大なる中央アジア探検家スタインの調査行には最大の敬意を表するが、もしあの時、ダルコット谷の皆が通る道筋をたどったとしたら、どう考証したのだろうか。ダルコット谷はシルクロードの一路として大昔から皆に知られている道だ。スタインが行った時だけ人馬が通行不能の暴れ谷だったはずはない。１２７０年前の高仙芝の時と、１００年前のスタインの時と、そして現在とでは氷河状況は違っているものの、地形はそれほど変わってはいまい。

８世紀中頃の中国・唐軍が朝貢国である小勃律国（ヤシン）の、高い峠の２つの氷河谷のことをよく知っていたとは思えない。ワハン谷から遁走した敵兵が、ヤシンに注進

サイドモレーンから見たダルコット氷河のクレバス帯。右上はチカール・ゾム



ワハン谷～ダルコット峠の登降略図

に及ぶより早く、先に高みを占拠するのは、古今変わりない戦術上の常識である。天王山の取り合いで、面倒な谷を登って時間を費やす暇はない。

電撃戦を得意とする高仙芝軍はワハン谷からヤルフン川に進出した翌日、捕虜にした敵兵、あるいは地元民を道案内とし、古くから使われているラキン台地のチカール経由の道に物見（斥候・偵察隊）を出し、ダルコット谷・峠を窺い、道筋を確認し、翌々日（ワハンから3日目）ダルコット峠に立った。その時、峠上で（多分前日に先行させた）偽軍使と会見し、勇躍本隊はダルコット峠から攻め下って行ったのだろうと想像できる。ラキン台地のチカールから峠までの高度差は９００ｍであり、3～5時間ほどで登れるのだ。

「進ムコト三日、担駒嶺ニ至ル」と書かれた旧唐書、2つの谷の現実、常識的な戦術的見地から、昔から皆が使っているダルコット谷を高仙芝軍は進んだ、としか考えられなかった。

ダルコット峠に立った日本人

歴史あるダルコット峠に立った日本人は、9パーティあり、そのうち峠の北に流れる2つの谷を登った日本人は、

ヒンズー・クシュの先達・雁部貞夫さんとワハン谷の先達・平位剛さんの2人である。しかし、お2人とも長い間を隔てて登っているので、両谷を比較した違和感は持たなかったようだ。

平位剛さんは『禁断のアフガーニスターン・パミール紀行』に「スタインは、（略）東のズィンディハラム（シャウイタッフ）峠と西のダルコット氷河経由の二つを考えている。そして東のルートを本隊、西のルートを諜報隊？（注：偽軍使）が進んだ、と述べている」と書いた。その原資料『ザ・ジオグラフィカル・ジャーナル　59号(2)　1922年』にあたると、〈高仙芝軍の本隊はジンディハーラム谷を登っているので、偽軍使隊は本隊から身を隠す必要があって、本隊と出会わないようダルコット氷河を登らせた〉と、スタインが「推測して書いている」と、井手マヤさんが教えてくれた。このことは、スタインがダルコット谷を否定した考証理由と、偽軍使隊が本隊より先行できるからとダルコット谷を登高させたとする推測理由の2つの論は矛盾し、牽強付会ではないだろうか。

私は幸か不幸か、2つの谷を同時に登り下りしたため、否応もなく両谷の特徴が比較でき、ジンディハーラム谷を登ったとする〝スタイン説〟には、どうにも腑に落ちない大きな違和感を覚えてしまった。そのため帰国後、いろいろな資料にあたると、今まで知らなかった事実があり、私なりの「ダルコット峠越え」の顛末を見極めることができた。

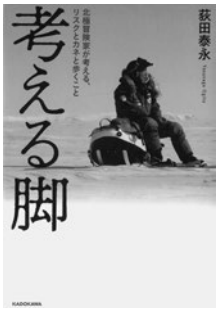
それが正しいかどうかは、高仙芝将軍だけが知っている。故に私は、「高仙芝将軍は、皆が使っているダルコット谷を登って、ダルコット峠を越えた」という至極当たり前な説を、記しておきたい。

2019年　パミール中央アジア研究会
カラコルム～ヒンズー・クシュ踏査隊

髙橋善護（善数）［日本山岳会、東京岳人倶楽部ＯＢ会］
伊丹紹泰　［日本山岳会、明学山岳会（明治学院大学山岳部ＯＢ会）］

図書紹介

荻田泰永 著
『考える脚』



KADOKAWA
2019年3月刊
四六判　316ページ
1500円＋税

極地という世界は、厳しい環境下の雪と氷と岩の世界にもかかわらず、その場所へまた戻りたくなる、いわば一種の麻薬のような要素を持つ世界である。著者もその魔力にとりつかれた1人であろう。著者荻田泰永氏は、北極へは18年間で15回もの遠征を行ない「北極男」とも呼ばれてきた。その「北極男」が、2017年から2018年にかけては、新たな未知なる場所を求めて南極大陸へと赴き、日本人初の南極点単独無補給徒歩到達の快挙を成し遂げ、この成功により、北極と南極の両極の世界を語ることのできる「極地冒険家」として、世界に知られる存在となった。その荻田氏の著作『考える脚』は、北極点無補給単独徒歩到達への挑戦、カナダからグリーンランドへの単独行、南極点への無補給単独徒歩到達の三大冒険録であり、第9回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受賞して、探検・冒険文学の世界でも1つの金字塔を打ち立てた。

探検・冒険の書の多くはその著者の遠征の記録本のわけだが、本書は、現代の冒険の持つ意味と、冒険の先に見えてくるものが、著者の「冒険の旅」の体験を通して書かれている。私も著者と同じように、かつては極地を旅した人間だが、冒険とは「自由の本質」を求めて、日常では感じることのできない、「生」と「死」の狭間を実感し、自分の命、生きる喜びと生きる感謝を確認する、自身の「魂の洗濯」のようなものと捉えてきた。

一般的に人は自由を求めてさまざまな欲望を持つが、そこには常になんらかの制限が加わる。例えば自由に何かをやりたいが、資金がない。自由に遊びたいが、時間がないといった具合に、制限があるがゆえに不自由を感じることは多々ある。日々の管理社会に生きることの「制限」から解放されたとき、人は「自由」だと感じるのだろうが、本書は、著者自身の「自由の本質」を知るための「冒険の旅」について書かれた冒険記であり、普通の若者だった著者が就職することなく、その若い満ち溢れるエネルギーを、冒険の世界への憧れに昇華させ、その憧れが

著者の「冒険の旅」へつながっていったという青春記でもある。また、本書では、過去の探検の歴史も書き添えられ、その中での著者の冒険論も論じられており、冒険の中における、究極の自由、自由とは何なのかを、著者自らが自分の「脚」から学び、悟っていった過程をうかがい知ることができる一冊となっている。

では、本書の中で私が印象に残った箇所をいくつか紹介してみよう。北極と南極において、1万km以上もの距離を、重い荷物を引っ張って単独無補給踏破した彼の体力と精神力は並外れていることは言うまでもないが、そのような猛者でも、2度目の北極点単独無補給徒歩到達のスタートの際「恐怖感に身を任せて泣けるだけ泣いた」というのがとても意外だった。でも、その涙は、人間世界から隔絶された逃げ場のない北極海を眼の前にして「感情の恐怖」の中で流した涙とのこと。ひとしきり泣いた後は、感情的ではなく「客観性に基づく恐怖」として自分に落とし込み、冷静なスタートを切ったそうだ。北極海の圧倒的な迫力、極北の自然の猛威の中での冷静沈着なる行動は、武士の真剣勝負の時のように、五感が研ぎ澄まされて、心技体が一体となり初めて一歩が出るのと同じことではないかと感じた。恐怖を客観視できることは、厳しい極地の世界に入っていく冒険者の適応性にも通じることであり、魂をいかにピュアにできるかが、さまざまな状況判断を左右するのだと思う。

北極点への2度目の挑戦は、困難を極め、結局は撤退を余儀なくされるわけだが、たとえ運良くギリギリの状態で到達成功となっても、それは成功ではないとする。それが著者の美学であり、実力に相応した余裕ある成功でこそ本当の成功、という下りは共感できた。私も南極大陸６４００kmを犬ぞりとスキーで横断した際に、植村直己夫人から「植村が北極圏1万２０００kmを犬ぞりで走破した時には、彼は余力を残して笑顔でゴールしたから、あなたもそうしなさいよ」というメッセージをいただいたのだが、南極横断のゴールを眼の前にして、疲労が重なり苦しい時だっただけに、精神状態をリラックスさせてくれた、ありがたいものであった。

冒険には、主体性が必要なのと、生命の危険が付きまとうのが常である。生きて帰るためには、冒険者の心と体はリラックスして力が抜けてこそ、自然に同化し、その声を聞ける本当の「力」が出ると考える。余力を残しての余裕あるゴールでこそ、本当のゴールなのであろう。

私が本書の中でとても力が抜けて、心地よく読めたのが、著者のカナダからグリーンランドまでの冒険行だった。新たな目標としてのエルズミア島のグリス・フィヨルドから、スミス海峡を渡ってのグリーンランド・シオラパルクまでを歩く旅は、死の危険を伴う、ハードな「冒険の旅」である。私はアラスカ

に22年間住んできて、著者の「冒険の旅」ほどではないが、アラスカ北極圏での冬の犬ぞりや、夏の徒歩、カヌーによるウィルダネス踏破という形で「冒険の旅」を体験してきた。アラスカ・ウィルダネスも一歩間違えば「死」に直面するリスクが絶えずつきまとうが、地球の本来の自然の姿、美しさ、自分の命の存在を実感するには、自分の意思で命の危険を覚悟した上で、ウィルダネスの中に一歩踏み込まなければならない。一歩踏み込んでしまえば、あとは道なき道を、自然と対話しながらの「自由な旅」が始まるわけで、そこには、管理された日常からも離れて、地球の姿、自分本来の姿を実感できる「自由な旅」が存在する。著者のカナダからグリーンランドの旅も、極北のウィルダネスの中をエンジョイする気持ちをうかがい知ることができて、読んでいて、ストーリーの中に引き込まれている自分がいた。スミス海峡を単独で横断し、グリーンランドへ渡る旅は、とてつもない勇気と実力、経験が必要な冒険行だが、それなのに著者の、目的を意識しすぎることなく、力の抜けた気負いのなさを感じ、こちらも楽しく読むことができた。「歩くということは憧れること。そこに行かなければ出合うことのできないものに出合うために、私は歩いていくのだ。」という中に著者の「旅」をエンジョイしている姿を見て取れた。

最後の南極点単独無補給は、季節的にもルート的にも北極海に比べて遥かに簡単だったようだが、北極海は、ボクシングのヘビー級のマイク・タイソン、南極大陸は、バンタム級の日本ランキング10位ぐらい、という差の表現の仕方は、ユニークでわかりやすい。私も30年前にパトリオット・ヒルズから南極点までは、著者とほぼ同じルートを犬ぞりとスキーで走破したが、南極内陸は大陸高気圧圏内に入り、太陽は沈むことなく夜はなく、テントの中の温度も上がり、湿気もない。吹雪く時もあるが、絶えず動く北極海の海氷上と異なり、南極は大陸。南極点近くでは、氷河の動きも年間10ｍほどしかなく、クレバスの危険もそれほど大きくはない。それだけ聞くと北極の方が危険度は高いが、ただし、南極でも南極半島の山岳地域や、冬の南極大陸は来る者を拒絶する厳しい環境だ。特に冬の南極は、暗黒と極寒の暴風地獄である。内陸部のマイナス60度以下の低温が加わり、外から人間が入ってくるのを拒み続けている。

18年間の極地での冒険の数々、単独無補給にこだわり、自身の「脚」で歩いてきた著者だが、その過程の中に人生における表現の仕方、即ち、人生の目的をその過程に見据えているのは共感を覚える。今までの自己満足を徹底的に追求してきた過程が、今までとは違った意味や価値を生み出す。冒険という行為は、元来意味のない自己満足の世界なのかもしれないが、著者はその行為で培った経験に基づく新たな世界を創り上げ、そこに違った意味や価値を生み出すべく実践中だ。若者たちの自然

体験教育もすでにその過程であり、北極圏の６００kmを若者たちと共に歩き、また、夏休みに小学生と１６０km（１００mil）を歩き、健全なる青少年の育成に尽力している。著者の今後の「歩き続ける」自己満足の集大成に、これからも注目していきたいと思うと同時に、著者が「冒険の旅」で体験し、学び、悟ってきたことを読み、本書を通じて、人はなぜ冒険に出るのか、人にとって「自由」とは何かを考える、よき時間を持たせてもらえた。

（舟津圭三）

中村　保　著

『Fling over the Himalaya
空撮ヒマラヤ越え　山座同定』

ナカニシヤ出版　２０１９年５月刊
Ａ４判上製　２３４ページ
８０００円＋税

１９８０年代に残されていた７５００ｍを超える未踏の高峰は、ナムチャバルワ７７８２ｍ、ガンケルプンスム７５７０ｍ、クーラカンリ７５５４ｍ、の３峰であった。１９８６年にクーラカンリが神戸大学と中国の合同登山隊により初登頂され、１９９２年にナムチャバルワが日本山岳会と中国の合同登山隊に初登頂された。残るはブータンの最高峰、ガンケルプンスムだが、ブータン王国は登山を許可しない。そして、ヒマラヤの未踏峰登山の時代は終わった、と言われて久しい。

20世紀初頭のヒマラヤ探検家は山を探るのに、足を使って現地に入る以外に手はなかった。また、その後の登山隊は目的のピークにたどり着くためには少ない資料とルートの偵察など苦労を強いられた。今日では数多くの登山隊やトレッカーがヒマラヤを訪れるようになり、写真と現地の情報を提供してくれる。また、ヒマラヤ越えのフライトで広範囲にわたり空撮写真を獲得できる。さらに衛星による地球観測データが正確な地形情報を教えてくれる。技術革新が地球上の空白地帯をなくしたとも言える昨今である。

しかし、ヒマラヤの東、すなわちチベットの念青唐古拉山群、崗日嘎布山群、そして、中国四川省から雲南省に展開する横断山脈には未踏、未知の山々が数多く残されている。６０００ｍを超える未踏のピークは、いまだに３００以上を数えることができる。登頂されたピークは極めて少ない。

このヒマラヤの東に魅かれ、１９９０年から今日まで45回を超える探検を続けられたのが著者の中村保氏だ。未開の横断山脈に深く踏み入り、谷筋をくまなく踏査して多数の未知のピー

クを解明されてきた。氏は探検の結果を１９９６年に著書『ヒマラヤの東』として発表された。さらに１９９７年発足の横断山脈研究会を通じて情報公開し、また、会員からの情報収集にも努められた。その成果は２０１６年発行の『ヒマラヤの東　山岳地図帳』に集大成された。

本書は中村保氏が『ヒマラヤの東　山岳地図帳』に引き続き範囲をカラコルム、インド、ネパール、ブータンなどヒマラヤ全域に広げて、空撮写真をベースに山座同定した結果を集成したものだ。ヒマラヤ越えのフライト（阿里～拉薩、カトマンズ～拉薩、カトマンズ～成都、拉薩～成都、玉樹～成都、林芝～成都）から中村保氏を含む数多くの人たちが撮影した写真を、地域ごとの山々に精通している方々が分析、同定している。

対象地域は目次によると1. Karakoram 2. West Tibet 3. Nepal Himalaya 4. North Sikkim 5. Tibet Bhutan Border 6. Yarlung Tsangpo Basin 7. Nyainqentanglha West 8. Easternmost Himalaya 9. Nyainqentanglha East 10. Kangri Garpo & Gorge Country 11. West Sichuan Highlands と、ほぼヒマラヤ全域をカバーしている。

８０００ｍ峰は全座が収録されている。周囲のピークを含めた俯瞰は新鮮だ。その山群の全貌を理解するのに貴重な資料となっている。例えば、カンチェンジュンガ山群では、カトマンズ～拉薩のフライトと思われるが、遠くブータンのガンケルプンスムを左手遠方に、続いてチョモラリからカンチェンジュンガ主峰とヤルンカン、そして右手にジャヌーまで、鮮明に出現しており実に壮観である。また、機窓近くに展開する数々のピークもしっかり同定されている。ローツェ、エベレストからチョーオユー、また、エベレストからマカルーへのパノラマは機上にもかかわらず、ピークの圧倒的な高さから地上での撮影のような錯覚を覚えるショットが収められている。

シッキム北部の山々は空撮ではないが、ジョンサン・ピーク７４８３ｍ、カンチェンギャオ６８８９ｍなどの貴重な写真が、ヒマラヤン・クラブのカパディア氏から提供されている。

チベットとブータンの国境地帯では、赤茶けたチベット高原に堂々と鎮座するクーラカンリやガンケルプンスムが機窓に展開するが、広大なチベット高原の様子をよくとらえている。

念青唐古拉西山群（Nyainqentanglha West）は青海西蔵鉄道が開通して数多くの旅行者の目に触れるようになっている。西端のチュンモカンリ７０４８ｍと中央部にあるニンチェンタンラ主峰７１６２ｍの２座が目立つが、６０００ｍ級の未踏峰が多数残されている。それらのピークは鉄道から見えるものは少なく、あまり注目されていない。拉薩～成都間のフライトによる空撮で全容が解明されている。

ヤルツァンポーの大屈曲点にそびえるナムチャバルワとその周辺の峰々は、拉薩～成都および成都～林芝間のフライトが北

方近くを通過するので、多くの写真が得られている。ヤルツァンボーが大屈曲点を南下するあたりはナムチャバルワのピークから東に30㎞足らずの位置だが、標高は１０００ｍを切っている。実に標高差約６０００ｍの落差である。空撮写真はどれも山群のすそ野が谷底に沈み、黒々とした闇に包まれている。深いゴルジュが長年、未探検地として人々を寄せつけなかったことに納得する光景だ。

この大屈曲点の東に位置するのが、全長２８０㎞に及ぶカンリガルポ（崗日嘎布）山群だ。長らく未知の山群として残されていたが、横断山脈研究会の活動を通じて松本徑夫氏が編著『ヒマラヤの東崗日嘎布山群』にて全容を明らかにした。その後の研究で最高峰のルオニイ峰（若尼峰　Ruoni Feng ６８８２ｍ）を筆頭に47座の６０００ｍ峰が確認できるが、２００９年に筆者が参加した神戸大学と中国の合同隊により初登頂されたロプチン峰（洛布青峰　Lopchin_Feng ６８０５ｍ）のみが既登峰で、その他のピークはすべてが未踏峰である。成都～拉薩のフライトは山群の北方遠くを飛行する。この路線を旅する人から何度も写真が届いたが、澄み切った晴天に望遠レンズで撮影されなければなかなか良いショットが得られない。そのような条件でのショットが何年かかって得られた。本書には山群の東北面のパノラマが掲載されている。このショットで初めてその姿が現われたピーク、ゲニクツ（Genikutz ６２３３ｍ）が確認できる。

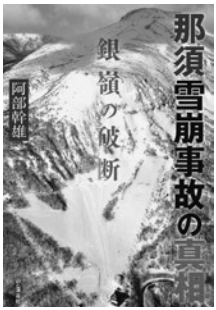
さて、本書のハイライトは念青唐古拉東山群の空撮であろう。複雑な稜線と谷筋を幾重にも持っている山群で、セブカンリ（Sepu Kangri ６９５６ｍ）を筆頭にネナン（Nenang ６８７０ｍ）などの秀麗なピークを多数有する。成都～拉薩のフライトは、この山群の真上を通過する。天候次第で航路は北に南に振れるので、眼下に展開する山々は都度変化して空撮の範囲が広がるのが利点だ。

中国政府が外国登山隊にチベットの登山許可を与えない今日、本書にて未踏峰への夢を温め、調査研究を続けて、来たる時に備えるのもよいのではないだろうか。

（井上達男）

阿部幹雄　著

『那須雪崩事故の真相――銀嶺の破断』



山と溪谷社　２０１９年６月刊
四六判　３０１ページ
１６００円＋税

２０１７年の３月27日午前８時頃。栃木県高等学校体育連盟に所属する大田原高校、真岡高校をはじめとする高校山岳部の生徒たちがラッセル訓練のため、那須温泉ファミリースキー場のセンター前を出発して、雪の中を那須・茶臼岳から東側に延びる尾根に取り付いていた。栃木県高体連が主催し、登山専門部が主管する「春山安全登山講習会」の最終日のことである。

もともとの予定では、講習会の仕上げと復習のため、那須・茶臼岳を登るつもりだったのだが、あいにくの悪天候のため予定を変更してラッセル訓練を行なうことになったのである。高校生たちは５つのパーティに分かれてスキー場や樹林帯の急斜面を登っていった。先頭を切るのは前年のインターハイ登山競技で７位になった、強豪の大田原高校山岳部のパーティだ。脚力に優れた２年生を先頭に、下級生をはさんでしんがりは講師２名が務めた。樹林帯を登りきると茶臼岳に続く雪の斜面の上に天狗ノ鼻が見えてくる。樹林帯を抜けて遮るものがなくなり、強風をもろに受けるようになるとともに、30度を超える急斜面なので滑落の恐れがあった。そのため、しんがりのベテラン講師が、このあたりでやめた方がいいのではないかと先頭の２年生に尋ねたところ、２年生は天狗ノ鼻まで登りたいと言う。講師は学生の希望を受けて、前夜の大雪による雪が厚く積もった急斜面をそのまま上に向かわせることにした。

その直後、右前方の雪面に亀裂が入ったと思う間もなく、予想だにしなかった雪の奔流が彼らを襲った。

大田原高校を中心に、40人以上の高校生と教師を巻き込み、死亡者８名を数えることになった那須雪崩事故である。この事故は新聞やテレビなどのメディアで数多く報道され、記憶に残る大きな遭難事故となってしまった。

わたしもこの事故に対しては、関心を持って情報を収集した覚えがあるが、報道や専門家の意見としては、たまたま事故発生からしばらく無線機が通じないところにいた責任者や、彼をはじめとする教師の責任を追及するものがほとんどだったように記憶している。さらにはそれを受けて、高校生には冬山は無理だからやらせるべきではないというような、知ったような意見が巷にあふれていたような覚えもある。

実はこの事故をさかのぼること７年前の３月27日、同じ那須・茶臼岳周辺で行なった「春山安全登山講習会」の２日目に、２０１９年の事故現場から１・２km離れた那須・茶臼岳の郭公沢最上部で、雪崩による小さな事故が発生していた。その雪崩によって１人の学生が雪に埋まったが、デブリの厚さが比較的薄かったため、自力もしくは相互に協力してすぐに全員を救出することができた。その後、講師は全員の無事を確認し、ケガをした者もいなかったことから、訓練は再開され、高体連や県教育委員会への報告が行なわれることはなかったという。もちろん事故の検証がされるわけもなく、雪崩があったことは関係

者の記憶から忘れ去られていった。

そして、2017年の事故。

雪崩事故があった「春山安全講習会」は、そもそも昭和25年の谷川岳・西黒沢での、栃木県高体連に属する佐野高校山岳部の雪崩による遭難事故をきっかけに始められたものである。しかし、それも、その後数十年にわたって栃木県高体連登山部の毎年恒例の講習会として行なわれてきたことで、行事そのものがすっかりルーティン化してしまった。「春山安全講習会」はそのためすっかりマンネリ化してしまい、本来雪山に向かう場合に必ず押さえておかなければいけない雪崩への備えが、ほとんどされていなかったように思える。実際、事故を検証していくと講習会の当初の目的はどこへ行ってしまったのか、講師をはじめとする引率者には雪崩に対する危機感はおろか、知識もスキルもなかったことがわかる。さらに気象状況、雪の積もり方と弱層の存在、地形・植生の要因など、いまや雪山登山で山に入る場合、当然押さえておくべき状況確認の懈怠。スコップ、プローブなどの雪崩への備え、行動中の講師の判断、事故後の対応。さらには本部と連絡が付かなかったこと、すぐに警察へ救助を依頼しなかったことなど、様々な判断や行動のミスが重なったことが、本来助けられてしかるべき者も救えないという、最悪の結果につながってしまった。

それでも、7年前の事故に対する検証がしっかりなされていればここまで傷口は広がらずに済んだと思うのだが、遭難事故に向かっていく一連の動きを見ていくと、検証がされなかったことも、そういった流れにつながっているように見える。

いずれにしても「雪崩遭難事故」の反省から始まった「春山安全登山講習会」で、雪崩への対応がお粗末だったため再び大きな「雪崩遭難事故」が起きてしまったことに、「のど元を過ぎれば熱さを忘れる」人間の性（さが）を感じてしまうのは私だけではないだろう。

この雪崩遭難事故については、栃木県教育委員会が設置した「平成29年3月27日那須雪崩事故検証委員会」の報告書で詳しく検証されているが、報告書の目的があくまでも「事故の原因を含む状況や課題等について調査・検証を行なうとともに、事故の再発防止に対する提言を行う」ことにあったため、雪崩事故そのもの以外に関しては、遺族や生き残った人たちにほとんど触れられていない。本書はそれらの人たちにも多く取材し、山を始めたいきさつから、遭難事故後1年以上たった現在の様子までをまとめて、事故のバックグラウンドや影響をもっと広く浮かび上がらせようとしている。

遭難事故は客観的な目で検証することも大切だが、事故に遭遇した人や遺族の思い、その人生まで見なければその本質は理解できないはずである。そういった意味で、本書には報告書とは違う意味で読む人に訴えかけるものがある。

ただ、精神的な傷跡が深く刻みつけられてしまった遺族や生存者は、できれば事故のことについて口を開きたくないというのが本心だろう。それでも、著者の阿部幹雄氏は遺族や生存者から言葉を引き出し、その思いを聞き、人生を取材する。中でも生存者の1人とはその後も連絡を取り続け、再び山に向かう気持ちを取り戻した彼と一緒にトムラウシ山を登っている。本書を書くにあたり著者はいったいどのようにして、そこまで彼らの心を開かせることができたのだろうか。

本書では雪崩の専門家による検証にも多くのページが割かれている。その内容は科学的で、謎解きの面白さにもあふれているが、やはり本書のメインはそこにではなく、事故に遭った人やその家族の思いの描写にあると思う。

那須雪崩事故は、雪崩遭難に関して私たちに多くの教訓を残したと同時に、高校山岳部の在り方についても深く考えさせてくれる機会となった。

この事故を見て「だから言ったこっちゃない」と高校山岳部不要論が噴出していたことも記憶に新しい。ただ、事故の当事者たちは高校生の山について、もっと真摯に向き合い、考えていこうと思っているのではないだろうか。そう思ったのは生存者の1人が事故後「事故で亡くなったみんなの死を決して無駄にしないために高校生の登山について自分の考え気持ちを綴っていこうと思います」と言って開設したブログ、「山の羅針盤」の話を知ったからである。

そのブログには次のような言葉がある。「今回の事故では山岳部・登山の危険な部分のみがクローズアップされています。しかし登山は本来危険なだけでなく山でしか得られない経験や知識、リスクマネジメントを学ぶことができるスポーツです。そして私は山岳部でかけがえのない仲間との友情や結束を培ってきました。また、何より亡くなった先輩や友達、そして言い残った部員や先生たち。みんな山を、自然を愛していたことを知ってもらいたくこのサイトを立ち上げました。山が好き、自然が好きだという気持ちだけで登山をやってはいけません。まず優先すべきは安全です。私は今回の事故で多くのことを学びました。そして高校生の登山についていろいろ悩み続けています。今後、事故で亡くなったみんなの死を決して無駄にしないために高校生の登山について自分の気持ちや想いを綴っていこうと思います。」

私も高校山岳部の出身だが、確かに多感な高校生だからこそ感じたり考えたりできること、純粋だからこそ培える友情や結束があったことを思い出す。もしかしたらそれは私の登山人生の中で一番登山について深く考えていた時期だったかもしれない。

ましてやブログを開設した生存者のように山で人生観を変えるような大きな衝撃を受けた高校生の人生にとって、そこで考

え抜いたことは、どれだけの大きな財産になるのだろうか。

高校生の登山を一律に禁止してしまうのは簡単だが、それによって高校生が山を経験する機会を奪い、登山について考える機会を摘み取ることなどあってはならないはずである。

本書は、紐解くことによって雪崩とは、安全とは、そして登山とは何かなど、実に多くのことを考えさせてくれる。皆さんにもぜひ一度、目を通してみることをお勧めしたい。**（近藤雅幸）**

高山龍三 著

『河口慧海――雲と水との旅をするなり』

ミネルヴァ書房　2020年1月刊
四六判　381ページ
3800円＋税

河口慧海は明治時代、ヒマラヤを探訪した最初の日本人である。ひと昔、ふた昔前の、ヒマラヤに憧れた山好きであれば、身分を偽り、ネパールからヒマラヤを越えて単身チベットに潜入した仏法修行の物語は誰もが知っているに違いない。その『チベット旅行記』である。

ヒマラヤは山好きにとって登山の対象であり、仏道にさしたる関心や興味もない私のような者でさえ『チベット旅行記』を読むことで探検精神が刺激され、ヒマラヤへのロマンを大いに掻き立てられた。

慧海のチベット潜入経路の一部を尋ねてネパールを旅し、ヒマラヤ山中のトゥクチェ村でタカリー氏族の知人宅に私が滞在していたのは1973年から翌74年にかけてである。毎日のように夜になると、隣近所の住民が三々五々集まってきてはケロシン（灯油）の灯りに照らされ、地酒を酌み交わし、ときには歌をうたったりする合間に「エカイカワグチ先生」がしばしば話題に上った。

タカリー氏族が慧海を「先生」呼ばわりするのには理由がある。『チベット旅行記』に当時、慧海を遇したハルカマン・スッバというタカリー氏族の頭首が出てくる。慧海はセーラブ・ギャムツォという名前を使っていたから道中、身分を知られることもなかったが、後年、『チベット旅行記』の英訳本がインドで出版されて国際的評価を受けるようになったことから、この偉大な異国の行脚僧の正体や業績を知り得たのだと思う。

そして、そのことが機縁で、タカリー氏族は慧海を遇したことを誇りに思い、日本人に対して親近感を抱くようになった。

いまでも極めて友好的である。

慧海がチベットに潜入した当時、タカリー氏族は商業民族としてインドのカルカッタ（現コルカタ）とチベットのラサに跨る一大交易圏を築き上げ、縦横に行き来していた。しかも、慧海のチベット潜入経路、トルボ地方における徴税権をラナ政権から委ねられていたのだ。このことは慧海にとって質のいい情報が収集できるわけだから、まさに天の配剤とも言うべき幸運な巡り合わせだったに違いない。

私がトゥクチェ村に滞在していたころ、慧海と同様、尊崇の念を持って語られていたもうひとりの日本人がいる。「プロフェッサー・ジロウカワキタ」こと川喜田二郎だ。川喜田は周知のごとく戦後、慧海の業績を再評価し、世間に知らせしめた文化人類学者である。トルボ地方を舞台に1958年、学術調査を実施した「西北ネパール学術探検隊」の隊長でもあった。川喜田の著述した『鳥葬の国』はその探検記録である。

多くもない枚数の中で前説を長々述べたが、本書『河口慧海』の著者・高山龍三はその川喜田探検隊で民族調査を担当した隊員だった。本書の「はしがき」に記されているように、このときの探検活動が著者と慧海を結びつけている。

不思議な因縁で、私もまた慧海を介して川喜田さんや高山さんの知遇を得ることができた。92年当時、外国人の入域が禁じられていたトルボ地方に、私がネパール政府の特段の配慮で入域できたのは川喜田さんの力添えに依っている。加えて、このときのトルボ地方での踏査中、ツァルカ村で面談したアムチー（チベットの伝統医）が私を見て、お前は高山に似ている、と言ったので私は驚いた。その後、再びツァルカ村を訪れたとき今度は「お前は高山か」と言ったのだ。後年、カトマンズで高山さんと偶然会う機会があったので、そのことを話すと大笑いしていた。

高山さんとは奇遇にも、その後もカトマンズで何度か会う機会があった。当時発行されたばかりの5万分の1地形図をネパールの政府機関にふたりで買い求めに行ったこと、またさらには、日本へのネパール人留学百年を記念して高山さんが在ネパール日本大使館に記念樹を贈呈したときも誘われて同行したことがある。

ネパールのチャンドラ・シャムセール宰相に慧海が献上した経典を、高山さんはネパール国立古文書館の収蔵庫で見つけ出し、そのときの喜びを、カトマンズに居合わせた私に語ったこともあった。ネパールの近代化に関わる、チャンドラ・シャムセール宰相に慧海が提言した「覚書」の現物を私も拝見したことがあるが、やはりこのときもカトマンズで私との話題に上った。高山さんが慧海の経典や「覚書」を確認したことは本書に記されている。

話がだいぶ横道に逸れたようだが、いま少しお許し願いたい。

私は慧海のチベット潜入経路の踏査と併せて、雪男の探検調査を長年続けていたことから、ネパールを行ったり来たりしていた時期があった。この間、高山さんとはカトマンズで定宿にしていたホテルが同じだったので会う機会も多かった。

そうした関係もあり、２００２年から04年にかけて足掛け３年がかりでツァルカ村に住民悲願の鉄橋を私が建設したとき、高山さんから川喜田探検隊当時の調査資料をもらい受け、ツァルカ村における姻戚関係の追跡調査をしたことがある。

その後も、私は自分の踏査で知り得た情報を高山さんに私信で伝えていた。その一部は本書に紹介されている。私の知見はほとんど全部が実地踏査に基づいたものであり、この点、内外の文献を渉猟した高山さんの仕事には、研究者としての面目躍如たるものが感じられ、感服せざるを得ない。

本書は６章からなり、慧海の著作や活動について網羅、さらに参考文献と年譜が付記されて圧巻の内容であり、慧海の全貌を知るには、まるで事典のように使い出がある。以前、私はタカリー氏族の友人から『チベット旅行記』の英訳本を見せてもらったことがあるが、その英訳本が出版に至った経緯や海外での反響、評価などが本書には克明に記されている。高山さんの誠実な人柄が行間に溢れているようで、興味深く拝読することができた。

細かいことではあるが、誤解を招きかねない、気になる箇所があったので掲出しておきたい。76ページに掲載された写真の「村人から慧海像と言われている」というキャプションについてである。咎めようとして指摘しているわけでは決してないので、寛容の精神で了承願いたい。

このキャプションだと慧海像とも受けとられかねない。ツァラン村の丘に建つツァラン・ドルジュデン・ゴンパという寺院に奉安されてある像ではないだろうか。だとすれば、慧海がツァラン村に滞在していた当時の住職ラマ・ニェンダクである。『チベット旅行記』に出てくるが、慧海はツァラン村を去るにあたって自分のウマを贈り、返礼として経文や仏教辞典を頂戴している。

この像がラマ・ニェンダクであることを、私が訪れた１９９２年当時の住職ソナム・ギャルツェンが寺院に保管されてある記録を調べて説明してくれた。その後、私はツァラン村をこれまで二度訪れているが、確認していないので断定はできない。

しかし、慧海は身分を偽っていた異国の行脚僧なのである。村の寺院に奉安されることはあり得ないと思う。いかなる事情でそうなったのか、知りたいところだが、高山さん亡きいまではそれもできない。

本書は、高山さんが人生を捧げた労作である。本書を読み解くことで、偉大な求道者としての慧海が残した業績を知り、さらには人物像が浮かび上がってくる。私自身も、高山さんが校

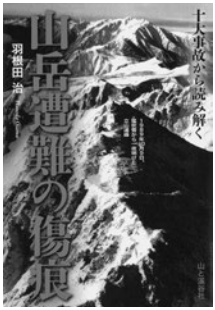
訂した『チベット旅行記』（講談社学術文庫）から始まり、それに基づいて現地踏査を続けてきたが、改めて参考になる事柄が多々あり、高山さんに感謝したい。

高山さんとの個人的なつながりから以前にも、慧海にかかわる研究論文や研究書の数々を恵贈賜っていたが、本書が最後になった。この誌面を借りて、高山さんの死に対し謹んで哀悼の意を表します。

（根深　誠）

羽根田治　著

『十大事故から読み解く　山岳遭難の傷痕』



山と溪谷社　２０２０年２月刊
四六判　３９９ページ
１７００円＋税

登山にとって遭難の問題は避けて通れない重要なテーマだ。著者の羽根田治氏は、これまでも精力的に山岳遭難の問題と取り組んできた山岳ライターであり、重大な遭難事故が発生するたびに積極的に発言を続けてきた。氏の最新作である本書は、明治になって日本の近代登山が開始されて以降に起きた歴史に残る十件の遭難事故を選び出して、その実態を改めてわれわれに伝えようとしたものだ。

著者は「あとがき」で、「日本における近代登山の歴史には、社会的にも大きなニュースとなった遭難事故が少なからず記録されている。しかし、そのひとつひとつの事故について、概要的なことはおぼろげながら頭に入っていても、そのときの状況や事故に至るまでの経過、事故要因など、詳細についてはほとんど知らないも同然だった」と書いて、そうした事故の詳細について調べようと思い立ったことが本書執筆の動機だと述べている。それはまた、事故を風化させてはならない、学ぶべき古い教訓を埋もれさせてはならない、という切実な願いともつながっている。本書に取り上げられた事故は、どれも登山史的に見て、それぞれの時代状況がはらんでいた固有の問題を、その歴史的段階に対応したかたちで露呈させ、突きつけるものだった。

それぞれの事故については、発生当時の事故報告書が残されており、そこでは事故原因の考察もなされている。本書では、そのような事故報告書をベースに、その内容を著者なりに再構成することで、可能な限り詳細に実際に起きた事故の実態をルポルタージュ風に再現することを試みていて、それが読む者を強く引き込んでいく臨場感を生んでいる。

しかし、それらの事故をどう捉え、何をそこから学ぶかについて、著者は、みずからの見解や具体的な提言といったものを積極的に提示してはいない。あくまで遭難現場の顛末をリアルに伝達することに務め、事故原因の考察なども事故報告書に記載された事柄を要約的にまとめた上で、そこから何を読み取るかは、読者たるわれわれ一人一人に委ねられている。

だからこそ、なのだろうが、本書を読んでいると、どうしたらそんな事故を防ぐことができただろうかと考え込むことしきりだ。そのための機会と材料を与えてもらえるのが、本書のメリットにほかなるまい。

収録されたのは、木曽駒の学校集団登山（1913年）、劔澤小屋の雪崩崩壊（1930年）、冬の富士山巨大雪崩（1954年）、前穂のザイル切断事故（1955年）、谷川岳の宙吊り事故（1960年）、愛知大学山岳部の遭難（1963年）、西穂独標の高校生落雷（1967年）、立山の中高年凍死事故（1989年）、吾妻連峰のスキー遭難（1994年）、そして、トムラウシ山のツアー登山（2009年）の10件だ。

たとえば、これを登山形態でパターン的に分類してみる。木曽駒と西穂独標はいわゆる学校登山、劔澤、冬富士、愛知大は大学山岳部関連、前穂と谷川岳が社会人山岳会関連の事故で、立山、吾妻連峰、そしてトムラウシ山はいわゆる無組織層グループの事故となるだろう。また、遭難の原因については、天候の急激な悪化による気象遭難、雪崩、あるいは道迷いなどが指摘されるが、それに付随して知識・情報の不足、装備不備、リーダー（ガイドを含む）の判断ミスなどがからむ。

こうして見ると、まず、学校、大学山岳部、各種山岳会、そしてツアー登山というように、集団的な登山にかかわるものが多いことに気づく。それゆえに、多人数を巻き込む事故になりやすい傾向がある。そして、その発端に学校登山があったことが、いかにも示唆的だ。著者も言うように、「全校生徒もしくは一学年の生徒全員が集団で山に登る『学校集団登山』は、日本独特の風習」であって、明治20年代から始まったとされている。その目的は、心身の鍛錬、協力とルール順守の集団訓練、それに自然の体験学習が加わった野外教育の手段として行なわれていた。

新田次郎がこの遭難事故のことを小説『聖職の碑』に書いたとき、白樺派的「理想主義教育」をめぐっての、若手教員と校長との葛藤を物語展開の軸にしていた。登山計画について、幼い生徒を3000m近い山に登らせることの意義を疑問視して反対する意見に対し、引率に当たった校長と2人の教員は鍛錬の必要性を強調して実行に移している。

この時の引率教員は軍人だったとされているが、こうした教育目的で行なわれた学校登山を一概に軍隊的とみなすことは差し控えるとしても、鍛錬を重視する精神主義的な考え方が基本

になっていることは否定できない。著者は、この地方に伝わる「元服登山」という成人への通過儀礼とも関連させているが、元来、こうした通過儀礼には、一定の辛く、かつ危険をも伴う試練がつきものだった。戦後の西穂独標の場合も、その意義を「教育の一環としてこれと取り組み、生徒の心身の鍛錬、集団行動の基礎的訓練を行なう」ことに求めている。その文言は明治のものとまさに変わるところがないわけで、かつての鍛錬主義が戦後もしぶとく生き残っている事実に気づかされざるを得ない。しかも、本書を読み進んでいくと、同様の登山観が、大学山岳部や社会人山岳会にも通底していたように思えてくる。そこに見られる特徴は、苦痛をよしとする心性と自己責任意識の希薄さだろう。その結果としてリスク・マネジメントが十全に機能しない構造ができてしまう。

近代アルピニズムにおいては、本来、人を寄せつけない危険で困難な山に敢えて登ろうとするものだったことから、危険に対する意識が当初から明確にあった。したがって、その危険を回避するためのリスク・マネジメントが基本になっていて、これは、イギリスにアルパイン・クラブができた時の最重要事項だった。そもそも、装備や器具もそのためのもので、アルパイン・クラブは設立直後から、ロープなど用具の品質や規格の認定を行なっていた。また、雪崩がいい例だろうが、そのための科学的な調査・研究を推進して、科学の知見や情報がリスク回避のために総動員される。それに対して、日本の山は、もともと技術的困難さを伴う要素が少なく、歴史的にも遊山といった行楽の場として見なされていた経緯もあって、そうしたリスク意識が低いままにとどまっている。

それに加えて、集団組織特有の力学的モメントが働くことにより、本来ならばリスク回避を最優先の条件として、その上に設定されるべきはずの、教育的目標、集団の理念、商業的利害、さらには会の名誉といった目的が先にひとり歩きしてしまい、そのために、リスク・マネジメントに基づいた正当なリスク回避判断がおろそかになりやすい。さらには、判断形成の過程、および事後の処理にあたって、組織的な論理行動から脱け出すことがきわめて難しくなることも、本書の事例は示している。

関心を惹いたのは、谷川岳のクライミング遭難で、事故後に所属山岳会の代表が口にした発言だ。その登攀計画について、リーダー会において、充分クライマーの能力を評価し確認した上でパスさせたものであり、だから「もし彼らに登れる技術がなかったということになりますと、当然それを許可したわれわれにもその責任はある」と述べている。この会の登山が、一定の集団責任体制というべきものによって管理されていたことがよく理解できる。こうしたやり方は、各種山岳会や山岳部には、当然のこととして共通に見られるものだろうし、それが妥当性をもって機能している面も否定はできない。しかし、そこでは

同時に、登る個人としての、一人一人の自己責任とどうかかわりあうのかという問題が突きつけられてくるはずだ。

自己責任という言い方をすると、日本ではモラルの面でデリケートな、それこそ場合によっては否定的なニュアンスが加わってしまうことさえある。トムラウシ山のようなツアー登山事故では、ガイドら登山リーダーを含むツアー会社側と個々の登山者とをめぐって、責任主体の判定と、各個人の責任のあり方が、深刻につきつめられたかたちで問題となったことは記憶に新しい（この事故の事故調査特別委員会による『事故調査報告書』について「アミューズ社の関係者からの聞き取りは行われておらず」と書かれているが、アミューズ社に対する聞き取り調査は確かに実施されており、この記述は事実と異なることを注記しておく）。

悲劇を繰り返してはならないことは、みな肝に命じているはずなのに、幾度も繰り返されてきたのが現実であることも認めなくてはならない。なぜこんな悲劇が終わらないのか？　との疑問が常につきまとう。

「起きてしまった事故に対し、たしかに第三者はなんとでも言える。それはフェアなことではないと自覚しながらも言わざるを得ないところに、遭難事故防止活動や救助活動に携わる者たちの苦悩があるような気がする」とは、著者の率直な感想だろうが、フェアでないというのはなぜなのか。それは、自然を相手とする登山では、結果としての遭難を左右する判断が、結局は偶然性に支配されたものでしかないという認識であり、著者自身の言葉で言えば「判断の是非は結果論でしか述べることができず、仮定の話でそれを論ずるのはあまり意味がない」と考えるからだろう。

ところで、昨年、《アルピニズム》がユネスコの無形文化遺産に登録された。その際、ユネスコはそのアルピニズムについて定義をしているが、それによれば「アルピニズムとは、すべてのシーズンを通して、高山を対象に岩と氷雪のピークや壁を登る技術である。それは、身体的、技術的、かつ知的な能力の活動を伴い、適切な装備、道具、そして技術が使用される」となっている。つまり、これは幅広く山に登ること全般を想定したものではなく、厳密な意味で、ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤの高峰での登攀を指していることがわかるだろう。そして、アルピニストならば、リスクも責任もすべてを自分ひとりで引き受けて登る。

しかし、そのような限定的な区別がなじまないのが日本の登山だと言いたくなる。８０００ｍやハイグレードの登攀ルートを欠きながら、剱や槍の北鎌も、高尾山や近郊の低山も、同じ登山の範疇に加えて怪しむところがない。本格的なアルピニズムと、誰でも楽しめるハイキングとのはざまで、両者の境界が極めて曖昧なのだ。そのことが、遭難防止をいっそう難しくし

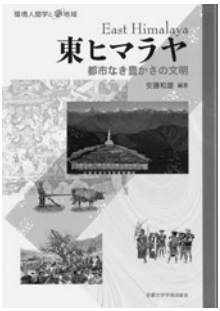
ていると言えよう。

あらゆる種類の登山者が集団になって入山してくる、そうした多様な因子の入り組んだ日本の登山の深層にまつわる構造的な問題の所在を改めて教えられ、学ぶところが多かった。その上で、「本書を通して今に通じる遭難事故回避のための教訓を得ていただけたら嬉しく思う」と最後に記されているのを読むと、やはり、著者自身はどんな教訓を得たのだろうと気になるのだ。その想いは行間に読み取ってほしいと言われるかもしれないが、ずっと専門的に遭難事故と取り組んできた著者なればこそ伝えられる生の声を、この際、聞かせてもらいたかったと惜しむ気持ちが残った。

（飯田年穂）

安藤和雄 著

『東ヒマラヤ――都市なき豊かさの文明』



京都大学学術出版会
２０２０年３月刊
Ａ５判　５３７ページ
６５００円＋税

東ヒマラヤの地域研究に、なくてはならない大著がお目見えした。ひと言で言って、読み応えのある著書に仕上がっている。

東ヒマラヤとはブータン東部から、ツァンポー＝ブラマプトラ河の大屈曲点に位置するナムチャバルワに至る、古くはアッサム・ヒマラヤと呼ばれた地域の南斜面、ブラマプトラ河流域がアルナーチャル・プラデーシュである。

丘陵・森林・山岳地帯で、標高３００ｍから４５００ｍの森林限界までを生業の場に、人口密度13人／㎢でいろいろな部族民が暮らす森の国である。

アルナーチャルは「日が昇る」、プラデーシュは「土地」の意味である。日出る土地、即ちインド東端の州である。

この地に関する私たちの知見は、すべて英領時代の記録に限られていた。１９１３年のベイリーが探ったブラマプトラ河探検の記録『ヒマラヤの謎の河』（諏訪多栄三訳　あかね書房）、１９２４年のキングドン・ウォードによる植物採集記『ツァンポー峡谷の謎』（金子民雄訳、２０００年、岩波書店）、１９４４年のヒューラー・ハイメンドルフの人類学調査記（「ヒマラヤの蛮族」常盤新平訳『未開の土地の部族』川喜田二郎編、１９７０年、文藝春秋）などである。

京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）の竹田晋也（京大教授）はコラムの中で、下記のように記した。

《アルナーチャル・プラデーシュは、マクマホン・ラインを主

張するインドとそれを承認しない中国との紛争地域である。1962年には軍事衝突にまで発展したが、今ではインドが実効支配している。中国もこれまでの主張を続けて国境問題では歩み寄りを見せないため、外国人にとっては入域許可の取得が非常に難しい地域であった。しかし、最近両国は国境問題を棚上げにしてまで、経済関係を深めており、現地では外国人が旅行することも可能となってきた》。この領域は、かつてNorth-East Frontier Agency（NEFA）、北東辺境管区と呼ばれ、1972年、アッサム州から分離されて中央政府の直轄地となり、1987年にアルナーチャル・プラデーシュ州（以後、アルナーチャルと略す）となった。

《またこの地は、タイ語系諸族の西端とインドの東端が重なり合い、そこにチベットを源流とするブラマプトラ河が流れ込み、タイ、インド、チベットが出会うアジアの要である》との認識を示す。

州内の民族と宗教を概観すると、26の主要な部族と多数のサブ部族が居住し、宗教は3つに大別される。1つは世襲的なシャーマニズム信仰で、州の中西部から東部にかけて分布する。アパタニ族、アカ族、タギン族、ヒル・ミリ族ら、彼らはドニ・ポロと呼ばれる太陽と月の信仰者である。2つは仏教を信仰する部族。3つはアニミズムに従う部族、ノクテ族、ワンチョ族らである。仏教は上部座とチベット仏教に分かれる。上部座はミャンマーとの国境沿いに住むカムティ族、シンポ族、ティカク・サンタ族、チベット仏教は州西部と北部辺境の部族である。

本書は、編著者に言わせると、《東ヒマラヤの高地地域の単位性をとらえ、文明論に一石を投じる地域研究からの問いかけの書である。低地からの文明的干渉に抗し、風土に応じた生業と特色ある社会文化を築いた東ヒマラヤの高地に、今に生きる「都市なき文明」の力を見る。

東ヒマラヤの高地は、中国やインドの低地からの文明的干渉に対抗し、取り入れるべきものは取り入れながら高地の風土に応じた生業を発展させる一方で、独自の社会文化を築いてきた。高地特有の環境に暮らしの拠点を移動してきた人々の、自然利用と精神世界の特徴をフィールドワークにより抽出、そこに「文明」と呼びうる「生活様式の総体性」を個々のフィールドでの事例を記述することで提示する。従来の文明＝都市文明にかわる農村文明の見方を喚起し、世界の高地社会研究とともに、閉塞感が進む現在文明に風穴をあけるべく、世界が目指すべき新しい文明の必要性を説き、温帯・低地世界中心の文明観と都市に遍在する負の課題へのパラダイムシフトを鋭く迫る》新たな文明試論である。

本書の内容は、農学、地理学、文化人類学、医学、生態学、宗教学などの学際共同調査による総合的な視点から、「生業―

農耕、牧畜と生態環境」、「身体―食文化と医学的特徴」、「精神―高所の宗教文化」、「近代―土地利用、グローバリズムと変容」のテーマによって16章を4グループに配置し、理解しやすいようまとまりをもたせてある。

日本語による出版物が極めて少ない東ヒマラヤ地域の特徴と問題点に迫る、地域研究のフロンテイアを切り開いた意欲作である。まとめ上げた編著者のエネルギッシュな熱意と努力に敬意を表したい。

また、本書が何度読み返しても、その都度新たな発見がある奥深い書物に仕上がっているのは、研究領域の広さもさることながら、現代文明のあり方に関する透徹した歴史観、即ち21世紀は「都市なき豊かさ」の農村再評価の時代になるという確信が底流にあると見る。コロナ禍が世界を席巻する今、人口密集地である都市的生活様式から人類は迅速な転換を迫られている。

編著者・安藤和雄氏は筆者の大学山岳部の後輩である。京大東南アジア地域研究研究所教授（現在、連携教授）で、長年インド、アルナーチャル西部や東ブータンへ出入りしてきた農学者である。戦後、アルナーチャルの外国人立ち入り禁止地区へ、現地の大学と共同研究を組織して入った初めての日本人地域研究者である。

京都大学はフィールドワーク（学術的野外調査）と学際的な共同研究で、常に新たな学問の地平を切り開くパイオニアワークで名を馳せる大学である。その原点を探れば非凡な指導者の一人が今西錦司博士（本会第12代会長、文化勲章受賞者）に行き着くことはよく知られた事実である。

１９４１（昭和16）年夏、京都探検地理学会は今西錦司を隊長とする生態学的研究のために、西太平洋カロリン群島中のポナペ島へ10名を派遣した。中には、後年に活躍する森下正明、中尾佐助、梅棹忠夫、川喜田二郎、吉良龍夫らがいた。梅棹忠夫（文化勲章受賞者）に言わせれば、

《この時、学術探検の指導者としての今西が見せた力量はめざましいものであった。フィールドワークを進めつつ思索を深めてゆく手法を、我々は骨の髄まで叩き込まれた。

それは言うなれば、今西探検学校の士官学校であった。》

と記した。

その後、今西とその仲間たちが世界中に展開したフィールドワーク活動が、霊長類や類人猿研究分野に大きな足跡を残し、世界に冠たる研究業績を誇るのはご承知の通りである。

一方、京大人文科学研究所や東南アジア地域研究所では、異分野の学者を集めて、学際的な共同研究を進めるという伝統が形成されてきた。この研究が世代を超えて京大で継続されており、東南アジア地域研究所にあっても〝新しい学問をつくりだそうという気概と熱気に満ちていた〟と編著者は述懐する。

教授・松林公蔵（医博）、准教授・安藤和雄（農博）という人の組み合わせ時代を知る者として、京大の人員配置はなかなかユニークである。そして今や、新しい文明試論を公表するまでに研究が進展してきた。

都市文明に対峙する農村文明、中でもヒマラヤ山麓の高地農村文明の実態が明らかにされてきた現在、〝都市なき豊かさの文明〟という表現は新しい価値の創造と言える。今後、この辺境文明が、世界規模の近代化の影響やインドの現代化の影響を受けて、どのような変貌を遂げるのか、今後の比較研究も疎かにできまい。

東ヒマラヤの文明がユニークなのは、それが「高地文明」においても異色な存在だという。本書の基礎になった研究会（総合地球環境学研究所：プロジェクト「人の生老病死と高所環境―『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」（代表：奥宮清人）において、アンデス高地、エチオピア高地、チベット高原とネパール高地の比較研究が行なわれ、例外なのはネパール・ヒマラヤであることが明らかにされた。東ヒマラヤもネパール・ヒマラヤ同様、都市に依拠することなく文明を育んできた地域である。この辺境の地が、地域研究や文化人類学、地理学などのフィールドワーク系学問において注目されてきたのは、この地域が東南アジア、南アジア、東アジアにまたがる一種のミッシング・リンクとなってきたことを強調する。ネパール・ヒマラヤと異なり、外国人の入域が長く制限されてきたからだという。

それぞれの原論文は、『ヒマラヤ学誌』（京大ヒマラヤ研究会ほか）などに英文 Summary 付きで発表され、すでに海外向けにも対応されたものだ。

目次を眺めてみよう。

はじめに　東ヒマラヤ地域研究の意義
序章　高地文明論と農村文明論
は安藤和雄が記述し、終章において、今後の3次元地域体系研究の方向を述べる。
第Ⅰ部　生業―農耕、牧畜と生態環境
第1章　「高地文明」としての東ヒマラヤ―農耕からの視点
第2章　高所ヒマラヤの地勢的特徴と現代―自然災害問題から考える
第3章　ミタンの利用と高所世界―ブータンの交雑家畜の遺伝学的研究から
第4章　焼畑から換金作物へ、そして、東ブータン村落の農業と現状
＊コラム1　アルナーチャル・プラデーシュの生業景観

＊コラム2　乳の利用から見る東ヒマラヤの文化
＊コラム3　東ヒマラヤの植物に魅せられて
第Ⅱ部　身体―食文化と医学的特徴
第5章　健康と高地文明―ディランの医療事情とライフスタイルの変容
第6章　ビレッジヘルスワーカーたち―ブータン王国における村の保険管理の担い手
第7章　モンパ族の食事―ルブラン村に暮らす牧民の栄養調査から
第8章　高地生活習慣病モデルからみたモンパの高齢者
第Ⅲ部　精神―高所の宗教文化
第9章　モンユルの仏教―チベット仏教圏の中のアルナーチャル・プラデーシュ州西部
第10章　「森のチベット」における自然信仰の聖地
第11章　モンパ民族地域に見られる「悪霊」と儀式
第12章　焼畑耕作と在来信仰
＊コラム4　ブータンの仏教
第Ⅳ部　近代―土地利用、グローバリズムと変容
第13章　陸封された地域の「解放」
第14章　東ヒマラヤの植生に刻まれた歴史
第15章　東部ヒマラヤにおける土地開発史
第16章　ブータン極東部の牧民社会とその変化
＊コラム5　マクマホン・ラインと東ヒマラヤ
＊コラム6　東ヒマラヤ南面の森林保全と農業環境
＊コラム7　牧畜民と社会発展―ドウンカルパ福祉協会の試み
終章に代えて　西南シルクロードと焼畑的水田稲作からひもとくヒマラヤ東部―3次元的な地域体系研究の端緒として

20人余の研究者の合作と言えるが、安藤和雄リーダーの役割は学問の新分野を拓く方向性を示したことだろう。

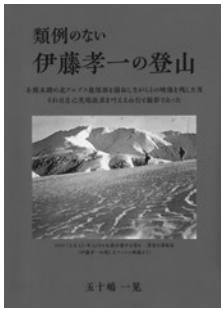
ヒマラヤの地理や地誌に興味と関心がある登山者にとって、本書は東ヒマラヤに関して、極めて有益な情報をたっぷりと提供してくれる。アルナーチャル南面からの東ヒマラヤ登山計画は未だ誰も成功していない。一時、インド隊によるニエギ・カンサン（7047m）峰の初登頂が伝えられたが、間違いであったようだ。未だに未踏峰のまま。南面からのアプローチによっては大変興味深いルートが予想され、新しい形の日印合同学術登山計画を試してみる価値は十分あると思われる。私は50年前に、アッサム州の山仲間と合同で登山許可を求めたが、果たせなかった。

この地域の未来を信じて、時代を先取りする挑戦的な登山計画が生まれることを願う。

（山本良三）

五十嶋一晃 著

『類例のない伊藤孝一の登山』



五十嶋商事　2020年5月刊
A5判　398ページ
2500円＋税

著者の五十嶋一晃氏は、これまでに『山案内人　宇治長次郎』『立山ガイド史』『田部重治の登山と英文学』などの著作があり、登山史に詳しい。日本山岳会百年史編纂委員会の委員でもあり、「日本の山案内人―生い立ちと組織化をめぐって」を執筆している。

少し長くなるが、本書が上梓されるに至った経緯の一端について触れてみたい。五十嶋氏は同好会・緑爽会の会員でもあるが、緑爽会では様々な講師を招いて、会報「山」で告知を行なう一般会員を対象とした講演会のほか、緑爽会会員向けの講演会も随時開催している。2018年4月、総会後に、伊藤孝一の「雪の薬師、槍越え」の貴重な映像を視聴し、その後、五十嶋氏から「有峰の狛犬8体を購入した登山者」と題してお話を聞く機会があった。大変興味深い話であり、その映像には出席者一同感動した。もっと知りたいとの声もあり、そのことが伊藤孝一の登山を総合的にまとめ始める契機になったということである。

また、今の太郎平小屋は伊藤孝一が「雪の薬師、槍越え」山行のために建てた上ノ岳小屋がルーツで、経営者の五十嶋博文氏は著者の実弟にあたる。昭和30年の小屋の再建には五十嶋一晃氏自身もかかわっており、伊藤孝一にはその頃から関心を持っていたとのことである。その後『山岳』113年に「黒部の山河と人を愛した伊藤孝一伝」が掲載され、そこに誤解や事実誤認があったこともあり、はじめは30ページほどのレポートを考えていたが、伊藤孝一についてより総合的な視点から事実とご自身の見解をまとめて書籍化することとなったものである。

さて本書の構成であるが、10章から成り、第1章では、伊藤孝一の2回にわたる雪山山行について伊藤本人の日誌や多くの資料を基に、その行動記録をたどっていく。

当初の計画は、1923（大正12）年2月、伊藤一行が信州側から針ノ木峠を越えて黒部川を渡り、立山へ登り越中側へ下るというものであった。しかし、悪天候に阻まれ大沢小屋で停滞していたところ、越中から入山した支援隊の芦峅案内衆は平ノ小屋で待機するも、伊藤らがなかなか到着する気配がないと、

針ノ木峠を越えて大沢小屋に来るのである。これは案内人のみでの厳冬期初踏破となる。このことで3月、伊藤らは越中側からの横断へと計画を変更する。この山行は19日間を要するものの、計画を達成し、山行の状況もくまなく撮影できた。それは日本最古の雪山撮影となり「日本アルプス雪中登山」として宮中にも献上され、また、国内各地で上映されて好評を博した。

この年の1月には槇有恒、三田幸夫らのスキー登山において、同行の板倉勝宣が松尾峠で遭難死している。その直後の山行であり、信州側からの計画が撤退となったものの、越中側から目的を達成できたことは意味合いが大きい。芦峅案内衆の力量によるところも大きかったのではないかと想像される。

雪解けとともに伊藤は次の目的「雪の薬師、槍越え」に着手する。ここでは伊藤の登山の流儀ともいうべき「安全性・確実性・快適性」を求めて、周到な準備がなされる。

まずは、入山の準根拠地を有峰とし、ルート上に3つの小屋を建てる。その中心根拠地となるのが眞川小屋である。木挽きを含む雇われた大勢の者たちは、山道整備や資材の切り出し、荷揚げなどにあたる。また畑を耕し、鶏を飼い、炭を焼き、ウサギを獲り、イワナを釣るといった準備が進んだ。眞川小屋ができると、そこでも豆腐を作るなど有峰と同様の準備が行なわれた。さらに稜線上に上ノ岳小屋、黒部五郎ノ小屋も建設した。伊藤は夏の間に槍ヶ岳まで縦走し、冬に備えた下見も行なっている。

そうした周到な準備もあり、この黒部川周辺の登山は12月の第1次上ノ岳冬季初登頂、2次は1924（大正13）年1月、薬師岳冬季初登頂、そして3次は3～4月、黒部源流初踏破から槍ヶ岳への縦走と結実していくのである。

本書グラビアでは、この2回のルート図と、豊富な写真が掲載され、詳細な説明は理解を深めさせてくれる。行動記録と併せて見れば、まるでその場にいるかのような感覚にひたれるだろう。根拠地の作業や案内人の動きなどもよくわかり、貴重な資料である。

ところで、なぜ伊藤は「雪の薬師、槍越え」のルートを思い立ったのだろうか。河東碧悟桐らの針ノ木峠から烏帽子岳を経て槍ヶ岳まで踏破した紀行文に感銘を受けたことは事実であろう。著者は第2章でこれに一考察を加えている。すなわち、夏に偵察行を行なった結果、冬季に実行するには、「針ノ木峠～烏帽子岳」と「薬師岳から北へ」のルートはあまりに危険すぎると判断したと思われるということである。伊藤の流儀は先の3点である。安全確実に、しかも快適に達成できるルートを考えると、その根拠地を有峰方面とするのが最適だと考えたのだ。そのため、山小屋建設や、名だたる案内人を大人数長期間雇用する、といったことで費用はとてつもなく膨らんでいく。それでも尾張徳川家の御用商人、京屋吉兵衛の7代目で資産家の伊

藤にとって、自分の好きなことにかける金額は捻出できたということであろう。

第4章「彼の登山と撮影の流儀」で語られているように、当時の登山界は「登山探検の時代」から「岩と雪の時代」に移りつつあり、また「アルピニズム」（より困難な登山）さらには「無案内主義」といった思想も起こってきた時代であった。それでも大学山岳部などにも属さない伊藤は、そのような風潮に左右されず、自分流の登山を貫いた。結果として、いくつかの冬季初登頂とともに黒部渓谷や白銀の雪稜などを撮影し、記録に残した。その底辺には行動の理念がある。それは立山博物館の表記に倣えば「伊藤一行の趣意書」と言われるものである。これは実は、五十嶋氏の話で筆者が一番刺激を受けたことなのだが、「吾等の制作する映画は、吾等及参加雇人並に其家族等の為の記念撮影にして、他に何等の意味も有せず」などの9項目である。もちろん行動のスピードアップに向け案内人にスキーを習熟させるとか、最新の装備も使用する、といった安全対策にも抜かりはない。しかし、撮影のこともあろうが天気の悪い日には敢えて行動しない。決して無理はせず、趣意書にあるように「吾等は自然に対し徹底的に憶病たるべきこと」のスタンスなのである。

この時代としては画期的な冬季の初登頂や黒部川源流の踏破などとともに、それを撮影したことは、パイオニアワークと言ってよいが、先の通り「記念撮影にして他に何等の意味も有せず」とはどういうことなのか。彼の登山と撮影は何であったのか。この疑問に対して著者は「伊藤孝一の登山と撮影は自己実現」として見解を披露している（第5章）。

第6章の「伊藤登山の解釈、誤認・誤記」では、伊藤登山が当時の日本登山史に記されていないこと、あるいは伊藤が日本山岳会を退会した理由など、最近はインターネットで誤った情報が拡散されていることから、ここで正さないといけないとの著者の正義感で、修正をしてほしい誤認を取り上げ、多くのページを割いて著者の見解を示している。

第7章は本書の「参考文献・資料」を章建てし、伊藤の雪山山行掲載の有無と、その取扱いがどの程度であるかをイメージできる形で区分を行なっている。

第9章は「明治・大正期の登山」と「伊藤孝一の年表」。これは伊藤孝一のライフステージを4つに区分し（没後も含む）、伊藤の登山の位置づけがわかるようにした登山史であり、労作である。できることなら、より大きな紙面で別刷りにすれば見やすいかと思える。この年表を見る限り、残雪期の富士山などの登山はあるものの、伊藤は本格的な登山を数多く重ねたとは言えない。しかし、彼には好きな山について語り合える仲間がいた。百瀬慎太郎と赤沼千尋である。2人はそれぞれ山案内人組合を設立しているが、それに関連して1章を割き、従来の考え

を覆す見解を述べている（第8章）。

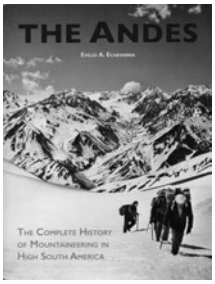
また、準根拠地とした有峰集落は電源開発によって湖底に沈む運命にあったが、守り神である狛犬が湖底に沈むのを避けたいと思った伊藤は、これを購入して保存したいと考えた。この経緯についても、最終第10章で丹念な究明を行なっている。

伊藤孝一の登山と撮影の実態、また、関連する周辺の事情に関して幅広く情報・資料を収集し、それを吟味し突き合わせることで実像・真相に迫った、伊藤孝一研究書と言える一冊である。個人的には、伊藤孝一がどんな若者であったかがイメージできた気がしている。多くの方に読んでいただくことを期待したい。

（荒井正人）

Evelio A.Echevarria 著

『THE ANDES』



Joseph Reidhead & Company Publishers 2018
Augusta, Missouri in Yosemite, California USA
ペーパーバック　827P
US＄64・50

エチェベリア氏はここ半世紀余り米国山岳会機関誌〝The American Alpine Journal〟に毎年、アンデスの登山情報を投稿していた登山の実践者である。自らの登山体験だけでなく、多国の山岳会機関誌や山岳雑誌を情報源にした研究成果を集大成した著書は、「アンデス百科事典」と言っても過言でない、傑出した大作品と言えるだろう。多数の写真、イラスト、手書き地図があり、読者を惹きつける。

著者は１９２６年、サンティアゴ（チリ）生まれ。65年の間にチリの山から始まり北はベネズエラから南はアルゼンチン、チリに至るアンデス山脈で１００以上の未踏峰に初登頂し、北アメリカ大陸のロッキーの山々も踏破している。また〝Revista Andina〟を発行しているThe Club Andino de Chile の The Santiago Section 会員で、米国コロラド州立大学の名誉教授である。

本書は序説、アンデスの景観、地図、索引、付録Ａ：アンデスの名前、付録Ｂ：アンデス初登頂者クロニクルなどに分けられている。

Introduction：序説

１万５０００年～８０００年前の有史以前の穴居人から現在まで、アンデス高地に登った人々の歴史を正確に捉えるのは、アルプスやヒマラヤに登るより難題だと言われる。ここではご

く初期の不明瞭な登頂、登山揺籃期、第1次大戦終了までの登山、そして、1938年以降のスポーツとしての登山などについて概説している。

情報源は〝The American Alpine Journal〟など代表的な山岳会の機関誌や各種登山雑誌などだが、例えばペルー・アンデスのブランカ山群に1950年～1980年の30年間に、遠征隊だけでも1000隊以上が入山している。膨大な情報の中から初登頂者のクロニクルを抽出し確認する作業が、いかに煩雑だったか途方もないことである。

嬉しいことに情報源となった各国の代表者リストに、吉沢一郎氏と中村保氏の名前があった。

1章　Range of the Copper Sunsets：「赤銅色の夕日に映える山脈」

Andesの語源は、その辺りの国々で話されていたケチュア語のautaが変換したものだ。アンデス山脈で最も多く産出される金属がCopper（銅）である。人々はアンデス山脈の西の太平洋側に住んでおり、麓から夕陽に輝く岩峰や雪を頂いた山々を見て、世界で最も素晴らしい「Copper Sunsets 山脈」と名づけたのだろう。

多くの人々にとってアンデスの広さや高さは想像しにくいだろう。7000近くもある高い峰、世界でも2番目の高山地帯である。北から南まで6500km以上あり、ベネズエラを除いてコロンビアからパタゴニア、フエゴ山群まですべて太平洋に沿って南下している。一方、アンデス山脈の東側は広大なアマゾン地帯であり、アンデス山脈がオリノコ川やアマゾン川、ラプラタ川など大河の源流となっている。

◆アンデス地域の気候について：地図No.1

北から南につながるアンデス山脈を5つのブロックに仕切って、登山・旅行に好都合なシーズンが一目瞭然分かるように記載している。これらの地を訪問する人には実に便利な地図だ。

1、北部アンデス（ベネズエラとコロンビア地域）：12月～1月。

2、エクアドル：7月と12月～1月。

3、中部アンデス（ペルー、ボリビア、チリ最北部）：5月～9月。

4、南部アンデス、砂漠地帯（チリ、アルゼンチン）：11月～4月。

5、南部アンデス、（チリ・アルゼンチン中部と南部、austral（パタゴニアとフエゴ山群）：12月～3月。

基本的に気候は下記の3パターンに分けられる。

1．ベネズエラ、エクアドル、そしてColombian Cordillera Oriental（コロンビアのオリエンタル山脈）は4月から11月まで夏の雨季ではあるが、7月に降雨が不活発になることがある。

12月から3月は安定した冬型が続くが、エクアドルでは霧が発生することがある。

2．エクアドルのCordillera Central（セントラル山脈）とペルー、ボリビアの山々は12月末から4月末まで夏の降雨期となるが、5月から12月初旬までは冬型となり天候は安定している。ただし、エクアドルでは午後、霧が出ることが多い。

3．チリとアルゼンチンの山々の四季は同じだ。北部は12月から3月は安定した夏季、4月から6月は不安定な秋となる。7月から9月の間、高所では降雪がありスキーに適している。9月から11月は次第に暖かくなり、乾燥した春が期待できる。

◆各山脈の特徴など：地図№2

1．ベネズエラ：3つの山群あり。国内のアンデスは、太平洋から遠く離れたカリブ海に面するカラカスから南西に延びる山脈と、最西端から南下する山脈がコロンビア国境で合流する。ベネズエラ・アンデスは、ケニアや中央アフリカあるいは南米の熱帯高地地方に似ている。風変わりな野菜などが栽培されている。ベネズエラの最高峰Pico Bolivar（ボリバル、4978m）はメリダ州にある。

2．コロンビア：4つの山群あり。Sierra Nevada de Santa Martaが大きな山群で、灼熱のカリブ海の南42kmから立ち上がっている。

ベネズエラから南下するオリエンタル山脈とパナマの南東から太平洋に沿って南下するオクシデンタル山脈が、エクアドルとの国境手前で1本化する。コロンビアの最高峰Pico Cristbal Colon（クリストバル・コロン、5775m、日本地図＝5800m）はコロンビア国の最北端に位置する。

3．エクアドル：国名はスペイン語の「赤道（Ecuador）」からきている。2つの山群あり。Cordillera Centralには登山者に人気のある火山Chimborazo（チンボラソ、6310m、エクアドルの最高峰）がある。Cordillera Orientalは浸食が進んでいない若い山々でCotopaxi（コトパクシ、5897m）を擁している。これらの山群は赤道のわずか北から南緯5度線近くまで南下している。

◆地図№3

ペルー：27の山群がある。アンデス山脈はエクアドルとの国境から太平洋に沿って南南東に延び、チリの最北部とボリビアに至る。この辺りでアンデス山脈の東西幅が最大限700kmを超すアンデス高地を形成している。ペルーの最高峰は登山者、トレッカー、旅行者に人気のCordillera Blanca（ブランカ山群）の最高峰でもあるHuascaran（ワスカラン、6768m）であり、Aricoma山群、Vilcanota山群などが群雄割拠している。

◆地図№4

ボリビア：11の山群あり。ペルーとの国境を挟んで二分割さ

れたApolobamba山群はじめ、アルゼンチンとチリ両国との国境線にあるOccidental山脈など3ヶ国に接している。最高峰で氷河を有する火山のVolcan Nevado Sajama（サハマ火山、6542m）は、チリとの国境線に近いが、ボリビア国内にある。

◆地図№5

1．チリ：南下する国境線がアンデス山脈を見事に東西に二分する。その結果、両国のアンデス山脈は国境線に沿って並行に南下している。Punaと呼ばれる北部地方はアルゼンチン側と共に高地だ。チリの最高峰はOjos del Salado（オホス・デル・サラド、6908m）で、アルゼンチンとの国境線上にあるが最高峰はチリ側にあり、世界で最も高い活火山でもある。中部地方ではトレッキング、登山、スキーが楽しめる。

チリの最南部Australにはアンデス山脈最南端のPatagonia（パタゴニア）と氷に覆われたTierra de Fuego（フエゴ台地）がある。両者とも年中極端に寒く、ほとんど日照はない。降雪もしばしばあり、夜が1日20時間以上のこともある。パタゴニアの最高峰はCerro San Valentin（3910m、日本地図では4058m）、フエゴの最高峰はCerro Shipton（2568m）とある。

2．アルゼンチン：チリ・アンデス山脈の東側に並行して南下している。気候はチリと同じようだ。しかし、アルゼンチン・アンデスの方が東西に幅広くなっている。その結果、乾季の降雪や山中の氷の量は少ない。北部にはチリでもPunaと呼ばれる高地が広がり、大きな山がたくさんある。中部にはアルゼンチンの最高峰であり、かつ南米アンデス山脈の最高峰Aconcagua（アコンカグア、6960m）がある。頂上はチリとの国境線のアルゼンチン側にある。Austral地域のPatagoniaでは多くの氷河が後退しているが、Fiztroy（フィッツロイ）やCerro Torre（セロ・トーレ）のような尖塔がたくさん聳えている。最高峰はCerro San Valentinでチリと共有している。アルゼンチンのフエゴ地域は山としては小さい。

〈筆者注〉アンデスの山中では未だ国境が確定されていない所が散見されるので、僻地に潜入するときはご注意ください。

2章　Forerunners to The Pionners：先人たち

アンデスの高地に住む穴居人が、高所から流れ落ちてくる水を求めて山に登った。彼らの注目を集めたのは、川底にある滑らかな黒曜石だった。それらは石器時代の人々にとって狩猟用の貴重な武器となった。一方、高所に登った祖先たちは火山の縁にたどり着いて、黒曜石が川底に流れてきたものであることにやっと気がついた。エクアドルでは2万～5000年前の採石場も見つかっており、ボリビア、アルゼンチンでも同じようなものが発見されている。ペルーではBC1100～900年代、4000mの高所に居住した人類の痕跡が多数見つかり、

その後、６０００ｍの山頂にもインカが残した遺跡などを発見している。

3章　The Colonial Mountaineers：植民地時代の登山者

インディオが穴居人に代わり、その後でスペイン人が乗り込んできた。

１５００年代には水先案内人がアンデス北部からカリブ海に達する地図を作成している。そこにスペイン人が来て、高所や雪、寒さにも馴染んでいった。疲れを知らないスペイン人たちは、20年後に世界最長のアンデス山脈の南の末端までたどり着いている。熱帯にある山々の氷や雪は彼らを当惑させたが、歩みを怯ませるほどの障害ではなかった。そして、スペイン人のみならずヨーロッパ人たちの探検や登山が始まった。

4章　Pioneers：パイオニアたち

ロマンチシズムの下に「南米スペイン国」が生まれたが、そんな悠長な時代は長続きしなかった。経済的な理由からアンデスを科学的に開発し、利用する方向に動いていった。ドイツ、英国、フランスなどからやって来た登山者、トレッカー、科学者は高山に登り、遺跡を発見するなどアンデスの広範囲で活躍した。

5章　Motherland and Science：祖国と科学

ヨーロッパ人が積極的にアンデス開発を支配する世になっていく。これらに携わった人たちは立派な実績を残し、任務への献身が称賛された。ごく初期の「コミッション」と呼ばれるグループは１８５０年頃に設立され、写真技術を持ち込み、アンデスの山のみならずあらゆる物の写真記録を残すようになった。時間契約のお雇い絵師を帯同し、山、風景、登山活動などを記録に残したコミッションもあった。

このようにして各国で開発と探検が相次ぎ、５～６０００ｍ峰も登頂され始めた。地図作製も盛んになる。ピークに立った登山家たちは頂上から四方を俯瞰して、立派な地図作成に大きな貢献をした。植物の研究も一段と前進した。

6章　Greatest Andeanist：偉大なアンデス山脈に奉げた人

探検とは何か？　との問いかけに、アンデスのコミッションは４つのことを義務づけていた。1．アンデス山脈の調査、2．自国と隣接国との境界線上のギャップや峠に基標を打ち込むこと、3．縮尺１／10万と１／25万の地図の作成、4．将来重要視されると予想される地形などの写真を撮り残すこと。その上に、地質学、氷河、気象、自然史、考古学的な調査結果や民間伝承記録もコミッションの仕事に加わった。こうして各国のナショナリズムが台頭してくる。

7章　Trailblazers of all of us：我々の先駆者たち

アレキサンダー・フォン・フンボルト（博物学者、地理学者、探検家）はエクアドルのチンボラソに登ろうとしたが、頂上近くで引き返したのは登山界で有名な話である。その直後、１８８０年1月にエドワード・ウインパーがチンボラソに初登頂した。その後、彼は登山のプロモーターとも呼ばれ、地勢図や製図者としても立派な作品を残した。フンボルトもその後、エクアドル・アンデスで大活躍をしている。

8章　The Classic Expeditions: 1868〜1914：古典的遠征隊

遠征内容が科学的要素の大きかった時代から、19世紀終盤のヨーロッパでは「よりスポーツ的な要素」に注目が集まるようになってゆく。やがて第1次世界大戦に突入していく。さらに国土拡張や帝国主義が極地レースにも影響し始める。コロンビア、エクアドル、アルゼンチンなどには大きな遠征隊が入って多数の高山を登り、山容が解明されていった。１９１１年には、外交官と結婚したエクアドル女性がTungurahua（５００５ｍ）に登頂している。また、チリやベネズエラ人もアンデス登山に成果を残し、中でもチリのニコラス・マルチネスは火山の地図まで作成している。この前後でアンデスの古典的登山時代は終わった。

9章　The Father of the Andinista：アンデスの父

20世紀の初頭、ドイツ生まれのFritz Reichert（化学者、地質学者、登山家）はアルゼンチンのPunaで硼酸塩やほかの非金属成分を見つけ出し、より高所に行って硼砂（ほうさ）平原にたどり着いた。その後Boronatro calcite（曹灰硼鉱（そうかいほうこう））も発見した。そして、多数の高峰に登頂している。アルゼンチンやチリの人たちは彼を「アンデスの父」と呼んでいる。

10章　The National Gringos: The Germans and Others：スペイン語が解せない南米人：ドイツ人など

スペイン・アメリカで、スペイン語を理解しない人々は「グリンゴ」と呼ばれていた。１８８０年〜第2次世界大戦の頃になると、アンデス登山に貢献した人々を「グリンゴ」と称するようになった。ここでの「グリンゴ」は新しくこの地に来たが、ほとんどスペイン語が解せなかった人たちのことである。イタリア、オーストリア、ユーゴ、バスクやスイス、英国、スカンジナビアから多くの人たちがやって来て、大型アドベンチャー化していった。19世紀末の新参者たちは、スポーツ感覚でチリやアルゼンチンで高所に登った。登山はますます冒険的で熱狂的になっていく。

「アンデスの富士山」と言われる、雪を頂いたParinacote（６３４１ｍ）の綺麗なカラー写真も掲載されている。

ここまでが序説である。

Scenery of the Andes：アンデスの舞台

熱帯植物を前景に氷河をいただくベネズエラの山、氷河の発達した高峰、アンデスに住む人や動物など序説と併せて３００のカラー写真やイラストは見るだけでも楽しく、読者をアンデスに誘ってくれる。

11章　Aconcagua: To Win the White Sentinel：アコンカグア：白い哨兵に打ち勝つために

アコンカグアはチリとの国境線から22㎞、東セントラル山脈に聳えている。火山ではないなど地質の話から歴史や登山史の解説がある。

12章　The International Expeditions 1914〜1953：国際遠征隊

２つの世界大戦間の40年は、世界が戦争に疲弊していく中でヨーロッパ人にとって最も良き時代だった。健全な冒険心が生まれ、多くの国がツーリズムに門戸を開き、愛国心はスポーツに反映された。アンデス諸国では国際隊が積極的な登頂活動と科学的調査に成果を上げたが、第２次世界大戦中はその活動も中立国スイスなどに限られた。

13章　The Emergency of Andinismo：アンデス登山の急変

この数世紀の間、人々は実用目的から高所を訪ねたが、ヨーロッパからロマン主義が広まってからは、科学的好奇心や軽いリクリエーションとして人々は山に駆り立てられていった。南米での同好会は山仲間クラブとなって発展し、ドイツ人は山岳クラブを立ち上げ、山岳誌も発行、山小屋も最初に建設した。また、スキーヤー用の休暇所や登山者用の避難小屋まで建設した。こうして山岳はスポーツの主役となっていった。

14章　The Song of the Hill-man：高地に住む人たちの歌

墓堀り：アンデスの高所で墓堀り、盗掘が横行した。

探鉱者と密輸行者：探鉱者は頂上を目指したが、墓堀りや盗掘者は墓からの発掘埋蔵品などを密輸業者に転売し、人目を避けて峠を目指し安全な地方に向かって下った。

雪男：アンデスにはいわゆる「雪男」はいない。しかし、ベネズエラやコロンビアでは、山から「氷雪」を担ぎ下ろし、売り物にする人がいた。コロンビアでは火山から硫黄を切り出し儲けている人もいた。

牧童：牧童は基本的には家畜を飼い家畜と共に暮らしている人たちであり、登山隊が荷上げを頼むアリエロは運送業者である。荷物の積み込みや荷下ろしはやってくれるが、それだけが自分たちの仕事と割り切っているので気を付けて欲しい。

硫黄男：火山の山頂近くまで登り、硫黄を採掘して生計を立てている人たちも昔からいた。

15章　Youth Surges Forwards: The Andinistas：登山する若者は前進を

アンデス諸国でそれぞれ登山協会を設立する動きがあったが、主要都市から山の遠近差や社会の貧富の差も影響した。7ヶ国のお国事情が述べられている。

16章　The Instituto Geografico Militar：軍の地理学協会

自国の領土の確認、そして、紛争中の国境線問題解決のため、アンデス7ヶ国で国営あるいは軍の傘下に地理学協会が設立された。コロンビアの民間協会を除いてベネズエラとペルーは国営で、ほか4ヶ国は自国の軍の傘下にある。ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリについては変遷史など掲載されている。

17章　After Qomolungma: The Foreign Scene: 1953–2015：エベレスト初登頂以降、海外からの遠征隊

エベレスト初登頂後、世界の登山界はダイナミックに変化した。アンデス7ヶ国のCordirella（山群）ごとに仕分けされた実績が七十数ページあり。内容が充実しており大いに参考になる。1958年、田中薫隊長率いる神戸大とチリの合同隊が空軍飛行機の動員支援も受けて大成功を収めたこと、その後1961年、外貨統制時代に文部省の探検・登山枠半期1万$をシェアしてペルー・アンデスに入った、吉沢一郎氏率いる一橋大隊と関西学院大隊の行動も掲載されている。

18章　After Qomolungma: The National Scene: 1953–2015：エベレスト初登頂以降、アンデス国民の国内での登山活動

貧富の差はあるにしても、遠征費を工面してやって来る海外からの遠征隊に比べ、現地ではそれぞれお国事情の違いがあり、小さな山岳会から国内を統一する山岳連盟の結成やそれぞれの登山活動にも反映されている。アンデス7ヶ国の登山実績が36ページにわたり列挙されており、近年のアンデス登山活動を知るには、前章と併せて大いに参考になる。

19章　Women In The Andes：アンデスの女性たち

In the Neolithic：石器時代　8000年ほど前の石器時代からエクアドルでは女子、子どもを含む家族がアンデスの高所に住んでいたことが分っている．

In the time of the Incadom：インカ帝国時代　1200年代初頭から1500年中頃までのインカ帝国時代には、女性たちが山頂で犠牲にされた形跡があるという。

Feminine Andinismo：女性の登山活動　ヨーロッパからス

ポーツ感覚の登山がアンデスにもたらされ、近代社会にも影響を与えた。最初にアンデスの頂上に立ったのはNadine Lukuinで１９０３年、アルゼンチンのCerro Tolosa（５３５８ｍ）に初登頂している。また、１９０３～11年にかけてAnnie Peckはペルーやボリビアの山々に登り、ペルーのワスカラン北峰（６６５４ｍ）を含め７つのピークに初登頂した。その後も女性たちの初登頂が続いた。

On the Highest National Top：自国の最高峰登頂　ベネズエラ（１９４６年）、コロンビア（１９７６年）、エクアドル（１９５８年）、アルゼンチン（１９４６年）、チリ（１９７９年）の最高峰に初登頂した女性が紹介されている。しかし、ペルーとボリビアの最高峰登頂女性の名前は手持ちの膨大な資料を当たっても、見つからないとのこと。

Technical Difficult：登攀技術の難易度　登攀技術や高度のテクニックを駆使した女性たちの登山は、一般的な報告書だけでは把握ができない。著者の目にする範囲の会報や山岳雑誌では見つけ出すのは困難であったという。

Women and Exploration：女性と探検　１９５２年、男女混成隊の女性がサンティアゴに近いCerro Bello（５２００ｍ）に初登頂の快挙を成し遂げた。その後１９８３年、アコンカグアを目指す女性のみのチリ隊や、１９８４年1～2月に極地で30日間、１７９㎞を歩き通した女性グループもあった。

20章　Summit Archeology: Pride of the Andinistas：山頂考古学：アンデス登山者の誇り

山頂考古学なる表現は著者による２００７年の造語だという。この言葉は現在もアンデスで研究を続ける考古学者に使われている。１６７４年、Father Mendezは異教徒時代の遺跡がEl Misti（５５２３ｍ）山頂にあるのを発見している。その後もインカ遺跡の発見が相次ぎ、現在１６２ヶ所で山頂遺跡が見つかっているという。

21章　Epilogue：結び

著者の言葉として「アンデスの登山はヨーロッパやヒマラヤ登山より５００年も前から始まっています。クロニクラーとして30余年を費やし膨大な資料を集め、このような書籍の形にすることができました。アンデス山中で勇ましく生きた人たちの10万年の簡潔な記録を、読者の前に披露いたします。アンデスの頂上に立ち向かった南米人を慈しみつつ記しました」と結んでいる。

しかし、まだ本は終わらない。この著書の約1／3でもある３０２ページが続いてゆく。実はここからが、著者が苦心惨憺の末作り上げた作品集である。

Maps：地図

地図№6から№60まで、アンデスの山群をすべて網羅した著者力作の手書きイラスト地図が、大変親しみやすい。ほとんど縮尺は書かれていないが、主要山頂の名前と標高、河川名など記載されている。それぞれの地図下欄の注意書きも目を通されることをお勧めする。アンデスを知り尽くした著者しか描くことができないこの55枚の地図を眺めているだけで、読者はアンデスに誘われることだろう。

Bibliography Consulted：人名による参考書名

著者が手にした情報源を記している。数百冊の参考書籍の最初に Abe Shigeo, 1969, Bolivian Andes, 1968〝In Sangaku〟。と記載され、最後の方に Yoshizawa Ichiro 1962,〝Cordillera Blanca and Apolobamba in Sangaku, P.21-25〟とある。日本山岳会の機関誌『山岳』の英文目次が役立っていることが確認できて嬉しい。

Notes：脚注

1章から20章までの関係者についての脚注あり。

Index：索引

山名、山岳会など当書掲載の索引。

Appendix A：追記A

アンデス7ヶ国はそれぞれ新発見の山や氷河などの命名について規定している。地元の名前がないかなど徹底的に調査し、注意書に従うように記している。

Appendix B Survey of Andean First Ascents：追記B　アンデスの山々の初登頂者記録

これは著者が30年にわたり渾身を込めて作り上げたクロニクルである。

ネパール・ヒマラヤ高峰のクロニクル作成者エリザベス・ホーリー女史は、1963年米国のエベレスト登頂をスクープしヒマラヤの登頂に興味を抱いたのがきっかけで、素晴らしい多数の高峰の登頂年代記を作成した。彼女は40年間にわたり、ネパール政府が登山許可した遠征隊に入山前と下山後にインタビューし、登頂の可否を確認してデータを収集した。また、彼女が興味を持つ以前のデータは、ネパール政府に提出された過去の登山報告書などから集めた。

『ジ・アンデス』のクロニクルは著者が30年かけて各国の山岳会の機関誌、会報、山岳雑誌など数百点の記録などからデータを作成した。アンデス最北端のベネズエラから最南端のアルゼンチン・フエゴまで、国別・地域別に約3000の高峰の初登頂クロニクルを完成させた。60年近く前の一橋大隊、関西学院大隊や、外貨規制解除直後、1964年の上智大隊の初登頂記録も明記されている。

著者の抜かりなきデータ収集に敬意を表する次第である。ただし、ほとんど登頂者の個人名のみが記載されているだけで、登山隊名は記載されていない。この3隊に参加した個人名を記

憶していたので確認できたことを申し添えておきたい。

アンデス関係の書物としては初めての試みだけに、驚きは隠せない。今後アンデスを目指す人や興味のある方々には、今までになかった参考書物になることであろう。

（南井英弘）

追　悼

高村　泰雄さん

たかむら　やすお
（1934～2019）
会員番号 4642

２０１９年６月４日、永年会員だった高村泰雄が息を引き取った。享年84だった。

高村は２０１６年９月に大腸の肝湾曲部とＳ字結腸の２ヶ所の癌が診断され、右半結腸とＳ字結腸の切除を受けた。約１年後の２０１７年10月、肝臓に５㎝大の転移が見付かり摘出術が施行された。早過ぎる転移だったので心配したが、周囲のリンパ節に転移はなかったとの主治医の報告に安心した。しかし、半年後には肺、さらに頚部への転移が出現して、声帯の運動を支配する反回神経の圧迫で発声が徐々に困難になってきた。

２０１８年の12月、恒例の日本山岳会の年次晩餐会が新宿の京王プラザホテルで開催され、チョゴリザ登頂60周年を記念して報告会が企画された。チョゴリザの隊員であった中島道郎、平井一正、芳賀孝郎、岩坪五郎、高村泰雄が出席、まず平井が映画『花嫁の峰チョゴリザ』の総集編を上映して、登山報告をした。終了後、会員として臨席されていた、当時皇太子であった徳仁殿下と隊員たちはしばらく歓談した。

このときの報告を、高村は「ＡＡＣＫニューズレター」に執筆した。私はこれが彼の最後の執筆になるだろうと思ったので、しっかり書くように励ました。彼も自覚していたと思うのだが、病魔に疲れた身体に鞭打ってチョゴリザ報告会、晩餐会、その他の思い出を詳しく書き上げ、「ニューズレター」88号に掲載した。

京大山岳部時代

高村との初対面は、１９５３（昭和28）年の新入部員面談のときだった。新入部員はあまり発言しないのが普通だが、１人かなり的確な質問をする者がいた。それが高村だった。後で大阪の高津高校出身で、山岳部員だったことが分かり、有望な新人が入ったと喜んだ。

高村は入部後、合宿その他の山行を重ね、着実に実力を着けていった。1956（昭和31）年にはチーフリーダーに選任され、部を統率指導した。

高村との山行で最も記憶に残っているのは、1955年春の毛勝・猫又より剱の縦走合宿である。OBの脇坂誠が企画し、山岳部の総力を挙げた計画だった。最終のC5から高村と2人で、アタック隊の高谷好一、酒井敏明を送り出した。一晩明けても帰ってこない。池ノ谷に雪崩の痕が見えた。通信方法の全くない時代で、いても立ってもおれない思いだった。二晩明けた朝、テントの外にいた高村が2人のコールを聞き付けた。高村は天啓の声に聞こえたと言っている。テントの中にいた私は、思わずしゃくってしまった。2人は剱登頂後の帰路、池ノ谷で雪崩に遭ったが奇跡的に助かり、折れかかった1本のピッケルを細引きで縛って、それを頼りに稜線に戻り、一晩またビバークして帰ってきたのだった。

チョゴリザ

1958（昭和33）年8月5日、京都大学学士山岳会（AACK）は、カラコルム・バルトロ氷河流域の未踏峰チョゴリザ（7654m）の初登頂に成功した。桑原武夫隊長、加藤泰安副隊長が率い、登頂者は藤平正夫、平井一正だった。高村は最年少隊員（24歳）として参加した。準備やキャラバン、登攀では氷河ルートの開拓、荷上げでこき使われた。

逸話が残っている。C4の平井から朝の交信で「高村の意識がなく、憂慮すべき状態です」との報告があった。聞かれた隊長は驚いて、C3手前にいたドクターの中島道郎にすぐC4に急行するよう指示された。C4からの中島の報告は「高村はうわ言を言って昏々と眠り、今は意識もはっきりしてきた。注射してC3に降ろす」とのことであった。

桑原隊長は著書の『チョゴリザ登頂』に、高村の急変はケロシン・ガスの中毒だったらしい。生真面目な高村はいつも人の嫌がる仕事を買って出て、よく働く。今朝も人を起こさず、点火の悪いラジウスと格闘しているうちに、生ガスを吸ってしまったらしい、と書いておられる。

登頂成功の翌日、8月6日にはC4のすぐ目の前のカベリ・ピーク（6950m）に、山口克、中島道郎とともに高村は初登頂している。

サルトロ・カンリ登山許可取得

AACKはチョゴリザの後、1960（昭和35）年には酒井敏明、岩坪五郎がアフガニスタンのノシャック（7492m）の初登頂に成功した。次の目標はサルトロ・カンリ（7742m）だった。サルトロ・カンリはインドとの国境に近いためか、パキスタン政府の許可を取得するのに難航した。1961年、現地で情報収集と交渉を行なうため、チョゴリザ隊員だった高村が派遣された。彼は当時、大学院博士課程の2回生だった。

桑原武夫教授が直接、長谷川教授に頼みに行かれ、許可が出たのだった。

6月4日、当時首都であったカラチに着いた高村は、日本大使館の信頼と援助を受け、パキスタンの登山許可に関する政府機関、外務省、カシミール省などに足繁く通って人脈をつくり、精力的に情報を収集した。登山隊長の四手井綱彦教授のパキスタン訪問のときに、ともにラホールに行き、カラコルム・クラブと折衝して、パキスタン・日本の合同登山隊を結成する体制を固めることができ、許可申請書を提出した。

11月17日、ちょうど親善訪パした池田勇人首相に古内大使が合同登山隊のことを伝えられ、アユーブ・カーン大統領との会談の席で直接、許可が下りるという幸運にも恵まれた。6ヶ月間のパキスタン滞在で、皆が待ち望んでいた大きな成果を獲得した高村は、登山許可書をみやげに12月13日、晴れ晴れとして帰国した。

日・パ合同サルトロ・カンリ登山隊

日本（AACK）側は隊長以下10名で、隊長は四手井綱彦、副隊長はチョゴリザと同じく加藤泰安、登攀隊長は林一彦だった。高村はもちろん隊員で、私は医師兼食料係で参加した。

パキスタン側は4名で、隊長はアブドル・ハミッド・ペケ。これまでの京大の学術隊に関係ある人だった。副隊長はハイアット・アーマッド・カーンで、カラコルム・クラブのトップだった。隊員はラジャ・バシール・カーンとベルベッツ・アーマッド・カーンの2名。驚いたことに2人とも登山は初心者だった。仕方なく登山、氷雪技術などは現場で訓練した。幸い2人とも素直で、必死だったと思うが基本から良く吸収した。最終的にバシールは登頂隊員に選ばれた。

カラコルムの登山基地スカルドからサルトロ・カンリの麓まで、長い複雑な遠征を実感する行程だった。インダス河の支流に沿って東進、最奥の村ゴマから北北東に流れるビラフォンド氷河を登り、ビラフォンド峠（5500m）を越え、ロロフォンド氷河を降りてシアチェン氷河に出る。上流の南南西に流れるサルトロ氷河に入り、上行してやっとサルトロ・カンリの全容を見上げる。

7月6日、山麓にC2を建設、本格的な登攀活動が開始された。急峻な雪壁と深い雪に苦闘した。アイゼンの上に爪を逆にして着けたワカンが、深い雪のラッセルに威力を発揮した。7月19日には6400mにC4を建設し、登頂態勢に入った。

サルトロ・カンリ登頂

7月22日、アタック隊員に選ばれた高村、バシール、齋藤の3人は、林登攀隊長、谷泰、上尾庄一郎の強力なサポートを受け、7000mのC5予定地に着いた。もう薄暗くなっていた。疲れ切って戻るサポート隊を見送り、すぐテントを設営した。2人用テントに3人入る。エアーマット2個、シュラーフは1

個だ。C5用に準備した食料は、出回り始めていた凍結乾燥食品を多く取り入れ、アルファ米や牛肉、野菜、卵があった。貴重品だった軽いブタン・バーナーを使い、トマトスープにそれらとサラダ油を入れ、栄養補充した。高村は設営中に嘔吐したので、食事を作る間、休ませる。3人で1枚のシュラーフを掛けて、なんとか眠った。

23日朝、1時半に起床。昨夜のスープの残りにアルファ米を入れ、雑炊にして食べて出発。アイゼンだけを着けて出たが、雪が深いのでワカンを着けて再出発したのが4時半だった。ほぼ直登が続く。途中、雪が硬くシュカブラ状になったので、ワカンを脱いでデポする。先頭を登っていた高村が急にしゃがみ込んで嘔吐した。その拍子にザックが転げ落ちた。２００ｍぐらい下で運良く止まったので、私が拾いに降りた。上って高村を見ると、吐いたら気分良くなった、と言う。これならドクター・ストップをかけることもない、と安心した。

天候は良く、安定して無風に近く、青空がまぶしい。２００ｍぐらいの高さのジャンダルムの岩峰の基部近くに来て、やっと頂上に至る主稜線の全貌が見えた。なだらかな雪原状だった。この辺から急に雪が膝上ぐらいまでになった。午後2時半、今日中に登頂して帰るのは、この深い雪では困難と思い、高村と相談してビバークすることに決めた。７４００ｍの高度だが、１９６０年のノシャック初登頂の帰路、酒井と岩坪が７０００ｍ付近でビバークしたことを思い、不安はなかった。

小さいツエルトに3人入る。長身で、膝を曲げて座る習慣のないバシールは気の毒だった。暖かいうちに眠ろうと、夕方まで3時間ぐっすり眠った。夜になると寒さが身に染みるようになった。うとうとしては、寒さでぶるると震えて目を覚ますの繰り返しだった。

24日午前2時、外を見ると月明かりで主稜線が見える。思い切って出発する。膝上から股までのラッセルを、3人交替で黙々と続ける。高村が後で「これは雪の中の遠泳だった」と表現した。途中、高村がまた嘔吐する。吐いてしまえばすぅっとするらしく、ラッセルのスピードは落ちない。斜面が30度ほど急になった。アイゼンを着ける。平安高校の丹先生特製の甲賀流陣中白狐兵糧丸の黒い塊を分けて食べる。バシールもいぶかしげな顔をして食べる。

最後の斜面を高村がアイゼンを蹴込み、慎重に登る。頂上には、最初にパキスタン人のバシールに立ってもらうことを打ち合わせていた。バシールは驚いた様子だったが、パキスタン、日本、ＡＡＣＫの小旗を着けたピッケルを受け取ると両手で持ち、恭しく膝まずいて頂上に立てた。午前10時45分だった。青空の下、北から西にかけてＫ2をはじめバルトロ氷河流域の白い高峰群が並び、正面に見える梯形の山はチョゴリザだ。隊員だった高村にとって、ひときわ感慨深い眺望だったと思う。

振り返って東を見ると、いつもよく見えていたシアチェン氷河流域のシンギ・カンリ、テラム・カンリ、アプサラサスの山群が連なる。真正面には墨絵のような太い単純さ（これは高村の表現）を持ったテラム・シェール氷河が、シアチェン氷河から真直ぐ天に向かっていた。迫力一杯の眺めだった。

開発されたばかりの松下電器のトランシーバーを使い、登頂を報告する。C5の上尾がキャッチして、応答してくれた。ビバーク地点からは電波が届かず、心配を掛けてしまった。ヒマラヤの登頂成功が無線で連絡できたのは、世界最初だったと思う。

12時15分、下降を開始した。ビバーク地点に着いたころから、3人ともどっと疲れが出てきた。よたよたと下る。バシールは英語とウルドゥー語で「ワイズマン、アラームカロ（賢者よ、休もう）」を繰り返す。登山は初心者だったのに、よく頑張った。高村は休むと何かぶつぶつ言って眠る。薄暗くなってきた。迎えに来た林登攀隊長と岩坪に会う。5人で抱き合って喜びに浸った。C5で改めて四手井隊長、加藤副隊長にトランシーバーで無事帰着を報告して、上尾が作ってくれたお粥をむさぼり食べたのだった。

サルトロ・カンリ後

高村は農学、作物学が専門だった。大学院時代からイネ、そしてサトウキビ、サゴヤシ、イグサなどの研究を続けた。

1988（平成元）年には、京大アフリカ地域研究センターに新設された生業構造論の初代教授として岡山大から赴任した。タンザニア、ザンビアを中心に農業を主に調査、研究に力を尽くした。98年退職後は、JICAの派遣でアフリカ諸国の農業調査指導に当たった。

1993年から4年間、AACKの会長となり、第3次日中合同梅里雪山登山隊を派遣した。

最後の見舞い

2019年の3月ごろより声のかすれが強くなり、嚥下障害も出てきた。主治医に勧められて京都国立療養センターの緩和病棟に入院した。

私は、彼は夏を越せないだろうと感じた。それで5月22日、平井、酒井、岩坪、左右田と見舞いに行った。話好きの高村は意のままに声が出ないので、手持ちのボードに筆談を混ぜて皆といろいろ思い出を語り合った。朗らかで楽しそうな顔だった。結局、これが最後の別れになってしまった。せめて7月24日、サルトロ・カンリ登頂日を一緒に乾杯できれば、と念じていたのだが、少し早く逝ってしまった。

（齋藤惇生）

〈略歴〉

1934年9月1日：大阪で生まれる

1950年：大阪府立高津高校入学、山岳部に入り登山に熱中する

1953年：京都大学農学部入学
1957年：同大を卒業、同大学院修士課程、博士課程に進学
1958年5月～12月：京大学士山岳会のカラコルム・チョゴリザ登山隊に参加。カベリ・ピークに初登頂
1961年6月～12月：カラコルム、サルトロ・カンリの登山許可取得のためパキスタンに滞在。その間、サルトロ・カンリの西面ドンドン氷河を登り、登路の偵察を行なう
1962年4月～9月：京大学士山岳会の日パ合同サルトロ・カンリ登山隊に参加、サルトロ・カンリに初登頂
1964年：フィリピン・ロスバニョス国際稲作研究所に1年4ヶ月滞在
1966年10月：学位取得退学、京都大学農学博士に。11月、京大農学部助手に
1975年4月：京大農学部助教授、京大農学部付属亜熱帯植物実験所（大島）に勤務
1980年4月～83年3月：文部省初等中等教育局教科書調査官（職業科担当）
1983年4月：岡山大学農学部助教授
1986年4月：同教授
1988年7月：京都大学アフリカ地域研究センター教授
1993年4月：京都大学大学院人間環境研究科教授
1998年3月：京都大学を定年退官。4月、同大学名誉教授。以後、JICAなどの派遣でアフリカ諸国の農業調査、技術協力、指導に当たる。
2004年10月：JICA理事長表彰
2019年6月4日：逝去。瑞宝小綬賞叙勲、従四位を贈られる

宮森　常雄さん

みやもり　つねお
（1932～2019）
会員番号 5723

1

2019年8月14日、会津若松在住のヒマラヤ登山研究家であり、カラコルム、ヒンドゥー・クシュの登山地図の作成に画

期的な業績を残した宮森常雄氏が亡くなった。氏は1932（昭和7）年生まれであるから、享年87であった。

宮森氏の一族は会津の酒造業に古くから関わってきたと思われるが、はっきりしているのは、「維新」前後のころだろうか。氏の家が「宮泉銘醸」として独立したのは父君の時代からだから、多分、大正から昭和初期のころと思われる。

私は若いころ、氏の父君に何度かお目に掛かった。今から55年前のことだが、宮森家は会津を代表する名望家として、父君も酒造りのかたわら、市の教育長などの要職を歴任されていた。

その後を受けて常雄氏は近代的な醸造学を学び、生来の研究熱心と豊かな発想力、たゆみない努力もあり、広い敷地内に新しい発想力をもって「酒造博物館」を開設。酒造りの現場とその歴史を展示、さらにこの酒造場で生産された多様な銘柄の製品を販売、展示場と生産工場を一体化した。そのころでは珍しい、先鋭的なシステムを取り入れた施設として観光バスが必ず立ち寄り、大いに賑わったものである。

しかし、好事魔多し。宮森氏には跡を継ぐべき男子に恵まれず、酒造業の家督を弟さんに譲り、氏自身は同じ敷地の一角に、かねてから蒐集（しゅうしゅう）を始めていた、中国やタイ（安南）の古陶磁の店「アナン」を開いた。

折からの「古陶磁ブーム」もあり、その後の数十年、自らも東南アジアはもとより、登山活動とも連動してアフガニスタンやパキスタンの、いわゆるガンダーラの故地にまで足を延ばし、蒐集家たちの要望に応えた。

以上、宮森常雄氏の生業などに少し筆を費やしたが、以下に本稿のテーマでもある宮森氏の「山岳研究」、特に「登山地図」作成とその業績について語りたい。

2

第2次大戦後、かなり長い間、日本人の作成したヒマラヤの地形図、登山地図は数少ない。ドイツ、オーストリアの登山隊は、たとえ登山に成功しなくとも、そのつど多色刷りの立派な地形図を公刊している。カラコルムへの遠征隊の残した地図や、数次のナンガ・パルバット登山隊の多色刷りの地図など、まさに垂涎（すいぜん）のもの。このナンガ・パルバット図（7万5000分の1の大地図）など、青白い氷河と褐色の山地、緑色の草地の部分との織り成す諧調が実に快く、見飽きることがない。

片や我が日本隊はどうであったか。マナスル登山の成功でヒマラヤ・ブームが到来したころでも、地図の作成は誇るべき業績に乏しい。マナスルもヒマルチュリも、1ページに満たない大きさなので、迫力に乏しく、先進諸国のものに比べると見劣りするという状態が何年も続いた。

思い切った言い方をすれば、その状況を救ったのが後年の、いわゆる「宮森地図」の出現である。

「宮森地図」が世に現われるについては、登山や地図作成の世界的な気運が高まっていた、時代の後押しがあった。

日本でこの気運をとらえ、ヒマラヤ研究と登山地図の必要性を叫び、実際に自ら範を示したのが、深田久弥、吉沢一郎、諏訪多栄蔵の、いわゆるヒマラヤ登山研究の「三大人」であった。折から毎年のように開かれるに至った、日本における「ヒマラヤ登山」の研究は、「海外登山研究会」として、日本のヒマラヤ登山に関心を持った人々、約１００名の参加を得て、主として多摩丘陵に建てられた「大学セミナーハウス」において、組織的、継続的に研究発表が盛んに行なわれるようになった。

前述の深田氏ら三大人の後押しもあり、１９６０年代の後半には、カラコルム、ヒンドゥー・クシュ、カラコルム会議」が発足した。この会議では、この地域の数多い史的資料の蒐集を雁部が行ない、宮森氏が始めはヒンドゥー・クシュの様々な縮尺のカム・カルテ（いわゆる骸骨地図）を作成して、この地域を志向する登山家の要望に応えた。

始めのうちは、実際の登山隊の活動と地図作成のピッチが噛み合わず、いわゆる「青焼き」の地図を宮森氏から提供され、現地へ持参した隊が新しい知見をもたらし、それを宮森氏が修正して、徐々に地図作成の範囲を拡大し、精度を高めていった。

そのころから50年以上経過した現在から見れば、毎年のように70隊、80隊（その多くは3～4名による小登山隊）と、ヒマラヤ各地に活動の場を求めて、若者たちが情熱を燃やし出掛けていった事実を、今の人々はどう考えるのだろうか。その活動の命綱となったものが、「宮森地図」なのである。この地図の特色は、いわゆる「測地学」的に正確さを求めたものではなく、ヒマラヤ各地で写真撮影されたおびただしい印画に基づき、相対的に山々の高さの関係を明らかにしたものである。

3

随分堅い話ばかり続いたので、ここで宮森氏を中心にした、いくつかのエピソードを記しておきたい。人間味あふれる氏のある面を、そこから汲み取ってほしいのである。

＊奥会津の怪魚。

宮森氏から、奥只見には得体の知れない怪物のような巨大魚がいるという話を聞いたのは、１９６８年ごろのヒンドゥー・クシュ会議（以下ＨＫＴと略称）か、その準備会のころで、初めて顔を合わせたときだったように思う。始めのうちは私もほかの人々と同様に、その場限りの与太話かと思ったが、会津の古い時代からの納豆屋（現在も白糸納豆・西村として盛業中）として、商工会議所の当時の若手メンバーの従兄弟の話でも、根は真面目な人物らしいと見当が付いた。ただし、半分酔っ払い集団であった原田達也、広島三朗、もっと年かさの新貝勲、

松本徑夫博士らと同席する場所では、宮森氏の話も眉唾話と受け取られることも多かった。

私の宮森氏観は、結論的に言うと、ウソっぽいが真実の話が多いので、よく注意して話を聞く必要がある、というものだった。

そしてほどなく、宮森氏の真面目を発揮するときが来た。深田久弥氏が亡くなってからのことと思うが、大垣の高木泰夫氏（HKT初代の名事務局長）の邸宅で、吉沢一郎以下主要メンバー数名が同席して、宮森氏が会津から苦労して運んで来た怪魚を拝見する席が設けられた。縦約1m、横約50cmの発泡スチロールの箱に、その大魚は鎮座していた。

梱包を取り去ると、ちょうど新巻鮭に似た魚が出現。宮森氏に「これが奥会津の大岩魚です」と言われるまでは、その正体が岩魚だとは誰も信じられなかった。今日のように情報が飛び交うことのなかった時代の話である。それを機会に、彼の話はよく分からないものも多いが、ほとんどは真実の話だというのが、ようやく公認されたのである。この大岩魚は、大垣の高校の生物学の教師でもあった、前出の高木氏がホルマリン漬けにして、生物室の標本として保存しているはずである。

＊進退きわまった話。

これも深田久弥氏の没後の話。その翌年だったと思うが、北陸金沢でHKT主催の追悼会が開かれ、会の主要人物は東京で集合し、関ヶ原の麓を巡って北陸入りをすることになった。

名古屋の手前で空席ができて談笑中、誰かが窓際の所にジョニ黒のビンにかなりの量の飲み残しがあるのを発見。吉沢老以外は皆飲み助だから、たちまちのうちに盛り上がり、ビンがすぐ空になった。何人かは持ち主がいるかも知れないと口にする者もいたが、そこは飲んだ勢いに流された。大分たってから、食堂車から黒い服の何やら怖そうな御仁が現われ、この有様を眺めるや、「なんだ飲んじゃったのか」と憮然たる表情でひと言。しかし、こういう場面を収拾するのは、年の功と落ち着き払った態度、物腰でうまくまとめてしまう宮森氏の存在。このときもすかさず、「私の家は会津の造り酒屋で、大桶の酒を1㎜でも減らせばただにさせていただき、おみやげに大吟醸を1升付けます」と、青年会議所時代の名刺まで渡す如才なさに、同席の仲間もあっけに取られる始末。毒気を抜かれたらしい件の黒の紳士が岐阜羽島あたりで下車したときには、どうなることかと成り行きを見守っていた近くの乗客たちから、盛大な拍手が起こったものである。

＊最後に真面目な話で締めくくりたい。

皆さんは、本物の「族譜」というものを見たことがありますか。若いころはしょっちゅう電話をやり取りしていたが、このときも40前後の歳のころ、「今度、俺の家の『族譜』ができたところだが、見に来ないか」と話があり、私はすぐ飛んで行った。話にはよく聞いていたが、きれいな文字で見事に印刷？　さ

れた、日本でいう系図書きは実に克明、詳細に記されており、中世には、宮森家は中国地方を治めた大内氏の生き残りで、岩代や会津あたりの豪族として戦乱の世で命をつないできた一族と思われた。中国地方の大内氏の残存勢力が、東北地方にいてもなんら不思議ではない。

現に今の首相である安倍氏の祖は、元々は東北、津軽の西北海岸部の「十三湊」周辺の豪族で、「日の本将軍」と称した地方豪族の末である。その人物の墓所は、北陸の小浜（鯖街道で知られる）の古刹、羽賀寺であり、ときどき法要が行なわれている。この寺の住職が私の歌仲間の子息なので知り得たのだが、白鳳仏などの立派な仏像を何体か持つ、実に静かな古刹である。

さて、「族譜」のことだが、宮森氏が酒造業になったいきさつはともかくとして、前述したように元々は中国地方西部を統治した大内氏の流れに宮森氏は発するが、実はその始まりの方がまだある。これも宮森一族の「族譜」作成への熱意をしのぶに十分なエピソードだが、彼らの先祖探しのルーツが行き着いたのは、なんと朝鮮王朝もはるか昔の話になる。

このエピソードはそろそろ終わりにしなければ、収拾がつかなくなる。話を現代に引き戻そう。

4

「宮森地図」が最終的に広く世に認知されたのは、２００１年の『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』の刊行による。ご存じのごとくこの書物には、我々が協力して作り上げた『カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究』という書冊を添えて、書物としての体裁を整えた。横長の非常に大きな本である。

この書冊が刊行される数年前には、すでに地図はでき上がっていたが、出版元のナカニシヤ出版のお世話で、地図のお披露目の会が京都で開かれた。地元の薬師義美氏と著者である私たち数人が出席した。一枚続きにして展示しようにも都合の良い場所がなく、結局、本能寺近くの塔頭の広間を借りて、全一枚の巨大な地図を見ることが、このとき初めて可能となった。ドイツからこの地図を見るために駆け付けてくれた、ハイシェル氏の協力も忘れられない。

その数年後、宮森氏が「秩父宮記念山岳賞」に輝いたときに、日本山岳会の年次晩餐会において、この地図はやはり一枚につなぎ合わされて展示された。宮森氏も私もこの巨大な地図を見る機会は数回しかなかったのであるから、ほかの諸氏がこれを見る機会は、この晩餐会のとき以外にはなかったと思われる。

なお、私たちのＨＫ、ＫＫの山岳に対する最終的な見解は、１９９６年に上梓した『ヒマラヤ名峰事典』（平凡社刊）の中で示されている。ここでは、かなり以前から我々が指摘してきた多くの誤りが、整理された形ではっきりと記述されている。この浩瀚（こうかん）な事典のカラコルムとヒンドゥー・クシュの山岳につい

ては、宮森常雄と雁部貞夫が共同執筆し、ネパールとその周辺は薬師義美が執筆した。この本の出版により、ＫＫやＨＫのスタンダード的な知識は十分得られるようになった。しかし、この山域では次々に新しい研究が続けられ、戦後の登山史の見直しが盛んに行なわれた。前述の２００１年に刊行した『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』の「資料集」は、それら諸問題に対する解答集と言ってよい。特にＨＫとＫＫの部分は、初登頂の真偽を巡って議論が多かったところだが、一応の結論を公表し、世に問うことにしたのであった。分かりやすい例を挙げると、カラコルムの名峰の一つ、チョゴリザ（７６５４ｍ）の初登頂は、従来は日本の京大隊とされていたが、多くの資料から検討され、京大隊が登ったのは最高峰ではなかったと判明。ＨＫのもっと低い山では登頂例に乏しく、それぞれの山座の並び方に対する研究不足からくる錯誤、誤認の問題もしばしば起こり、それらを正すための苦労も再三にわたり味わうこととなった。

そろそろ与えられた紙数も尽きようとしているが、一つだけ付け加えておきたい。

宮森氏没後しばらくして、新設されたパキスタンの「ナジール・サビル記念山岳賞」が宮森氏へ授与されることになった。これは直接訪パされた宮森優子夫人が受けられた。

このことは、宮森氏の後半生を支え続けた夫人のことを思えば、故人宮森氏から優子夫人へ贈られたすばらしいプレゼントであったと私は思う。看護の専門家としての優子夫人の存在が、特に晩年、病床にあることも多かった宮森氏へどれほど救いとなり、慰めとなったか計り知れない。ここに優子夫人への謝辞を記し、もって小文の結びとしたい。

（雁部貞夫）

〈略歴〉

１９３２年：福島県会津若松市に生まれる

１９５８年：東京農業大学醸造科を卒業、宮泉醸造㈱に入社。在学中は山岳部に所属

１９６４年：日本山岳会入会

１９６７年：東京農大ヒンズー・クシュ学術調査隊に隊長として参加。地図作成とともに付近の３峰に初登頂

１９６８～98年：二十数回の現地調査を実施

１９７７年：日本Ｋ２登山隊の学術隊員としてバルトロ氷河を測量

２００１年：『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』を刊行

２００２年：第５回「秩父宮記念山岳賞」を受賞

２０１２年：日本山岳会福島支部の登山隊総隊長としてカラコルムへ

２０１９年８月14日：逝去、享年87。同年12月11日、第９回パ

キスタン山岳祭において、第1回「ナジール・サビル山岳賞」を授与される

宮原　巍さん

みやはら　たかし
(1934〜2019)
会員番号 5125

ヒマラヤのパイオニアとして、なかば伝説的な響きを持って語られる宮原さんは、シャイな人である。本当は違うのかもしれないが、もの静かで照れ臭そうな笑い方といい、聞きとりにくい発音といい、他人に接するときの腰の低さといい、その実、成し遂げてきた数々の業績を思えば、外柔内剛とでも言うのだろうか。

そこには、傍目からは信じ難いほどの隔たりがある。ロマンチストであるだけに芯は反骨、質実剛健、有言実行そのものである。実例を挙げれば枚挙にいとまがない。それら一つ一つの実績が、宮原さんの人生を構築している。登山家であり、起業家であり、晩年は政治家を志し、ネパール国籍を取得して「ネパール国土開発党」を結成し、国政選挙に打って出たが、王制崩壊とともに完敗した。宮原さんは王制を支持していた。

私が宮原さんと親しくなった経緯を述べれば、そのきっかけは1981年春に実施された、私たちのエベレスト西稜登山隊だったと思う。それまでは、大学山岳部の後輩として宮原さんの噂を聞き知ってはいたが、雲上の大先輩であり、畏れ多くて近寄りがたい存在だった。

それでなくとも今とは時代も異なり、もはや過去の遺物と化した感のある昔の大学山岳部である。もちろん、すべてとは言わない。江戸時代の徒弟制度よろしく、上下関係の厳しい旧態依然とした体質の、それでいながらひたすら山と向き合っていた、いわゆる懐かしの古きよき時代の大学山岳部だ。

宮原さんの会社が私たちのエベレスト登山隊の代理店だったことから、輸送係の私は本隊よりひと月余り早く日本を出発し、隊荷をカトマンズからルクラへ空輸する関係で代理店とやり取りする機会も多かった。横浜港から船荷で送った隊荷をカルカッタ（現・コルカタ）で陸揚げして数台の大型トラックに満

載し、ヒンドスタン平原を一路、ヒマラヤへ向けて爆走した時代である。

隊荷の輸送は、カトマンズから先の空輸が計画通りには進まず難航した。ネパールの総選挙期間とぶつかり、連日、地方を遊説する政治家が我が物顔でフライトを利用しているのだ。登山隊の私たちは一方的にフライトをキャンセルされ、挙句にキャンセル料を取られるのだから堪らない。隊荷を積んだトラックで早朝暗いうちに空港へ出かけるが、期待を裏切られてイライラしながら後輩とふたりでホテルに戻る日々が続いた。

埒もあかない、こうしたことを繰り返しているうちに怒り心頭に発し、空港のカウンターでついに爆発した。札束をたたきつけ怒鳴り散らしたのだが、カウンターの若い女性は、意に介すことなく涼しげな顔をしている。

本隊は到着するし、結局どうしたかと言えば、カトマンズ盆地一円からポーターを募集して、キャラバンを組んで出発させたのだが、輸送に著しく支障を来したことで、宮原さんも頭を抱え込んでいた。

＊

エベレスト登山の翌年、㈶日本淡水魚保護協会から派遣されて河川調査に出かけたときも、宮原さんの世話になった。淡水魚保護協会は現存しないが、当時、大阪に事務所があり、ヒマラヤの渓流に日本の在来魚、つまりイワナ・ヤマメの放流事業を計画していた。

実際、カトマンズからチベットへ向かうコダリ道路の途中にあるスン・コシ（川）の支流にヤマメを放流したのだが、住民による毒流し漁で根絶やしにされてしまい、定着しなかった。日本では除虫菊や山椒を毒の材料に使い、地方によってはナメ流しなどと言っているが、ヒマラヤの低地帯に暮らす「マジィ」とか「ポレ」と呼ばれる漁労民は、サボテンの汁を溶かして使っている。

その後、もしかしたら生き残りがいるかもしれないと期待し、何日間かテントを張って釣りを試みたことがあった。田植えの季節であり、笛や太鼓で音頭を取り、苗を振りかざしながら村人が水田に立ち入って何やらワイワイ騒いで踊る様子は、阿波踊りでも見るようで愉しかった。今では見掛けることもない田植え祭りである。

結局、放流に適した新しい渓流を、私が探しに出かけることになったのだ。素晴らしい渓流に必要な条件は森林である。いい川を見付けるには、森を見付けなければならない。雨季にあって、なお水位が安定している川が理想的である。

ところが現実は、雨季の森林はヒルの巣窟と化している。ヒルは吸血鬼となって四方八方から容赦なく吸い付いてくる。水中にも棲んでいるのだ。吸われた跡は3ヶ月ほど痒みが止まらない。さんざんな目に遭った。

そこで宮原さんに相談したところ、カトマンズ盆地の外縁を占める山々の渓流が、近くて調査もしやすいのでは、とのアドバイスを受け、宮原さんとふたりで出掛けたことがあった。イワナ・ヤマメの放流に熱を上げている私に宮原さんは唖然とした、というか、虚を突かれるような思いを禁じ得なかったようだ。

登山用具のピッケルに代わって私が持っていたのは投網だった。私は投網を打ち、どのような魚種が棲んでいるのか調べた。釣りも試みた。イワナ・ヤマメ釣りが得意だったのでその話をすると、宮原さんは信州での子ども時代の釣りを懐かしそうに話した。初めてイワナを釣ったときは興奮して、思わず足の震えが止まらなかったそうだ。なかなかリアリティのある、愉快な話として私は聞いていた。

このときのイワナ釣りの話が機縁で、宮原さんは後年、奥さんとその仲間を引き連れて、私のイワナ釣りのフィールドになっていた白神山地の赤石川へ遊びに来たことがある。ブナの原生的な自然を存分に味わいながら赤石川を遡行し、帰路はブナ木立に続く昔ながらの杣道をたどった。6月の新緑に包まれ、生新の気に満ちた渓流の魅力に、皆さんは満足したようだった。

何年も経ってから「あのときの赤石川は、ホントに素晴らしかった。今でも思い出して皆さん、感激しているよ」と宮原さんに言われて、私は嬉しかった。確かそのころだと思うが、横浜の高台にある宮原さんの家に1泊したことがあった。夜景の美しさと、宮原さんが植えた1本の桜の巨樹が、いかにも宮原さんの人生を象徴するものとして印象に残っている。

＊

ふたりでちびちび飲んでいたときである。カトマンズでのことだったか、東京だったか、はっきりしない。

「今度、俺の本を書けよ」

唐突に言われて、「はぁ」としか答えられない。なにしろ昔の大学山岳部の先達だから、否定などできるはずもない。誰がなんと言おうと、私もまた、そうした封建的な紐帯で縛られた輩なのである。

しかし、「書けよ」と言われても、どうやって書くのだ。内心そう思いながらも、引き受けざるを得なかった。後で分かったのだが、宮原さん自身が書こうとしていたらしく、思いのままに書き散らした文章が残っていた。私は宮原さんが2番目に建てたホテル・ヒマラヤの宮原さんの部屋で、カンヅメになってそれらの文章を資料にして書いた。

宮原さんが国政選挙に出馬したときは選挙カーに同乗し、ネパールの山村を駆け巡った。ネパールの山村に必ずと言っていいほどある村外れの菩提樹の木陰で、宮原さんは演説した。宮原さんが率いるネパール国土開発党は、マオイスト（ネパール共産党毛沢東主義派）に歯が立たなかった。宮原さんが自らの選挙活動を「蟷螂の斧」に譬えて揶揄するほど、マオイストは

圧倒的に強力だった。

選挙のほとぼりも冷めたころ、宮原さんとふたり、敵の大将・マオイストのリーダー・プラチャンダ（本名プスパ・カマル・ダハル）を訪ねて面談したことがある。２４０年続いたネパール王制を打倒した革命闘士である。ふたりは並んで記念撮影した。

私は宮原さんのホテルで本の執筆を続けたが、宮原さんは主人公だけに、内容について何かと厳しい注文を付けた。本の題名は『ヒマラヤのドン・キホーテ』。あれも書け、これも書け、と言われて私は辟易し、ついに癇癪を起こしてしまった。「それなら、自分で好きなように書いたらいいじゃないですか」一瞬、沈黙。何かを思い詰めていたようだ。「だめだ。君が書くしかない」と、落ち着いた口調で宮原さんは言った。「なんじゃい、いったい」と穏やかならざる心境で私は憮然としつつ、「そうですか、分かりました」と言うしかなかった。

言われるがまま、ともかく、洗いざらい書いた。その後、宮原さんと相談して本には収録しなかった文章もある。削除した、その文章に宮原さんは拘り続けていた。ともすれば興味本位に受け取られがちな内容だが、宮原さんの人生の切実な局面がテーマになっていた。それだけに逡巡し、削除したことに後悔していたようである。

もう1冊改めて出版したい、という旨の相談を私に持ち掛けてきたが、私は曖昧な返事しかできなかった。この点で、宮原さんにとって『ヒマラヤのドン・キホーテ』は魂の入らない本だった。宮原さんはそのことに悶々としていた。

昨年4月、連絡があって私は上京し、久しぶりに宮原さんと会った。新橋の、宮原さんの事務所近くの店で食事しながら宮原さんは、これまでいろいろ相談を持ち掛けたが、もうこの話はよそうと言い出した。私は内心、ほっとした。宮原さんの人生で掛け替えのない内容なのだが、宮原さんはそれを著すことを自ら封印したのだ。今思えば、迫りつつある死期を予感していたのかもしれない。

その半年余りのちの11月下旬、カトマンズからのメールで訃報を知らされた。宮原さんがネパールで生きる決意を固めて横浜港を旅立ってから半世紀余りが経つ。宮原さんはひとり自転車を漕ぎ続けて、カトマンズ盆地を囲む山並みの西側に位置するタンコット峠を越えてカトマンズに入った。峠から先、道は下り坂である。

当時、未舗装だったでこぼこ道を、宮原さんは自転車のハンドルから放した両手を大きく広げ、張り裂けるような希望を胸に鳥になった気分で、マッラ王朝時代の中世都市・カトマンズに向かって突っ走った。31歳になっていた。宮原さんの当時の姿が、幻影となって私の心に浮かび来る。

宮原さんは少年のような心で可能性を信じて一切の妥協を排し、山で鍛えた登高精神のなんたるかを示した人だった。終生、

希望に向かって邁進し、不羈独立の精神を貫いたのではあるまいか。

今度ネパールに行ったときは、宮原さんが荼毘に付されたシャンボチェの丘で、ひとり黙祷を捧げたいと思う。

（根深　誠）

〈略歴〉

1934年：長野県小県郡青木村に生まれる

1954年：日本大学理工学部工業化学科および機械工学科を卒業。在学中は山岳部に所属。卒業後は理研ビニル工業、千代田化工建設に勤務

1959年：第4次南極地域観測隊に参加

1962年：初めてネパール・ヒマラヤへ。ムクト・ヒマールのホングデ初登頂

1965年：隊長としてグリーンランドに遠征

1966年：自転車でインドからネパールに入り、ネパール政府通商産業省家内工業局に勤務

1968年：トランス・ヒマラヤ・ツアー㈱（カトマンズ）を設立

1969年：ヒマラヤ観光開発㈱（東京）を設立

1971年11月：シャンボチェの丘に建設したホテル・エベレスト・ビューが営業開始

1987年：カトマンズにホテル・ヒマラヤを建設

2005年6月：ネパール国籍を取得

2006年：ネパール国土開発党を設立

2008年4月：ネパール制憲議会選挙に候補者を立てたが、当選者なし

2019年11月24日：カトマンズにて逝去。享年85

白籏　史朗さん

しらはた　しろう
（1933～2019）
会員番号 6068

本年5月、作家・井ノ部康之さんが筆を執られた『白嶺の金剛夜叉―山岳写真家白籏史朗』（山と溪谷社刊）という評伝が出版された。その中で井ノ部さんが見た白籏像を次のように綴っ

ている。

《白籏が発散する強烈なイメージが金剛夜叉明王に重なるのだ。白籏が山に正対する時、三面どころか四方八方、頭上足下に五つの眼にも匹敵する鋭い視線を走らせ、六本はないが、両手と十本の指を六通り以上に駆使し、三脚を据え、カメラを固定し、レンズを交換し、フィルムを装填し、ファインダーをのぞき、シャッターを切る。

それはまさに金剛夜叉明王の姿そのものだ。金剛夜叉明王が手にしている六つの武器を、カメラ、フィルム、登山靴、ピッケル、冬山用防寒服、それに――酒の六つに替えれば、これはもう白籏の手になじんだ「武器」そのものといっていい。》

その〝金剛夜叉明王〟が昨年11月30日、86歳で亡くなった。まさに山岳写真界の「巨星墜つ」の感が深い。

＊

白籏さんは１９３３（昭和８）年、岩殿山のすぐ近く山梨県北都留郡廣里村（現・大月市）に生を享けている。子どものころ、四囲に展開する甲斐の山河を遊び場として育ったことが、後年の自然志向や写真志向につながったものと思われる。

そしてある日、白籏さんの人生を決定付ける運命的な出会いがあった。大月の写真館のショーウインドーに飾られていた1枚の写真で、桂川に架かる高月橋を撮ったものだった。その出来事をきっかけに写真の世界に興味を待ち始めた白籏少年は、父親に「カメラマンになりたい」と告げる。かくして１９５１（昭和26）年春、父親が何度も頼み込んだ挙句、写真家・岡田紅陽に内弟子として入門を許される。

富山の中野峻陽、上田の柴崎高陽とともに「山岳写真の三陽」と並び称される岡田は、当時、富士山の写真家としてすでに名を成していた。住み込みの内弟子修業は徒弟制度そのもので厳しかったが、岡田の荷物担ぎとして登った富士山から南アルプスを遠望して、さらには赤抜沢ノ頭から北岳を仰ぎ見て、山岳写真を生涯の仕事とし、一生山に生きること決心したという。

4年間の内弟子修業を経てフリーランスになったものの生活は苦しかったが、１９６０（昭和35）年、白籏さんの作品が初めて商業山岳雑誌『山と高原』（朋文堂）７月号に掲載される。さらに翌年には、『山と渓谷』３月号にカラー作品が掲載され、これ以降、『ＨＩＫＥＲ』や『岳人』『アルプ』などの山岳雑誌をはじめ『アルパイン・カレンダー』などに次々と採用されるようになる。それらの実績によって自信を得た白籏さんは１９６２（昭和37）年４月15日、いっさいのアルバイト仕事から手を引き、山岳写真家として生きていくことを自ら宣言する。白籏青年29歳の春である。

＊

私が山と渓谷社に入社した１９６６（昭和41）年、ヤマケイにとってエポック・メイキングな大型企画がスタートした。フ

ルカラーの写真とモノクロの解説ページを交互に展開する、本邦初の、いわゆる「4色＋1色」のハンドブック・シリーズ「山渓カラーガイド」の創刊である。第1巻『山の花』が爆発的な人気を呼び、トータル33万部のベストセラーとなった。この企画は、山と渓谷社の創業者である川崎吉蔵がフランクフルトのブックフェアで見付けたドイツの花の本をヒントにしているが、当時、日本の出版界に写真がすべてカラーという出版物はなかったのである。

白籏さんもこの本に多くの写真を提供しているが、「あれなら俺独りの写真で一冊まとめられる」と、可愛がってもらっていた川崎社長に直訴、誕生したのが『山の花Ⅱ』である。おまけに解説ページも、猛勉強してすべて自分で執筆した。こちらも23万部という好成績を挙げ、その数字とともに白籏さんの人気も高まっていった。

これ以降の活躍ぶりは良く知られるところだが、まとまった山岳写真集を出版したのは、意外にもヤマケイではなく朝日新聞社で、1970（昭和45）年、愛するふるさとの山を撮り貯めた成果を『南アルプス』として刊行した。以後、同社からは『尾瀬』（1974年）、『わが南アルプス』（1976年）、『富士山』（1977年）と、矢継ぎ早に写真集を出している。

ヤマケイから本格的な写真集を出したのは1978（昭和53）年、2万円の豪華写真集『ヨーロッパアルプス』である。前後3回、延べ8ヶ月にわたってモン・ブラン山群、ヴァリス、ベルナーオーバーラント、ベルニナ、ドロミテの5山域を撮影したもので、4×5インチ判のシート・フィルム（はがき大）104点で再現されたアルプスの山々が、見る者を圧倒した。このような大判フィルムによる写真集は海外にはほとんどないため高い評価を得て、7ヶ国の海外版が刊行された。特にフランス版は人気を呼び、シャモニを中心に1万部も売れたことは特筆すべきことである。

この写真集の編集を担当したのが、同期入社の故木村和也さんと私である。木村さんはヤマケイのカラー出版物のクオリティを日本の出版界でトップクラスに高めた男で、写真を見る目や印刷管理に関しては厳しい人物だった。写真集作りは写真家との対決である。どれを選びどれを捨てるか、膨大なフィルムを抱え持つ白籏史朗という巨大な山とのバトルが始まる。連日、朝から夕方まで延々と写真選びが続き、夜は毎晩、終電近くまで慰労会。それは色校正から印刷立ち合いまで続いた。写真家も編集者も、タフでなければ務まらない時代だった。

＊

1975（昭和50）年、ヤマケイは創立45周年を迎え、記念出版として初の本格的山岳写真集『穂高』が刊行された。カメラマンは、山岳写真界の先達・田淵行男に私淑して写真を学び、長年、教職にあったが退職して穂高連峰をホームグラウンドに

撮影、「穂高の山本」として知られた山本和雄さんである。朝夕を中心に山の気高さや厳しさを真正面から捉える白籏さんとは対照的な作風の写真家で、山の季節や時間の移ろいを大切にした、繊細で叙情的な作品が多く、しかも寡作な人だった。

それに対し「ヤマケイで写真集を出すなら、俺が一番のはずだ」と噛付いたのが白籏さんだったが、当時、彼は朝日新聞社での写真集出版やヨーロッパ・アルプスの撮影で多忙な時期だった。最終的には「創立50周年は、必ず俺がやるからな」ということで事態が収まるという一幕があった。

山本さんに先を越されたものの、ふたりは作品も性格も好対照だっただけに〝良きライバル〟で、１９７９（昭和54）年には、モノクロの豪華作品集をアベック出版している。しかし、そのライバル関係もそれほど長くはなかった。１９８７（昭和62）年秋、山本さんが肝臓癌のため逝去したのだ。まだ59歳だっただけに、ふたりそろっての活躍がもっと続いていたなら、日本の山岳写真界もさらにレベルアップできたのではないかと、その早過ぎる死が惜しまれてならない。

さて、創立50周年記念出版は『北アルプス』に決まり、白籏さんは「北アルプス全域の春夏秋冬を撮り切る」という課題を自らに課した。その取材過程で発刊前年の秋、

「節田君、いつもほかのカメラマンとばかり山を歩いてないで、たまには俺とも付き合え」

と白籏さんからお声が掛かった。写真集のための10日間ほどの撮影行で、折立～太郎兵衛平～雲ノ平～双六岳～笠ヶ岳～新穂高温泉のコースを歩いた。気が付いたら白籏さんとは初めての山行だったが、その撮影ぶりは聞きしに勝るものだった。

どんな天候でも毎日、夜明け前に起きて撮影ポイントでスタンバイし、いざ撮影が始まれば、まず４×５インチ・カメラでポジとネガを撮り、ブローニー・サイズ（６×６㎝などのロール・フィルム）のカメラ何台かでさらに連写する。まさに獅子奮迅、〝金剛夜叉明王〟の姿そのものであった。

白籏さんの立派な点は、愚直なまでに正面から山と向き合い、山の懐に飛び込んで〝がっぷり四つ〟に組み合って山と対峙する撮影姿勢だ。もちろん、空撮や遠距離からの望遠レンズによる撮影を潔しとせず、自らの足で一歩でも山に近付いて対話しようとする、揺るぎないスタンスで徹底しているところである。

＊

間に『北アルプス』の刊行を挟んで、さらに海外の山の豪華写真集の出版が続き、１９８３（昭和58）年には『NEPAL HIMALAYA』が発刊された。編集は同じく木村・節田コンビで、東のカンチェンジュンガ山群から西のアピ・ナンパ・サイパル山群まで、足掛け3年、５６０日に及ぶ一大撮影行の膨大なフィルムの山を前に、また写真家と編集者の闘いが始まった。最終的に１１５点に絞られた作品群は前作同様、海外からも高

い評価を得て、7ヶ国の海外版が刊行された。
さらに1990（平成2）年には『KARAKORAM』が、1997（平成9）年には『ROCKY MOUNTAINS』が上梓され、それぞれ複数の海外版も刊行された。担当編集者は変わったが、相変わらず写真家とのバトルがあったことは、今さら言うまでもなかろう。
これら海外の山の写真集出版が評価されて、2000（平成12）年、スイスに本部を置く「キング・アルバート一世記念財団」から功労勲章を授与された。授賞理由は「日本のみならず、世界各国にわたる目にも鮮やか山岳写真の色彩的・芸術的表現について」というものだった。なお、キング・アルバート一世は山岳と文化に深い関心を寄せたベルギーの国王で、自らも登山を楽しまれたが、1934年、ロック・クライミング中に亡くなられている。
このように、白籏さんは国内外で写真家として高みを目指すとともに、登山家としても実績を積み重ねてきた。最初の海外登山は1966（昭和41）年、第2次RCCヒンズー・クシュ登山隊に参加、コー・イ・ムンジャン（5443m）など5峰に初登頂。次は1969（昭和44）年、パンジャブ・ヒマラヤのデオ・ティバ（6001m）に登頂している。
3度目は1970（昭和45）年、日本山岳会東海支部のマカルー登山隊に参加している。隊はマカルー（8481m）南東稜からの初登攀に成功したが、2人の隊員を頂上に立たせるのが精一杯だった。白籏さんは撮影をこなしながら秘かに登頂も狙っていたが、C5（7800m）までで涙を呑んでいる。
このほかガルワール・ヒマラヤやネパール、ヨーロッパ・アルプス、旧ソ連邦・中央アジア、ペルー・アンデスなど、40代の10年間は、ほぼ毎年、海外の山に登っている。

＊

古い話で恐縮だが、1952年、ヘルシンキ・オリンピックで陸上競技の長距離三冠（金メダル）を獲得し、「人間機関車」と呼ばれたエミール・ザトペック（旧チェコスロバキア）という選手がいた。
家庭の事情で高校・大学へ進めなかったという学歴コンプレックスへの反発や、写真界における山岳写真の評価の低さなど、世の様々な不条理に対する反骨心をエネルギーとして永年闘ってきた白籏さん……。かのザトペックを彷彿させるように、その生涯をフルパワーで疾駆してきた「人間機関車・白籏号」も2010（平成22）年、『圏谷のシンフォニー』（山と溪谷社創立80周年記念出版）という写真集で掉尾を飾り、ついに走りを停めた。
「白籏さん、長い間、お疲れさまでした。国内外でこれだけたくさんの仕事をしてきたんだから、もう十分でしょう」と声を掛けたいところだが、

「何を言ってるんだ、節田君。まだまだ撮りたい山は、山ほどある。アンデスもあるし、アラスカもあるし、中国やチベットも残っている……」と、口角泡を飛ばしながら反論されそうである。

（節田重節）

〈略歴〉

1933（昭和8）年2月23日：山梨県北都留郡廣里村（現・大月市）に生まれる

1951年：岡田紅陽の内弟子となる

1958年：フリーランスとなる

1962年：山岳写真家として独立を宣言する

1966年：第2次RCC登山隊の一員として初の海外登山でヒンズー・クシュ山脈へ

1967年：山溪カラーガイド・シリーズ『山の花Ⅱ』を出版

1970年：朝日新聞社より写真集『南アルプス』を出版。以後、『尾瀬』『わが南アルプス』『富士山』と刊行が続く。同年、日本山岳会東海支部のマカルー登山隊に参加

1976年：旧ソ連邦・パミールのコミュニズム峰（現イスマイル・ソモニ峰、7495m）登頂

1977年：『尾瀬』『わが南アルプス』『富士山』などの写真集で日本写真協会賞受賞

1978年：山と溪谷社より大判写真集『ヨーロッパアルプス』を出版

1979年：ペルー・アンデスに遠征、ワスカラン（6768m）登頂

1980年：写真集『北アルプス』（山と溪谷社）を出版

1983年：大判写真集『NEPAL HIMALAYA』（山と溪谷社）を出版

1984年：山梨県早川町立「白籏史朗山岳写真記念館」開設

1990年：大判写真集『KARAKORAM』（山と溪谷社）を出版

1991年：独立館としての早川町立「南アルプス山岳写真館・白籏史朗記念館」を新規オープン。同年、大月市立郷土資料館に「白籏史朗写真館」を併設

1997年：大判写真集『ROCKY MOUNTAINS』（山と溪谷社）を出版

2000年：キング・アルバート一世功労勲章を授与される

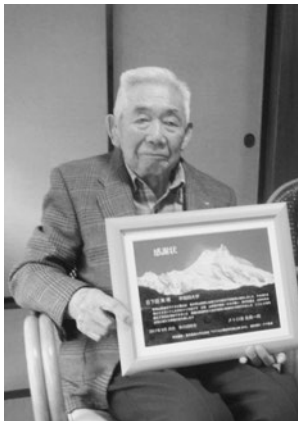
2002年：福島県桧枝岐村に「白籏史朗尾瀬写真美術館」を開設

2007年：静岡県・大井川椹島に「白籏史朗・南アルプス写真美術館」を開設

2019年11月30日：肺炎と腎不全のため逝去、享年86

このほか写真集や書籍、ガイドブックなどの出版多数。個展や合同写真展も国内各地で多数開催。

日下田　實さん



ひげた　みのる
（1930～2020）
会員番号 4146
名誉会員

令和2（2020）年1月18日、マナスル初登頂者のひとり、日下田實さんが逝去された。享年89であった。

第一報をいただいたとき、私と同じ町の出身で、かつ高校（日下田さんは昭和23年3月、旧制眞岡中学校第44回の卒業）の大先輩、私が山登りに興味を持つきっかけとなった方であり、長い間お世話になった者にとっては、ついにこの日が来たかという気落ちと同時に、巨星墜つの感を強くした。

日下田さんは昭和31（1956）年、日本山岳会が満を持して派遣したマナスル遠征隊（第3次）で、今西寿雄さん、ギャルツェン・ノルブが第1次隊として初登頂したのに続き、第2次隊として加藤喜一郎さんとともに初登頂された方として登山界に知られているほか、郷里への貢献も顕著で、栃木県益子町教育委員会委員長、栃木県教育委員会委員長などの公職に加え、出身の真岡高等学校同窓会会長を長年務められ、陶器の町である益子町の出身者にふさわしく、日本民芸協会会長なども歴任されている。また、日本山岳会においても、昭和34（1959）年から4年間は理事を、昭和62（1987）年からの4年間と平成17（2005）年からの4年間は常任評議員・評議員を務められ、平成19（2007）年には栃木支部の初代支部長に就任され、平成22（2010）年には名誉会員に推挙されている。

私とは11歳以上の年齢差があるため、一緒に山登りをさせていただいたこともなく、学制改革を挟む戦後間もない昭和23（1948）年3月から昭和29（1954）年4月に至る早稲田大学山岳部時代の劔岳（昭和24年3月、赤谷尾根～劔岳）、穂高連峰（昭和25年3月、前穂・北尾根～北穂／昭和26年3月、岳川谷～滝谷）を中心とした積雪期における登山、そして、昭和27年10月～翌年5月の南米アコンカグア遠征（往復は船）といった活躍を、早稲田大学山岳部・稲門山岳会の『リュックサック』などから窺い知る程度である。しかし、山登りを志してきた私にとっての誇りであり、その聲咳（けいがい）に接することに喜びを感じていた私の中の日下田さんを想いつつ、故人を偲びたい。

私が14歳、中学3年生であった昭和31年7月下旬、翌日から夏休みという1学期の修了の日であったと記憶しているが、マナスル初登頂を成し遂げて郷里に凱旋された日下田さんの報告会が、隣町の中学校で開かれたことがあった。父親からも、益子町にはこういう誇るべき人がいるのでぜひ聴きに行けと奨められ、担任の先生に引率されて数人の同級生と一緒に4kmほどの砂利道を歩いて隣町まで行った。小柄な人だなぁ、というのが第一印象であった。

スライドを使用しての報告の中で、国旗を結んだピッケルを掲げているマナスル頂上での映像があった。登頂者が立っている所より背後の白い膨らみが高いように見え、それが気になって質問の時間の折、勇気を奮って「背後の白い雪の方が高いのでは」と聞いてみた。すると、今なら理解できるのだが、「あれは雪庇という雪の固まりで、頂上は岩のある所だよ」と答えていただいた。日下田さんが一文を寄せている『リュックサック』80周年記念号（2000年4月発行）の「マナスルの頂上に立つ」の中でも、「頂上に雪はない。ただ東側に雪庇のたまごみたいな雪がへばりついているだけだ。」と記している。私にとっては、この体験が始まりで山登りに興味を持つようになったような気がする。高校に入ってからは、地元日光の山々から八ヶ岳、北アルプスへと足を延ばし、ついには日光の冬山にも挑戦するようになり、大学でも山岳部に入り、勉強はほどほどにして山登りに勤しみ、ヒマラヤへの夢を育むようになった。

日下田さんの方は、マナスルから帰られた後、一時、東京の新聞社に記者として勤務されたのち郷里の益子町に戻られ、家代々の稼業を継承されたので、その間の接点はなかったが、平成7（1995）年5月、私が日本山岳会の総会で財務担当の理事に選任された際、村木潤次郎新会長にお願いしてお会いすることができた。39年振りであった。日下田さんも、栃木弁を操る者がいるということで親近感を抱いたようであった。

翌平成8（1996）年10月には、ネパールの首相やギャルツェン・ノルブの遺族も出席されたマナスル初登頂40周年の記念レセプションが、カトマンズで開かれた。日下田さんは参加されなかったが、第2次・第3次隊の村木会長、第1次隊の山田二郎元会長、第2次・第3次隊の松田雄一さんのほか、多くの有志会員が参加され、私もカバン持ちとして参加した。当時のビレンドラ国王に謁見し、在カトマンズの宮原魏さんのお世話でヘリでサマ部落へ飛び、旧隊員であった方々はベースキャンプ跡地を訪ね、懐しんだようであった。私は松田さんからサマ・ゴンパを訪問し相応の寄進をしてくるように、と指示されていたので別行動をとった。しかし、寄進額については私が考えていた額の10倍ほどの額と言われ、当時の隊員であった方々にとっては、今でも第2次の際のゴンパによる妨害事件がトラウマになっているのだなぁ、と感じた。

この年の12月の年次晩餐会のときは、一般の方々の参加を含む３００名以上の観客が集まり、我が国における観客動員数の記録を持つという映画『マナスルに立つ』の記念上映会が開かれた。初登頂者として日下田さんのショート・スピーチがあり、食料係としての経験談をおもしろおかしく話されていた。私は司会を仰せつけられ、少しでもお役に立てたと喜んだ次第である。

その後は、稲門山岳会のゴルフ・コンペに毎年のように参加するようになり、益子や箱根などでご一緒する機会が多くなった。

日下田さんは、地元益子町にあるゴルフ場の地主会会長を務めておられ、私が千葉の連中と益子でのゴルフ・コンペを企画した際も、いつもプレーの予約をしてくれた上、懇親会用の飲み屋まで紹介していただき恐縮した。この際も、昼食時のクラブハウスでお逢いすることが毎回で、毎日ゴルフ場に来られているのか、と思ったりしたものである。

平成18（２００６）年12月には、マナスル初登頂50周年の記念式典がカトマンズで開催され、日下田さんと一緒に当時の平山善吉会長も出席されることになり、私もいつものとおりカバン持ちとして同行した。日下田さんのお世話を、との指示があり、経由地のバンコクでの1日目から帰国まで、ホテルは同室であった。毎朝、起きるとすぐ「ビールあるか」との声が掛かり、うまそうに1缶を飲まれるほどのビール好きであった。カトマンズでの式典では、メイン・ゲストとして挨拶された上、市内パレードでは大雨の悪天候の中にもかかわらず、満艦飾の車上からにこやかに手を振られていた。

帰国後間もなく、日下田さんから地元益子町主催のマナスル初登頂50周年記念の町民ゴルフ大会があるとの連絡があった。「お前来るだろう?」という強制的お誘いがあり、千葉から電車で駆け付けてみると、県外からの参加者は私のみのようで、常磐線の友部駅前で乗ったクラブ・バスの中で少々不安になったことがあった。町主催ということもあって、町長、助役、収入役といった方々が参加されており、まるで役場が移転してきたような感があった。私は日下田さんと、日下田さんの旧制中学で1級上の町の有力者と一緒にプレーすることができ、ありがたく感じた次第である。懇親会ではお孫さんから花束を贈られ、おじいちゃんらしく、嬉しそうに受け取られていたのが印象的であった。

この10年後の平成28（２０１６）年には、マナスル初登頂60周年記念式典がカトマンズであり、日下田さんはネパール登山協会から招待された。ヒマラヤの高峰に関しては、初登頂者が登頂から60年後まで元気に過ごされている例は稀であると聞いた。日本山岳会の仲間とカトマンズまでの渡航は年齢的に負担になるのでは、と心配したが、幸いご家族がネパール旅行を兼

ねて同行されると聞き安心した。帰国後、息子さんにお聞きしたところ、初めてのネパール訪問で、興味深い旅行ができたと喜んでおられた。

また、平成27（２０１５）年5月には、ご家族の方々と稲門山岳会の先輩・後輩が多数参加された中での米寿のお祝いの会が東京であり、私も出席させていただき、元気なお姿に接することができた。

その後も、日本山岳会の総会・年次晩餐会、稲門山岳会のゴルフ・コンペでときどきご一緒することがあったが、一昨年ごろから姿を見せることが少なくなり、寂しい思いをしてきた。

今年は、新型コロナ騒動で延期になっているものの、2回ほど益子町に帰る予定がある。しかし、田舎に帰っても日下田さんにお逢いすることがないのかと思うと、つい足が重くなるのは仕方ないのか。寂寥感のみが残るこのごろである。

（吉永英明）

〈略歴〉

1930年：栃木県芳賀郡益子町に生まれる

1948年：栃木県立眞岡中学校（旧制）を卒業し、早稲田大学専門部政治経済学科入学。同時に山岳部に入部

1952年：早稲田大学南米アコンカグア遠征隊に参加

1953年1月：同峰に登頂、早稲田大学体育名誉賞を授与される

1954年3月：早稲田大学政治経済学部自治行政学科卒業。日本山岳会第2次マナスル登山隊に参加

1956年5月11日：日本山岳会第3次マナスル登山隊に参加、第2次アタック隊として登頂に成功。その後、運動部記者として毎日新聞社に入社、58年まで勤務する

1959～63年：日本山岳会理事

1960～76年：早稲田大学体育実技「山岳」講師

1962～65年：早稲田大学山岳部監督

1987～91年：日本山岳会評議員

1996～99年：栃木県教育委員会委員長

2005～09年：日本山岳会常任評議員

2007～10年：日本山岳会栃木支部長

2010年：早稲田大学スポーツ功労者表彰

2020年1月18日：逝去、享年89

磯野　剛太さん

いその　ごうた
（1954～2020）
会員番号 8000

磯野剛太さんが入院したと聞いて、昨年11月29日、伊丹紹泰会員（1976年ナンダ・デヴィ、80年チョモランマ北壁）と一緒に慶応病院を訪れた。ナース・ステーションで病室を確認し、部屋のドアを開けたが彼の姿は見えなかった。容態が急変したのかと緊張が高まったが、通りかかった看護師さんに確認すると、「買い物に行かれたようですね」と呑気に応答され、重篤なスキルス性胃癌と聞いていたのに、と拍子抜けした。

待合室で待つこと30分、レジ袋を手にした彼がいつもの〝のっしのっし〟とした歩きで帰って来た。聞けば腹がすいたので、院内のコンビニに買い物に行ったのだという。最近彼に逢ったのは2ヶ月前の9月21日に行なわれた、故寺本正史会員（76年ナンダ・デヴィ、84年カンチェンジュンガ縦走）を「偲ぶ会」で、そのときは機嫌良く飲んでいたのにと、それ以降、今日までの状況を詳しく聞く。その後、兄の磯野光一さんも来室され、45年前の昔話に花が咲いて、2時間近くも長居してしまった。

年が明けた2月29日、私は第1回グレート・ヒマラヤ・トラバースのためネパールへ出発した。3月7日に登山を開始し、4月15日、登山基地のタプレジュンに戻った。ホテルに落ち着いて、パソコンを開けて愕然とした。メールの多くに「磯野剛太氏逝去」の報告があったからである。見舞いに伺った後、退院して会社にもときどき顔を出しているとの報告を聞いて出発したのに、余りに早い旅立ちであった。

1976年ナンダ・デヴィ縦走

彼との最初の出会いは、75（昭和50）年に遡る。第2次RCC主催の「日本エベレスト南壁登山隊」に参加したのが縁で、隊長となる鹿野勝彦さんに誘われて高見和成・加藤保男と共ともに、日本山岳会の創立70周年の記念事業の一つである「ナンダ・デヴィ登山隊」に参加した。鹿野さんは日比谷高校山岳部で後輩だった磯野さんにも声を掛けていた。

まだ学生だというのに妙に大人びて、黎明期の日本山岳会の

内情に詳しいのには驚いた。それもそのはずで、彼の叔父上の磯野計蔵氏は日本山岳会の古い会員（1186）で、東京商科大学（現・一橋大学）山岳部に在籍し、関東学生山岳連盟設立に尽力された登山家であった。在学中にヨーロッパ・アルプス登山に没頭し、W・ウエストンとも交流（W・ウエストンと交わした書簡および「磯野文庫」が87（昭和62）年に日本山岳会に寄贈された）があった。叔父上と一緒に山登りをしたことはないようであるが、大きな影響を受けたことは間違いない。父上の磯野昌蔵氏（計蔵氏の弟）には、2つ年上の光一さんと一緒によく山に連れて行ってもらっており、それが山にのめり込む発端となった。また、渡辺兵力さんをはじめとする日本山岳会の長老たちと気脈を通じていたのは、成蹊学園所有の「虹芝寮」での先輩・後輩を超えた交友からと思われる。

1980年チョモランマ北壁

79（昭和54）年、ラトックⅠ峰南壁登山からの帰路、カラチの空港で彼に逢った。聞けば、アルバイトでキリマンジャロに行った帰りと言う。「シゲさん、チョモランマ北壁の偵察隊のメンバーになっていますよ」と聞き喜んだが、年度内の参加は無理であった。彼は偵察隊に参加し、帰国後、事務局で働いた。

年が明けた80（昭和55）年、2人は「日本山岳会珠穆朗瑪登山隊」北壁隊の隊員となった。彼は最年少隊員にもかかわらず登攀能力に優れていたので、ベースキャンプでの中国側協力隊員の指導役で活躍した。また、ホーンバイン・クーロワールの岩場を突破して、8150mまでフィックスロープを張ったのも彼である。

同時進行の北稜隊は、加藤保男隊員が単独登頂に成功したが、北壁隊は第1次アタック隊が失敗し、さらに2次隊の宇部明隊員を雪崩で失った。意気消沈のなか、西堀栄三郎総隊長と宇部家の後押しで隊は再起を図った。最終アタックはC4（7700m）から始まった。磯野隊員が徹夜して朝食の準備をしてくれた。その献身的なサポートがあって、5月10日21時前に、尾崎隆隊員と私はチョモランマの絶頂に立つことができた。

1984年カンチェンジュンガ縦走

84（昭和59）年、日本山岳会の創立80周年記念事業の「日本・ネパール／カンチェンジュンガ登山隊」は、ナンダ・デヴィ登山隊を率いた鹿野さんが再び隊長を務め、そのときのメンバーから梶正彦、寺本、小林政志、小原隆、磯野、重廣が参加し、撮影隊を含めると総勢42名の大部隊であった。

南峰～中央峰～主峰～西峰の縦走を目指した登山は、標高7200mのABCの上のグレート・シェルフから、それぞれの頂に向けて同時にルート工作を行なうという複雑なオペレーションを要求された。

3月14日にBC入り、4月13日ABC建設、14日南峰、15日中央峰、16日南峰のルート工作開始、1ヶ月後の5月17日、C5～中央峰間のルート工作を行ないながら磯野、大谷亮、ナワン・ヨンデンが中央峰（8478m）の登頂に成功した。18日には和田城志、三谷統一郎、ニマ・テンバ、重廣が南峰に登頂し、ニマ・テンバを除く3名が主峰に向かって縦走を開始した。標高8491mの南峰からの頂稜縦走は困難を極め、夕暮れ迫る中央峰に到達し、無事にC5に下山できたのは、前もって磯野隊員たちが残してくれた赤布のお陰であった。翌日、和田、三谷の2人は紆余曲折の末、主峰（8586m）に立ったが、西峰への縦走は断念した。

1988年3国友好登山隊（チョモランマ／サガルマタ交差縦走）

88（昭和63）年、「中国・日本・ネパール1988年チョモランマ／サガルマタ友好登山隊」に、磯野さん（ネパール＝南側）と私（チベット＝北側）は登攀隊長として参加した。友好登山は3国が協調して行なう登山であるがゆえに、86（昭和61）年、87（昭和62）年は、登山計画の具体化や予算書の作成などの会議を北京、香港、カトマンズで重ねるなど、長い準備期間が必要であった。

年が明けた2月22日、北側本隊が成田空港を出発、3月9日には南側本隊も成田を出発した。北側は3月3日に全員がBCにそろい、翌日から登山活動を開始することができたが、南側はカトマンズ～ルクラ間のフライトの問題もあり、3国の隊員がBCにそろったのは、3月末になってからであった。北側がC4（7028m）のルート工作を終え、日・中・ネの隊員が2回の荷上げを終了したころ、南側はやっとアイスフォールの偵察に入るという遅れようであった。この遅れが最後まで尾を引いて、北側がC6（8200m）までのルート工作と荷上げを終えて、休養のため全隊員がBCに下った4月19日、南側はやっとC3（7300m）建設という予想外の展開となった。さらに南側は4月21日に水越英隆ドクターが急死するというアクシデントに見舞われ、万全の態勢ができないまま交差縦走を迎える羽目になった。

3国友好登山隊は、世界最高峰の交差縦走と同時に、世界で初めての衛星生中継という大目標もあって、5月5日子どもの日に登頂・縦走に成功することが義務付けられていた。5月4日、北側は3国の縦走・サポート隊員が最終キャンプのC7（8680m）に入った。南側は中国・ネパール隊員は8350mの最終キャンプに入ることができたが、日本側の隊員は1つ手前のC4＝サウス・コル（7980m）までしか入れなかった。

5月5日、交差縦走の幕が切って落とされた。北側からは山田昇隊員が登頂後ネパール側のサウス・コルに下り、サポート

の山本宗彦隊員が頂上を往復した。併せて中村進カメラマンら3名の日本テレビ隊が頂上に到達して、世界最高所での衛星生中継に成功し、8848mからの大パノラマを世界の茶の間に届けた。しかし、南側は中国・ネパールの隊員は登頂・縦走に成功したものの、日本隊の北村貢縦走隊員もサポートの磯野登攀隊長も頂上を踏めなかった。入山以来、日々の交信を聞きながら、先頭に立って頑張る磯野登攀隊長の奮闘と苦労を知っていただけに、報われない状況にやりきれなさを感じたことを今でも鮮明に覚えている。

ヒマラヤを離れて

大学には8年間在籍し、日本山岳会のヒマラヤ登山隊に6回参加した彼は、加藤保男（76年ナンダ・デヴィ、80年チョモランマ）の会社やほかの旅行代理店の仕事を経験した後、82（昭和57）年、旅行代理店アトラストレックを創業した。その後、新たな山岳旅行の企画を提案し、社業を拡大していく。さらに90（平成2）年には、山岳・自然ガイドの全国組織化の中心となり、日本山岳ガイド連盟を設立、資格制度の統一化やガイド技術の向上に奔走した。2003（平成15）年、ガイド連盟は㈳日本アルパインガイド協会と統合合併し、㈳日本山岳ガイド協会と名称変更した。2012（平成24）年には、公益社団法人として認定され、理事長として「安全登山の啓発」に尽力している最中であった。

また、日本山岳会が口火を切った「山の日」制定では実務者として携わり、谷垣禎一・日本山岳ガイド協会会長の後ろ盾もあって、13（平成25）年11月、山岳5団体による「山の日」制定協議会が発足した。平行して超党派による「山の日」制定議員連盟が設立された。そして、14（平成26）年5月23日に、「山の日を制定する」法案が参議院を通過し、可決成立した。協議会の事務局長として、議員連盟との連帯、法案提出の推進に奔走した彼のマネジメント力には脱帽である。

お坊ちゃん育ちで、物腰が優しく、どこか気品がある大人の風格を若いころから持ち合わせていた。また、いつもニコニコ（剛太スマイルと言われていた）顔で人に接し、物腰の柔らかさは、初対面の人を安心させ信頼されたことは、彼の豊富な人脈からも見て取れる。そのビジネス・センスは、磯野家（明治屋創業・麒麟麦酒設立など）の血筋を考えると納得がいく。

今、登山界は登山者・登山用品製造販売・宿泊施設・交通機関など「新型コロナウイルス禍」により、これまで経験したことのない危機を迎えている。こんなときこそ、彼のセンスとマネジメント力が活かされたのではないかと思うと、余りに早い旅立ちが無念でならない。

3月21日に執り行なわれた葬儀には、天皇・皇后両陛下から弔辞が届けられた。

（重廣恒夫）

〈略歴〉

1954年1月24日：東京都港区に生まれる

1973年4月：都立日比谷高校から成蹊大学経済学部に入学。高校・大学を通じて山岳部に在籍しながら、登山・登攀・山岳スキーに没頭

1975年9月1日：日本山岳会入会

1976年：インド・ヒマラヤ、ナンダ・デヴィ登山隊に参加

1980年：チベット、日本山岳会珠穆朗瑪登山隊に参加。同年、成蹊大学マッキンリー登山隊で山頂よりスキー滑降

1982年：中国、日本山岳会学生部ボコダ登山隊1982に参加

1984年：ネパール・ヒマラヤ、カンチェンジュンガ登山隊1984に参加、中央峰に登頂

1985年：中国、日本山岳会中国登山隊に参加、登攀隊長としてキレン山脈主峰に初登頂

1988年：中国・日本・ネパール3国合同チョモランマ／サガルマタ友好登山隊に参加、ネパール側日本隊登攀隊長を務める

〈役職〉

日本山岳会評議員、公益社団法人・日本山岳ガイド協会理事長、一般財団法人・全国山の日協議会理事長、公益財団法人・日本スキー連盟アドバイザー、国立登山研修所専門調査委員、安藤百福記念・自然体験活動指導者養成センター諮問委員、青森大学客員教授、株式会社アトラストレック代表取締役

【報告事項】

1・入会希望者22名、準会員入会希望者14名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・紺綬褒章推薦規程（C34）制定に伴い、円滑な運用を図る目的から紺綬褒章推薦規程手続き要領（D8）を制定したことについて報告があった。（古川）

3・日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018の会計について報告があった。（古川）

4・記念事業委員会の活動状況について報告があった。（重廣・神長）

5・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。（安井）

6・総務委員会（総会関連）の作業状況について報告があった。（谷内）

7・家族登山普及委員会の活動状況について報告があった。（谷内）

8・登山計画書提出状況について報告があった。（谷内）

9・「山」4月号の発行について報告があった。（神長）

10・第7回小島烏水祭への出席について報告があった。（野澤）

【連絡事項】

1・谷川岳危険地区の登山禁止について連絡があった。（谷内）

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会・令和元年度5月度常務理事会　5月7日㈫18時30分～

・令和元年度5月度理事会　5月15日㈬19時00分～

2・令和元年度通常総会

・令和元年6月22日㈯14時00分～　東京都千代田区　主婦会館プラザエフ

令和元年度第2回（5月度）理事会議事録

日時　令和元年5月15日㈬19時00分～20時50分

場所　集会室

出席者　小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事

欠席者　神長常務理事、齋藤理事

【審議事項】

1・令和元年度通常総会の開催について

令和元年度通常総会の開催あたり、各事項について以下のとおりり審議した。

日時　令和元年6月22日㈯　午後2時より

会場　主婦会館プラザエフ　〒102―0085　東京都千代田区六番町15番　03―3265―8111（賛成12名、反対なしで承認）

決議事項

第1号議案　平成30年度事業報告（案）承認の件（賛成12名、反対なしで承認）

第2号議案　平成30年度決算報告（案）承認の件（賛成12名、反対な

しで承認）

第3号議案　令和元・2年度役員（理事・監事）（案）選任の件（賛成12名、反対なしで承認）

報告事項

1・令和元年度事業計画および予算の件

2・その他。（賛成12名、反対なしで承認）

2・平成30年度事業報告（案）について

平成30年度事業報告（案）について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

3・平成30年度決算報告（案）について

平成30年度決算報告（案）について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

4・寄附受入の承認について

令和元年5月8日付の寄附1件（２００万円）について寄附受入および管理規程第3条2に基づいて審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

5・令和元年度支部特別事業補助金について

支部事業委員会において審査された令和元年度支部特別事業補助金について審議し、8支部に対し総額67万円の助成を行なうこととした。（賛成12名、反対なしで承認）

6・新支部長の就任承認について

以下4支部の支部長の就任について審議した。

北海道支部　藤木俊三（№１４９７９）

千葉支部　松田宏也（№１１７４８）

関西支部　茂木完治（№１３５６８）

北九州支部　日向祥剛（№１１４２７）

（賛成12名、反対なしで承認）

【報告事項】

1・入会希望者13名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・寄附金3件の受入について報告があった。（古川）

3・平成30年度の監査法人からの往査所見について報告があった。（古川）

4・記念事業委員会の活動状況について報告があった。（重廣）

5・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。（安井）

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・令和元年度6月度常務理事会　6月4日㈫18時30分～

・令和元年度6月度理事会　6月12日㈬19時00分～

2・令和元年度通常総会

・令和元年6月22日㈯14時00分～　東京都千代田区　主婦会館プラザエフ

令和元年度第3回（6月度）理事会議事録

日時　令和元年6月12日㈬19時00分～21時00分

場所　集会室

出席者　小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事

欠席者　齋藤・星理事

【審議事項】

1・120周年記念事業の組織編成とプロジェクト開始承認について

120周年記念事業の組織編成とそのプロジェクトである「グレート・ヒマラヤ・トラバース・プロジェクト」「ヒマラヤキャンプ・プロジェクト」「日本山岳会のヒマラヤ登山映像ライブラリー整備プロジェクト」「山の天気ライブ授業」の開始について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

2・グレート・ヒマラヤ・トラバース／キックオフ・トレッキングの実施について

120周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース・プロジェクト」のキックオフ・トレッキングと位置付ける「カンチェンジュンガ展望トレッキング」の公募および実施について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

3・新支部長の就任承認について

以下の支部長の就任について審議した。

越後支部　桐生恒治（№7675）（賛成12名、反対なしで承認）

4・C32「職員給与規程」およびC33「職員介護休業規程」の制定について

C32「職員給与規程」およびC33「職員介護休業規程」の制定について審議した。なお、C33「職員介護休業規程」については平成30年度第8回（12月度）理事会においてすでに改正の承認がされていたが、制定手続き上の不備のため現行の内容で改めて制定とすることとした。（賛成12名、反対なしで承認）

【報告事項】

1・通常会員入会希望者14名、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったとの報告があった。（小林）

2・寄附金1件の受入について報告があった。（古川）

3・記念事業委員会の活動状況について報告があった。（重廣）

4・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。（安井）

5・登山計画書の提出状況について報告があった。（中山）

6・マンションの扉の変更について報告があった。（永田）

7・CASIOからの提案について報告があった。（永田）

8・AUTHENTIC JAPAN（ココヘリ）からの提案について報告があった。（永田）

9・聖護院門跡から連絡のあった大峰山系・前鬼山裏行場修行場の落書きの状況について報告があった。（永田）

10・令和元年度通常総会出欠ハガキの返信状況について報告があった。（永田）
11・当会の商標登録の更新について報告があった。（谷内）
12・2019年度会費滞納除籍対象者について報告があった。（谷内）

◎令和元年度通常総会

6月22日㈯午後2時00分～
東京都千代田区六番町　主婦会館「プラザエフ」
出席者129名、委任状919名（会員数4670名）
議案　1・平成30年度事業報告
　2・平成30年度決算報告
　3・令和元年・2年度役員選任
　4・平成31年度事業計画および収支予算

議案審議はいずれも原案どおりに可決承認された。

冒頭小林会長は、「近年取り組んできた財政基盤強化の様々な施策もあって、平成30年度も前年度に引き続いてわずかではあるが黒字化を達成できた。ただ、会費のみの事業運営には限界が見えてきている。収益事業の拡大を模索する一方で、寄附に報いる制度の充実を図り、寄附の受け入れを推進していきたい」「――これからの日本山岳会はどうあるべきか、などをテーマに活動を進めている。本総会をもって役員が交代するため、新しい理事の方々にバトンタッチをしていく」と挨拶した。

□令和元年6月22日　臨時理事会議事録

日時　令和元年6月22日㈯午後4時15分～午後4時45分
場所　主婦会館プラザエフ
出席者　理事　安井康夫、清登禄郎、野澤誠司、永田弘太郎、近藤雅幸、波多野あをい、古川研吾、坂井広志、山本宗彦、神尾重則、清水義浩、古野淳、萩原浩司、柏澄子
　監事　石川一樹、黒川恵
欠席者　飯田邦幸

【審議事項】
1・会長の選出
　互選の結果、会長（代表理事）に古野理事を選出した（賛成14名、反対なし）。
2・副会長・常務理事の選出
　互選の結果、副会長に野澤、坂井、山本各理事を、常務理事に永田、古川、萩原各理事を選出した（賛成14名、反対なし）。
3・副会長の序列
　会長不在等における会議の円滑な運営を図るため、副会長の序列を野澤、山本、坂井各副会長の順とする（賛成14名、反対なし）。

【会長報告】
1・新会長より、総務担当常務理事として永田理事、総務担当常務として柏理事、財務担当常務理事として古川理事が指名された。

2・業務執行理事の分担案について
新会長より、別紙の分担案が提示され、次の理事会で確定したいと報告された。
3・委員会、プロジェクトチーム、ワーキンググループの指名
新会長より、別紙の担当案が提示され、次の理事会で確定指名したいと報告された。

令和元年度第4回（7月度）理事会議事録

日時　令和元年7月10日㈬19時00分～21時00分
場所　集会室
出席者　古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・古川各常務理事、安井・清登・神尾・清水・飯田・柏・近藤・波多野各理事、黒川・石川各監事
欠席者　萩原常務理事
オブザーバー　節田会報編集人

【審議事項】
1・令和元年度支部助成金等および新入会員報奨金の送金について
令和元年7月中に、各支部に支部助成金等622万円、新入会員等獲得報奨金70万円、合計692万円を送金することについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）
2・「委員会規程　別表（C-14）」の見直し（永田）
実情に合ったものに見直し、12月理事会にて改正決議予定。

【報告事項】
1・正会員11名、準会員7名の入会希望者を承認したとの報告があった。（古野）
2・委員会等の担当理事の任命について報告があった。（古野）
3・寄附金および助成金受入3件に関する報告があった。（古川）
4・委員長の委嘱状記載の変更について報告があった。（永田）
5・支部合同会議の議題提出に関する依頼があった。（永田）
6・自然保護全国集会開催について報告があった。（飯田）
7・国際委員会新委員長に中山茂樹会員が就任。（古野）
8・図書委員会新委員長に神長幹雄会員が就任。（近藤）
9・自然保護委員会新委員長に谷内剛会員が就任。（坂井）
10・「山の日」事業委員会委員長に成川隆顕会員が就任。（清登）
11・科学委員会委員長に平野裕也会員が就任。（近藤）
12・YOUTHCLUB新委員長に星征雅会員が就任。（野澤）
13・家族登山普及委員会新委員長に五十嵐百子会員が就任。（野澤）
14・山研運営委員会新委員長に和田薫会員が就任。（安井）
15・その他の留任する委員長について各理事から報告があった。（永田）
16・会員による前鬼山の落書きについて報告があった。（永田）
17・全国支部懇談会での喫煙について報告があった。（永田）
18・カシオのPRW50の追加販売について報告があった。（永田）
19・登山届提出状況について報告があった。（山本）

20・不要になったクライミングロープのリサイクルについて報告があった。（永田）
21・「山」7月号の発行について報告があった。（節田）

【連絡事項】
1・事務局からの依頼・連絡事項
2・秋田支部設立60周年記念祝賀会
3・第66回弥彦山たいまつ登山
4・「公益法人の各機関の役割と責任」配付

■8月の理事会は夏休みのため休会

令和元年度第5回（9月度）理事会議事録

日時　令和元年9月11日㈬19時00分～21時20分
場所　集会室
出席者　古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清水・飯田・近藤・波多野各理事、石川監事
欠席者　清登・神尾・柏各理事、黒川監事
オブザーバー　節田会報編集人

【審議事項】
1・平成30年度の財産目録の修正および内閣府への資料提出承認の件
平成30年度の決算報告について内閣府より財産目録の修正指示および追加資料提出の要請があり、内閣府に提出する修正の確認および追加書類の内容について審議した。なお、決算報告は総会の承認事項であるが、財産目録の軽微な字句の追加削除であるため、令和2年度の総会で報告することとした。（賛成12名、反対なしで承認）
2・監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について
当年度の太陽有限責任監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）
3・100万円以上の寄附1件があったため、受入について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）
4・評議員の選任について
新たな評議員15名について審議をした。山本良三、成川隆顕、神寄忠男、橋本清、今村千秋、吉永英明、吉川正幸、伊丹紹泰、小林政志、重廣恒夫、絹川祥夫、大谷亮、森武昭、中山茂樹、野口いづみ。（賛成12名、反対なしで承認）
5・秩父宮記念山岳賞審査委員の選任について
秩父宮記念山岳賞審査委員の選任について審議をした。（賛成12名、反対なしで承認）
6・海外登山助成金審査委員の選任について
海外登山助成金審査委員の選任について審議をした。（賛成12名、反対なしで承認）

7・令和元年前期・海外登山助成金審査結果について
海外登山助成金審査会の審査報告を受けて審議し、令和元年前期・海外登山助成金を以下の登山隊1隊に対し助成することとした。（賛成12名、反対なしで承認）
静岡大学山岳部「キルギスタン未踏峰2019遠征隊」（9月17日～10月17日、学生5名）
8・3年を経過した準会員の、正会員への移行の簡素化
準会員制度検証ワーキンググループから、準会員から正会員への移行手続きを簡素化する提案があり、審議した。準会員は3年で退会となり、改めて正会員になる手続きをする必要があるが、移行手続きに手数が掛かることが推察されるため。（賛成12名、反対なしで承認）
9・会員の紺綬褒章を申請する件
500万円の寄附があった梶正彦会員について、紺綬褒章授与を国に推薦することについて審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

【協議事項】
1・支部合同会議の議題について協議した。（永田）

【報告事項】
1・入会希望者10名、準会員入会希望者16名について入会承認を行なったとの報告があった。（古野）
2・寄付金14件の受領について報告があった。（古川）
3・登山計画書の提出状況について報告があった。（山本）
4・今期の委員長決定について報告があった。（永田）
5・入会申込書の修正について報告があった。（永田）
6・準会員制度検証ワーキンググループで行なった、準会員のアンケート結果について報告があった。（永田）
7・上高地山岳研究所の「ミニ水力発電」の継続実施について報告があった。（安井）
8・9月7日に行なわれた新入会員オリエンテーションについて報告があった。新入会員出席者24名。（永田）
9・家族登山普及委員会の親子登山実施（6月と8月）について報告があった。（波多野）
10・「第10回日本山岳会全国森づくり連絡協議会」の開催について報告があった。（飯田）
11・植村直己冒険館「2019日本冒険フォーラム」の後援依頼の承諾について報告があった。（永田）
12・雪崩事故防止研究会が行なう講演会の後援依頼の承諾について報告があった。（萩原）
13・今年度の年次晩餐会について報告があった。（永田）
14・会報「山」9月号の発行について報告があった。（節田）

【連絡事項】
1・次回全国支部懇談会は、令和2年5月16日～17日、宮崎支部で行なわれる。（坂井）

令和元年度第6回（10月度）理事会議事録

日時　令和元年10月9日㈬19時00分～21時30分

場所　集会室

出席者　古野会長、野澤・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・神尾・飯田・近藤・波多野各理事、黒川、石川各監事

欠席者　山本副会長、清水・柏各理事

オブザーバー　節田会報編集人

【審議事項】

1・準会員規程の変更

これまで「準会員規程」により、準会員は支部役員に就任できなかったが、「準会員規程」を改め、就任可能にした。ただし、支部長は議決権が必要なため、就任不可とした。（賛成12名、反対なしで承認）

2・準会員制度検証プロジェクトチームの廃止

準会員から正会員への移行手続きの簡略化、および準会員規程の変更を終え、本プロジェクトチームを廃止する。今後、準会員制度については公益法人運営委員会等で扱う。（賛成12名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・上高地山岳研究所の改善計画が示され、協議した。（安井）

2・支部および本部での名簿作成と、当会における個人情報保護法対応について協議した。（永田）

【報告事項】

1・正会員5名、準会員3名の入会承認の報告があった。（古野）

2・寄附金および助成金受入4件について報告があった。（古川）

3・9月28日、29日に行なわれた支部合同会議について報告があった。（永田）

4・登山助成金の助成辞退の報告があった。（坂井）

5・創刊する「YOUTH　山」についての報告があった。（野澤）

6・寄附関連の案件について報告があった。（永田）

7・カシオ腕時計の販売結果報告と次回の販売について報告があった。（永田）

8・晩餐会について報告があった。（永田）

9・廃ロープ提供の依頼の報告があった。（永田）

10・「山」10月号について報告があった。（節田）

令和元年度第7回（11月度）理事会議事録

日時　令和元年11月13日㈬19時00分～20時30分

場所　集会室

出席者　古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・神尾・清水・飯田・近藤・波多野各理事、石川監事

欠席者　柏理事、黒川監事

オブザーバー　節田会報編集人

【協議事項】

1・支部連絡会議の議題について協議をした。（永田）

2・山岳での自然災害について、支部に情報提供を依頼することにした。（永田）

【報告事項】

1・正会員16名、準会員5名の入会承認の報告があった。（古野）

2・12月21日に第2回評議員会を開催する旨の報告があった。（古野）

3・山研運営委員会の業務報告および山研の改善計画について中間報告があった。（安井）

4・秩父宮記念山岳賞の決定について、全理事持ち回りで、賛成15名、反対なしで承認を得た旨の報告があった。（山本）

5・登山計画書の提出状況について報告があった。（山本）

6・海外登山助成金事業において、他団体と意見交換をしたとの報告があった。（坂井）

7・紺綬褒章の審査期間について報告があった。（永田）

8・年次晩餐会準備の進捗状況について報告があった。（永田）

9・「山」11月号について報告があった。（節田）

【その他】

1・寄附者への記念品のデザインなどが披露された。（永田）

☆令和元年度年次晩餐会

12月7日、東京・新宿の京王プラザホテルで開催された。全国から509人の会員が集い、天皇陛下も一会員としてご臨席された。

古野会長からは「新しい時代に向かって、遭難防止・山岳文化の振興・支部活動の活性化・自然保護という4つのテーマを柱に展開したい。それには、支部の皆さんの協力が不可欠だ。また、東京オリンピックではスポーツ・クライミングが初の正式競技として実施される。当会でも学生部の活動などに同競技を採り入れて成果を出している。一方で海外の山を目指す日本の若者が減少しているとも言われる。これから若者には国内外の山や自然、異文化と直に触れ合って欲しい。そうした次世代育成の面でも協力をお願いしたい」との挨拶があった。

会は秩父宮山岳賞受賞者・安間繁樹氏の表彰、極地探検家舟津圭三氏と萩田泰永氏の対談、日本・エクアドル友好合同登山隊の報告、新永年会員、新入会員の紹介、恒例の鏡開きで乾杯など、多彩な内容で、かつ和やかに進んだ。また、晩餐会に先立って特別展示、記念講演会、山岳写真展、図書交換会などが実施された。

令和元年度第8回（12月度）理事会議事録

日時　令和元年12月11日㈬19時00分～21時00分

場所　集会室

出席者　古野会長、野澤・山本各副会長、永田・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤・波多野各理事、黒川・石

川各監事
欠席者　坂井副会長、神尾理事
オブザーバー　節田会報編集人
【報告事項】
1・正会員15名、準会員12名の入会を承認した報告があった。（古野）
2・東京多摩支部設立10周年記念事業インドヒマラヤ・ザンスカール未踏峰遠征を使途とした100万円の募金の事前申請が、東京多摩支部からあった。ほか2件の寄附金の報告があった。（古川）
3・第23回全国博物館等連絡会議に8館8名、日本山岳会から13名が出席し開催されたと報告があった。（清水）
4・全国8館の博物館等に寄託している日本山岳会所有資料について、寄託の更新期間が1年だったものを2年単位で行なうものとする報告があった。（清水）
5・12月7日に開催された支部連絡会議について報告があった。役員15名、31支部が出席した。（永田）
6・「山」第1～最新号を会員から寄贈を受け、120周年記念事業「保有資料のデジタル化」の一環としてスキャニングし、ウェブに公開する報告があった。（清水）
7・年次晩餐会は509名の会員の出席があり、盛会に終わった報告があった。（永田）
8・北アルプス展望美術館から「日本山岳画協会北アルプス展望美術館展～山にみせられた画家達～」の名義後援の依頼があり、承認した報告があった。（永田）
9・会報「山」12月号の発行について報告があった。（節田）

■1月の理事会は休会

令和元年度第9回（2月度）理事会議事録

日時　令和2年2月12日㈬19時00分～22時00分
場所　集会室
出席者　古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤・波多野各理事、黒川・石川各監事
欠席者　神尾理事
オブザーバー　節田会報編集人
【審議事項】
1・100万円以上の寄附金の受入2件について審議した。（賛成14名、反対なしで承認）（古川）
2・上高地山岳研究所管理規定の改正、利用料金の引き上げについて審議した。（賛成14名、反対なしで承認）（安井）
【協議事項】
1・令和元年度後期・海外登山助成金の申請登山隊について協議。次回理事会で引き続き協議することになった。（坂井）

2・120周年記念事業の管理ガイドライン案について協議し、ガイドラインを施行することになった。（古川）
3・120周年記念事業募金開始について協議し、周辺環境が整い次第開始することになった。（飯田）
4・障がい者入会に関する入会条件の緩和について協議し、各支部に意見を募ることになった。（古野）

【報告事項】

1・波多野理事の退任について報告があった。（古野）
2・43人の正会員と19人の準会員の入会を承認した旨、報告があった。（古野）
3・寄附金・助成金の受入について報告があった。（古川）
4・上高地山岳研究所の利用要綱について改正した旨、報告があった。（安井）
5・上高地山岳研究所管理人の雇用通知について報告があった。（安井）
6・上高地山岳研究所管理人の防火管理者講習の受講について報告があった。（安井）
7・YOUTH　CLUB委員長交代につき、中山茂樹会員が就任した報告があった。（野澤）
8・グレート・ヒマラヤ・トラバースの実施について報告した。（飯田）
9・ヒマラヤ・キャンプの実施、寄附金を独自の経路でも募ること、撮影隊の同行について報告があった。（柏）
10・損害保険ジャパン日本興亜との契約における特約条項の追加について報告があった。（永田）
11・年次晩餐会の収支報告があった。（永田）
12・カシオの販売実績について報告があった。（永田）
13・「雪崩サーチ&レスキュー講習会basic」の後援名義を使用する報告があった。（萩原）
14・後援会「雪崩から身を守るために2020」の後援名義を使用する報告があった。（萩原）
15・日本山岳ガイド協会「百万人の山と自然『安全のための知識と技術　公開講座』」の後援名義を使用する報告があった。（萩原）
16・英国山岳会のウェストン祭への訪問について報告があった。（古野）
17・日本山岳会マークの許可申請があった旨、報告があった。（古野）
18・会報「山」2月号の発行について報告があった。（節田）

令和元年度第10回（3月度）理事会議事録

日時　令和2年3月11日㈬19時00分～21時00分
場所　集会室
出席者　古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清水・飯田・柏・近藤・各理事、石川監事
欠席者　神尾・清登各理事、黒川監事
オブザーバー　節田会報編集人

【審議事項】

1・個人情報取扱規定の改定について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）（永田）

2・令和元年度後期・海外登山助成金審査結果について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）（坂井）

3・令和2年度事業計画について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）（永田）

4・令和2年度予算について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）（古川）

【報告事項】

1・12人の正会員と5人の準会員の入会を承認した旨、報告があった。（古野）

2・2件の寄附金受入について報告があった。（古川）

3・令和元年度の寄附金受領に伴う特定資産積立処理および寄附金収入の指定正味財産への振替処理について報告があった。（古川）

4・日本山岳会120周年記念事業管理ガイドライン等について報告があった。（古川）

5・日本山岳会上高地山岳研究所利用要領の改正について再度報告があった。（安井）

6・日本山岳会ホームページのリニューアルについて報告があった。（清水）

7・日本山岳会所有の「シュラーギントワイト大図録集／アトラス」のウェブ公開について報告があった。（清水）

8・「ナイロンザイル」に関する問い合わせメールへの回答について報告があった。（永田）

9・「国際青少年自然環境体験キャンプ2020.in東京」（特定非営利活動法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト）、「2020年度山の知識検定」（一般社団法人日本山岳検定協会）の後援名義を使用する報告があった。（永田）

10・会報「山」3月号の発行について報告があった。（節田）

支部の活動報告

■北海道支部

２０１９年度は支部主催で花谷泰広氏を招き講演会を開催。山岳関係者のほか、一般の山愛好家など１２５名の幅広い世代が集まり、熱心に山の魅力に耳を傾けていた。質問コーナーにおいてもこれから山を志す方から質問が出るなど、盛大な会となった。

公益事業では大雪山高山植物盗掘防止パトロールを実施。６月１日～９月30日の期間で21名の会員・会友が85回パトロールする。

また、支部の活動を活性化すべく山行回数も増え、徐々に参加者が増えている。支部会員、会友に情報発信しやすい環境を整えるべく、山行を目的としたメーリング・リストを整備した。入会者を増やすべく、対外的なＰＲに取り組む。主な手法としてＦａｃｅＢｏｏｋにサイトを立ち上げ、会の活動を知ってもらえる環境整備を行なう。

冬期は北海道雪崩研究会の座学講習に参加、実技は札幌山岳連盟とともに実施した。

四季を通じての定例山行を道内各地の山で実施して会員・会友相互の交流を図る。情報発信として年６回の支部通信、年度末に会報「ヌプリ」を発行する。

《２０１９年度の主力事業》

①登山家・花谷泰広講演会＝山～挑戦の先にあるもの～　12月４日㈬　りんゆうホール　札幌市東区北９条東２丁目りんゆう観光３Ｆ　協力：秀岳荘、石井スポーツ、りんゆう観光　応募方法：Ｆａｃｅｂｏｏｋ67件、ハガキ12件、ｍａｉｌ49件　合計１２８件　来場１２５名

【講演内容】登山界のアカデミー賞と言われるピオレドールを受賞した登山家・花谷泰広氏の講演会を広く一般を対象に実施。海外の高峰で先鋭的クライミングを次々成功させる傍ら、２０１９年から日本山岳会のプロジェクトとなった若手登山家育成プロジェクト「ヒマラヤキャンプ」は２０１５年に花谷氏が主宰しスタートしたこと、甲斐駒ヶ岳・七丈小屋の運営を手掛けるなど、幅広い活動を紹介。講演では現在の活動に至るまでの経過を中心に、海外登山、日本の山岳文化の継承、山のリスクヘッジといったテーマを通して、山のす

ばらしさをお話いただいた。

②中央アジア・キルギス共和国の天山山脈北部のウチーチェリ峰（４５４０ｍ）への海外登山に向かう。渡辺悌二副隊長から氷河地形の講義を受けながら、高山植物の観察など学習登山を実施した。参加人数：10名　期間：２０１９年８月６～14日　８月８日＝アラアルチャ国立公園登山口（２１００ｍ）発８：45―アクサイ谷登山道（６時間）―ラツェックキャンプ（３４００ｍ）着15：00―アクサイ山小屋泊　８月９日＝アクサイ氷河探索（４時間・高所順応）８月10日＝ウチーテイリ峰登頂（登り４時間半・下り３時間）８月11日＝山小屋発７：00―登山口着10：30

《集会》

＊支部総会後の懇親会　４月13日㈯　ロイトン札幌

＊第35回全国支部懇談会　５月25日㈯～26日㈰　栃木支部主催　奥日光・光徳温泉

＊支部夏季交流会　８月31日㈯　ルーム白石（キルギス登山報告会も）

＊第35回東北・北海道地区集会　10月５日㈯～６日㈰　宮城支部主催　遠刈田温泉・蔵王古道

＊北海道山岳団体交流会　11月14日　ネストホテル「ましゅう」　幹事団体：北海道山岳ガイド協会

＊支部年次晩餐会　12月14日㈯　ロイトン札幌

＊支部新年交流会　１月16日㈭　ルーム白石

＊２０２０年度支部総会　４月11日㈯　ロイトン札幌は新型コロナウイルスのため中止

（工藤嘉高）

■――青森支部

平成31年度・令和元年度の青森支部は３名の新入会員が加わり、総勢42名の会員構成となる。各世代の割合を述べると、20代＝２・４％、30代＝０・０％、40代＝４・８％、50代＝19・０％、60代＝33・０％、70代＝31・０％、80代＝９・５％となる。60代から上の年齢層では73・８％、70代から上の年齢層でも40・４％という数値となり、いかに50代から下の会員が存在しないか、改めて考え深いものがある。しかし活動としては年齢に関係なく、山が好きで動く意志の有る会員は、行事に参加している。会員全体としては参加率の良い状態ではなく、相も変わらず毎回参加者が同じ「メンバーの固定化」が続いている。

今年度は支部役員の改選があり、新しい顔ぶれも含んで運営活動に努めた。支部役員もおのずと、60代から上の年齢層で７割以上を占められている。役員に関しては、年齢的な影響もあるメンバーも見られる。そして年齢に関係なく見られる傾向は、自分の役割を把握し、何を行なうべきかを理解していない

メンバーが多いことだ。伝授しようとしても遣らないものは、当てにできないのである。必然的に一部役員の負担が増えることとなり、しかし遣らなければ、支部運営に影響が出ることも事実である。役員は今一度、自分のポジションを考え、何を行なうべきかを思考していただきたい。

毎年の支部行事は「八甲田山岳スキー」から始まる。昨年度の冬は、降雪の状況がいつもと違っており、1月と3月に多くの積雪量を得ている。さらに気温と雪質が関わるのか、2019年4月25日ころ、北八甲田主峰「大岳」南東斜面において、雪崩が発生した。山岳スキー行事に参加した会員は、すぐに跡を確認している。7月7日(日)に行なわれた「八甲田山の日」山開き記念登山大会では、この雪崩跡と並行して通る登山道を登り、山頂を目指した。八甲田山の中でも、大岳において雪崩が起きることは聞いたことが無い。ガイド関係者にも尋ねてみたが、初めてのケースではないかとのことであった。この雪崩でケガ人・犠牲者が出なかったことが救いである。

新年を迎えた2020年の青森県は、全国同様の暖冬となり、降雪量の少ない冬となった。2月中旬の時点で青森市＝23㎝、弘前市＝40㎝、八甲田山系酸ヶ湯では279㎝と、300㎝を切っている。標高900mの酸ヶ湯温泉付近にはアメダスが設置されており、2013年2月には、積雪量500㎝を超えて全国的に話題となった。今季の冬は樹氷の育ちが悪く、八甲田山の魅力を半減させる。3月に降雪が有ると、硬く締まった雪面上に積もり、雪崩の起こる確率も高くなるだろう。そして積雪量が少ないことは春の雪融けが早く、季節感がずれ込むことも予想される。桜の開花時期など、経済的にも影響が出るかもしれない。雪解水は農業にも影響を与えるだろうし、夏場の水不足など、気掛りを上げるときりがない。雪は除排雪作業など、普段の生活に与える影響は大きい。しかし雪国の人間は、雪の恩恵を受けて生かされていることを、改めて考えさせられる。

《会　議》

＊5月18日(土)　通常総会　アソベの森　いわき荘「ビューロッジ四季彩」平成30年度事業報告、平成30年度決算・会計監査報告、平成31年度事業計画・予算案の審議　出席者16名、委任状13名

＊6月22日(土)　日本山岳会　通常総会（四谷　プラザエフ）出席者　支部長

＊7月3日(水)「八甲田山の日」打合せ　青森市雲谷「登高山荘」（役員・班構成、時間配分・各コース割り、その他）出席者3名

＊9月28日(土)～29日(日)　平成31年度　支部合同会議（会務報告、安全登山、連絡事項、そのほか）出席者　支部長・事務局長

＊2月21日(金)「北八甲田登山道維持ボランティア活動」懇談会　青森支部出席者2名

＊2月22日㈯　青森支部役員会議　令和2年度予算計画、事業計画「第36回東北・北海道地区集会」実行計画　出席者6名、ほか1名

《山行・野外活動》

＊4月27日㈯～29日㈰　支部春山行「八甲田山岳スキー」酸ヶ湯温泉駐車場テント設営　27日㈯＝「ビーコン・ゾンデ・スコップの使用方法講習会」支部参加者7名・ほか2名　28日㈰＝北八甲田山「酸ヶ湯～仙人岱～小岳」山岳スキー　支部参加者4名・ほか2名

＊5月19日㈰　通常総会オプション山行「岩木山百沢コース：焼止ヒュッテ」支部参加者10名

＊6月2日㈰　「岩木山　弥生新道」ブナ林散策　支部参加者2名、ほか1名

＊7月14日㈰　秋田「駒ケ岳」：HAT－J合同企画　アルパこまくさ～八合目登山口～阿弥陀池～男女岳～阿弥陀池～ムーミン谷～大焼砂～横岳～阿弥陀池～八合目登山口～アルパこまくさ　青森支部参加者6名、HAT－J2名、ほか2名

＊10月27日㈰　支部秋山山行「蓬田村　大倉山」支部参加者6名、ほか1名

＊11月23日㈯～24日㈰　支部晩秋山行　北八甲田山「仙人岱ヒュッテ泊」23日㈯＝酸ヶ湯登山口～地獄湯の沢～仙人岱～大岳山頂～仙人岱～仙人岱ヒュッテ泊　24日㈰＝仙人岱ヒュッテ～仙人岱～地獄湯の沢～酸ヶ湯登山口　支部参加者10名

＊1月11日㈯～12日㈰　「山岳スキー研修」青森スプリング・スキーリゾート　青森支部参加者12名、岩手支部：高橋タイ子氏、一般参加者3名　竹越会員宅宿泊・懇親会

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月25日㈯～26日㈰　全国支部懇談会「栃木県日光」栃木支部主催　25日㈯＝日光東照宮参拝、記念講演、事務連絡、懇親会　26日㈰＝刈込湖・切込湖ハイキング　青森支部参加者4名

＊6月22日㈯～23日㈰　「白神山地ブナ林再生事業（春季）」支部参加者9名、ほか5名

＊6月29日㈯　「北八甲田登山道維持ボランティア活動（1回目）」酸ヶ湯登山口～仙人岱～仙人岱ヒュッテ　支部参加者3名

＊7月7日㈰　「第27回　青森ウェストン祭」（新郷村）支部参加者2名

＊7月7日㈰　「第9回　八甲田山の日」記念山開き登山大会　酸ヶ湯登山口～地獄湯ノ沢～仙人岱～大岳山頂～大岳避難小屋～上毛無岱～下毛無岱～酸ヶ湯温泉　支部参加者3名

＊7月28日㈰　「北八甲田登山道維持ボランティア活動（2回目）」仙人岱～大岳山頂～大岳避難小屋　支部参加者10名、ほ

か1名

＊8月11日(日)「山の日」制定記念登山大会：HAT－J合同企画　野辺地町「烏帽子岳」夜泣き岩～野営場から烏帽子岳山頂～馬門分岐～夜泣き岩　支部参加者3名、HAT－J5名、ほか1名

＊9月21日(土)～22日(日)「白神山地ブナ林再生事業（秋季）」支部参加者7名、ほか3名

＊10月5日(土)～6日(日)　東北・北海道地区集会「宮城県　宮城蔵王」宮城支部主催　5日＝支部長会議、全体会議、記念講演、事務連絡、懇親会　6日＝交流登山　Aコース「蔵王古道全行程　Bコース「蔵王古道一部行程」青森支部参加者8名

＊10月19日(土)～20日(日)「秋田支部60周年記念事業」乳頭温泉郷・鶴の湯　19日＝秋田支部60周年記念式典、記念講演、懇親会　20日＝交流登山　Aコース「大白森」Bコース「小白森」青森支部参加者7名、ほか

《その他の行事・懇親会》

＊11月9日(土)～10日(日)　支部年次晩餐会　9日＝黒石温泉郷「板留温泉　ホテルあずまし屋」行事会議・懇親会　支部参加者14名　10日＝オプション山行「黒森山」支部参加者10名

＊12月7日(土)　公益社団法人日本山岳会　年次晩餐会（新宿京王プラザ）青森支部参加者5名

＊2月25日(火)～26日(水)「八甲田山岳スキー遭難防止対策用誘導ポール設置」　25日(火)＝「宮様ルート」支部参加者8名　26日(水)＝「大岳環状ルート（西側）」支部参加者5名

＊3月24日(火)～25日(水)「八甲田山岳スキー遭難防止対策用誘導ポール設置」　24日＝「箒場岱ルート」支部参加者6名　25日＝「すいれん沼ルート」支部参加者6名

《取止め・中止、変更等事業》

＊10月13日(日)　支部秋山山行「蓬田村　大倉山」天候不順により中止、10月27日(日)に改めて催行

＊3月29日(金)「八甲田山の日」打合せ　青森中央市民センター新型コロナウイルスの影響により、会場閉館期間に入る

《広報》

＊4月15日(月)　第19号「青森支部報」発行　支部長挨拶・平成30年度・令和元年度行事レポート、令和2年度事業予定・新入会員自己紹介

（小倉一友）

■岩手支部

岩手支部は平成31（令和元）年度には、新入会員9名を獲得した。前年度にも6名の新入会員があり、4年間連続して会員増加である。この状況に支部内が活気づいている。支部の事業

を見ても、まず月例山行へは一般参加者が来るようになり、その中から新入会者が現れるという好循環が見られた。我々はほぼ岩手県内に限る日帰り山行ではあるけれども、一般の登山愛好家がほとんど登っていない未知のルートや、冒険的要素のある計画を取入れ、会員にとっても面白い山行を実施することができた。ただし、その分以前は必要でないと決めていた事前の下見をときに実施し、リスクマネジメントに気配りを要した。つまりは、会の事業内容の計画如何（いかん）にあると思う。

一方、新入会員に対して基本的な技術や知識の習得の必要性と同時に指導者の養成を、という声も高まり、支部事業委員会の協力の下一般登山者を募集し、実技を伴う安全登山読図教室を開催した。今後も会員の技術向上に向け、読図力や雪上訓練などをベテラン会員の力添えをもらいながら継続させていきたい。

《会議》

＊4月2日(土)　第1回支部役員会（北上市）出席5名

＊4月7日(日)　支部委員会出席11名　通常総会（盛岡市）平成31年・令和元年度事業報告・決算報告、令和2年度事業計画・予算案の審議　出席21名　委任状33名

＊9月28日(土)～29日(日)　令和元年度支部合同会議（東京）出席：阿部支部長・高橋（慎）事務局長

＊12月7日(土)　令和元年度支部連絡会議（東京）出席：中屋副支部長

＊12月14日(土)　支部拡大委員会（釜石市）出席18名

＊12月25日(水)　第2回支部役員会（盛岡市）出席4名

＊2月25日(火)　第3回支部役員会（盛岡市）出席4名

＊3月31日(火)支部会計監査（紫波町）出席3名

《山行・野外活動》

＊4月20日(土)　4月例会公益B（調査研究）「貝吹岳」（雫石）参加10名

＊5月18日(土)　5月例会「羽山、羽黒山」（北上市）参加6名

＊5月18日(土)～19日(日)　岩手県山協残雪期講習会兼指導員研修会参加5名

＊6月6日(水)　公開講座事業第1回実行委員会　参加8名

＊6月16日(日)　「残雪の裏岩手連峰開山祭」を後援　山行は悪天候中止　阿部支部長の講話

＊6月22日(土)　6月例会公益C（環境保全）「平ヶ倉山」（雫石町）山行は悪天候中止し、読図講習会の実行委員会　参加7名

＊7月1日(土)　岩手山山開き　参加7名

＊7月7日(日)　平ケ倉山山行　参加3名

＊7月20日(土)　7月例会「高檜能山」（奥州市）参加7名

＊8月1日(水)～3日(土)　8月例会「尻内丸山、渡島駒ヶ岳、砂原学」（北海道道南）参加2名

＊8月10日(土)　山の日記念第8回公開講座「登山ナビゲーション読図講座　座学」(盛岡市西部公民館)参加23名(会員12名、一般11名)
＊8月11日(日)　「登山ナビゲーション読図講座実地　区界高原・兜明神岳」(宮古市)参加20名(会員10名、一般10名)
＊9月21日(土)　9月例会「仙人山」(北上市)参加9名
＊10月26日(土)　10月例会公益A(登山振興)「堺ノ神岳」(岩泉町)参加9名、10月30日(水)別ルート探索　参加3名
＊11月9日(土)　11月例会「傾城峠」(九戸村)参加19名
＊12月7日(土)～8日(日)　岩手県山協初冬期講習会兼指導員研修会参加8名
＊12月14日(土)　12月例会「御在所山」(釜石市)参加17名
＊12月22日(日)　1月例会スキー「夏油高原」(北上市)参加7名
＊1月19日(日)　雪崩講習会　下倉スキー場　講師＝平山順子、参加7名
＊2月15日(土)　2月例会「小松倉山」(雫石町)参加11名
＊3月21日(土)　3月例会「女助山」(雫石町)参加8名

《広報》

＊9月30日(月)　支部通信第50号発行
＊3月20日(水)　支部通信第51号発行

《その他の行事、懇親会》

＊4月7日(日)　支部懇親会(盛岡市)参加17名
＊5月25日(土)～26日(日)　第35回全国支部懇談会(奥日光)参加2名
＊10月5日(土)～6日(日)　第35回東北・北海道地区集会(蔵王町)参加2名
＊10月19日(土)～20日(日)　秋田支部設立60周年記念山行「大白森」(田沢湖町)参加3名
＊12月7日(土)令和元年度年次晩餐会　参加5名
＊12月8日(日)　記念山行「三ツ峠山」参加1名
＊12月14日(土)　支部忘年会　釜石市鵜住居　参加19名

(阿部陽子)

■宮城支部

宮城支部は1958年に設立され今年で62年目を迎える。会員数は漸減が続き、4月1日現在、会員35名、準会員4名の39名で、2014年に発足した支部友会会員15名を加えると合計54名となっている。会員は10年前の約半数まで減少し、このまま減少に歯止めが掛からないと支部の存続も危ぶまれる状況にある。

通常の活動としては、公益事業の一環として、登山教室や親子登山教室を実施している。これらの事業は将来における支部会員、支部友会員増を期待してのものであるが、関係市町の後

援をいただき、実施した親子登山教室は大変好評で、さらに創意工夫して実りあるものにしていきたい。また、共益事業として、主に宮城の里山を中心に月1回の月例山行を実施している。

このほかに、月例の役員会、仙台市内小学校が実施している野外活動（登山）のボランティア支援を行なう。さらに、ビールパーティー、芋煮会、晩餐会などで会員等の親睦を図っている。昨年度は、第35回東北・北海道地区集会を蔵王の遠刈田温泉を会場に地元の「蔵王古道の会」の後援をいただき開催した。記念講演は、蔵王町教育委員会佐藤洋一氏に「蔵王の信仰の歴史と蔵王古道」と題し講演をいただいた。参加者は約70名を数えた。

《会議》

＊4月21日(日)　平成31年度総会　事業報告・計画、決算・予算の審議　出席者29名（当日出席13名、委任状15名）

＊定例役員会　5月23日(木)、6月26日(水)、9月5日(水)、10月18日(金)、11月14日(木)、1月15日(水)、2月11日(水)、3月18日(水)　出席者延べ61名

＊第35回東北・北海道地区集会打合会　5月7日(火)、8月1日(木)、8月30日(木)、9月2日(月)、9月20日(金)　出席者延べ33名

《山行・野外活動》

＊4月13日(土)　春山山行（蛤山）参加者14名

＊5月19日(日)　第8回親子登山教室（戸神山）参加者29名

＊6月9日(日)　第7回登山教室（船形山）参加者7名

＊6月29日(土)　ヨーロッパアルプス・トレッキング（チロル、ドロミテ）参加者7名

＊8月3日(土)～5日(月)　夏山山行（南八ヶ岳）参加者11名

＊9月23日(月)　第9回親子登山教室（達居森）参加者31名

＊10月5日(土)　第35回東北・北海道地区集会（蔵王）参加者66名

＊11月10日(日)　第8回登山教室（北泉ヶ岳～泉ヶ岳）参加者21名、

＊12月8日(日)　初冬山行（七ツ森）参加者16名

＊2月11日(月)　厳冬期山行（黒鼻山）参加者7名

＊3月28日(土)　早春山行（鹿狼山）参加者18名

《広報・出版活動》

＊支部会報「宮城山岳」・情報誌「宮城山岳通信」の発行　今年度は、宮城山岳第23号（宮城支部設立60周年記念誌）、宮城山岳通信（第16～19号）を発行して支部会員、支部友会会員、日本山岳会（本部および各支部）に送付した。

《その他の行事、懇親会》

＊ビールパーティー　7月29日(日)　H・JALシティ仙台　参加者15名

＊支部晩餐会（望年会）12月16日(日)　シェルブール仙台　参加者13名

■秋田支部

（冨塚和衛）

秋田支部は昭和34（1959）年6月に設立され、令和元年に60周年を迎えることから、60周年を記念した行事を計画した。主なものは、支部設立60周年記念祝賀会および交流山行、太平山集中登山、明田富士山の桜の標柱建て替え、60座ラリー、会報合本、60周年記念誌発行などである。

秋田支部の会員数は47名。会員の高齢化、平均年齢の高さは避けられない状況にあり、また、活動会員が固定化していることなどの問題を抱えながらも、支部山行や歩道整備活動などを通じ、登山者に働きかけて会員増の努力をしている。

公益的活動として、秋田県生活環境部自然保護課が、山の日制定事業の一環として行なう、山の環境整備県民協働事業の馬場目岳避難小屋防腐塗装に参加した。

《会議》

＊4月6日㈯　通常総会　30年度事業報告、決算の承認　31年度事業計画、予算案の審議。出席41名（当日出席18名、委任状23名）

＊5月22日㈬　第1回役員会　支部設立60周年記念事業を協議　太平山山開きへの協力　11名出席

＊9月11日㈬　第2回役員会　支部設立60周年記念祝賀会について　馬場目岳避難小屋防腐塗装への協力　明田富士山の桜の標柱立替えについて　秋の里山説明（金峰山）　東北・北海道地区集会（蔵王古道）　声かけ山行説明（保呂羽山）11名出席。

＊9月28日㈯～29日㈰　支部合同会議　支部長、事務局長出席

＊11月28日㈬　第3回役員会　支部設立60周年記念祝賀会報告　60座ラリーの経過報告　役員改選について　13名出席

＊1月18日㈯　第4回役員会　令和2年度通常総会に提出する案件について協議　役員改選について　11名出席

＊3月4日㈬　第5回役員会　令和2年度通常総会については、新型コロナウイルス感染症拡大を懸念して中止を決定。10名出席

《山行・野外活動》

＊5月18日㈯　春の里山山行　石ノ塔　参加者18名

＊5月24日㈮　声かけ山行　八塩山　参加者5名

＊7月13日㈯～14日㈰　太平山集中登山　参加者13名　本会山行委員会計画の太平山登山者12名と交流

＊10月1日㈫　秋の里山山行　金峰山　参加者10名

＊10月16日㈬　大白森　下見調査　参加者6名

＊10月20日㈰　支部設立60周年交流山行　大白森参加者37名　小白森山参加者4名

＊11月6日㈯　声かけ山行　保呂羽山　参加者9名

《プロジェクト・地域振興活動・公益的活動》

＊6月9日㈰　太平山山開き市民登山に協力。秋田市からの一般参加者約30名をサポート。支部会員参加12名

＊8月11日㈰　明田地区町内会子供会の「山の日に明田富士山に登る」に支部会員参加5名

＊9月21日㈯　山の環境整備県民協働事業に参加　馬場目岳避難小屋防腐塗装　支部会員参加8名

＊11月2日㈯　太平山歩道整備　倒木処理・中岳周辺刈払い　7名参加

＊仁別植物園や森林博物館で来館者への説明や森の案内などを支部会員がサポート。太平山自然学習センター、東北森林管理局が主催する登山やハイキング、自然観察に秋田支部会員がサポート。5月～10月。小学生および一般参加者延115名

《広報・出版活動》

＊支部会報「秋田山岳」第111号～第115号まで5回発行。

＊支部だより第16号～第21号まで6回発行

《その他の行事、懇親会》

＊9月26日㈬　明田冨士山の桜の標柱建替え　参加者13名

＊10月19日㈯～20日㈰　支部設立60周年記念祝賀会を鶴の湯温泉山の宿で開催。参加者54名（支部会員27名、本会会長および東北各支部他27名）

＊5月25日㈯～26日㈰　全国支部懇談会　2名参加

＊10月5日㈯～6日㈰　東北・北海道地区集会　5名参加

＊12月7日㈯　日本山岳会年次晩餐会に3名参加

＊1月18日㈯　新年会を開催14名参加

（鎌田倫夫）

■山形支部

2019年度会員動向は、新入会員1名、逝去会員2名、退会2名で、支部会員数55名（永年会員3名）である。

逝去会員や退会者が多い1年となった。今年度の特徴は悪天候で中止を余儀なくされた山行が多かったことである。特に、蔵王地蔵山害虫被害調査の中止は残念であった。

《会議》

＊支部総会　4月14日㈯　山形ビッグウイング　出席者43名内委任状26名。

＊役員会　3回（6月8日、10月26日、3月29日いずれも土曜日）。

＊支部長・事務局長会議（東京）9月28日㈯～29日㈰　支部長・事務局長出席。

《山行》

＊支部山行　蔵王地蔵山　害虫被害調査登山　6月30日(日)豪雨により中止。
＊支部山行　日本山岳会（山研）それぞれの上高地　9月3日(火)～9月5日(木)　4名参加。
＊第35回東北・北海道地区集会（宮城支部）紅葉の『蔵王古道』への誘い　10月5日(土)～6日(日)　2名参加。
＊支部山行（鳥海山滝ノ小屋芋煮会）10月12日(土)～13日(日)　台風で中止。
＊支部晩餐会・記念登山（瀬見温泉・亀割山）11月16日(土)～17日(日)　7名参加。
＊支部山行（蔵王樹氷原を滑る会）1月17日(金)～19日(日)　ASCから9名、支部から8名参加。
＊特別企画（フィンランド・オーロラツアー）2月16日(日)～23日(土)　参加希望者寡少により中止。
＊支部山行（鳥海山スキー登山）3月7(土)～8日(日)　参加希望者寡少により中止。
＊支部山行（月山春スキー2019年度企画事業）4月25日(土)コロナウィルスの影響により中止。

《地域振興活動》

＊「学校から見える山」イラストプレゼント（飯豊町内の4小学校の5・6年生）7月22日(月)

《公益目的事業》

＊第25回アルパインフォトビデオクラブ写真展　6月5日(水)～13日(木)　酒田市総合文化センター　クラブ所属支部会員3名中心に開催　推定1200名来場。
＊学校から見える山イラスト展示（酒田市美術館）2月15日(土)～28日(金)。

《懇親会》

支部晩餐会　11月16日(土)～17日(日)　瀬見温泉喜至楼別館　15名参加。山用品・書籍のバザーが行なわれた。記念登山は鳥海山鶴間池往復で7名が参加した。

《今後の課題》

蔵王の害虫被害調査のような調査登山というこれまでになかった形態の山行を通じて支部活動の活性化に今後も尽力していきたい。「学校から見える山」イラストプレゼントは山形県内4地域への贈呈を達成したが、今後はコンセプトを改良して再起動する予定である。

（野堀嘉裕）

■福島支部

支部員の高齢化が進む中、会員拡大が停滞し、支部活動においても参加が一部会員に限られる現状を打破するため、平成28年度に「4・専門部」を立ち上げ、これまでの執行部・事務局

一辺倒から全員参加型の支部運営を目指すこととした。特に若手会員獲得と後継者育成は急務であり、「山行委員会」が、沢登りと積雪・氷壁登攀に絞って年間計画を立案、一般に呼びかけた結果、非会員の参加と問合せが増えるなどの成果が見られた。

公益事業として3・11大震災・原発事故以降取組んできた「山岳地域放射線量調査・記録化」のほか登山道整備、植生復元活動も継続実施した。

《会議》

＊4月6日(土)　支部総会　事業報告、計画、決算、予算、役員改選案など原案通り満場一致で可決（総会出席20、委任状34）

＊11月9日(土)　役員会　平成31（令和元）年度事業計画の上半期総括と下半期に向けた協議、出席9

《山行・野外活動》

＊5月18日(土)　第6回フリークライミング講習会　地方紙に公募記事掲載、一般から16名参加。基本技術と実技を習得

＊8月11日(祝)　第4回山の日記念「吾妻山親子登山」公募の24家族75人の親子が参加。支部スタッフ25名体制で安全登山と山の日広報を実施

＊山行委員会企画の公募登山11回実施、延べ70人参加

5月19日(日)　本名御神楽岳・霧来沢遡行　6名参加

6月9日(日)　吾妻連峰・大滝沢遡行　11名参加

7月7日(日)　吾妻連峰・松川中流域遡行　8名参加

7月18日(日)　吾妻連峰・松川上流域遡行　10名参加

8月25日(日)　那須連峰・甲子南沢遡行　10名参加

10月5～6日(日)　越後御神楽沢奥壁本谷ルンゼ　5名参加

10月20日(日)　安達太良連峰・烏川左俣遡行　7名参加

10月27(日)　那須連峰沢納め山行　6人参加

2月9日(日)　真野川アイスクライミング　8名参加

3月10日(日)　磐梯山東壁登攀　5名参加。

＊支部定例山行

8月1～3日(土)　北ア・薬師岳縦走　5名参加

10月19日(土)　秋山登山・蒲生岳　7名参加

2月15日(土)　万世大路氷柱探索　4名参加

＊支部後援登山

10月20日(日)　地域主催「ふれあい登山」の後援団体として支部から7名参加、主催者支援

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月上旬～11月　山岳地域放射線測定・公益　吾妻、安達太良、那須甲子の3ヶ所について定点測定実施　参加延べ25名

《広報、出版》

＊支部会報（4半期ごと、および臨時）を年度内5回発行

《その他の行事、懇親会》

＊9月1日(日)　吾妻小舎で支部納涼会　13名参加

＊11月10日㈰　霊山青柳山荘で芋煮会　20名参加

（渡部展雄）

■茨城支部

1・総会と例会

総会を6月16日㈰、例会を4月13日㈯、9月14日㈯、11月9日㈯、令和2年1月11日㈯に開催した。

2・講演会　一般市民に公開し、公益事業として行なった

＊4月13日㈯　第60回「囲碁が世界を駆け巡る」NPO法人囲碁世界交流の会　代表理事　合田實彦氏（参加者25名うち会員15名）

＊6月16日㈰　第61回「霞ケ浦の環境問題」茨城支部支部友・奥井登美子氏（参加者28名うち会員13名）

＊9月14日㈯　第62回「白山山中での昔の暮らしとかつての白山信仰」茨城支部会員・長岡正利氏（参加者25名うち会員15名）

＊11月9日㈯　第63回「日本三百名山登山」茨城支部会員山本幸生氏（参加者22名うち会員15名）

＊1月11日㈯　第64回　①「ギアナ高地への遠征」②「スペインへの巡礼」茨城県山岳連盟海外委員長・椎名正明氏（参加者30名うち会員15名）

3・第35回全国支部懇談会（栃木支部主管）5月25～26日開催され、茨城支部から6名が参加した。

4・第13回4支部合同懇談会（栃木支部、千葉支部、茨城支部、群馬支部）を茨城支部が担当して令和2年2月15～16日につくば市グランドホテル東雲にて開催（参加者44名うち茨城支部21名）宝篋山（小田山・標高460・7m）への山行と小田城跡・平沢官衙跡の見学を行なった。

5・第90～99回の10回に及ぶ山行を実施した。

6・6月16日に支部報第11号を発行した。今回からは、デジタル版を原則とすることとした。

7・12月7日に開催された　日本山岳会年次晩餐会に茨城支部から6名が参加した。

（星埜由尚）

■栃木支部

栃木支部は設立して13年目となった。栃木県では「山の日」協議会が中心となり、関連行事を「山の日」連携イベントとして積極的に広報している。当支部では7月に「親子登山教室」、1月に「山の講演会」とを開催した。登山の振興と安全登山教育を目的に奥日光の学習院光徳小屋で行なう「親子登山教室」は8年目を迎え、半月山で登山を実施した。「山の講演会」は13

回目となり、参加者も多く、日本山岳会の良いＰＲとなっている。また栃木県山岳遭難防止対策協議会の構成員としても活動している。

支部会員数はここ数年50名程度で推移してきた。今年度2名の新入会員があったが、日下田名誉会員ほか1名が亡くなられ、また3名の退会があり、3名の純減となっている。支部活動を維持するため、若手会員の増強がよりいっそう求められている。

「次期リーダー育成と会員増強」を目的とした特別事業補助金は3年目となり、ユース栃木では「谷川岳虹芝寮スプリングミーティング」と「山岳ファーストエイド&セルフレスキュー勉強会」を実施した。勉強会は群馬支部や県山岳・スポーツクライミング連盟のほか、一般にも案内し、多くの参加者を得ている。日本山岳会の活動が理解され、会員の増強とスキル向上につながると期待される。中・高年支部会員で構成するマスターズクラブは、会員同士の健康を目的としてほぼ毎月の山行を継続している。

《会議》

＊5月19日㈰　通常総会　事業報告・計画、決算・予算および栃木支部規約改定など原案通り満場一致で可決した。出席21名。総会終了後懇親会を開催、懇談に親交を深めた。

＊支部役員会　令和元年度役員会5回開催。支部役員と事業委員が毎回8～15名集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》

＊5月25日㈯～26日㈰　第35回全国支部懇談会

栃木支部主催で奥日光・光徳で開催した。初日は講演「近代登山とアーネスト・サトウ父子の日光への山旅」と懇親会、2日目は切込湖・刈込湖ハイキングや大使館別荘記念公園見学を実施した。27支部と本部ほかで155名が参加。

＊8月24日㈯～25日㈰　夏山山行・懇親会　奥鬼怒（葛老山、加仁湯）参加9名。

＊10月4日㈮～6日㈰　秋山山行　東北（月山、鳥海山）参加8名。

＊2月15日㈯～16日㈰　北関東ブロック4支部合同懇談会　茨城支部主管で筑波で開催。栃木支部から8名参加。

＊上記支部山行のほか、マスターズクラブでは、栃木百名山登山を継続、今年度は古賀志山、白笹山、乳母ヶ平、諏訪岳、大小山、天狗山の山行を実施した。日光清掃登山や那須クリーンキャンペーンにも参加した。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月6日㈯～7日㈰　谷川岳虹芝寮スプリングミーティング

ユース栃木主催で成蹊学園虹芝寮を拠点に開催。親睦を深めながらスキーを含む春の残雪期の登山能力の向上を図った。栃木支部のほか群馬支部、千葉支部、東海支部、成蹊踏高会など12名参加。

＊7月7日(日)　日光清掃登山　栃木県山岳・スポーツクライミング連盟との共催　社山ほか　栃木支部5名参加。
＊7月13日(土)～14日(日)　親子登山教室　奥日光の光徳、半月山で「[山の日]協議会連携イベント」として開催。学習院山桜会や栃木県山岳・スポーツクライミング連盟、県および市教育委員会の共催・後援を受けた。参加親子6家族13名、支部関係者14名。
＊9月1日(日)　那須岳クリーンキャンペーン　栃木県山岳・スポーツクライミング連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催　那須岳周辺（朝日岳～清水平）栃木支部6名参加。
＊11月23日(土)～24日(日)　山岳ファーストエイド&セルフレスキュー勉強会　栃木県青年会館（コンセーレ）と栃木県山岳・スポーツクライミング連盟後援　ユース栃木主催で伊藤岳（兵庫県加古川医療センター救急専門医）氏と長岡健一（国際山岳ガイド）氏を講師にコンセーレ（座学）、古賀志山（実技）で開催した。栃木、群馬支部や県山岳・スポーツクライミング連盟所属山岳会のほか一般含め66名参加。

《広報・出版活動》

＊5月19日(日)　栃木支部報第12号を発行。

《講演会》

＊12月21日(日)　「海外登山の集い」講演会　栃木県山岳・スポーツクライミング連盟海外委員会と共催。インド・東チベット・ヨセミテ・南米など四演題の講演を行なった。一般参加者64名。
＊1月26日(日)　第13回「山」の講演会　栃木県青年会館（コンセーレ・共催）で「[山の日]協議会連携イベント」として実施。栃木県博物館協議会会長の飯野達央氏を講師に「アーネスト・サトウ父子の日光への山旅」をテーマに講演した。参加84名（うち一般70名）。

（前田文彦）

■群馬支部

今年度は２０２０年に入ってから、新型コロナウイルス禍で例会やイベントが中止されるなどの深刻な問題が出てきたが、1月の新年例会までは支部活動、会務、山行とも順調に進めることができた。また5人の新入会員を迎え、年度末には50人を超える会員数となった。

昨年末に『ぐんまの山歩きベストガイド』が地元紙の上毛新聞社から発行されたが、この1年はその取材・執筆・編集の総まとめの年となった。群馬支部は岳連、労山とともに編集委員会を組織。掲載された全１２６コースのうち、33コースを担当するとともに編集事務局として編集作業の中核も担った。

また「ぐんま県境稜線トレイル」では、県から岳連、労山と

ともに安全などに関する調査を委託され、群馬支部では谷川岳・オキの耳から平標山の家までの区間を担当。7月から10月まで月1回、計4回の調査を行ない最新の情報を県へ報告した。

独自事業としては支部設立以来初となる一般公募型の登山教室「健康登山塾」も2年目を迎え、群馬県庁での「山フェスタ」、谷川岳での「山の日イベント」などの継続事業の充実発展や支部山行の活発化なども重なり、今年も支部にとっては濃密な1年となった。

また、共益事業の支部山行としての実施となったが、カッコソウ咲く鳴神山での自然観察山行では他支部の会員や一般参加者も迎え、自然保護委員会の活動と新たな公募山行への礎を築いた。

《会議》

会議は隔月（奇数月第3水曜日が原則）に開かれる例会を柱に、偶数月には役員会を開き、そのほか必要に応じて山行などの各種委員会を開いた。

例会は支部に所属する全会員が対象で、各種事業、山行の報告や事前案内、そして中長期的な課題などを話し合う場として開き。毎回ほぼ半数近い会員が参加している。

また5月は通常総会として開催。1月は恒例の新年例会として懇親を主目的に開いた。総会、新年例会を含め、年6回の例会は高崎、前橋でそれぞれ3回開催した。

なお、総会は5月15日㈬、前橋市中央公民館で開き、2018年度の事業報告、会計報告、2019年度の事業計画案、予算案を全会一致で承認した。総会時の会員数は48人、出席21、委任18であった。

《山行・野外活動》

支部山行委員会による「支部山行」は、本年度も6回行なわれた。数はまだ多くないが、自然観察会や雪山初歩訓練など変化に富んだものとなった。

個人山行では会員間の偏りはあるが、かなり活発に山行を重ねている会員もおり、また経験の浅い会員も積雪期にチャレンジするなど広がりを見せてきた。さらに日本山岳会のエクアドル友好合同登山に荒木副支部長が参加した。

山行委員会による支部山行は次のとおり。

＊4月20日㈯　西上州・天丸山（参加者2人）

＊5月14日㈯　カッコソウの咲く鳴神山　支部自然保護委員会と共催　埼玉（2人）、神奈川（1人）、千葉（1人）各支部の会員や県内一般参加者も含め18人が参加。

＊7月27日㈯・28日㈰　上高地集中（参加者11人）山研を拠点とし、西穂高、穂高連峰縦走、岳沢、上高地の4班に分かれて実施。

＊8月11日㈰　山の日イベントin谷川岳2020（参加者10人・一般参加100人）自然観察ツアー、天神尾根からの山

頂往復、清水峠弾丸ツアーなど。その運営に参加した。

＊10月5日㈯・6日㈰　尾瀬合宿（参加者15人）平野会員（支部顧問）のロッジ長蔵に泊まり、山行は至仏山・アヤメ平班と尾瀬ヶ原班に分かれて実施。

＊1月1日㈬　赤城・長七郎山（参加者6人）

＊3月21日㈯　浅間・黒斑山（参加者8人）蛇骨岳まで往復4名、雪上歩行や読図のトレーニングを兼ね黒斑山まで往復4名

《プロジェクト・地域貢献活動》

＊「ぐんま山フェスタ2019」6月8日㈯～9日㈰　岳連、労山などと共催（県、上毛新聞社ほか後援）。群馬県庁1階の県民ホールをメイン会場に、群馬支部では「山の魅力」（根井事務局長）と「ぐんま県境稜線トレイルについて」（黛副支部長）のショートスピーチ、そして齋藤繁会員による講演会「群馬の自然環境を生かした健康登山塾」を、さらに橋本勝会員の山岳写真展示のほか、相談ブースで来場者への説明・応対に当たった。また「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」による木暮理太郎（第3代日本山岳会会長）の資料展示もサポートした。

＊「山の日イベント.in谷川岳」8月11日㈯　谷川岳エコツーリズム推進協議会と、群馬支部が事務局を担う群馬県山岳団体連絡協議会主催、みなかみ町共催で行なわれた。山麓の自然観察会やフラワーハイキングから天神尾根と厳剛新道からの谷川岳登頂、清水峠弾丸ツアーなど、5コースに分かれ初心者から上級者までおよそ100人が参加した。群馬支部は岳連、労山とともに企画運営に加わり、虹芝寮で「カフェ&スイーツ」を味わいながらの山麓の自然観察会や、谷川岳登頂、清水峠越えツアー、厳剛新道コースのガイドスタッフおよび本部要員として参加した。

＊「ぐんま県境稜線トレイル安全等調査」　19年度から始まったぐんま県境稜線トレイルの安全などを定期的に巡視しチェックする調査活動。群馬県からの受託事業で、日本山岳会は群馬県山岳団体連絡協議会の担当する土合から馬蹄形・谷川連峰主稜線を経て三坂峠までの区間の内、谷川岳トマの耳～平標山の家間を調査した。7月から10月まで各月1回、全4回実施。送迎（下山地から登山口までの輸送）要員も含め、延べ10人が参加した。

＊「健康登山塾」　4月から11月まで、榛名山系を主会場に全7回の講座（うち1回は荒天中止）を開いた。一般参加者は抽選で選ばれた28人。塾長に齋藤繁会員。大家会員がスポーツアドバイザーとして加わり、各回10人ほどの支部会員がスタッフとして参加した。また医師、看護師も医療スタッフとして同行した。

＊会員による地域貢献活動

①「群照会記念講演」6月16日、前橋市内のホテルで開かれた群馬県内の女性教育管理職で組織された群照会総会（300人が参加）で「自然から学び、自然とともに生きる」と題して北原支部長が記念講演を行なった。

②「0から始める山歩き」　10月から12月まで前橋市上川淵公民館の講座「0から始める山歩き」で根井事務局長が講師を務め、群馬の山と山歩きの全般について座学と実地登山を指導した。その後、同館の自主学習グループとして継続し、引き続き根井会員がサポートし、毎月1回活動している。参加者11人。

《広報・出版活動》

支部報を当初予定通り年2回（7月と1月）、10号と11号を発行した。

3年前に開設したホームページも順調に更新を続け、内容も徐々に充実してきた。また1昨年、試行的に始めたフェイスブックもフォロワー数が200人を超え、150人以上がフォローするツイッターとともに本格的な情報発信ツールとなってきた。

（根井康雄）

■　埼玉支部

2019年5月1日より元号が平成から新たに令和となり、名目的にも新たな時代に移行した年だった。また、2020年は埼玉支部設立10周年に当たり、記念式典・記念山行・記念誌などの具体化に取り組んだ。一方、自立した登山者育成のための登山教室「埼玉やま塾」は2年目を迎え、最新の登山用具・技術に関する基礎知識を学ぶ机上講習3回、実技は大高取山、武甲山、谷川岳および雲取山に登り、多くの新たな会員を迎えるとともに、支部活性化に貢献できた。2019年度自然保護全国集会をさいたま市で開催した。

支部活動は各委員会が年間計画を掲げて支部事業を推進している。広報委員会では、埼玉支部ホームページの活用を推進し、年3回の支部報発行を実施した。社会貢献委員会では、埼玉県障害者スポーツ協会と共催で毎年恒例のふれあい登山を実施した。山行委員会では、毎月1回の月例山行で多様な会員の要望に合わせた山行、四季の山として季節の特徴を生かした山行、新たに平日山行を実施した。登山教室の指導者養成および次世代を担うリーダー養成のために、最新の登山技術装備に精通した登山ガイドの指導の下、沢登りや岩登りなどを実施した。安全登山委員会では、セルフレスキュー・救急救命法や山岳救助隊による安全登山に関する講演会、講習会を実施した。

《総会》

＊4月13日㈯　2019年度通常総会（埼玉会館4階4A会議室）は、現在の会員数129名に対し、出席者38名、委任状は80名で開催され、松本支部長を議長に選出し、平成30年度事業報告および収支決算報告、2019年度事業計画（案）および収支予算（案）、並びに支部役員人事（案）が承認された。

《埼玉支部委員会》

＊毎月開催　支部長・支部委員・会計・監査・事務局長が出席して、各委員会の事業系計画・報告、登山計画・報告、入退会管理、人事などの審議・承認を実施した。

《行事・講演会・講習会・自然観察会・支部新年懇談会・ふれあい登山・「山の日」など》

＊4月2日㈫　安全登山講演会は「安全に山に登るために」と題し、高妻潤一郎会員を講師に浦和コミュニティセンター10階で、参加者42名（会員18、一般25名）で開催。

＊4月7日㈰　大久保春美記念「第9回ふれあい登山」は金子駅から加治丘陵の桜山展望園地を経て仏子駅に下山した。参加者は障がい者21名、付き添い19名、山岳会関係者31名、障害者スポーツ協会5名など合計76名で、登山を通じて障がい者と登山関係者との親睦を深めた。

＊5月22日㈬　安全登山講演会は「安全に山に登るためには―今、登山道具が充実している―」と題し、MT石井スポーツの早川秀政氏を講師に、浦和コミュニティセンターで開催し、参加者27名（会員17、一般10）が登山道具の進化に熱心に耳を傾けた。

＊6月1日㈯　安全登山委員会は「ハイキングレスキュー講習」を飯能市市民会館および天覧山周辺で開催し、埼玉岳連の瀬藤武氏を講師に会員9名を含む計21名が参加。

＊7月6㈯～7㈰　2019年度自然保護全国集会が「生物多様性と自然保護」をテーマに、さいたま市のホテルブリランテおよび埼玉県男女共同参画推進センターで講演会並びにセミナーを開催し、翌日、北本自然観察公園で自然観察会が開催された。

＊10月26日㈯　安全登山講習会は悳秀彦会員を講師に「山のファーストエイド入門」と題し、教育会館会議室で講習会を開催した。参加者は22名（会員11、一般11名）。

＊1月11日㈯　新年山行および支部懇談会は、東吾野駅に集合し、ユガテ・顔振峠を22名でハイキングした。その後、飯能市の「暖だん」で懇親会を開催した。

＊1月18日㈯　安全登山講演会は「より安全に登山を楽しむために！」と題し、埼玉会館・3C会議室で、埼玉県警山岳救助隊・工藤大介副隊長の講演会を開催し、43名（一般登山愛好者21名、他支部3名、支部会員19名）が参加した。

《山行・3支部合同懇親山行》

＊4月14日(日)　総会記念・清掃登山として、群馬県の赤芝登山口から小野子山および十二ヶ岳に18名が、縦走並びに登山道のゴミ拾いを実施し、下山口駐車場に下山した。

＊5月9日(水)　平日山行として、新坂平登山口から赤城山（鈴ヶ岳）を13名で往復登山。

＊5月18日(土)～19日(日)　四季の山（春）　内山峠から荒船山（行塚山）に登り、天狗温泉浅間山荘（泊）、翌日、浅間山荘から前掛山（浅間山）に6名で登山した。

＊6月2日(日)　大山ケーブル駅から阿夫利神社下社～大山山頂に登山、10名が参加した。

＊7月14日(土)～15日(日)　上高地から蝶ヶ岳ヒュッテ（泊）、翌日、蝶ヶ岳～常念岳～一ノ沢へ下山（一部の会員は蝶ヶ岳から横尾へ下山）、14名が参加した。

＊8月3日(土)～4日(日)　四季の山（夏）　中沼登山口～銀名水避難小屋～焼石岳（往復）、翌日、須川温泉～苔花台～笊森コース分岐～栗駒山（往復）に、7名で登山した。

＊9月21日(土)　滝本駅～御岳山頂駅～御岳神社～大岳山（往復）に、6名で登山した。

＊10月5日(土)　笹子バス停～白縫神社～滝子山頂～滝子山登山口に下山、5名が登山。

＊10月26日(土)　東京多摩支部主催による南関東3支部合同懇親山行が「奥多摩むかし道」ハイキングおよび奥多摩BCで懇親会が開催され、東京多摩支部（22名）・神奈川支部（7名）・埼玉支部（3名）など、合計33名が支部間の交流・懇親を深めた。

＊10月31日(木)　東武日光駅～鳴虫山頂～東照宮前～東武日光駅に7名が参加した。

＊11月9日(土)～10(日)　四季の山（秋）　中房温泉～合戦尾根～燕山・燕山荘（泊、往復）を9名で登山した。

＊12月14日(土)～15日(日)　忘年山行は鐘撞堂山から円良田湖経由で羅漢山に登り、JA農業団体研修センター（泊・懇親会）に下山し、15名が参加した。

＊2月1日(土)～2日(日)　四季の山（冬）　雪山訓練の後、北蓼科ビレッジ（泊）、翌日、ラピタス蓼科ロープウェイ山頂駅から北横岳（往復）登山、16名参加した。

＊3月14日(土)　犬目～扇山～百蔵山～百蔵登山口から猿橋駅下山、16名が参加した。

《全国支部懇談会》

＊5月25日(土)～26日(日)　第35回全国支部懇談会が栃木支部主催で開催され、日光自然博物館で講演会、奥日光・光徳牧場「日光アストリアホテル」で懇親会、翌日は切込湖・刈込湖ハイキング等が実施され、埼玉支部から8名が参加し、全国の会員との交流・懇親を深めた。

《埼玉支部報の発行、ホームページの活用・再構築など》

＊埼玉支部報は、27号を6月、28号を11月、29号を２０２０年3月に発行した。

＊デジタルメディア委員会の協力を得て埼玉支部ホームページを再構築し、山行・行事・講演会・講習会・支部報などの情報を会員に迅速に提供するとともに、一般登山愛好者にも最新の埼玉支部の活動状況を紹介するなど、会員増にも期待される。

（林　直行）

■――千葉支部

「クラブライフを生き生きと楽しもう」をキャッチフレーズに、どうすれば支部が活性化するか考えた1年だった。まず、多彩な山行を行なうことで支部活動に参加しやすい環境を作ることにした。特に県内で行なったウォーキングや自然観察会は、高齢となった会員も無理なく参加でき好評だった。また山歩き初心者などにも声を掛けやすいので、新会員入会につなげていきたい。山行の数を増やしたのはよいが、リーダーの数が不足しているのも現状。リーダー育成をどう行なっていくかが課題として残っている。

◇そのほかの諸施策

①安全登山のために

登山前後のストレッチ体操の定着。山行計画書の書式統一と１００％提出を目指した。登山指導者研修会への会員派遣。緊急連絡網の作成と遭難対策費の積み立て（２００円／人）を開始した。

②より楽しい山行とクラブライフ充実のために

同好会活動推進――ゆとり山行をするビスターリ倶楽部のほか、ウォーキングクラブ・自然学クラブ・スケッチアート倶楽部・沢登り同好会が発足した。

③「山美化」運動の継続

登山道に落ちているゴミが目に留まったら、持ち帰ろう！運動の結果は支部ホームページに随時アップ。

④青少年野外活動の支援

恒例となった児童養護施設「晴香園」の子どもたちとの山行も年間3回行なった。（茂原市子どもセンターの親子登山は台風被害のため中止）

⑤房総の山復興プロジェクトが始動

台風15号および19号により甚大な被害を受けた房総の山の復興を目指して、千葉県山岳連盟、千葉県勤労者山岳連盟とともに同歩調をとることで一致。3団体名で千葉県に対して登山道整備の協力を申入れした。

《山行・野外活動》

＊4月13日　鋸山・裏鋸、小鋸　参加8名
＊4月14日　印旛沼ウォーク　参加13名
＊4月20日　三浦半島・武山　参加6名
＊4月26～29日　佐渡の山　参加9名
＊4月29日　高川山　参加8名
＊5月3～5日　尾瀬・燧ケ岳　参加4名
＊5月30日～6月4日　屋久島　参加5名
＊6月2～3日　十文字峠と甲武信ヶ岳　参加4名
＊6月9日　鵜原理想郷巡検　参加17名（自然学・公益事業）
＊6月14～15日　三ッ峠山　参加6名
＊6月16～19日　栗駒、焼石、早池峰山　参加7名
＊6月22日　多古町・道の駅周辺ウォーク　参加6名
＊6月29～30日　奥多摩・沢中泊　参加3名
＊7月11～13日　山形蔵王と月山　参加6名
＊7月20～23日　鹿島槍ヶ岳　参加6名
＊8月2～3日　篭ノ登山、水ノ塔山　参加3名
＊8月2～6日　剱岳・裏剱縦走　参加8名
＊8月6～7日　内浦山子どもキャンプ　参加13名（児童養護施設晴香園・公益事業）
＊8月21～24日　鳳凰三山　参加4名
＊9月14～16日　木曽駒、空木縦走　参加6名
＊9月29日　印旛沼ウォーク　参加8名
＊9月29日～30日　平ヶ岳　参加8名
＊10月3日～4日　裏岩手縦走　参加2名
＊10月19日　鵜原理想郷　参加9名（児童養護施設晴香園・公益事業）
＊10月19日　利根川ウォーク　参加6名
＊10月26日　深大寺周辺巡検　参加18名（自然学・一般募集）
＊10月27～28日　鹿俣山、日光白根山　参加6名
＊11月2～3日　編笠山、青年小屋　参加2名
＊11月3～4日　雲取山　参加7名
＊11月9日　雁ヶ腹摺山　参加8名
＊11月17日　浦安街歩き　参加5名
＊11月30日　筑波山　参加10名
＊12月1日　市川・街歩き　参加12名
＊11月30日～12月1日　福島・二ッ箭山　参加3名
＊12月8日　房総の沢①三間川左俣　参加5名
＊12月14～15日　夏沢鉱泉から硫黄岳　参加6名
＊12月21～22日　忘年山行・高宕山と御殿山　参加18名
＊12月29日　房総の沢②三間川右俣　参加5名
＊1月5日　房総の沢③梨沢　参加4名
＊1月11～1月12日　新島　参加5名
＊1月12日　弘法山　参加10名（児童養護施設晴香園・公益事業）

＊1月10～13日　蔵王スキー　参加7名
＊1月18～19日　谷川岳　参加4名
＊1月18日　成田山さくら山公園　参加7名
＊1月25日　丹沢・高松山　参加10名
＊2月8日　丹沢・塔ノ岳　参加9名
＊2月11日　房総の沢④高宕川　参加8名
＊2月22日　手賀沼ウォーク　参加7名
＊3月14日　青梅・赤ぼっこ　参加11名
＊3月20～22日　神津島・天上山　参加12名
＊3月29日　千葉・昭和の森　参加14名（自然学・一般募集）
《会議》
＊支部通常総会　5月12日　千葉市文化センター　平成30年度事業および決算・監査報告と令和元年度事業および予算、新役員人事について審議（当日出席会員32名、委任状33名）
＊支部定例役員会（毎月第3火または水曜日）
＊全国支部合同会議（9月28・29日）
＊全国支部連絡会議（12月7日）
《懇談会・懇親会》
＊虹芝寮ミーティング（栃木支部主催）4月6～7日　参加2名
＊全国支部懇談会（栃木支部主催）5月25～26日　参加9名
＊4支部懇談会（茨城支部主催）2月15～16日　参加10名
＊山の日ビールパーティ　8月11日　参加39名
《小集会活動》
本八幡、柏、千葉の3ヶ所でサテライトサロンを開催
《講演会》
5月12日　支部総会記念講演「日本山岳会の歴史と支部活動に期待すること」講師：神崎忠男・元日本山岳会副会長　参加37名
《リーダー育成》
2月1～2日に支部事業委員会が開催した登山教室指導者養成講習会に2名を派遣
《広報活動》
＊「千葉支部だより」の発行（4、7、10、1月）
＊ホームページの活用

（三田　博）

■東京多摩支部

10周年記念事業は1月18日に記念式典と記念講演会を行ない、多数の参加者を迎えスタートを切った。

昨年度来、安全対策委員会を中心に登山計画書の提出の啓蒙活動を続けてきたが、その提出状況は支部山行57件、同好会山行10件、個人山行117件、合計184件で、昨年度の合計1

85件を下回っている。今年度は台風や新型コロナウイルスの感染防止などに伴い、山行環境が悪かったものの、今後さらなる啓発活動が望まれる。

《会員動向》

会員動向を見ると、登山教室修了生の入会者は6期生10名（全員準会員）、7期生19名（正会員2名、準会員17名）と順調に推移する一方で、正会員の退会者増が止まらない。この4年を見ると毎年20名前後の正会員が退会しており、準会員がその穴埋めをするように会員数を伸ばしてきたが今年度は増減0で、高齢者が多い東京多摩支部の現状を考えると、先行きの見通しは暗い。また、準会員数が来年度早々には90名を超える予想で、役員、委員長の人材不足を克服するには支部員の30％を超える勢いの準会員の力を活かす方策をとることが望まれる。

《会議》

＊5月12日(日)　立川市女性総合センター第3学習室にて通常総会　29年度事業報告・収支決算案、30年度事業計画・予算案などを審議。出席168名（委任出席者112名を含む）

＊幹事会　立川市女性総合センター第1会議室にて毎月第3火曜日開催　幹事・監事が延べ143名出席。予算・決算・事業計画・プロジェクト事業などの審議・活動報告

＊総務、財務、会報、ＩＣＴ、山行、自然保護、安全対策、奥多摩ＢＣ運営の8つの委員会と登山教室、10周年記念事業実行委員会の2つのＰＴがほぼ毎月開催

《山行》

＊定例山行　11回実施、延べ142名参加

4月20日(土)愛鷹連峰・越前岳14名、5月11日(土)滝子山10名、6月1日(土)霧ヶ峰16名、7月27日(土)・28日(日)栗駒山・焼石岳13名、8月24日(土)・25日(日)北岳8名、8月25日(土)・25日(日)唐松岳・五竜岳8名、10月5日(土)御座山13名、11月9日(土)浅間隠山22名、12月14日(土)大峰・泣き坂ノ頭23名、1月11日(土)・12日(日)北八ヶ岳・ニュウ14名、2月24日(土)霧ヶ峰スノーシューハイク7名

＊平日山行　8回実施、延べ87名参加

4月11日(木)飯盛山6名、5月11日(木)鳴神山10名、6月20日(木)黒川鶏冠山13名、7月18日(木)霧降高原5名、9月5日(木)甲州高尾山6名、11月28日(木)羅漢寺山16名、12月26日(木)三国山13名、3月12日(木)セーメーバン18名

《自然保護活動・自然観察会》5回実施、延べ84名参加

＊4月25日(木)　会員向け自然保護観察会23名

＊6月16日(日)・17日(月)　三ッ峠アツモリソウ保護活動13名

＊6月23日(日)　身近な水環境の全国いっせい調査6名

＊6月28日(金)　富士山御庭の自然観察会　一般2名、支部員10名、講師1名参加

＊8月21日(水)　御岳山レンゲショウマ観察会　一般15名、支部

員9名　計24名参加

＊里山保護活動の候補地調査／東京都野火止用水歴史環境保全地域を緑地保全活動として東京都に申請

《登山教室》

＊4月～3月　第7期初級登山教室　受講生29名

＊5月～7月　立川市と共催で初心者向け登山講座　受講生40名

＊6月～8月　第8期初心者登山実習　受講生22名

＊9月～3月　第8期初級登山教室　受講生31名

＊4月～3月　第1期中級登山教室　受講生12名

《広報活動》

＊支部報「たま通信36号、37号」「会報たま38号、39号」発行。4月、8月、11月、2月に年4回発行。

＊ホームページの運営・管理および入会問合せ対応

＊メールマガジン「たま便り」60回配信　購読者268名《講演会》3回実施　延べ一般68名、支部員135名参加

＊7月13日(土)　安全登山講演会「最近の奥多摩地域における山岳遭難事故の実態と事故防止」一般36名、支部員28名参加

＊10月29日(火)　自然保護講演会「高尾山にも迫りつつあるシカ」一般19名、支部員27名参加

＊1月18日(土)　10周年記念講演会「ヒマラヤ爛熟期を振り返る」一般13名、支部員80名参加

《安全講習会》3回実施　延べ71名参加

＊10月20日(日)　「縦走中におけるロープの使用方法」支部員18名参加

＊12月2日(月)　「事故発生時の現地対応シミュレーション」支部員34名参加

＊12月20日(金)　「事故発生時の遭難対策本部シミュレーション」支部員19名参加

《そのほかの行事・懇親会》

＊4月7日(日)　新入会員との交歓散策と奥多摩山開き　30名

＊7月26日(土)　新入会員オリエンテーション　28名

＊8月2日(金)　納涼ビアパーティー　14名

＊8月10日(土)　ビアパーティーと奥多摩花火鑑賞　16名

＊10月26日(土)　南関東三支部懇親山行「奥多摩むかし道」神奈川支部6名、埼玉支部3名、多摩支部30名　計39名

＊1月12日(日)　「奥多摩氏神様初詣と奥多摩BC開き」17名

《10周年記念事業》

＊1月18日(土)　支部設立10周年記念式典　参加者106名

《サテライト・サロン》6回開催、延べ128名参加

＊吉祥寺、立川、多摩で開催

（山本憲一）

■ 神奈川支部

平成31（令和元）年度は、支部設立を記念して立ち上げた「かながわ山岳誌プロジェクト」が軌道に乗り、月2回の踏査山行実施を続け（7・8月を除く。10月は台風で中止）、2つのグレード（ハイキング・登山初級程度のレベル＝L、登山中上級のレベル＝H）山行の計15回の山行により、約80のコース282ポイントのうち15コース41ポイントを踏査した（累計で現在、49コース168ポイント）。

本プロジェクトは、支部公益目的事業として5年計画で実施するもので、神奈川県下のほぼすべての山と主要な峠を踏査し、日本山岳誌の神奈川版を作成する。単なる登山ガイドに止まらず、地学・気象・山岳信仰や山名の由来などの文化的な情報も加えた総合的山岳記録誌を目指しており、その情報提供などを通じて社会へ貢献することを目的としている。踏査山行は、プロジェクトチームを中心に支部会員が協力して行ない、ハイキング・登山初級程度のレベルの山行は原則として支部会員以外の一般の方にも公開している。

なお、今年度の実績により、本プロジェクトは、後半戦に突入した。今後は、最終報告書というまとめ作業についても活動していく予定である。

このほかの支部公益事業として、神奈川県立生命の星・地球博物館館長・平田大二氏による公開講演会「小仏・丹沢・箱根～神奈川の山々の素性を探る～」、および、神奈川大学山岳部活動報告会（マナスル遠征登山、USAカリフォルニア・ビショップ・ボルタリングツアー参加）を開催した。

他支部との交流として、南関東ブロック3支部（東京多摩支部・埼玉支部）合同懇親山行、および支部懇談会（栃木支部主管）に参加した。

さらに、支部員の提案によるスキー山行、自然観察会（講師は支部会員2名）を実施した。

支部報（電子版）は年度中に2回発行し、JAC神奈川支部会員にメール配信を行なった（郵送は有償で希望者のみ）。

《かながわ山岳誌　踏査山行》

＊4月13日(土)　大山北尾根、三角山（L）12名参加
＊5月11日(土)　箱根・丸岳（L）11名参加
＊5月19日(日)　不老山（H）3名参加
＊6月8日(土)　三国山、鉄砲木ノ頭（L）10名参加
＊6月29日(土)・30日(日)　三ノ塔、塔ノ岳（H）7名参加
＊9月7日(土)　乳頭山（L）18名参加
＊9月14日(土)　矢ノ音（H）8名参加
＊11月9日(土)　曽我丘陵（不動山）（L）13名参加
＊11月23日(土)　日連金剛山（H）5名参加
＊12月14日(土)　藤野鷹取山（小渕山）（L）13名参加

＊12月28日(土)　文庫山（H）6名参加
＊1月11日(土)　岩堂山、野毛山（L）22名参加
＊1月25日(土)　孫助山、鞍掛山（H）9名参加
＊2月8日(土)　日向山（L）16名参加
＊2月22日(土)　権現山、畦ヶ丸（H）4名参加
《他支部との交流》
＊5月25日(土)～26日(日)　全国支部懇談会（栃木支部）6名参加
＊10月26日(土)　南関東B（東京多摩支部・埼玉支部）合同懇親山行（東京多摩支部主催）奥多摩むかし道　神奈川支部6名参加
《その他の山行》
＊4月20日(土)　自然観察会（横浜自然観察の森）講師：舟根、渡辺会員　12名参加
＊5月12日(日)　箱根・丸岳の後、テントキャンプ（芦ノ湖キャンプ村）7名参加
＊2月24日(月)～26日(水)　妙高・赤倉スキー・スノーシュー山行（赤倉ユアーズイン）11名＋非会員1名参加
《公益イベント》
＊2月29日(土)・3月1日(日)　山の天気ライブ授業（猪熊隆之氏）27名参加予定だったが、新型コロナウイルス対策のため中止
《JACイベント》
＊1月18日(土)　安全登山講習会（埼玉支部主催）1名参加
《委員会・懇親会など》
＊1月11日(土)　新年会（横浜駅東口）岩堂山、野毛山山行後に実施　25名参加
《会議等》
＊5月18日(土)　支部通常総会・公開講演会（神奈川大学横浜キャンパス）実出席24名、委任状による出席57名、議決権行使（賛成）6名
＊9月28日(土)・29日(日)　支部合同会議（主婦会館プラザエフ（四谷））2名出席（支部長、事務局長）
＊12月7日(土)　支部連絡会議（京王プラザホテル（新宿））2名出席（支部長、事務局長）
《役員会》
＊神奈川工科大学横浜事務所にて4・5・6・7・9・10・11・12・1・2・3月の第3木曜日（3月は第3火曜日）に計11回開催。山行計画やプロジェクト、予算・決算などについて、審議・報告を行なった。執行体制は、役員12名、監事2名、顧問4名、オブザーバ11名（3月末現在）。

（永井泰樹）

■越後支部

越後支部は1946年に設立され、今年73年目を迎えた。会

員数は高齢化により、退会・物故会員が多くなり、今年度も新入会員5名あったが、退会・物故者が18名となった。会員増強のためにＹＯＵＴＨ委員会を立ち上げ、本部ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢと合同で冬山合宿を計画するなどして、新入会員増加に努力した。また、「山の日」記念事業として、糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」や高頭祭、公募登山など組織的に取組み、「支部報」やホームページで発信してきた。

《会議》

＊5月25日㈯　通常総会　事業報告・計画、決算・予算など原案通り満場一致で可決。そののち懇親会を実施。出席者154名。（当日出席者46名、委任状108名）

＊役員会　5月25日㈯第1回理事会、6月29日㈯第1回委員長会議、10月5日㈯第2回委員長会議、12月14日第2回理事会、3月14日㈯第3回委員長会議、支部役員が集まり、支部運営や事業について協議。延べ67名出席。総務、事業、広報、集会、自然保護、ＹＯＵＴＨ、県山協などの委員会、子ども登山教室実行委員会、3役・事業委員長会議、など適宜会議を開催し、事業運営について協議。

《山行・野外活動》

＊4月14日㈰　第6回「靴音・よりあいの集い」霧ヶ岳（上越市）12名参加

＊5月26日㈰　親睦登山＝菅名岳（五泉市）33名参加

＊公募登山　6月23日㈰（要害山～朴坂山縦走）27名参加、8月24日㈯～25日㈰上高地集会（美ヶ原・王ヶ頭、乗鞍岳）41名参加、10月20日㈰大毛無山（妙高市）27名参加

＊平日トレッキング　4月25日㈭東山（長岡市）18名参加、10月10日㈭猪野山・南葉山～青田難波山（妙高市）12名参加

＊「山の日」記念事業・その①　7月25日㈭第62回高頭祭を弥彦山大平園地で開催　70名参加。引き続き弥彦山山頂へ移動、新潟県登山祭および「たいまつ登山」を実施　170名参加

＊「山の日」記念事業・その②　8月11日㈰第3回糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」を蓮華温泉から白馬大池周辺で自然観察と登山を実施　17名（子ども12名、保護者5名）参加

＊1月18日㈯　越後スノートレッキング同好会主催で、1月18日㈯朝日山（上越市）8名参加、2月15日㈯新田山（糸魚川市）9名参加、3月26日㈭鍋倉山（飯山市・上越市）5名参加

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月14日㈰　清掃登山　第6回「靴音・よりあいの集い」霧ヶ岳（上越市）12名参加

＊5月26日㈰　清掃登山　菅名岳（五泉市）33名参加

＊8月25日㈰　清掃登山　乗鞍岳41名参加

＊10月20日㈰　清掃登山　大毛無山27名参加

《広報・出版活動》

＊6月20日㈭　越後支部報第25号発行、10月15日㈫越後支部報第26号発行、2月15日㈯越後支部報第27号発行

《講演会》

＊5月25日㈯　定期総会「山で落雷に遭わないために」講師：谷中隆明氏　会員46名参加

＊7月25日㈭　「山の日」記念事業・第62回高頭祭「日本山岳会の会長就任と今後の取り組み」講師：古野淳氏・日本山岳会会長　70名参加、新潟県登山祭「２０２０東京オリンピックに向けたクライミング競技について」講師：八木原國明氏日本山岳・スポーツクライミング協会会長　一般１００名会員60名参加

＊12月14日㈯　越後支部年次晩餐会「日本山岳会のエベレスト登頂50周年　～最近の登山界で何が起こっているか？　世界における登山潮流の変化～」講師：神崎忠男氏　日本山岳会評議員、同元副会長　一般１５０名　会員74名参加

《その他の行事、懇親会》

＊6月8日㈯～9日㈰　第9回日本山岳会中部ブロック交流会妙高・池の平温泉で実施　43名参加

＊新潟県山岳協会登山講習会への講師派遣　6月22日㈯～23日㈰安全登山研修会（加茂市）、7月6日㈯第4回海外登山セミナー

■富山支部

（小泉良夫）

令和元年度は、恒例の「播隆祭」が第34回を迎えた。播隆上人の生家跡に建立した「播隆上人顕頌碑」前において、「生家の会」の皆さんや富山支部会員、一般併せて約40名の参加を得て、播隆上人の遺徳を偲んだ。今年は昨年に続き、「生家の会」の皆様から播隆上人の貴重な掛軸の展示があった。また、富山支部有志で構成する「播隆研究会」から、昨年に踏査した笠ヶ岳の古道の紹介があり、播隆上人が登った登山道に設置した石仏の位置確認を行なった報告があった。こののち、富山支部が継続して登山道整備を行なっている高頭山への記念登山を行なった。参加者は12名だった。

8月11日に予定していた「山の日記念」の親子登山は猛暑による外出自粛などがあり、9月16日に富山県南砺市にある「奥医王山」で実施した。一般募集で総勢28名の参加を得て、薬草の山と言われる医王山の歴史と地形の成り立ちを盛り込みながら、故郷の自然を肌で感じてもらった。この山は標高こそ９３９ｍとけして高くはないが、「日本三百名山」に加えられている。

11月10～11日に富山支部がホスト支部となって5支部合同懇親山行が実施された。新潟県境に近い大鷲山を日本海の海岸線

付近の登山口と途中の林道からの登山に他支部（石川・福井・岐阜・京都・滋賀）の皆さんと富山支部、総勢45名での楽しい山行となった。前日の宿泊場所である「バーデン明日」では黒部峡谷阿曽原温泉小屋のご主人である佐々木泉氏から「黒部は生きている」という表題で講演会を行なった。黒部の厳しさと最新の情報を参加者に分かりやすく語っていただいた。

今年は、立山・黒部において、関電ルートの一般開放が令和5年から開始することが決まったことを受けてのルート整備、立山黒部アルペンルートの輸送力強化のため、立山駅から美女平駅までのロープウェイ構想の具体化など、立山・黒部地域の転換期を迎えることとなり、慎重な対応と災害対策を万全にと願うばかりである。

日本のライチョウ保護増殖事業については、環境省が生態調査と低地飼育技術の確立という2つの分野で取組んでいると聞いている。富山県では富山市ファミリーパークが低地飼育技術の確立を目指しており、その経過については新聞報道で知ることができる。以前に聞いた話であるが、「乗鞍岳から採取した卵を人工孵化させて低地飼育して、複数の動物園で危険分散のため人工増殖させているのは、飼育技術の確立が目的であることから、高山帯での生息個体と低地飼育個体との同一性については不明確な面があり、解明されていない以上は低地飼育個体を高山帯に放鳥するということはしない」ということを聞いて安堵したことを覚えている。以前、昭和30年代ごろに北アルプス北部から富士山へライチョウの移植が実施されたことがある。このときは3世代まで生息していたとする記録があるが、結局それで途絶えてしまった。原因は不明である。このようなことから、生息域の移動も含めて慎重な対応が必要ではないかと考える。今年になって6月に中央アルプスに低地飼育された個体を移植する計画があるという報道を見て大変驚いた。非常に未知の部分が多いライチョウの生態を考えるとあまりにも無謀ではないかと思った。中央アルプスでは絶滅したと思われていたので、そのような発想になったのかもしれないが、２０１８年に雌の個体が一羽発見されている。北アルプスからの飛来個体と思われ、低地飼育個体との共存は危険な要素がある。未だにライチョウの飛行能力さえも分かっていないのである。立山連峰と後立山連峰の間を飛行する能力はあるということも聞いたことがあるが、実証さえされていない。その後、中央アルプスの雌に卵を温めさせるということを行なったらしいが、慎重な対応が求められるという感想をもった。

《会議》

＊4月16日㈬　支部総会　事業報告および収支決算報告、事業計画および予算案を承認　富山電気ビル　出席24名

＊1月22日㈬　親睦会総会・新年会　立山国際ホテル　出席11名

＊役員会は11回開催（4月から3月まで毎月1回開催）
《山行・野外活動》
＊5月25日(土)～26日(日)　全国支部懇談会（栃木支部担当）　奥日光　光徳温泉周辺　参加8名
＊6月5日(水)　追悼登山　唐堀山　参加6名
＊6月24日(月)　高清水山・高落場山　参加5名
＊7月13日(土)～14日(日)　例会山行　出羽三山　藤島文庫　参加5名
＊7月31日(水)　山の日記念親子登山下見　奥医王山参加3名
＊10月23日(水)　5支部合同懇親山行下見　大鷲山参加5名
＊11月10日(土)～11日(日)　5支部合同懇親山行（富山支部担当）大鷲山　参加45名（富山支部会員16名）
＊2月15日(土)～16日(日)　5支部合同スキー山行（石川支部担当）中宮温泉周辺の山　参加5名
《プロジェクト・地域振興活動》
＊5月19日(日)　高頭山登山道整備（公益）参加10名
＊6月2日(日)　第34回播隆祭（公益）式典参加40名　記念登山（高頭山）参加12名
＊9月16日(月)「山の日記念親子登山」奥医王山　参加28名（支部会員10名）
《広報・出版活動》
＊富山支部会報発行　6月18日第111号、10月15日第112号、3月18日第113号
＊第11回山岳講演会　2月20日(水)「安曇野のナチュラリスト田淵行雄の世界　講師＝日本山岳会信濃支部・古幡開太郎氏」とやま市民交流館学習室　40名参加
《その他の行事、懇親会》
＊8月9日(金)　例会・懇親会　会員の近況報告　山岳映像鑑賞『ガストンレビュファ　天と地の間に』とやま市民交流館　参加22名
＊12月17日(水)　例会・懇親会　山行報告、晩餐会報告など　とやま市民交流館　参加22名

（河合義則）

■石川支部

新年早々に富士写ヶ岳の方位盤が損傷したとの知らせから始まった。方位盤は平成28年度に県内6団体とともに支部の有志で担ぎ上げて設置した思い出深い物であり、さっそく修理を段取りし、久弥祭が4月28日と迫った残雪のある4月初旬より3回に分けて修理を実施、無事に麓の九谷ダム広場で久弥祭式典に間に合わせることができた。この後、親睦を図ってコシアブラの芽吹く五彩尾根より富士写ヶ岳へ登山した。

令和元年となり、公益事業の継続は第5回となる「白山親子

登山教室」を企画。座学を7月20日、白山登山を8月24・25日で実施。本年は一般参加者17名（大人9名、子供8名）、支部13名と、谷内理事、五十嵐家族登山普及委員長が参加した。

ふるさと登山道整備は富士写ヶ岳・不惑新道および杉峠の2箇所を実施。自然災害が多い年であったが、石川県の山や登山道には大きな被害が出ず、その旨を報告した。

「山と溪谷」10月号に、紅葉の医王山の記事と写真の依頼があり、支部より写真と案内文を協力。「室生犀星の医王山」がテーマであったが、提供した写真が栄え、本文と案内文とともに良い誌面となった。

会員構成については、退会者3名、逝去2名、入会1名。年齢構成と登山嗜好の幅が広がりがある現状、幅広い年代で楽しめる山行企画が求められる。

《会議・月例会》会場は金沢市総合体育館会議室

＊4月13日㈯　白山市吉野谷セミナーハウスにて支部定期総会　出席41名（出席24名、委任状17名）事業報告、計画案、会計報告・予算案などを全員一致で可決。会場を移して宿泊懇親会実施。

＊5月15日㈬　月例会、親子登山教室実行準備会、不惑新道登山道整備準備・相談　出席11名。

＊6月19日㈬　月例会　親子登山教室実行委員会、出席13名。

＊7月24日㈬　月例会　フランス選手団　東京五輪事前合宿により施設使用不可、1週間遅れの開催。親子登山座学報告と白山親子登山教室準備　出席9名。

＊8月21日㈬　月例会　白山親子登山直前実行委員会として参集、天候が気になるが金曜夕刻に実行可否を決定連絡　出席12名。

＊9月18日㈬　月例会　上高地山研集会・白山親子登山教室会計報告、5支部合同懇親山行案内　出席10名。

＊10月16日㈬　月例会　5支部懇親山行申込み、山祭り集会・懇親会　概要説明　出席10名。

＊12月18日㈬　月例会　第1回役員会　登山道整備会員外参加について　出席11名。

＊1月15日㈬　月例会　5支部スキー参加者状況と旧中宮スキー場の積雪状況報告、少雪だが今後の積雪を期待して開催決定　出席8名。

＊2月19日㈬　月例会　5支部合同スキー山行報告など　出席3名。

＊3月29日㈰　第2回役員会　総会提出議案検討、総会資料確認、出席8名。

《山行・野外活動》

＊4月3・7・13日　富士写ヶ岳方位盤修理登山　参加6名。

《公益事業・地域振興活動》

＊5月25日㈯　（公）登山道整備　富士写ヶ岳　不惑新道　参

加8名。
＊7月20日(土)　第五回白山親子登山教室　(公益)医王山キゴ山・座学と実習　参加9名、一般参加13名。
＊8月24(土)・25日(日)　第5回白山親子登山教室　(公益)白山登山　参加13名、本部より2名、一般参加17名。
＊10月19日(土)　(公)登山道整備　杉峠　参加10名。
《行事・懇親会・その他》
＊4月28日(日)　第22回久弥祭　富士写ヶ岳　出席11名。
＊5月25日(土)　第35回全国支部懇談会「奥日光大会」出席1名。
＊8月3日(土)・4日(日)　上高地山研集会　参加16名、一般参加2名。
＊9月29日(土)・30日(日)　全国支部合同会議　プラザエフ　参加2名。
＊11月9日(土)・10日(日)　五支部合同懇親山行　富山支部主催大鷲山　参加6名。
＊11月30日(土)・12月1日(日)　山祭り集会・懇親会　白山市吉野谷セミナーハウス　参加20名。
＊12月1日(土)　年次晩餐会　参加4名　太田会員が永年会員表彰を受ける。
＊2月15日(土)・16日(日)　5支部合同スキー山行　石川支部主催中宮山　参加8名。5支部28名参加。

（堀　正春）

■福井支部

平成30年度は『福井県の山』の改訂版製作のため、ハードな山行きだったが、令和元年度は平常の支部活動に戻った。ガイドブック『福井県の山』が、平成31年3月20日に出版・販売されることになり、支部会員に支部総会の折に配布することができた。

《会議》
＊4月6日(土)　通常総会　出席者41名（当日出席者16名・委任状25名）
午後1時半から、越前糸生温泉「泰澄の杜」にて令和元年度支部活動報告および決算報告が承認され、令和2年度支部活動計画案・予算案が提案承認された。
＊3月14日(土)　幹事会　出席者13名。
午後1時間半から、令和2年度の支部活動計案の検討や活動などの意見交換をした
《支部山行》
＊4月7日(日)　三里山花見　7名参加。
＊4月15日(月)　若狭駒花見　9名参加。
＊4月20日(土)　多田ヶ岳　7名参加。
＊5月6日(月)　火燈山～富士写ヶ岳　7名参加。
＊5月13日(月)　取立山　4名参加。

＊5月18日(土)　経ケ岳　8名参加。
＊6月2日(日)　リトル比良（近江高島～北小松）6名参加。
＊6月13日(木)　銀杏峰　6名参加　オブザーバー1名。
＊7月29日(月)　白山　6名参加。
＊8月4日(日)　三ノ峰　7名参加。
＊8月24日(土)　荒島岳（下山コース～勝原コース）8名参加。
＊9月7日(土)　金剛堂山　8名参加。
＊10月6日(日)　白山　5名参加。
＊10月21日(月)　三国岳　4名参加。
＊11月3日(日)　高島トレル（赤坂山～寒風～大谷山）7名参加。
＊11月16日(土)　御嶽山　9名参加。
＊1月19日(日)　日野山　10名参加。
＊2月8日(土)　取立山　7名参加。
＊3月1日(日)　銀杏山　6名参加。
　令和元年度は天候不順の日が多く、何回か中止になった。
《その他の行事》
＊5月25日(土)～26日(日)　第35回全国支部懇談会(栃木支部主管)
　1名参加（大田）（支部行事「泰澄祭」と重なったため）。
＊11月9日(土)～10日(日)　5支部合同懇親会（富山支部主管）大鷲山　8名参加。
＊12月7日(土)～8日(日)　日本山岳会晩餐会と三ッ峠　4名参加。
＊12月15日(日)　支部忘年会と山行　藤倉山～鍋倉山登山後、夕方から「かんぽの宿福井」で開催、23名参加（東京から神﨑忠男氏、富山大鷲山から佐伯尚幸氏が参加）。
＊2月15(土)～16日(日)　5支部合同懇親スキーと山行（石川支部主管）中宮温泉研修センター　4名参加　雨のため翌日の山行中止となり、懇親会のみとなる。
《公益年間プロジェクト》
＊5月26日(日)　泰澄祭＆泰澄ウオーク　今年は泰澄大師修行の地「明日の岩屋」を案内。（白山では「転法輪の窟屋」の相当）行者道コース～木の実谷コースを歩く。
＊森づくり　4月から11月と年明け3月まで各月、越前町糸生の現地にて活動。池に繁殖したガマの撤去作業、遊歩道および周囲の除草、花壇・遊歩道の整備、雑木の伐採とクリの植樹、ナラの伐採木にシイタケ菌種付けなどを行なった。

（舩田洋子）

■　山　梨　支　部

支部の最重要事業に位置づけている「やまなし登山基礎講座」（第5回）を9月から11月にかけて開催した。支部会員が得意分野の講師を務める自前方式（1講座は会員外の専門家）による連続講座である。前回から受講者の確保、若年層の増加を目

的に、平日夜間の開催に切替えている。前回のアンケート結果を基に内容を厳選するとともに、実践登山の比率を高め実践を通して技術の習得を図ることを目指した。今後さらに改善を図り、地域のニーズに応えたい。

このほか、第2回田部重治祭・第60回木暮祭の開催、支部創立70周年記念事業としての『甲斐百山』の発行、12回の支部山行など多くの事業を行なった。

《会議》

＊総会　4月20日㈯　2018年度事業報告・決算報告、2019年度事業計画・予算案を承認した。会員69人中、出席56人（出席27人、委任状29人）。

＊理事会　毎月第2水曜日に開催。13人が出席。前月の事業総括、当該月事業の検討、重要案件の協議などを行なった。

《支部山行》

4月7日㈰　大月市・高川山、11人参加。4月21日㈰　北杜市・茅ヶ岳、7人参加。5月19㈰　山梨市・西沢渓谷、10人参加。6月16日㈯　富士河口湖町・王岳、16人参加。7月7日㈬　北杜市・尾白川渓谷、11人参加。7月13日㈯～14日㈪　長野県／新潟県・雨飾山、11人参加。8月18日㈰～20日㈫　長野県／岐阜県・穂高岳、9人参加。10月20日㈰　北杜市・向山、19人参加。11月4日㈪　笛吹市・春日沢ノ頭、8人参加。11月24日㈰　南部町・貫ヶ岳、14人参加。12月1日㈰　甲府市・八王子山、14人参加。1月19日㈰　韮崎市・八頭山、13人参加。2月9日㈰　雪山講習①、中止。3月1日㈰　雪山講習②、中止。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊第5回やまなし登山基礎講座　目的：前述の通り。会場：山梨学院生涯学習センター講義室、ほか。受講生27人。全8回・13テーマ開催（9月3日～11月10日）。

①オリエンテーション　②山梨の登山史と日本山岳会の紹介　③山の気象と観天望気　④山に入る前に（登山計画・山岳保険）　⑤夏山総合（服装・装備・食糧・自然保護）　⑥ロープワークの基本　⑦地図の読み方　⑧総合実践登山1（瑞牆山）　⑨山岳遭難の現状と対策　⑩怪我・病気の応急処置　⑪地図読み・セルフレスキュー実践登山2（茅ヶ岳）　⑫総合実践登山3（編笠山～権現岳）　⑬総合実践登山4（八人山）

＊山梨県山岳レインジャー活動　目的：山梨県から委託された高山植物保護・調査事業

①6月23日㈰～24日㈪　甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳探索調査　②7月1日㈪～2日㈪　白根三山定経路調査　③7月25日㈬～26日㈮　鳳凰山探索調査

＊第2回田部重治祭　田部重治を顕彰する碑前祭。山梨市観光協会三富支部主催、山梨市・JAC山梨支部・山梨県山岳連盟後援。5月19日㈰開催。約40人参加（会員10人）。

＊第60回木暮祭　木暮理太郎を顕彰する碑前祭。ＪＡＣ山梨支部・山梨県山岳連盟・増富ラジウム温泉峡観光協会による木暮碑委員会主催、北杜市後援、10月21日㈰開催。19日㈯に祝賀会を実施。約30人参加（会員15人）。

＊第38回深田祭・深田久弥を偲ぶ碑前祭。ＪＡＣ山梨支部協力、4月21日㈰開催。約１００人参加（会員10人）。

《広報・出版活動》

＊会誌『甲斐山脈』第11号〈支部創立70周年記念号〉の発行（6月28日）。

＊「支部通信」第3期第6号の発行（6月18日）。「支部通信」第3期第7号の発行（3月20日）。

＊支部創立70周年記念事業として『甲斐山岳』第11号別冊『甲斐百山』を発行（12月15日）。その後、単独事業として『甲斐百山』の第2刷（2月4日）・第3刷（3月10日）を発行。

（矢崎茂男）

■信濃支部

5月1日、平成から令和に年号が変わったが、会員の平均年齢は今年度かろうじて69歳を維持した。高齢により複数の会員が引退されるとともに渡辺登司美、神谷圭子（蝶ヶ岳ヒュッテ経営）両会員が相次いで他界され、会員数が一時的に減少した。

米倉逸生支部長は、「若手会員の加入促進と支部活動の活性化を進めることは極めて重要」と檄を飛ばし、若手会員の育成、仲間づくり、ネットワーク構築などを目的として、

①若手会員の友達の輪の拡大。

②ベテラン会員による周囲への呼びかけ、積極的な紹介。

③支部山行や行事への会員以外の参加者の拡大、を進め、信濃支部ユースクラブの設置に併せ、若手グループのリスク管理や技術、知識指導などの育成環境も併せて整備していこうと提案された。

その甲斐あって、令和2年度にかけて5名の入会があり、信濃支部への移動も3名からの申し出があり、会員１２５名を維持することできた。新型コロナウイス感染症終息後の状況を予測すると、自然豊かな山岳県である信州へのＩ（アイ）ターン者が増えるのではないかと期待している。

今年度の支部山行は、山行委員の企画で「山と温泉」をテーマに計画され、天候などから中止はあったが、味のある山行ができた。

正月早々新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、令和2年2月以降の行事が軒並み縮小または延期されることとなり、残念であった。4月以降1日も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願うところだ、

《会議》

＊4月21日(日)　平成30年度信濃支部定期総会・役員会　松本市内　本人出席28名、委任状68名　合計96名
＊5月10日(金)　ウェストン祭実行委員長打合せ会議　松本市内
第73回ウェストン祭開催に向けての準備会議
＊5月17日(金)　ウェストン祭協賛団体打合せ会議　松本市内
地元松本市および協賛団体との協議、打合せ会議
＊7月10日(水)　第八回岳都まつもと山岳フォーラム打合せ会議
＊1月19日(日)　支部役員会　松本市内　総会準備など
《支部山行》
＊6月1日(土)　ウェストン祭記念山行徳本峠越え
＊6月8(土)・9日(日)　中部ブロック四支部交流会（越後支部主催）妙高高原　9名参加
＊7月2日(火)～11日(木)　カナダ・コロンビア山　4名参加
＊8月24日(土)・25日(日)　青木三山と田沢温泉　4名参加
＊9月1日(日)　信濃支部霧ヶ峰自然観察会　11名参加
＊1月25日(土)～26日(日)　北八天狗岳　3名参加
＊2月15日(土)～16日(日)　乗鞍岳スキー例会　11名参加
《広報・出版》
①支部インフォメーション
＊4月　17号発行　支部総会案内など
＊4月　18号発行　支部通常総会報告など
＊7月　19号発行　支部現状報告・登山教室案内など
＊12月　20号発行　支部新年会案内など
②部報
＊6月　第67号発行
＊1月　第68号発行
《その他の行事》
6月2日(日)　第73回ウェストン祭　上高地
記念講演　野口いづみ会員（東京多摩支部支部長、日本山岳会医療委員会委員長）
6月8日(土)～9日(日)　中部ブロック四支部交流会
妙高高原池の平温泉
1月19日(日)　信濃支部新年会松本市内「アルピコプラザホテル」
3月14日(土)～15日(日)　第9回岳都まつもと山岳フォーラム（新型コロナウイルス感染症拡大のため中止）
＊岳都まつもと山岳フォーラム。松本市海外都市交流委員会、信州豊かな環境づくり県民会議などへの参加

（古幡開太郎）

■岐阜支部

令和元年度の岐阜支部では以下の3点を重点的に取組んだ。第1に山行活動の充実、第2に公益活動の充実、第3に新入会員の勧誘になる。

第1の山行活動の充実に関してだが、これは原点回帰という意味もある。山の企画を充実させることが、既存会員の望みでもあり、同時に新規会員獲得のための訴求力となる。岐阜支部では山行のレベルや体力に応じて山行のレベルを分け、全会員が楽しめる会作り・企画作りを行なった。山行を3つのカテゴリーに分け、初心者や年配の方でも安心して登ることのできる岐阜近郊の山をターゲットとした例会山行、少しテクニカルで体力や技術が要求されるバリエーション山行、全国の名山を巡る百名山山行の3つの企画を実施し、月に約3回の山行を平均して行なった。また年に1回、海外登山を実施しており、昨年度はブルガリア最高峰のムラサ山に登頂した。新しい技術を学びたい会員のため、技術委員会では体系的なトレーニング計画を立ち上げ、机上・実践の訓練を6回ほど行なった。また新春懇談会や忘年会など、会員が集う会合を数多く持つことにより会の活性化を図っている。

第2の公益活動の充実がある。岐阜支部では小津権現山の森作り、写真展、自然観察会、家族登山、清掃登山を行なった。公益活動に関しては、宣伝方法や開催場所の見直しを行ない、一般の方々がより参加しやすい環境を整えた。告知の方法にフリーペーパーや新聞を使用し、一般市民の参加も広く呼び掛けた。これにより、数多くの一般者からの参加をいただいた。

第3の新入会員の勧誘制度に関しては、令和元年より開始した。勧誘委員会を立ち上げ、方針を作り上げるとともに、新入会員の入会金の補助を行なった。入会金の補助に関しては、各会員からの寄付を募り、60歳以下の新入会員の入会金を３０００円とした。これにより本年度は8名の新入会員を獲得し、会の若返りと活性化に貢献している。また同時に、新入会員の獲得のため岐阜の山にこだわらず、全国のすてきな山を登るという企画を立ち上げた。新人向けの百名山登山サポートのプロジェクトを実施し、既存会員の知見を生かし、山を始めた人たちにすてきな山行を企画するという活動を行なっている。

会合に関しては、岐阜支部では毎月1回例会を行なっている。平成30年度までは、役員会と称していた役員の審議の場であった会合を、全会員に開放し、希望者が参加し意見を述べることのできる場とした。令和元年度の会合は毎月を行ない、実施は12回となる。

昨年度の反省は、山行の数が増えたため、管理体制の緩みが感じられたことだ。昨年度、事故は発生していないが、企画数に応じた安全登山のための体制の見直しが必要であると考えている。また事業に関しては昨年と同様のレベルの共益公益事業を実施する予定だったが、コロナウイルスの感染拡大により、先行きに不透明さが出てきている。昨年入会した新入会員を含め、全会員に対する十分な活動の提供ができなくなることに危惧を感じている。

制約が多い令和2年度となると思うが、岐阜支部は常に前向きの姿勢で活動を進めていく予定だ。そのために、理事・役員を始め、全会員で知恵を絞り、すべての山岳活動を感染リスクも含めた上での安全登山に留意したいと考えている。本年度は県をまたいでの活動が難しくなり、アルプスなど高山での活動計画の見直しは必要になると思う。しかし、その分改めて岐阜県内の山々のすばらしさを見直す年にしていく方向に計画を修正する予定だ。

（東明　裕）

■静岡支部

静岡支部では2020年2月26日、支部創立70周年を迎えることとなり、記念式典、祝賀会、記念誌の発行など、実行委員会を立ち上げ準備をしてきたが、新型コロナウイルスの影響で、式典、祝賀会が2020年12月6日(日)まで延期となった。

《公益事業委員会》

＊6月2日(日)　ハイキングセミナー「天城山・八丁池周遊」新緑愛でる＆ゴミ拾い。セミナー生2名、会員14名参加。

＊8月10日(日)　山の日記念親子登山「安倍奥・山伏」親子参加者10名、会員8名参加。

＊9月21日(土)～22日(日)　山の日記念行事、静岡スポーツフェスティバル登山大会　富士山・村山古道（浅間神社～6合目まで）1名参加。

＊10月20日(日)　ハイキングセミナー「秋の大札山」南尾根～北口縦走。セミナー生14名、会員13名参加。

＊3月15日(日)　藁科上流・坂ノ上「植林体験」3名参加。NPO法人「山の文化交流センター」主催。

＊「竜爪山」の登山道整備　12月23、25日、1月14、16、20、25、30日、2月1日に行なった。

《山行委員会》

＊4月21日(日)　会員山行「丹沢・大室山」＆道志の湯　5名参加。

＊4月24日(水)　会員平日山行「竜爪山・俵峰コース」会員3名、そのほか4名参加。

＊6月5日(水)　会員平日山行「不老山」926m、5名参加。

＊7月13日(土)～15日(月)　「南ア・横窪沢小屋」（泊）4名参加。

＊11月9日(土)～10日(日)　懇親山行・東部担当「三国山稜」一樹山荘（泊）18名参加。

＊11月16日(土)～17日(日)　会員山行「シャウゾ山・黒沢山」6名参加。

＊12月18日(水)～19日(木)　会員平日山行「長九郎山」駿河湾フェリーで行く。下田温泉（泊）8名参加。

＊2月1日(土)～2日(日)　会員山行「冬山とスキー」15名参加。

＊2月26日㈬　支部創立70周年記念山行「浜石岳」23名。「小祝賀会」由比・開花亭で21名参加。

《文珠山荘運営委員会》

＊4月13日㈯～14日㈰　「山菜天ぷらを食す会」映画「氷壁」20名参加。

＊6月15日㈯～16日㈰　「ヒメ蛍を観る会、映画『生きてこそ―Ａｌｉｖｅ―』」5名参加。

＊9月7日㈯～8日㈰　「納涼祭」映画『岳―ガク』7名参加。

＊10月26日㈯～27日㈰　「ハロウィン」映画『聖職の碑』7名参加。

＊11月30日㈯～12月1日㈰　「忘年会」映画『クライムダウン A lonely place to die』13名参加。

＊3月7日㈯～8日㈰　「近くの山に登る会」映画『127時間』10名参加（うち、元国土地理院職員、山田明氏参加、ほか会員外1名）。

《会報編集出版委員会》

＊5月会報「不盡」春号（No.85号）発行。

＊11月会報「不盡」秋号（No.86号）発行。

＊4月1日　静岡支部創立70周年記念誌発行。

《会計・集会委員会》

＊8月14日㈬　「納涼懇親会」ホテルセンチュリー静岡　17名参加。

＊1月12日㈰　「新年会」松坂屋8Ｆ梅の花　50名参加。

《事務局》

＊5月25日㈯～26日㈰　第35回全国支部懇談会・栃木支部「奥日光」11名参加。

＊6月8日㈯～9日㈰　中部4支部交流会・越後支部「妙高笹ヶ峰・夢見平」13名参加。

＊6月22日㈯　本部総会、四谷・主婦会館プラザエフ。

＊9月28日㈯～29日㈰　全国支部合同会議、四谷・主婦会館プラザエフ。

＊11月5日㈫～10日㈰　山岳4団体主催第2回「南アルプス写真展」。会員延べ15名参加。来場者632名。

＊12月7日㈰　全国支部連絡会議、新宿・京王プラザホテル（支部長、事務局長）　年次晩餐会、11名参加。

《定例会》第2水曜日、労政会館

＊5月15名、6月15名、7月11名、9月16名、10月15名、11月17名、12月15名、1月12名、2月26名、3月20名

《役員会》第4水曜日

＊4月24日㈬「チロル」、5月22日㈬「チロル」、6月26日㈬「番町市民センター」、7月24日㈬「番町市民センター」、8月28日㈬「番町市民センター」、9月25日㈬「チロル」、10月23日㈬「チロル」、11月31日（第5水）「労政会館」、12月25日㈬「チロル」、1月22日「チロル」、3月25日㈬「チロル」、3月31日

㈫「番町市民センター」

（木村勝利）

■東海支部

本年度18名の方が入会したにもかかわらず、24名の退会者が出たこともあり、3月末現在の支部員数は３３８名となり、昨年末より6名の減少となった。高齢化による退会とともに若い方の退会も目立った年であった。山岳会でのクラブライフを楽しんでいただくため「委員会・同好会」紹介の冊子を作り、委員会、並びに同好会への参加を呼び掛けたが、残念ながら今のところその成果が表れていない状況である。

《会議》

＊支部通常総会5月19日㈰開催。出席１８６名（当日出席79名＋委任状１０７名）本年度は評議員2名が亡くなり、猿投の森づくりの会の代表を退任された小川務氏に評議員をお願いした。委員長の交代は、猿投の森づくりの会代表に和田豊司会員、森の音楽祭委員長に毛利邦男会員が着任した。

＊常務委員会

毎月第4水曜日開催（支部長、副支部長、各委員長が参加、支部運営の基本事項について審議）。

＊正副支部長会議

毎月第3水曜日開催（支部長、副支部長、総務委員長が参加—常務委員会に先立ち主要事項の事前審議）

＊各委員会（22委員会）毎月1回開催（各委員会の活動内容の審議）

《山行・野外活動》

＊山行委員会　定例山行（計画58、実施33、参加者累計２４０名）

＊青年部（随時行なった個人山行に加え、春、夏、冬期の合宿のほか、読図講習、雪上訓練などを実施した。

＊支部友会定例山行（計画38、実施24回、参加者累計３１１名）

＊東海ユース　原則40歳以下の男女登山教室卒業生で向上心のある登山初心者18名が、毎月1～2回の定例山行に加え40回の個人山行を実施。

＊亀の会　月1回の定例山行（累計参加者２０９人）に加え自主山行を4回実施（49人参加）。本年「歩こう会」が発足し5回実施（延べ63名参加）、また60周年行事の60山ラリー参加者の合同山行を3回実施し26名が参加した。会員数51名

＊登山学校第3期－7月開校　未組織登山者への安全登山の啓発、支部の人材の確保と育成、支部活動の活性化を目的として運営。経験および技量に合わせ初級、中級および上級の3つのグループに分け、1年間の実践・学習を通して技術の習得を目指していただくこととしている。生徒数：初級23名、

中級32名、上級13名、指導員27名で対応毎月1回の山行と年間6回の座学を実施。

＊ボランティア活動　①視聴覚障がい者支援登山の実施を5月11日白猪山にて実施、参加32名（内23名が支部員ほかの支援者）第2回を11月4日鳩吹山にて実施、参加者30名（内支部員ほか支援者22名）②視覚障がい者支援登山（ひまわり山行）―2回実施、参加者累計39名（内支部支援スタッフ28名）③親子ふれあい登山―10月と11月の2回、尾高山で実施、参加者は合計２０５名（内支部員31名が支援のため参加）④知的障碍者支援登山（ＳＯＮ愛知と協働）―4月21日高賀山登山（障がい者9名、ＳＯＮスタッフ16名、支部支援スタッフ19名が参加）④タンポポ登山（少年補導委託登山）―家庭裁判所との協働事業―11月14・15日にかけて実施―少年2名、家裁職員2名、支部支援スタッフ11名参加。

＊森づくり活動　①愛知県有林「やまじの森」における保健保安林・土砂流出防護保安林の整備に加え、遊歩道の維持・水土保全・生物多様性などの環境機能の向上を目指した諸作業。②東大演習林での間伐作業。③ＪＡＣ所有の山桜フィールドでは炭焼きに挑戦。④民有地での間伐作業。年間作業日数：52日、参加人員：延べ５５７人。

＊森の音楽祭　県有林やまじの森の特設会場にて10月26日開催（第1部アカペラサークルの演奏とオーケストラの演奏会、第2部自然観察と猿投山山頂を目指したハイキング。参加者合計４１４名（内支部員90名が運営に当たった）。

＊自然観察会　毎月1回、第3土曜日実施。参加者累計１９５名（うち会員が57名）。

＊同好会の活動　同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受している（現在８つの同好会が活動中）。

《事故防止事業》

＊指導者研修講習会　6月から11月にかけて6回実施。

＊留守番電話とファックス・メールによる登山届の提出促進（通年）。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊第7回夏山フェスタの開催　6月8・9日に名古屋ウインクあいち7階、8階にて開催。特別協力の形で運営に参加。28の山小屋を始め、登山用品メーカー、自治体など１１１の出展数があり、来場者数は2日間で８７８８人であった（50名の支部員が支援スタッフとして従事）。

＊60周年記念行事―東海支部は２０２１年に60周年を迎ることから次の60周年記念行事を計画（一部実行中）①記念式典および懇親会　②海外登山（インドヒマラヤ）③海外トレッキング　④60山ラリー、60山同日登山（実行中）⑤60周年記念出版（東海山岳60周年記念12号、東海支部報合本　⑥60周

年記念全国支部懇談会の主管（準備開始）

＊マカルー登頂（南東稜初登攀）50周年記念講演会開催に向けて準備開始。

《広報・出版活動》

＊支部報の発行（4月、7月、10月、1月の4回）。

＊ホームページを利用した支部活動の情報発信（通年）。

＊メールマガジン：月1回のペースで支部員・支部友会員・東海ユース・猿投の森づくりの会の希望者に支部活動および講演会などの情報を配信した。

《講演会》

＊4月9日㈫　駅前アルプス店主千葉泰丈氏『最新登山の用具について』と題して　43名参加。

＊12月16日　気象予報士　大矢康裕氏「冬山の気象の基本」と題して　63名参加。

＊1月25日　至学館短期大学佐藤丈能教授『テーピングの実技』と題して講演と実技　39名参加。

＊1月25日　至学館短期大学　三浦裕教授「体の構造について」と題して　39名参加。

《「山の日」啓発活動》

＊6月6・7日　夏山フェスタ会場にて参加者全員（8788人）山の日啓発のチラシを配布。

＊10月26日　『森の音楽祭』会場にて啓発チラシの配布。

■京都・滋賀支部

（毛利邦男）

2019年度は、通常の例会に加え、若手会員向けの少しハードな「未知の山旅」、人工壁講習会を充実させた。高齢化する会員が参加しやすい「平日例会山行」や、緩やかな山旅の「山歩会」、さらに緩やかな「巨木探訪」を拡充させた。

物故・退会、希望退会などで会員の減少が続いている。若い力のある会員の獲得は、支部の継承と発展のために引き続き重要な課題となっている。

支部として地元「京都新聞」の『丹波の山々』の連載を、2019年1月から2020年3月まで実施。執筆者は若手にも門戸を広げた。それらの成果は、京都新聞社と連携して一般参加の「山の日」記念行事「ファミリーハイク@丹波」として昇華した。

《会議》

＊第34回通常総会　4月20日㈯京都・鴨沂会館。事業報告、決算報告、役員選定、事業計画、予算を審議、出席37名。記念講演「未踏の峰めざして70年」平井一正氏、43名出席。京都『今西錦司賞』は上西勝也会員（日本の測量史などの研究による功績）。

＊支部役員会　毎月第1水曜日（祝日月は第2水曜日）　京都・鴨沂会館　12回開催。延べ222名出席、各例会山行報告、各委員会報告、各部会報告。各課題は審議。

《山行》

＊「山の日」事業。日本山岳会京都・滋賀支部連携企画。8月11日(日)丹波の山々（美女山）「ファミリーハイク@丹波」45名参加。

＊「定例山行」12回実施　延べ109名参加

4月4日(水)～7日(日)　未知の山旅　四国・仁淀川源流方面
4月28日(日)　比良山系シャクナゲ山行
5月11日(土)～12日(日)　今西錦司レリーフの集い
6月2日(日)　比良山系ダンダ坊整備と懇親会
7月13日(土)～15日(月)　夏山山行　飯盛山
7月21日(日)　沢登り（比良山系　奥の深谷）
9月21日(土)～23日(月)　お月見山行　守屋山（1650m）
10月10日(水)　秋のスケッチ「比叡山を描く」
10月20日(日)～23日(水)　未知の山旅　東北・南会津方面
12月14日(土)　武奈ヶ岳（1214m）の日
1月5日(日)　初詣山行　宇佐八幡宮登拝～宇佐山（335m）
2月8日(土)～9日(日)　スキー例会　藪原スキー場

＊「平日例会山行」5回実施　延べ19名参加。

4月11日(木)　平日例会山行　横谷峠～行者山
5月16日(木)　平日例会山行　比良・釈迦ヶ岳
10月31日(木)　平日例会山行　国見峠～御座峰
12月12日(水)　平日例会山行忘年山行　十三石山
3月12日(水)　平日例会山行　桟敷ヶ岳～飯盛山

＊「山歩会山行」8回実施　延べ84名参加

4月27日(火)　山歩会　竜王山～忍頂寺「隠れキリシタンの里を巡る」
6月25日(火)　山歩会　笹間ヶ岳
7月23日(火)　山歩会　三郎岳
9月24日(火)　山歩会　岩尾山
10月22日(火)　山歩会　芦生の森・トロッコ道
11月26日(火)　山歩会　胎金山～高山
12月10日(火)　山歩会　天王山～十方山～長岡京
3月24日(火)　山歩会　長野東山～愛宕山（信楽）

＊「登山講習会」3回実施　延べ22名参加

4月21日(日)　「比良げんき村」人工壁講習会
5月4日(土)～5日(日)　登山講習会　鈴鹿山系藤内壁
6月9日(日)　「比良げんき村」人工壁講習会

＊「巨木探訪会」10回実施　延べ52名参加

4月24日(水)　巨木探訪　兵庫県柏原方面
5月29日(水)　巨木探訪　兵庫県兎和野高原方面
6月26日(水)　巨木探訪　滋賀県彦根方面

7月31日(水)　巨木探訪　福井県名田庄方面
9月25日(水)　巨木探訪　福井県越前大野方面
10月30日(水)　巨木探訪　兵庫県村岡町方面
11月27日(水)　巨木探訪　福井県鯖江方面
1月29日(水)　巨木探訪　福井県敦賀方面
2月26日(水)　巨木探訪　兵庫県氷上町方面
3月25日(水)　巨木探訪　兵庫県氷上町方面

《会報》
135号　6月15日、136号　9月15日、137号　12月15日、138号　3月15日の年4回発行された。

《懇親会》
1月15日(水)　支部新年会を南禅寺「順正」にて開催。49名が出席

《他支部懇親山行》3回実施　延べ98名参加
11月9日(土)～10日(日)　五支部懇親山行（富山支部担当）大鷲山
11月16日(土)～17日(日)　広島・京都滋賀交流山行（広島支部担当）蒜山高原
2月15日(土)～16日(日)　5支部スキー山行（石川支部担当）白山山麓

《支部関連事業活動》
＊京都「陀羅佛会」、長野県で陀羅佛小屋という山小屋を管理運営
＊滋賀「藤尾の森づくりの会」、滋賀県有林の森林整備事業と里山復元活動を実施

（伊原哲士）

■――――関　西　支　部

一昨年スタートした安全委員会は安全のための活動を本格化し、安全登山講習会を3回実施するとともに、病気・徒渉・ビバーク・道迷い防止について学び訓練した。合わせて登山計画書提出の推進も継続して行なった。登山では6月に新人歓迎山行を初めて行ない新入会員が支部に溶け込みやすくした。また、月替わりの担当者による山行の月例会を10月より始め、山登りに幅を持たせる試みを開始した。

登山文化研究会は日本山岳会本部の特別事業補助金を得て継続して活動し、2月に「みんなで歌おう山の歌」を開催し、3月に研究会報告書も発行した。

登山教室については、重廣恒夫会員に続く後継者を育てる時期にきているため「登山教室プロジェクト」を発足させ、これからの登山教室について議論を深めた。

また、逼迫する支部財政の健全化に向けて財政検討会を開催した。なお、3月は新型コロナウイルス流行のため、すべての

行事を中止した。
＊通常総会　大阪凌霜クラブセミナー室　参加者47名
＊評議員会　4月17日㈬開催　出席者13名
＊役員会　12回開催延べ153名出席
《山行》
＊4000山グランプリ　15回　延べ30名参加
＊ゆるやか山行　10回　延べ246名参加
＊しっかり歩こう　8回　延べ61名参加
＊月例会（10月よりスタート、3月は中止）5回延べ36名参加
＊六甲山を歩く　7回　37名参加
＊そのほかの山行（新人歓迎15名、沢登り7名、比良山を歩く10名、陽だまり山行17名、海外（ベトナム Ky Quan San）6名
＊登山教室（座学、初級、中級、上級）延べ171名
《安全》レスキュー講座12名参加、渡渉講習8名参加、ビバーク講習8名参加、道迷い講習17名参加
《自然保護》
＊本山寺山の森林づくり活動・森林整備とやまみち保全活動24回延べ259名参加。会報「あかがし」3号発行（12月）
＊東お多福山ススキ草原保全・再生活動で刈り払い作業など6回20名参加
＊そのほか　森林体験、自然観察会、自然保護全国集会7月6～7日さいたま市1名参加、大台ヶ原の利用に関する協議会2月18日奈良市エルトピア奈良1名参加
《山の日》
＊山の日講演会　8月21日㈬『仕事と山と人』講師＝平林克敏氏　参加者84名（うち一般36名）
＊山の日関連行事・著者と語る会「道迷い遭難の構図」講師＝青山千彰氏　参加者32名、わんぱく探検11月9日28名参加うち子ども10名
《そのほか》
＊スケッチ同好会　5回実施　延べ55名参加、第4回グループ展　6月24～28日入場者約150名
＊登山文化研究会　7回実施　延べ52名参加、「みんなで歌おう山の歌」を開催　2月11日約80名参加、3月に報告書発刊
《広報》
＊支部報176号～179号を発行
＊ホームページ適時更新

（茂木完治）

■山陰支部

山陰支部は2020年に創立70周年を迎えることから、記念事業の一環として『雲伯百山』（仮称）の出版に向け調査中だ。島根県・出雲地方、鳥取県・伯耆地方は古事記・出雲風土記な

ど古来より山に纏（まつわ）る物語が多く、『雲伯百山』は、それらの山の紹介と神話を絡めたもので、すでに対象の山は大方踏査済みであり、今後、支部会員が3～5山を受け持ち、原稿の執筆に向かうことになる。調査真っただ中、中井支部長が12月11日他界した。故・支部長のもとに企画立案されたこの『雲伯百山』を出版することは供養の一つと考えている。

支部会員の高齢化が進む中、各会員から①大山合宿の年中行事化　②山の環境にもっと力を　③月例山行を写真・絵・食・花など多目的に　④例会は山の匂いで　⑤8000mも1000mも同じ山、登る人も里山を散策する人も山岳会、などなど支部活性化・会員増に向け、たくさんの提言がある。これらの意見を踏まえ、2020年度は、少人数の山陰支部ならではの魅力あるクラブにしたいと目標を立てた。

昨年度行なった年間行事は次のとおり。

＊月例会　各月第4週金曜日18時30分から米子市公会堂・集会室で開催した。

＊支部総会　4月27日米子市公会堂で開催。原案どおり満場一致で可決される。（支部会員数36名、出席者18名、委任状15名）

＊支部晩餐会　12月12日米子ワシントンホテルにて開催（出席者19名）。

＊第3回山の日記念日　大山が選ばれて全国から100名の大山登山。その際、『大山概念図』を改訂し、安全登山の解説を添えて提供した。この山陰支部作成の『大山概念図』は、大山安全登山のため大山遭難防止協会、地元観光関係に改訂ごとに配布している。

＊中四国3支部交流会　6月8～9日　広島支部。

＊70周年記念登山　9月13～16日　鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳登山。

＊「大山ブナを育成する会」の年中行事に協力参加、ブナ植林。

＊ほか、公民館の山登りアドバイザー参加など。

（伊澤寿高）

■広島支部

令和元年度は前年再スタートした新組織を踏襲し、総務部は事務局、財務担当、広報担当、図書担当、交流担当、保健担当の6部門のほか、インターネットおよび山楽サロンの2部会で構成、公益事業部に自然環境担当、山行部として山楽山学、アルパイン（シニア・ユース）、ゆうゆう、スキーの各クラブが活動。山行指導部は、これらクラブ山行の計画書、リスク評価のチェックや山行技術向上に向けた各クラブ実施の講習などを指導した。各クラブの例会山行に参加する会員は、経験などに沿って希望する各クラブへ登録し、山行履歴を更新して、過去の遭難事故経験を踏まえ、種々の登山技術のレベル向上やリーダーおよびメンバーシップの充実を目指した。

また、外部1名を含めて3名の監事を置き、必要に応じて監事会を開催し会計および業務の監査と提言を行なう体制となった。特に、会員相互の交流について実施した会員向けのアンケート結果を受け、会員交流の場をクラブ間交流登山の実施などで具現化した。

ところが、先年発生した富士山および幌尻岳における重大遭難事故に続き、期末の3月7日、ユースクラブの例会において鳥取県の伯耆大山北壁で滑落事故が発生した。幸い死亡事故には至らなかったものの、生還は奇跡ともいえる状況だった。直ちに、遭難対策本部を立ち上げ、対応を行なったほか、事故調査委員会を招集して事故調査を実施している。ただ、広島においても新型コロナウイルス感染拡大への懸念から、会議による事実確認や委員の意見集約がままならない状況で、事故調査報告書の完成に手間取っている。事故発生原因の究明とともに今後の対策について支部会員に徹底するべく、早急に取り組んでいく。

《会議》

＊通常総会：5月18日㈯　ザ・ロイヤルホテル広島リバーサイド　参加者62名、委任状提出73名、合計135名、会員数153名で総会成立

＊総務部会：4月2日（15名）、5月8日（9名）、11月7日（11名）、2月13日（12名）

＊執行部会：4月2日（15名）、5月8日（9名）、6月12日（11名）、9月5日（10名）、11月7日（11名）、12月12日（10名）、2月13日（12名）

＊役員会：4月16日（17名）、7月24日（20名）、10月16日（16名）、1月16日（17名）、3月24日（19名）

＊新入会員オリエンテーション：新入会員が少なく、各クラブのミーティングにおいて個別に実施

《大山北壁滑落事故対応》

＊遭難対策本部：3月7日（14名）

＊事故調査委員会：立ち上げ準備会3月8日（12名）、3月14日（15名）

《山行・野外活動》

＊山楽山学クラブ（登録42名）

4月：4月20日　例会（みはらし連山）13名　4月28～29日例会（船通山）15名　体幹トレーニング10名、パソコン講習会18名

5月：5月11～13日　例会（国見岳）15名　5月19日　例会（天狗城山）17名（船上山）13名

6月：6月8～10日　有志山行（九重山）4名　6月23日例会（極楽寺山）15名　ロープワーク講習会16名、体幹トレーニング4名、パソコン講習会8名、岳連研修会8名

7月：7月10日有志山行（比婆山）4名、7月20～21日　例

会・交流講習（奥匹見峡・沢登り）17名
8月：8月17日　例会（三段峡）10名、8月24～25日　例会・交流講習（寂地峡・沢登り）21名
9月：9月4日　有志山行（岩国鵜飼）11名、9月15～16日例会（滑床渓谷・沢登り）10名、9月29日　例会（西区やまなみ）17名
10月：10月12～13日　有志山行（大万木山）9名、10月25～27日例会（大杉谷）7名、10月30日　例会（東郷山）11名
11月：11月10日　例会（角山・読図交流講習）22名、11月23～24日　有志山行（盛太ヶ岳、安蔵寺山）4名　登山研修所安全登山セミナー　参加4名
12月：12月14～15日　例会（盛太ヶ岳、安蔵寺山）13名、12月22日　例会（野呂山）22名
1月：1月19日　例会・交流登山（比婆山）19名、1月25～26日　例会（恐羅漢山）14名、初心者雪山説明会10名
2月：2月9日　例会（吾妻山）18名、2月22～23日　例会（天狗塚・三嶺）13名、岳連冬期レスキュー研修5名
3月：3月15日　例会（大万木山）12名　3月27～29日、4月3～5日　例会・交流登山（萩往還）延べ19名
＊アルパイン（シニア）クラブ（登録37名　ユースを含む）
4月：4月11日　講習会（オリエンテーション）8名、4月13日　例会（天応）8名、4月20日自主練（三倉岳）7名
5月：4月27日～5月2日　例会（白山・別山）3名、5月11日　講習会（クライミング）10名
6月：6月2日　サポート（山の日）10名、6月8～9日　例会（石鎚山）7名、6月15日　講習会（クライミング）10名
7月：7月65日　講習会（クライミング）10名、7月13日　自主練（犬戻し・沢登り）3名
8月：8月35日　講習会（クライミング）9名、8月10日　自主練（三倉岳・クライミング）10名、8月17日　自主練（ウラオレ谷・沢登り）8名、8月23～25日　例会（台高山脈・東ノ川・沢登り）4名
9月：9月7日　講習会（クライミング）8名、9月14～16日　例会（高知・仁淀安居渓谷・沢登り）6名
10月：10月12～14日　例会（比叡山・八面山）9名
11月：11月9日　交流山行（天応）10名、11月23～24日　例会（備中クライミング・ユース合同）7名
12月：12月14～15日　例会（長崎・野岳クライミング）4名
1月：1月25～26日　例会（大山）10名
2月：2月9日　自主練（天応）7名、2月22～23日　例会（大山・矢筈ヶ山）10名
3月：3月7～8日　例会（鳥ヶ山）5名
＊アルパイン（ユース）クラブ（登録37名　シニアを含む）
6月：6月8日　例会（岡山和気アルプス）6名

7月：7月27～30日　例会（南アルプス・北岳）4名
8月：8月9～12日　例会（黒部源流・赤木沢）3名、8月31日～9月1日　例会（高津川・つむぎ沢・沢登り）6名
9月：9月21日　勉強会（三倉岳・ロープワーク）7名
10月：10月5～6日　例会（御在所・前尾根）8名
11月：11月2～3日　交流登山（大山・三鈷峰・本部ユース）4名、11月17日　例会（幸彦山）12名、11月23～24日　例会（備中クライミング・シニア合同）5名
12月：12月15日　例会（宮島・駒ヶ林・クライミング）7名
1月：1月18日　交流登山（比婆山・御陵・読図訓練）26名、1月19日　交流登山例（比婆山）3名、1月25～26日　例会（大山・弥山尾根、一ノ沢雪上訓練）7名
3月：3月7日　例会（大山・弥山尾根・積雪期登攀）3名
上記以外にクライミング自主訓練（三倉岳、天応ほか）を計14回実施。

＊ゆうゆうクラブ（登録39名）
5月：5月8～9日　例会（岡山県伯州山）17名、5月28日例会（宮島・砲台遺構巡り）17名
6月：6月5日　例会（津和野城址）19名
7月：7月24～25日　例会（吾妻山・比婆山）11名
9月：9月10日　例会（北広島町毛無山）15名、9月25日　例会・交流登山（三原市・新高山・高山城址）19名
10月：10月23日　例会・交流登山（宮島・陶晴賢自刃の地三瓶山）28名
11月：11月20～21日　例会（兵庫県朝来市竹田城址・雪彦山）17名
12月：12月11～12日　例会（北広島町龍頭山・天狗石・高杉山）15名
1月：1月22日　例会（山口市白石山）14名
2月：2月19～20日　例会（八幡高原）15名
3月：3月25日　例会（岩国市由布　大将軍山・銭壺山）18名
そのほか、クラブ内写真クラブが12月10日～1月30日　ルーム内で第1回目の写真展を行なった。出展30点

＊スキークラブ（登録38名　他クラブとの重複可）暖冬の影響を受けて中国山地の降雪は少なく、思ったような活動はできなかった。
1月11～12日　会員向けスキー教室　5名、1月25日～2月3日　信州スキー合宿　延べ8名

《プロジェクト・地域振興》

＊支部事業
・比婆山国際スカイランへのサポート参加：5月25～26日　参加者27名
・ひろしま山の日：ジュニアツリークライミング実施　サポー

ト会員14名、一般参加延べ約１００名
・幌尻岳支部慰霊登山：7月12～16日　参加18名（遺族3名含む）
・西中国山地国定公園指定50周年記念フォーラム（広島支部5名参加）：10月1日　芸北支所で検討会が実施
・忘年登山：参加者13名　12月1日　大佐山～二川キャンプ場交差縦走
・新年互礼登山：1月5日　参加者52名（宮島弥山）新年会：参加者47名（大聖院）

＊山行指導部

月次のミーティングを行ない、提出されたすべての登山計画書やリスク評価のチェックおよび山行指導を実施するとともに、安全登山への意識向上に取り組んだ。登山計画書審査３３８件
・会員講習：延べ１２０名が参加。
クライミング講習：5月11日、6月1日、7月6日、8月3日、9月7日、計5回　参加延べ43名　アルパインクラブ担当
救命救急法講習：6月15日　参加15名　ゆうゆうクラブ担当
沢登り講習：7月20～21日、8月24～25日、計2回　参加延べ40名　山楽山学クラブ担当
読図講習：11月5日　参加22名　山楽山学クラブ担当
山スキー講習、冬山技術研修、雪崩・冬山セルフレスキュー講習は雪不足のため中止

＊公益事業部（自然環境担当）

・霧ヶ谷湿原の保全・整備　第1回　4月21日　参加者30名（会員21名）ＮＰＯ法人西中国山地自然研究会・八幡湿原自然再生協議会・地元の方々が協力
・霧ヶ谷湿原の保全・整備　第2回　6月2日　参加者32名（会員30名）4月と同様に各団体が協力
・登山道整備　聖山～高岳および聖分かれ～奥匹見登山道　9月7～8日　参加会員延べ43名
・西中国山地国定公園制定50周年記念事業検討会　10月1日　北広島町支所　参加11名（会員5名）
ＪＡＣ広島支部は国定公園内の登山に関わるイベントを検討する
・高岳山頂整備　11月30日　高岳山頂一帯を整備　参加者22名

《広報・文化活動》

＊広報担当

・支部報（ＪＡＣ　ＨＩＲＯＳＨＩＭＡ、メール配信）発行
5月号、8月号、11月号、2月号を発刊
（インターネット部会）
・ホームページへの支部活動アップ
（山楽サロン部会）

・自然観察（上野先生）2月15日～2月16日　霧ガ谷湿原、八幡高原）参加17名（北九州支部参加含む）

＊図書担当

・会員・他支部からの寄贈図書&本部からの寄託図書　約150冊収蔵、整理。委託図書以外を貸出し

＊交流担当

・中国・四国3支部交流会・ブロック会議（6月8～9日）県立「もみのき森林公園」参加者：広島21名、四国8名、山陰5名、ブロック会議議および交流会、3コースで交流登山を実施

・京都・滋賀支部との交流会（11月16～17日）蒜山高原　参加者：広島支部17名、京都・滋賀支部7名。交流会、2コースに分かれて交流登山を実施

・北九州支部との交流会（2月15～16日）八幡高原斎山荘　参加者：広島支部15名、北九州支部17名、上野先生の卓話およびスノーハイク、雪がなく2月15日に天候を考慮し臥竜山登山、16日湿原・自然観察を実施

《監事会》

外部1名を含めて3名の監事を置き、新組織の運営や安全登山への会員意識についてアンケート調査を行ない、会計および業務の監査と提言を行なった。監事会：1月、3月、支部ルームで実施。

《その他の行事》

・本部総会：6月22～23日　支部長ほか1名参加

・全国支部懇談会：5月25～26日　不参加

・支部合同会議：9月29～30日　副支部長ほか1名が参加

・JAC全国森づくり連絡協議会：10月5～6日　支部長ほか2名が参加

・年次晩餐会、支部長会議　12月7～8日　支部長ほか3名が参加

《会員動向》令和2年3月31日現在

会員　149名（前年153名）準会員17名（前年15名）会友1名（前年1名）

（近藤道明）

■――四国支部

春風駘蕩たる穏やかな公園の昼下がり、流れる花びらの中、詩吟が朗々と響いている。吟ずるのは烏水のお孫さん、四国支部会員でもある小島誠氏。烏水が記した名文「山を讃する文」の一節である。第7回を迎える烏水祭の恒例行事となっている。

《会議》

＊4月6日㈯　通常総会　喜代美山荘「花樹海」（香川県高松市）

審議事項は、30年度事業報告および会計報告、31年度事業計画および予算案。出席会員数は83名（委任状提出者55名含む）。

＊毎月1回　会員有志による情報交換会「サロン会」を支部ルーム（徳島市川内町）で開催。これからの山行計画などの意見交換。

《山行・野外活動》

＊4月7日(日)　竜王山　参加者13名（うち神奈川支部1名、東京多摩支部3名）、前日の烏水祭参加者との交流登山として企画。

＊5月19日(日)　竜ヶ岳～静ヶ岳（鈴鹿山脈）参加者6名。

＊11月3日(日)　黒笠山（阿波のマッターホルン）参加者4名。

＊11月16日(土)　段ヶ峰（兵庫県播州高原）参加者6名。

＊1月5日(日)　西三子山（干支の山行）参加者9人。

＊2月9日(日)　高城山（雪中登山）参加者9名　暖冬の中、直前のシベリア寒気団の南下により白銀の山行となる。

＊3月15日(日)　寒峰（福寿草探索）参加者6名　四国にも新型コロナウイルスの影響が出始める中、山頂は思いのほか賑やかであった。

＊初心者登山教室「フラワートレッキング」愛媛県内を中心に月山、栗駒山など活動エリアを拡大し36回講座開設　参加者延べ272名　開講後5年目を迎え、本年は欧州チロル、ドロミテ地方にも足跡を残すほどに活発化。

《広報・出版活動》

＊支部報「四国山岳」第6号　4月発行。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊4月7日(土)　第7回小島烏水祭（高松市峰山公園）碑前祭（来賓挨拶、献花、詩吟、記念講演など）・峰山公園内ハイキング参加者100名　烏水を研究対象としている米国大学教授アーロン・ジャスニー氏も縁あって特別参加（彼の寄稿文が山岳2019年に掲載されている）。

＊9月21日(土)　登山道整備（草刈りなど）落合峠～矢筈山　NPO法人との合同実施　参加支部会員5名。

＊10月5日(土)　徳島県主催行事「山の日イベント親子登山」に山行リーダーとして支部会員10名参加、親子10組20名。今年は天候などの都合により10月実施となった。

2020年4月、峰山公園は昨年同様、まさに春風駘蕩としている。しかし人影はない。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて公園は閉鎖、第8回烏水祭はやむなく中止となった。この断腸の思いを来春の盛会に必ずや繋げていく決意である。

（森山宏昭）

■福岡支部

《会議》

1・令和元年度通常総会

◇日時：5月26日(日)　14時開会

◇場所：福岡市中央市民センター

会員数：68名　総会出席：18名　委任状：25名　合計：43名

各議案が審議され承認された。

総会後に記念講演：水野公代「フンザ支援活動報告」、辻和毅「『山・水・人の風景』出版記念講演」を行なった。また、場所を移して「みくに」にて懇親会を開催した。

2・役員会：例年どおり原則各月第2火曜日に開催した。

《プロジェクト・地域振興活動》

1・第4回夏山フェスタin福岡2019

◇日時：6月22日(土)、23日(日)

◇場所：電気ビル共創館（4階／みらいホール）福岡市中央区渡辺通2－1－82

来場者数：22日＝約1900人（昨年1600人）、23日＝約3200人（昨年3300人）合計約5100人（昨年4900人）

国民の祝日「山の日」の制定を記念し登山愛好家の裾野を広げる好機として、山に親しみ、理解を深めてもらうイベントを開催した。主催は日本山岳会などからなる全国「山の日」協議会を中心とした夏山フェスタin福岡2019実行委員会で、また協力団体として日本山岳会福岡支部、日本山岳会北九州支部、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟なども加わった。【セミナー】橋本しをり、四角友里、角谷道弘、渡部秀樹ほか

2・祝日「山の日」制定記念in福岡登山大会

8月11日（日・祝）当日、福岡支部・福岡県岳連主導の「英彦山登山大会」、福岡県労山主導の「宝満山登山大会」、北九州支部主導の「風師山登山大会」の3山での大会を共催で行なった。

3・糸島・姫島　鎮山とカキ小屋新年会

◇日時：1月25日(土)

◇場所：姫島鎮山と岐志漁港のカキ小屋

参加者：32名（福岡支部20名、北九州支部2名、城南高校4期会6名、青山会4名）

4・「岳人のつどい」山の講演会

◇日時：2月23日(日)　14時開会

◇場所：太宰府館まほろばホール

酒井治孝氏（京都大学名誉教授）「地質学者のヒマラヤ」50名（会員15名、一般35名）参加

《広報・出版活動》

1・支部報№33を3月23日に発行

主な内容：1・支部長あいさつ（高木荘輔）2・追悼記　中村哲氏を悼む　3・特別寄稿　◎最初の冬山―鹿島槍ヶ岳の極地法・昭和23年冬―　◎宗像・沖ノ島の発掘から半世紀―世界文化遺産―　◎ヒマラヤ・タサルツェ（6343m）初登頂報告―河口慧海が眺めた山へのチャレンジ　4・筆に託した山への想い　◎世界の山をスケッチして　◎島太平治画伯の山の絵画と「山の図書館」　5・海外での活動記録　◎福岡の海外登山研究会「スタインボックの会」顛末記　◎ツェタン・ラサ・アリの旅―2018年春　◎イスラエル・ヨルダンの旅―2019年春　6・令和元年度、そのほかの支部活動報告

（渡部秀樹）

■北九州支部

支部役員が交代し、新規出発を迎えることとなり、いささか難しい舵取りを行なうこととなった。登山技術の高度化が進み、当支部として年4回実施している山岳専科や岩登り教室に参加者が多く、登山知識や技術を身に付けたい会員の希望にマッチした取組みが求められている現状である。家庭裁判所の補導委託登山、小学生登山、幼稚園の遠足登山の支援活動を今後も実施する。

《会議》

・総会　4月21日(日)午後3時より第20回通常総会を北九州市小倉北区紺屋町の毎日西部会館5階会議室で開催。出席者33人、委任状提出者18人、参加者と委任状を合わせると51名となり、67人の過半数を超えているので総会が成立した。支部友2人と準会員1人が参加した。

《役員会》

・定例役員会：5月14日(火)、7月3日(水)、9月4日(水)、11月7日(水)、1月7日(火)、3月4日(水)。

・臨時役員会：5月28日(火)、6月18日(火)、10月4日(金)、3月23日(月)。

《講習会など》

1・支部山岳指導員研修　4回（4回目中止）延べ32人（指導員11人）。

2・山岳専科　4回　延べ49人。

3・岩登り教室　2回：延べ20人。

《自然環境保全活動》

・九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視員12人が森林保全巡視活動を行なうとともに、登山道の清掃など自然環境保全活動を行なった。

・英彦山頂上に設置されたバイオトイレの清掃作業を地元山岳

会と交代で8回行なった。
・5月12日(日)　英彦山清掃登山・ゴミ収集　5団体　総勢56人
・平尾台（小倉南区）にある広谷湿原のラムサール条約登録を目指す支援活動を行なった。
《行事・野外活動》
・5月26日(日)　英彦山山開き　当支部員20人参加。
・8月11日(日)　山の日制定家族登山（風師山）総勢91人（京都・滋賀支部4人）。
・10月20日(日)　槇有恒碑前祭（風師山）総勢23人　森武昭前会長、高木荘輔福岡支部長ほか参加。
・12月14日(土)「忘年の集い」「中津市八面山荘」総勢27人。
《支援活動》
・5月15日(水)、17日(金)　さいわい幼稚園児の遠足登山風師山　総勢120人。
・5月30日(水)　福岡家裁小倉支部の補導委託登山サポート少年2人、保護者2人、裁判所5人、当支部4人　総勢13人。
・11月7日(水)　行橋市立延永小学校5年生82人「英彦山研修登山」サポート　総勢94人。
・3月19日(水)　さいわい幼稚園卒園児の矢筈山お別れ登山サポート　コロナウイルス感染拡大防止により中止。
《他支部との交流会》
・11月3日(金)～4日(土)　宮崎ウエストン祭　当支部員11人参加
・2月15日(土)～16日(日)　広島支部との交流会（広島八幡高原スノーシュー登山）臥龍山登山（広島支部13人、当支部17人）。
《支部山行》　月例山行13回実施、延べ138人参加。
・4月7日　宗像大島　18人、4月28日～5月3日　上高地―涸沢　19人、6月8～9日　由布岳　15人、8月21～26日　南アルプス　8人、9月7日　立花山　11人、9月14～15日　傾山　8人、10月26～27日　志々岐山・佐志岳・上段ノ野　15人、11月10日　国見岳　10人、1月5日　英彦山　11人、1月26日　立石山　12人、2月23日　三俣山　11人、3月15日　福地縦走　中止、3月20日　若杉山　中止。
《広報出版活動》
会報誌「北九だより」の発行4回（4月、7月、10月、1月）
〈同好会活動〉。
①版画教室　18回開催（ルーム）伊藤旧支部長の指導（7人）。
②ポレポレの会（軽登山・花鑑賞探索）11回、延べ163人参加。

（榊　俊一）

■熊本支部

平成31年度熊本支部は、会員の、高齢化や体力低下による退会が見られる一方で、準会員から会員への移行や、数年前より

実施している北アルプスなどへの山行、また海外トレッキング遠征などの企画もあって、会員会友への加入が少しずつ見られ、徐々に会員会友の交代局面にあると言えるかもしれない。ただそういう新たな会員会友の、日本山岳会に対する意識の薄さを心配する声も聞かれる。新入会員、特に若い会員の加入促進とともにＪＡＣに対する意識、誇りを喚起する研修の場を設ける必要が求められる。

また、会員の加入促進という狙いで、支部の下部組織として、同好会を新たに設けた。それなりに活動の広がりを生んだといえるが、当初の狙いである会員増にまでは繋っていないのが現状である。

国民の祝日「山の日」の取り組みでは、熊本県山岳連盟との共催で4回目の記念登山祭を実施することができた。第1回目に行なう予定であった阿蘇地域での「くまもと山の日」登山祭が、地震から復興しつつある杵島岳で実施することができた。猛暑と火山灰を心配する中での実施であったが、ふるさとの山に親しむ多くの仲間が参加してくれたのは非常に心強い限りである。

《会議》

＊支部総会　4月21日(日)9時30分より、熊本県婦人会館において、会員33名中、28名（うち委任状13名、ほかに会友13名）参加

＊役員会　毎月1回の定例役員会　12回開催

＊くまもと「山の日」登山祭企画実行委員会　3回開催　4月22日(月)、6月19日(水)、7月27日(土)、30日(火)

《行事・事業》

＊4月27日(土)～30日(火)　残雪期富士登山　参加者4名

＊5月6日(日)　春の登山教室・山野草観察登山（白鳥山・時雨岳）一般参加12名を含めて36名

＊6月2日(日)　春の森林保全巡視登山・久住山は雨天中止

＊6月16日(日)　登山技術講習会（岩登り）（熊本市植木町・岩野山）松本顧問、土井副支部長を講師として会員・会友13名

＊8月3日(土)～4日(日)　登山研修会・沢登り　祖母山奥岳川黒岩谷遡行実技研修。参加8名

＊8月11日(土)「山の日」登山祭（阿蘇・杵島岳）参加約２００名

＊8月24日(土)　夏季例会（ビールパーティー）会員会友参加24名

＊9月13日(金)～18日(水)　北アルプス：立山～剱岳縦走　好天に恵まれ、予定のコースを満喫できた。参加6名

＊9月28日(土)～29日(日)　第12回九州脊梁山脈トレイルラン支援協力　ランナーのサポート。参加11名

＊10月6日(日)　秋の森林保全巡視登山（佐賀・九千部山）登山道の巡視、ゴミの収集等を行なう。参加15名

＊10月26日㈯　秋の登山教室（由布岳）読図学習と写真撮影技術講習。一般参加者4名を含め22名
＊11月3日㈰～4日㈪　宮崎ウエストン祭：高千穂町五ヶ所三秀台、記念登山：祖母山　参加8名
＊11月30日㈮～15日㈰　第12回山の写真展：会員撮影の登山記録写真、出展者15名、出展数48、観覧記帳者130名
＊12月8日㈰　登山報告会　ニュージーランド・トレッキング（宇都宮会員）、北アルプス立山・剱岳縦走（安場会員）
＊1月19日㈯　支部新春晩餐会、会員会友参加30名
＊1月25日㈯～26日㈰　くじゅう冬山講習会は雨天中止
＊2月21日㈮～23日㈰　雪山実技研修会（大山）参加7名
＊3月8日㈰　干支の山（菊池市・ねずみ山）参加17名
＊3月　恒例の宮崎支部との交流会は都合により中止

《同好会活動》

＊花を愛でる会　7月25日㈬　蓮花と飯田山（15名）、9月16日坊がつる（7名）
＊写真同好会　10月20日　池の窪～大船山（9名）、12月17日～1月13日　わいふ一番館写真展
＊ハイシニア同好会　10月26日　鶴見岳（4名）、11月12日　五木大滝&白滝（3名）、12月12日　豊野水晶山（7名）、1月16日　山鹿震岳（4名）、2月10日　松橋白岩山（8名）、3月20日　天草老岳・天竺（11名）
＊トレーニング同好会　12月7日　金峰山（6名）、2月2日俵山（9名）、3月22日　釈迦院3333段（5名）

《広報出版活動》

熊本支部報：第44号（4月）、第45号（8月）、第46号（1月）
支部通信：6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月、1月、2月、3月発行

（中林暉幸）

■東九州支部

平成31年度支部定期総会を4月22日㈯に開催した。支部創立60周年を1年後に控えて、その準備年という位置づけを持つ総会であった。

支部の公益的事業としては、7期目を迎えた登山入門教室で11名の受講者を迎え入れ、座学講座2回、実践講座4回を9月から1月までの間にわたって実施した。この中で修了者の中から会友が4名誕生した。これまで通算7期で延べ180名が受講し、10名の会員、6名の準会員、45名の会友が誕生している。18回目を迎える青少年体験登山大会は61名の参加のもと、牧ノ戸峠登山口から久住山の往復を、健脚組、元気組、のんびり組の3組に分けて、3つのルートで実施した。4年前に当支部の呼びかけで組織した大分県山の日登山実行委員会（日本山岳会

東九州支部、大分県県山岳連盟、大分勤労者山岳連盟、全九州アルパインガイドクラブ）主催の「山の日登山」は、本年は中津市を舞台に、『ふるさとの山に登ろう in 中津・八面山』で実施し、120名を超える参加を見た。当支部と法華院温泉山荘と共催で実施し、10回目を迎える『九重（くじゅう）・山の安全を祈る集いを久住山御池の上の遭難慰霊碑前で実施した。祖母傾山系でのスズタケの枯死とシカの食害状況調査の活動も6月と10月の2回実施した。

共益事業では支部の登山活動の基点として位置づけている毎月1回の月例山行を『県境の山を登ろう』をテーマに今年は福岡県との県境の山を歩いた。さらに会員の研修山行として沢登り、ヤブ山、岩登り、雪山研修を通算4回実施した。このほか、合宿山行や忘年山行と忘年会など会員相互の交流と親睦とを中心にした登山も実施した。また、支部の次期リーダー育成を視野に入れや研修を本部の特別補助事業を受けて実施した。隔年交互訪問で実施している韓国山岳会蔚山支部との交流は、諸事情により本年は実施を見合わせた。

《支部の会議》

＊支部定期総会　4月20日㈯大分市・コンパルホール　会員73名中出席56名（うち委任状22名）で平成30年度事業報告・決算報告・監査報告、31年度事業計画・予算などを承認・可決。

＊支部役員会　第1回役員会…5月16日㈭コンパルホール　令和元年度事業の具体的推進　ほか。第2回役員会…7月8日㈪大分市西部公民館　第7期登山入門教室・第18回青少年体験登山大会　ほか。第3回役員会…8月28日㈬コンパルホール　第18回青少年体験登山大会　ほか。第4回役員会…10月7日㈪コンパルホール　忘年登山と忘年会・韓国山岳会との交流　ほか。第5回役員会…12月13日㈬コンパルホール　50周年記念事業　ほか。第6回役員会…2月19日㈭コンパルホール　本部報告・事業計画について　ほか。第7回役員会…4月2日㈭ソレイユ　定期総会議案について　ほか

＊会計監査　4月10日㈬午後2時から

《公益的事業の実施》

＊第7期登山入門教室　受講者11名

座学講座　第1回…9月11日㈬　第2回…9月26日㈬大分市金池南・ホルトホール大分

実践講座　第1回…10月6日㈰　日出生台・飛岳　第2回…10月27日㈰　鍋山尾根　第3回…11月16日㈯・17日㈰　横岳キャンプ場と津波戸山　第4回…1月18日㈯・19日㈰　泉水山・黒岩山とくじゅうヒュッテ

※講座修了後受講者のうち会友4名が新規入会

＊第18回青少年体験登山大会（青少年登山教室）

9月8日㈰　参加者61名（支部会員18名）コース＝牧ノ戸峠～久住山往復。健脚組、元気組、のんびり組の3班で行動。

＊「山の日登山」ふるさとの山を登ろうin中津・八面山　8月11日(日)　集会：野外音楽堂　山行：中津市・八面山　参加者約120名　主催＝大分県山の日登山実行委員会　構成：公益社団法人日本山岳会東九州支部・大分県山岳連盟・大分勤労者山岳連盟・全九州アルパインガイドクラブ

＊山の安全を祈る集い　8月5日(日)　池の小屋の上の遭難慰霊碑前　参加者支部会員29名、ほかに一般参加者6名、読経＝弘藏岳久氏

＊スズタケ枯死とシカの食害調査　第13回…6月1日(土)　参加者支部会員8名　第14回…10月5日(土)　参加者支部会員8名

江　本谷山西の稜線調査記録

＊清掃登山　10月19日(土)・20日(日)　九重山指山自然観察道

《共益事業の実施》

＊月例山行　2019年度のテーマ「県境の山を登る」

5月18日(土)　大平山（611m）参加者18名

6月16日(日)　雁股山（536m）参加者16名

7月27日(土)　経読岳（992・2m）参加者15名

8月24日(土)　鷹ノ巣山（979・2m）参加者12名

9月14日(土)　岳滅鬼山（1037・0m）参加者13名

10月12日(土)・13日(日)　犬ケ岳、英彦山　韓国山岳会蔚山支部との交流登山の予定を中止

11月10日(日)　御前岳（1209m）、釈迦岳（1231m）参加者19名

12月21日(土)・22日(日)　傾山（1605m）・天神原山（995m）忘年年登山

1月26日(日)　熊渡山（960m）・カラ迫岳（1006m）参加者12名

2月16日(日)　猿駆山（968m）参加者17名

3月15日(日)　三国山（994m）参加者19名

4月26日(日)　ハナグロ山（1086m）コロナウイルス感染予防により中止

＊忘年登山および忘年会

12月21日(土)・22日(日)　山行…8日　傾山（1605m）9日　天神原山（995m）参加者32名

忘年会…8日　佐伯市「ひょうたん小路」参加者33名

＊リーダー育成研修

第1回　5月12日(日)　小松尾根下部（祖母山）

第2回　6月9日(日)　小松尾根中部（祖母山）

第3回　10月6日(日)　スズコヤ谷（祖母山）

第4回　11月30日(土)　観音岩（由布岳）

第5回　2月22日(金)～24日(日)　伯耆大山（鳥取県）

＊喜寿お祝い登山

10月13日(日)　涌蓋山　喜寿祝賀当者3名　参加者34名

＊合宿登山

10月19日㈯～20日㈰　あせび小屋　参加者5名

＊新入支部会員オリエンテーション

新入支部会員（会員・準会員・会友）を対象としたオリエンテーションを6月20日㈭に実施。該当者13名中9名の参加

＊支部報発行

85号（4月25日）、86号（7月25日）、87号（10月25日）、88号（1月25日）

＊支部ルーム開設

毎月第1金曜日午後6～9時　毎回大分市西部公民館研修室を借り上げて、支部会員のミーティングや研修、諸会議の場などとして定期開設

＊次年度の計画

２０２０年度は当支部創立60周年に当たり、記念行事や記念山行、記念誌の発行並びに40周年で出版した『大分百山・改訂版』を再編纂した『同三訂版』の発行などを計画している。

（飯田勝之）

■宮崎支部

年間の支部活動は、会員の積極的なご支援により順調に遂行することができた。宮崎支部担当の第36回全国支部懇談会（２０２０年5月開催予定）の準備を年度半ばより、支部会員の意見を聴取しながら具体的な計画を鋭意進めてきたが、結果的には新型コロナウイルスの感染拡大により当初の5月開催予定を10月開催に延期せざるを得ない状況となっている。1年間の公益事業としては、「ときめき家族登山in島の浦・遠見場山」を計画したが、台風接近のため中止した。高千穂町との共催で開催した「第35回宮崎ウエストン祭」は参加者１７０名余であった。式典後は高千穂町の村おこし協議会主催の交流会に参加し地元の方々と楽しく歓談した。引き続き九州管内を中心とした日本山岳会会員46名と五ヶ所ひめゆりセンターで懇親会を開催し、翌日は記念山行を行なった。宮崎家庭裁判所から委託されている「少年補導登山」も今回で26回となった。3月1日開催予定であった諸塚村と朝日新聞社共催・宮崎支部後援の「第35回日本一早い山開き・諸塚山」は、コロナウイルス感染防止対策のため中止となった。ほかの公益事業としては水源の森づくりなど自然保護活動、宮崎市中央公民館まつりにおける日本山岳会および支部活動を紹介するパネルや写真展示、宮崎市近郊にあり市民の憩いの山でもある双石山清掃登山や登山道整備などを行なった。共益事業としての定例山行、月例山岳研究会などの支部行事も概ね計画どおり進めることができたが、3月以降の各種行事は、コロナウイルスの影響で変更あるいは中止せざるを得なかった。以下に概要を記す。

《会議》

＊平成31年度宮崎支部通常総会　平成31年4月13日㈯　出席48名（当日出席30名、委任状18名）

＊支部役員・委員長会議　毎月第1木曜日　同会議はほかに9回（延べ21回、延べ192名参加）

＊定例登山研究会　毎月第1木曜日（11回、延べ236名参加、3月定例研究会はコロナウイルス感染防止対策のため中止）

《定例山行・野外活動》

＊4月2日　定例山行　御在所岳　14名参加

＊5月12日　定例山行　遠見山　13名参加

＊5月25・26日　全国支部懇談会　奥日光・栃木支部主管　14名参加

＊5月27・28日　同懇談会・宮崎支部記念山行　大菩薩嶽・三ッ峠　14名参加

＊6月9日　定例山行　白岩山／向坂山　5名参加

＊6月15日　定例山行　扇山・都井岬　8名参加

＊7月21日　定例山行　大幡山（荒天のため中止）

＊8月11日　山の日関連事業・双石山と渓谷歩き　18名参加（参加者総数80名）

＊8月17日　定例山行　横岳　6名参加

＊9月14・15日　定例山行　剣山・徳島県　16名参加

＊10月12日　ときめき家族登山・遠見場山（荒天のため中止）

＊10月13日　定例山行　紫尾山　12名参加

＊10月19・20日　定例山行　双石山（山小屋泊）8名参加

＊11月2・3日　第35回宮崎ウェストン祭　18名参加（参加者総数170名）

＊11月3日　同記念登山　祖母山　18名参加

＊11月29日　宮崎家庭裁判所補導委託登山　9名参加（参加者総数16名）

＊12月14日　定例山行・清掃登山　双石山　16名参加

＊1月13日　定例山行　大島　17名参加

＊3月1日　第35回諸塚山山開き（コロナウイルス感染防止対策のため中止）

＊3月15日　双石山山開き（コロナウイルス感染防止対策のため中止）

《自然保護・環境保全事業》

＊7月7日　田野の森育林作業　6名参加

＊2月23日　育林作業　野尻の森　6名参加

＊3月21日　塩鶴登山道整備・小谷登山道植樹　16名参加（参加者総数60名）

《公報活動》

＊11月23・24日　第25回宮崎市中央公民館まつり、支部活動の山岳写真・日本山岳会の紹介などをパネル8枚で展示、18名参加（参加者数総数700名）

《出版事業》

宮崎支部報　年4回発行（各A4判・8～10ページ・150部）

4月1日（68号）、7月1日（69号）、10月1日（70号）、1月1日（71号）

（荒武八起）

委員会の活動報告

■総務委員会

当会の運営と管理を担当する部門として、各種会議や各種行事の運営、パンフレットや各種資料の作成、販売品の企画・販売などの実施やその補助を行なっている。近年は、会の財政改革や活性化を実現するために、会運営の合理化などにも積極的に取り組んでいる。毎月第1・3月曜日に定例の委員会を開催し、そのほかに各行事の打合せや事前準備のために年十数回、臨時の委員会や作業日を設けている。

1・同好会連絡会議

7月1日(月)　104号室　出席26同好会、欠席1同好会

同好会はクラブライフの真髄だ。仲間とすてきな人生を楽しむためにそれぞれ独自のスタイルで山を楽しみ、活動の活性化を図り、業務上必要な事項を連絡するために年1回開催している。今回は27の同好会の活躍を分かるように小冊子にまとめた。本部からの情報伝達のみでなく同好会からの要望も尋ね、会の運営に反映している。構成員の減少などにより活動実績がほとんどなく、休眠中の同好会も見られるので、現状に合わせた台帳の整理を行なう。同好会活動の活性化に役立てるために、同好会活動の発表の場として年次晩餐会などの活用なども検討している。

2・新入会員オリエンテーション

9月7日(土)　104号室　対象者203名中21名が参加、理事7、委員会7、同好会14名出席。

新入会員に早期に日本山岳会に馴染み、クラブライフを過ごしていただけるよう、その年に入会した会員を対象に、年1回開催している。会長の挨拶ののち、会の歴史・組織・活動、山岳保険、ルーム・図書室・山岳研究所などの施設やWebサイトの利用方法などを動画も交えて説明する。各自自己紹介をしてもらい、懇親会で各役員、委員会、同好会関係者も交え意見交換と懇親を図る。遠方で参加することが困難な会員のために支部のオリエンテーションなどで活用していただけるよう、JACの説明のCD-ROMを製作し全支部に提供している。

3・支部合同会議

9月28日(土)～29日(日)　プラザエフ（東京・四谷）

各支部の支部長・事務局長の出席の下、事務局の主管で年1回開催している。会務の報告、入会者の増強に向けて、安全登山について、会計報告書と寄付の取扱いについて、登山教室指導者養

成講習会の報告と計画、山の天気ライブ、「山の日」事業委員会報告、準会員制度について、全国の「古道踏査」、会員名簿について、などが討議された。

4・年次晩餐会

12月7日㈯　京王プラザホテル（東京・新宿）出席者　508名

申込み方法は昨年同様に同伴者を含め、出席者数の増加に務めた。記念講演会は年齢を問わず、多くの会員が興味を持つものを用意した。舟津圭三氏、萩田泰永氏の「極地への挑戦」、海外登山、助成金による登山報告では中島健郎会員「ラカポシ南面新ルート登頂」、秩父宮記念山岳賞受賞者、安間繁樹氏による受賞記念講演、日本・エクアドル外交樹立100周年交流事業の報告を行なった。約350名が聴講した。併催行事として、特別展示「日本山岳会の自然保護活動の歴史と今」や台風・豪雨による山岳被害状況の報告を行なった。また、山岳写真展、図書交換会、支部・委員会などの書籍・文献の展示・即売を行なった。

参加者により楽しい時間を過ごしていただけるよう、内容や進行方法を引き続き見直してゆく。

5・JACオリジナルグッズの製作と販売

会員サービスの一環として、オリジナルグッズを企画・製作し、今回は話題のファイントラック製の長袖シャツも販売、ルームでの直販やWebサイトでの通信販売、年次晩餐会の会場で販売している。これからも新製品を積極的に取入れて。販売・在庫管理の見直しによる合理化や販売チャンネルの拡大などを検討し、新委員会を立ち上げたい。

6・会員増加への委員会の取り組み

日本山岳会に関心を持っている人、入会を検討している方に対する説明会を定期的に開催している。偶数月の第4金曜日に本部ルームで実施し、本年の延べ参加者数は42名だった。説明会の参加者の多くが入会手続きをとっている。

（今田明子）

■――デジタルメディア（DM）委員会

DM委員会はインターネット利用による当会の広報、事務連絡の支援を目的として活動している。公益社団法人としての公開情報および当会主催のイベントの案内を行なうWebサイト（ホームページ）の運用、会員向けメールマガジンの発行、および会務に関わるメールの運用管理を1997年以降行なってきた。毎月定例会議を開催するのに加えて、必要に応じて記事の掲載、編集検討を行なうなど、通信事業者のサーバーを利用したインターネット・メールに関わる運用を行なっている。

2019年度の活動は以下のとおり。

1・Webサイト運営

広報的内容に重点を置いたＨＯＭＥ、会員を対象としたＲＯＯＭと２つに分けていた構造を分かりやすく１つにまとめる作業を進めた。また、パソコンだけでなく、スマートフォンやタブレットからも手軽に利用できるように内容の見直しを図った。なおＲＯＯＭサイトへ各委員会、支部、同好会が記事を投稿していた作業は、スマートフォンからも投稿できるように利便性を図った。

２・メールの運用

日本山岳会の会務、委員会、支部、同好会の活動を支援するため、当会独自のメールアドレス（ドメイン）のメールシステムを運用している。種類は、(1)通常のメールを送受信するメール　(2)特定のグループを対象としたメーリングリストなどが準備されている。

３・メールマガジン発行

メールマガジンはサイトの会員専用ページを観覧するためのパスワードを申請した会員およびメールマガジン配信を希望申請した会員を対象としている。右記Ｗｅｂサイトに掲載された委員会、支部などのイベント紹介にリンクして最新情報とともに、当会が協賛するイベントや、登山関連の有用なニュース・情報提供を目的に概（おおむ）ね隔週に発行している。

４・ＳＮＳの活用

ウェブサイトに掲載された記事へのアクセス数向上、および外部への活動紹介を展開させるために、ｆａｃｅｂｏｏｋ、ｔｗｉｔｔｅｒ、ｉｎｓｔａｇｒａｍを活用し、イベントなどの紹介をしている。一般登山者がＳＮＳで紹介されたイベントに参加し、当会へ入会する事例も増え、当会の広報に有効に機能している。

５・冬山天気予報

気象遭難防止を目的に、北アルプスエリアおよび八ヶ岳エリアを対象に、冬期は年末年始を中心に、春期はゴールデンウィーク期間を中心に配信している。

６・日本山岳会が所有する図書および資料のデジタル化と公開

当会は、山に関連した貴重な図書や資料を所有する。過去の貴重な図書や資料の存在を会員に公表し、会員共有の財産とすることが必要である。また災害や経年劣化などに対応したコンテンツの恒久的保存を目的とし順次デジタル化しホームページで公開をしている。

ＤＭ委員会は、Ｗｅｂサイトの編集にさらに改善を加えるべく検討を進めているが、各委員会、支部などには記事の充実のために会報への紹介と併せてｗｅｂサイトへのイベント案内、活動報告の投稿（またはＤＭ委員会への原稿提供）お願いしたい。

連絡先：internet@jac.or.jp

（大塚幸美）

■国際委員会

昨年は委員会の開催が無かったが、今年度は9月19日に一度開催され、国際委員会が発足した際の目標（後述）、今後の活動方針が確認された。来年度には、「発信力」をつけて実際の活動に結び付けるとともに、新たな国際交流の活動を再開させたい。

新たに2名の外国籍の会員（フランス、USA各1名）を委員会に迎えて、具体的な国際的活動に向けて委員会を強化した。

2017年に新たな国際委員会として発足した際の2つの目標とは、

(1)日本の登山文化、山岳地域の情報を外国語で海外に発信

(2)日本の自然の豊かさや山岳文化・伝承などを支部の言葉で世界に発信である。

当会唯一の海外交流の具体的な催事であった日中韓3国学生交流登山は昨年度を最終年度として終了し、今年度は開催されなかった。

一方、当委員会主催の事業として、海外交流登山が以下のとおり実施された。

2019年9月1～14日

「日本エクアドル国交樹立100周年記念有効登山隊」隊員14名。

・ルク・ピチンチャ（4784m）13名登頂。

・コトパクシ（5897m）11名登頂。

・チンボラソ（6310m）5名登頂。

なお、この答礼事業として2020年度にエクアドルからの登山隊を日本に迎える予定であったが、新型コロナウイルスの影響のため2020年度開催は中止された。

武漢で始まった新型コロナウイルス感染のニュースを受けて、三国学生交流登山の事業で大変お世話になってきた中国地質大学（武漢）の李先生、董先生に宛てて2020年1月28日にお見舞いメールを送ったことを備忘録的に記しておく。

（中山茂樹）

■記念事業委員会

2017年に新たに設けられた記念事業委員会は、本部委員会・支部と調整しながら2018年度には、2025年に迎える創立120周年記念事業推進のために、各委員会の委員長をメンバーとして組織編成した。また、それまでに提案された案件について、検討・実行に移すためにプロジェクトチームを立ち上げた。「グレート・ヒマラヤ・トラバース」、「山の天気ライブ事業」「ヒマラヤキャンプ」、「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」、「日本山岳会所蔵のヒマラヤ登山映像ライブラリー整備」、「古道踏査」などである、また、国際交流事業として「日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好合同登山」を加えた。

日本・エクアドル外交関係樹立100周年交流については、18（平成

30）年に話が持ち上がり、その後支部にも声をかけて登山隊が編成された。富士山などでの高所順応を終えて、9月1～14日にかけて14名がエクアドルを訪問し、エクアドル山岳会会員と交流した。エクアドル入国後は、日本大使館主催の盛大なレセプションののち、3日にルク・ピチンチャ山（4696m）、6日、コトパクシ山（5897m）。トレッキング隊はルミニャウィ山（4700m）、9日に選抜パーティがチンボラソ山（6310m）を登った。11日夕方にはエクアドル山岳連盟主催の送別会がキト市内のレストランで行なわれ、別れを惜しんだ。特筆すべきは今回の交流登山では日本から参加した隊員が山岳関係者の自宅にホームステイしたことである。9月には、エクアドル山岳会のメンバーが訪日し、富士山や立山などで交流登山を行なう予定になっている。

山天気ライブ事業ＰＪ

安全登山啓発活動の一環として、猪熊会員の山の天気、観天望気講座の出前授業を支部単位で行なう。併せて指導者養成、登山教室運営、ファーストエイド、セルフレスキューなどの実施を支部事業委員会が主管して行なう予定である。しかし2月29日㈯～31日㈰に予定していた神奈川支部での開催は今後に延期された。

グレート・ヒマラヤ・トラバースＰＪ

2月29日、3名の隊員が日本を出発し予定通りの行程を踏査して、4月18日カトマンズに戻った。しかし、未踏のパブクカン（6244m）の登頂はならなかった。

ヒマラヤキャンプＰＪ

ネパールのペリ・プンギ峰（6524m）の初登頂を目指して、国内でのミーティングやトレーニングなどを行ない、登山隊の編成を済ませていたが、直後の3月13日ネパール国以内の新型コロナウイルス感染防止策の一つとして、「2020年春のすべての登山隊の登山許可証の発行を停止する」という通達を受けて秋に延期された。

エベレスト登頂50周年フォーラムＰＪ

半世紀にわたるエベレスト登山の変遷を総括するフォーラムを、2020年5月9日㈯～10日㈰に兵庫県豊岡市の植村直己冒険館で、講演と映画の集い、写真展などの展示、ｖｒ体験を実施。5月21日～6月8日に板橋の植村冒険館でも開催する予定であったが、2021年に延期された。

そのほか、日本山岳会人物史ＰＪ、日本山岳会所蔵資料のデジタル化ＰＪなどの活動が始まっている。

（重廣恒夫）

■ 支部事業委員会

《特別事業補助金》

2019年度の「特別事業補助金」は8支部の申請があり、支部事業委員会で審査の結果、前年度から継続事業として福島支部「フリークライミング講習会」、埼玉支部「第2期埼玉やま塾」、栃木支部「ユー

ス栃木支援事業支援による次期リーダー育成と会員増強」、東京多摩支部「中級登山教室におけるリーダー育成」、関西支部「登山文化伝承」、越後支部「第3回ジオパーク子ども登山教室」、新規事業として、岩手支部「座学と実践で学ぶ読図講習会」、東九州支部「リーダー育成のための研修事業」の8支部の事業を理事会に推薦し承認され、総額67万円の補助が決まり助成した。

《第9回登山教室指導者養成講習会》

公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団の助成を受け長野県小諸市の安藤百福記念・自然体験指導者養成センターと水ノ搭山を会場として2020年2月1・2日に開催し、22名の受講生が参加した。初日の座学は、長野県警察山岳救助隊・岸本敏郎副隊長による「安全登山の心がまえ～山岳遭難事例から学ぶ～」と植木貞一郎医療委員会委員「低体温症・凍傷の基礎知識と対策」、重廣恒夫前副会長「登山教室実施要領」、川瀬恵一遭難対策委員長の「実践セルフレスキュー」の講義を受け、翌日の実技講習は水ノ塔山で重廣・川瀬両講師と応援に駆けつけてきた中山茂樹前副会長の3講師で「雪崩埋没者捜索」「雪上搬送法」「雪上歩行技術」「タイトロープ」などの実習が行なわれた。

《山の天気ライブ授業》

出張型講習会の一環として「120周年記念事業委員会と共同企画で山の天気予報でおなじみの「ヤマテン」代表の猪熊隆之会員からの提案もあり全国の支部と共同で座学とフィールドに出て行なう観天望気講座の企画を推進してきた。猪熊会員のスケジュール調整に苦労した中で、神奈川支部による「山の天気ライブ授業が2月29・3月1日両日で予定され準備が進められていたが、新型コロナの影響で直前に中止となった。新しい試みと期待していたのだが残念であった。来年度は企画を毎年実行できる仕組みができてきたので、今後の展開に期待したい。

《全国支部懇談会》

全国支部懇談会の開催支部の調整をして、2年先の開催支部が決め、さらに開催支部の地域が重ならないように、全国の支部が交代開催できるように配慮している。今年度は、栃木支部主催で日光、光徳温泉アストリアホテルを主会場として開催され162名が参加した。記念山行は切込・刈込湖周遊コースで行なわれた。次回は宮崎支部の予定。

（宮崎紘一）

■資料映像委員会

ウォルター・ウェストン、小島烏水、茨木猪之吉、加賀正太郎、安達源一郎、槇有恒、冠松次郎、堀田弥一、マナスル遠征隊など本会にゆかりのある絵画、映像、山岳資料を保存している。常時貴重な所蔵品の保存整理、調査研究、展示や外部から求めに応じ、貸出し、使用、問合わせなどの対応を行なっている。本年度はデジタルメディア委員会との協同で公開作業を行なった。

【2019年度の主な公益・共益事業の活動結果】

1・「第23回全国山岳博物館等連絡会議」の開催

11月17日に日本山岳会集会室で開催した。8館10名と当委員会委員・理事10名が参加し、各館の学芸員による特別展、企画展や研究調査の現状報告、情報提供、抱えている課題とそれに対する意見交換や助言が行なわれた。この会議は毎年実施している山岳関連の博物館・美術館との相互および本会との協力関係を深める有意義な会議となっている。会議内容は会報「山」896号（2020年1月号）参照。

2・シュラーギントワイト大図録集『アトラス』石板画の画像（当委員会委員撮影）全44葉（46図）を公開。

デジタルメディア委員会と協同作業で、インターネット上で公開することになった。解説文をヒマラヤ研究家として名高い薬師義美会員にお願いした。

3・現物資料・映像資料の活用と管理

資料貸出しと画像使用の許可書発行、問合せ対応（10件）を行なった。資料と絵画のデータベース登録数は約500件（個別資料は数千点）、映像資料（DVD・VHS・フィルム）は450タイトル。本会内に保管しきれない絵画と資料は、適切な保管・管理と、展示や研究に活用していただける博物館・美術館8館に寄託している。これらの年度末棚卸しと、寄託継続手続きの管理業務を行なった。本年度より寄託更新作業を2年毎として、作業軽減を図ることにした。

4・主な資料の貸出し先

(1)外交関係樹立100周年記念して、日本・エクアドル有効登山に関するスクーリングのため、隊長へ貸出しした。VHS：展望登山ガイド6巻　DVD　BOOK：日本の名峰4巻

(2)慶應義塾福沢センーへ同窓会向け冊子作成のため、2017年に開催した慶應義塾体育会創立125年記念事業特別展のときに貸出した資料、①槙有恒愛用初代のシェンクのピッケル、②頂上に置かれたピース缶の画像データ再利用を許可した。

5・経験を伝える努力の継続

資料映像委員会は発足以来、資料の保管と現物資料の管理と利用の活動をしているが、各時代毎に携わってきた担当委員の貴重な働きや経験が後継者に伝えるのが大変難しい。特に当会で開催される特別展示や講演会と、山岳関係の企画展を博物館、美術館等の学芸員の方々、テレビ番組や山岳関係書籍の編集者の方々の出会いで生まれ出る得難い経験を、少しでも遺産として残るように、冊子にまとめて将来の委員会業務の参考資料として作成している。

ぜひこのような山岳文化アーカイブに興味を持たれる方の参加を歓迎いたします。

（溝口洋三）

■自然保護委員会

自然保護委員会の主な活動は以下のとおりである。

1・定例委員会

毎月第3金曜日19時よりルームにて開催している。委員の多くは首都圏在住であるが、東海支部自然保護委員会からも出席がある。

2・機関紙「木の目草の芽」の発行

今年度は137～140号を発行。記事は注目すべき自然保護関連のものを中心に委員会の活動状況について掲載している。

3・自然保護全国集会の開催

毎年各支部の自然保護委員会を主管として開催している。令和元年（埼玉支部主管）は7月6日㈯～7日㈰の日程で埼玉県男女共同参画推進センターを会場に「生物多様性と自然保護」をメインテーマに開催した。6日は江村薫氏と中村直樹氏による基調講演、3分科会（テーマ）に分かれての討議、各支部の活動報告が行なわれた。翌7日は北本自然観察公園でフィールドスタディーを実施した。

4・山岳写真データベースの運用

山岳環境の変化を比較する「山岳写真データベース」の運用を行なっている。

5・森づくり連絡協議会との連携

10月5日㈯～6日㈰の日程で愛知県瀬戸市の東京大学生態水文学研究所を会場に開催された「第10回日本山岳会森づくり連絡協議会」（猿投の森づくりの会主管）に出席し、各森づくり団体との意見交換、猿投の森づくりの会の活動状況について見学した。

6・年次晩餐会における展示

令和元年度年次晩餐会において、自然保護委員会の活動を紹介する「日本山岳会の自然保護活動の歴史と今」、各地の台風被害状況を集約した「令和元年の台風及び豪雨による山岳被害状況　全国支部の被害調査」と題して展示を行なった。

前者は日本山岳会草創期の自然保護運動から自然保護委員会設置後の各支部で展開している多様な活動を紹介する年表やパネルを展示した。後者は甚大な被害を及ぼした台風15号、19号の被害状況を中心に各支部より寄せられた報告を気象予報士である猪熊隆之会員の解説とともにパネル展示した。

7・他の山岳団体との連携

毎月1回開催される「山岳団体自然環境連絡会」に出席して意見交換、シンポジウムなどの共同開催を行なっている。この連絡会は（公社）日本山岳会、（公社）日本山岳・スポーツクライミング協会、（公社）日本山岳ガイド協会、日本勤労者山岳連盟、（公社）東京都山岳連盟、（NPO）日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、山はみんなの宝クラブの各山岳団体の自然保護部門で構成している。

8・頒布物による自然保護啓発活動

携帯トイレ（日本山岳会オリジナル缶バッジ付き）の販売やポストカード（ライチョウ）の配布によって自然保護啓発活動を行なっている。

9・今後の活動について

自然保護委員会のＳＤＧｓ（エス・ディー・ジーズ）への取組みについては２０１５年９月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」にて記載された２０３０年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標であるＳＤＧｓを意識して活動を行なっていきたいと考えている。ここで示されている17のゴールのうち、６（安全な水とトイレを世界中に）と15（陸の豊かさも守ろう）が現在行なわれている自然保護委員会の活動に合致しており、今後「『ＳＤＧｓ』について支援していること」を標榜し、ほかの委員会との連携なども考えながら活動していきたいと考えている。

（谷内　剛）

■科学委員会

科学委員会の活動はひと言でいえば山や登山を科学の目で見る、ということである。関心領域は登山方法に関わる科学、気象、装備や地図に関する科学、山の地形や地質、植生に関する科学など多岐にわたるが、その目的とするところは山の自然の持つ魅力を科学の目を通して見ることで登山をより楽しく豊かなものとすることや、より安全な登山に不可欠な科学的知識を伝えることである。委員会活動に30名以上の会員が関わり、目的達成のため以下に示すような諸活動を行なっている。

1・「山のマナーノート」の作成、配布

２０１８年度から医療委員会、自然保護委員会と共同で手掛けた公益事業である。登山人口増により登山者のマナーが問題とされる事例が見られることから、分かりやすく親しみやすいイラスト入りのハンディーな冊子を作成した。３万部を印刷し、各支部、山岳団体（山小屋や個人）、博物館やビジターセンター、賛同いただいた企業などに配布した。幸いご好評をいただき、本年度に入りさらに３万部を増刷、順次配布中である。その過程で英語版も作成して欲しいとの要望を受け、１万部を作製、要望先に配布した。

2・「山の安全ノート」の作成、配布

山のマナーノート作成の過程で、登山行為がマナーと安全の双方に関わることがあるとの意見が出され、本年度より「山の安全ノート」の作成に入った。医療委員会、遭難対策委員会とのコラボで作業中である。

3・フォーラム「登山を楽しくする科学」の開催

フォーラム「登山を楽しくする科学」は本年度で12回目となり、

公益事業としての柱となってきた。本年度は3月14日に東京慈恵会医科大学講堂での開催を計画した。講演のテーマは「百名山伊吹山のお花畑の不思議」（森林インストラクター・樹木医の石井誠治氏）、「歩行ペースとコースタイムからみた安全登山の科学」（鹿屋体育大学教授　山本正嘉氏）、「山と高原のみずうみ・魅力あふれる高山湖はどのようにできたのか？」（産業技術総合研究所地質調査総合センター　客員研究員　中野俊氏）の3題とし、準備を進めてきたが、折からの新型コロナウイルスの急速な蔓延という事態に直面し、延期のやむなきに至った。本フォーラムについては状況を見ながら、できれば本年中に実施したい。

4・探索山行

共益事業として恒例となっている探索山行は6月15日㈯、16日㈰の2日間、「アツモリソウ保護活動の現場と富士山北麓を訪ねる」をテーマに三ッ峠山荘周辺を探索した。15日は雨のであったが30名の参加者が山荘に到着、夕方には主人の中村氏による保護活動の状況についての事前学習を行なった。16日は天候も回復し、山荘の主人であり、保護活動の中心となって活動しておられる中村光吉氏ほかの案内でアツモリソウの保護の現場を視察した。帰途、鳴沢村の紅葉台に立ち寄り、富士北麓の雄大な景観を堪能した。

5・研修山行

委員相互の研鑽のために行なっている研修山行は10月24日㈭に「伊能忠敬測量後２００年の地形変化」をテーマに犬吠埼から屏風ヶ浦まで８㎞を歩き、伊能忠敬の測量図に沿って地形の変化を確認した。千葉科学大学の植木先生に同行いただき、解説をお願いした。12名の委員に加え、千葉支部より5名の参加があった。

6・その他

１２０周年記念事業のうち、エベレスト登頂50周年記念事業委員会活動への参加や、月1回開催している委員会での内部研修などが上げられる。

委員会活動は毎月1回の定例会を持っているが、今後も登山や山の自然を科学の目を通してみることの楽しさをお伝えし、安全で豊かな登山の啓蒙に貢献していきたい。

（平野裕也）

■会報編集委員会

昨年度も、出版社で編集経験のある節田重節（会員番号６７２０）と原邦三会員（同９０８０）のふたりが、会報「山」の前半部と後半部に分けて担当し、編集作業を進めている。そして、毎月15日に校了し、20日過ぎには各会員の手元に届くようにしている。したがって、寄稿される場合には、発刊前月の25日までに委員会へお送りいただけるとありがたい。近年、会報に寄稿される方が減っているのが寂しい

限りだが、山に関することならどんな内容でも結構、ぜひお寄せいただきたい。

経費削減の折柄、毎月20ページに固定してやりくりしているが、報告や告知などが多くなると、どうしても紙面が堅苦しくなりがちである。本来、会報は自由な発表の場であると考えているので、そのためにも会員諸氏の寄稿に期待すること大である。特に若い会員からの寄稿を期待している。

昨年の製作費総額は９２０万４０４１円で、対前年比26万９６５３円の増となっている。これは別冊として季刊「ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ山」を創刊し、昨年10月号から3回刊行したためである。内訳は印刷・製本費が３５０万４０３０円で、月平均約29万円。通信・運搬費が３７８万９４５７円、発送作業代が84万２６４４円、編集費が１０１万１３６０円、その他経費が5万６５５０円となっている。

（節田重節）

■『山岳』編集委員会

機関紙『山岳』第百十四年（２０２０年）は、担当の神長幹雄編集長以下、節田重節委員を中心に昨年と同様のスタッフで編集作業が進められ、８月中旬に発刊された。

表紙は今年も岐阜県下呂市在住の田立泰彦会員（会員番号９２３３）にお願いして4年目、最後の表紙になった。北アルプス槍ヶ岳を望む画で飾っていただいた。

今号は少し視点を変えて「巻頭」ページを考えてみた。日本人が関わった、2本の外国人による記事である。

1本目は、アメリカのワシントン大学で日本文学の研究をしていたジャスニー・アーロン氏による小島烏水の文学への考察。小島烏水といえば、横浜正金銀行に勤める傍ら、文筆家としても知られ、日本の近代文学に多大な貢献をした人物である。もちろん１９０５年の日本山岳会創立の主要メンバーの1人でもあった。海外の研究者に、小島烏水の紀行文学がどう映るのかを考察してもらった。氏の論考は英文で書かれたものをメインとし、なお要約された和文も自ら執筆してもらった。

2本目は、「スキルブルム初登頂と写真の謎」と題して、ドイツ在住の登山家ヴォルフガング・ハイヒェル氏から投稿された原稿である。カラコルムにあるスキルブルムで撮影されたという「頂上の写真」（マルクス・シュムックの著書『Broad Peak』に掲載）が、１９５７年にブロード・ピークが初登頂された際に、帰路、撮られたものであるかを疑問視した記事である。こうした疑惑を英文と和文で並記掲載し、池田常道会員に当時の背景を含めてその写真の謎を解説してもらった。

続いて「記録」であるが、今号はやや異色のものとなった。高峰登山などの先鋭的な記録ではなく、群馬支部会員による、最近話題になっている「ぐんま県境稜線トレイル」の紹介と課題などを、そして東海

支部会員による、「塩の道」古道を6年の歳月をかけて踏査した調査の記録である。

「読物」は、「『約束の蝶』アサギマダラ」。インド北部のハヌマン・ティバ登頂と雪崩からの生還、そして30年後、蝶を求めて山野を彷徨した2つの出来事が綴られた。2本目は「私が敬愛した長老たち」。1950年代から60年代にかけて、マナスル登頂など日本山岳会が目覚ましい活躍をし、最も輝かしい時代だったころの、長老たちの懐かしい言動を振り返った読物である。

「調査・研究」も2本の原稿となった。群馬支部の活動の一環として開催された『「健康登山塾2018」と、「ウェストンが越えた飛騨の古峠探索記」。「山の国」飛騨は「峠の国」でもあり、特に明治期、ウェストンが歩いた古峠を、地図を片手に踏査した興味深い探訪記となっている。

「図書紹介」と「追悼」は例年どおりだが、特に「追悼」は、湯浅道男、大塚博美、松田雄一氏ら日本山岳会のヒマラヤ登山を主導してきた方たちが相次いで亡くなられ、その事績を顕彰してもらった。日本のヒマラヤ登山史を担ってきた方たちだけに、寂しさとともに時代の変遷に想いもひとしおである。

また今回の年報も、加藤大雄会員の協力を得て、英文サマリーをつけることができた。

なお、昨年の製作費総額は317万6554円で、内訳は、印刷・製本費216万円、発送作業・封筒代62万3432円、編集費32万8256円その他経費6万2580円。印刷部数は4900部であった。

（神長幹雄）

■図書委員会

2019年度の図書委員会は，2年におよぶ近藤雅幸委員長代行のあとを受けて、神長が委員長を引き受けることになった。それまでは担当理事として2期4年間、図書委員会に出席していたので、委員会の様子はだいたい把握していたが、私個人は委員会の委員ではなかった。これまでにも三好まき子元委員長から何度か誘いを受けていたが、仕事上の多忙さを理由にお断りしていた。その私が、山岳会のなかでも歴史と伝統を誇る図書委員会の委員長を引き受けることになってしまった。やはり三好さんへの追悼の想いと、現役で「超」がつくほど多忙な近藤委員長代行への負担軽減への想いが、お引き受けした意識の根底にあったような気がする。

では今後の委員会活動をいかに運営していくべきか。特に先に記したように図書委員会の歴史や伝統をいかに若い会員に引き継いでいけるであろうか。日本山岳会自体もそう変わらないと思うが、会員相互に感じられる意識の温度差をどう埋めていくかである。長年にわたって活動してきた会員と、ここ数年のうちに入会してきた会員には、当然のことながら温度差があると思われる。その橋渡しが喫緊の課題であろう。

そこで長年、図書委員を務めてもらっていた越田和男会員と田村俊介会員に、2回にわたって図書委員会の歴史について話をしてもらった。越田会員からは、当時の会員の顔ぶれ、島田巽、山崎安治、近藤信行、宮下啓三など錚々たる会員の人となりを、田村会員からは山岳図書をめぐる活発な論議が毎回あったという話を聞くことができた。そうした図書委員会の「山岳図書の香り」を少しでも感じ取ってもらえたらと思う。

またそのためにも、「山岳史懇談会」と「山岳図書を語る夕べ」など、会員外も含めた催しを年に数回は開催したいと思っている。とにかく山岳図書を話題にした催しによって、私たちの意識も伝統も少しずつではあるが、継承されていくのではないだろうか。２０１９年度は「山岳史懇談会」として、平林克敏会員を招いて「山人生70年に想う」を6月14日、１０４号室で開催できた。3月には岡田喜秋さんを招いて「山岳図書を語る夕べ」も立案していた。

こうした活動とともに、毎月の例会で、各出版社から送られてくる書籍を選択し、会報「山」への掲載の選定、執筆の依頼をして、「図書紹介」欄に発表する活動がある。紹介する本の選定→執筆者の選定→依頼→原稿の入稿までをコンスタントに行なうのも図書委員会の役割である。さらに毎年、恒例となった年次晩餐会における図書交換会がある。第37回目の図書交換会は12月7日、年次晩餐会の前に京王プラザホテルで開催された。出品本は約４００冊、完売され、総務委員会を通して入金された。

また6月29日には、「三好まき子さんを送る会」が図書委員会の主催でアルカディア市ヶ谷で行なわれた。日本山岳会を中心に１００人ほどの知人・友人が集まり、気持ちのこもった温かい会となった。

さらにこの年は悲しい出来事が続いた。三好前委員長に続き平井吉夫元委員長のご逝去の知らせが入ってきたのである。長期にわたって体調を崩していた平井委員だが、調子のいいときには委員会にも出席していただき、その後の飲み会にも顔を出してくれた。心からご冥福をお祈りいたします。

ただ3月に入ると、事態は一変してしまった。前記のような各種のイベントに力を入れていこうとした矢先、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言の発令で、すべてが自粛、イベントもことごとく中止か延期の事態を迎えてしまったのである。

（神長幹雄）

■「山の日」事業委員会

日本山岳会が「山の日」制定を目標に運動をスタートさせたのは２００９年。今年「山の日」事業は12年目に入る。いささかマンネリ化した感が「無きにしも非ず」。２０１９年度は、祝日「山の日」についての周知、啓発はある程度進んだように思うが、「山と向き合うことの大切さ」「登山を通じて体育、文化、並びに自然愛護の精神の高揚を図る」

という目的に沿った事業展開ができているか。自問すれば「?」が付き、先行きに確かな展望が持てていない。全国山の日協議会の法人会員として、そのイベントに協力しているだけではないか、という叱正も聞かれる。

事業として「山の日」運動に取り組むことで会員相互に強い一体感をもたらし、社会的な広がりを持たせて日本山岳会の存在感をアピールしよう。当初の目的を、いま改めて確認する必要があると思う。

さて、事業報告その1。まずは印刷物を使った全国に向けての広報活動。一般財団法人全国山の日協議会が6月に発行する「『山の日』マガジン2019」（広告入り、無料配布のフリーペーパー）5万部の発行に編集協力し、当会の全会員に会報同封で配布した。第4回全国「山の日」記念全国大会が山梨県甲府市で開催されることもあって表紙は山梨側から見た富士山のイラスト。山梨支部の矢崎茂男さんが「甲斐の山々に向き合った武田信玄」を執筆し、信玄と棒道、治水、山岳信仰などをテーマに山と武将、人と時代を興味深く綴った。山の日アンバサダーの当事業委・萩原浩司と山岳ライターの小林千穂さんの対談、山岳ガイドで北杜市に住む花谷康広さんの甲斐駒ヶ岳からの報告など。「『山の日』マガジン」がテーマに掲げる《山を知る。日本を知る》の記事ページと登山用具、食品・飲料、山岳保険といった広告がマッチした冊子に仕上がった。冊子はおよそ7500部が、支部を通じて各地の「山の日」関連のイベントなどで配布された。

好評の「『山の日』マガジン」は2020年版も4月10日付けで5万部が発行されている。4、5月の大型連休前に発行して運動のPRに役立てようと出版を急いだが、新型コロナウイルスの感染防止が山々にも及んで、タイミングとしてはちょっと残念。元熊本支部長で阿蘇山麓に住む工藤文昭さんが「九州の山と自然を知ろう」に健筆をふるっている。

事業報告その2はイベント参加。甲府の第4回記念大会には古野淳会長、清登緑郎担当理事、山賀純一委員、地元山梨の深沢健三支部長、古屋寿隆事務局長らが出席した。山梨県の「山の日」活動は20年余に及んでいる。《山に親しみ、山に学び、山と生きる》のコンセプトのもと、幅広く多彩な企画で県民の参加と支持を得てきた。詳しくは2019年の会報「山」9月号で報告したので省くが、山梨に学ぶことは多い。同様、広島や東海支部などが地域に密着した企画で「山の日」運動の裾野を広げている実績に注目したい。ただし、持ち回りの全国大会は、県や市町村など自治体が中心になって立ち上げた実行委員会に委ねる部分がほとんどで、パターン化してしまったと言えるかもしれない。

全国各地に支部を持ち、人材豊富な日本山岳会が、若い人たちを巻き込んで「山の日」の理念を具体化し、行動に結びつけることが今後の課題といえよう。支部との情報交換、連携強化である。同時に、支部事業委員会、自然保護委員会、家族登山普及委員会、それに全国山の日協議会との更なる連携が求められている。

（成川隆顕）

■ 山行委員会

1・山行委員会の役割について

山行委員会の役割は、理事会の指導の下、「国内外の登山の企画・実施」を行ない、会員相互の交流、懇親を図り、会員一人一人の登山技術の習得、向上を目指し、ひいては日本山岳会の設立目的である〈登山を通じてあまねく体育、文化、および自然愛護の精神の高揚を図ること〉に貢献することにあると考えている。当委員会は日本山岳会の本部委員会にあって、最も山岳会らしい委員会のひとつ。山行委員会は、「会員の役に立つ、会員のためになる委員会」を目指して、国内・海外の山行、講習会などの企画、運営、実施に取り組んでいく。

2・活動方針〈安全に楽しく、全国の仲間と一緒にあこがれの山に登ろう〉

上記役割と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下のとおり定めている。

(1)全国の会員が自由に参加でき、かつ楽しく有意義な山行を企画する。山行に当たっては、何よりも「安全」に最大限に配慮する。

(2)会員の多数は、60歳代70歳代の会員だ。その大多数の中高年会員を主な対象とした山行を実施する。山行以外にも安全登山に資する講習会などを企画する。

(3)軽ハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い、積雪期も含めたオールラウンドな山行を行なう。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキングツアーも企画する。

(4)何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない楽しいプラスワン〈植物、地形、歴史、文化、温泉など〉の山行を志向していく。山行を通じて会員相互の交流を図っていく。

(5)全国の支部、ほかの委員会などとのコラボレーションを積極的に図っていく。

3・活動内容

(1)公益事業

「登山リーダーのための救急救助講習会」を6月にJICA地球広場で開催した。悳会員に講師を依頼し、「登山リーダーに求められるレスキュー技術の実技講習」を公益事業として実施。非会員を含めて32名参加。

(2)会員向け事業

令和元年度、以下の山行を企画、実施した。別途2回は荒天などにより中止した。山行参加者は延べ176名。各山行には、山行委員が2名以上参加している。

4月　「小豆島88ヵ所遍路」遍路道を歩いて巡る。参加者8名。5泊6日。

4月　「雪の大谷散策と雷鳥の生態観察及び雪原ハイク」富山支部とコラボレーション。立山の雪の大谷散策、雷鳥平ス

ノーハイク。参加者16名。2泊3日。

5月　「桐生鳴神山」カッコウソウを求めてハイキング。加者12名。日帰り。

5月　「熊野古道小辺路山行」高野山から熊野本宮。参加者11名。4泊5日。

7月　「秋田大平山、秋田駒ヶ岳と乳頭温泉」秋田の2名山と温泉。参加者12名。2泊3日。

7月　「花の山旅・白山」加賀の白山花巡り。参加者16名。3泊4日。

8月　「北アルプス縦走第8回：西穂高岳・焼岳・霞沢岳を巡る」途中上高地山研宿泊。参加者16名。5泊6日。

9月　「南アルプス縦走シリーズ：聖平から三伏峠」聖岳、赤石岳、悪沢岳を縦走。参加者10名。6泊7日。

9月　「中央アルプス空木岳・木曽駒ケ岳縦走」駒ヶ根から伊那側へ縦走。参加者7名。2泊3日。

12月　「晩餐会記念山行三ッ峠山」天候良く、富士五湖、富士山、南アルプスが好展望。参加者55名。バス利用日帰り。

1月　「スキー懇親山行」蔵王スキー場で実施。参加者13名。3泊4日。

(3)研修会の実施

「山行員会研修会」を、11月に富士山市で実施。1年の振り返りと年間計画策定に向け、論議を行なった。併せて、委員各自の研鑽と委員会内のコミュニケーションの向上を図った。翌日、晩餐会記念山行の三ッ峠山の下見をした。

(4)月例会

毎月第1水曜日、ルームにて担当理事にご出席をいただき例会を実施している。理事会からの情報伝達、各山行の行程、安全管理等運営に関する登山計画検討を行なっている。

（征矢三樹）

■ YOUTH CLUB委員会

一般公募（非会員）を対象とした机上・実地の基礎からの登山教室を原則月に一度実施している。

会員を対象とした活動として、60歳未満の会員を対象として、学生部・ワンダーフォーゲル部（WV部）・青年部に分かれて活動を行なっている。それぞれにメーリングリストまたはライングループを作成し、そのメンバーに参加していることをもって所属メンバーとしている。

各部とも月に1度の例会を開催し、山行報告や山行予定を発表し興味のあるテーマで勉強会を開いたり、身近の会員から講師を呼び1時間ほどの講習会を行なったりしている。

WV部はメンバーが200名を越え、新たに参加したメンバーに満足のいく交流・登山の場を提供しクラブライフの楽しさを共有してい

く活動に日々注力している。

昨年度で日中韓3国学生交流登山は終了し、今年度は学生部のメンバーが参加した国際交流はなかった。

学生部に所属する首都圏の大学山岳部を対象とした監督会議は行なわれなかった。一方で、青年部では延べ3回、6名が海外登山を経験した。

・2019年9月1～14日　日本エクアドル国交樹立100周年記念有効登山　中谷、松尾　ルク・ピチンチャ（4784m）、コトパクシ（5897m）、チンボラソ（6310m）。

・2019年10月31日～11月4日　台湾、雪山（3886m）中谷、松尾。

・2020年2月9日～3月3日　アンデス山脈　アコンカグア（6962m）中谷、松尾。

山行実績数は以下のとおり。

・学生部　毎月例会、6～17校出席（8月、3月は休会）。5月に海外登山講習会。11月にクライミング大会、マラソン大会を実施。（例年開催のアイスクライミング、ホワイトアウトナビ講習は中止）。

・WV部延べ49回、249名。

・青年部　延べ75回、221名。（うち、海外3回、6名）。

・屋内クライミング研修・練習会　延べ77回　223名。

・セミナー・講習会　延べ6回、23名。

・雪崩技術研修（Basic Safety Camp）　1回、9名。

（中山茂樹）

■家族登山普及委員会

山登りが好きな人を増やし登山を生涯通じて楽しんでもらうための最初の一歩として、身近な家族で登山教室を提案している。親子だけでなく、祖父母と孫など気軽に登山を楽しむ知識や安全登山の技術を広めるため、「家族登山教室」を年間通して開催。参加者は一般応募の6歳～小学校6年生までの子どもとその家族。委員と一緒に家族単位で山に登り、一体感や達成感を味わい、また子どもやその親に山に親しんでもらい、健全な心を養い、山の経験や知識を得て、山の自然環境や山里文化の維持に繋がることも目指すのが家族登山普及委員会の願いだ。

そのための活動を主とした報告になる。

■2019年度の活動報告

1・家族登山教室（年6回）の計画立案と実施

3月【高尾山とテント&おやつ作り体験】

高尾山に登りテントや調理器具の使い方を学ぶ（2家族、6名）

6月【富士山の洞窟探検】

ヘッドライト、ヘルメットなど道具に慣れる（4家族、12名）

8月【上高地で一泊体験】

山研に宿泊して上高地の魅力を満喫（4家族、14名）

10月【秋の上高地で1泊体験】

山研に宿泊して秋の上高地の魅力を満喫（台風の為、中止）

12月【高尾山で芋煮会】

山の調理器具を体験（台風による登山道閉鎖のため中止）

2月【奥日光でいろんな雪遊び体験】

雪山歩きの楽しさをスノーシューで体験（4家族、9名）

・2018年度の反省を踏まえ、家族登山教室の内容をブラッシュアップし、日本山岳会ならではの講習や山研の積極利用を図った。

・山岳会HPやSNSにて告知と募集、4回の家族登山教室で14家族、41名の参加となった。

2・全国支部ネットワークの構築

9月に開催された支部合同会議にて「家族登山の支部ネットワーク」の提案を行なった。

・日本山岳会の強みである全国の山の情報を各支部から発信できること、各支部が行なっている家族登山教室の情報を共有するための試み。

・各支部（33支部）に対し、全国ネットワーク構築の依頼、各支部の実績や募集をサイトにアップしていく。

・視察として、石川支部主催の【白山親子登山】に五十嵐、谷内の2名が参加。各支部のノウハウを共有するとともに、支部ごとのほかに家族登山普及委員会としての告知と募集を行なっていく。

3・HP「親子で楽しむ山登り」のブラッシュアップ

発足当初は文科省のゆめ基金との取り決めにより、運営に基づいたHPを3年間は運用していかなければならなかった。2020年度より文科省の文言を省き、独自のHPを発信するべく、新たな運営を試みる準備を進行中。

・HPの新しいコンテンツの発信やイベント企画の実施にて、親子会員の組織化（会員クラブの結成、広告集め）。

・他の団体、スポンサーとの協業によるイベント（山ごはん）などの合同企画提案、実施。現状はコロナ影響で、「おうちキャンプ」「おうち山ごはん」が広く話題となっている。家族での登山が楽しみな方、今まで興味が無かったが家族で山に行ってみたくなった方、大変な事態を乗り越えて、安全で楽しく、子どもたちの笑顔が見られる、すばらしい家族との山登りを委員会として発信しサポートしていきたいと思う。

（五十嵐百子）

■医療委員会

委員会の主な活動は安全登山のために、登山の医学についての啓発活動を行なうことと講演会、講習会、メディカルハイキングなどを開催することである。

Ⅰ

公益目的事業　健康登山についての講演会を主催

10月17日にプラザエフにて、齋藤繁氏（群馬大学）の講演会「登山を健康増進に生かす―コツを伝授する『健康登山塾』を開催して―」を開催した。『健康登山塾』とは、群馬支部が行なっている登山教室（塾長齋藤繁氏）で、登山を健康維持に結び付けること、中高年の山岳事故を防止することを目的としたものである。

講演は登山が引き起こす生理現象の物理的説明から始まり、その対処や安全のための心掛けなどを理論的に講義した。登山塾は1回目は赤城山、2回目は榛名山で、各6回登山を実施し、その結果、血圧変動が小さくなり、着地が丁寧になる参加者が多かったという。登山塾の詳細は会報「山」884号（2019年1月号）に報告されている。

講演会参加者は51名（女性21名、男性30名）で、アンケート（40名）提出者の平均年齢65・3歳（21～84歳）で、JAC会員と会員外は20名ずつだった。講演会を知ったメディアは、「以前の医療委員会講演会に参加者に送ったメール」（10名）が最も多く、以下、「東京多摩支部ML」（8名）、「JAC会報」（7名）、「JACのHP」（5名）、「山と渓谷のWebニュース」（5名）、「口コミ」（4名）などだった。評価は、「とても良かった」が33名、「良かった」が7名と好評だった。今後の医療委員会に希望するテーマは生活習慣病、高山病などで、さらなる情報発信への期待などもあった。結果を今後の企画に生かしたい。

詳細は医療委員会HP：http://jac.or.jp/info/iinkai/cat64/post-1609.html を参照。

Ⅱ　共益目的事業

1・会報「山」医療コラム（Climbing&Medicine）「山歩きをコツコツと続けましょう！」を掲載した。

骨を強くするにはカルシウム源になる食物を摂取することだが、吸収したカルシウムを確実に骨にするために運動と重力をかけることが必要だ。もう一つ重要なことは、カルシウムは腸管から吸収されるが、吸収にはビタミンDが必要なこと。ビタミンDは食事から摂取できるが、皮膚で合成させることもでき、太陽の光が合成に必要だ。これらのことを考えると山歩きは骨を強くするのに適している運動と言える。ただ、何事にもほどほどの匙加減が必要で、過度の運動、過度の日焼けは要注意。自分にあった山歩きをコツコツ、骨々と続ければ楽しく健康維持ができるだろう。

詳細は医療委員会HP：jac.or.jp/info/iinkai/cat64/cat1185/post-1588.html を参照。

2・2月1、2日に開催された第9回JAC登山教室リーダー養成講習会（小諸　安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター）に植木貞一郎氏が講師として参加し、低体温症などの講義を行なった。

3・HP活動

医療委員会の活動を随時アップした。その成果か、各種イベントに会員外の申込みが多かった。

4・会員増加活動

講演会で日本山岳会活動の紹介を行なって、入会を募っている。

Ⅲ　次年度の活動方針

1・講演会、講習会、メディカルハイキングなどを企画。

2・安全登山ノートを遭難対策委員会、科学委員会と共同して作成する。

3・会報「山」の医療コラムの掲載

4・HPの運営

Ⅳ　委員会例会

不定期に開催。委員会事業の検討と山岳医療に関する新しい知見などについて討議している。

Ⅴ　今期の委員

担当理事＝神尾重則、委員長＝野口いづみ、委員・稲村道子・浜口欣一・神尾重則・村上和子・小清水敏昌・秦和寿・植木貞一郎・山内佳奈・香川茂雄・土井理・青木義仁・沼田ほあし・江口岳志

（野口いづみ）

■　山岳研究所運営委員会

山岳研究所運営委員会は、上高地は河童橋の右岸にある当会の山岳研究所（以下「山研」）の運営・維持・管理を目的に、管理人の協力を得て活動をしている。

上高地は4月下旬から11月中旬に開山しているが、当山研の開所期間中は、ミニ水力発電の実用化研究を神奈川工科大学と共同で行なっており、山研裏側の善六沢の水を利用して発電し、発生した電力は建物内の照明などに活用している。また、委員会は、毎月第2火曜日に当会の市ヶ谷ルームで開催している。

以下、2019年度の主な活動を列挙する。

主な山研管理・維持事業

1・開所作業（4月25～26日）例年どおり、山研の開所作業を実施した。小雪といわれたシーズンであったが、4月に入ってからも積雪があり、除雪作業を余儀なくされた。積雪状況によって開所作業の量は大きく変化する。山研建物周りだけでなく、水力発電用の引水のため、善六沢取水口近くの除雪も必要となる。

2・閉所作業（10月26～27日）委員が協力しながら順調に作業を終えた。

3・上高地町会行事（開山式、閉山式、一斉清掃など）

これら行事への参加および上高地消防隊活動に協力した（4月下旬～11月中旬の上高地開山中随時）。

4・2019年は台風が多く、水力発電の善六沢取水口にトラブルが多発したため、都度修繕作業を行なった。

会員向け事業

1・信濃支部主幹の「徳本峠越えとウェストン祭」運営に協力し、参加した（6月6～7日）。当会会員17名が参加した。

2・会員向け行事として、「上高地の自然観察会」を開催した（9月28日～29日）。元川里美管理人を講師に迎え、上高地周辺を散策して植物の勉強会と田辺壽会員による講演会を行なった。ミニ水力発電小屋や取水口の見学も行なった。会員9名が参加し、親睦を深めた。

3・登山講習会の開催（12月27～30日）　東海支部から4名、日本大学山岳部2名、委員2名が参加し、冬山登山入門講習として机上・実技講習を行なった後、蝶ヶ岳に登頂し、テント生活を経験した。

4・山研活動の広報を目的に、「さんけんブログ」の運営とフェイスブックのページを作成した（通年）。ブログは年間4万程度のアクセス、フェイスブックには130名程度のJAC会員を中心とするフォローがあった。

今年度は5シーズン勤めてくださった元川管理人が退職されることとなった。そのお人柄に惹かれて山研を訪れてくださった会員も多く、大変名残惜しくはあるが、2020年シーズンからは、新たに山田管理人を迎え、委員が一丸となって老朽化の進む山研の維持に知恵を絞っていく所存である。会員の皆様のご理解とご協力をお願いするところである。

（和田　薫）

山心は紳士靴から始まった　60年の靴のあと	吉田賢憲	幻冬舎メディアコンサルティング	800	新書判	171p
日々野鮎美＋なかまたちの山ごはんレシピ２	信濃川日出雄/監修	山と溪谷社	980	コミックス	128p
山小屋ガールの癒されない日々	吉玉サキ	平凡社	1,400	四六判	232p
山人生いい加減　登山家・高橋和之の歩んだ道	小林千穂	信濃毎日新聞社	1,600	四六判	248p
山でお泊り手帳	仲川希良	エイ出版社	1,200	212×150	131p
山に生きる　受け継がれた食と農の記録「かしき」と百姓　小野寺ツキヨさん（岩手県岩泉町安家）	大谷洋樹	ツーワンライフ	900	四六判	90p
山ニ行ッテ居リマス　OB記者の山案内	新美　健	熊本日日新聞社、熊日出版	1,800	A5	232p
山の神々　伝承と神話の道をたどる	坂本大三郎	エイアンドエフ	1,700	四六判	254p
山のクジラを獲りたくて　単独忍び猟記	武重　謙	山と溪谷社	1,500	四六判	255p
山の履歴簿　第３巻　山と人の関わり	渡辺　隆/編著	北海道出版企画センター	4,500	A5	479p
山の霊異記　霧中の幻影	安曇潤平/著	KADOKAWA	600	文庫判	224p
山はしっている	リビー・ウォルデン/著・文、リチャード・ジョーンズ/絵、横山和江/訳	鈴木出版	1,500	235×295	32p
山びとの人生　神秘と不思議の民俗を訪ねて	高橋文太郎	河出書房新社	1,650	B6	230p
“山”わが道をゆく　鳥甲山と後立山平川入の登山史　氷斧の記憶―その歴史にも触れて	小澤観一	小澤観一	―	210	188p
ヤマケイ登山学校　雪山登山	天野和明/監修・著	山と溪谷社	2,100	B5	152p
新版　雪の八甲田で何が起こったのか―資料に見る“雪中行軍”百年目の真実	川口泰英	北方新社	2,000	四六判	296p
吉野山河記	中井龍彦	澪標（みおつくし）	2,000	四六判	316p
【ら】					
ロープワーク	水野隆信/監修、阿部亮樹/イラスト	山と溪谷社	2,200	B5	151p
【わ】					
ワールド・トレイルズ―世界は歩いてみたい「道」にあふれている	ゲシュタルテン/編、橋本夕子/訳	グラフィック社	2,900	236×190	254p
わが静かなる山	松﨑中正	白山書房	1,800	A5	320p
わがヒマラヤ　オアシス・氷河・山々　雁部貞夫自選歌集	雁部貞夫	青磁社	3,500	A5	303p

〈ヤマケイアルパインガイド〉北アルプス　白馬・後立山連峰	中西俊明、菊池哲男、矢口　拓	山と溪谷社	2,100	A5	196p
〈ヤマケイアルパインガイド〉北アルプス　槍・穂高連峰	渡辺幸雄	山と溪谷社	2,100	A5	204p
〈ヤマケイアルパインガイド〉八ヶ岳	佐々木　亨	山と溪谷社	2,100	A5	180p
〈ヤマケイアルペンガイド〉尾瀬	佐々木　亨	山と溪谷社	2,000	A5	172p
〈ヤマケイ新書〉IT 時代の山岳遭難　安全登山のための最新テクノロジー	木元康晴	山と溪谷社	800	新書判	192p
〈ヤマケイ新書〉東京発半日ゆるゆる登山	石丸哲也	山と溪谷社	1,000	新書判	317p
〈ヤマケイ新書〉日本の火山に登る　火山学者が教えるおもしろさ	及川輝樹、山田久美	山と溪谷社	900	新書判	270p
〈ヤマケイ新書〉山の ABC　山の安全管理術	木元康晴	山と溪谷社	1,000	新書判	208p
〈ヤマケイ新書〉山の ABC　基本のロープワーク	羽根田　治	山と溪谷社	1,000	新書判	208p
〈ヤマケイ新書〉山の ABC　地図読みドリル	宮内佐季子	山と溪谷社	900	新書判	128p
ヤマケイ登山学校　山のリスクマネジメント	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2,200	B5	152p
山溪ハンディ図鑑 14　樹木の葉　実物スキャンで見分ける 1300 種類　画像検索　増補改訂	林　将之	山と溪谷社	5,000	A5 変形	824p
〈ヤマケイ文庫〉アイヌと神々の物語　炉端で聞いたウウェペケレ	萱野　茂	山と溪谷社	1,100	文庫判	544p
〈ヤマケイ文庫〉安曇野のナチュラリスト　田淵行男	近藤信行	山と溪谷社	1,000	文庫判	432p
〈ヤマケイ文庫〉「アルプ」の時代	山口耀久	山と溪谷社	1,000	文庫判	380p
〈ヤマケイ文庫〉定本　黒部の山賊	伊藤正一	山と溪谷社	880	文庫判	304p
〈ヤマケイ文庫〉どくとるマンボウ青春の山	北　杜夫	山と溪谷社	800	文庫判	280p
〈ヤマケイ文庫〉名残の山路	岡田喜秋	山と溪谷社	800	文庫判	256p
〈ヤマケイ文庫〉不屈　山岳小説傑作選	北上次郎/編	山と溪谷社	1,100	文庫判	496p
〈ヤマケイ文庫〉名作で楽しむ上高地	大森久雄/編	山と溪谷社	1,000	文庫判	368p
〈ヤマケイ文庫〉約束の川	湯川　豊	山と溪谷社	950	文庫判	272p
〈ヤマケイ文庫〉野鳥の名前　名前の由来と語源	安部直哉、叶内拓哉	山と溪谷社	1,200	文庫判	272p
〈ヤマケイ文庫〉山怪　山人が語る不思議な話	田中康弘	山と溪谷社	800	文庫判	306p
〈ヤマケイ文庫〉山棲みの記憶	根深　誠	山と溪谷社	900	文庫判	304p

B&T ブックス　おもしろサイエンス　火山の科学	西川有司	日刊工業新聞社	1,600	A5	160p
新版　東丹沢登山詳細図　全130コース	守屋二郎、守屋益男、前田京剛	吉備人出版	900	B1 判変形	3p
秘境　遠山郷を行く　埋もれた記憶を探しに	磯前睦子	冬花社	1,500	四六判	177p
羆の実像　THE REAL BROWN BEAR	門崎允昭	北海道出版企画センター	2,000	A5	284p
人を襲うハチ	小川原辰雄	山と溪谷社	1,600	四六判	200p
ヒマラヤの師と共に　現代を生きるヨーギーの自叙伝	シュリー・エム/著、青木光太郎/訳、武井利恭/監修	蓮華舎	4,800	A5	400p
富士山絶景撮影登山ガイド　すばらしい富士に出逢える！	渡邉明博	山と溪谷社	1,800	A5	224p
富士山　MT. FUJI	中村　守	風景写真出版	2,000	大型判	79p
富士山　Mt. FUJI	森田敏隆、森田將裕、森田裕貴、森田椋也	光村推古書院	2,400	B5 変形	127p
富士山世界遺産登録へのみちのり　明日の保全管理を考える	田畑貞壽/監修・編著、清雲俊元/監修著	「富士山世界遺産登録へのみちのり」編集委員会/ぶんしん出版	1,800	210	334p
二人者　part 2	田辺　寿	文芸社	1,600	A4 変形	48p
フリークライミング	北山　真、杉野　保	山と溪谷社	1,600	B5	144p
フリークライミング日本100岩場2関東　増補改訂新版　御前岩ルート収録	北山　真	山と溪谷社	2,000	A5	152p
〈分県登山ガイド〉兵庫県の山	加藤芳樹	山と溪谷社	1,900	A5	136p
〈Fujiyama〉永遠の富士山	太田裕史	みらいパブリッシング　星雲社	1,700	A4 変形	80p
ぼくの道具	石川直樹	平凡社	1,500	180×118	240p
穂高小屋番　レスキュー日記	宮田八郎	山と溪谷社	1,500	単行本	260p
北海道の山と谷3	山と谷作成会議	北海道出版企画センター	2,700	A5	412p
ホロホローの森の生きものたち～沖縄島南部のネイチャー図鑑	奥土晴夫	琉球新報社	2,700	A5	392p
【ま】					
松浦武四郎の釧路・根室・知床探検記	加藤公夫	北海道出版企画センター	1,800	四六判	278p
宮崎　野山の植物100選	中武英則	ヴィッセン出版	2,000	A5	235p
結ばれたロープ	ロジェ・フリゾン＝ロッシュ/著、石川美子/訳	みすず書房	3,800	四六判	408p
【や】					
山歩きの地図読みドリル　基礎＆実践で読図力アップ！	宮内佐季子	ナツメ社	1,500	A5	111p
やまがた百名山	山形県環境エネルギー部みどり自然課	みちのく書房	1,800	230×175	159p
山靴の画文ヤ　辻まことのこと	駒村吉重	山川出版社	1,800	四六判	288p
〈ヤマケイアルパインガイド〉北アルプス　劔・立山連峰	星野秀樹	山と溪谷社	2,100	A5	204p

旅の記憶　空、雪、風　そして心の詩	福澤卓也	福澤卓也遺稿集を発刊する有志の会			238p
探検家とペネロペちゃん	角幡唯介	幻冬舎	1,400	四六判	196p
探検！里山いきもの図鑑　身近な自然を楽しもう！	一日一種　絵と文　五箇公一/監修	パルコエンタテインメント事業部	1,200	210	128p
地形図でたどる長野県の100年	長野県地理学会/編	信濃毎日新聞社	2,500	A4	180p
地図とデータで見る気象の世界ハンドブック	フランソワ＝マリー・ブレオン	原書房	2,800	A5	170p
秩父の地名の謎99を解く　秩父が解れば日本が分かる	高田哲郎	埼玉新聞社	1,100	四六判	318p
チベット　祈りの色相、暮らしの色彩	渡辺一枝	新日本出版社	2,000	B5変形	95p
チベット巡礼記	ゆっこらんど	幻冬舎メディアコンサルティング	1,100	四六判	96p
中国・四国山歩きガイド　ゆったり楽しむ　改訂版	山歩きの会・遊道山	メイツユニバーサルコンテンツ	1,720		144p
チョウが語る自然史―南九州・琉球をめぐって	福田晴夫	南方新社	2,800	A5	320p
低山手帖～四季に触れる山旅手記～	大内　征	日東書院本社	1,500	194×148	192p
てくてく青空登山	安西水丸	MURREN BOOKS	1,200	B6	128p
ドキュメント豪雨災害	谷山宏典	山と溪谷社	1,600	B6	232p
登山口情報322　中国5県　ひろしま　おかやま、やまぐち、しまね、とっとり	全国登山口調査会/編	南々社	1,800	A5	223p
ヤマケイ登山学校　登山ボディ	芳須　勲/監修・著	山と溪谷社	1,900	B5	144p
トレイルラン　2019 SUMMER		山と溪谷社	1,200	300	130p
【な】					
那須雪崩事故の真相　銀嶺の破断	阿部幹雄	山と溪谷社	1,600	四六判	272p
75歳・心臓身障者の日本百名山・百高山単独行	真木太一	海風社	1,800	A5	176p
南極読本（改訂増補）ペンギン、海氷、オーロラ、隕石、南極観測のすべてが分かる	南極OB会編集委員会/編	成山堂書店	3,000	A5	240p
日月巡礼出羽三山　Sun and Moon Pilgrimage Dewasanzan	稲田美織	小学館	3,600	特寸	84p
日本の自然　2019年版　いつまでも守り続けたい	全日本写真連盟/編、朝日新聞社/編	全日本写真連盟	2,500	AB判	104p
日本の山ができるまで　五億年の歴史から山の自然を読む	小泉武栄	エイアンドエフ	2,400	A5	215p
改訂版　日本百名山地図帳	山と溪谷社編	山と溪谷社	2,400	A4	232p
日本百名山を描く旅	豊島　明	山と溪谷社	2,500		256p
野の花山の花　外山康雄水彩画集　新装版	外山康雄	日貿出版社	2,000	B5	63p
【は】					
ハンドブック　古賀志の花	山口正夫	随想舎	1,500	B6変形	244p

埼玉の里川　都幾川の生きものたち［魚類・両生類・爬虫類の自然誌］	斉藤裕也、藤田宏之	まつやま書房	1,800	210	157p
里山のかんさつ　見よう、せまろう、とびだそう　しぜんガイドブック	林　将之/文・写真	ほるぷ出版	3,000	270×210	40p
ザ・プッシュ　ヨセミテ　エル・キャピタンに懸けたクライマーの軌跡	トミー・コールドウェル/著、堀内瑛司/訳	白水社	3,500	四六判	450p
山岳捜査	笹本稜平	小学館	1,700	四六判	384p
山峡奇談	志村有弘	河出文庫	760	文庫判	256p
「シェルパ」と道の人類学	古川不可知	亜紀書房	3,200	四六判	368p
ジオとグラフィーの旅5　東アジアとヨーロッパの旅	外山秀一	古今書院	2,800	B5	147p
私家版　誰でも登れる47サミッツ　都道府県最高峰登頂ガイド	半田　久	山と溪谷社	1,500	四六判	240p
四季の山野草　身近な草花453種	森田吉重	神戸新聞総合出版センター	2,300	A5	271p
十大事故から読み解く山岳遭難の傷痕	羽根田　治	山と溪谷社	1,700	四六判	400p
樹林たちの知られざる生活　森林管理官が聴いた森の声	ペーター・ヴォールレーベン、長谷川圭/訳	早川書房	700	単行本/文庫判	263p
地球の歩き方　GEM STONE 改訂新版　スイス　歩いて楽しむアルプス絶景ルート		ダイヤモンド・ビッグ社	1,600	A5変形	128p
YAMAKEI CREATIVE SELECTION スケッチの山旅	今井　覚	山と溪谷社	800	文庫判	274p
すばらしい富士に出逢える！富士山絶景撮影登山ガイド	渡邉明博	山と溪谷社	1,800	A5	224p
雪中行軍はなぜ失敗したか―小説・映画のフィクションをただす	川口泰英	北方新社	2,300	四六判	320p
先人の足跡と名峰の歴史　日本山岳史	男の隠れ家編集部/編纂	三栄書房	950	新書判	222p
そのまた向こうの山と空　瞑想的登山から聖山カイラスへ	細田　弘	白山書房	1,900	四六判	490p
【た】					
大学的富士山ガイド　こだわりの歩き方	都留文科大学/編、加藤めぐみ/責任編集	昭和堂	2,300	A5	260p
大雪山―神々の遊ぶ庭　市根井孝悦精選作品集	市根井孝悦	山と溪谷社	3,800		92p
新版　高尾山登山詳細図　全112コース	守屋二郎、守屋益男	吉備人出版	900	B1判変形	2p
鷹と生きる　鷹使い・松原英俊の半生	谷山宏典	山と溪谷社	1,600	188×128	256p
たくさんのふしぎ2020年2月号　極夜の探検	角幡唯介/著、山村浩二/イラスト	福音館書店	700	250×200	40p

上高地ハイキング案内　上高地・明神・徳沢・横尾・涸沢を歩く		山と溪谷社	1,700	A5 変形	208p
河口慧海　雲と水との旅をするなり	高山龍三	ミネルヴァ書房	3,800	四六判	380p
考える脚　北極冒険家が考える、リスクとカネと歩くこと	荻田泰永	KADOKAWA	1,500	四六判	316p
関西周辺クルマで行く日帰り山歩き　絶景を楽しむ厳選コースガイド	木暮人倶楽部森林・山歩きの会/監修	メイツユニバーサルコンテンツ	1,720	A5	128p
関東百名山	打田鉄一、石丸哲也、中西俊明、木元康晴、西野淑子	山と溪谷社	2,200	B5	176p
環ヒマラヤ生態観察叢書①　ヤルツァンポ大峡谷生物多様性観測マニュアル　ヤルツァンポの眼	チベット戸外協会/著、安西辰彦・中村千也/訳	グローバル科学文化出版	3,980	B5	262p
環ヒマラヤ生態観察叢書②　カイラス山・マーナサロワール湖生物多様性観測マニュアル　自然の魂	羅　浩/編著、西尾颯記/訳、駱　鴻/監訳	グローバル科学文化出版	3,980	B5	238p
環ヒマラヤ生態観察叢書③　パソン・ツォ／ルラン生物多様性観測マニュアル　生命の記憶	羅　浩/編著、島田陽介/訳	グローバル科学文化出版	3,980	B5	274p
北国からの動物記 10　ヒグマ	竹田津実/文・写真	アリス館	1,400	260	40p
北岳山小屋物語	樋口明雄	山と溪谷社	1,400	四六判	304p
きのこの教科書　観察と種同定の入門	佐久間大輔	山と溪谷社	2,200	A5	240p
CAMP LIFE 2019-2020 Autumn & Winter Issue		山と溪谷社	1,300	A4 変形	98p
京都一周トレイル	京都トレイルガイド協会/編著	ナカニシヤ出版	1,800	A5	240p
空撮ヒマラヤ越え　山座同定 FLYING OVER THE HIMALAYA: Peak Idenrification	中村　保	ナカニシヤ出版	8,000	菊倍判	234p
クライマーズコンディショニングブック	菊地敏之/著、前之園多幸/監修	山と溪谷社	1,800	A5	176p
くらべてわかる　甲虫 1062 種	町田龍一郎ほか	山と溪谷社	1,800	B5	144p
黒部源流　山小屋暮らし	やまとけいこ	山と溪谷社	1,300	単行本	192p
群馬の山歩きベストガイド 安心して登れる 126 コース Hiking best guide	ぐんまの山歩きベストガイド編集委員会	上毛新聞社事業局出版部	1,400	A5	272p
渓流釣り礼讃	根深　誠	中央公論新社	840	文庫判	320p
K2　復活のソロ	笹本稜平	祥伝社	1,800	四六判	456p
激走！日本アルプス大縦断～2018 終わりなき戦い～	齊藤倫雄、NHK 取材班	集英社	1,600	194×134	340p
苔登山　もののけの森で山歩き	大石善隆	岩波書店	1,600	四六判	120p
五色沼	高見沢　功	歴史春秋出版	1,500		319p
五十八歳、山の家で猫と暮らす	平野恵理子	亜紀書房	1,600	四六判	224p

【さ】

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アート・オブ・フリーダム　稀代のクライマー、ヴォイテク・クルティカの登攀と人生	ベルナデット・マクドナルド/著、恩田真砂美/訳	山と溪谷社	3,000	四六判	352p
アウトドアでホットサンド	蓮池陽子	山と溪谷社	1,400	A5	128p
青森里山案内鈴蘭山　十和田市一本木沢のコナラ巨木群と三本木原の原風景をとどめる奇跡の大地	小沢純二	デーリー東北新聞社	2,000	A4 変形	126p
アサヒ園芸 BOOK　山野草図鑑　大きくて見やすい！比べてよくわかる！　850 種	金田洋一郎	朝日新聞出版	2,000		399p
吾妻の里山	後藤信雄	上毛新聞社事業局出版部	1,000	A5	216p
アラスカ探検記　最後のフロンティアを歩く	マーク・アダムス/著、森　夏樹/訳	青土社	2,600	四六判	360p
アルパインクライミング教本完全図解	笹倉孝昭	山と溪谷社	2,000	A5	192p
愛し大台ケ原	河本　禎	光村推古書院	2,500	230×250	95p
岩崎元郎の地球を遠足	岩崎元郎	山と溪谷社	1,500	四六判	272p
失われた、自然を読む力	トリスタン・グーリー/著、宮古地人協会/編、田淵健太/訳	エイアンドエフ	2,400	四六判	397p
おきなわ木の実さんぽ	安里肇栄/写真・文	ボーダーインク	1,800	A5	128p
〈ヤマケイアルペンガイド〉奥多摩・奥秩父	山岳写真 ASA・長沢　洋	山と溪谷社	2,500	A5	216p
奥多摩・奥武蔵・奥秩父写真集	高橋　正	埼玉新聞社	3,500	260×270	146p
奥多摩　山、谷、峠、そして人	山田哲哉	山と溪谷社	1,600	四六判	224p
上越・信越　国境山脈	星野秀樹	山と溪谷社	2,200	A5 変形	224p
新版　奥多摩登山詳細図／東編全 148 コース	守屋二郎/作成・解説・踏査、守屋益男/監修	吉備人出版	900	B1 変形	2p
新装版　奥武蔵登山詳細地図全 130 コース	池田和峰、守屋二郎	吉備人出版	900	B1 判変形	2p
思い出の丹沢の花	堤　義也	夢工房	2,200	四六判	199p
親子で山さんぽ		交通新聞社	1,300	A5	143p
俺のアラスカ伝説の“日本人トラッパー”が語る狩猟生活	伊藤精一/著、すずきひさこ/編集・構成	作品社	2,200	四六判	264p
【か】					
火山と生きる海鳥　千島列島探検記	寺沢孝毅	メディアパル	3,200	A4 変形	80p
鹿島槍五竜岳　天と地の間に菊池哲男写真集	菊池哲男	山と溪谷社	2,800	A4 変形	80p

山岳図書目録（2019 年）

日本山岳会図書委員会

この「山岳図書目録」は、１年間に出版された山岳図書をリストアップして、それをまとめて整理し直して一覧にしたものです。書名は五十音順に掲載しています。

毎月行なわれている図書委員会では、これまで新刊書籍を独自に調査してリストを作成しきましたが、三好まき子前委員長の急逝により、やや滞った感がありました。ただ、ここに来て図書委員の努力によって、最近は、図書流通センター（TRC）から資料を定期的に取り寄せることができるようになり、また、ネット資料を駆使するなどして、資料の充実化が図られるようになりました。さらに書籍の簡単な内容紹介もされるようになり、適切な新刊書籍のリストができ上がりつつあります。また、書店の現場に精通した若手の会員が入ってきたこともあり、山岳書をある程度、網羅することもできるようになりました。

図書委員会では、これらのリストを基にして、本会の図書室に必要と思われる書籍は版元に寄贈してもらい、図書室の充実化を図るようにしています。また、「会報」や『山岳』で紹介すべき本を選択して、「図書紹介」欄で紹介してきました。

さて、こうして集められた山岳図書ですが、ここ数年、気にかかっていることがあります。いわゆる山岳書の出版点数が減ってきているのではないかということです。実用書やガイドブックは一定数出ているのでしょうが、「読みもの」と言われる山の随想やノンフィクションの数が減ってきたような気がします。また、「読書離れ」と言われてすでに何年もたちますが、若年層の SNS などへの傾倒やスマホの普及によって、さらに書店数の減少によって、図書閲覧の機会すら減っているように思われます。相変わらずガイドブックなどの実用書や文庫の出版点数は維持されているようですから、今後は「読みもの」も含めた多様な山岳図書の刊行が待たれるところです。

＊判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

(Review by Masayuki Kondo);
"Kawaguchi Ekai—Kumo to Mizu no Tabiosuru (Kawaguchi Ekai—Travelling on clouds and water)" by Ryuzo Takayama (Review by Makoto Nebuka);
"Judai Jiko kara Yomitoku Sangaku Sonan no Kizuato (Understanding scars of mountain accidents from the 10 largest accidents)" by Osamu Haneda (Review by Toshiho Iida);
"Higashi Himaraya (The eastern Himalayas)" by Kazuo Ando (Review by Ryozo Yamamoto):
"Ruireinonai Ito Koichi no Tozan (Unparalleled mountaineering by Koichi Ito)" by Kazuaki Isojima (Review by Masato Arai);
"The Andes" (Review by Hidehiro Minamii)

● In Memoriam

Taizo Takamura (by Atsuo Saito); Tsuneo Miyamori (by Sadao Karibe); Takashi Miyahara (by Makoto Nebuka); Shiro Shirahata (by Jusetsu Setsuda); Minoru Higeta (by Hideaki Yoshinaga); Gota Isono (by Tsuneo Shigehiro)

was difficult even to enter the country. But thanks to local people's assistance, they climbed Mount Kazbek (5,047m), covered with ice and snow, from Tibilisi, the capital city of Georgia, and also Mount Elbrus (5,642m). Almost half a century from the trip, this author visited again mountains and the nature of Caucasus with six members of the Japanese Alpine Club. This is a report of the author's revisit to Caucasus. Georgia, which was poor in those days, became independent from Russia and the streets and people have become rich and developed. It was a moving moment to meet unchanged Mount Kazbek again after going through old streets and villlages. The author and his group visited the Svaneti region where beautiful twin-peaked Mount Ushiba (4,700m) rises. The author looked at from Mount Elbrus half a century earlier. They then trekked down to Mount Shkhara (5,068m) and Moount Ushiba, enjoying great views of mountains.

Darkot An (Pass), and a revisit to the Hindu Kush 52 years later

Yoshikazu Takahashi

Darkot An (Pass) is a pass at 4,575 meters high in the Hindu Raj mountains in northern Pakistan. It is famous in history as Kao Hsien-chih, a Tang dynasty general and his 7,000 soldiers went past the pass in around the middle of the eighth century. Aurel Stein, British archaeologist and geographer who went to the field research in central Asia in the early 20th century, theorized that Gen. Kao Hsien-chih went up through Zindikharam Gol. Valley running toward northeast from the pass, and not Darkot valley that had been used since olden days. The author of this article visited the Hindu Kush for the first time in 52 years and went up through Zindikharam valley to Darkot Pass and went down the Darkot valley. Through this, the author felt something is wrong with Stein's theory and examined records of his expedition. As a result, the author found that although Stein did go down Darkot valley at the time of the 1913 exploration, he went down the glacial valley straight, instead of going down the trail along the side moraine used by other people, and strayed into an area with crevasses, therefore leading him to conclude that Gen. Kao Hsien-chih and his troops had gone up through Zindikharam valley, which he himself never passed through. This author and his group could easily go up to Darkot Pass through the trail by the side moraine in the Darkot valley, without straying into the crevasse area. The first exploration in 52 turned out to shed the light on history.

● Book Reviews

"Kangaeru Ashi (Thinking legs)" by Yasunaga Ogita (Review by Keizo Funatsu);
"Kusatsu Himarayagoe Sanza Dotei (Aerial photography over the Himalayas: Identifying mountain peaks)" by Tamotsu Nakamura (Review by Tatsuo Inoue);
"Nasu Nadare Jiko no Shinso (The Truth of the Nasu avalanche accident)" by Mikio Abe

The author of this article figured out Weston's travel plans on the basis of descriptions in the book, as well as newspaper articles and his diaries kept by an old family at the foot of a mountain and reproduced his footprints. The first travel of mountain climbing in Kyushu on Oct. 31, 1890 to November 14, which took him to Kimpozan in western suburbs of Kumamoto, and then the two famous peaks of Kyushu—Mount Aso and Mount Sobosan. The second trip that took place half a year later in April 1891 for about 10 days. Starting from Kagoshima Prefecture, Weston climbed first Mount Sakurajima, then proceeded to the foot of Kirishima to climb two peaks—Takachiho-dake (known today as Takachihonomine) and Karakunimi-dake (today Karakuni-dake). Hat off to his elaborate examination, which is possible only for this author residing in Kumamoto.

Mountaineering in Pamir Mountains and the name "Pamiru Kogen"

Shunsuke Tamura

In the book of maps used in Japanese schools, there is a name "Pamiru Kogen" (meaning Pamir Plateau) for a place on the Eurasian Continent. However, the Pamirs are not a plateau, and historically have never been so. The Pamirs, or the Pamir Mountains in English, are a mountain range lying in the central part of Central Asia and 6,000-meter- to 7,000-meter-high mountains are rising , with the Tian Shan mountains to the north, and the Hindu Kush and the Karakoram range to the south. On earth, there are the Great Himalayas, with 14 8,000-meter-high peaks and the Hindu Kush with 12 7,000-meter-high peaks. The Pamirs come third with six 7,000-meter-high peaks. So the author argues that it is not appropriate to call the mountain ridge something like a plateau or highland in Japanese, which reminds places like Kirigamine.

There once gathered many Japanese mountaineers at the "Pamir International Camp" to climb Lenin Peak, Communism Peak, and Peak Korzhenevskaya, but mountaineering circumstances have substantially changed since the collapse of the Soviet Union in 1991. This article is a report that introduces the present state of mountains in the Pamirs, including the latest mountaineering situations there.

● Travelogue

Caucasus, revisiting after half a century

Masayuki Yoshikawa

In the summer of 1971, the author visited Caucasus (Kavkaz in Russian), which was part of the former Soviet Union, with two senior friends for mountaineering. In those days, it

Karasawa and Yarisawa, there seem to be much fewer studies on its glacial landforms. Since Dakesawa is not the author's study field, he has hardly done field surveys, but in this piece, discusses Dakesawa's glacial landforms on the basis of topographical maps, satellite image interpretation, literature and observation at other mountainous regions. It is made up of five chapters—(1) Dakesawa's terrain composition, (2) lower moraine ridge in Dakesawa, (3) glacial landforms of Dakesawa and its glacier type, (4) development of glacial landforms of Dakesawa—a comparison with Karasawa, and (5) emergence and retreat of glaciers in Dakesawa. It is compiled together with illustrations and photographs for the purpose of general mountaineers' easy understanding. This article will make climbing Hotaka mountains via Dakesawa more and newer fun.

Mountain guides in Okuhida

Kiyoo Kinoshita

Recreational mountaineering began showing signs to become popular around 1905, when the Japanese Alpine Club was established at Walter Weston's advice. Since then mountaineering in Japan developed, enjoying "the golden age of expedition mountaineering" in last years of the Meiji Period, and then "the era of rocks and snow" in the Taisho Period. And it was hunters, fishermen and woodcutters familiar with local mountains who supported the development of mountaineering in those days as guides and porters. This article is a history of people who played active and important roles behind the scenes at the dawn of modern mountaineering and in those early days when first ascents in winter of mountains around Mount Yari an Hotaka mountains. There are many capable mountain people in Ariake, Omachi and Shimashima in southern Hida. mountains (Northern Alps) area, and Nakao and Gamata in Hida, supporting mountaineers, but in this piece, focus is placed on mountain people in Okuhida. The section on "Great roles played by guides in mountaineering history" describes how those guides played active and important roles in mountaineering in chronological order, and in the section of "Main guides' real faces" introduces their profiles.

Searching for footsteps of Walter Weston's mountaineering in Kyushu

Toshiyuki Tanoue

Walter Weston, known as "the father of Japan Alps," visited Kyushu twice for mountaineering in 1890 and 1891—probably because the place of his first assignment in Japan as a missionary was in Kumamoto. During those two visits, Weston climbed six mountains in Kyushu, and wrote about climbing those peaks in the third edition of his "A Handbook for Travellers in Japan."

began the project to explore the Central Dividing Range (Chuo Bunsuirei). In parallel with the JAC project, his own exploration project progressed slowly but steadily, while fearing encounters with bears, distressed by wading bushes and tenacious counterattacks by bamboos, and plagued by attacks by leeches and ticks. The best way to succeed in exploring dividing mountain ranges is to ascend along the largest slope of the ridge and descend the minimum slope line, never trying to traverse through bushes. With support by many friends, the author says, he could finally reach Mikuni Pass on the Joetsu (Gunnma-Niigata) border. For 18 years, in total of 40 mountaineering trips, he could go the entire distance of the dividing mountain range.

Fascinated by West Nepal: Report on spending a winter in Dolpo

Kaori Inaba

This is a report of surveys by a woman who was fascinated by Kawaguchi Ekai, a Buddhist monk who entered Tibet 120 years ago as the first Japanese to study Buddhism. She has been repeatedly visiting western Nepal since her first visit there in 2007 to follow the footprints of the great monk.

The author visited Dolpo for the first time in 2007 when she joined a Northwestern Nepal expedition at the invitation of the late Tamotsu Onish, to do surveys of Ekai's footprints In 2009, she again visited Dolpo to trek across the area, and in 2012, participated in Shey Festival, a Tibetan Buddhist pilgrimage festival held every 12 years there. In 2014, she reconfirmed Ekai's footprints and traces of his activities in Upper Mustang, and in 2016, trekked down the 500 kilometers of distance, crossing from Upper Mustang through Upper Dolpo and Low Dolpo. Finally, from November 2019 through March 2020, she spent one entire winter in Dolpo by herself. Based in the village of Saldang, she did various field work research projects, while interacting with local people during the 102-day stay. A professional beautician, she travels in a remote region, annoyed by rheumatism, in such a dedicated manner that a picture of the author presented here in this report make readers irresistibly have nice feelings of friendliness toward her.

● Research and study

Glacial landforms of Kamikochi and Dakesawa

Hisashi Koaze

We can safely say that the view of Hotaka mountains and Dakesawa valley that embrace those magnificent mountains is probably the greatest mountain view in Japan. There was a paper that recognized Dakesawa as one of the largest cirques, but compared with

validity of the mountaineering permit was unknown, adventure skier Yuichiro Miura's team intervened with a plan to ski down from the top of Mount Everest. Eventually, both Miura's ski team and the JAC's party succeeded in their missions. The great feat was followed by many feats: in 1973 by the RCCII expedition team, in 1975, Joshi Tohan Club (whose team known as the Japanese Women's Everest Expedition, in which Junko Tabei became the first woman to reach the summit), in 1983, the first climbing Everest without supplemental oxygen by a Japanese, in 1993 the first reaching the summit in the severe winter by a Japanese team, and more. However, climbing Everest by Japanese has drastically changed, as internationally organized expeditions have become the most popular type of climbing Everest.

● Records

Complete traverse of Mount Tsurugi northern ridge in the middle of winter

Yusuke Sato

The north ridge extending from Mount Tsurugi standing out with unique rocky features and dignity toward the Sea of Japan has been the target of admiration for many mountaineers. Especially in the middle of hard winter, a lot of heavy and wet snow that falls in the area keep mountaineers from entering the mountain, and if they do enter, they would face tough wading through the deep snow and constant threats of avalanches. It is this writer and his group that have kept challenging the target. In the first attempt in the end of 2015, they were forced to retreat from the Higashi-ashimi ridge to Banbajima due to difficulty of wading the heavy snow to break a trail and the heavy equipment and goods they had to carry with them. The second attempt also ended with a retreat from Mount Kekachi-yama because of unexpected heavy snowfall. In the third challenge in the year-end of 2019, they finally achieved the complete traverse to the main peak of Mount Tsurugi, by taking advantage of the past experiences in the two unsuccessful attempts and utilizing a snow cave to wait for the weather to improve. It became an invaluable experience for them, who overcame the hardness of the winter mountain in their12 long days of battle with snow.

Travers of the Honshu dividing mountains—"Over the mountains, far in the sky…"

Yasuhiro Oshima

Inspired by Korea's great deviding range extending from Pektu to Seoraksan to Jirisan mountains, this author thought of exploring the diving range starting from Cape Tappi on Tsugaru Peninsula southward. It was in 2002, two years before the Japanese Alpine Club

Round-table discussion

Mount Everest and what expedition party members experacciienced

Tadao Kanzaki, Katsuhiko Kano, Hiroshi Sagano

The Japanese Alpine Club expedition to scale Mount Everest in 1970 was a large party comprising 38 members, including Saburo Matsukata, the head of the expedition, Hiromi Otsuka, as the leader of the climbing party, and his 21 party members, as well as three science members, four high altitude medicine members and eight reporters. Almost half of the expedition members have already died in accidents in other mountains or of illness. We have asked three of the remaining members, who are still involved in various JAC activities even today to discuss what was the expedition to Mount Everest to them and to the Japanese mountaineering community. Amid the coronavirus pandemic, we managed to organize this round-table discussion to listen to their valuable, exclusive stories only those who participated in the expedition could tell.

Notes on climbing Everest:

"Obtaining the climbing permit and my thought on reaching the top of Everest"

Katsutoshi Hirabayashi

Katsutoshi Hirabayashi reached the top of Mount Everest with Sardar Chotare on May 12, as the second ascent team, following the previous day's ascent by Matsuura and Uemura, to become the third Japanese to reach the summit. As one of the major members of the expedition, including Hiromi Otsuka, leader of the climbing party, and Yuichi Mtsuda, Mr. Hirabayashi played an important role in the core parts of the expedition, through his efforts to obtain a climb permit from Nepal, and improving oxygen cylinders and unloading tactics. To this special section, he contributed personal notes on his thought on reaching the top of Mount Everest.

Japanese and Mount Everest—Japanese involvement in the mountain over the past 50 years

Tsunemichi Ikeda

In 1966, 10 years after the first ascent of Mount Manaslu in 1956, a permit to climb Mount Everest was granted to the Japanese Aline Club. But the ban imposed by the Nepalese government on mountaineering in the Himalayas from 1965 for four years forced the JAC to suspend its plant to scale the world's highest summit. The situation surrounding the JAC's Everest expedition plan became complicated, because, in addition to the fact that the

● Special articles:

The 50th anniversary of the first ascent of Mount Everest

On May 11, 1970, two members of the Japanese Alpine Club mountaineering party—Teruo Matsuura and Naomi Uemura—succeeded in the first scaling of Mount Everest by Japanese. The next day, Katsutoshi Hirabayashi and Sardar Chotare reached the summit. Japan was the sixth to scale the world's highest peak, following Britain, Switzerland, China, the United States, and India. During the following 50 years, the mountaineering world has undergone substantial changes. This special section reviews the first ascent of Mount Everest by Japanese with detailed reports, a round-table discussion by some of the party members, personal notes on preparations, including efforts to obtain the climbing permit, and an article on the Japanese mountaineer community's history leading up to the first ascent as well as today's Mount Everest climbing situations.

The meaning of the half century: Mount Everest for the Japanese Alpine Club and the ski team

Yoshinobu Emoto

Fourteen years after the world's first ever ascent of Mount Manaslu by the Japanese Alpine Club party, which was greeted enthusiastically by Japanese people, Japanese climbers reached the summit of the world's highest mountain. Scaling Mount Everest had long been a big proposition for the Japanese mountaineering community, which had faced interruption by the Nepal government's ban on climbing of Himalaya mountains. The Japanese Alpine Club's mountaineering party scaled the peak after overcoming various many problems—confusions over obtaining the mountaineering permit, an attempt to ski down the mountain by adventure skier many Yuichiro Miura, Sherpas' deaths in a glacier collapse, the sudden death of a party member Kiyoshi Narita from altitude sickness, and retreat from the South face, which forced the party to take the Southeast ridge route to the top. We have asked Mr. Emoto, a JAC member and/former Yomiuri Shimbun reporter, to compile this report, using materials found in the JAC monthly newsletter "Yama" and the annual journal "Sangaku," while paying attention to moves by the Miura ski team, which had so far received little attention.

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 115 No.173 **Issued August 2020**

CONTENTS

Special articles: The 50th anniversary of the first ascent of Mount Everest
The meaning of the half century: Mount Everest for the Japanese Alpine Club and the ski team ····· Yoshinobu Emoto ····· (8)
Round-table discussion
Mount Everest and what expedition party members experacciienced ····· Tadao Kanzaki, Katsuhiko Kano, Hiroshi Sagano ····· (43)
Notes on climbing Everest:
〝Obtaining the climbing permit and my thought on reaching the top of Everest〞 ····· Katsutoshi Hirabayashi ····· (73)
Japanese and Mount Everest—Japanese involvement in the mountain over the past 50 years ····· Tsunemichi Ikeda ····· (81)
Records
Complete traverse of Mount Tsurugi northern ridge in the middle of winter ····· Yusuke Sato ····· (98)
Travers of the Honshu dividing mountains—〝Over the mountains, far in the sky…〞 ····· Yasuhiro Oshima ····· (121)
Fascinated by West Nepal: Report on spending a winter in Dolpo ····· Kaori Inaba ····· (146)
Research and study
Glacial landforms of Kamikochi and Dakesawa ····· Hisashi Koaze ····· (180)
Mountain guides in Okuhida ····· Kiyoo Kinoshita ····· (201)
Searching for footsteps of Walter Weston's mountaineering in Kyushu ····· Toshiyuki Tanoue ····· (217)
Mountaineering in Pamir Mountains and the name 〝Pamiru Kogen〞 ····· Shunsuke Tamura ····· (245)
Travelogue
Caucasus, revisiting after half a century ····· Masayuki Yoshikawa ····· (264)
Darkot An (Pass), and a revisit to the Hindu Kush 52 years later ····· Moriyoshi Takahashi ····· (289)

*

Book Reviews ····· (312)
In Memoriam ····· (347)

*

Minutes of Meeting for JAC during April/2019—March/2020 ····· (377)
Report from the Local Sections during 2019—2020 ····· (401)

Catalogue of Japanese Mountain Books in 2019 ····· (A20)
English Summary ····· (A12)

The Japanese Alpine Club
(Founded 1905)
Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee
(May 2019)

President : FURUNO Kiyoshi
Vice-President : NOZAWA Seiji, YAMAMOTO Munehiko
SAKAI Hiroshi
Honorary Secretary : NAGATA Koutaro, HAGIWARA Hiroshi
Honorary Treasurer : FURUKAWA Kengo
Honorary Editor : KAMINAGA Mikio
Auditor : KUROKAWA Satosh, ISHIKAWA Kazuki

Commitee

YASUI Yasuo
SHIMIZU Yoshihiro
KONDO Masayuki
KIYOTO Rokurou
IIDA Kuniyuki
HATANO Awoi
KAMIO Sigenori
KASHWA Sumiko

Council

YAMAMOTO Ryozo
HASHOMOTO Kiyoshi
YOSHIKAWA Masayuki
SHIGEHIRO Tsuneo
MORI Takeaki
NARIKAWA Takaaki
IMAMURA Chiaki
ITAMI Tsuguyasu
KINUGAWA Sachio
NAKAYAMA Shigeki
KANZAKI Tadao
YOSHINAGA Hideaki
KOBAYASHI Masashi
OTANI Ryo
NOGUCHI Idumi

Chair of Local Section

Hokkaido : FUJIKI Shunzo
Aomori : NAKAMURA Tsutomu
Iwate : ABE Yoko
Miyagi : TOMIDUKA Kazuei
Akita : SUZUKI Yuko
Yamagata : NOBORI Yoshihiro
Fukushima : SATO Kazuo
Ibaraki : ASANO katsumi
Tochigi : WATANABE Yuji
Gunma : KITAHARA Shunsuke
Saitama : MATSUMOTO Toshio
Chiba : MATSUDA Hironari
Totyo-tama : NOGUCHI Idumi
Kanagawa : KOMITA Nobuo
Echigo : KIRYU Koji
Toyama : KAJI Tetsuro
Ishikawa : TARUYA Michiaki
Fukui : MORITA Makoto
Yamanashi : FUKAZAWA Kenzo
Shinano : YONEKURA Itsuo
Gifu : TAKAGI Motoaki
Shizuoka : ARIMOTO Toshimichi
Tokai : TAKAHASHI Reiji
Kyoto-Shiga : MATSUSHITA Masafumi
Kansai : MOTEGI Kanji
Sanin : NAKAI Shunichi
Hiroshima : ITSUKI Takashi
Sikoku : ONO Yasuhiro
Fukuoka : TAKAKI Sousuke
Kita-kyushu : HYUGA Shogo
Kumamoto : NAKABAYASHI Teruyuki
Higashikyushu : KATO Hidehiko
Miyazaki : ARATAKE Yatsuki

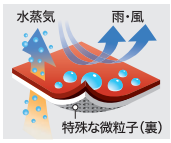
SINCE 1975

mont·bell

雨の日を快適に

登山やトレイルランニングなど、運動量の多い
アクティビティに最適な軽量レインウエア。
世界最高レベルの防水透湿性能を持つ生地と
脇のベンチレーションにより、ウエア内の蒸れを抑えます。
縫製箇所を極力減らしながらも動きやすい
独自のパターンで仕上げ、防水性と軽量性に加え
行動着としての性能も徹底的に追求。
雨の日を快適に、よりアクティブに動ける一着です。

世界最高レベルの防水透湿性



軽やかな着心地と優れた透湿性で運動量の多いアクティビティに最適。裏面に固着させた特殊な微粒子により、生地が肌に接する面積が少なく、心地良いドライ感が持続します。

素早い換気も可能

運動量の多い場面では、脇のベンチレーションで蒸れや熱気を素早く排出。

コンパクト収納

一切の無駄を省き、軽量・コンパクト性を追求。携行時の負担も軽減します。

トレントフライヤー ジャケット

#1128633 Men's 税抜き価格¥22,800(+税)

サイズ:S·M·L·XL、U/S·U/M·U/L·U/XL(海外モデルサイズ) ■ パンツ、女性用モデルもございます。

www.montbell.jp

0088-22-0031/TEL.06-6536-5740

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

「モンベル・レインウエアガイド」はこちらから!
豊富なラインアップをご用意しています。

公益社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine　Club
――1905(明治 38)年設立――
住所：〒 102-0081　東京都千代田区四番町 5-4　サンビューハイツ四番町

2019 年度役員・評議員・支部長名簿

会　　長	古野　　淳		
副 会 長	野澤　誠司	山本　宗彦	坂井　広志
常務理事	永田弘太郎	萩原　浩司	古川　研吾
理　　事	安井　康夫	清登　緑郎	神尾　重則
	清水　義浩	飯田　邦幸	柏　　澄子
	近藤　雅幸	波多野　あをい	
監　　事	黒川　　惠	石川　一樹	

評 議 員	山本　良三	成川　隆顕	神﨑　忠男
	橋本　　清	今村　千秋	吉永　英明
	吉川　正幸	伊丹　紹泰	小林　政志
	重廣　恒夫	絹川　祥夫	大谷　　亮
	森　　武昭	中山　茂樹	野口いづみ

支部長	北海道＝藤木　俊三	青　森＝中村　　勉	岩　手＝阿部　陽子
	宮　城＝冨塚　和衛	秋　田＝鈴木　裕子	山　形＝野堀　嘉裕
	福　島＝佐藤　一夫	茨　城＝浅野　勝己	栃　木＝渡邉　雄二
	群　馬＝北原　秀介	埼　玉＝松本　敏夫	千　葉＝松田　宏也
	東京多摩＝野口いづみ	神奈川＝込田　伸夫	越　後＝桐生　恒治
	富　山＝鍛冶　哲郎	石　川＝樽矢　導章	福　井＝森田　信人
	山　梨＝深沢　健三	信　濃＝米倉　逸生	岐　阜＝高木　基揚
	静　岡＝有元　利通	東　海＝髙橋　玲司	京都・滋賀＝松下　征文
	関　西＝茂木　完治	山　陰＝中井　俊一	広　島＝斎　　陽
	四　国＝尾野　益大	福　岡＝高木　荘輔	北九州＝日向　祥剛
	熊　本＝中林　暉幸	東九州＝加藤　英彦	宮　崎＝荒武　八起

編集後記

今年は大変な年になりました。新型コロナウイルスの感染拡大で、緊急事態宣言の発令もあり、すべてが自粛モードになってしまいました。不要不急の外出は控えるようにとのことで、ステイ・ホームのためなかなか打ち合わせもままならず、編集作業も滞りがちでした。会員の皆様にもなにかとご迷惑をおかけしましたが、なんとか『山岳』第百十五年（２０２０年）を刊行することができました。

表紙は、今号から小谷明さんの画を使わせていただくことになりました。エベレストを望むヒマラヤの高峰は、『山岳』の表紙にふさわしい力強い絵柄になりました。

さて今年は、日本山岳会隊がエベレストに初登頂して50年の節目の年になります。50年という歳月は、あっという間のようでもあり、歴史上の出来事になりつつあるとも言えるような気がします。それだけに、ここで50年を振り返ることは、区切りの年だからできることだと考え、特集を組んでみました。日本人にとって１９７０年のエベレスト隊はなんだったのか、そこがこの特集の出発点です。

まずこれまであまり表に出てこなかったスキー隊の動向にも注視しながら、日本山岳会の「山」『山岳』などの資料を駆使して、元読売新聞記者でもある江本嘉伸会員に長文のレポートを書いてもらいました。続いて神﨑忠男、鹿野勝彦、嵯峨野宏の3人の隊員の方に集まってもらい、座談会で当時の登山隊を振り返ってもらいました。第2次登頂者の平林克敏会員には、登頂に至るまでの経緯を手記に綴ってもらいました。そして、最後に池田常道会員には、１９７０年以降のエベレストを、日本人とのかかわりを中心に俯瞰してもらいました。１００ページにわたる大特集になりました。

「記録」は3本です。過去2回の挑戦の末に3回目で完全縦走した厳冬期の剱岳・北方稜線の記録です。12日間におよぶ長い雪との闘いに打ち勝ち、剱岳と正面から向き合った佐藤勇介さんの渾身の記録です。次に、静岡支部の大島康弘会員による本州分水嶺縦走の記録が続きます。竜飛岬から上越国境・三国峠まで、18年間をかけて都合40回の山行で分水嶺を踏破しました。3本目は河口慧海の足跡を追って、西ネパールのドルポやムスタンなど辺境の地に通った稲葉香さんの踏査の記録です。どれも貴重な読みごたえのあるレポートとなりました。

「調査・研究」も盛りだくさんです。明治大学名誉教授の小疇尚会員による上高地、岳沢の氷河地形に関する考察です。涸沢や槍沢などと比べても、その氷河地形については調査・研究が少なかっただけに注目される論考です。木下喜代男会員による奥飛騨の登山案内人たち、とくに近代登山の黎明期における彼らの活躍と素顔は興味深い考察になりました。熊本支部の田上敏行会員は、当時の新聞記事や山麓の旧家に残る日記などからウェストンの旅程を推定して、登山中の足取りを再現しています。田村俊介会員のパミールに関する考察では、「パミール高原」という名称に疑問を呈し、なお最近のパミールの登山事情を紹介しています。

「紀行」は2本で、図らずも中央アジアに関するほぼ半世紀ぶりの探訪記が並びました。吉川正幸会員のコーカサスと高橋善護会員のヒンズー・クシュの再訪記です。ともに半世紀の時を経て再訪した懐かしい山々や歴史上の推察などが、旅行記の随想としてまとめられています。

追悼は、私たちが山岳会で直接接してきた旧知の方たちばかりです。致し方ないのでしょうが、寂しさばかりが残ります。

今回の英文サマリーは、特に時間のないところを東京多摩支部の石塚嘉一会員にお願いしました。ジャパンタイムズで活躍された石塚会員ですが、人材の豊富な日本山岳会だから可能となった英文サマリーでした。

（神長幹雄）

『山岳』編集委員会
担当理事／萩原浩司、委員長／神長幹雄
委員／節田重節、原邦三、小泉弘、成川隆顕、永田弘太郎

山岳　第百十五年（通巻一七三号）
二〇二〇年八月三十一日発行

本体価格三五〇〇円

発行所　公益社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　古野　淳
編集人　神長幹雄

印刷所　株式会社　東京印刷

発売所　株式会社　茗溪堂
東京都新宿区南元町九―七―二〇七
電話　〇三―三三五六―三八一一
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七二三
消費税込み三七八〇円

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。